祝　　辞

財団法人日本卓球協会
会長　飯田　　亮

福島県卓球協会が創立70周年を迎えられ、記念誌の上梓とともに、盛大な記念式典が開催されますことに対し、日本卓球界を代表して、心からお祝いを申し上げます。

昭和4年の創立といえば、県卓協（県卓連）としては日本で最も古い歴史を持つ、いわば日本卓球会の草分け的存在の協会といえます。

目黒宗英初代会長以来、歴代の会長はじめ、役員の方々に連綿と受け継がれてきた“卓球愛”が、この福島県卓球協会の輝かしい伝統を築きあげたものと深く敬意を表するものであります。

この“卓球愛”がエネルギーの源泉となって、日本の球史に燦然と輝くきら星を育んだことは、言うまでもありません。

昭和29年、第21回世界選手権ロンドン大会では、後藤英子選手が女子団体で優勝をしたのをはじめ、昭和42年、第29回世界卓球選手権ストックホルム大会に日本代表として参加した反畑秀彦選手、平成の世になってからは、各種国際大会で大活躍した藤田由希選手……等々、名選手を輩出していることで証明されていると存じます。

福島県の卓球で忘れられないのは、確か、後藤寿二会長時代でしたか、飯坂温泉で行なわれていた全国オープン大会であります。当時、全国に先駆けて開催された大会で、全国から腕自慢の選手が大勢参加し、一流選手への登竜門とも言える価値ある大会でありました。

もうひとつは、“ふくしま国体”の開催が決まってからの、ジュニア層の強化には目を見張るものがございます。その華々しい足跡は、日本の記録に永遠に残されるでありましょう。

いま、西郷徹夫会長、伊藤秀行理事長のもと、福島県卓球協会がこの記念すべき70周年をひとつの節目として、更なる前進を遂げられますよう、ご期待申し上げますと同時に、これまで立派な伝統を築きあげてこられた先輩諸氏へのねぎらいと、今後ますますのご健勝を祈念し、祝辞とさせていただきます。

平成11年7月吉日

ごあいさつ

福島県知事　佐　藤　栄佐久

福島県卓球協会設立70周年誠におめでとうございます。

貴協会は、県の競技団体の組織としては最も早い昭和4年に設立され、以来、年々発展の一途をたどり、今日9,000名に及ぶ登録者がクラブや学校、実業団など幅広い分野で活動するなど隆盛を見ております。これもひとえに関係者の卓球に寄せる情熱と並々ならぬ御労苦の賜と深く敬意を表する次第であります。

本県の卓球競技の歴史は、明治の末期頃から福島市を中心として行われましたピンポンゲームに始まり、大正時代には、町内や職場の愛好者でクラブが誕生し、対抗戦が盛んに行われるようになったと伺いました。

その後、昭和25年の第5回国民体育大会での高校女子の団体第3位や、その後の国際大会や全国大会などで、輝かしい戦績を残しております。

特に、第50回の「ふくしま国体」においては、成年女子2部の優勝を始め、各種別の健闘により、競技別総合成績第2位に輝き、本県の男女総合優勝に大きく貢献されました。

御尽力をいただきました関係の皆様に改めて御礼を申し上げます。

さて、県体育協会といたしましては、ふくしま国体を契機とし、競技力の向上と生涯スポーツの普及・振興を2大目標として掲げ「スポーツ福島」確立のため、各種事業を推進しているところでありますが、貴協会におかれましても、なお一層卓球競技を通して、本県のスポーツ振興に御尽力くださるよう御期待申し上げます。

終わりに、「福島県卓球協会設立70周年記念誌」が発刊されましたことを心から御祝い申し上げ、貴協会のますますの御発展と関係の皆様の更なる御活躍を祈念いたしまして、祝辞といたします。

「福島県卓球協会設立70周年記念誌」発刊に寄せて

福島県教育委員会教育長
杉　原　陸　夫

福島県卓球協会設立70周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。

貴協会は、昭和4年に設立されて以来、本県における卓球競技の普及・振興に力を注がれ、ここにめでたく設立70周年を迎えられました。

これもひとえに、協会設立に尽力された方々をはじめとして、長年にわたり運営にあたられました関係の皆様の御努力の賜と深く敬意を表します。

また、この記念すべき節目の年にあたり、記念誌を編纂し、貴協会の貴重な活動の証を後世に残されますことは誠に意義深く、心からお祝いを申し上げます。

卓球競技は、国際大会で活躍する選手を数多く輩出するなど、日本のお家芸といわれた競技であるとともに、幼児から高齢者に至るまで幅広い年齢層の多くの人々に親しまれております。

本県におきましても、貴協会の指導者の皆様の熱意と努力により、各種の全国大会等で多くの選手が好成績を収めております。

特に、平成7年に開催されました「ふくしま国体」では、成年女子2部で優勝したのをはじめ、5種別で入賞し、競技別成績第2位の快挙を成し遂げ、本県の天皇杯獲得に大きく貢献されました。

ここに、改めて関係の皆様の長年にわたるひたむきなお取り組みに対しまして、深く敬意を表しますとともに、心から感謝を申し上げる次第であります。

どうか、関係の皆様には、この70周年を契機として、ますます一致団結され、本県の卓球競技の更なる普及・振興並びに競技力の向上に尽力されますとともに、本県スポーツの振興に御支援くださるようお願い申し上げます。

終わりに、貴協会のますますの御発展をお祈りいたしましてお祝いのことばといたします。

福島県卓球協会
設立70周年をお祝い申し上げます

日本卓球株式会社 代表取締役社長
向　原　一　雄

福島県卓球協会が、平成11年を以て、設立70周年を迎えられます事を心からお祝い申し上げます。

私が福島県に初めて足を踏み入れたのは確か昭和21年の頃と記憶しております。先ず会津若松を訪問いたしました。その時にお目にかゝったのは会津卓球協会の岩田さんと平出さんでした。まだ敗戦直後の混乱期にも拘らず大へん御世話になりました。その時は卓球の話は余りせずに、会津の歴史について、いろいろと拝聴いたしました。

その後、東北卓球連盟が福島の後藤壽二さん、青森の佐藤光男さんを中心に設立され、福島でも屡々、東北選手権大会や東北高校選手権大会が行われ、県の卓球も盛り上がり各支部の組織も充実し優秀な選手を続出し東北の黄金時代を築いたのは御存知の通りです。

更に昭和20年代の後半からは、飯坂温泉杯大会も行われ、有意義な楽しい大会でした。御存知かと思いますが、東北にはオープン大会として岩手県の花巻温泉に北日本卓球大会が行われて居りまして平成10年で67回を迎えて居ります。これに対して飯坂温泉杯がスタートした訳です（我社のサンフレンドチームも参加させていたゞきました。）大会は永続きせず残念でしたが、この大会は福島の卓球に刺激を与えたものと思います。

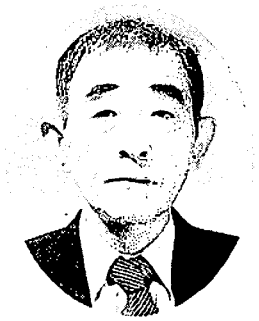
何と云っても飯坂の後藤壽二さんは福島県の卓球界のみならず、東北の卓球界の大功労者であります。その頃、大会では後藤さん始め、半谷敬寿さん、鈴木重郎治さん、笹山進さんとも、よくお目にかゝりました。又、多くの役員の方々が協力され今の福島の卓球を築いた事は忘れられません。後藤さんは文子さん、昭子さん、英子さんの後藤三姉妹と云われる立派な選手を育て上げられました。

そして県卓球界への貢献のみならず、日本代表チームの合宿などにも大いに協力されて日本の卓球界にとっても忘れられない存在です。日本代表チームの飯坂合宿では名古屋の後藤鉀二さんとも屡々お会いして色々と卓球の話をされた事でしょう。名古屋の後藤さん、福島の後藤さん共に今は亡く、痛惜の念一しおです。

その後の福島県卓球協会は先人の遺志を継いで、三浦勝美さん、宇賀神喜嗣さん、土屋弘さん、大橋柾さん、佐藤昭典さん、松崎俊一さん、西郷徹夫さん、平石家治さん、山崎勲さん、信沢要さん、渡部長二さん、二木康視さん、深谷秀三さん、伊東守信さん、浜名秀雄さん、伊藤秀行さん、鈴木一吉さん其の他多くの方々の団結と御尽力によりまして、立派に運営されて居ります事に敬意を表すると共に感謝の念に堪えません。

特に平成7年に須賀川市で行われた第50回国民体育大会の大成功には平石家治さんを先頭に須賀川市卓球協会の皆さんの大へんな御尽力に依るもので卓球福島の名を高らしめたのは記憶に新しいことです。

福島県は東北に属して居りますが関東とも境を接して居ります。東北の気風を持ち乍ら関東の風も入って独特の風土を形成しております。穏やか誠実の中にも凛とした気概が感じられます。今後も皆様の「和と努力」によりまして、福島の卓球が一層充実され、世界にはゞたく優秀な選手を輩出される事を期待しております。



ごあいさつ

福島県卓球協会
会長　西　郷　徹　夫

福島県卓球協会が、昭和4年に設立されてから本年をもって70周年を迎えました。

その間、幾多の歴史を刻みながら、協会の発展のためにご尽力くださいました歴代役員のご苦労に心から敬意を表しますとともに、これまで本協会のためにご支援とご指導を賜りました関係各位に対しまして深く感謝申し上げます。

本協会では、この記念すべき年にあたり、70年の歩みを振り返って、多くの先輩諸氏のご努力を偲び、その功績を後世に残すため、このたび記念事業の一環として「福島県卓球協会設立70周年記念誌」を発刊する運びとなりました。

本協会の設立から70年が経ちましたが、卓球の歴史を辿ってみると、本県の卓球はさらにさかのぼり、古い資料によりますと、明治の末期にはすでに福島・飯坂地方の子どもたちの間に遊びとしての「ピンポンゲーム」が普及しはじめ、大正時代から昭和の初期にかけて、学校や職場で愛好者グループが誕生し、県下各地で卓球の対抗戦が盛んに行われるようになったという記録があります。

昭和4年に、目黒宗英初代会長が、福島市の卓球連盟を母体として、福島県卓球連盟（現在は、協会）を創設。その後も戦中・戦後の激動する混乱を乗り越え、連盟組織の確立と充実・発展に尽力されました。

昭和23年、全日本軟式選手県大会を福島市飯坂で開催したのを契機に、後藤寿二会長に引き継がれ本県の卓球がさらに大きく発展を遂げることになりました。

昭和25年、第5回国体では高校女子団体が第3位に入賞したのをはじめ、昭和29年代21回世界選手権ロンドン大会では、後藤英子選手（福島女子高校出身）が日本代表として、女子団体で優勝を飾り、さらに昭和42年には、第29回世界選手権ストックホルム大会に日本代表として活躍した反畑秀彦選手（相馬高校出身）、平成の時代になってから、三浦勝美第4代会長（現：名誉会長）の卓越した指導のもとで育った藤田由希選手と今福久美選手（三浦卓球クラブ出身）が各種国際大会で活躍するなど、多くの名選手を輩出するまでにいたっております。

さらに、特記すべきことは、平成7年に開催された第50回「ふくしま国体」で、女子2部の優勝をはじめ、5種別に入賞、総合成績第2位を獲得し、本県の男女総合優勝に大きく貢献できましたことは、本県卓球史上に輝かしい1ページを飾る快挙でありました。

これまで久しく低迷を続けてきた本県卓球の競技力が、「ふくしま国体」の開催を契機に、全国レベルにまで向上して参りましたことは、誠に心強い限りであります。

同時に県民のスポーツに対する関心が一段と高まる中で、老若男女だれでも手軽に楽しめる卓球が人気を集め、各地で卓球をエンジョイする愛好者が増えつつありますことは誠に喜ばしい限りであります。

卓球も勝敗を競う競技型から、卓球そのものを楽しみ、自己実現を求める方向へと変化しており、人々のライフスタイルに合った継続的な活動を求める傾向が強くなってきております。

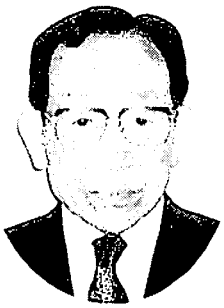
これは、21世紀への新しい一つの潮流であり、そのニーズにどう応えていくかが迫られております。

本協会といたしましては、この70周年の節目にあたり、全国レベルにある競技力をどのように維持・向上させるかが大きな課題でありますが、同時にまた生涯スポーツとしての卓球競技の普及振興にも、これまで以上に積極的な取り組が必要であると考えております。

かねてからの懸案でありましたこの記念誌の発刊が、多くの先輩諸氏の業績を偲び、後に続く人たちが「温故知新」を座右の銘として、21世紀の本県卓球界を拓く一つの指針となることを念願するものであります。

最後になりましたが、本記念誌の発刊にあたり、関係の皆様にご祝辞を賜りましたことに心からあつく御礼申しあげますとともに、玉稿をお寄せくださいました関係の皆様のご支援とご協力に深く感謝申し上げます。

終わりに、記念誌の発刊を機に今後とも卓球を愛好する同志とともに、協会のさらなる発展のために、力を尽くして参る所存でありますので、関係各位におかれましては、今後ともなお一層のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げまして記念誌発刊のあいさつといたします。



発刊に寄せて

福島県卓球協会名誉会長
三　浦　勝　美

福島県卓球協会が設立されて以来、幾多の試練を乗り越え、このたび70周年を迎えることになりました。その間、先輩諸氏のご尽力、ご支援に感謝申しあげますとともに、歴代役員の方々のご苦労に心から敬意を表する次第です。

これを機に、70年の足跡を振り返り、これまで築きあげてきた数々の業績を分析、検討し、21世紀に向かっての活動の糧とすべく、記念誌が発刊されることは、誠に意義深いものがあると存じます。

福島県卓球協会発足の年月日については、種々推測されますが、昭和5年1月発行の「福島卓球界」の会則によれば、「本則は、昭和4年12月1日よりこれを施行する」とあるので、この日をもって発足したものと考えられます。

その当時の福島県卓球界は、会津・相双・福島・須賀川（牡丹杯　昭和9年に第1回）における地区大会が中心であったように思われます。

戦争で一時、中断された卓球界も、昭和22年に、福島県卓球連盟として再建され、昭和23年に全日本軟式卓球選手権大会が福島市飯坂町で開催されたのを契機に、組織の改変が行われました。

昭和30年には、福島県高等学校体育連盟卓球部が、昭和47年には、福島県中学校新人卓球大会（県卓球連盟主催）が開催され、組織の充実と活動の活性化が進められました。

昭和50年代から平成年代にかけて、各種の全国大会が郡山市を中心に開催され、組織の更なる充実と競技力の著しい向上がはかられました。平成7年、「友よほんとうの空にとべ」のスローガンの下に開催された「ふくしま国体」に結集された熱い心と力は、われわれにやれば出来るんだという自信と将来への可能性を与えてくれたと思います。

この記念誌の発刊が21世紀に向け、夢と希望に燃えている若い世代が空高く羽ばたくための一助となればと念願する次第です。

第１節　福島県卓球協会の設立と活動のあゆみ

(1)　協会発足から第50回ふくしま国体まで

福島県卓球協会の発足は、昭和４年12月１日と考えられるが、まずはじめに協会発足の経緯を辿ってみたい。

福島県における卓球の芽生えが、いつどこであったのかは不明であるが、明治の末期にはすでに福島・飯坂地方の子供たちの間に、遊びとしてのピンポンゲームが普及していたらしい。現在辿ることのできる古いものは、大正14年11月22日に、福島第一小学校で福島市卓球チームのリーグ戦が開催されていたという記録がある。数少ない資料で断言はできないが、福島県の卓球活動の流れの中心は、福島市であったようである。大正10年に、磐城高等女学校で、ピンポン部を新設し、クラス対抗の卓球大会が、５月27日（海軍記念日）に２台の卓球台で行われている。大正15年には、第１回福島県個人優勝大会が会津で開催されるなど県内各地で卓球が盛んに行われるようになった。

この大正末期から昭和初期の卓球を指導したのが石川洋爾（当時百七銀行）、諸原（当時農工銀行）両氏であったと言われている。そして、この後を受けて、目黒宗英を会長、田辺栄次郎を理事長にして鈴木惣助、渡辺春吉、山野辺信寿等が盡力して福島卓球協会が組織され、福島市の卓球協会から福島県の卓球協会へと発展していったと思われる。協会発足の年月日については、原町市の木幡美明所蔵の「福島卓球会」（昭和５年１月27日発行。福島市御倉町20番地、山野辺信寿印刷、福島卓球協会発刊）の福島卓球協会会則によれば、『本則は昭和４年12月１日よりこれを施行す。』とあるので、福島県卓球協会は、この日をもって発足したと考える。

当時の福島県の卓球界を喜多方高等女学校教員安達善吉（県立猪苗代高等学校長を最後に退職）の日記を追い乍ら見て行く。

昭和４年２月24日（日）喜多方中学校（旧制）にピンポンに行く。同年３月10日、中学で協会卓球大会。昭和５年５月４日、県卓球協会主催の県下女子チーム戦大会、優勝。昭和６年７月10日、田辺栄次郎氏来る。

昭和６年10月28日　神宮競技、江川、高橋出場。昭和10年５月12日　第１回北日本女子中学校卓球大会。新潟医大主催、優勝。

喜多方が喜多方女子高校（現）を中心に活躍していた頃、若松では、若松営林署に愛好者が多く、盛んであった。安達善吉の日記、昭和４年６月30日、営林署と卓球試合。

然し若松では若松商業学校の陸上、テニスの運動部又はそのOB達の冬のトレーニングに始めたので卓球の競技大会に出場する男子は少なかった。

土屋弘の報告によると会津卓球連盟の創立は、昭和23年８月で、それまでは岩田喜一、平出雄次の両人が中心であった。

須賀川では昭和９年に第１回の牡丹杯卓球大会が開催されている。安達善吉日記に昭和９年５月20日須賀川卓球大会というのが見える。この大会は綿々として現在に受け継がれている。

相馬野馬追祭りで有名な小高町に昭和10年ころに小高卓球クラブが結成された。このクラブは、半谷敬寿、鈴木重郎治、佐藤　忠、石田留治郎、紺野英三郎が集まり、半谷氏の工場内に設置された㊫会館内の卓球台２台にて連日の猛練習の結果、明治神宮大会等の全国大会に出場、一時は県代表の引き受け倶楽部の感があった。（鈴木重郎治の手記より）

このクラブは大東亜戦争の勃発に依り一時中断するが、昭和23年頃より５名が再び集合して活動が再開される。

◦全國都市対抗卓球大会出場者について

全国都市対抗卓球大会には、福島の選手が主でやがてここに小高勢が加わってくる。

昭和15年京城（現ソウル）の大会には、渡辺春吉（監督）山野辺信寿、田辺栄次郎、鈴木惣助、鈴木重郎治、木幡美明が参加している。

女子は主に明治神宮大会と思うが、あげられる名前　土屋てる　梅宮フミ　冠木（喜女）小川（喜女）

◦昭和20年代（戦後）

戦争で活動が中断されていた県の卓球界も昭和22年4月に福島県卓球連盟として目黒、田辺両氏を中心に再建され活動が始まった。

昭和23年9月9日～12日、福島市に於て第3回国民体育大会県予選を兼ねて第1回福島県総合体育大会が開催された。

卓球部長　目黒　宗英
卓球副部長　後藤　寿二
総　務　田辺栄次郎
審判長　水谷　恒夫（仙台市・東北電力）
副審判長　佐藤利三郎
審　判　佐藤千太郎、村瀬、鈴木惣助、中村久一、矢部平作、鈴木
庶　務　宍戸邦夫（記録）、斎藤陸四郎、井上安正、佐藤利三郎、安藤、鈴木英次、中村東一郎、草野章、坂本哲太郎、佐藤利樹、小柳昭二、佐藤和夫、又井美孝、岩田喜一、平出雄次、山寺清一、渋沢祐二、酒井、半谷敬寿、小幡次郎
記　録　紺野のぶ、阿部敏子、後藤文子　（信沢　要　談より）

上記の大会運営の役員名を見ると、不明の方も居られるので正確は期し難いが、県北、県中、県南、相双、石城、会津とほぼ県の全域にまたがっている。当然あるべき方の氏名のないのは未だ復元が完了していない証である。

昭和23年9月19、20日の両日福島市飯坂の飯坂小学校で全国軟式卓球選手県大会が開催された。この事は県の卓球人の眼を県外へ向けさせた大変に意義ある事業であった。この年は福島県高等学校体育連盟が創立された年でもあった。

県高体連が高校大会を単独で開催するのは、昭和30年まで待たなければならない。

高体連卓球部は県卓球連盟に属し、福女の笹山進が中心になり安達の三浦勝美、平商の富樫和雄、白高の和知一、小高農の志賀智、石山女の武山博、郡商の本田克彦が地区代表として運営にあたった。（全国高校卓球五十年誌・福島県・大橋柾）

各地区より選出された県卓球連盟の理事は（県北）佐藤利三郎、笹山進、三浦勝美（県中）佐藤利吉、志賀一、（県南）高久田大一郎、井上安正（会津）平出雄次、岩田喜一（相双）半谷敬寿、鈴木重郎治（いわき）信沢要、渋沢祐二の各氏で、昭和29年4月にロンドンでの世界選手権大会に後藤英子が出場している。

◦昭和30年代

昭和30年に県高体連が高校大会を単独で開催することになり、専門委員長は各地区代表（支部長）の互選により初代委員長に安達の三浦勝美が選ばれ組織ある卓球部会とし、第一回高校大会を福島市で開催した。

翌31年、第2回大会が郡山で行われる関係で県中委員長の宇賀神喜嗣（郡女）が二代目委員長になった。

委員長、三浦勝美　各地区委員長（6名）が中心となり、卓球部会、卓球大会が運営される。

昭和33年3月15日の理事会（飯坂・花月）で各支部選出の理事の数は3名とし、内1名を高体連関係者とする（附則3）と規約され、高体連の地区委員長が県卓球連盟の理事会に参加する。

◦実業団関係

実業団は職場対抗卓球大会として行われていたが、昭和25年より実業団と改称される。

昭和20年代後半からの参加チーム名を列記する。

〔県　北〕福島製作所、福島製鋼、北芝電気、福島市役所、東亜栄養化学工業、東北電力福島
〔県　中〕東北電力郡山、保土谷化学工業、郡山市役所、日本専売公社郡山、郡山貯金局、国鉄郡山工機部、日東紡郡山、大東相互銀行

〔会　津〕会津鉄道
〔いわき〕常磐炭鉱、呉羽化学工業、常磐交通、日本水素工業、大日本炭鉱、四倉セメント、東北電力平、国鉄平、平郵便局、品川煉瓦湯本　（佐藤昭典　記）

昭和30年第9回全国都市対抗競技、卓球大会が会津若松市謹教小学校で開催された（29年までマッカーサー杯）。平出雄次会津卓球連盟理事長を先頭に連盟会員総力を結集して取組む。会員約30名程3級公認審判を取得し万全を期した。

世界卓球会の王者、荻村、田升、女では江口、大川等のプレーを目の当り見るチャンスを得た。本当の卓球を知った。

職域大会の試合球が軟式から硬式に変った年でもあった。　（土屋弘の記事より）

◦昭和40年代

昭和41年は、理事会が福島市飯坂町花月ホテルで、3月12日と12月24日と2回もたれた。

3月の記事によると、支部は県北、県南、会津、石城、相双の5支部であった。高体連では県南が県中（郡山中心）と県南（須賀川中心）に分れ6支部で地区予選等を実施していたので、県卓球連盟でも県南支部（志賀一、佐藤好美、宗像次男、斎藤喜蔵）を県中支部（志賀一、佐藤好美、宗像次男）と県南支部（鈴木理平、大越守、斎藤喜蔵）に分ける。（括弧内の人名は理事）

3月の理事会の時の役員は、

会　長　後藤　寿二
副会長　鈴木重郎治、笹山　進（幹事長兼務）宇賀神喜嗣（高体連運営委員長）
幹　事　新村　正見、須佐　哲也
監　事　渋沢　裕二、佐藤利三郎
理　事　県　北　小野　哲男　三浦　勝美　斎藤　正雄
　　会　津　平出　雄次　土屋　弘　松本　利男
　　石　城　信沢　要　佐藤　昭典　山崎　勲
　　相　双　伊賀　敏　鈴木重郎治　西郷　徹夫
　　中体連　伊藤　二郎

12月の理事会の役員と理事の名簿
3月と変わったもののみ、

副会長　斎藤　正男（宇賀神）
幹事長　宇賀神喜嗣（笹山）、
理　事　県北　大川　滋（斎藤）・会津　鈴木　守信（松本）・石城　大橋　　柾（山崎）
　　県中・県南は前記したので省略

規約の改廃をする。

福島県卓球連盟規約（12月24日施行）

第 1 条　本会は日本卓球協会の福島県支部にして、福島県卓球連盟と称する。事務局を会長指定の場所に置く。

第 2 条　本連盟は県北、県中、県南、相双、石城、会津の各支部に規定の会費を納入加盟登録せる個人及び団体を以て組織する。

第 3 条　本連盟は福島県卓球技術の向上進展に寄与すると共に会員相互の親睦を図るを以て目的とする。

第 4 条　本連盟は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

(1)　各種大会の開催

(2)　講習会、研究会の開催

(3)　その他

第 5 条　本連盟に次の役員を置く。

会長　一名　　副会長　三名　　理事長　一名　　常任理事　若干名

理事　若干名　　幹　事　若干名　　監　事　二名

第 6 条　本連盟に顧問及び参与を置くことができる。

第 7 条　連盟会長は本連盟を代表し、会務を統理する。副会長は会長を補佐し、会長事故あるときはこれを代理する。理事長は会長及び副会長を補佐して会務を掌理する。

常任理事は理事長を補佐し、常時業務を分掌し、業務の遂行を図るものとする。

理事は理事会を構成し、最高決議期間として予算、決算の審議、事業の計画、その他必要事項を審議する。

幹事は、理事長を補佐して事務に従事する。

第 8 条　連盟会長、副会長は理事会に於いて推挙する。理事長、常任理事は理事の互選により会長これを委嘱する。

理事は各所属よりの推選を参酌し会長これを委嘱する。

幹事、監事は理事会の推挙により会長これを委嘱する。

顧問、参与は理事会に図り会長これを委嘱する。

第 9 条　役員の任期は二年とし重任を妨げない。但し補欠によって委嘱されたものの任期は前任者の残任期間とする。

第 10 条　理事会は毎年一回開催する事を原則とし会長これを招集する。但し必要の場合は随時開催することができる。

理事会は4支部以上の理事を以て成立し、その議決は過半数による。議決権は各支部一票とし同数の場合は会長これを決定する。

第 11 条　本連盟の経費は各支部の負担金、登録料、寄附金その他の収入をもってこれにあてる。

第 12 条　本連盟の事業及び会計年度は1月1日に始まり12月31日に終る。

第 13 条　本連盟に左の帳簿を備えるものとする。

(1)　役員名簿　　(2)　議事録　　(3)　会計簿

(4)　大会記録　　(5)　公認審判員名簿　　(6)　登録者名簿

(7)　表彰者名簿　　(8)　備品台帳　　(9)　全国大会出場者名簿

第 14 条　本連盟の規約の改廃を行うときは理事会の決議を得て行う。

附　　則

1　本規約は昭和41年12月24日議決と同時に施行する。

2　昭和　　年　　月　　日施行の規約はこれを廃止する。

3　理事の数は各支部3名とし内1名は高体連関係者とする。

4　中体連より1名とする。

5　登録費は個人150円、団体1,000円とする。
　但し県外の個人で事務局に直接登録するものは250円とする。
6　登録費納入の方法
　団体及び県外の個人は直接事務局に納入すること。
7　副会長のうち1名は高体連関係者とする。
8　事務局の所在は郡山市山根町13番45号
　郡山女子高等学校内　宇賀神喜嗣　気付

昭和33年の規約と異なるところを列記する。第2条の県北、県南、相双、いわき、会津の5支部が、県中が加わり6支部になる。第5条　副会長2名が3名に、新たに理事長1名、常任理事若干名が加わり、幹事若干名（内1名を幹事長とする）の括弧内が削除される。従って理事長、常任理事の任務が追加される。

附則4　中体連より1名とする

附則7　副会長のうち1名は高体連関係者とするが追加された。

第13条の備えつけ帳簿に公認審判員名簿、登録者名簿、表彰者名簿、全国大会出場者名簿が追加された。

昭和40年代の福島県卓球連盟の財政面を見ると、昭和41年度57万円、昭和45年度98万円。

競技力に於ても弱小であった。卓球連盟として当面取り組むことは卓球人口を拡充すること、競技力を向上させることであった。

方策としては中学生の参加、中体連、実業団との連携、協力を密にする事であった。

この事は中央の考え、方策に従ったことであったかもしれない。以下、福島県卓球連盟日誌（備忘録）を見ながら概観する。

昭和41年12月1日、中学生の卓球試合について郡山市立第4中学校長　小畑信秀（中体連会長）を訪ねている。卓球関係は同校の菅野隆と紹介され、その後何回か会って相談したが具体化はしなかった。

昭和43年度の日誌による　公認審判員

級　別	1	2	3	
福　島　県	1	9	70	1級は三浦勝美
全　　国	55	206	3,927	沖縄は除く
1県当り	1.2	4.5	85.2	

上表より類推して指導に当る人材は全国平均、そして昭和30年全国都市対抗を成功させようとした会津卓球連盟の熱意が伝わってくる。

上記の現況のもと選手強化の任にあたった方は斎藤正雄（県北）佐藤昭典（いわき）鈴木守信（現伊東・会津）西郷徹夫（相双）大越守（県南）選手を強化することは全国も東北も同じ趨勢にあった。

◦中体連関係

昭和43年8月　愛知県体育館での第一回全国少年少女卓球講習会兼指導者講習会には研修者として佐久間直、鎌田益美、受講者　青山果（郡山三中）猪狩栄子（富岡一中）が参加。

昭和43年度の東北地区指導者研修会・技術講習会には、高校　佐藤正幸、芳賀善光、森山志代子、遠藤潤、遠藤恒子　中学　青山果　　教員　大越守、西郷徹夫、鈴木守信　が参加している。

昭和44年度の東北ブロック卓球講習会県指導者研修会は福島県が当番で、二木康規（現福島市卓球協会長）が世話を担当した。このような準備期間をおいて（と思われる）全国中学生卓球大会が昭和45年に開催され、東北では福島県双葉町で第3回東北中学生大会（関東では第一回）が開催された。北山中学（監督、水戸昇）が決勝に進出している。

昭和46年度、県卓球連盟理事会は、1月に郡山市熱海町の郡山簡易保養センターで開かれた。

郡山市役所熱海支所に勤務する郷内健を県卓連事務局の庶務として紹介し賛同を得るが、47年度の郡山市熱海町の老人センターでの理事会をもって勤務上の都合で辞任する。

昭和47年度は県卓連にとって次への飛躍の準備態勢が整った特記すべき年度である。

11月19日に見切り発車の感はあるが賛同する中学校の協力を得て須賀川市立大東中学校で、第一回福島県中学生新人卓球大会を開催することができた。

男　子	女　子
1位　植田中	1位　双葉中
2位　郡山二中	2位　北山中
3位　吾妻中	3位　北会津中
〃　石神中	〃　富岡中

成績は上記の通りである。

この大会の発足は平石家治卓連理事の骨折りと参加中学校の顧問の先生方の理解と情熱の所産である。

この当時の中学校の先生で指導熱心の方は、佐久間直、大越守、壁谷之夫、鈴木沙恵子、芳賀利允、大竹亮、吉田俊吾、渡部正宗、水戸昇、鎌田益美、志賀俊勝、安斎驟逞、渡辺喜八郎、伊藤二郎、永山知以子、鈴木恒夫があげられる。

卓連の内部については、総務部、事業部、土屋（南）平石、（北）二木（相双）浜名（会津）長尾三郎、強化部（平石）（南）伊東、（北）、古山（中）（深谷秀三）（相双）西郷徹夫（会津）渡辺洋一審判部　大橋征、土屋弘、宗像次男、西郷徹夫の名があげられている。一人で2役も3役もこなす者も出ているが、次代を担う人々の台頭が感じられる。

◦事務局誕生

昭和47年2月22日、待望の事務局が誕生する。松崎俊一を長に菅野源吉、細田雄治の三名でスタート。

この年度の決算書を見ると

収　入　1,312,538（1,006,468）　　支　出　957,755（1,006,468）　（　）内は予算

県中学生新人卓球大会は、昭和49年度に第3回を数え、そしてこの年度に中体連との共催で第1回県中学生卓球選手権大会（男女学年別）が開催された。

◦教職員卓球連盟の成立

昭和32年に宗像次男と丹藤祐輔が、酒田市での全国教職員卓球選手県大会に県代表として出場した。この時が福島県としては最初と思い確認のため、宗像先生（喜多方商工）に尋ねた。酒田には選手を引率して行ったが、出場が出来なくなって冠木常雄に代って貰った。丹藤先生（喜多方女子）も生徒引率で一緒だった。（宗像談）

丹藤先生の方は、酒田の大会には出場していないが岩手の大会に冠木先生ともう一人（不明）との3名で出場した。私が一セット取っただけで完敗との返事を貰う。もう一つ京都大会（昭和42年）の事を尋ねた。佐久間先生の話によると、昭和33年に、教職員組合と校長会共催で県教職員卓球大会が福島女子高校で開催され、この大会はこの後、毎年開催され、昭和41年、第10全国教職員卓球選手権大会（名古屋市）のとき、はじめて県大会の成績を勘案して選手を選考した。

宇賀神喜嗣、佐久間直、壁谷之夫は両方に、高橋敏夫は名古屋、西郷徹夫は京都。

昭和48年8月に、連盟会長　鈴木重郎治名で県教職員卓球連盟への入会をお願いした趣意書を配付、昭和49年6月9日、第一回県教職員卓球選手県大会が郡山市立行健小学校で開催され、終了後満場一致で県教職員卓球連盟が設立された。

◦県地区対抗卓球大会

教職員卓球連盟設立の一年前に、県地区対抗卓球大会が始まる。この試合は県内卓球人の親睦と若い人たちの卓連への参入と技術の向上と云う狙いも含まれている。

種目は、50才以上、40才以上、30才以上が各一名。一般男子、一般女子、高校男子、高校女子が各2名。試合方法は6チームの場合は、2ブロックに分けてリーグ戦、各ブロックの1、2位によるトーナメント。5チーム以下の場合はリーグ戦。

◦昭和40年代の実業団について

県　北

福島製作所
中合
東亜栄養化学工業
北芝電気
日東紡績・福島工場
福島製鋼
日本ユニパック
東北沖電気
佐藤　忠
松下電器産業

県　中

東北エコン建設
東北電力　郡山営業所
保土谷化学工業　郡山工場
国鉄郡山工場
貯金局
日本専売公社郡山地方局
郡山市役所
仙台コカコーラボトリング
国鉄郡山チーム
国鉄郡山工機部
三菱電機　郡山製作所
金門製作所
山水電気　福島事業所　郡山工業

いわき

常磐交通自動車
常磐共同火力
常磐製作所
日本水素　小名浜工場
小名浜精錬
新日本化学　小名浜工場
呉羽化学工業　錦工場
いわき市役所
いわき通運
東京工機　いわき工場
アルプスモートローラ
いわき工場

県　南

石川町役場
棚倉町役場
福島県矢吹原経営伝習農場
林精器製造　須賀川工場
サンスイトランス　須賀川工場

会　津

オール国鉄福島
大寺日曹工場
昭和電工

前記のチームが昭和40年代に実業団の試合に出場したチーム名である。
昭和42年4月16日に下記
福島県実業団卓球連盟（仮称）
事業　全日本実業団卓球選手県大会県予選
福島県実業団卓球選手県大会
要項（規約）
世話役について
県北　県中　県南　石城　からは会社から
会津　相双　は卓連支部の責任者
について相談がもたれ、全国大会の県予選を兼ねて県大会も実施されたが、連盟設立までにはいたらなかった。

県卓連への登録者数（2,393名）

		県　北	県　中	県　南	いわき	相　双	会　津
一　般		53	55	19	83	39	34
高校	男	202	175	200	220	137	202
	女	153	151	203	156	101	210

昭48年7月31日現在

昭和50年1月18日の理事会に於て、前掲の卓球連盟規約（昭和41年12月24日より施行）の附則3が次のように改廃される。

附則3、理事の数は各支部4名とし内1名は高体連関係者、1名は中体連関係者とする。

◦昭和50年代から平成時代へ

昭和50年　理事長交代　宇賀神から三浦勝美

昭和53年　第1回県レディス卓球大会

日中交歓卓球大会（県卓球連盟主管・いわき関船体育館 53・5・31）

昭和55年　三浦から平石家治に理事長交代

事務局長は郡山市の松崎俊一から須賀川市の伊東守信に交代する。

昭和56年に福島県卓球連盟は福島県卓球協会と改称される。昭和57年には深谷秀三が普及強化委員委員長になり、県選手県大会に、カデット（中学生1・2年）ポープス（小学生5・6年）がスタートする。

昭和59年　第11回全国高等学校選抜卓球大会が郡山市の総合体育館で3月27日から3日間開催された。

三浦勝美が会長に就任し、鈴木重郎治が名誉会長になったのもこの年である。

以上、50年代の概観である。

◦福島県家庭婦人卓球連盟の発足

昭和53年第1回全国家庭婦人卓球大会（東京・駒沢体育館）が開催されるを聞きつけた母袋笙子（福島市）の呼びかけにより、福島女子高校のOGを中心に、小関光子、上野、内田、母袋笙子、大貫、影山澄が集まりチームを結成し全国大会に参加する。

全国大会に参加し各県の事情も分かり、福島県も各地でグループ毎に練習している事も分かった。

渡辺昭子（旧姓後藤）が家庭婦人対象の卓球指導をしていることも分かった。

昭和54年には、遠藤、山口、岸ひろみ、佐藤愛子、星がメンバーに加わり福女OG以外も多数参加して来た。花月の後藤さんとも連絡がとれ、小関光子、母袋笙子、山口、岸ひろみ、宍戸を中心に第1回福島市ママさん卓球大会の実行委員会が出来る。

大会会長には、後藤英子、審判長　二木康視（現 福島市卓球協会長）、大会開催日は4月15日とし、大会の進行には郡山市の影山澄が当たる。

福島市保健体育課、福島大学卓球部、福島市卓球協会、郡山市から家庭婦人の友情参加、各企業の後援等に依り大会は成功裡に終了する。

これを契機に連盟結成への機運が高まり、滝口静枝（会津）、斎藤恵美子（いわき）、入谷みち子（白河）と各地との連携も密になり、昭和58年4月　福島県家庭婦人卓球連盟が設立された。

会　長　　後藤　英子

理事長　　岸　ひろみ

理　事　　滝口　静枝、影山　　澄、斎藤恵美子、入谷みち子、小関　光子（会計）

　　河村　朝子、玉木志代子

第1回県家庭婦人卓球大会は会津若松市で開催され、平成11年で17回を数える

（影山　澄　手記より）

◦スポーツ少年団関係

家庭婦人に卓球が浸透し、卓球に対する理解が深まることは、次代更には次々代に優秀な卓球人の輩出につながる。が、それでは当面の間に合わない。スポーツ少年団の育成が国の段階で考えられ県が動き出したと思われるのが、昭和46年頃で卓球連盟日誌には、男子、〔県北〕霊山中チーム、福島二中チーム、高木卓球スポーツ少年団、野田町スポーツ少年団、〔県中〕今泉スポーツ少年団、小野スポーツ少年団、船引スポーツ少年団、〔県南〕真名畑トングリスポーツ少年団〔相馬〕北相スポーツ少年団、尚英中学校〔いわき〕植田中学校　小名浜第一中学校　〔会津〕鶴城スポーツ少年団

女子〔県北〕旭地区スポーツ少年団、高木卓球スポーツ少年団〔県中〕船引スポーツ少年団〔県南〕

真名畑ドングリスポーツ少年団〔相馬〕尚英中学校、北相スポーツ少年団〔いわき〕四倉中学校〔会津〕鶴城スポーツ少年団が県総体少年部に出場している。

県卓球連盟に於ても国、県の指導に従って行動しているのであるが、卓球弱小県からの離脱を考えていてそれなりに対策を講じて来た。

昭和40年代の後半に入ると、大橋柾が国体出場選手選考基準の原案作成を担当し、競技力向上委員会には平石家治が出席するようになる。

昭和49年3月1日、県卓球連盟に強化部が組織され、強化部長平石家治、副部長深谷秀三を中心に県北は加藤栄治郎　県中　根本孝司　県南　横山廣昭　相双　西郷徹夫　いわき　山崎勲　会津　渡部洋一　が責任者となり、飛躍に備えて基礎が定まって来た。

これと軌を一つにするようにスポーツ少年団の指導に熱心な指導者が現れて来た。

又、各支部に於ても卓球クラブを通して少年少女の育成に心をくだく方々が増えてきた。その中から特に熱心な指導者をあげると、植田スポーツ少年団の菊池進、古殿スポーツ少年団の鈴木良一、須賀川スポーツ少年団の薄井充良、会津坂下の若宮スポーツ少年団の中島静、田島の七転八起スポーツ少年団、鹿島スポーツ少年団の名があげられる。（昭和55年から昭和60までの間県総合体育大会で優勝したチームのみ記載）

昭和60年の県総体のスポーツ少年団の部に小学生の部が設けられ、61年には原町スポーツ少年団、潮風スポーツ少年団（いわき）あづまスポーツ少年団（県北）が名乗りをあげてくる。62年には二本松卓球クラブが出場し、以後二本松卓球クラブは平成7年まで連続優勝している。あづま卓球スポーツ少年団は平成元年から平成3年まで連続優勝する。平成4年には富久山卓球クラブが出場してくる。平成に入ってからは特に、二本松、富久山の両卓球スポーツ少年団の活躍は素晴らしい。上記のチームの他に県総体で優勝したチーム名は、須賀川卓球クラブ、豊間卓球スポーツ少年団、勿来卓球スポーツ少年団、荒海卓球スポーツ少年団、古殿スポーツ少年団、根小屋スポーツ少年団である。
（平成8年まで優勝チームのみ）

原町スポーツ少年団を指導したのは、斎藤一美。

吉原清隆と深谷秀三の2人が指導した『あづまスポーツ少年団』からは少年男子と成年女子の部に一人ずつ選手とし第50回国民体育大会（福島）に出場する。

三浦勝美は、定年退職と同時に県卓球協会会長に就任するが、念願であった卓球指導のため、卓球道場を建て“三浦卓球クラブ”を作り、少年男女の育成をはじめた。ここからは少年少女の部に3名出場する。

深谷秀三は、勤務地が福島から郡山に戻ったのを機に“富久山卓球クラブ”を作り指導をはじめた。

◦定例理事会資料に見る変遷

年　　度	48	59
決　算　書	1，706，961	5，614，695
県 大 会 数	9	15

決算　単位円　県大会数　全国大会県予選を含む

◦ふくしま国民体育大会

昭和55年に平石家治（理事長）伊東守信（事務局長）、渡部信行（会計）が誕生。昭和57年に深谷秀三（普及強化委員会委員長）、これを助ける菊地敏美（現教職員卓球連盟理事長）のコンビが決まり、この時点で国体への中核が定まる。

会場が須賀川市に決まってからの、須賀川市ぐるみ国体成功への努力、樫村義照会長、薄井充良理事長を中心に平石県理事長をバックアップする須賀川市卓球協会皆様の盡力、特に国体局に席を置き、県卓球協会と国体局との意思疎通に、県外からの監督、選手の接待の任に当たった市卓球協会の元理事長今泉一二の労は多いとしなければならない。

この国体にスポーツ少年団、卓球クラブの少年男・女が成長して来た天の時、"松明あかし"の祭を一ヶ月早めて遠来の客をもてなす等、地の利人の和の揃った好ましい大会だった。

（宇賀神　記）

(2)　新しい時代への架橋（平成８年～現在）

１．第50回「ふくしま国体」が終わって

「友よ　ほんとうの空へとべ！」の大会スローガンのもとに開催された第50回「ふくしま国体」（卓球競技）は、役員をはじめ多くの関係者のご支援とご協力により数々の感動を残し、大成功のうちに無事終了した。

前述のように、本県選手団は６種別（少年男女・成年男女・成年２部男女）中、成年女子２部の優勝を含め、５種別に上位入賞、総合成績では常勝中の強豪県である愛知県に次いで「総合第２位」を獲得し、本県卓球協会の歴史に輝かしい足跡を残した。このような「ふくしま国体」の大きな成果の陰には、この大会の成功に向けて長年にわたる選手の育成指導のため、役員・監督、そして選手に対しても、私生活を含め多くの犠牲を強いてきた。

また、半世紀に一度しか巡ってこない国民体育大会の本県開催において、優秀な成績を収め、県民の大きな期待に応えなければならないという立場から、その目的・使命を果たすために、監督、選手の選考を巡って苦渋の選択を余儀なくされるなど、若干の「後遺症」を残しながらも協会の総力を挙げて取り組んだ第50回「ふくしま国体」卓球競技が多くの貴重な遺産を残し、成功裡にその幕を閉じた。

今後は、「ふくしま国体」の本県開催がもたらした成果を基に、数々の教訓を生かしながら協会のさらなる充実発展のために、21世紀に向けて新たなる課題に挑戦していくことが求められてきている。

２．新しき時代に向けて

第50回「ふくしま国体」が終わった平成７年度の定例理事会において、昭和59年から12年の長きにわたって、第４代会長として協会を統率してきた三浦勝美、また会長の補佐役を務めてきた副会長の佐藤昭典、松崎俊一、土屋　弘、大橋　柾、壁谷之夫、昭和55年から16年の長きにわたって協会の運営を支えてきた理事長の平石家治、20年間にわたり強化部長として選手の育成強化に挺身してきた深谷秀三、その他長年、第50回「ふくしま国体」の開催準備と競技力向上に大きな役割を果たし、その任を果たしてきた役員が「ふくしま国体」の終了を機に、ひとまず辞任することを決め、新しい役員組織を編成し、ポスト「ふくしま国体」の協会運営に当たることになった。その後、役員人事の調整を行い、新しい組織運営の体制づくりに着手し、平成８年４月７日に開催された「臨時理事会」において、役員改選を行い新しい陣容で再出発することになった。

新会長には、長年三浦会長の指名理事で、県教育庁保健体育課（指導主事）社会体育係長として第50回国体の開催準備業務と競技力向上対策に携わった経験をもつ西郷徹夫を選出した。

会長の三浦勝美には、今後とも名誉会長として引き続き協会運営について大所高所から指導助言を仰ぐこととし、理事長の平石家治、副理事長の深谷秀三（強化部長）会長指名理事の二木康視（県北支部長）をそれぞれ副会長に、また県高体連卓球部会長の根本健作（清陵情報高等学校長）を副会長に加えることになった。

なお、顧問には副会長を務めてきた佐藤昭典、松崎俊一、土屋　弘、大橋　柾、壁谷之夫と長年事務局長を務め、協会の繁雑な事務処理に力を尽くしてきた伊東守信を新たに推戴することとなった。

また、平石家治理事長の後任には県北支部理事長の伊藤秀行を選出し、伊東守信事務局長の後任には、県高体連卓球部会選出理事の鈴木一吉（福島工業高校教諭）を、事務局次長兼会計には渡辺俊雄（福島工業高校教諭）をそれぞれ委嘱し、ここに西郷徹夫新会長を中心とした新しい役員の組織体制が誕生した。

役員の大幅な改選により、人心を一新してポスト「ふくしま国体」の協会運営を担うことになった新体制の基本方針は、第50回「ふくしま国体」の開催を契機に全国レベルにまで達した本県卓球の競技力の維持向上を図ることと、県民のスポーツに対する関心が一段と高まる中で、生涯スポー

ツとして卓球を愛好する人々が増加しつつあり、そのニーズにどのように応えていくかが大きなテーマとなっていることなどを踏まえ、次ぎのような運営方針のもとで各般の事業推進に努めることになった。

3．運営方針と活動計画（平成８年～12年）

◆基本方針

1．卓球競技の普及振興と競技力の向上を図るとともに組織運営の充実に努め、県民スポーツの発展に寄与する。

2．「協会設立70周年記念事業」の推進に努める。（平成８年～平成11年）

◆重点目標と活動計画（平成８年～平成12年）

1．組織運営の充実に努める。

①理事会・常任理事会・専門委員会の適正運営

②協会規約並びに専門委員会規定の一部改定……（平成９年度）

③専門委員会（総務・競技・審判・強化普及・表彰）の活性化

④加盟団体との緊密な連携と支援（加盟団体別記）

⑤財源の確保（登録者、大会参加者の拡大）

⑥「協会設立70周年記念事業」実行委員会の設置（平成９年度）

※平成11年「実行委員会の開催と記念事業の推進」

⑦会員相互の親睦

⑧競技人口、指導者、地域クラブ、市町村の活動状況の把握

2．各種大会の開催と円滑な運営に努める。（別記事業計画参照）

①「開催地区実行委員会」の組織化

②各種大会の会場確保と迅速な大会要項の配布

③「改正ルール」の周知徹底と指導

④適正な組み合わせの実施

⑤記録の整理保管と迅速な報道

⑥開催地と協会事務局との緊密な連絡と調整

3．選手の育成強化を図る。

①小・中・高校生選抜強化リーグ大会の開催（年６回）

②小・中・高校生選抜強化リーグ大会上位選手の県外合宿（年２回）

※中国遠征等を含む

③中学生学年別卓球大会の開催

④東北総合体育大会、国民体育大会への役員・選手・監督の派遣

⑤強化指定校（選手）の推薦

⑥代表選手の強化合宿（東北総合体育大会・国民体育大会に向けて）

⑦茨城県代表選手との交流大会（両県交互開催）

4．指導者の養成と資質の向上を図る。

①公認スポーツ指導者養成事業（文部大臣認定スポーツ指導者資格付与制度）への参加奨励（推薦等）

※地域スポーツ指導者（Ａ級・Ｂ級・Ｃ級指導員）有資格者Ｃ級15名

※競技力向上指導者（Ａ級・Ｂ級・Ｃ級コーチ）有資格者Ｂ級１名

②各種指導者研修会の開催

※県の補助事業等の導入

③スポーツ指導者研修会等への積極的参加奨励（県スポーツ指導者協議会研修事業への参加）

5．審判員の養成確保と資質の向上を図る。

①公認審判員講習会の開催

②レフリー・上級審判員講習会への参加（派遣）
③審判員の研修（全日本選手権大会・東京選手権大会への参加）

6．普及活動の推進に努める。
①ジュニア層（低年齢層）の育成
○「親子卓球教室」・「親子卓球大会」等の開催（支部及び市町村への開催要請と指導者の派遣協力）
②新卓球（ラージボール）大会の開催と普及
③その他、卓球競技の普及振興に関わる大会・行事の支援協力

7．広報の推進に努める。
①報道関係各社に対する情報の提供（大会の記録・大会等開催案内と共催・後援等の協力と要請）
②機関紙（仮）「福島県卓球協会時報」の発刊（検討課題）

8．関係機関・団体との緊密な連携と支援・協力に努める。
○㈳日本卓球協会
○東北卓球連盟
○㈳福島県体育協会
○福島県教育委員会
○㈳福島県障害者スポーツ協会（平成8年10月9日設立）
○福島県スポーツ指導者協議会（会員：1,626名　内卓球関係者7名）
○福島県レクリエーション協会
○福島県卓球協会加盟団体
- 福島県高等学校体育連盟（卓球部会）
- 福島県家庭婦人卓球連盟
- 福島県中学校体育連盟（卓球部会）
- 福島県実業団卓球連盟
- 福島県教職員卓球連盟
- その他　福島県卓球ベテラン会（加入について検討中）

9．「福島県卓球協会設立70周年記念事業」の推進に努める。（平成8年～平成11年）
①記念式典の挙行
②祝賀会の開催
③シンボルマークの公募・作成と協会旗の作製
④記念誌「福島県卓球協会70年史」の編纂・刊行
⑤感謝状の贈呈と功労者の表彰

4．協会運営と今後の課題

上述のとおり一年間の検討期間を経て、平成9年度に策定した「福島県卓球協会運営方針と活動計画」の実現に向けて、協会の組織を挙げてその推進に取り組んできた。

次に、その運営と課題についてこれをまとめた。

1．組織運営の充実について
①協会規約と専門委員会規定の一部改正（会議と役員の選出等について）（平成9年1月25日）
○会議については、
理事会、常任理事会、理事長会の適正運営と専門委員会の活性化に努めた。
- 協議題や案件等に応じて、それぞれの会議に諮って適正に処理する。
- 理事全員が一人一役で責任を分担し合う意味から、総務（理事長会）・競技・強化普及・審判・表彰（常任理事会）のそれぞれの専門分野に関する事項について企画立案と事務を執行する。

②加盟団体との緊密な連携

○連絡調整を図り協力と支援に努めた。

③会員相互の親睦

○良好な人間関係を保ち、協会の円滑な運営に努めてきた。

◆課　題

☆専門委員会活動の内容充実と理事長会と総務委員会との整合性について検討する必要がある。

☆平成10年度に事務局長・同次長が任期満了により辞任後、空席のまま理事長が兼任するという状態が続いている。円滑な事務執行を図るため事務局体制の整備が緊急の課題である。

2．各種大会の開催と円滑な運営について

①「開催地区実行委員会」の組織化

○役割分担、責任体制を明確にして、万全の体制で円滑な大会運営に当たる。

○競技会の適正な組み合わせの実施

• 問題点の指摘があった場合、説明のつく公正な組み合わせを心掛ける。

○「改正ルール」の周知徹底

• 改正点を事前にプリント配布する。（プログラムに要点を明記する。）

◆課　題

☆各種大会の開催基準及び役員編成基準の作成が必要である。

☆開閉会式の次第や通告内容など、式全体の内容について検討が必要である。

☆競技会の適正な組み合わせを行うため、競技委員会・強化普及委員会で各競技会ごとの組み合わせ基準要項を作成し、その内容の検討を行う必要がある。

3．選手の育成強化について〈資料：選手育成強化5か年計画（平成10年～14年）〉

①県体育協会スポーツ選手育成事業の推進（強化交付金による）

○強化合宿（東北総体と国体に向けて）

○強化普及委員会の計画により実施

②協会単独の強化育成事業

○「県小中高校生選抜強化リーグ大会」の年6回開催

○「県小中高校生選抜強化リーグ大会」の上位選手の県外合宿2回（中国遠征と茨城県との交流大会）

○県小中学生学年別大会

福島県卓球協会　**選手育成強化5か年計画**（平成10年～平成14年）

◆強化普及基本計画

1．選手強化組織の運営充実を図る。

(1)　強化普及委員会の活性化

①組織の充実

会長－理事長－強化普及委員長
- 各支部理事長
- 高体連委員長
- 中体連委員長
- 実業団強化担当
- 国体・東北総体各種別監督
- 教職員理事長
- 家庭婦人連盟会長

②選手育成強化計画

○選手育成強化5か年計画の策定

(2)　強化普及事業の推進

①育成強化

○小中高校生選抜強化リーグ大会の開催（年６回）

○小中高校生選抜強化リーグ大会上位選手の県外合宿（２回）

○茨城県との交流大会の開催（両県交互開催）

○小中学生学年別卓球選手県大会

○東北総合体育大会・国民体育大会代表選手の強化合宿練習等

②普及活動

○「親子卓球教室」の開催（市町村卓球協会主催）の要請・支援

※講師（指導者）派遣

○「親子卓球大会」の開催（市町村卓球協会主催）の要請・支援

２．指導者の養成確保と資質向上

○指導者研修会の開催　　○㈶福島県体育協会補助事業の導入

○指導者の資格取得等、各種指導者研修会への積極的参加

３．強化普及費の確保

○自主財源（協会）の確保

○補助金の増額要求と有効な活用

◆課　題

１．全国水準を視野に入れた選手強化意識の高揚

○目標成績

・東北総合体育大会　男女総合優勝　　・国民体育大会　各種別ベスト８位内入賞

２．戦力分析による課題の明確化

○各都道府県の情報収集　　○目標と強化練習計画の設定

３．各種別における中期的な選手構成計画の構築

○特に、少年種別から成年種別への移行について配慮が必要

４．優秀選手の確保

○県外流出の防止

５．スポーツ少年団、中体連、高体連との連携・協力による育成強化体制づくり

○小・中・高校一貫指導

６．強化合宿練習、県外遠征試合の充実と確保

７．指導者（監督・コーチ）の育成確保と資質の向上

８．企業との提携

９．地元大学選手の育成強化（検討課題）

10．市町村卓球協会との提携

◆各種別強化の課題

〔成年男子〕　○大学選手の活用とＵターン選手の受け入れ

○若手選手への切り替え

○有望選手の発掘（少年種別からの移行）

〔成年女子〕　同　上

〔少年男子〕　○日常練習の充実

○休日・長期休業等の有効活用（強化合宿、遠征等）

○基本練習の強化

○ジュニア層の育成強化

〔少年女子〕　同　上

◆第50回「ふくしま国体」後の主要大会の成績

[東北総合体育大会]

開催年／種別	少年男	少年女	成年男	成年女	総合
平成8年（山　形）	第1位	第1位	第3位	第4位	第2位
平成9年（青　森）	第3位	第3位	第2位	第1位	第2位
平成10年（岩　手）	第3位	第6位	第3位	第2位	第3位
平成11年（宮　城）	第5位	第4位	第1位	第3位	第3位

[国民体育大会]

開催年／種別	少年男	少年女	成年男	成年女	総合
平成8年（広　島）	第5位	第5位	第5位	—	第9位
平成9年（大　阪）	—	第5位	—	—	第12位
平成10年（神奈川）	—	—	第9位	第5位	第13位
平成11年（熊　本）	—	—	—	第5位	第12位

[その他の大会]

〈平成8年〉

○第50回東北高校卓球選手権大会

男子学校対抗　　優　勝　　帝京安積高校

○男子ダブルス　　優　勝　　今福　豊・渡部隆司（帝京安積高校）

○全国高校総合体育大会

男子シングルス　　準優勝　　馮　海濤（松栄高校）

○東北中学校卓球選手権大会

女子団体　　優　勝　　郡山ザベリオ学園中学校

　　第3位　　飯館中学校

男子団体　　第3位　　蓬莱中学校

○セブン・イレブンカップ全日本クラブ卓球選手権大会

四部女子団体　　準優勝　　三浦卓球クラブ（過去4回の優勝を含む8年連続上位入賞）

○セブン・イレブンカップ全日本クラブ卓球選手権大会

四部女子団体　　第3位　　富久山卓球クラブ

○セブン・イレブンカップ全日本クラブ卓球選手権大会

女子シングルス　　第3位　　今福麻美（富久山卓球クラブ）

○今福久美子（三浦卓球クラブ・岳下小学校6年）がアジア・グランプリ杯ホープス卓球選手権大会の女子日本チームの主力選手として活躍し、日本チームの第3位入賞に貢献した。

〈平成9年〉

○セブン・イレブンカップ杯全日本クラブ卓球選手権大会

四部女子団体　　優　勝　　富久山クラブAチーム

　　第3位　　富久山クラブBチーム

○ＪＯＣジュニアオリンピックカップ全日本選手権大会　カデットの部

女子ダブルス　　準優勝　　五十川芙美・高橋祥絵（富久山卓球クラブ）

○全国スポーツ少年団卓球交流大会

女子シングルス　　第３位　　荒井沙織（富久山卓球スポーツ少年団）

○全日本卓球選手権大会

ジュニア男子シングルス　第３位　　今福　豊（帝京安積高校）

〈平成10年〉

○全国高校総合体育大会

男子学校対抗　　第３位　　帝京安積高校

同上大会　男子ダブルス　第３位　　今福　豊・渡部隆司（帝京安積高校）

○セブン・イレブンカップ全日本クラブ卓球選手権大会

四部男子団体　　優　勝　　富久山卓球クラブＡチーム・第３位　Ｂチーム、

四部女子団体　　第２位　　富久山卓球クラブ

○全国教職員卓球選手権大会

一般女子シングルス　　第３位　　深谷純子（郡山ザベリオ学園小学教員）

〈平成11年〉

○セブン・イレブンカップ全日本クラブ卓球選手権大会

女子４部団体　　第２位　　富久山卓球クラブＡ

女子シングルス　　第３位　　東條由美（福卓会）

○全国スポーツ少年団卓球交流大会

男子シングルス　　優　勝　　渡辺芳博（富久山卓球スポーツ少年団）

○全日本卓球選手権大会（マスターズの部）

男子サーティの部　　第２位　　原　　晃

◆課　題

☆本県卓球界の将来を担う小中高校生選手が、全国大会で活躍していることは心強いが優秀な選手が他県に流失している現状がある。

今後、選手の県外流失防止について検討が必要である。

☆広く卓球競技の普及振興を図るため、各地域のクラブを統合する「クラブの連合組織」の設立について検討する必要がある。

４．指導者の養成と資質向上について

①公認スポーツ指導者養成事業への参加奨励

※地域スポーツ指導者はＣ級15名（平成11年３月31日現在）

※競技力向上指導者Ｂ級コーチ　１名（平成11年３月31日現在）

②スポーツ指導者研修会等への参加を奨励

○平成９年スポーツ功労者派遣事業「世界卓球チャンピオン小野誠治卓球教室」を開催（県の単年度事業）

◆課　題

☆多様化した選手の指導に対応するためには、絶えず研修が必要である。指導者としての理念、科学的理論に基づいて技術指導のできる指導者が求められていることから、指導者研修会（年１回）の開催について検討が必要である。

☆公認スポーツ指導者の積極的な資格取得を推奨する必要がある。

５．審判員の養成確保と資質向上について

①審判委員会の組織を固め、講習会（相双支部）を開催し審判員の養成を図った。

②審判員の登録・更新と資格取得者の名簿の整理保管に努めた。

◆課　題

☆公認レフリー・上級審判員講習会への参加（派遣）について推奨する必要がある。

☆毎年１～２回は支部持ち回りで計画的な審判講習会の開催について検討する必要がある。

6．普及活動の推進について

①ジュニア層の育成については、少子化時代に備え各市町村に対し「親子卓球教室」の開設やジュニア層を対象とした競技会の開催するなど、その普及について要請している。

②新卓球（ラージボール）の普及と大会の開催を支援した。

○福島県卓球ベテラン会（会長：土屋弘）の主催による春・夏・秋の大会開催には年々参加者が増え、内容の充実した大会となってきている。

③卓球競技の普及振興に係わる大会・行事の支援

○相双支部で、平成9年から開催されている「相双地域市町村交歓卓球大会」（小学生から一般まで、年代別に男女のシングルスとダブルスで競技する市町村対抗の団体戦）に後援している。

○平成11年から隔年ごとに「東北地区大学卓球選手権大会」の原町市開催が内定しており、後援事業として支援する。

○全県的な規模で開催される大会・行事には積極的に支援する。

◆課　題

☆平成14年に「全国ねんりんぴっく」の本県開催が内定されている。今後計画的な開催準備が必要である。また、同時にこれを契機にラージボール卓球の普及に努める必要がある。なお、現在ラージボール卓球の普及振興を担っている「福島県卓球ベテラン会」の協会加盟についても検討が必要である。

☆市町村の卓球競技の普及振興を図るため、「市町村交歓卓球大会」の各支部開催について検討する必要がある。

7．広報活動の推進について

①報道関係各社に対する速やかな情報（大会の成績や開催案内等）の提供に努めた。

②卓球に関する情報については、各支部理事長を通して周知を図っている。

◆課　題

☆（仮）「福島県卓球協会ニュース」の発刊について検討する必要がある。

8．関係機関・団体との緊密な連携と支援協力について

（関係団体は前掲のとおり）

①スポーツ指導者の研修を目的とした「福島県スポーツ指導者協議会」（会員：1,626名）に卓球関係者7名が加入し、研修に参加している。

②㈶福島県障害者スポーツ協会の主催する「卓球教室」に指導者として支援協力を行っている。（指導者の協力）

◆課　題

☆福島県スポーツ指導者協議会へ有資格者の積極的な参加を推奨する必要がある。

☆福島県卓球ベテラン会の協会加盟について検討する必要がある。

☆「大学卓球連盟」の協会加盟について検討する必要がある。

9．「福島県卓球協会設立70周年記念事業」の推進について

○平成11年に協会が設立70周年を迎えるに当たって、「協会70年記念誌」の編纂・刊行だけに終わるのではなく、70年の輝かしい発展の歴史を祝うとともに、来るべき21世紀に向けて新たな飛躍を誓い、協会の充実発展を期するため、前掲の記念事業を推進することになっていた。

○記念事業の推進に当たっては、次の専門委員会から成る「福島県卓球協会設立70周年記念事業実行委員会」を設置して事業の推進に取り組む。

○専門委員会「総務・式典・事業・記念誌編纂」

（記念事業等については、第2部　福島県卓球協会設立70周年記念事業に掲載）

4．新しき時代への展望

久しく低迷を続けてきた本県卓球の競技力が、第50回「ふくしま国体」の開催を契機に全国レベルにまで向上してきたと同時に、県民のスポーツに対する関心が一段と高まる中で、各地域で仲間と共に卓球を楽しむ人々が増加してきた。

また、地域の指導者の意識が高まり、これまでのスポーツ少年団活動に加えて県下各地域に多くの卓球クラブが誕生した。

地域の熱心な指導者が核となってクラブを活動の拠点としたジュニア層の卓球人口（小中学生約6,000人）が著しく増大し、本県卓球の将来を担う優秀な選手が逞しく成長しつつある。

協会としては、このような状況を踏まえ、平成8年度から平成12年度まで5か年間21世紀を見捉え、本県卓球の競技力の向上と普及活動の推進を柱とした運営方針と活動計画（振興策）を策定し、組織運営の充実を図りながら加盟団体及び関係機関・団体との緊密な連携のもとで、各種大会の開催、選手の育成強化、指導者の資質向上に取り組んできたところである。

その成果と課題については、上述したとおりであるが、本年協会が設立70周年を迎えたのを機に、さらなる飛躍を遂げるためには、なお多くの課題に迫らなければならない。

その一つは、司令塔としての協会組織の運営充実を図ることである。

そのためには、現在空席となっている事務局長・同次長の後任の選出を急ぎ、事務局体制の確立を図ることも重要であるが、将来的には専門委員会活動（役割分担・一人一役）の活性化（役員の意識改革と後継指導者の資質向上）を図ることが組織運営充実のキーポイントである。

二つ目は、本県卓球の将来を担うジュニア層（小中高校生）を中心とした選手の発掘・育成・強化を図ることが全国レベルの競技力の維持・向上のポイントである。

そのためには、強化普及委員会を中心に、強化普及基本計画を基に「選手育成強化計画」（前掲）を策定し、選手の育成強化に総力を挙げて取り組むことが重要である。

具体的には、①選手強化組織の充実　②強化普及事業の推進　③指導者の養成確保と資質向上　④強化費の確保を柱に推進することが極めて重要である。

また、「選手の育成強化」に係わる課題（前掲／全国水準を視野に入れた選手強化意識の高揚など10項目）について、十分な検討を加えその具体的な対策を練っていく必要がある。

さらには、「強い国や県の選手は、なぜ強いのか」「どのような強化練習をしているのか」「本県はどういうところが弱いのか」等を分析したうえで強化策を考える必要がある。

三つ目は、選手の育成強化を図る一方で、生涯スポーツとしての卓球競技の普及振興にも目を向けて、その普及に努める必要がある。

わが国の卓球愛好者は1千万人を越えるほど、その裾野が広がっている。

本県においても、前述のように地域にスポーツクラブが次々と誕生している。（本県卓球の競技人口は、1万人を越えている。）

また、家庭婦人や中高年の卓球愛好者がラージーボール卓球を楽しむなど、勝敗を競う競走型から、自己実現を求める方向へ変化しており、人々のライフスタイルに合った継続的な活動を求めている。これは、21世紀の新しいスポーツ潮流となるであろう。

いずれにせよ、卓球愛好者の底辺を広げて、頂点を高くすることが競技力の向上に繋がっていくことを認識する必要がある。

四つ目の大きな課題は、指導者の養成と資質向上を図ることである。

卓球競技の普及振興と競技力の向上を図るための重要な条件は、施設・組織と並んで指導者が最も重要であり、その養成と活用を図ることが課題である。

指導者には、基本的にその人の人柄、人格が大切な要素として求められているので科学的な理論に基づく技術的な指導だけでなく、精神的な指導もできる能力が必要である。

型にはまった指導ではなく、選手の持っている個性や長所を上手に引き出せる指導者、教える対象者に見合った適切な指導ができる指導者が求められている。

そのためには、指導者としての公的資格（文部大臣認定「社会体育指導者の知識・技能審査事業」による指導者資格）を取得し、自信を持って指導に当たることである。

さらにまた、卓球に限りない情熱を注ぎ、卓球をとおして人生の歓びを体験させ、人間としての進む道を知らしめる人が、今強く求められている。

来るべき21世紀の本県卓球の健全な発展のためには、「誰にでも楽しめる卓球」を基本におき、指導者一人ひとりがより一層その資質を高めていくことに大きな期待を寄せるものである。

～終　わ　り　に～

立派な成績を残したチームや優秀な選手が育っていったその陰には、必ずといっていいほど、熱心で優れた指導力をもった指導者の存在がある。これからその指導者が21世紀に向かう本県卓球の将来について、どのような意識を持つかが問われているところである。

「卓球を思う心」には若干の温度差があるかも知れないが、新たなる協会の発展のために、今の自分は何ができるのか、何をなすべきなのか、という積極的な姿勢をもつことに期待をかけたい。

協会がこれから発展するためには、どうすることがよいのか具体策を積極的に提言し、その戦列に加わることを願うものである。

（協会長／西郷徹夫）

第２節　福島県卓球協会の歴代役員

○歴代会長

- 日黒　宗英（初代　昭和 4年～昭和23年）
- 後藤　寿二（2代　昭和24年～昭和42年）
- 鈴木重郎治（3代　昭和43年～昭和58年）
- 副会長（　　～昭和42年）
- 三浦　勝美（4代　昭和59年～平成 7年）
- 副会長（昭和56年～昭和58年）
- 西郷　徹夫（5代　平成 8年～ 現在）

○歴代副会長

- 半谷　敬寿（昭和24年～昭和42年）
- 笹山　　進（昭和41年～昭和42年）
- 信沢　　要（昭和41年～昭和54年）
- 山崎　敬哲（昭和43年～昭和51年）
- 白石　永甫（昭和52年）
- 丹藤　祐輔（昭和53年～昭和56年）
- 佐藤　昭典（昭和55年～平成 7年）
- 宇賀神喜嗣（昭和55年～昭和59年）
- 松崎　俊一（昭和62年～平成 7年）
- 三浦　勝美（昭和56年～昭和58年）
- 村上　啓正（昭和57年～昭和60年）
- 五十嵐大典（昭和61年～昭和63年）
- 土屋　　弘（昭和58年～平成 7年）
- 大橋　　柾（平成元年～平成 7年）
- 平山　　宏（平成元年～平成5年）
- 壁谷　之夫（平成5年～平成7年）
- 北原　正三（平成6年～平成7年）
- 二木　康視（平成8年～ 現在）
- 平石　家治（平成8年～ 現在）
- 深谷　秀三（平成8年～ 現在）
- 根本　健作（平成8年～ 現在）

○歴代理事長

- 田辺栄次郎（初代　昭和24年～昭和35年）
- 佐藤利三郎（2代　昭和36年～昭和37年）
- 笹山　　進（3代　昭和38年～昭和40年）
- 宇賀神喜嗣（4代　昭和41年～昭和49年）
- 三浦　勝美（5代　昭和50年～昭和54年）
- 平石家　治（6代　昭和55年～平成 7年）
- 伊藤　秀行（7代　平成 8年～ 現在）

そのためには、指導者としての公的資格（文部大臣認定「社会体育指導者の知識・技能審査事業」による指導者資格）を取得し、自信を持って指導に当たることである。

さらにまた、卓球に限りない情熱を注ぎ、卓球をとおして人生の歓びを体験させ、人間としての進む道を知らしめる人が、今強く求められている。

来るべき21世紀の本県卓球の健全な発展のためには、「誰にでも楽しめる卓球」を基本におき、指導者一人ひとりがより一層その資質を高めていくことに大きな期待を寄せるものである。

～終　わ　り　に～

立派な成績を残したチームや優秀な選手が育っていったその陰には、必ずといっていいほど、熱心で優れた指導力をもった指導者の存在がある。これからその指導者が21世紀に向かう本県卓球の将来について、どのような意識を持つかが問われているところである。

「卓球を思う心」には若干の温度差があるかも知れないが、新たなる協会の発展のために、今の自分は何ができるのか、何をなすべきなのか、という積極的な姿勢をもつことに期待をかけたい。

協会がこれから発展するためには、どうすることがよいのか具体策を積極的に提言し、その戦列に加わることを願うものである。　（協会長／西郷徹夫）

第２節　福島県卓球協会の歴代役員

○歴代会長

- 目黒　宗英（初代　昭和４年～昭和23年）
- 後藤　寿二（２代　昭和24年～昭和42年）
- 鈴木重郎治（３代　昭和43年～昭和58年）
- 副会長（　　～昭和42年）
- 三浦　勝美（４代　昭和59年～平成７年）
- 副会長（昭和56年～昭和58年）
- 西郷　徹夫（５代　平成８年～現在）

○歴代副会長

- 半谷　敬寿（昭和24年～昭和42年）
- 笹山　　進（昭和41年～昭和42年）
- 信沢　　要（昭和41年～昭和54年）
- 山崎　敬哲（昭和43年～昭和51年）
- 白石　永甫（昭和52年）
- 丹藤　祐輔（昭和53年～昭和56年）
- 佐藤　昭典（昭和55年～平成７年）
- 宇賀神喜嗣（昭和55年～昭和59年）
- 松崎　俊一（昭和62年～平成７年）
- 三浦　勝美（昭和56年～昭和58年）
- 村上　啓正（昭和57年～昭和60年）
- 五十嵐大典（昭和61年～昭和63年）
- 土屋　　弘（昭和58年～平成７年）
- 大橋　　柾（平成元年～平成７年）
- 平山　　宏（平成元年～平成５年）
- 壁谷　之夫（平成５年～平成７年）
- 北原　正三（平成６年～平成７年）
- 二木　康視（平成８年～現在）
- 平石　家治（平成８年～現在）
- 深谷　秀三（平成８年～現在）
- 根本　健作（平成８年～現在）

○歴代理事長

- 田辺栄次郎（初代　昭和24年～昭和35年）
- 佐藤利三郎（２代　昭和36年～昭和37年）
- 笹山　　進（３代　昭和38年～昭和40年）
- 宇賀神喜嗣（４代　昭和41年～昭和49年）
- 三浦　勝美（５代　昭和50年～昭和54年）
- 平石家　治（６代　昭和55年～平成７年）
- 伊藤　秀行（７代　平成８年～現在）

○歴代事務局長

- 松崎　俊一（昭和52年～昭和54年）
- 伊東　守信（昭和55年～平成7年）
- 鈴木　一吉（平成 8年～平成 9年）

歴　代　会　長

初代会長
目　黒　宗　英
（昭和4年～昭和23年）

2代会長
後　藤　寿　二
（昭和24年～昭和42年）

3代会長
鈴　木　重　郎　治
（昭和43年～昭和58年）
副会長（　　～昭和42年）

4代会長
三　浦　勝　美
（昭和59年～平成7年）
副会長（昭和56年～昭和58年）

5代会長
西　郷　徹　夫
（平成8年～現在）

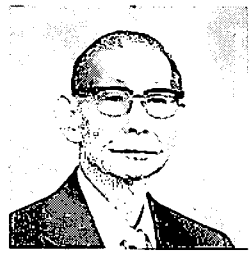
歴　代　副　会　長

宇賀神　喜　嗣
（昭和33年～昭和40年）
（昭和55年～昭和59年）

信　沢　　要
（昭和41年～昭和52年）

笹　山　　進
（昭和41年～昭和42年）

斎藤正雄
（昭和41年～昭和42年）



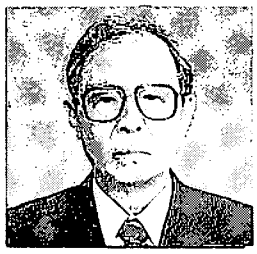
山崎啓哲
（昭和43年～昭和51年）

白石永甫
（昭和52年）

丹藤祐輔
（昭和53年～昭和56年）

村上啓正
（昭和57年～昭和60年）

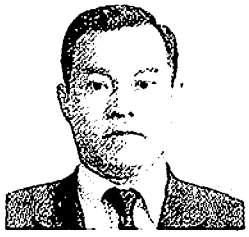
土屋　弘
（昭和58年～平成7年）



佐藤昭典
（昭和58年～平成7年）

五十嵐大典
（昭和61年～昭和63年）

松崎俊一
（昭和62年～平成7年）



大橋　柾
（平成元年～平成7年）

平山　宏
（平成元年～平成5年）

壁谷之夫
（平成5年～平成7年）

北　原　正　三
（平成6年～平成7年）

平　石　家　治
（平成8年～現在）

根　本　健　作
（平成8年～現在）

二　木　康　視
（平成8年～現在）

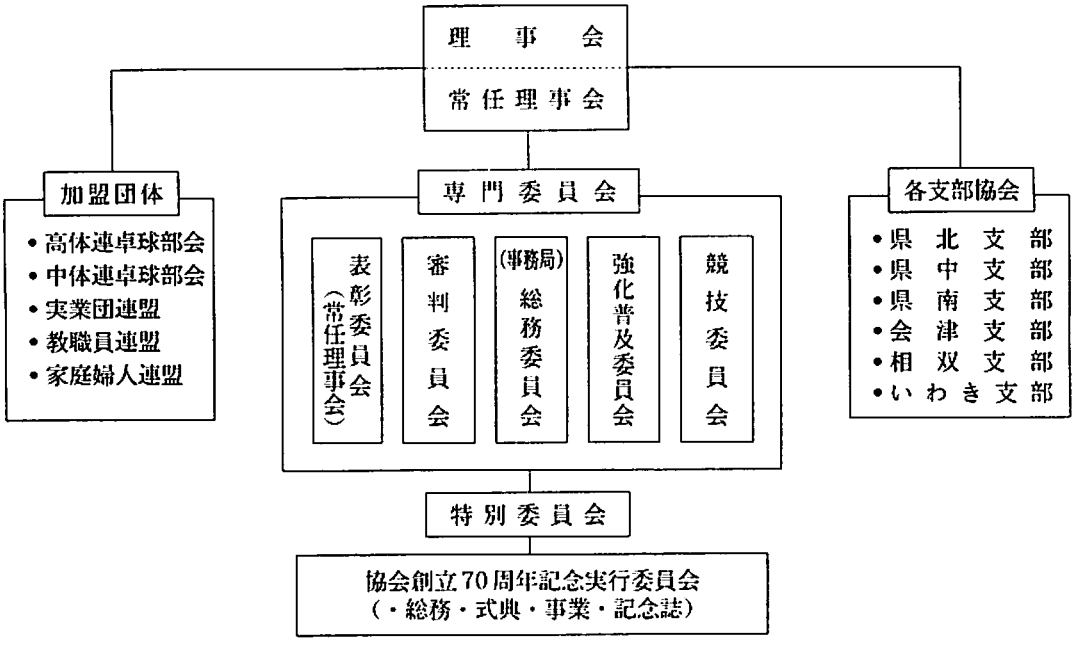
深　谷　秀　三
（平成8年～現在）

半　谷　敬　寿
（昭和24年～昭和42年）

第3節　福島県卓球協会の組織及び役員構成

○　組　織　図

福島県卓球協会組織・機構図



北　原　正　三
（平成6年～平成7年）

平　石　家　治
（平成8年～現在）

根　本　健　作
（平成8年～現在）

二　木　康　視
（平成8年～現在）

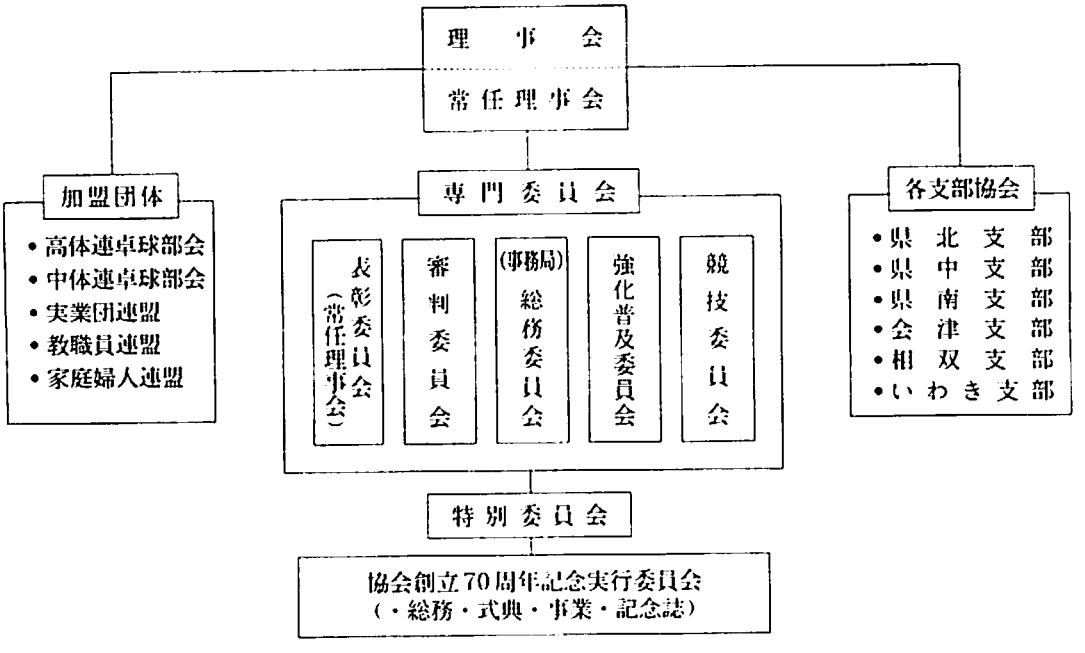
深　谷　秀　三
（平成8年～現在）

半　谷　敬　寿
（昭和24年～昭和42年）

第3節　福島県卓球協会の組織及び役員構成

○　組　織　図

福島県卓球協会組織・機構図



○現在の主な役員

名誉会長	三浦　勝美（元　高校教員）	
顧　　問	信沢　　要（元　公務員）	宇賀神喜嗣（元　高校教員）
	土屋　　弘（元　国鉄職員）	佐藤　昭典（元　会社員）
	松崎　俊一（元　高校教員）	大橋　　柾（元　高校教員）
	壁谷　之夫（元　中学校教員）	伊東　守信（元　高校教員）
会　　長	西郷　徹夫（元　高校教員）	
副 会 長	二木　康視（自営業・二木康進商店）	平石　家治（公務員・公立小野町地方総合病院組合）
	深谷　秀三（教員・柴宮小学校）	根本　健作（教員・清陵情報高校）
理 事 長	伊藤　秀行（会社員・東邦銀行保原支店）	
副理事長	渡部　長二（教員・若松商業高校）	斉藤　一美（自営業・セントラル住設）
支 部 長	県　北　　二木　康視（自営業・二木康進商店）	
	県　中　　深谷　秀三（教員・柴宮小学校）	
	県　南　　滝沢　昌昭（元　公務員）	
	会　津　　平出　雄次（自営業・平出スポーツ店）	
	相　双　　堀川　清光（元　公務員）	
	いわき　　佐藤　昭典（元　会社員）	
理　　事	※各支部選出理事　　※会長指名理事	

第4節　全国大会の開催

昭和23年9月19日～20日

全国軟式卓球選手権大会　　福島市　　飯坂小学校

○　福島県の卓球人の眼を県外へ向けさせた大変に意義のある事業であった。

昭和35年

全日本軟式卓球選手権大会　　福島市　　県営福島体育館

○　福島県で2回目の全国大会。荻村伊智郎前世界卓球連盟会長が混合複に優勝する。

昭和54年9月21日（金）～23日（日）

第13回全日本社会人卓球選手権大会　　郡山市　　郡山総合体育館

○　福島県での久し振りの全国大会開催に、世界チャンピオン小野誠治選手の出場で観客数も多い。男子複で安達・星組（日東紡福島）が、3位入賞した。

昭和59年3月27日（火）～29日（木）

第11回全国高等学校選抜卓球大会　　郡山市　　郡山総合体育館

○　男子は、熊谷商業（埼玉県）が2年連続5回目の優勝、女子は、柳川高校（福岡県）が2年振り4回目の優勝を飾った。

昭和63年11月19日（土）～20日（日）

全日本卓球選手権大会（少年の部）　　郡山市　　郡山総合体育館

○　中学生以下のシングルス4種目に熱戦を展開した、次回からホープス、カブ、バンビの部とカデットの部に分割されたので、小中学校一緒の最後の大会となった。

平成2年8月5日（日）～8日（水）

第35回全国教職員卓球選手権大会　　郡山市　　郡山総合体育館

○　男子団体戦の2回戦　福島県対栃木県で前半0－2の3番ダブルス1セット破れ2セット目11－20から奇跡の逆転勝ちをおさめ、3－2で勝ち、3位に入賞した試合が忘れられない。

平成4年7月31日（金）～8月2日（日）

第11回全日本クラブ卓球選手権大会　　郡山市　　郡山総合体育館　郡山西部体育館

○　国体リハーサル大会の一環として、郡山市と須賀川市の卓球協会で運営した。
男子1部の福卓会と女子4部の富久山卓球クラブが、アベック優勝した。

平成6年11月18日（金）～20日（日）

全日本卓球選手権大会（団体の部）　　須賀川市　須賀川アリーナ

○　ふくしま国体の前年、国体リハーサル大会として、新装なった須賀川アリーナで開催された。

平成7年10月14日（土）～19日（木）

国民体育大会卓球競技　　須賀川市　須賀川アリーナ

○　略

第5節　各種大会で活躍した選手・チーム

〈国際大会〉

後藤　英子（福島女子高校出身）

昭和29年　第21回世界選手権大会	ロンドン	女子ダブルス	優勝
昭和29年　国際卓球選手権大会	ドイツ	混合ダブルス	優勝

反畑　秀彦（相馬高校→日本大学→三井生命）

昭和42年　第29回世界選手権大会　ストックホルム　男子シングルス・男子ダブルス3回戦

伊藤恵美子（旧姓　渡辺）
（成蹊女子高校→富士短大→富士短大職員→日東紡績（株）福島工場→千本松毛晒工業（株）東北工場）

昭和45年　アジア卓球選手権大会　名古屋市　女子シングルス8位・混合ダブルス8位

藤田　由希（三浦卓球クラブ→安達高校→中央大学）

平成元年　第4回アジアジュニア卓球選手権大会	ニュウデリー	ホープス女子シングルス	優勝
平成3年　地球ジュニア卓球大会	千葉（幕張）	カデット女子シングルス	優勝
平成5年　フランス　ジュニアオープン	フランス	女子ダブルス	優勝
平成6年　デンマーク　ジュニアオープン	デンマーク	女子シングルス	優勝
平成7年　フレンチ　ジュニアオープン	フランス	女子団体	優勝

今福　久美（三浦卓球クラブ）

平成8年　東アジアグランプリー杯ホープス卓球大会	神戸市	女子団体	3位

高橋美貴江（三浦卓球クラブ）

平成3年　地球ジュニア卓球大会	千葉（幕張）	ホープス女子シングルス	準優勝

藤田　小夜（三浦卓球クラブ）

平成3年　地球ジュニア卓球大会	千葉（幕張）	カブ女子シングルス	3位

〈全国大会〉

梅原　哲次（相馬高校→中央大学）

昭和33年　全日本卓球選手権大会	東京都	男子シングルス	3位

反畑　秀彦（相馬高校→日本大学→三井生命）

昭和36年　全日本学生卓球選手権大会	東京都	男子ダブルス	ベスト8
昭和37年　全日本学生卓球選手権大会	東京都	男子ダブルス	ベスト8
昭和38年　全日本学生卓球選手権大会	東京都	男子ダブルス	3位
昭和41年　全日本卓球選手権大会	東京都	男子シングルス	ベスト8

伊藤恵美子（旧姓　渡辺）
（成蹊女子高校→富士短大→富士短大職員→日東紡績株福島工場→千本松毛晒工業株工場）

昭和60年　全日本軟式卓球選手権大会	姫路市	女子サーティ	優勝
昭和62年　全日本軟式卓球選手権大会	富山市	女子サーティ	優勝

○現在の主な役員

名誉会長	三浦　勝美（元　高校教員）	
顧　　問	信沢　　要（元　公務員）	宇賀神喜嗣（元　高校教員）
	土屋　　弘（元　国鉄職員）	佐藤　昭典（元　会社員）
	松崎　俊一（元　高校教員）	大橋　　柾（元　高校教員）
	壁谷　之夫（元　中学校教員）	伊東　守信（元　高校教員）
会　　長	西郷　徹夫（元　高校教員）	
副 会 長	二木　康視（自営業・二木康進商店）	平石　家治（公務員・公立小野町地方総合病院組合）
	深谷　秀三（教員・柴宮小学校）	根本　健作（教員・清陵情報高校）
理 事 長	伊藤　秀行（会社員・東邦銀行保原支店）	
副理事長	渡部　長二（教員・若松商業高校）	斉藤　一美（自営業・セントラル住設）
支 部 長	県　北　　二木　康視（自営業・二木康進商店）	
	県　中　　深谷　秀三（教員・柴宮小学校）	
	県　南　　滝沢　昌昭（元　公務員）	
	会　津　　平出　雄次（自営業・平出スポーツ店）	
	相　双　　堀川　清光（元　公務員）	
	いわき　　佐藤　昭典（元　会社員）	
理　　事	※各支部選出理事　　※会長指名理事	

第4節　全国大会の開催

昭和23年9月19日～20日

全国軟式卓球選手権大会　　福島市　　飯坂小学校

○　福島県の卓球人の眼を県外へ向けさせた大変に意義のある事業であった。

昭和35年

全日本軟式卓球選手権大会　　福島市　　県営福島体育館

○　福島県で2回目の全国大会。荻村伊智郎前世界卓球連盟会長が混合複に優勝する。

昭和54年9月21日（金）～23日（日）

第13回全日本社会人卓球選手権大会　　郡山市　　郡山総合体育館

○　福島県での久し振りの全国大会開催に、世界チャンピオン小野誠治選手の出場で観客数も多い。男子複で安達・星組（日東紡福島）が、3位入賞した。

昭和59年3月27日（火）～29日（木）

第11回全国高等学校選抜卓球大会　　郡山市　　郡山総合体育館

○　男子は、熊谷商業（埼玉県）が2年連続5回目の優勝、女子は、柳川高校（福岡県）が2年振り4回目の優勝を飾った。

昭和63年11月19日（土）～20日（日）

全日本卓球選手権大会（少年の部）　　郡山市　　郡山総合体育館

○　中学生以下のシングルス4種目に熱戦を展開した、次回からホープス、カブ、バンビの部とカデットの部に分割されたので、小中学校一緒の最後の大会となった。

平成2年8月5日（日）～8日（水）

第35回全国教職員卓球選手権大会　　郡山市　　郡山総合体育館

○　男子団体戦の2回戦　福島県対栃木県で前半0－2の3番ダブルス1セット破れ2セット目11－20から奇跡の逆転勝ちをおさめ、3－2で勝ち、3位に入賞した試合が忘れられない。

平成4年7月31日（金）～8月2日（日）

第11回全日本クラブ卓球選手権大会　　郡山市　　郡山総合体育館　郡山西部体育館

○　国体リハーサル大会の一環として、郡山市と須賀川市の卓球協会で運営した。
男子１部の福卓会と女子４部の富久山卓球クラブが、アベック優勝した。

平成６年11月18日（金）～20日（日）

全日本卓球選手権大会（団体の部）　　須賀川市　須賀川アリーナ

○　ふくしま国体の前年、国体リハーサル大会として、新装なった須賀川アリーナで開催された。

平成７年10月14日（土）～19日（木）

国民体育大会卓球競技　　須賀川市　須賀川アリーナ

○　略

第５節　各種大会で活躍した選手・チーム

〈国際大会〉

後藤　英子（福島女子高校出身）

昭和29年　第21回世界選手権大会	ロンドン	女子ダブルス	優勝
昭和29年　国際卓球選手権大会	ドイツ	混合ダブルス	優勝

反畑　秀彦（相馬高校→日本大学→三井生命）

昭和42年　第29回世界選手権大会　ストックホルム　男子シングルス・男子ダブルス３回戦

伊藤恵美子（旧姓　渡辺）

（成蹊女子高校→富士短大→富士短大職員→日東紡績（株）福島工場→千本松毛晒工業（株）東北工場）

昭和45年　アジア卓球選手権大会　名古屋市　女子シングルス８位・混合ダブルス８位

藤田　由希（三浦卓球クラブ→安達高校→中央大学）

平成元年　第4回アジアジュニア卓球選手権大会	ニュウデリー	ホープス女子シングルス	優勝
平成３年　地球ジュニア卓球大会	千葉（幕張）	カデット女子シングルス	優勝
平成５年　フランス　ジュニアオープン	フランス	女子ダブルス	優勝
平成６年　デンマーク　ジュニアオープン	デンマーク	女子シングルス	優勝
平成７年　フレンチ　ジュニアオープン	フランス	女子団体	優勝

今福　久美（三浦卓球クラブ）

平成８年　東アジアグランプリー杯ホープス卓球大会	神戸市	女子団体	３位

高橋美貴江（三浦卓球クラブ）

平成３年　地球ジュニア卓球大会	千葉（幕張）	ホープス女子シングルス	準優勝

藤田　小夜（三浦卓球クラブ）

平成３年　地球ジュニア卓球大会	千葉（幕張）	カブ女子シングルス	３位

〈全国大会〉

梅原　哲次（相馬高校→中央大学）

昭和33年　全日本卓球選手権大会	東京都	男子シングルス	３位

反畑　秀彦（相馬高校→日本大学→三井生命）

昭和36年　全日本学生卓球選手権大会	東京都	男子ダブルス	ベスト８
昭和37年　全日本学生卓球選手権大会	東京都	男子ダブルス	ベスト８
昭和38年　全日本学生卓球選手権大会	東京都	男子ダブルス	３位
昭和41年　全日本卓球選手権大会	東京都	男子シングルス	ベスト８

伊藤恵美子（旧姓　渡辺）

（成蹊女子高校→富士短大→富士短大職員→日東紡績株福島工場→千本松毛晒工業株工場）

昭和60年　全日本軟式卓球選手権大会	姫路市	女子サーティ	優勝
昭和62年　全日本軟式卓球選手権大会	富山市	女子サーティ	優勝

○　国体リハーサル大会の一環として、郡山市と須賀川市の卓球協会で運営した。
男子１部の福卓会と女子４部の富久山卓球クラブが、アベック優勝した。

平成６年11月18日（金）～20日（日）
全日本卓球選手権大会（団体の部）　　須賀川市　須賀川アリーナ

○　ふくしま国体の前年、国体リハーサル大会として、新装なった須賀川アリーナで開催された。

平成７年10月14日（土）～19日（木）
国民体育大会卓球競技　　須賀川市　須賀川アリーナ

○　略

第５節　各種大会で活躍した選手・チーム

〈国際大会〉

後藤　英子（福島女子高校出身）
昭和29年　第21回世界選手権大会　　ロンドン　女子ダブルス　優勝
昭和29年　国際卓球選手権大会　　ドイツ　混合ダブルス　優勝

反畑　秀彦（相馬高校→日本大学→三井生命）
昭和42年　第29回世界選手権大会　ストックホルム　男子シングルス・男子ダブルス３回戦

伊藤恵美子（旧姓　渡辺）
（成蹊女子高校→富士短大→富士短大職員→日東紡績（株）福島工場→千本松毛晒工業（株）東北工場）
昭和45年　アジア卓球選手権大会　名古屋市　女子シングルス８位・混合ダブルス８位

藤田　由希（三浦卓球クラブ→安達高校→中央大学）
平成元年　第４回アジアジュニア卓球選手権大会　ニュウデリー　ホープス女子シングルス　優勝
平成３年　地球ジュニア卓球大会　　千葉（幕張）　カデット女子シングルス　優勝
平成５年　フランス　ジュニアオープン　　フランス　女子ダブルス　優勝
平成６年　デンマーク　ジュニアオープン　　デンマーク　女子シングルス　優勝
平成７年　フレンチ　ジュニアオープン　　フランス　女子団体　優勝

今福　久美（三浦卓球クラブ）
平成８年　東アジアグランプリー杯ホープス卓球大会　　神戸市　女子団体　３位

高橋美貴江（三浦卓球クラブ）
平成３年　地球ジュニア卓球大会　　千葉（幕張）　ホープス女子シングルス　準優勝

藤田　小夜（三浦卓球クラブ）
平成３年　地球ジュニア卓球大会　　千葉（幕張）　カブ女子シングルス　３位

〈全国大会〉

梅原　哲次（相馬高校→中央大学）
昭和33年　全日本卓球選手権大会　　東京都　男子シングルス　３位

反畑　秀彦（相馬高校→日本大学→三井生命）
昭和36年　全日本学生卓球選手権大会　　東京都　男子ダブルス　ベスト８
昭和37年　全日本学生卓球選手権大会　　東京都　男子ダブルス　ベスト８
昭和38年　全日本学生卓球選手権大会　　東京都　男子ダブルス　３位
昭和41年　全日本卓球選手権大会　　東京都　男子シングルス　ベスト８

伊藤恵美子（旧姓　渡辺）
（成蹊女子高校→富士短大→富士短大職員→日東紡績株福島工場→千本松毛晒工業株工場）
昭和60年　全日本軟式卓球選手権大会　　姫路市　女子サーティ　優勝
昭和62年　全日本軟式卓球選手権大会　　富山市　女子サーティ　優勝

平成元年	全日本軟式卓球選手権大会	甲府市	女子フォーティ	優勝
平成元年	第21回全日本社会人卓球選手権大会	沖縄県	女子フォーティ	優勝
平成２年	全日本軟式卓球選手権大会	岡山市	女子フォーティ	優勝
平成４年	第24回全日本社会人卓球選手権大会	福岡県	女子フォーティ	優勝
平成７年	福島県（福島代表）	成年２部		優勝

藤田　由希（三浦卓球クラブ→安達高校→中央大学）

昭和62年	全日本卓球選手権大会	北九州市	カブ女子	優勝
平成元年	第７回全国ホープス卓球大会	東京都	女子団体	優勝
平成２年	全日本卓球選手権大会	旭川市	ｶﾃﾞｯﾄ女子(13才以下)ｼﾝｸﾞﾙｽ	優勝
平成３年	第10回全日本クラブチーム卓球選手権大会	長野県	女子４部	優勝
平成４年	第23回全国中学校卓球大会	松本市	女子シングルス	優勝
平成５年	第12回全日本クラブチーム卓球選手権大会	長岡市	女子４部	優勝
平成５年	全国高校総体卓球競技	真岡市	女子ダブルス	３位
平成６年	第13回全日本クラブチーム卓球選手権大会	静岡県	女子４部	優勝
平成６年	全国高校総体卓球競技	富山県	女子ダブルス	３位
平成６年	全日本卓球選手権大会	東京都	ジュニア女子シングルス	２位
平成７年	第47回東京卓球選手権大会	東京都	ジュニア女子シングルス	優勝
平成７年	全国高校選抜卓球大会	甲府市	女子団体	２位
平成７年	全日本卓球選手権大会	東京都	一般女子シングルス ﾗﾝｸ	11位
平成８年	全日本卓球選手権大会	東京都	一般女子シングルス ﾗﾝｸ	14位
平成10年	全日本学生卓球選手権大会	東京都	女子シングルス	３位
平成10年	全日本卓球選手権大会	東京都	女子ｼﾝｸﾞﾙｽ ﾗﾝｸ12位	女子ﾀﾞﾌﾞﾙｽ ７位

福島　正子（旧姓　尾形　成蹊女高→専修大→日興証券）

昭和35年	全日本卓球選手権大会	東京都	ジュニア女子シングルス	３位

高橋美貴江（三浦卓球クラブ→安達高校→淑徳短大）

昭和62年	全日本卓球選手権大会	北九州市	バンビ女子	優勝
平成元年	第８回クラブチーム卓球選手権大会	宇都宮市	女子４部	準優勝
平成２年	第９回クラブチーム卓球選手権大会	長野県	女子４部	準優勝
平成２年	全日本卓球選手権大会	姫路市	ホープス女子	５位
平成３年	地球ジュニア卓球大会	千葉県	ホープス女子	準優勝
平成３年	第10回全日本クラブチーム卓球選手権大会	長野県	女子４部	優勝
平成４年	第11回全日本クラブチーム卓球選手権大会	郡山市	女子４部	準優勝
平成４年	全日本卓球選手権大会	米子市	カデット女子シングルス	５位
〃		〃	カデット女子ダブルス	５位
平成５年	第12回全日本クラブチーム卓球選手権大会	長岡市	女子４部	優勝
平成５年	全日本卓球選手権大会	姫路市	カデット女子シングルス	３位
平成６年	第13回全日本クラブチーム卓球選手権大会	静岡市	女子４部	３位
平成６年	全日本卓球選手権大会	東京都	ジュニア女子シングルス	５位
平成７年	第14回全日本クラブチーム卓球選手権大会	浜松市	女子４部	優勝

藤田　小夜（三浦卓球クラブ→福島女子高校）

平成元年	全国ホープス卓球大会	東京都	女子団体	優勝
平成３年	第10回クラブチーム卓球選手権大会	長野県	女子４部	優勝
平成４年	第11回全日本クラブチーム卓球選手権大会	郡山市	女子４部	２位
平成５年	全日本卓球選手権大会	姫路市	ホープス女子	３位
平成５年	全日本卓球選手権大会	姫路市	カデット女子	５位

平成６年　第13回全日本クラブチーム卓球選手権大会　静岡市　女子４部　優勝
平成７年　第14回全日本クラブチーム卓球選手権大会　浜松市　女子４部　優勝

今福　愛（三浦卓球クラブ→いわき女子短大→大東銀行）
昭和62年　全国ホープス卓球大会　東京都　女子団体　３位
昭和63年　全日本卓球選手権大会　郡山市　カブ女子　５位
平成元年　全日本クラブチーム卓球選手権大会　宇都宮市　女子４部　２位
平成元年　全国ホープス卓球大会　東京都　女子団体　優勝
平成２年　全日本卓球選手権大会　姫路市　ホープス女子　５位

今福　久美（三浦卓球クラブ→育英学園　秀光中学校）
平成３年　全日本卓球選手権大会　弘前市　バンビ女子　３位
平成４年　全日本卓球選手権大会　姫路市　バンビ女子　優勝
平成５年　第12回全日本クラブチーム卓球選手権大会　長岡市　女子４部　優勝
平成５年　全日本卓球選手権大会　姫路市　カブ女子　５位
平成６年　第13回全日本クラブチーム卓球選手権大会　静岡市　女子４部　優勝
平成６年　全日本卓球選手権大会　姫路市　カブ女子　３位
平成７年　第14回全日本クラブチーム卓球選手権大会　浜松市　カブ女子　３位
平成８年　第15回全日本クラブチーム卓球選手権大会　福岡県　女子４部　２位

安達　広（好間高校→日東紡績福島）
昭和54年　第13回全日本社会人卓球選手権大会　郡山市　男子ダブルス　３位

星　哲太郎（磐農→日東紡績福島）
昭和54年　第13回全日本社会人卓球選手権大会　郡山市　男子ダブルス　３位

原　晃（小高工業高校→東京電力）
平成元年　全日本軟式卓球選手権大会　甲府市　男子ダブルス　３位
平成３年　全日本軟式卓球選手権大会　福知山市　男子ｼﾝｸﾞﾙｽ 3位・男子ﾀﾞﾌﾞﾙｽ　準優勝
平成５年　全日本軟式卓球選手権大会　鳥取市　男子シングルス　３位
平成７年　全日本軟式卓球選手権大会　青森市　男子シングルス　準優勝
平成７年　全日本クラブ選手権大会　浜松市　男子個人戦　準優勝
平成10年　全日本卓球選手権大会（マスターズの部）　男子サーティ　第５位

佐藤　敏行（小高工業高校→日本体育大学→中学校教員）
平成２年　全日本クラブ選手権大会　長野市　男子個人戦　３位

小林　幸子（旧姓　加藤・相馬女子高校→三井生命）
平成７年　全日本軟式卓球選手権大会　青森市　女子フォーティ　３位

梅原　実（原町高校→中央大学）
昭和26年　全日本学生卓球選手権大会　東京都　男子ダブルス　準優勝

清水　貴子（旧姓　井戸川）
昭和54年　全日本卓球選手権大会　ジュニア女子シングルス　ベスト８

小泉　直人（相馬高校→東北学院大学）
昭和52年　全国青年大会卓球の部　東京都　男子シングルス　優勝

佐原　英夫（中学校教員）
平成６年　第30回全国身体障害者スポーツ大会卓球競技の部　男子シングルス　優勝

鈴木重郎治（相馬中学校→日本大学）
昭和28年　全日本軟式卓球選手権大会　函館市　ベテランの部　３位
昭和29年　全日本軟式卓球選手権大会　横須賀市　ベテランの部　準優勝

小塩　浩（須賀川信用金庫）
平成９年　全日本軟式卓球選手権大会　神戸市　男子シングルス　優勝

平成10年　全日本軟式卓球選手権大会　高崎市　男子シングルス　優勝

桑原　要勝（安達高校→中央大学→シチズン時計→高校教員）

昭和59年　第18回全日本社会人卓球選手権大会　富山市　男子ダブルス　優勝

金村　功作（福卓会）

平成３年　全日本軟式卓球選手権大会　福知山市　男子ダブルス　準優勝

安藤ひとみ（トーアエイヨー）

昭和58年　全日本軟式卓球選手権大会　千葉市　女子ダブルス　準優勝

内藤由里子（トーアエイヨー）

昭和58年　全日本軟式卓球選手権大会　千葉市　女子ダブルス　準優勝

星　智恵（トーアエイヨー）

平成元年　全日本軟式卓球選手権大会　甲府市　女子ダブルス　３位

石川美智子（トーアエイヨー）

平成元年　全日本軟式卓球選手権大会　甲府市　女子ダブルス　３位

甚野　道雄（トーアエイヨー）

昭和６２年　全日本軟式卓球選手権大会　富山市　男子サーティ　６位

古山　栄助（ポリテクセンター→福島サンクラブ）

昭和47年　全日本軟式卓球選手権大会　名古屋市　男子フォーティ　第７位

昭和59年　全日本軟式卓球選手権大会　苫小牧市　男子フォーティ　第５位

昭和61年　全日本軟式卓球選手権大会　仙台市　男子シックスティ　第４位

平成６年　全日本軟式卓球選手権大会　金沢市　男子セブンティ　第６位

平成７年　全日本軟式卓球選手権大会　青森市　男子セブンティ　第４位

下山田守一（平工→川鉄→アルパイン）

昭和52年　全日本社会人卓球選手権大会　（滋賀）　男子ダブルス　２位

昭和53年　全日本卓球選手権大会　（東京）　男子シングルス　ベスト１６

昭和60年　全日本軟式卓球選手権大会　（北海道）　男子シングルス　３位

昭和50年　全日本実業団卓球選手権大会　（東京）　川鉄千葉　３位

昭和54年　〃　２位

平成７年　第２９回全日本社会人卓球選手権大会　神奈川　男子セブンティ　第５位

平成８年　全日本軟式卓球選手権大会　黒石市　男子セブンティ　準優勝

平成９年　全日本軟式卓球選手権大会　神戸市　男子セブンティ　準優勝

平成10年　全日本軟式卓球選手権大会　高崎市　男子セブンティ　第５位

小桧山由紀子（旧姓　坂本）

昭和46年　全日本卓球選手権大会　東京都　女子ジュニア　第３位

昭和47年　関東高等学校卓球選手権大会　栃木市　団体　優勝・女子複　優勝

昭和47年　全国高等学校卓球選手権大会　山形市　団体　ベスト８・女子単　第５位

昭和48年　関東学生新人卓球選手権大会　東京都　女子単　準優勝

奥村　厚子（成蹊女子高校→日清紡）

昭和36年　全日本軟式卓球選手権大会　豊橋市　女子ダブルス　優勝

橋本トシ子（郡山女子高校→三井生命）

昭和39年　全日本軟式卓球選手権大会　盛岡市　女子シングルス　優勝

平出　雄次（若松商業高校→平出卓球専門店）

昭和27年　全日本軟式卓球選手権大会　仙台市　シニアの部　３位

昭和30年　全日本軟式卓球選手権大会　東京都　シニアの部　５位

兼子　章（会津工業高校→中央大学）

昭和27年　全日本軟式卓球選手権大会　仙台市　男子シングルス　４回戦

（荻村伊知郎選手から唯一ワンセットを取った。他の選手は全員３－０、決勝の中田選手も３－０）

平野　四郎（会津高校→中央大学）

昭和29年　全国高等学校卓球選手権大会　徳島市　男子シングルス　４回戦

（前年度　準優勝者で第一シードの神戸商業坂本選手を３回戦で破る。）

岡田　晶子（福島女子高校→専修大学→NEC 相模原）

平成３年　全日本クラブ卓球選手権大会　長野県　女子個人戦　準優勝

平成３年　地球ジュニア卓球大会　千葉県　女子カデットＡクラス　優勝

平成５年　全日本クラブ卓球選手権大会　新潟県　女子個人戦　準優勝

平成５年　全日本卓球選手権大会　東京都　女子ジュニア単　３位

岩本　爾郎（喜多方高校→専修大学→中学校教員）

平成２年　全国教職員卓球選手権大会　福島県　男子個人戦　準優勝

平成３年　国民体育大会　石川県　成年男子２部　第５位

平成８年　国民体育大会　広島県　成年男子１部　第５位

鎌田　光隆（原町高校→中央大学）

全日本学生卓球選手権大会　男子シングルス　第２位

遊佐　充裕（小高工業高校→愛知工大）

平成５年　第15回全国スポーツ少年卓球交流大会　静岡県　男子個人戦　優勝

東條　由美（喜多方女子高校→日本体育大学→三菱工作機械）

平成７年　福島県（福島代表）成年２部　優勝

大越　弘之（小高工業高校）

平成５年　全国高等学校選抜卓球選手権大会　男子シングルス　優勝

入江　　誠（須賀川高校）

平成６年　全国高等学校選抜卓球選手権大会　男子シングルス　優勝

佐藤　悠記（安達高校）

平成10年　全国高等学校選抜卓球選手権大会　男子シングルス　３位

渡辺　隆司（富久山卓球クラブ）

平成８年　全国スポーツ少年団卓球交流大会　三重県　中学男子シングルス　優勝

渡辺　芳博（富久山卓球クラブ）

平成10年度全国スポーツ少年団卓球交流大会　新潟県　中学男子シングルス　優勝

〈東北大会〉

物江　淳一（若松商業→恒和薬品）

昭和60年　第39回東北高校卓球選手権大会　河北町　男子ダブルス　優勝

馬場　伸一（若松商業→東邦銀行）

昭和60年　第39回東北高校卓球選手権大会　河北町　男子ダブルス　優勝

伊藤恵美子（旧姓　渡辺）

（成蹊女子高校→富士短大→富士短大職員→日東紡績㈱福島工場→千本松毛晒工業㈱東北工場）

昭和54年～56年　58年～60年（６年間30戦29勝1敗・26連勝）〈東北大会〉

深谷　純子（富久山卓球クラブ→安積女子高→青山学院大学→郡山ザベリオ学園小学校）

昭和63年　第18回東北中学校卓球大会　原町市　女子シングルス　優勝

平成２年　第44回　東北高等学校卓球大会　盛岡市　女子シングルス　第３位

藤田　由希（三浦卓球クラブ→安達高校→中央大学）

平成３年　第21回東北中学校卓球大会　八戸市　女子シングルス　優勝

平成４年　第22回東北中学校卓球大会　盛岡市　女子シングルス　優勝

清水　貴子（旧姓　井戸川）

昭和55年	第34回東北高校卓球選手権大会	五所川原市	女子シングルス	優勝
昭和56年	第35回　〃	福島市	〃	2位
平成5年	平成5年度東北高校卓球大会	喜多方市	女子シングルス	優勝

高橋美貴江（三浦卓球クラブ→安達高校→淑徳短大）

平成5年	第23回東北中学校卓球大会	仙台市	女子シングルス	準優勝
平成6年	第24回東北中学校卓球大会	郡山市	女子シングルス	準優勝
平成8年	平成8年度東北高校卓球大会	盛岡市	女子シングルス	優勝

小西　正光（磐城高）　千代住　滋（磐城高）

昭和46年	第25回東北高校卓球選手権大会	仙台市	男子ダブルス	優勝

横田　敬春・渡辺　隆司（富久山卓球クラブ—帝京安積高）

平成8年	第50回東北高校卓球選手権大会	盛岡市	男子ダブルス	優勝

郡山ザベリオ学園中学校

平成8年	第26回東北中学校卓球大会	秋田市	女子団体	優勝

帝京安積高

平成8年	第50回東北高校卓球大会	盛岡市	男子団体	優勝

〈全国大会〉実業団

トーアエイヨー

昭和49年	全日本実業団卓球選手権大会	軟式女子の部	準優勝	（東京都）
昭和58年	〃	〃	〃	（草津市）
昭和62年	〃	〃	〃	（上尾市）
昭和51年	全日本実業団卓球選手権大会	軟式女子の部	第3位	（千葉市）
昭和53年	〃	〃	〃	（東京都）
昭和54年	〃	〃	〃	（米子市）
昭和55年	〃	〃	〃	（上越市）
昭和56年	〃	〃	〃	（旭川市）
昭和59年	〃	〃	〃	（上山市）
昭和60年	〃	〃	〃	（新南陽市）
昭和61年	〃	〃	〃	（岐阜市）
平成2年	〃	〃	〃	（青森市）

日東紡績㈱福島工場

昭和46年	全日本実業団卓球選手権大会	大阪市	硬式女子	第8位
平成7年	全日本実業団卓球選手権大会	松山市	1部トーナメント硬式男子	第3位

須賀川信用金庫

平成5年	全日本実業団卓球選手権大会	福井市	軟式男子	第6位

〈全国大会〉クラブチーム

福卓会

平成元年	全日本クラブ卓球選手権大会		男子1部	第3位
平成4年	〃	郡山市	男子1部	優勝
平成7年	〃	浜松市	男子1部	優勝
平成8年	〃	福岡市	男子1部	優勝
平成9年	〃	郡山市	男子1部	第3位
平成4年	全日本クラブリーグ			優勝

平成７年	〃			優勝
平成10年	〃			優勝
双葉クラブ				
昭和59年	全日本クラブ卓球選手権大会	須坂市	男子１部	３位
きびたん				
平成６年	全日本クラブ卓球選手権大会	静岡市	男子１部	３位
平成２年	〃	長野市	女子４部	優勝
平成３年	〃	長野市	女子４部	準優勝
平成３年	〃	長野市	男子４部	準優勝
平成４年	〃	郡山市	男子４部	３位
三浦卓球クラブ				
平成元年	全日本クラブ卓球選手権大会	宇都宮市	女子４部	準優勝
平成２年	〃	長野市	女子４部	準優勝
平成３年	〃	長野市	女子４部	優勝
平成４年	〃	郡山市	女子４部	Ａ準優勝・B3位・C3位
平成５年	〃	長岡市	女子４部	優勝
平成６年	〃	静岡市	女子４部	優勝
平成７年	〃	浜松市	女子４部	優勝
平成８年	〃	福岡市	女子４部	準優勝・男子４部３位
平成９年	〃	成田市	女子４部	５位
平成10年	〃	長野市	女子４部	Ａ３位・Ｂ５位
あづま卓球スポーツ少年団				
昭和63年	全日本クラブ卓球選手権大会	呉　市	女子４部	準優勝
平成元年	〃	宇都宮市	〃	３位
平成２年	〃	長岡市	〃	優勝
平成３年	〃	長岡市	〃	準優勝・３位
平成３年	〃	長岡市	男子４部	準優勝
平成４年	〃	郡山市	〃	３位
富久山卓球クラブ				
平成４年	全日本クラブ卓球選手権大会	郡山市	女子４部	優勝
平成５年	〃	長岡市	〃	準優勝・３位
平成５年	〃	長岡市	男子４部	３位
平成６年	〃	静岡市	〃	優勝・３位
平成６年	〃	静岡市	女子４部	準優勝
平成７年	〃	浜松市	〃	３位
平成７年	〃	浜松市	男子４部	準優勝
平成８年	〃	福岡市	女子４部	３位
平成８年	全国スポーツ少年団卓球交流大会	伊勢市	団　体	３位
平成９年	全日本クラブ卓球選手権大会	成田市	女子４部	優勝・３位
平成10年	〃	長野市	〃	準優勝
平成10年	〃	長野市	男子４部	優勝
平成11年	〃	長野市	女子４部	準優勝

――70年の歴史をたどり、今後を探る――

福島県卓球協会設立70周年記念

☆座　談　会

第1部 「福島県卓球協会70年のあゆみを語る」

○と　き　平成11年5月16日（日）10：00～

○ところ　福島市「福島体育館」

第2部 「福島県卓球協会の今後を語る」

○と　き　平成11年6月5日（土）13：30～

○ところ　福島市「福島体育館」

座　談　会

はじめに　～座談会の開催にあたって～

「福島県卓球協会70年史」を編纂するにあたって、座談会を2回にわたり開催いたします。

第1回のテーマは、「福島県卓球協会設立70周年のあゆみを語る」とし、本協会の創草期から平成7年に本県で開催されました第50回「ふくしま国体」までを、およそ次の3期に区分し、この企画で最も重要な部分について集録することにいたしました。

○第1期は、発足の頃から戦前戦後の活動（昭和4年～昭和30年代）
○第2期は、組織確立の時代、そして「53インターハイ」からの飛躍（昭和40年～昭和60年代）
○第3期は、第50回「ふくしま国体」の成功に向けて（平成元年～平成7年）

第2回のテーマは、「福島県卓球協会の今後を語る」とし、「ふくしま国体」開催後の平成8年から現在、そして21世紀への展望を「新しき時代への架け橋」と題して語り合い、これを収録することになり、2部構成で座談会を進めて参りますので、何とぞよろしくお願いいたします。

なお、出席者の構成メンバーにつきましては、「記念誌編纂委員会」で原案をまとめ第1回「記念事業実行委員会総会」で決めさせていただきました。（協会長／西郷徹夫）

第一部「福島県卓球協会70年のあゆみを語る」

○とき　平成11年5月16日（日）10：00～
○ところ　福島市「福島体育館」
☆　発足のころから戦前戦後の活動（昭和4年～昭和30年代）
☆　組織確立の時代、そして「53インターハイ」からの飛躍（昭和40年～昭和60年代）
☆　第50回「ふくしま国体」の成功に向けて（平成元年～平成7年代）

出席者

司会：宇賀神　喜　嗣　　進行：伊　東　守　信
記録：長　場　壮　夫

三　浦　勝　美　　土　屋　　弘　　佐　藤　昭　典　　大　橋　　征
壁　谷　之　夫　　松　崎　俊　一　　岸　　ひろみ　　西　郷　徹　夫

進　行　座談会第一部を始めます。司会をつとめます伊東守信です。では、会長よりご挨拶をいただきます。

会長あいさつ（第1部）

本日は、ご多忙の中、また遠路ご参集いただきまして誠にありがとうございます。

ご案内のように、県卓球協会は、本年、設立70周年を迎えることになりました。

私たち役員が、70周年の節目にあたり「記念誌」を編纂・刊行しようという提案があり、理事会等で幾度か検討を重ねた結果、「福島県卓球協会70年史編纂計画」の大綱を決め、宇賀神喜嗣先生を委員長とする「編纂委員会」を設置し、役割分担をして、その編纂に取り組んできたところであります。

その後、記念誌の発刊に加えて記念の事業として、記念式典、記念祝賀会、シンボルマークの公募・

作成と協会旗の作製、功労者表彰並びに感謝状贈呈等を行い、協会70年の歴史のあゆみを祝うことになりました。記念誌刊行の仕事は、今後とも編纂委員会委員の皆さんに大変お骨折りをいただくことになりますが、後世に残す福島県卓球協会70年のあゆみを立派にまとめていただきたいと思います。昭和4年12月1日に本協会が発足しましたが、設立にいたる経過、その後の当協会の変遷など、種々記憶が薄れかけていることを何とか掘り起こしていただき、参考資料の第1部福島県卓球協会誌・第1節「福島県卓球協会の設立と活動のあゆみ」をもとに、本協会が歩んできた足跡をたどりながら、伝え聞いてきたことや、思い出などを語り合っていただくために、本日の座談会を開催することになりました。

なにせ、古い時代のことでもあり、70年の歴史を刻んでいるのですから、当然私自身も知らない時代があり、どうしても本日お集まりの諸先輩にご登場願わなくてはなりません。

特に、本協会の歴史に最も詳しい宇賀神喜嗣、三浦勝美、佐藤昭典、土屋　弘、大橋　柾の各氏のお話を中心にお伺いしながら、その他皆さんからも貴重なお話をお願いいたしたいと思いますので、どうぞ忌憚のないご発言をいただきたいと存じます。

本日は、お忙しい中ご参集いただき誠にありがとうございました。（協会長／西郷徹夫）

進　行　ありがとうございました。それでは、本日の座長の宇賀神さんに司会をお願いします。

司　会　70周年誌、大変な事業だと思います。こういうことなら理事長時代に準備をしておけばよかったと思いますが、理事長が終われば次の人へ引き継いでしまい、忘れてしまったことも多くあるので、気が付いたことがあれば教えていただきたいと思います。

「福島県卓球協会の70年を語る」ということで、1、発足の頃　2、組織確立の時代　3、「第50回ふくしま国体」の順に、話をしていただきたいと思います。

まずはじめに、発足の頃、戦前ですね。このころは、昭和17年頃の私が20歳頃です。私が知っているのは田辺さん、平出さん、志賀さん、信沢さんあたりでしょうか。私が理事長時代に、民報・民友新聞で福島県の百科事典のようなものを出しまして、その時に卓球を頼まれたものですから、その時に調べたものを卓球協会誌として出したことがあるんです。戦前については、その資料を見ていただければと思います。もし、三浦先生が目黒先生のことなどわかりましたら出してください。

佐　藤　昭和12～3年頃から、各地区で地区選手権をしていた。私が初参加したのは昭和16年で、すでに50～60人の選手が集まってやっていた。その他に交流試合や練習試合のようなことをやっていた。戦前はそんな形でやっていたんですね。

司　会　小高の鈴木重郎治（3代会長）さんがいましたね。

佐　藤　重郎治さんは、戦前もやっていましたが兵隊にいってしまったから、復員後の昭和23年頃、また始めました。

司　会　戦争で卓球はできなかったんでしょう。禁止令が出たんでしょう。

佐　藤　いや、昭和18年、19年までやっていましたよ。その後、福島県卓球連盟が昭和21年か22年頃復活したんですよね。

会　長　それに関連しまして、卓球連盟が活動したのは、戦後22年からで、それ以前の活動は宇賀神先生の書かれた協会誌を見ますと、原町市の木幡美明氏所蔵の福島卓球会という機関誌があり、その中に昭和4年12月1日より、これを施行する。ということで、協会の会則が生まれたようです。70年の歴史があるということは、みんなびっくりするんですよ。このころははっきり資料が残っているので、設立されてから70年がたっているということを認められるわけですね。

司　会　それでは、戦後に入らせてもらいます。

松　崎　戦後の20年から40年まで、前半から年代を追って、進めていきましょう。

司　会　資料の朗読1……。

目黒さんを中心に再建され活動が始まった。昭和23年9月19日・20日の両日、福島市飯坂小学校で全国軟式卓球選手権大会が開催された。山下さん（ニッタクKK）に確認しましたので確かです。

三　浦　飯坂の小学校の講堂が会場だったんですよ。ところが台風で相当の選手がこれなくて、組合せをやり直して大会をやったんです。その記憶があるんです。昔は講堂に卓球台を集めてやったんです。

司　会　資料の朗読2……。
この大会は目黒さんの花道としてやったと聞いている。そして、24年に後藤さんが会長、菱沼さんが理事長でやったんではないかと記憶しています。

佐　藤　佐藤理三郎さんが事務局長をしていたんです。

三　浦　飯坂公民館が事務局になっていた。

司　会　実業団と職域対抗は？。

佐　藤　職域対抗は昭和25年から、実業団は28年からあった。これは全国大会まであった。

松　崎　実業団として、郡山では、専売、東北電力、貯金局、工機部の4つくらいが強かった。市役所、保土谷化学があった。

土　屋　職域対抗に出たチームが、実業団に参加していった。昭典さんが常磐炭坑で出てきた。会津からは、会津鉄道クラブ。

佐　藤　いわきには、日本水素（化成）、呉羽化学などがあった。福島には、東亜栄養、東北電力、福島県庁などがあったんです。その後、林精器が出てきたんです。

大　橋　高校の全国大会を22年にやっている。第2部として相馬中学校が参加している。23年に相馬高校が出てくる。24年に学校対抗。そして双葉高校がベスト8に入っている。全国大会が昭和22年にあったわけですが、どんな形で相馬中学校が参加していたんですか。

西　郷　相馬中学校を指導していたのは、森口正作先生でした。後に私が中村第一中学校で教えていただいた。戦後相馬中学校を全国レベルにまで指導した先生です。

土　屋　相馬は早くから、卓球が始まっていたということだね。会津は、23年に高校が卓球部を作り始まった。それ以前は愛好会なので大会には参加していない。

司　会　日誌を見ながら、書きあげたものを読み上げる。

西　郷　相馬市の卓球協会40年史の中に森口先生の功績について書いてある。
私は小高の半谷さんのところで卓球の指導を受けていた。半谷さんはとても優秀な方で東大を出ているんですよ。

司　会　戦後20年代はこれくらいにして、いいですか。

大　橋　福島県の大会は何時からやったのか。組織ができたころに大会をやったのではないか。

佐　藤　昭和21年に第一回は飯坂小学校で開催された。半谷さんが優勝した。

土　屋　試合が先にあり、その後、寄付を集めて昭和22年に福島県卓球連盟ができた。その後、昭和23年の8月に会津卓球連盟が作られた。

大　橋　高校大会は、協会のお世話で賞状をやったのではないでしょうかね。東北大会は25年からです。

司　会　昭和30年代では、私が高体連の委員長になった時です。

土　屋　マッカーサー杯という全国大会を会津に持ってきて、謹教小学校で開催した。29年のロンドンの世界選手権大会でアベック優勝したよね、あの勢いできたわけだ。その時、荻村、大川、唐橋などがきた。全国大会の俗にいうマッカーサー杯、中田さんが藤井に勝って優勝した。ラワン材の卓球台なので荻村さんがやらないといい、平出さんがしきりに、監督の八尾板さんになんでできないのだといい、無理やり了解させて試合をさせた。これは昭和30年代です。
この29年の世界選手権大会でアベック優勝したことで、軟式から硬式に変わってきた。

壁　谷　硬式になってから、国際式サイズになったのか。軟式の卓球台は細長い卓球台だった。中体連では、大工さんに頼んで、卓球台にくっつけて国際式のサイズにして試合をやっていた。

土　屋　高校は23年から、硬式台を使っていた。一般人はまだ軟式をやっていた。

大　橋　28年に高校大会の名称が変わって、全国高等学校卓球選手権大会となり、学校対抗と個人戦が行われた。まだ、ダブルスはなかった。

松　崎　中体連は、郡山大会しかなかった。私が責任者をしていたが、高久田大一郎さんが須賀川一中の体育館で主催して、県の選抜大会を行った。その当時は3年連続優勝するとカップをくれるということで、私は男子を郡山五中で指導し、女子は壁谷先生が瀬川中学校で指導してカップをもらってきてしまった。それが29年から始まり、県大会は35年から会場が郡山一中で2年連続行った。

司　会　高久田大一郎さんがこういう大会をやってくれたことは、偉いことでしたね。

松　崎　おかげで、郡山大会しかなかったのが、他の地区の人達と試合ができたわけです。それがきっかけで県南にまで広がっていった。30年にブロック大会が行われた。33年に郡山一中で行われた。

壁　谷　松崎先生が33年と34年の中体連の専門委員長で、その後、35年から私が引き継いだ。全国中学校卓球20周年誌にまとめているので見ていただきたい。

司　会　30年代まではこの程度でいいでしょうか。

西　郷　次は高体連の活躍になってくるのでしょうか。

司　会　大橋先生の文書から、高体連の各地区の委員長が卓球連盟に理事として入った。

大　橋　34,5年頃ですかね。各地区2名の理事だったのが、高体連の各地区委員長が入って3名になった。

司　会　高体連の委員長になった時理事になった。中体連の人がいつから理事になったのか。また、高体連が先か実業団が先か知りたいですね。日記には、実業団卓球連盟の設立案があるのだが、いつ設立されたのかがわからない。

土　屋　実業団の中から、地区の代表として理事の中に入っている人がいた。

西　郷　私の記憶では、連盟から協会へ56年に変更した。会則の原案をつくり、変更したことを記憶している。その時に、実業団卓球連盟を位置づけたと思う。
教職員卓球連盟は、深谷先生が作られた。ベテラン会は、加盟していないが、登録団体である。

大　橋　ベテラン会は登録していないが加盟団体で、佐藤さんがだれかいないかということで、信沢さんを会長にお願いした。

土　屋　私は、信沢さんが62年に初代会長になってから入った。

西　郷　宇賀神さんが理事長をしていた苦労についてお話していただきたい。

司　会　6年をやったら高体連をやめようと思ったが10年やってしまった。卓球を知らないのは私だけだった。でも、合議によって少なくても組合せが明るくなったことは確かです。その後、理事長をやるように頼まれたが、財源の確保が大変だった。

土　屋　松崎先生が財源確保に尽力してくれた。

司　会　高体連は、各地区から500円をもらって3,000円で運営をしたのがスタートです。

松　崎　48年に宇賀神さんと郡山西工業高校と郡山女子高校の入れ替えになったのがきっかけで、近所に住んでいた宇賀神さんをお手伝いしよう。財源確保と会計をしっかりしなければならなかったので、菅野源吉さんにお願いした。菅野源吉さんの功績は大きかった。彼は参加の申し込と一緒に参加料を取っていた。彼にまかしておけば間違いなかった。

司　会　すべてが三浦先生のバックアップがあったからだと思うし、みんな応援してくれたからできた。中体連の壁谷先生の教えた選手が、シードを破った。壁谷先生は女子の指導はうまかった。新妻光雄先生は卓球を知らなかったが、素晴らしい指導者だと思う。

西　郷　新妻先生のことは、相馬高校100年史に出ているんです。タバコはひかりを吸っていたので、あだ名は「ピカリ」だった。選手たちにはちまきをさせて気合い入れて練習していたと当時

の選手が語っているのですよ。

松　崎　磐女の安田和三先生、この先生も卓球は知らなかったが、指導者としては素晴らしかった。

三　浦　安達にいたとき、安田先生のことを思い出すが、大した指導者でした。

西　郷　栃木県真岡女子高校の大島先生と同じタイプですね。

司　会　昭和31年に郡女の顧問として、役員をした。その頃は、郡女の先生が役員をすることになっていた。その前は、三浦先生がやっていたが、笹山さんの段取りでそのようになっていた。仙台の庄司先生に目をつけられて、それから全国高体連卓球専門部の幹事になった。

松　崎　宇賀神さんは、卓球を知らなかったから、よかったんじゃないか。

司　会　福島、東北は、ニッタクしか使わなかった。

土　屋　関西は、TSPを使っていたので、全国大会にいくと、TSPを使っているので、じゃんけんに負けるとニッタクのボールじゃなくなってしまう。

司　会　40年代はこれくらいにします。最後に、国体のほうに入ります。

西　郷　全国社会人卓球選手権大会は、54年に行われた。

松　崎　東北一の郡山総合体育館が48年にできた。ちょうど、オイルショックのときで、今でも多くの体育館が郡山にはあり、県の中心として貢献した。

土　屋　野村さんがきたときですね。

西　郷　大きな体育館ができたので、全国大会や国体の準備ができた。国体ではいろいろなこともあったが、古きをたずねてあたらしきを知るというので、教訓としていろいろ記録にとどめておきたい。

司　会　詳しくは、平石さんや深谷さんに国体のことはまとめていただこうと思うが、将来のために、これはということをのせていただきたい。

西　郷　国体運営では須賀川の苦労が多かったと思うが、いかがですか。

伊　東　国体のまえから須賀川で、理事長が平石さん、会計が渡部さん、事務局長が私と福島県卓球協会の役員を15年間もやった。本当は5年でやめるはずが、10年も多くやることになった。会場のことでは、大変もめました。二本松、原町も立候補した。圧倒的多数ではなく、接戦で最終的に、須賀川に決まったのは、平石さんの力が大きかった。地元の卓球協会、白河や石川とも協力できた。特に、白河の堀田さんの力が大きかった。特に、審判などで白河の卓球協会の役員の方にはお世話になりました。事務局としては、深谷先生に半分手伝ってもらった。

松　崎　関連して、国体の開催地での問題点についてもふれておきましょう。

伊　東　熱心に誘致しようという意味で話しましょう。

土　屋　県の各理事が原町と須賀川に投票した。21対21の接戦であった。総合的なことから、須賀川に決まったが、須賀川一中でできるのかという問題があがった。会場については、新しく国体のための体育館をつくることを考えているが、今のところ発表できないと平石君が言った。平石君は高木市長に相談し、交通の便や選手収容能力などの諸条件から、日本体育協会に須賀川一中ではできないことを宣言してもらい、今の須賀川アリーナを建設する運びになった。

西　郷　会場を決める時には、私が県の担当者でいたのですが、原則として、住民の意向、宿泊施設などの他、現有の施設を活用するなどの規程があった。その点では、原町が県営体育館があるので有利であった。しかし、須賀川の高木市長の政治的手腕が大きかった。施設がなくても、作って開催するつもりだったようですね。

土　屋　スタッフの数や大会運営の点や新幹線などの便から、原町よりも須賀川の方が有利であった。

三　浦　二本松も立候補したが2位だった。私の知っている限りでは、須賀川一中では引き出し式の観客席や会場の広さの問題があったが、会場を後からつくるという約束がされていたようだ。当時の市長としては、卓球会場よりも飛行場をつくらなければならないという予算的な問題もあったわけです。卓球の国体会場を作るということはその次だったんですね。また、役員か

らも辞職願が出されていたが、国体までは頑張ろうということで辞職願をあずかっていたんです。

土　屋　須賀川の選手である横山選手と小塩選手を出場させることは、平成2年から決まっていたことだが、平成5年頃から、雲行きが怪しくなってきた。須賀川の地元の選手が出場するということで須賀川の開催にも拍車がかかってきたわけだが、地元選手以外の輸入選手を出そうという雰囲気が見られて、須賀川の体制が変わりそうになった。歴史の中での須賀川は喜びと悲しみを一緒に持っているといってもいいと思う。横山選手が参加できなかったことが残念だった。

佐　藤　東北のミニ国体では、横山選手を中心にしたが、本番では出場できず残念だった。一部の人だけがわかっている輸入選手を使わなければならなかったのは自分としても本当につらかった。

土　屋　佐藤さんは、東北大会の監督として大変な役目を背負わされたわけだ。それもこれも平石理事長の責任も大変なものだった。

伊　東　須賀川の今泉一二さんが、消防から国体課へ移り、よくやってくれて成功を収めることができた。人事面での成功の一つだと思う。選手育成では、県独自の選抜強化リーグ大会や小中学生学年別大会が大きかった。

土　屋　大会にあたっては、各地区の役員も金銭面での協力をし、スムーズに大会が運営できたと思う。

西　郷　須賀川の大会運営も立派だったが、それ以上に選手の皆さんが活躍してくれて素晴らしい成績を収めることができた。

土　屋　卓球会場への天皇陛下のご行幸があったことは、素晴らしいことだった。どうして天皇陛下が卓球会場にお見えになったのですか。

西　郷　荻村さんが天皇陛下に卓球をお教えしたこともあり、天皇陛下はかなり卓球に関心を持っておられたようですね。高速道路のインターチェンジにも近いし、須賀川アリーナは警備上でもしやすかったのではないでしょうかね。

伊　東　平石さんがそのところは一番知っている。警備では近くの釈迦堂川までがきれいになるくらいだった。それ以外にも、地元としての苦労と喜びは、平石さんがまとめてくれることになっている。総合的に須賀川でやってよかったということをみんながいってくれたので、結果としてよかったと思う。

土　屋　裏話は歴史にならないが、本当は歴史なんだよね、一番苦労したのは、平石さんだと思う。

大　橋　低年齢からの指導では、三浦先生をはじめとする指導が大きかった。

司　会　いわきの井戸川さんや橋本さん、原町の斉藤さん、郡山の深谷さんなどの指導者が頑張ってくれた。これから、どのように指導者を育成するかが課題だと思います。個人の情熱でやっているんです。

西　郷　地域社会でのスポーツクラブでの指導者と学校体育の指導者をどのように繋げていくかが大きな課題だと思う。

佐　藤　優秀な指導者を県として、表彰などして認め、後継者をつくっていかなければならないと思う。

司　会　今日は皆さんの貴重なご意見などをお話いただきありがとうございました。

第二部　「福島県卓球協会の今後を語る」

○と　き　平成11年6月5日（土）13：30～
○ところ　福島市「福島体育館」
☆　☆　新しき時代への架け橋（平成8年～　　）

出席者

司会：三　浦　勝　美　　進行：伊　東　守　信
記録：菊　地　敏　美

大　橋　　柾　　深　谷　秀　三　　伊　藤　秀　行　　甚　野　道　雄
渡　部　長　二　　斉藤一美（柴田広道）　影　山　　澄　　西　郷　徹　夫

会長あいさつ

一言ごあいさつ申し上げます。

本日は、お忙しい中、ご参集いただきまして誠にありがとうございます。

前回は「福島県卓球協会70年の歩みを語る」と題し、当協会の草創期から組織確立の時代、そして平成7年に本県で開催された第50回「ふくしま国体」までの三つの時期に分けて語り合っていただきました。

ご案内のように、今日は前回に引き続いて第2回の座談会を開催する運びとなりました。

テーマは「福島県卓球協会の今後を語る」として、第50回「ふくしま国体」開催後の平成8年から現在、そして21世紀への展望を「新しき時代への架け橋」と題して語り合っていただくことになりました。

前回の座談会の反省から、今回このテーマについては、組織運営に関すること・各種大会運営に関すること・卓球競技の普及、選手の育成強化に関すること・指導者の資質向上に関すること、その他を含めて5項目について語り合い、現在及び来るべき世紀に向けて、その課題と展望についておまとめいただければ幸いです。

なお、本日の座談会構成メンバーについては、第4回編纂委員会で原案をまとめ、第1回「記念事業実行委員会」で決めさせていただきました。

本日は、お忙しい中出席下さいましてありがとうございました。限られた時間ではありますが、どうか忌憚のないご意見や提言をお願い申し上げましてあいさつといたします。

司　会　ご指名でございますので、司会をつとめさせていただきます。前回の反省で雑談にならないように、議題について個別に発言・要望を出していただきますようご協力お願いします。
ご案内の内容について順を追って進めていきたいと思います。なお、時間は3時30分までになっておりますが、始まりが多少遅れましたので、伸びることお許し願います。
それでは、はじめに組織運営についてお願いしたいと思います。なお、「福島県卓球協会活動のあゆみ」の中に項目・内容・課題等が載っておりますので参考にしていただきたいと思います。

〈西郷会長〉

西　郷　国体終了後には大幅に役員組織が改変されまして、新しい体制で協会の運営にあたることになりました。そのとき卓球協会として一番の課題は何かといいますと、やはり国体の開催を

契機に全国レベルに達している本県の競技力を、いかに維持向上していくかということであります。もう一つは、国体開催を契機に県民のスポーツに対する関心が非常に高まってきており、それは競技スポーツ志向としてよりもむしろ生きがいや健康を求めて卓球をエンジョイするという動きがかなり出てきています。このような現状を踏まえ、競技力の向上を図りつつ、普及にも力を入れていくための組織運営・充実はどうあればよいかということが、第一項目提案の理由です。

司　会　ただいまは、問題提起という形でお話していただきましたが、どうぞご自由にお発言いただければと思います。例えば、理事が協会組織の中で一人一役を担当していただいていることもあるかと思います。

渡　部　まず、高体連としては、今まで順調にきていると思ってます。大会運営もきちんとできているし特に問題はないが、ただ、組織を構成する者の年齢が高くなってきており、次の世代にどう引き継いでいったらよいかが心配です。30代後半～40代前半がいないのが大きなネックですね。

その下の20代はいるんですけどね。運営も強化も育成も、すべてその人たちに任せていくことになりますからね。組織自体はいいんですけれど、人材不足が大きな問題です。

〈渡部高体連委員長〉

司　会　このことは、協会も中体連も同じようなことが言えると思います。実際運営を切り盛りしているのは限られた人たちで、なかなか大変なようです。それと関連して緊急の問題は、事務局の問題だと思います。現在理事長さんが事務局長を兼任しておられることが、協会としての組織運営に関しての問題であり課題でもあると思います。

それについてでも何かありましたらお願いします。

深　谷　今、中体連・高体連、そして一部の人たちという話が出ましたが、だいたい全国的にみても、ボランティア活動でたくさんのところでやっているところはほとんどないですね。どうしもやれるところに頼ってしまうのは、仕方がないということです。ただ、組織の中で、理事長会という組織をつくったので、かなり地区と県の事務局とのつながりができてきていると思います。そのお陰でトラブルが少なくなったということがあげられます。こまめにコミュニケーションを図っているということが成果をあげていると思います。

もう一つは、普及ということがありますが、どの協会も強化をどうするかということに頭を痛めていると思います。その点で、強化委員会が発足し、10ケ年計画等を作成したりして新たに動き出してきていることは、いろいろな問題があるにしても高体連と同様に協会もよい方向に進んでいるのではないかと思います。

ただ、三浦先生からもあったように、事務局の問題は大変ですね。理事長と事務局長がいっしょに兼務することは土台無理な話で、理事長サイドの事務局がやらなければならないことは、対日本卓球協会、対福島県体育協会であり、そして各地区、高体連、中体連との連絡・調整であると思います。文書を収受・発送して、そして大会の申し込みまでしなければならないことは、非常に大変ですね。結局大会運営はスムーズにいくけれど、全国大会の申し込み等が地区の理事長にまかされてしまうと、詳しい事情がわからないまま申し込み関係の事務をやるのでかなり大変です。だから県の事務局にはもっと人材がいないとだめだと思います。

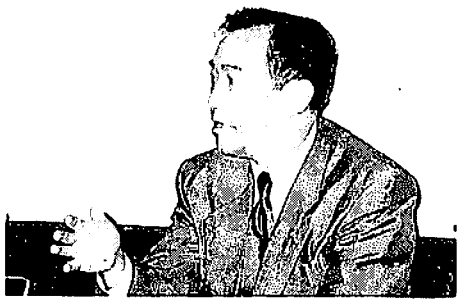
また、後継者の問題はすべてに関連しますが、ひとつの原因として考えられるのは、卓球を専門としている体育の先生が少なすぎるということです。例えば文部省で卓球の指導者講習会をやるときに、講師に該当する体育の先生がいないというのが実状です。後継者を育てる

ということは、また違った意味での大切なことだと思います。

司　会　何かそのほかありませんか。

大　橋　今はほんとうに事務局と理事長さんが兼ねておられ大変でしょう。各地区にもすばらしい役員の方がおりますから、ある程度はお任せをするという発想も大切であると思います。大会申し込みなどは、出すばかりにして事務局に届けてもらってはどうでしょう。それはできると思いますし、そうすれば理事長さんの仕事も幾分楽になるのではと思います。

深　谷　それは言われればできる人たちがいると思いますけど、申し込み等は、外部に提出したときに何か欠けているとやり直しということがあるんですね。だから、大会には県の事務局から誰か来ていて采配をする人がいさえすればいいのではないかと思います。それがないと、全部頼まれても頭の中に全国大会の要項がきちんと入ってないといけなくなります。例えば、ラケットの種類とか生年月日等が抜けていると、また電話等でやり直しになってしまいます。だから、大会には要項を熟知している事務局員一人が来てもらえれば事務は簡素化できると思います。



〈大橋顧問〉

渡　部　去年会津で全日本予選をやった時に、参加資格をとった人が資格と段位の問題で参加料納入についての疑問が出てしまいました。大会毎にいろいろと決まりがあるために、困ってしまいますね。

深　谷　それぞれの全国大会の要項をしっかり読んでいないと細かい点の問題は解決できないのです。昨年もいわきで申し込み用紙を作成しましたが、結局不備があり参加者全員に一人一人電話で確認をとりました。

事前に全国大会の要項と申し込み用紙をセットで各地区に配布できればよいのですが。

西　郷　後継者問題と理事長と事務局の役割分担問題が組織運営事項の中で大きな問題です。そこで、私は規約にもありますように、専門委員会をどのように機能させていくかということがポイントになると思います。例えば実業団の大会は、競技委員会の誰が窓口になって全国大会の申し込みをするのかとか、競技委員会と事務局の横の連携もあるかもしれませんが、専門委員会の機能をうまく活用できないかと考えております。

深　谷　それは難しいと思います。今までそれができないからこういうふうに来ています。なぜかというと、地区の理事長はそれぞれの地区の組織や大会運営方法をもっています。県の事務局にいわれたことはできるにしても、県全体を見渡しながら事務を執行することは、なかなか難しいと思います。

伊　藤　日本卓球協会の窓口が県卓球協会になるものですから、だから地区の方が分からないことを日本卓球協会に電話しても話しが通じないと思います。

〈伊藤理事長〉

深　谷　だから理事長一人では大変だということです。各地区の理事長さんが、地区の仕事と県の仕事をいっしょにやっていくのはたいへんでしょう。

西　郷　先ほど深谷先生から理事長会ができて、報告・連絡・相談がスムーズにできるになったというお話がありました。事務処理をする上でとても大切なことだと思います。ところで、専門委員会の中に総務委員会があります。主として事務を担当しておりますが、その中に理事長

を補佐する係りを設けて、理事長の指示のもとに事務処理をしていくというのはどうでしょうか。

深　谷　それはできるでしょう。ただし、あくまでも地区の理事をはずしてやらないといけないと思います。県北で理事長がいるので、県北から総務委員とは別に何人か選んでやればできると思います。

西　郷　そういうような事務局をつくっていくことが緊急の課題ですね。

深　谷　そのとおりです。全国予選を伴う大会では、最終的に誰が責任者かというとみんな逃げてしまう傾向があります。地区の理事長も詳細がわからないので私はここまでとなってしまうことが多いですね。だから、事務局か総務委員の責任者が来て最終確認をしていただくといいですね。いま地区の運営はりっぱですよ。この前の学年別大会でも、860名参加して9時から17時までで終わらせてしまうんですから。

西　郷　トロイカ方式で、大会毎に責任者を決めて理事長が采配を振るえば、後継者も育っていくだろうと思います。また、理事長の負担も軽減していけると同時に人材の活用にもつながってきます。

司　会　これは、一つの提言としてまとめさせていただきます。

大　橋　現在の理事長さんの近くで副理事長さんをつけてはどうでしょうか。

深　谷　それが事務局長ですね。

司　会　まず、事務局をつくることが重要です。

深　谷　先日東北理事長会議に出席させていただきましたが、全国の事務局からすごい情報がたくさん来ていました。それを理事長さん一人で処理するのは至難の業ですね。例えば、今度の世界選手権に東北から一人半額で参加させてもいいというようなこともありました。今回は理事長さんが行けなかったので会長と副会長が行きましたが、やっぱり他は理事長や事務局長が来ているわけですから異端児的な扱いでしたね。理事長の代理は会長や副会長ではなく、事務局長がやるべきでしょう。
事務局長がいて事務員がいることであればよいのですが。

柴　田　まずは事務局長を確保することが、重要ですね。

深　谷　事務局長は渉外等もあるから大変ですよ。ワープロなどは、事務局員に任せればいいんですから。

〈柴田強化副部長〉

渡　部　理事長や事務局長が大変なのは、質問にその場で決断しなければならないことです。そういう意味で理事長と事務局長は、大変なんです

深　谷　この前の学年別にも会長さんの代わりに行きましたが、地区の事務からこのお金はどうしたらいいかと聞かれても、どうしようもないですね。だから県の事務局から誰か行ってほしいのです。会場で決断を下してくれる人が必要ですね。

大　橋　各地区では、それぞれ大会について詳しい情報を入手していないですね。前もって情報を県から各理事長に知らせておけば、よいと思いますが。

深　谷　結局は、それらは理事長会のさらなる活性化でしょう。

渡　部　それぞれの大会の要項と申し込み用紙をすべて各地区に流すことが求められています。

柴　田　それは、県北の甚野理事長にお願いしたい。私たちの立場だといろいろな問い合わせが来ますから、そういう時に正確な情報を提示することができると思います。

甚　野　できれば、マスターズや社会人のときに段位を書く欄を設けてほしいと思います。

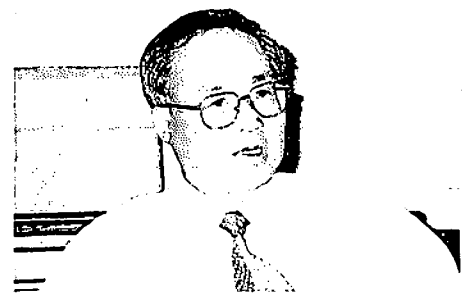
伊　藤　私の方から合理化についてお話しますと、初年度年間の行事が決まると、申し込みの日程も

分かります。各地区ではそれらを参考にし、昨年度の要項を参照にすれば県の事務局より今年度の大会要項が届く前に動けるんではないでしょうか。

司　会　この後いろいろな項目も控えておりますので、組織運営についてはこの辺で打ち切りにさせていただきます。でてきた課題等については、理事長会で検討をお願いしたいと思います。次に各種大会の円滑な運営についてお願いします。

西　郷　各地区で開催されます各種大会の開催基準、役員の編成基準これを明確にしてプログラムをつくっていったらどうかということです。競技委員会等で検討しておけば、誰が担当してもしっかりできるのではないかと思います。また、開会式や閉会式の次第と通告内容・式全体の内容についてもう一度洗い直してみる必要があると思います。例えば、開会式の中で会場使用上の注意を重複して延々とやっている場合があります。そうすると開会式がしらけたものになってしまいます。感動している場面が色あせてしまいます。また、通告で開会の言葉をやるのか、副会長等が正式に登壇してやるのか、いろいろな大会に行くたびに疑問に思っております。

伊　東　中体連、高体連ともにモデルになるものをつくってそれを雛形にしてやっていって、事前に処理できるものはやっていくことが大切だろうと思います。確かに説明でくどくどしいのは私も感じておりました。


〈深谷副会長〉

西　郷　それともう一つは組み合わせですよ。適正な組み合わせが行われているかどうかです。どの大会も不満が聞こえてくるんですよね。

柴　田　卓球協会主催大会は、強化・普及委員会でやることになりました。高体連は高体連、中体連は中体連でやります。

深　谷　今まで、地区でやってしまっていたことがあったので、これからは強化・普及委員会でやるようになったので不満は少なくなるでしょう。

西　郷　強化・普及委員会でやるにしても、競技委員会があるので、整合性をもたせながらやっていけるといいと思います。委員会の機能を生かすようにしていけると人材の育成にもつながっていくと思います。

司　会　特に小中学生の大会には、組み合わせの基準をはっきりさせることが必要だと思います。それと選手を考えた組み合わせをしてほしいとも思います。

大　橋　組み合わせの基本マニュアルをつくっておくことは必要ですね。

深　谷　シードは強化・普及委員会がつくって、後は開催地区に任せるという方法もあります。ただ、二重の手間がかかるので大変は大変ですね。

甚　野　全軟のときも申し込みが遅れてきて、たいへんでしたからなかなか容易でないですね。

深　谷　大会が毎週ですから、マニュアルだけでも作成すればいいのではないでしょうか。

柴　田　明日、強化・普及委員会があるので、その時に検討したいと思います。

司　会　これまでは各種大会の運営でしたが、選手育成の項目に話し合いの時間をかけるべきだろうと思います。そこで、私なりに参考資料を持ってまいりました。国体の時の資料と平成9・10年度のバンビからジュニアまでの組み合わせからひろってみました。3・4回戦以上は名前も書いておきました。今までは、ふくしま国体で強化された選手が中心となってやってきました。現在の一般の選手も、国体時高校生で強化を受け大学で活躍しておりますが、大学を卒業すると国体前の福島県のレベルになってしまうのではないかという不安もあります。この資料については、今後の強化に役立ててほしいと思っています。

西　郷　先ほど資料を見せてもらいましたが、これを作成するのには、莫大な時間がかかっただろう

と思います。選手育成強化5ケ年計画の骨組みだけ作成しましたが、課題の2番目に戦力分析による課題の明確化というのをあげました。その中には、各都道府県の戦力分析、それに基づく強化計画の作成というような課題を載せておきました。このすばらしい分析があれば、何年後かに強化が花ひらき、どのような強化策が必要かが分かります。

司　会　平成2年から作成して、インターハイや全日本の結果をもとに、加除修正してきました。その一部の資料です。

大　橋　国体の前は、全国でもトップレベルでしたが、現在の状況はそれと比較してレベルが落ちているということですか。

司　会　この表を見てもらえれば明らかですが、落ちております。小学校より強化してきた渡辺、藤田、高橋等の選手が大きくなっていなくなってきましたから、戦力の低下は、はっきりしてます。成年女子は、今年1年でしょう。成年男子は今年大学に入ったのがおりますから、その選手が軸となるでしょう。よその県の状況も分かると思います。宮城県などはゼロですから、国体はよそから集めることになるでしょうね。

西　郷　それはさみしいですね。

司　会　お金がないと選手が集まらないというのが実状です。

大　橋　国体前の指導者の方が、継続して指導しておられると思いますが。原因は何ですかね。

司　会　国体という勝つための目標がありましたから、選手も事務局も無理してこれたと思いますけど。国体時と比べて、情熱が薄くなってきていることは確かですね。これはしかたないことですけれど。

西　郷　選手の指導者の温度差があるということですね。

渡　部　この頃、高校はますます金の力で選手を集めるところが多くなってきたように感じます。もう絶対公立は勝てない。インターハイの開催方法を変えたいというのも出ております。

西　郷　卓球に限らず、野球だって、バレーだってそうですね。スポーツ全体がそうなってきたようです。

深　谷　能代工業も、古川商業も、熊谷商業も地元の県の選手は一人もいません。

柴　田　これからの方策ということですが、最近中学校である程度成績をおさめた子が、他県へ行ってしまうことが話題になりました。そういう子を県内に残すのが大きな課題だと思います。国体の時はそういうことがなかったですよね。近年またそういう選手が出てきていますので、強化担当をはじめ、みんなが取り組まなければいけない問題だと思います。

西　郷　なかなか目標の実現は遠いですが、福島県の強化の方向はどうあればよいかというような目指すところがあるといいんだけれどね。

渡　部　小学校・中学校であれだけの成績をおさめて、高校で伸びないということがあります。受け入れる側にも問題があると思いますが、高校全体の考え方が、部活はほどほどに、大学受験の勉強をしなさいという傾向が強いように感じます。練習時間もなかなか確保できないのが現状です。それぞれがんばっていると思いますが、国体時のようにはいかないですね。

司　会　小・中・高校のつながりのある指導体制が必要です。ただ、県外に出る選手は、福島県では芽が出ないということも考えられると思います。また、向こうもそれだけのものを提示してきますから。本人の親もその気になってしまいます。

西　郷　学校体育では、優秀な選手を育てきれないところに来ているんだと思います。やっぱり今後は、スポーツクラブにも力を入れた強化をやっていかなければならないところにきているだろうと思います。国体を契機にクラブができ、それらが競技力の向上の支えになっています。スポーツクラブなら、三浦先生からお話があった小・中・高校一貫した指導ができるのではないかと思います。

伊　藤　今のお話で、地域的なことがあるように思います。安達地区には、三浦卓球クラブ、二本松卓研などがありますが、安達高校には桑原先生がいなくなってしまった。やはり県の協力が

ないといけないと思います。小・中と指導して高校でだめになってしまう。いい選手を育てる環境があるのに、卓球を本格的にやれる指導者がいない。そういうことでなかなか芽がでないということもあります。

渡　部　人事が関係しますね。前は10年だったのが、今度は8年に異動の対象が早まりました。

深　谷　国体というものは、地方では強くするために非常に大切であるということです。弊害もいろいろありますが、最後の平成7年度には強化費として2,000万円きました。それでも足りなくて強化費の前借りやユニホーム販売で補充したんですね。選手に対しても遠征にたくさん出せたりといういろいろな恩恵を与えることができました。今福島県の卓球協会の強化費は150万です。残りは県の体育協会の配分でやっているのですから、国体の時と同じ強化は、土台無理な話だと思います。金銭的にも2,000万のお金で強化できるということはすばらしいことです。

昨年度の補助金は800万だったそうですが、それでも補助金がでていること自体うれしいことです。国体の前の状態に戻っただけです。

たとえば、その中でも小・中・高の練習会を年6回やっているとか、学年別大会をやっているとかということは、他県では羨ましがられているようです。学年別の地区予選が5000人ですから、250万のお金がそれぞれの地区に入ることになります。県大会でも860人ですから86万の参加料になります。強化・普及委員会という組織があっても、お金がなければそれなりの強化しかできないんですね。そんな中で、今年は中国に遠征したり、明治大学を呼んでいっしょに強化合宿をやったりと、少ないお金でよく努力していると思います。今後は小・中学生の大会から予算を見い出していくことが必要になってくるだろうと思います。県大会に出場できる体験の見返りに、強化費を補助してもらうことも必要でしょう。

また、子どもの情報網はすごく早いですね。青森山田が去年から負けなしでやっているというと、現在の中学2年生の全国ベスト4はすべて青森山田に入りますからね。小学5年生でも、数人は行きたいと言ってますからね。強いところに行きたいというのはしょうがないことなんですけど。

とにかく、強化費が入るような大会の開催などいろいろな工夫が必要でしょう。

学校の部活については、文部省は学校からはずしたいと思っているようです。地域の複合型スポーツクラブでさせるということですけれど、ハードもソフトもないのにやろうというのは大変ですね。

西　郷　地域スポーツクラブの話が出ましたが、これからのスポーツは、競技スポーツからスポーツそのものを楽しんでいこうとするものになっていくんだろうと思います。その中で競技力の向上はなかなか難しい問題です。時代の流れに世相に逆行することになりますからね。

深　谷　ここで提案なんですけど。いろいろな体育館がたくさんできましたが、卓球専用で使えるところは少ないですね。小学校に卓球台を置いて活用してもらってはどうでしょう。小学校の体育館の使用は、剣道とバレーボールがほとんどです。卓球もハード面さえ整えば、できると思います。地道な活動をやっていけばきっと芽ばえると思います。協会として提言をしていただいて、卓球台の配置を要望してほしいんですが。

西　郷　日本の体育施設は、世界一なんです。ただ、学校体育は学校、地域は地域と分かれているのが残念なところです。昔は分けて考えることが多かったんですが、今は、学校を積極的に開放していますからできないことはないですね。

深　谷　いっぺんにはできないので、二本松地区とか原町地区とか限定して進めていけばいいと思います。

司　会　山形の河北地区がなぜ強いかというと、スポーツ少年団がたくさんあって、それぞれが競い合っている状態です。長井もそうですが、学校にも卓球台があり、市をあげて取り組んでいるように思います。強化費も数千万円かけていると思いますが、時間もかけていると思いま

す。

深　谷　河北の話を追加すれば、河北地区には4つの少年団が今あります。中学校は一つですから、すべて集まります。だから各スポ少のエースを強化すればチームができてしまうわけです。練習場も武道館の上に、常時15台を確保しております。河北中学校自体が山形県でスポーツ学校といわれているんだそうですけども。小学校区に1つの卓球のスポ少があるのは驚きです。

西　郷　強化というのは、短時間に育てることは無理なのだから、協会として長い目でみてどのように育てたらいいかということ、今育っている選手を財源の確保をしながら強化していくという2つの面から考えなければならないということですね。

大　橋　実際に指導している方の意見を聞いて、協会としてバックアップしていくことが必要だと思います。

司　会　今日ここでやっている県高校大会でもベスト8に入るには、クラブの選手だろうと思います。ただ、二本松地区は、月曜日が学校の部活動ができない日です。

大　橋　いわきも同じですよ。それに第2・4週の土曜日も練習ができないですよ。

司　会　私は、中・高校生にはいつでもきなさいといっているんです。私は夜しか使っていないんで、日中はママさんが健康のためにやってますよ。

大　橋　いわきでは曜日ごとに場所を決めてやっていますよ。

渡　部　今学校ではできないので、そういう形でやっていくしかないんでしょうね。斎藤さんとこは？

斎　藤　いえ、やってないです。

渡　部　さっき深谷先生がいったとおり、喜多方地区は小学校を使っていましたね。

柴　田　毎週水曜日に第三小学校で地区の体協というのがあってやっています。大人も子どももいっしょにやっています。

西　郷　それは、指導者がきちんとやっているからいいんですよ。責任をもってやるという人がいないとだめですね。

斎　藤　指導者よりも子どもがいないですね。場所がいくらあっても、子どもがいないのが一番の問題です。

伊　藤　安達の高橋家のように3人娘が次々にでてくるようだったらいいんですけれど。

伊　東　スポーツに対する熱意がなくなってきているように感じますね。

大　橋　中学校の生徒は多いんですけど、それらはすべて卓球をやりたくてやっているんではなく、何か部に所属するために、卓球でもやるかということなのでしょうね。

司　会　カッデットの大会で、予選に勝ち残れなかった選手だけでまた大会をやってやると、喜んで参加しますね。商品もいいのをくれると参加しますよ。

甚　野　県北では、県大会に参加しない生徒を対象に大会を開きます。みんな喜んで参加します。

西　郷　そういう企画は大切ですね。

柴　田　そうしていかないと、少子化の時代に卓球に引きつけられないでしょう。県大会に強いのが行ってるからといって、やりたくないという子がどっと来て、本予選の人数より多くなってしまうこともあるんじゃないかと思います。卓球協会としてもそのような大会も必要でしょう。

司　会　各地区でやっていただけると、喜んで参加すると思います。全日本でやっているスーパーシードのようなことも検討していただければと思います。
1回戦でやって、1・2本で負けてしまうのはやる気を阻害します。

甚　野　せめて、勝つ感じを自分でつかむようになればいいんですけど。

司　会　今年の全日本予選で検討してもらえるといいですね。

渡　部　高校生の登録人数は去年男子1,100人、女子573人、今年は男子1,057人、女子515人なんですよ。女子が60人減なんです。毎年40～50人ずつ女子は減っています。これは、全国的にみてもそうなんです。だから、現在インターハイ女子は個人5、ダブルス3ですけど、来年

は少なくなるかもしれませんね。男子は、シングルス5になる可能性があります。魅力は、出れる数にも関係するでしょう。

司　会　県北でも、女子高でチームにならない学校もあったんですよ。

伊　藤　保原高校などは、やめた者を連れてきて出場していたという時があったそうですよ。

渡　部　小学校・中学校などではやっていても、高校になったとたんやめてしまうことが多いんですよ。郡大会でいい成績おさめたのが入ってこないんです。反対に初心者が入ってくることがあるんです。同好会的だと入るんでしょうけど。

西　郷　卓球協会としては、長い目で強化をやっていかなければならないということがありますね。そのような問題にどう取り組むかということについては、2軍選手の大会をもつのは必要なんだけれど、小学校入学前の子を引きつける方法も考えていかなければなりません。そのために、ママさんの大会を親子で参加できるような大会にするとかの工夫が必要です。

司　会　強化ということと普及ということを両輪にしていくことが必要です。目の前の強化と中期的な強化・長期的な強化でいかないと途切れてしまいますね。

影　山　家庭婦人の方も若い方の参加が少なくなってきていて困ってます。今後維持していけるんだろうかということがあります。今年「すみれ」に若い方が入りましたけど、郡山は根本さん以降入りませんね。だからいつまでも30代に出るしかないんです。

〈影山家婦連理事長〉

司　会　今は、バレーが盛んですね。娘が卓球にきていても自分のことだけでかまいませんね。

西　郷　父がゴルフ、母がバレー、子どもが卓球なんてというのがありますね。これからは、各支部で普及のための行事をもってもらうのがいいですね。

伊　藤　いろいろなスポーツが盛んになり、なかなか体育館がとれないということがあります。

柴　田　近い将来日本で賞金付き大会を開催したいということが出てきているようです。それは全国理事長会等ではっきり決定したことですか。健勝苑という会社がゴルフのスポンサーをやってるんですが、今度高額の賞金付き大会を開催して、卓球の普及と活用化を図ろうとしているという話を聞きました。以前は野球オンリーだったのが、サッカーでも、卓球でもといろいろ出てきてよいことだと思います。卓球の普及にも追い風が吹いているように感じます。

司　会　商品の話ですが、ベスト16くらいまで何らかの商品を出してやるべきでしょう。子どもには喜びであり、やる気につながります。

西　郷　理事長さん、メダルを今度あげようという話がありますね。

伊　藤　メダルは3位までですね。

伊　東　参加したくなるような魅力ある大会にしてやることが必要ですね。

斎　藤　大きく考えるには、各地区で何をするかなんです。相双地区では、相双地区版強化リーグをつくって、一般から小学生までいっしょにリーグをつくってやりました。いっきに200人出場しました。ママさんが練習したり若いのが大会に出たりすることにより、将来そのような方の子どもも卓球をやることを期待しています。長い時間かかりますが、そのような小さいことから始めています。

司　会　各地区の実状に合わせて、創意工夫しながら実践してもらうより仕方ないですね。

斎　藤　卓球をとおした町・村おこしをやっていかなければしょうがないんです。悩んでいても仕方ないです。

西　郷　行政に働き掛けて、巻き込んでいっしょにやることですね。

大　橋　この前新聞に卓球はボケ防止に大変いいと載ってました。ああいうのがあると年齢の高い人

が結構やるんですね。

司　会　この辺で、4番目の指導者の確保と指導者の資質の向上についてお願いします。
地元出身者が東京から戻ってくるときに、職場の問題もあると思いますが。受け皿がないからよそにいってしまうこともあるようです。

斎　藤　県からの要請で中国人が来ます。2年間は、高度な技術を持った人たちには活用できると思います。その2年後をわれわれは考えていくことが必要です。
また、学校の先生が多くなればいいなと思いますけど。

伊　藤　安達に桑原先生がいなくなって、小・中学校の選手の受け皿がなくなってしまいました。卓球のできる先生が来てもらえるといいんですけど。

斎　藤　県とのヒアリングでは、その問題は、各地区の教育委員会と話さないと分からないということでした。

柴　田　学校の事情で卓球を受け持てないこともありますからね。

西　郷　卓球ならできるけど、他のスポーツはできないという先生もいますからね。

司　会　二本松二中の長谷川先生は、専門がバスケットですが、自分で見よう見まねで熱心に指導してすばらしい成績をおさめています。

〈斎藤強化部長〉

西　郷　栃木県の真岡女子高校の大島先生は、復員してから卓球の顧問になった方です。一年目は生徒の後をついて回った。二年目は自分でノートをとって勉強した。3年目は、全国大会で優勝ですからすばらしいですね。一生懸命やれば、指導者としてりっぱになれるということです。

司　会　長谷川先生もやっぱり勉強しましたね。人に聞いたり、自分で勉強したりしてました。4月に結婚したので、家庭も大切にするようにいいましたけど。

渡　部　毎年のように顧問は変わっています。中学校も同じだろうと思いますけど。新しい先生はやりたがらない。忙しさもあるけど、集中してやるんだったら、小さな学校にいってやった方がやりやすいでしょう。顧問の希望は卓球が多いですよ。引率顧問でいいですから。審判もやる必要ないですから。

西　郷　そういう人たちを燃えさせるために、きっかけをつくってやる必要があると思います。

斎　藤　OBとか地区の協会で指導者の講習会を開くとかしないとだめなんですね。

柴　田　県大会で優勝した時は、ボーナスを出してはどうでしょう。

伊　東　今は親が子どもをおだてて、飲ませて食わせてやらないとやんないんですよ。
環境と人間性だと思いますよ。川俣に行った高橋先生も始めてだったんですよ。でも興味をもってやりましたからね。

柴　田　体育館が使えなくて廊下だけでやっている人もいるわけですから、それでも福島では一番強いチームを作りますからね。

渡　部　あまりにも環境が良すぎてもだめなことが多いですよ。

伊　東　中島が優勝したときもやはり廊下だったんです。先生も初心者でしたから。

西　郷　目の前の生徒を強化するためにどうすればよいかをいつも考え、創意工夫をしていくんです。自分が指導できなければ指導者を連れてきて指導してもらえばいいわけです。やる気さえあれば、いくらでも方法はあるはずです。それで、卓球が指導できる人は何でもできるよということになってくるんです。

斎　藤　何でもそうなんじゃないんですか。小高工業の時のように、やる気ある先生といっしょになって周りもやることが大切です。それが切れてしまうとだめですよ。

西　郷　スポーツクラブの指導者と学校体育の指導者とがうまく補完しあうことを考えていかなければいけませんね。

斎　藤　強化・普及委員会もクラブの指導者と学校体育の指導者の連携を図ろうと努めています。クラブは、学校ありきという姿勢で学校の立場を理解しないといけないと思います。

渡　部　学校もいろいろ大変なんです。

斎　藤　いやそのとおりです。クラブ指導者があまりに出てしまうと学校もカクンとなります。

渡　部　高校は今大学進学ばかりだからね。なるべく部活動をやらないようにだからね。

斎　藤　そのへんを指導者が理解しないとぶつかるんですよ。学校側や一般人からすると、セントラルなんか卓球馬鹿しかつくられないと思われていると感じてます。でもお互いの立場を考えてやらないとうまく解決しません。

西　郷　学校側としても、外部の指導者を積極的に活用していかないといけないでしょう。

渡　部　そうするとお金がかかりますから、学校では出してくれないですよ。

西　郷　私事になりますが、相馬高校在職のときに部活動後援会を結成しました。高額備品やバスなどの購入はすべてそれを使ってやります。一人入学時に1万5千円集めました。そのような体制ができていれば出せると思いますが。

司　会　安達の場合は、金銭的な応援をOB会に要請しました。

〈司会　三浦名誉会長〉

司　会　それでは、大体出尽くしましたのでその他に入ります。先ほど出ました広報活動ですが、大会をやった場合にできるだけ新聞等に出してもらえるように、ニッタクやバタフライなどにも出してもらえるように働きかけをしていかないといけないと思います。それが一つの啓蒙になるんだろうと思います。

斎　藤　最近卓球出ないですよね。

司　会　出ても小さいですね。他の競技種目から比べるとね。

柴　田　国体時などは、本間君（ラジオ福島勤務）が原稿を書いて編集部に出していたことがありますね。あの時は結構細かいところまで新聞にのってましたね。

斎　藤　新聞社と仲良くならないとだめですよ。寄付金等のお金も結構かかりますが。新聞社へ連絡もしないとだめですけど。

司　会　二本松にもマメ新聞がありますから、大会終了後は結果を持っていきます。

伊　藤　各支部でマメに広報活動をしていくことが、一番ですね。

柴　田　広報委員会というものはあるんですか。

西　郷　広報委員会はありません。検討課題に挙げておきましたけど。スタッフがいて記事をその方にやれば広報が出来るといいんですが。総務委員会の仕事ですよ。

斎　藤　それは、責任者をはっきり決めないといけません。そうすれば、きちんとやれると思います。

西　郷　さっきから申し上げているとおり、各専門委員会の活動を活発にしていくことが大切です。それが人材の育成にもつながってくると思います。

柴　田　20代の前半の選手に卓球協会の役員をやってみるかときいたことがあります。手伝いはやりますが、責任を持ってやるのはどうも、という答えが多いです。

斎　藤　上の人が言って聞かせるんですよ。ボランティアがしっかりとできない人は、偉くもなれないぞと。若い人は試行錯誤でやりますよ。若い人は、若い友達を集めてきますから、そこで活性化していくんです。年配の人はしがらみが強くていけません。

大　橋　県の事務局をしっかり確立させ、事務の分散をしていかないとだめですね。

斎　藤　強化リーグの長場先生のように、3人の先生といっしょに事務を進めていくこともできるます。そのかわりに強化担当の顧問の生徒を何人か強化リーグに参加させていくということも一つの方法だと思います。

西　郷　人がいないいないではだめです。育てるということが大切です。そのためには、仕事を具体的に教えて、やってもらうことが必要でしょう。やればやるほど自信がついてくるんですから。

斎　藤　昔と違ってパソコン等もありますからできますよ。

司　会　本日は、長時間にわたり、お話していただきましてありがとうございました。お話の中で出てきた課題等はそれぞれの委員会や係りで検討していただき、ますますの協会発展を期待したいと思います。

本日はありがとうございました。

☆特集　第50回「ふくしま国体」

☆特集　第31回全国身体障害者スポーツ大会
「うつくしまふくしま大会」

☆特集　53’全国高等学校総合体育大会

☆特集　第50回「ふくしま国体」

感動、感激の6日間

—地元の応援に支えられての総合2位—

会　長
三浦　勝美

理事長
平石　家治

総監督
深谷　秀三

はじめに

国体の過去の成績で入賞がわずか2回しかない福島県が、地元開催の国体で勝つことができるかは夢のような話でありました。逆に言えば、福島県の卓球が強くなれる千載一遇のチャンスであります。この機会を逃しては、いつまでたっても卓球後進県の汚名を晴らすことはできないと考え、卓球協会の総力を挙げて、努力して参りました。

強化のねらいを

○ふくしま国体総合優勝を目指しての強化

○ふくしま国体を通過点としての継続的な強化

の2点に絞り、強化組織の整備・拡充・強化費の捻出、有望選手の発掘、協力企業への依頼など、やらなければならないことが山積みしている状況での出発でありました。

そして、平成7年10月、天覧試合の栄誉もあり、感動、感激の6日間を迎えることができました。

強化の歩み

思えば10年前、昭和70年に福島県で開催される国体で勝ちたいという願いで強化が開始されました。

少年の部の選手を育て上げるためには、10年の歳月が必要と考え、県内の各種卓球大会に小中学生の種目を入れて開催することにしました。とにかく、未来の国体選手の掘り起こしと経験を積ませることが目的でした。昭和62年からは、県卓球協会主催の小中学生の強化練習会を2か月に1回実施することにしました。この強化練習会の結果をランキングで表し、ランキング上位の選手を合宿や県外遠征に参加させる方式をとりました。その後高校生も組み入れられ、小中高校生選抜強化リーグ大会と名称を変え、ランキング順に8名のリーグ戦で戦う方式で現在に至っています。その結果、国体の少年の部の選手はもちろん、成年1部の選手のほとんどが、小中高校生の強化練習会育ちで占められています。優勝はできませんでしたが、総合2位と満足のいく成績を収めることができました。

○男子の強化の取組み

少年男子は精力的に合宿、遠征を繰り返し、その反省の上に母体コーチとの連絡を密にして進めてきました。

平成7年2月に中国選手を招へいして合同合宿を実施したのは効果的でした。卓球は、ダブルスの勝敗がチームの勝敗にも影響するため、特に、ダブルスの練習に重点を置きました。その結果、少年男子は、成年男子と五分の試合ができるようになり、本大会でも見事なチームワークで、チームの勝利に貢献しました。

○女子の強化の取組み

少年、成年ともに候補選手の実力が伯仲し、選手選考が大幅に遅れました。成年は、5月の選考会で、少年は、7月の県総体の結果まで待ち、ダブルスの組合せを重視した選考になりました。少年、成年ともに男子と同様に試合の要ともいえるダブルスの強化を重視した合宿を開催してきたことにより、全国の強豪と戦える手応えを十分に感じました。また、強化の進捗状況を確認するため県外遠征を計画的に実施してきたことが功を奏しました。

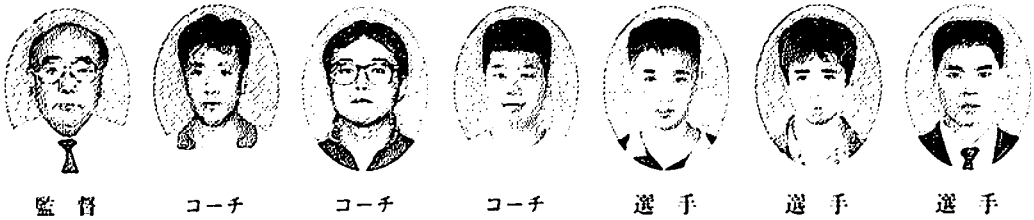
計画された強化合宿や県外遠征を順調に消化し、いよいよ国体が始まるときに、総監督からの激励は「地元の熱狂的な応援を味方につけよう。」ということでありました。監督・コーチの献身的な努力と卓球愛好者や地元の方々の応援が、選手のがんばりとなり、好成績で終了できましたことは望外の幸せであります。

ふくしま国体での活躍

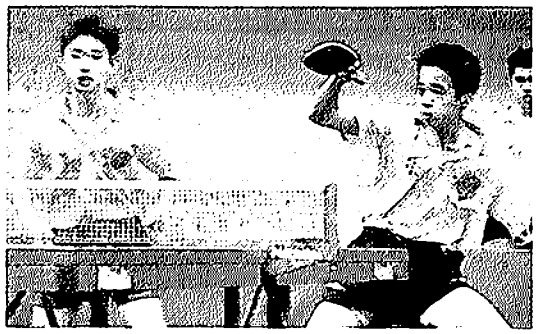
《少年男子》

高校生の強化は、小中学生の強化の発展的な形で、平成2年から本格的に始められました。その年度

【少年男子】



監督	コーチ	コーチ	コーチ	選手	選手	選手
鈴木　一吉	落合　茂幸	渡辺　俊雄	木村　哲也	渡辺　和幸	遊佐　充裕	馮　海涛
福島工業高教員	桜の聖母学院高教員	福島工業高教員	小高工業高教員	帝京安積高3年	小高工業高2年	原町工業高1年



少年男子ダブルス　遊佐・渡辺組

の国体強化とふくしま国体候補選手10名が、強化の中心となりました。最終的に、遊佐充裕（小高工高）渡辺和幸（帝京安積高）永山健一（磐城高）に中国人留学生・馮海涛（原町工高）の4人に絞られました。

24チームを8ブロックに分けての予選リーグが10月15日開始されました。初戦の富山県を3－0で破り勢いがつきました。第2戦は、三重県との対戦、渡辺がエースの佐野に快勝し、3－1で勝ち、ベスト8に進出しました。決勝トーナメント1回戦が、強豪埼玉県です。埼工大深谷高を中心に中国選手が、加わっています。予定通り馮が2点をとり、2－2でラスト遊佐と黒川（埼工大深谷高）の対戦となりました。激しいラリー戦となりましたが、福島県選手として誇りと自信があらわれた試合運びで勝利を収めることができました。会場はまるで優勝したかのごとく熱狂の渦に包まれました。準決勝では惜しくも高知県に破れましたが、観衆に感動、感激を与え、見事ベスト4に入賞することができました。

《少年女子》

少年女子は、有望視された種別でありました。しかし、組合せは、最も条件の悪いものになりました。24チームを8ブロックに分けての予選リーグは、白鵬女子高の神奈川県とカット打ちのうまい選手のいる北海道です。しかも、福島県全チームの中で最初に試合をするのが少年女子であり、天皇、皇后両陛下のご観戦になる試合でもあって、選手は、大きなプレッシャーを感じて戦わなければばりませんでした。

【少年女子】

監　督
熊谷　勝明
帝京安積高教員

コーチ
鈴木　是行
磐城一高教員

コーチ
桑原　要勝
安達高教員

選　手
藤田　由希
安達高3年

選　手
根本恵美子
郡山女子高3年

選　手
高橋美貴江
安達高1年

本県チームは、藤田由希、高橋美貴江（安達高）に根本恵美子（郡山女子高）高橋美智子（安達高）の布陣で臨みました。初戦は北海道と対戦しました。1番藤田が順調に勝ち、2番高橋は、1年生とも思えない自信満々のプレーで相手を圧倒、ダブルスも順当に勝ち、3－0で勝利を収めました。この勝利が、他種別の福島県選手をどんなに奮い立たせたか計り知れないものがあります。波に乗った本県チームは、その後、強豪神奈川県をも破り、見事ベスト8入りを果

少年女子ダブルス　高橋・根本組

たしました。決勝トーナメントでは、優勝候補の大阪府と対戦し破れはしたものの、1番で根本がインターハイ2位の辻本を破り気をはいたことは、すばらしい成果であり、チームワークの良さの現れであると言えます。

あの日 あの時

長い長い花道
～舞台にあがるまで～

少年女子選手
藤田　由希

全ては、大きなプレッシャーから始まりました。中学生の時に「ふくしま国体」が、丁度、自分が高校3年生の時に開催される事を知り、進学も自動的に県内という事になりました。数年もの間、全ての事が国体に関連づけられ、インタビューでの「国体では？」の質問も慣れたつもりでいました。

しかし、刻一刻と本番が近付くにつれ、『優勝』という他の大会ではそんなに気負う事のない2文字が毎日のように自分を憂鬱にさせました。合宿中に精神的に追いつめられて、何度泣いたか分かりません。国体にかける準備期間が長ければ長い程、それにかける気持ちは自分でも驚く程、計り知れないくらいに張りつめていたのです。国体本番では、悔し涙、嬉し涙、そして最高の笑顔を残しました。卓球競技少年女子のメンバー4人は、全て福島っ子です。体がボロボロになっても、心に雨が降っていても、いつもお互いに肩をかし合って歩いて来ました。結果的に優勝はなりませんでしたが、貴重な経験でした。最後に福島県民である事を、嬉しく誇らしく思います。

少年女子　藤田選手

《成年男子1部》

実業団チームや大学選手でかためる強豪チームぞろいの成年男子1部は、16チームを4ブロックの予選リーグ戦で行われました。本県チームは坂本憲一（日産いわき工場）、原　晃（東京電力福島第二原子力発電所）、深谷亮幸（筑波大大学院）、岩本爾郎（野田中教員）で構成されました。

【成年男子1部】

監　督
柴田　広道
プロショップピンポンシバタ

コーチ
田子　光政
田子燃料店

選　手
坂本　憲一
日産自動車㈱いわき工場

選　手
原　　晃
東京電力㈱福島第二原子力発電所

選　手
深谷　亮幸
筑波大学大学院

コーチ兼選手
岩本　爾郎
野田中教員

予選リーグは、シードの滋賀県の他、山口県、新潟県との対戦でした。10月17日の第1試合、山口県には3－0で圧勝し、同日新潟県との第2試合に臨みました。是非勝ってベスト8を確実にしたい試合であるのにかかわらず1番原が新潟のエースと死闘の末、1－2で惜敗したのがひびき、2－3で破れてしまいました。

成年男子1部　坂本選手

10月18日に対戦した滋賀県は、びわこ銀行勢でかため、昨年のわかしゃち国体2位の実力を持つメンバーでした。本県は、滋賀県に対する勝算は低いと読んでいたため、入賞を逃したあきらめが選手団全体に漂い始めていました。しかしながらまず坂本が平を2－1で破り、次に深谷が地元の応援を味方につけ田原を2－1で破ることができました。再度4番に出場した坂本が、田原に対戦し、接戦の末3セット24－22で破り、見事目標のベスト8を勝ち取りました。

あの日 あの時

国体が終わって

成年男子1部選手
原　　晃

数年前から候補選手となり、これまで以上に練習に熱が入るようになりました。家族も国体に出場できるようにと協力してもらいましたが、毎週のように遠征や合宿で留守にすることが多くなると、家庭内の雰囲気が悪くなっていくのがわかりました。多少の犠牲は覚悟していましたが、予想以上でした。

今年になり、指定選手に決定してからは、家族も「あと少し」と辛抱してくれるようになりました。

国体本番では、家族が応援に駆けつけ、たいへん心強く、がんばることができました。

今回、国体に出場するために迷惑をかけてきた、家族や職場、周囲の方々に協力していただき大変感謝しています。

国体が終わり、今までのいろいろなことがいい思い出となりました。

「ありがとうございました。」

《成年男子2部》

開催県としてふさわしい成績を収めるためには、2部の上位入賞が必要でした。選手の構成は、川村

【成年男子2部】

監督兼選手
横山　廣昭
カノー商会

コーチ
佐藤　敏行
蔵王中教員

コーチ
平石　秀樹
須賀川信用金庫

監督兼選手
富岡　成一
阿部商事㈱

選　手
川村　公一
日産コーエーいわき㈱

選　手
小塩　　浩
須賀川信用金庫

成年男子２部　富岡選手

成年男子２部　小塩選手

公一（日産コーエーいわき営業所）、小塩　浩（須賀川信用金庫）に壮年富岡成一（阿部商事）、橋本彰夫（好間高教員）、横山廣昭（カノー商会）です。

出場チーム10チームを２ブロックに分け、ブロック１位のみが決勝に進むことができますが、１敗すれば決勝に進めない可能性があります。また、全国９ブロックの１位のみしか出場しないことから、強豪揃いであります。

予選リーグ第１試合は北海道と対戦、地元須賀川出身の小塩の登場とあって応援の盛り上がりは最高潮に達し、その応援を背に、北海道に圧勝しました。第２試合の岐阜県には、元世界選手権大会出場の田中がおり、苦戦を強いられることが十二分に予想されましたが、小塩がラリーの打ち合いに勝ち３－１で快勝。熊本県、岡山県にも順当に勝ち、予選リーグ全勝で、最終日の決勝戦進出を決めることができました。決勝戦の千葉県は、前評判通りの強豪で、「前半で１点取れれば、何とか勝てる。」と予想して試合に臨みましたが、スピードのある巧みな攻撃パターンに振り回され、打ちくずすことができませんでした。しかしながら期待どおり、準優勝というすばらしい成績を収めることができました。

《成年女子１部》

47都道府県参加のトーナメント戦で戦うため、１試合も落とせない条件の中の試合となりました。選手は大掛美奈（前田建設）、深谷純子（青山学院大）、岡田晶子（専修大）、菊地弓子（中央大）を登録しました。ふくしま国体では、ベスト８を目標として遠征、合宿を計画的に続けてきました。

大会初日１回戦の相手は島根県です。予選がないブロックが多いために競技力調査が十分でなく相手チームの情報が少ないのが気がかりでした。１番岡田が２－０で勝ち、幸先のよいスタートを切り勢いに乗ろうというとき、相手のエース大菅に深谷、岡田と２点落とし、２－２の大ピンチとなりました。しかし、５番大掛が落ち着いたプレーで相手を３－２で下し見事に、２回戦進出を決めました。

２回戦の長崎県は、ダブルスを落としましたが３－１で勝ち、本県はいよいよベスト８入りをかけて

【成年女子１部】

監　督
荒木　久勝
郡山ザベリオ中教員

コーチ
菊地　敏美
御舘中教員

コーチ
荒井　孝芳
日東紡績㈱富久山メディカル開発センター

選　手
大掛　美奈
前田建設工業㈱相馬㈱

選　手
深谷　純子
青山学院大４年

選　手
岡田　晶子
専修大１年

北海道と対戦をすることになりました。北海道戦では、2点を取られましたが取り返して2－2とし、またも5番勝負となりました。大掛は、1セットとられたものの2セットをとり返し勝負強さを示しましたが、惜しくも力及ばず、2－3で破れ目標達成が成りませんでした。敗戦のくやしさを味わった選手達ではありますが、天皇杯獲得に向け精一杯努力した姿は、会場をうめ尽くした観衆に大きな感動を与えてくれました。

成年女子2部　東條選手

《成年女子2部》

「わかしゃち国体」で福島県の卓球が唯一入賞し、得点した成年女子2部は必勝を期し、坂本久美（いわき卓球）、東條由美（福島市役所）、伊藤恵美子（千本松毛晒工業）、今福麻美（富久山卓球クラブ）のメンバーで臨みました。それぞれのメンバーの所属が離れており、主婦も二人いる中での強化合宿は、容易ではありませんでした。しかし、国体で勝ちたいという信念は、誰にも負けないほど強く、危機感さえもって練習に励んできました。

16チームを4ブロックに分けての予選リーグでは、熊本県、滋賀県、富山県との対戦。どの県も強豪で、簡単に勝てる相手ではありませんでしたが、抜群のチームワークで予選リーグ全勝で準決勝へ進出しました。準決勝は福岡県と対戦。壮年の伊藤の安定した活躍と坂本、東條の確実なプレーで3－2で勝ち、決勝進出を果たしました。最終日の決勝戦は、神奈川県でした。1番坂本が見事に相手のカットを攻略し2－1で勝ち。2番東條も勢いに乗り2－0で快勝し、ストレートで優勝を決めるかと思わせましたが、3番伊藤は自分のペースをつかみ切れずに初めての敗戦。しかしながら、4番東條の闘志あふれるプレーで奇跡的な挽回を果たし、初優勝の栄誉を勝ち得ることができました。優勝の後の選手の涙が本当に印象的でした。

【成年女子2部】

監　督
斎藤　一美
セントラル住設

コーチ
種村　明美
無線システム

監督兼選手
伊藤恵美子
千本松毛晒工業

選　手
坂本　久美
いわき卓球

選　手
東條　由美
福島市役所

あの日 あの時

『真珠の涙を見せてくれ！』

成年女子2部監督
斉藤　一美

人生でたった一度の地元国体、卓球人生の全てをぶっつけて良い思い出を作れ、"感激"それは貴女達が監督、コーチ、観客に与える事によって、自身が感ずるものだ。

さあー、私に真珠の涙を見せてくれ！

成年女子２部　坂本選手

成年女子２部の決勝は最終日、対神奈川戦で始まった。同時に始まった福島男子２部が大激戦の末敗れ、最後に残った我チームに金メダルの期待と、地元チームの決勝戦で最高の舞台が整い、選手も観客も興奮のるつぼと化した。

２対１とリードしているが四番の東條は３セット目７対４とリードされて絶体絶命、しかし得意のバッククロススマッシュが決まるや否や神がかりの大逆転劇を演じ21対18でゲームセット！選手、コーチ、観客一体となって喜びの抱擁をし、涙したあの一瞬は一生忘れられない。選手生活を一度退いた彼女達があれ程純粋に金メダルを追いかけ最後に流す事が出来た「真珠の涙」は何だったのだろうか。

私は地元国体に出場出来るのはオリンピックに出場するよりむずかしいと力説していた。その重圧の中でも期待される心地良い責任感と、今迄にない県と協会のバックアップがあったからと確信している。

今後強い福島が永続する為には、県本部が存在する事であろう。最後に県競技力向上対策本部を始め裏方に徹してくれた協会の皆様に御礼申し上げます。

大会を終えて

種目別総合得点　１位　愛知県 145点
　　２位　福島県 137.5点

という結果に、すべての卓球関係者が大満足しています。５日間の戦いは、苦しかったが、大きな感動と、すばらしい成果を残してくれました。３年前のべにばな国体で優勝した山形県とほとんど同じ得点を獲得できたのだから。役員、監督、コーチ、選手ともに、「やればできる。」ということを教えてくれた、「ふくしま国体」を忘れることはありません。

成年女子２部　伊藤選手

我々をここまでがんばらせてくれた県競技力向上対策室の先生方を始め、アドバイザーコーチの富士短大の水村治男先生、多額の強化費を御寄贈していただいた福島製鋼株式会社さん、惜しくも代表になれなかった候補選手の皆さん、各種県大会で強化基金のご協力をいただいた選手の皆さん、監督、コーチ、選手の所属する企業、学校の皆様、そして、家庭であたたかく支えてくださった家族の皆様に、本当に本当に御礼を申し上げます。「ありがとうございました。」

今後は、もう一つの目的である「ふくしま国体を通過点として、継続的な強化に当たる」ことの実現のために精一杯努力していくこととといたします。

（記　深谷秀三）

[男女総合成績　2位　137.5点
女子総合成績　4位　62.5点]

種別	氏名（所属）	1回戦	2回戦	3回戦	準々決勝	準決勝	決勝	種別順位
成年女子1部	大掛　美奈（前田建設工業） 深谷　純子（青山学院大） 岡田　晶子（専修大）	○3－2（島　根）	○3－1（長　崎）	×2－3（北海道）				

種別	氏名（所属）	予選リーグ						決勝トーナメント			種別順位
		第1試合	第2試合	第3試合	第4試合	勝敗	順位	準々決勝	準決勝	決勝	
成年男子1部	坂本　憲一（日産自動車いわき工場） 原　晃（東電興業ふるさと発電所） 深谷　亮幸（筑波大）	○3－0（山　口）	×2－3（新　潟）	○3－1（滋　賀）	－	2勝1敗	2	－	－	－	5
成年男子2部	富岡　成一（阿部商事） 川村　公一（日産コーポレーション） 小塩　浩（須賀川信用金庫）	○3－0（北海道）	○3－1（岐　阜）	○3－1（熊　本）	○3－0（岡　山）	4勝	1	－	－	×1－3（千　葉）	2
成年女子2部	伊藤恵美子（千本松毛晒工業） 坂本　久美（主　婦） 東條　由美（福島市役所）	○3－0（熊　本）	○3－0（滋　賀）	○3－2（富　山）	－	3勝	1	－	○3－2（福　岡）	○3－1（神奈川）	1
少年男子	遊佐　充裕（小高工業高） 渡辺　和幸（帝京安積高） 馮　海涛（原町工業高）	○3－0（富　山）	○3－1（三　重）	－	－	2勝	1	○3－2（埼　玉）	×1－3（高　知）		3
少年女子	藤田　由希（安達高） 高橋美貴江（安達高） 根本恵美子（郡山女子高）	○3－0（北海道）	○3－1（神奈川）	－	－	2勝	1	×1－3（大　阪）			5

☆特集　第50回「ふくしま国体」

☆特集　第31回全国身体障害者スポーツ大会
「うつくしまふくしま大会」

☆特集　53’全国高等学校総合体育大会

☆特集　第31回全国身体障害者スポーツ大会
うつくしまふくしま大会の思い出

〈一般卓球（肢体不自由者）の部〉

平成7年度全国身障者スポーツ大会が福島県福島市に於いて開催されるにあたって、一般卓球（肢体不自由者）と盲人卓球の審判並びに運営を担当する事になり、約1年前より準備に入りました。

審判も健常者と違い特に車椅子の場合は特別で、市民会館での講義に参加したり、福島体育館での講習会を聞いたり皆一生懸命でした。又、中央から先生をお呼びして県営あづま総合体育館で講義を受けたり、家庭の都合もあって全員が参加出来る訳ではありあんせんでしたけれど、一致団結して、とにかくミスの無い様にと神経を使ったものでした。

身障者の方々はとても熱心で深く感銘したものです。

本番に向けて審判のコート割りをしたり、タイムテーブルを作ったり大会に当たり欠員の無い様に気配り、選手の方々が、けがをしない様にするにはどの様にセットしたら良いか、県の福祉課にも度々伺いに参りました。

一年間はあっと云う間に過ぎた様な気がします。

大会当日は思った通り大変でしたけれど、無事に終わり皆で喜び合った事をおぼえております。

苦しかった事、反省点も多々ありましたが、私としては満足感でいっぱいでした。

大会競技役員の皆様、大変ご苦労様でした。

全国身障者公認スポーツ指導員
福島県家庭婦人卓球連盟 会長　岸　ひろみ

〈盲人卓球の部〉

平成5年10月県立盲学校にて審判予定者の初顔合せ。

初めて対面した盲人卓球用具の数々、部厚いテキストを配布され山形の穂波先生の説明を聞きながら、“とんでもない所に来てしまったかな”と……でもやさしい先生の一言“ゴールに向かって練習あるのみ、大丈夫ですよ”と励まされ、なんとなくその気になって……。

総勢15名週1回月4～5回（1回は盲学校）の練習を計画し卓球台を準備していただくも、場所が定まらず（騒音がひどい）最終的には体育館内の会議室を借りてどうにか納得、しかし今度は練習用の選手に問題あり、視力のある選手ではラリーが続きすぎ、ミスが少なく審判の練習にはならず、アイマスクを着けると勘が悪くラリーが続かずこれまた……ダメ。

月1回だけ盲人の選手の審判を練習するため盲学校へ……。

選手の皆さんの底抜けに明るい人柄に触れ、励まされもしましたが、勘のよい選手の皆さんは我々が気づかない音でも敏感に察知し審判がスムーズに出来ないと、ハッパをかける…とても悔しい思いもしました。

練習をさせてもらう立場上、ガマン、ガマン。

平成6年11月、愛知国体の視察のため名古屋へ。

本番で舞いあがって次の言葉が出てこない審判員の姿を目の当たりにして我々も…不安は増すばかりでした。ホテルに戻って反省会。なとかなるよ、大丈夫!!と。

平成7年に入り県大会。他県（青森）との交流試合、リハーサル大会等審判の練習を重ねながら。最大の課題であった審判の判定を統一すること。一生に一度しか参加できない選手がたとえ1回戦で敗れても良い思い出をもって帰ってもらえる様暖かい心を持って接することを肝に命じ本番に臨みました。

張り詰めた空気の中いよいよ本番。審判はあっという間に終わりました。

これで盲人卓球から解放される!!

福島市家庭婦人卓球連盟 副理事長　熊川セツ子

☆特集　第50回「ふくしま国体」

☆特集　第31回全国身体障害者スポーツ大会
「うつくしまふくしま大会」

☆特集　53’全国高等学校総合体育大会

☆特集　53' 全国高等学校総合体育大会

1．開催に至る経過

昭和46年9月10日

福島県高等学校体育連盟常任理事会・運営委員会代表者会議で誘致を決議する。

昭和49年10月15日～16日

福島県体育協会種目理事長・福島県高等学校体育連盟専門委員長より開催にともなう事情聴取を行う。

昭和49年11月12日

福島県体育協会種目会長会において種目毎に会場地を検討する。

昭和50年5月27日

第1回全国高等学校体育連盟理事会に昭和53年全国高等学校総合体育大会準備概要を提出し満場一致で内定する。

昭和50年7月16日

福島県高等学校体育連盟専門委員長・強化担当者会議で強化指定チーム・選手、昭和52年以降の選手強化事業を協議する。

昭和50年7月16日

昭和50年度　選手強化事業・役員要請事業にかかわる補助金を交付、7月21日以降　選手強化・役員養成事業を開始する。

昭和51年7月8日

全国高等学校体育連盟理事長会に出席した。

東北ブロック各県理事長にヨット・卓球競技開催について協力を要請

昭和51年8月16日

山形県・宮城県高等学校体育連盟会長に福島県高等学校体育連盟会長名で卓球・ヨット競技開催を要請する。

昭和51年9月22日

福島県教育長・保健体育課長が山形県を訪問し、バスケットボール・フェンシング・卓球・ウェイトリフティング競技種目開催を要請、山形県が開催を受諾する。

昭和52年5月24日

全国高等学校体育連盟理事会において競技会場・日程・施設概要書・総合開会式の概要について説明、福島県開催の正式決定をみる。

（53' 総体準備概要による）

2．県卓球連盟（当時）県高体連専門部の対応

昭和48年12月1日

各競技団体の希望開催地の調査が卓球専門部にあり競技会場の施設設備・備品と練習会場について図示説明し、卓球は郡山総合体育館での開催を希望する。

昭和49年10月15日

種目理事長（宇賀神）専門委員長（大橋）両名が、高体連理事長と面談する。内容は53' 高校総体開催に伴う事情聴取であったが席上卓球の会場は喜多方市内の高校体育館を使用して男・女別の2会場開催案が示された。

卓球競技としては1会場での開催を強く希望し施設設備が整っていれば開催地を問わない。

どうしても会場がなければ日程をずらして開催して欲しいと申し入れるが、同一期日開催ですすめているので無理であるとの回答であった。

この会談で卓球種目の県内開催は困難であることを感じとった。

3．53高校総体の選手強化について

高体連事務局で年次計画を次のように設定する。

昭和50年度　中学生スポーツ教室・高校生強化合宿合同練習・コーチ会
昭和51年度　中学生スポーツ教室・高校生強化合宿合同練習・県外遠征・コーチ会
昭和52年度　高校生強化合宿・県外遠征・コーチ会
昭和53年度　高校生強化合宿・県外遠征・コーチ会

4．県卓球連盟の選手強化への取組

大橋柾が県高体連専門委員長になった昭和45年は佐藤昭典副理事長が県卓球連盟の強化部長で例年、国体東北ブロック予選の前に強化合宿を実施していた。昭和45年から卓球連盟の強化に携わり、実施した記録をもとに高校総体に至る強化の経過を振り返ってみる。

◎昭和45年度

【少年男女強化合宿】

期日　昭和45年8月22日～24日
会場　磐城一高校体育館
選手　蓬田　博（好間）　青山　果（郡工）　小野　明（磐城）　小泉直人（相馬）
　　佐藤ふみ子（郡女）　石井淑子（磐一）　加藤幸子（相女）　熊谷啓子（安達）
指導　信沢　要　大橋　柾　山崎　勲　鈴木理介

【成年男女強化合宿】

期日　昭和45年9月19日～20日
会場　磐城一高校体育館
選手　深谷秀三　安達　広　柴田広道　佐藤正幸　斉藤つや子　奥山節子
　　森山志代子
指導　佐藤昭典　信沢　要　大橋　柾　加藤栄治郎　山崎　勲　鈴木理介

◎昭和48年度

【高校選手の強化合宿】

期日　昭和48年3月27日～29日
会場　男子　平工業高校旧体育館
　　女子　磐城第一高校講堂
選手　佐藤光昭（郡商）　下山田守一（平工）　菅野昭平（保原）　大平　孝（勿工）
　　小野　尚（湯本）　椚山正広（田村）　遠藤信也（平商）　横田一郎（会農）
　　石井淑子（磐一）　渡辺悦子（安達）　宗像啓子（田村）　増田淳子（安女）
　　園部こう子（磐一）　渡部順子（磐一）
講師　鎌田光隆・穀田（ニッタク）
指導　大橋　柾（平工）　山崎　勲（磐一）
※茨城選抜招待選手（男子）
　監督　田口卓治（鉾田一）
　選手　田口　茂・菅谷　全・額賀（鉾田一）　武井（古河一）　木村（牛久）

【県社会人選手技術研修会・指導者講習会】

期日　昭和48年7月2日
会場　須賀川市体育館
参加　地区推薦　選手・指導者（男女各4名）
　　事業所推薦　選手指導者を含め5～6名
　　特別参加　高校生（高校大会男女ベスト4）
講師　鎌田光隆（日卓KK）　水村治男（富士短）

選手　佐藤光昭　下山田守一　菅野昭平　大平　孝　　石井淑子　渡辺悦子　宗像啓子
　　増田淳子

【高校選手の強化合宿】

期日　昭和48年3月28日～30日
場所　相馬女子高校体育館
講師　鎌田光隆（ニッタクKK）　金野亨（国士館大OB）　石田ゆう子（和洋女OG）
指導　大橋柾　西郷徹夫
招待　聖和学院　仙台女商　名取高　塩釜女
参加　①　高校新人大会ベスト8　　男子15名
　　②　各地区推薦　　若干名　　女子15名
トレーナー　地元一般優秀選手
　　伏見利博（東北工大職員）　佐藤正幸（原町高OB）　三浦健弘（東北学院大OB）
　　佐藤正二（東北工大）

【国体少年男女の強化並一次選考会】

期日　昭和48年7月24日
場所　郡山女子高校体育館
選手　下山田守一　佐藤光昭　江川淳一　橋谷田英実　横山俊英　佐久間喜友　桧山真佐子
　　高野静子　本田道子　車田登志江　増田淳子　石橋美恵　吉田よう子　佐藤強子
　　石川喜子

【国体少年男・女の強化並二次選考会】

期日　昭和48年8月19日
場所　いわき市四倉中学校体育館
選手　①　一次選考会　　ベスト4
　　②　県総合体育大会　ベスト4
　　江川淳一　横山俊英　菅野末治　斉藤和子　草野京子　阿部和子　石川喜子　長浜玲子
　　石橋美恵　本田道子　佐藤強子　桧山真佐子　羽田ハツ子
（内定：得点上位による）
　　男子　下山田守一・佐藤光昭
　　女子　増田淳子・高野静子

※当時国体少年男・女の県代表選手を決めるために次のような得点制を設けた。

国体少年男・女選考基準（得点制）

新人大会	30点	1位	100％	100％
高校大会	30点	2位	90％	85％
一次選考	30点	3位	80％	75％
県総体	60点	4位	70％	（ベスト4）
二次選考	60点	5位	60％	65％
		6位	50％	（ベスト8）
		7位	40％	
		8位	30％	

※東北高校　ランク者・得点上位者を代表

鹿児島国体に出場した選手と得点

	選手	所属	得点	備考
①	下山田守一	（平工）	150点	（東北ランク）
②	佐藤　光昭	（郡商）	126点	
③	江川　淳一	（喜工）	120点	

	選手	所属	得点	備考
①	増田　淳子	（安女）	135点	
②	高野　静子	（平商）	133点	
③	草野　京子	（磐一）	93点	

④ 横山 俊英（郡商） 115点　　④ 長浜 玲子（磐一） 81点
⑤ 管野 末治（小工） 84点（次点）　　⑤ 阿部 和子（相女） 69点（次点）

鹿児島国体

少年男子監督 大橋 柾（平工）
選手 下山田守一 佐藤光昭 江川淳一 横山俊英

少年女子監督 山崎 勲（磐一）
選手 増田淳子 高野静子 草野京子 長浜玲子

【福島県・茨城国体県代表選手合同合宿】

期日 昭和48年8月27日～28日
場所 水戸市掘原体育館並付属合宿所
選手 男子 下山田守一 佐藤光昭 江川淳一 横山俊秀
女子 増田淳子 高野静子 草野京子 長浜玲子
監督 大橋 柾（男子） 山崎 勲（女子）
茨城県選手
安宗 治（太田一） 清水はつ江（下妻二） 軽部幸三（牛 久） 大山桂子（境）
古山安夫（多 賀） 中泉章子（鉾田二） 高山浩一（竜ケ崎） 田中君江（鉾田二）
監督 沢畑克教（太田一） 橋本左内（鉾田二）

	男 子	女 子
第一戦	福島 3－2 茨城	福島 2－3 茨城
第二戦	福島 3－2 茨城	福島 4－1 茨城
第三戦	福島 2－3 茨城	福島 2－3 茨城

※国体東北ブロック予選
少年男子福島2位（4勝1敗）
福島3－1宮城 福島3－1岩手 福 3－1山形 福島3－1秋田 福島1－3青森
下山田・佐藤がシングルス 全勝、特に下山田はインターハイ 3位の大沼（寒河江）・東北高校ランク2位の成田（青森商）に勝った素晴らしい活躍であった。
この年、東北高校選手権大会では下山田守一が5位、佐藤光昭6位と二人が東北高校ランクに入った。

【県卓連強化部の充実】

昭和49年1月26日の県卓球連盟理事会に強化部の組織活動について平石強化部長から提案があり承認される。

福島県卓球連盟強化部組織（S・49・3・1）

理 事 長	宇賀神喜嗣（郡山西工）	副 理 事 長	大橋 柾（平 工）
強 化 部 長	平石 家治（岩瀬病院）	副強化部長	深谷 秀三（行 健 小）

○地区強化責任者

県 北 地 区	加藤栄治郎（東亜栄養）	県 中 地 区	根本 孝司（労働金庫）
県 南 地 区	伊東 守信（矢吹分校）	会 津 地 区	渡部 洋一（大沼高校）
いわき地区	山崎 勲（磐城一高）	相 双 地 区	西郷 徹夫（原町高校）

○種目強化責任者

高 校 の 部	渡部 洋一 西郷 徹夫	中 学 の 部	深谷 秀三 伊東 守信
一 般 の 部	加藤栄治郎 根本 孝司		

【県卓球連盟強化部の組織の充実に伴う53' 高校総体卓球競技実施準備概要】

1）基本方針と到達目標

県卓球連盟組織をあげて指導者の育成と普及につとめ底辺の拡大をはかるとともに中学・高校・一般の連携を深め、一致協力して選手強化にあたり53' 高校総体では学校対抗ダブルス・シングル

スの各種目において三位入賞を目指す。

2）準備計画実施に伴う財源確保について

① 県卓球連盟の選手強化費増額

② 高校登録選手に強化費負担を依頼する。

③ 県高体連・県体育協会からの強化費に期待する。

3）全国高校総体卓球競技成績目標

年	50	51	52	53	54
男子学校対抗	2回戦	3回戦	ベスト8	3位入賞	ベスト8
男子ダブルス	3回戦	4回戦	ベスト8	3位入賞	ベスト8
男子シングルス	3回戦	4回戦	5回戦	3位入賞	ベスト16
女子学校対抗	3回戦	3回戦	4回戦	3位入賞	ベスト8
女子ダブルス	3回戦	3回戦	ベスト8	3位入賞	ベスト8
女子シングルス	4回戦	5回戦	ベスト8	3位入賞	ベスト16

※48年女子シングルスに2名がベスト16　増田淳子（安女）　高野静子（平商）

4）選手強化事業計画内容

① 県卓球連盟強化部の組織にとって強化計画をたてる。

② 中学校の指導者（顧問）との意志の疎通を計り県卓連の組織の中で協力して強化にあたる。

③ 中学生優秀選手の県外流出防止について協議する。

④ 県卓球連盟主催の指導者講習会・スポーツ教室を開催する。

⑤ 高校生の強化合宿に中学選手を参加させる。

⑥ 他県選手との練習試合・合同合宿を実施する。

⑦ 中学有望選手のリストアップと追跡指導をする。

5）卓球公認審判員名簿の作成

競技役員養成の一環として県内在住の卓球公認審判有資格者名簿を作成する。

一級公認審判員　2名　三浦勝美　宇賀神喜嗣

二級公認審判員　3名　斉藤正雄　宗像次男　大橋　征

三級公認審判員　132名

◎昭和49年度

【高校生強化合宿】

期日　昭和49年3月28日～30日

場所　須賀川市牡丹園内勤労者スポーツセンター

参加　高校新人大会ベスト8

県卓球連盟地区推薦若干名

中学生優秀選手若干名

講師　水村治男（富士短大）

指導　平石家治（県卓球連盟強化部長）

大橋　征・渡部洋一・伊東守信（高体連）

※参加者　29名（中学生7名）

高校で活躍した下山田守夫（植田中）須藤泰子（北山中）が参加している。

【国体東北予選県代表一次選考会並びに選手強化練習会】

期日　昭和49年7月27日

場所　安積女子高校講堂

参加　高校大会ベスト8　（全国高校総体参加選手）

指導　平石家治　大橋　征（高校総体参加監督）

【国体東北予選県代表二次選考会】

期日　昭和49年8月18日
会場　安積女子高校講堂
参加　県総合体育大会　　ベスト4
　　一次選会　　ベスト4
　　上級大会ランキング者
　　強化部会で特に推薦した者
指導　平石家治　大橋　柾

【53' 高校総体指導者養成講習会】

卓球専門部推薦者（S・49年度）

	氏　名	年令	勤務先				
①	平石　家治	35	（公立岩瀬病院）	⑥	清水　　徹	32	（喜多方工）
②	鎌田　益実	43	（双葉中）	⑦	深谷　秀三	30	（行健小）
③	大竹　　亮	35	（白河中央中）	⑧	水戸　　昇	40	（北山中）
④	西郷　徹夫	38	（原町高）	⑨	志賀　俊勝	43	（小名浜第一中）
⑤	渡部　洋一	34	（大沼高）	⑩	梅田　秀男	32	（福島西女子高）

◎昭和50年度

東北高体連卓球専門部で要望していた高校生の選抜合宿が東北卓球連盟主催で実施される。

【第1回東北卓連選抜強化合宿】

期日　昭和51年1月8日～10日
場所　山形市　山形県体育館
主管　山形県卓球協会
講師　中田鉄士（仙台大）　相川光司（青森商）
引率　総監督　三浦勝美（県卓理事長）
　　男子監督　大橋　柾（平工）
　　女子監督　渡部洋一（大沼）
選手　下山田守夫（平工）　瓜生　文江（成女）　大木　重実（須高）　安藤里恵子（日女）
　　深沢　正人（喜工）　千葉恵久子（日女）　国井　　茂（川俣）　佐藤　晴子（白女）
　　長谷川省三（若商）　大野山美子（喜女）　渡辺　嘉博（二工）　菊地　真理（郡女）
　　田子　博道（磐城）　神野かね子（川俣）　小野寺和美（喜工）　須藤　泰子（喜高）
　　簗取　惣一（喜工）　中川　睦子（喜女）
　　※下山田守夫（3次リーグA組2勝－3敗）

【県中学生卓球スポーツ教室】

53' 高校総体の主力選手となる中学生を対象として実施する。
主催　福島県卓球連盟
共催　福島県教育委員会
期日　昭和51年2月15日
会場　須賀川市牡丹台体育館
参加　県北・県中・県南・会津・いわき
　　中学校20校（男子24名　女子24名）
指導　県内優秀選手（一般）

【県卓球連盟強化合宿】

主催　福島県卓球連盟
共催　福島県教育委員会　双葉町教育委員会
期日　昭和51年3月21日～23日

会場　双葉町体育館
指導　平石　家治（強化部長）
　　大橋　　柾　　西郷徹夫　　渡部洋一
参加　一般・高校生・中学生
　※高校生は新人大会ベスト8　　男子 8名　　女子 8名

【卓球新人（1・2年生）強化合宿】

期日　昭和51年3月31日～4月2日
場所　相馬市　相馬高校体育館　（宿泊）海浜青年の家
指導　大橋　柾（平工）　西郷徹夫（原町）　渡部洋一（大沼）
参加　男子18名　女子20名

【1年生卓球大会】

期日　昭和51年6月27日
会場　男子　安積高校　　女子　安積女子高校
対象　50年中体連ベスト8　各地区男・女各4名　　地元若干名増
指導　三浦勝美　　大橋　柾　　松崎俊一　　西郷徹夫　　渡部洋一
参加　県　北　　男子 5名　　女子 3名
　　県　中　　男子 5名　　女子 7名
　　県　南　　男子 5名　　女子 4名
　　会　津　　男子 4名　　女子 5名
　　いわき　　男子 6名　　女子 4名

【一年生中央強化会】

53' インターハイ主力選手の強化合宿
期日　昭和51年8月23日～25日
会場　いわき市関船体育館
指導　大橋　柾（平工）西郷徹夫（原町）　渡部洋一（会農）
参加　男子13名　女子12名

【昭和51年度高校生の強化】

スポーツセンター校を中心とした強化練習会
いわき地区　　平工業高校　磐城第一高校
県中地区　　田村高校
会津地区　　喜多方工業高校　喜多方女子高校

【昭和51年度　高校新人大会】

53インターハイに対応するため個人戦は学年別で実施する。

【1・2年生強化練習会】

期日　昭和51年12月19日
会場　郡山市　県営体育館
指導　　三浦勝美　　大橋　柾　　渡部洋一　　松崎俊一　西郷徹夫
参加者　①1・2年ランク保持者
　　②1年強化合宿ベスト8
　　③地区推薦2名・地元増
　　2年　男子40名　女子42名　　1年　男子36名　女子32名

【第二回東北卓球連盟強化選抜合宿】

期日　昭和52年1月4日～7日
場所　山形市　県体育館
参加　県内高校選抜選手　　男子8名　女子8名

引率　大橋　柾（平工）　渡部洋一（大沼）

【県外遠征選手選考会】

期日　昭和52年3月13日（日）

会場　郡山市県体育館

指導　三浦勝美　大橋　柾　他

参加　①新人大会2年の部　ベスト8

②新人大会1年の部　ベスト8

③52年度　強化指定選手

④強化指定チームの1年生で新人大会ベスト16の選手

【県外遠征（山形県）】

期日　昭和52年3月23日～24日

会場　山形市　県営体育館

指導　大橋　柾（平工）　松崎俊一（郡女）　斉藤隆弘（喜女）

参加　県内高校選抜男・女11名

（山形県高校選抜との合同練習）

【県内強化合宿】

期日　昭和52年3月24日～27日

会場　いわき市　関船体育館

指導　大橋柾（平工）　松崎俊一（郡女）　西郷徹夫（原町）　渡部洋一（会農）

参加　男子15名　女子19名

中学校20校（男子24名・女子24名）

【強化指定校・指定選手の指定方針】

選出基準（指定基準）

①昭和52年度

指定校・指定選手（エントリー数＋1）

昭和51年度一年生中央強化大会及び新人大会の成績によって指定する。

②昭和53年度

指定校・指定選手（エントリー数）

昭和52年度の各種大会の結果によって指定する。

【一次強化指定校・指定選手】

◦男子指定校

①喜多方工業高校　監督　清水　徹

②平工業高校　監督　大橋　柾

③福島商業高校　監督　伊藤　武志

◦女子指定校

①喜多方女子高校　監督　渡部　長二

②平商業高校　監督　椎根　邦夫

③郡山女子高校　監督　松崎　俊一

【指定選手（指定校選手外）】

①斎藤　保弘（磐城）　監督　坂本　宗弘

②小沢　孝一（勿来）　監督　田中　寛一

③斎藤　崇（喜高）　監督　三留　昭男

④平田　浩之（須高）　監督　北条　善雄

⑤東條　秀一（喜高）　監督　三留　昭男

⑥横村　伸夫（白川）　監督　佐藤　敬二

⑦菅野　忠信（相馬）　監督　斎藤　純男

⑧長島　真也（喜高）　監督　三留　昭男

①高平ひろみ（原町）　監督　西郷　徹夫

②小泉　洋子（喜高）　監督　手代木　健

③菅野　仁子（成女）　監督　斎藤　正雄

④瓜生　知江（成女）　監督　斎藤　正雄

⑤遠藤香代子（須女）　監督　石射　八郎

⑥永井　厚子（安女）　監督　八巻　和三

⑦佐藤　里美（白女）　監督　慶徳　一彦

【一次強化指定校・指定選手強化】

※指定選手は指定校と合同で合宿を行う。

①喜多方工業高校　強化合宿

昭和52年4月1日～4日　喜多方工

指定校選手　（喜多方工）　8名

指定選手　（喜多方高）　3名

コーチ　江川　淳一

指導　清水　徹

②平工業高校　強化合宿

昭和52年4月2日～5日　平工

指定校選手　（平　工）　8名

指定選手　（磐城・勿来・相馬）　3名

指導　大橋　征

③福島商業高校

昭和52年4月1日～4日　福島商

指定校選手　（福島商）　8名

指定選手　（須賀川・白河）　2名

指導　伊藤　武志

①喜多方女子高校

昭和52年4月1日～4日　喜多方女

指定校選手　（喜多方女）　8名

指定選手　（喜多方）　1名

コーチ　土屋　弘

指導　渡部　長二

②平商業高校

昭和52年4月29日～5月2日　平商

指定校選手　（平　商）　8名

指定選手　（原　町）　1名

コーチ　三木　圭一

指導　福崎　秀寿

③郡山女子高校

昭和52年4月1日～4日　郡山女

指定校選手　8名

指定選手（成女・須賀川・安女・白女）　5名

コーチ　深谷　秀三

指導　松崎　俊一

【1・2年生学年別大会】

期日　昭和52年6月19日

場所　郡山総合体育館

指導　三浦勝美　大橋　征　渡部洋一　松崎俊一　西郷徹夫

参加　男子 2学年 40名　1学年 36名

女子 2年生 42名　1学年 32名

〈成績〉

2年男子

1位 高橋典彦（平工）　2位 今野政寿（福商）　3位 佐藤稔（喜工）　3位 平田浩之（須高）

1年男子

1位 田沢裕浩（平工）　2位 鈴石隆（白農工）　3位 大平繁則（磐城）　3位 武藤雄二（喜工）

2年女子

1位 田村浩子（平商）　2位 高平ひろみ（原町）　3位 菅野仁子（成女）　3位 瓜生知江（成女）

1年女子

1位 内海香津子（喜高）　2位 鈴木真由美（喜高）　3位 綿貫明美（喜高）　3位 佐藤加代子（喜女）

【二次指定校・指定選手】

指定校　平工業高校　監督　大橋　征

喜多方女子高校　監督　渡部　長二

指定選手

ダブルス　選手	（監督）	選手	（監督）
①斉藤達也・今野政寿（福商）	伊藤武志	①内海香津代・鈴木真由美（喜高）	手代木健
②瓶子　巧・三浦昭浩（福島）	斉藤尚也	②山岡まゆみ・早尾　恵子（郡女）	松崎俊一
シングルス　選手	（監督）	選手	（監督）
①小沢　孝一（勿来）	田中　寛一	①田村　浩子（平商）	福崎　秀寿
②佐藤　義弘（喜工）	清水　徹	②高平ひろみ（原町）	西郷　徹夫

③武藤　雄治（喜工）　（清水　徹）　③石川ゆかり（保原）　大川　滋
④佐藤　稔（喜工）　（清水　徹）　④菅野　仁子（成女）　斉藤　正雄

【県外遠征】

期　日　昭和52年12月25日～27日
遠征先　熊谷商業・実践商業・相工大付属
引　率　大橋　征（平工）　渡部洋一（大沼）
選　手　佐藤　義弘（喜工）2年　佐藤　稔（喜工）2年　武藤　雄治（喜工）1年
高橋　典彦（平工）2年　佐藤　敬二（平工）2年　田沢　裕浩（平工）1年
小島　篤（平工）1年　斉藤　達也（福商）2年　今野　政寿（福商）2年
小沢　孝一（勿来）2年

熊谷商業高校
団体戦　福島選抜2－7熊谷商
個人戦　19試合（全敗）
熊谷商　永福則人（3）4勝0敗　竹之内君明（3）3勝0敗　渡辺武弘（2）3勝0敗
三上聖一（2）3勝0敗　上之原幸生（2）3勝0敗　内藤　（　）3勝0敗
団体戦では2勝したもののその後の個人戦では1勝も出来なかった全国トップレベルの選手と練習試合が出来たことは選手達にとって良い想いでになった。

実践商業高校
団体戦　福島A4－3実践商　福島B2－4実践商
福島A4－1成東高（千葉）　福島B4－3成東高
エース松本斉が不在であったが2、3番手から1勝するのが容易でなかった。

相工大付属高校
個人戦　44試合　16勝27敗
団体戦メンバーの山崎信一・井坂俊正・土志田淳の3人には 0勝11敗
メンバー以外の選手には 16勝16敗

期　日　昭和52年12月26日～28日
遠征先　真岡女子高校
引　率　西郷　徹夫（原町）
選　手　武藤　志津（喜女）2年　佐藤加代子（喜女）1年　五十嵐和江（喜女）1年
星　洋子（喜女）2年　村上　智恵（郡女）2年　早尾　恵子（郡女）2年
山岡まゆみ（郡女）2年　高平ひろみ（原町）2年
田村　浩子（平商）2年

53' インターハイ
真岡女子高校出場メンバー
早瀬洋子・福田秋枝・黒須玲子（3年）　西村さとみ（2年）　荒山光江・早瀬美希子・荒井玲子（1年）
（選手名簿から転記）

※合宿で世話になった真岡女子高選手は山形インターハイの準決勝で優勝した都城商に3－4で惜敗、3位入賞であった。

【県外遠征所感】

真岡女子高校との合同練習で行った試合の成績については、記録を残していないので、ここに記載出来ないが、当時真岡女子高校は、全盛時代であり（昭和48年～昭和56年）全国高校総体女子学校対抗では、昭和49年、昭和50年と2年連続優勝、その後昭和55年にはダブルスとシングルス（福田法子：世界選手権日本代表）に優勝するなど、高校女子卓球の頂点に立っていたころであったので、練習試合では、接戦のゲームもあったが、本県の選手は全敗であったと記憶している。

しかし、当時の全国レベルにある選手と共に練習やゲームができたことは大きな収穫であったと思う。

また、真岡女子高校の選手が高校の一流であったが、指導者である大島俊之助先生もまた高校女子卓球界の一流の指導者で、昭和52年（1977）の世界選手権（バーミンガム）の日本代表に高橋省子・福田法子（真岡女子高校出身）が選ばれたことから、ヘッドコーチとして派遣されている。

この合同練習では、本県の選手のみならず、私自身も先生から卓球指導のコツの多くを学びとってきたもので、今それが私の財産になっている。

なお、県外遠征先を真岡女子高校に選ぶきっかけとなったのは、昭和52年の1月オリンピック記念青少年総合センターで開催された（財）日本体育協会・日本卓球協会主催の「上級公認コーチ資格認定研修会」（2週間）で大島先生と同室で研修を共にしたことが縁となり、真岡女子高校の胸を借りることになったものである。

（西郷徹夫・記）

【県内強化合宿】

期日　昭和53年1月5日～1月7日

場所　いわき市常磐　関船体育館

指導　大橋　柾　　西郷徹夫　　渡部洋一

選手　中川　浩・長谷川　治（喜工）東条秀一・長嶋真也・斉藤　崇（喜高）吾妻信孝・坂口祐二・伊藤栄弘・鈴木則彦（平工）大内雅之（福商）斉藤保弘（磐城）平田浩之（須高）菅野忠伸（相馬）横村伸夫（白河）鈴石　隆（白農工）中川佐都子・猪股恵美子・板橋良子（喜女）八代英子・荒屋ひとみ（郡女）瓜生知江・菅野仁子（成女）新妻仁美（平商）小泉洋子・内海香津代・鈴木真由美（喜高）井沢幸子・菅原美奈子（磐女）渡辺民子（二本松工）永井厚子（安女）

【1・2年生学年別大会】

期日　昭和53年2月19日

場所　郡山総合体育館

参加　2年男子 66名　　1年男子 60名　　2年女子 58名　　1年女子 51名

指導　三浦勝美　　大橋　柾　　渡部　洋一　　松崎俊一　　西郷徹夫

〈成績〉

2年男子

1位　斉藤達也（福商）2位　中川　浩（喜工）3位　佐藤義宏（喜工）3位　今野政寿（福商）

1年男子

1位　小島　篤（平工）2位　田沢裕浩（平工）3位　武藤雄治（喜工）3位　浦野昭浩（福島）

2年女子

1位　田村浩子（平商）2位　菅野仁子（成女）3位　高平ひろみ（原町）3位　長尾洋子（日女）

1年女子

1位　沼田弥生（日女）2位　丹野ひとみ（四倉）3位　横井悦子（白女）3位　村上さよ子（田村）

【二次指定校・指定選手県外遠征】

①平工業高校 8名　勿来高校 1名

期　日　昭和53年3月22日～24日

引率者　大橋　柾（平工）

遠征先　山形県　日大山形高校・長井工業高校・山形電波工業高校

②喜多方女子高校 8名　喜多方高校 2名

期　日　昭和53年3月24日～27日

引率者　渡部長二（喜多方女）

遠征先　埼玉県　川口女子高校

③福島商業高校 2名　福島高校 2名

期　日　昭和53年3月25日～26日
引率者　伊藤武志（福商）　斉藤尚也（福島）
遠征先　山形県　日大山形高校・山形電波工業高校
④喜多方工業高校 3名
期　日　昭和53年3月24日～26日
引率者　清水　徹（喜多方工）
遠征先　東京都外　実践商業高校・日本化成KK
⑤平商業高校 1名　原町高校 1名
期　日　昭和53年3月21日～23日
引率者　佐藤雅信（原町）
遠征先　東京都　三井生命
⑥郡山女子高校 2名　成蹊女子高校 1名　保原高校1名
期　日　昭和53年3月25日～26日
引率者　松崎俊一（郡女）　斉藤正雄（成女）　大川　滋（保原）
遠征先　山形県　山形城北女子高校

【第3回東北卓連選抜合宿】

期日　昭和53年3月28日～30日
場所　山形市　山形県体育館
引率　大橋　柾　渡部洋一　佐藤雅信
選手　小沢孝一（勿来）　斉藤達也・今野政寿（福商）　高橋典彦・佐藤敬二・田沢裕浩・小島篤・伊藤栄弘（平工）　田村浩子（平商）　八代英子・村上智恵（郡女）　鈴木真由美・内海香津子（喜高）　高平ひろみ（原町）　石川ゆかり（石川）　菅野仁子（成女）

【53' 全国高校総体出場監督・選手】

男子学校対抗　喜多方工業高校
監督　清水　徹
選手　佐藤　稔3年　佐藤義宏3年　中川　浩3年　武藤雄治2年　長谷川治2年
須藤賢一2年　田沢徳博2年
女子学校対抗　喜多方女子高校
監督　渡部長二
選手　星　洋子3年　武藤志津3年　中川佐都子3年　小田切美智子3年　五十嵐和江2年
笠井英子2年　中川民子1年
男子ダブルス
①選手　斉藤達也3年（福島商）　今野政寿3年
監督　伊藤武志
②選手　佐藤義宏3年（喜多方工）　中川浩3年
監督　清水　徹
女子ダブルス
①選手　田村浩子3年（平商）　小野美恵1年
監督　福崎秀寿
②選手　星洋子3年（喜多方女）　武藤志津3年
監督　渡部長二
男子シングルス
選手　①横山武浩3年（福島工）　②武藤雄治2年（喜工）　③田沢裕浩2年（平工）
③菅野　進2年（福島工）
監督　鈴木一吉（福島工）　清水　徹（喜工）　大橋　柾（平工）

女子シングルス

選手　①田村浩子3年（平商）　②武藤志津3年（喜女）　③鈴木真由美2年（喜多方）
③佐藤里美3年（白河女）

監督　福崎秀寿（平商）　渡部長二（喜女）　手代木健（喜多方）　野崎啓一（白河女）

【調　整　合　宿】

①喜多方工

期日　昭和53年7月24日～27日　　場所　喜多方工業高校

②喜多方女・喜多方・白河女

期日　昭和53年7月24日～27日　　場所　喜多方女子高校

③福島商

期日　昭和53年7月24日～27日　　場所　福島商業高校

④福島工

期日　昭和53年7月24日～27日　　場所　福島工業高校

④平　工

期日　昭和53年7月26日～29日　　場所　平工業高校

⑥平　商

期日　昭和53年7月22日～25日　　場所　平商業高校

【昭和53年度全国高等学校総合体育大会】

〈卓球競技〉

期日　昭和53年8月1日～6日　　場所　山形県新庄市体育館

【福島県選手の成績】

男子学校対抗

①喜多方工 1－4 関東第一（東京）

女子学校対抗

①喜多方女 4－1 土佐女（高知）
②喜多方女 4－1 浜松商（静岡）
③喜多方女 0－4 柳川商（福岡）

ベスト16は立派な成績

男子ダブルス

①佐藤・中川 2－1 民徳・滝沢（滋賀・伊香）　②佐藤・中川 1－2 伊藤・吉田（愛知・桜丘）
③斉藤・今野 1－2 宮本・佐久間（新潟・新発田）

女子ダブルス

① 星 ・中川 2－0 田中・増居（滋賀・彦根工）
田村・小野 2－1 光井・浜本（山口・柳井商）
② 星 ・中川 0－2 穐山・平野（鳥取・由良育）
田村・小野 1－2 山田・神谷（福岡・小倉商）

男子シングルス

①武藤 0－2 林（大阪・近大付属）　菅野 2－0 打越（石川・七尾工）
田沢 2－0 大西（奈良・山辺）　横山 2－1 野上（群馬・沼田）
②菅野 0－2 福田（京都・東山）　田沢 0－2 中山（香川・高松）
横山 2－1 前田（三重・津工）
③横山 0－2 宮本（新潟・新発田）

女子シングルス

①鈴木 0－2 大野（埼玉・星野女）　武藤 2－0 福元（鹿児島・照国）

②田村 1－2 山本（兵庫・洲本）　　佐藤 0－2 土橋（京都・明徳商）
武藤 2－0 原田（奈良・帝塚山）
③武藤 1－2 大休寺（宮崎・都城商）

大休寺選手は4シードで3位に入賞した強豪武藤選手の健闘を称えたい。

53' 福島高校総体も終了した。

当初、目的に掲げた3位入賞は果たせなかったが3年余りにわたる県卓球連盟と卓球専門部との連携による選手強化の成果は確実に高校生のレベルアップに繋がってきたと信じている。

県外開催種目として強化費等の制約は受けたが反面競技役員養成・大会準備等の煩わしさからは開放され選手強化に専念することができた。

選手を強くするためには練習時間・強化費・指導者の熱意と練習場所も必要で、条件整備をすることが大切だと思う。

また、強化指定の資料・強化選手たちの成果を示すため、昭和50年～54年の高校大会・新人大会の記録を掲載することにした。

最後に選手強化に共に携わってきた皆様に感謝すると共に県卓球協会と高体連卓球専門部の益々の発展を祈念いたします。

◎昭和50年度新人大会成績（51・1・7～8）

男子学校対抗
1位 平　工　　2位 喜多方工　　3位 安　積　　3位 相　馬

女子学校対抗
1位 喜多方女　　2位 喜 多 方　　3位 安 積 女　　3位 郡 山 女

男子シングルス
1位 下山田守夫（平　工）　　2位 田子　博道（磐　城）　　3位 緑川　雅之（平　工）
3位 大木　重実（須賀川）

女子シングルス
1位 須藤　泰子（喜多方）　　2位 安藤里恵子（日女工）　　3位 菊地真理（郡山女）
3位 石井サツキ（平　商）

◎昭和51年度　高校大会（52・6・2～3）

男子学校対抗
1位 喜多方工　　2位 須 賀 川　　3位 小 高 工　　3位 若 松 商

女子学校対抗
1位 喜多方女子　　2位 平　商　　3位 日本女工　　3位 喜 多 方

男子ダブルス
1位 下山田守夫・高田　篤（平　工）　　2位 馬場幹雄・生田目孝（平工）
3位 佐藤敏行・鈴木秀文　（小高工）　　3位 田子博道・長尾祐一（磐城）

女子ダブルス
1位 中川佐都子・菊地久美子（喜女）　　2位 石井サツキ・永山知以子（平商）
3位 須藤　泰子・菅原真理（喜多方）　　3位 菊地真理・大桃由美子（郡山女）

男子シングルス
1位 下山田守夫（平工）　　2位 星　哲太郎（磐城農）
3位 深沢　正人（喜工）　　3位 佐藤　好則（船　引）

女子シングルス
1位 須藤　泰子（喜多方）　　2位 神野かね子（川俣）　　3位 中川　睦子（喜女）
3位 大野由美子（喜女）

◎昭和51年度　新人大会成績（52・2・5～6）

男子学校対抗

1位　喜多方工　　2位　田　村　　3位　磐　　城　　3位　喜多方

女子学校対抗

1位　喜多方女　　2位　平　商　　3位　県立石川　　3位　日女工

男子シングルス2年生の部

1位　小野寺和美（喜工）　　2位　佐藤　議　（喜工）　　3位　佐藤敏行（小高工）

3位　瀬戸雄一　（湯本）

男子シングルス1年生の部

1位　斉藤保弘　（磐城）　　2位　小沢孝一　（勿来）　　3位　東条秀一（喜多方）

3位　今野政寿（福島商）

女子シングルス2年生の部

1位　須藤泰子（喜多方）　　2位　中川佐都子（喜女）　　3位　馬目朋子（小名浜）

3位　金田真寿美（喜女）

女子シングルス1年生の部

1位　田村浩子（平　商）　　2位　高平ひろみ（原町）　　3位　武藤志津（喜女）

3位　菅野仁子（成蹊女）

◎昭和52年　高校大会（52・6・8～10）

男子学校対抗

1位　福 島 商　　2位　喜多方工　　3位　喜多方　　3位　平工

女子学校対抗

1位　喜多方女　　2位　平　　商　　3位　保　原　　3位　喜多方

男子ダブルス

1位　佐藤敏行・大野光幸（小高工）　　2位　田子博道・長尾祐一（磐城）

3位　馬場幹雄・生田目孝（平　工）　　3位　根本利雄・鈴石　隆（白農工）

女子ダブルス

1位　中川睦子・菊地久美子（喜　女）　　2位　池亀初子・金田真寿美（喜女）

3位　石山波子・服部由美子（福西女）　　3位　星　洋子・武藤志津　（喜女）

男子シングルス

1位　小野寺和美（喜工）　　2位　桑原要勝（安達）　　3位　田子博道（磐城）

3位　斉藤達也（福島商）

女子シングルス

1位　菊地久美子（喜女）　　2位　田村浩子（平商）　　3位　武藤志津（喜女）

3位　金田真寿美（喜女）

◎昭和52年度新人大会成績（52・11・25～27）

男子学校対抗

1位　平　　工　　2位　喜多方工　　3位　福　島　　4位　白河

女子学校対抗

1位　喜多方女　　2位　喜 多 方　　3位　郡山女　　4位　白河女

男子シングルス

1位　斉藤達也（福島商）　　2位　高橋典彦（平　工）　　3位　武藤雄治（喜　工）

3位　佐藤　稔（喜　工）

女子シングルス

1位　田村浩子（平　商）　　2位　武藤志津（喜　女）　　3位　石川ゆかり（保原）

3位　鈴木真由美（喜多方）

◎昭和53年　高校大会（53・6・10～12）

男子学校対抗

1位　喜多方工　　2位　福島商　　3位　平　工　　4位　福島工

女子学校対抗

1位　喜多方女　　2位　郡山女　　3位　平　商　　4位　喜多方

男子ダブルス

1位　斉藤達也・今野政寿（福島商）　　2位　佐藤義宏・中川　浩（喜　工）

3位　武藤雄治・佐藤　稔（喜　工）　　3位　横山武浩・菅野　進（福島工）

女子ダブルス

1位　田村浩子・小野美恵（平　商）　　2位　星　洋子・武藤志津（喜女）

3位　菅野仁子・瓜生知江（成蹊女）　　3位　鎌田正子・小野田真澄（双葉）

男子シングルス

1位　横山武浩（福島工）　　2位　武藤雄治（喜　工）　　3位　田沢裕浩（平　工）

3位　菅野　進（福島工）

女子シングルス

1位　田村浩子（平　商）　　2位　武藤志津（喜　女）　　3位　鈴木真由美（喜多方）

3位　佐藤里美（白河女）

◎昭和53年度新人大会成績（54・1・26～28）

男子学校対抗

1位　平　工　　2位　喜多方工　　3位　福島商　　4位　磐　城

女子学校対抗

1位　平　商　　2位　日女工　　3位　喜多方　　4位　浪　江

男子シングルス

1位　小島　篤（平　工）　　2位　武藤雄治（喜　工）　　3位　佐藤　誠（喜　高）

3位　須藤賢一（喜　工）

女子シングルス

1位　小野美穂（平　商）　　2位　内海香津代（喜高）　　3位　鈴木真由美（喜高）

3位　遠藤真弓（若　女）

◎昭和54年高校大会（54・6・9～11）

男子学校対抗

1位　平　工　　2位　福島工　　3位　福島商　　4位　喜多方工

女子学校対抗

1位　平　商　　2位　喜多方女　　3位　白河女　　4位　喜多方

男子ダブルス

1位　大内雅之・高野　恒（福島商）　　2位　菅野　進・湯沢　学（福島工）

3位　小島　篤・鈴木則彦（平　工）　　3位　田沢裕浩・鈴木誠一（平　工）

女子ダブルス

1位　内海香津代・鈴木真由美（喜多方）　　2位　鵜名山啓子・綿貫明美（喜多方）

3位　笠井英子・渡部みゆき　（喜　女）　　3位　石川由起子・柳沼友子（保　原）

男子シングルス

1位　小島　篤（平　工）　　2位　大内雅之（福島商）　　3位　田沢裕浩（平　工）

3位　須藤賢一（喜　工）

女子シングルス

1位　井戸川貴子（磐城女）　　2位　小沼ヒロ子（喜女）　　3位　小野美恵（平　商）

3位　小林咲江　（只　見）

前高体連卓球専門部 委員長　大　橋　　征

☆回　想……

もくじ

私の卓球人生　諸星　光雄 …… 75
ふくしま国体の思い出　河野　歌子 …… 77
「第50回ふくしま国体審判員」――思い出と苦労――　小林　文子 …… 77
「第50回ふくしま国体審判員」としての思い出　佐藤アヤ子 …… 78
「第50回ふくしま国体審判員」の思い出　菊地　久子 …… 78
――2級審判員資格の尊さ――
「第50回ふくしま国体審判員」を経験して　津島　佳子 …… 79
ふくしま国体の思い出　小野田純子 …… 80
私のふるさと　藤田　由稀 …… 80
思い出　増田　淳子 …… 81
「第50回ふくしま国体審判員」の想い出　西片美代子 …… 81
国体出場の想い出　反畑　秀彦 …… 82
ピンポンから卓球へ　井上　六郎 …… 83
卓球に魅せられて　斎藤恵美子 …… 84
私と卓球　田辺ふみ子（旧姓 佐藤） … 84
「第50回ふくしま国体審判員」　横山　正子 …… 85
「喜多方高校卓球OB会創立30周年を迎えて」　五十嵐修二 …… 86
ふくしま国体の想い出　生井　一弥 …… 86
東京選手権サーティの部優勝を果たして　原　晃 …… 87
卓球と出会って31年　大和田元一 …… 87
「ふくしま国体」の審判員を務めて　河村　朝子 …… 88
ふくしま国体と私　大越　守 …… 88
私の思い出　岡田　晶子 …… 89
卓球生活の回想　福島　正子（旧姓 尾形） … 90
私の卓球人生の中での忘れられない中国遠征　佐々木トシ子（旧姓 橋本） … 90
卓球と協会との出会い　大嶋　克子 …… 91
大会参加の想い出　松本　厚子（旧姓 奥村） … 92
卓球は不滅　橋本　義一 …… 93
卓球を通じて出会った人々　根本　裕子（旧姓 佐藤） … 94
学長にほめられて　伊藤　二郎 …… 94
団体準優勝　単・複　優勝成る　高橋　敏夫 …… 95
青春時代　片桐　寛（旧姓 日下） … 96
魅せられて　田中　滋子（旧姓 猪瀬） … 97

私の卓球人生

諸　星　光　雄

私の卓球の始まりは昭和28年（中学2年生）の時で、入部の遅い私は中学時代は補欠選手でした。中村第一中学校は森口先生の指導のもとに相双地区ではつねに上位の成績のようでした。中学も3年生の夏休みが終わると大きな試合もなく高校進学に向け休部になりますが、卓球が面白くなって来た私は、下級生に混じって卒業式を迎えるまでやり通し、相馬高卓球部に希望を抱いていました。

当時は一般家庭ではお金も自由になりませんでしたし、汽車に乗る機会も少なく、行動半径も狭く、卓球の情報も入って来ない状況でした。高校入学後、解ったことは相馬高校の卓球部は伝統があって、当時の3年生は梅原・佐原（兄）・佐藤・早川・亀田と2年生の佐原（弟）が居られ県では強い卓球部でした。当然1年生の時は補欠にも入れず遠征には行くことも出来ませんでした。

少ない情報の中で相双地区には大人の方できれいなフォームで卓球をしていた鈴木・半谷さん・高校生では同じ小高地区の草野・藤井・藤が近隣にいました。

1年生の夏が過ぎ3年生は試合がなくなり進学勉強に入り、上手な上級生には練習をつけて貰えなかったが、残った草刈・岩佐と私が先輩達が使用していた良い場所でやれるようになりました。暫くして梅原先輩が学校から費用も出ない、全日本ジュニアに出場することになり、上手な3年生は進学の準備でいない訳ですから仕方なく、私を教えながら、練習台にしたようです。無我夢中で卓球に熱中した時代でした。

その梅原先輩がその年全日本ジュニア大会で第5位の成績を収めたのです。びっくりしました。

1年も終わり頃になりますと同輩の草刈も私も進学希望で練習も休みがちになり、2年生の春の県のインターハイには岩佐・新入生久本・休部状態の佐原（弟）・草刈と編成して大会出場するまでにこぎつけ、恐らく団体・個人戦で1・2回戦で負けたら部が消滅していたかも知れません。

大会に出場とは云え県の他のレベルも解らない状態で、黙々と試合をし、終わって見たら考えもつかない私が優勝となったのです。

大会を終え、自分達の力量が解り、新たな意欲が沸き練習に励んだのですが、佐原（弟）・草刈が去り、時折、母校の中学校である中村第一中学校へ、次年度高校入学受験する者と練習をしました。

3年生の春の大会は新入生5名が入部し、手薄な選手層ですから、1年生にも団体戦に出て貰いました。結果は忘れましたがベスト4位には入ったのでないかと記憶しています。

個人は私が連続優勝とその後の東北大会シングルも決勝で、渡辺（山形県）に勝ち優勝を獲得しました。これも先輩、後輩に励まされ無我夢中で練習をした賜物と思っております。

その後私は中央大学に入学した翌年、（木幡・佐々木・反畑・門馬・小泉）達がやって来られました。東北大会団体・ダブルス優勝・シングルス木幡が小中（青森）に負けたが第2位とほぼ制覇を達成したと聞き大変うれしく感じましたし、伝統を立ち切らずよかったとも同時に思いました。

大学時代は身近には教えを受けた梅原先輩・監督横山さん・堀江さん・鎌田さんいずれも福島県出身でしたので何かと面倒頂き、何とか卒業した訳ですが、1年の後半から生活のために先輩にコーチ先を貰い週3回程やり続けました。

大学での成績は東日本学生Sベスト4・ダブルスベスト4を2回・全日本学生ベスト8位、2年生からリーグ戦出場、の結果で全日本硬式はベスト32が最高でした。

大学卒業後はシチズン時計に高校、大学と一緒に高校の時に東北大会の決勝をした渡辺（山形県）と入社し、全日本実業団大会の団体にて優勝をはたしています。全日本実業団では一層古くなりましたが、渡辺と共に第一期生になり、本年4月渡辺・10月に私も定年を迎えます。

最後になりますが忘れられないのは兄の友達だった西郷さん（現県会長）です。家も近く、福大生の時、実家に帰って来られた時母校に顔を出し、教えて下さった事ありがとうございました。

また今般の大事業の70年史を編集に当たられる方々に感謝申し上げます。と同時に県卓球協会のご

発展をお祈り致します。私も小さいながら県の卓球協会の方々と同じような東京の東村山市連盟の会長をして居ります。

機会を作り、こちらからご挨拶に行かねばと思って居ります。寄稿させて頂きましてありがとうございました。

〔第50回 東北高等学校卓球選手権大会記念誌「白球の軌跡」より〕

第11回大会（昭和32年）出場

男子シングルス優勝

諸　星　光　雄
（福島県・相馬高校出身）

「思　い　出」

東北高体連卓球50周年記念誌の発刊、御目出度うございます。突然の寄稿とのことで、忘れかけているタイムトンネルを31年前に逆戻りし高校時代に返って見たいと思います。

卓球との出会い、福島は相馬市（旧中村町）の町立中学校の2年生の時、野球では見込みがないので、卓球を始めました。

地域の中学では強い方で小生は補欠の存在でした。しかし遅く始めた小生は徐々に面白くなり、高校進学準備もせず、下級生と卒業時期まで休むことなく練習を続け、S30年4月相馬高校に入学、上級生とは技の差があり、ほんの時々手合わせをして貰える程度でした。1年生の夏休み過ぎから上級生は進学の準備で練習場に来なくなり、その時只一人全日本硬式ジュニアに出場が決まっていた梅原哲次（中大卒）が小生にに教えながら練習台として、大会にのぞみ福島県の田舎高校から第5位？とすばらしい成績を残されました。

小生も感動し、更に練習に力が入り、2年生の春、県の大会には何とか人数を集め参加し、小生がシングル優勝したため、廃部は何んとかまぬがれ、後輩（中学生）の事も考え、練習に明けくれました。

学校の部予算も少なく、大会出場は春のインターハイ・団体県予選のみで、全日本硬式ジュニアは認めて貰えませんし、全国大会に出場してもたかが1、2回戦でしょうし、まだどこの家庭でも経済的な余裕がありませんでした。

小生の練習は他流試合もしないし、学校のみでの練習で、休みになると来て下さる梅原、西郷（福島大一現県協会会長）の大学生のボールと触れることが、待ち遠しく又教わったこと・感じたことを、次に来る時までマスターすることを心掛けました。

このような環境で3年生の時東北で優勝した訳ですが、正直なところ他流試合もしてませんでしたし、地元で強い大人もいませんでしたので自分の実力がどの位か解りませんでした。ただいえることは年に数回レベルの高い指導を受けていたのだと後になって解りました。小生3年生になり、待ちに待った後輩が5名入部し、教えながら小生の練習のプレーの幅も広くなったような気がします。

2年後、その後輩達がシングルスは準優勝でしたが、ダブルス・団体戦優勝を果たしてくれました。

我れながら先輩の残してくれた伝統を後輩に引き継げたと自負しております。

現在はシチズン時計㈱に在職していますが、東京都下、東村山市の卓球連盟の世話役をし地域の各種大会を開催し、卓球にたずさわってます。

東京都下にも東北の関係者が地域の世話役となっている方が非常に多いようです。それは日本の卓球の主流は東北が永年伝統的に続いた事からと思います。今後も卓球に理解のある方が多い地域東北から優秀な卓球を愛する方々が輩出することを願っております。最後に卓球を通じて得た経験・知識が意識せずとも小生の人間形成に大きな支え・力になっていると思います。そして高校時代という大切な時期が人の人間形成に大きな影響を持っているような気がします。決心し、目標に向かって挑んで下さい。

また益々の東北高体連卓球選手権大会のご発展をお祈り申し上げます。

ふくしま国体の思い出

河　野　歌　子

平成7年、私の住む須賀川市は、卓球と銃剣道の会場となりました。それまでスポーツ広場であった須賀川インター近くに立派なアリーナが建てられ、国体の規模のすごさを感じました。

さて、それより約1年前、地元では国体課を中心に着々と準備をすすめていたところ、式典アナウンサーの一般公募が広報に載っていたのをみて、高校時代つらくてもなんとか続けていた卓球部のことを思い出して是非お手伝いしたいと応募しました。

選ばれた4名の中で最年長ではありましたが、1年間の研修期間は、いつも楽しく、ためになり、あらためて日本語の響きの美しさとむずかしさを感じました。

そして、式典アナウンサーに選ばれた時から、安女卓球部のコーチとして、熱心にご指導下さった深谷秀三先生に当日必ずお会いできることを楽しみにしていたのです。（まえもってお知らせするともせず、半分驚かせたかったという思いもあったのですが…）案の定、県代表選手を引率する総監督として、深谷先生のお名前がありました。ハイレベルな成績を収めた県代表選手の方々への閉会式表彰の後に、ゆっくりお話しはできなかったのですが、お疲れ様でしたという想いで、先生の近くに寄って握手をしていただいた事が、ついこの前の出来事のようです。

初日と最終日の二日間、国体の式典アナウンサーとして無事その任務を終え、お手伝いできたことは、何事にもかえがたい貴重な体験でした。

「第50回ふくしま国体審判員」

―思い出と苦労―

小　林　文　子

21世紀を目前にして「第50回福島国体」が、平成7年に卓球は須賀川と決まった時、先生から国体の審判をと言われた、しかし私のような未熟な者が務まるかどうか心配で友人と3人で話し合った。責任重大な仕事程やりがいがあるかもと、皆でやる事に決め先生に報告した。しかし返事をしたあとで又迷った。それは2級審判の資格を取らねばならないからだ。ルールブックを渡され、最初はルールの細則を全部覚えるよう云われた。会社から帰り夕食、入浴してから開くが、すぐに睡魔におそわれさっぱり進まない。2人の友人に聞くと順調の様子、ますます私は焦るばかり、どんなに辛くても取らねば……先生は、3級、2級、1級、国際と1度もつまずかずクリヤーしたのに必死の努力で平成5年12月に合格しとても嬉しかった。次の年平成6年11月長野県栄川村で第3回地球ユース卓球日本代表決定大会に壁谷先生に連れられ始めて審判実務、東京からも20名、一緒に審判をし、とてもやさしく指導を受けた。それが私達に自信をつけさせたのです。

国体の近くになり毎週土曜午後6時に勉強会と大会の打ち合わせで須賀川に通った。試合の事を考えると眠れない時もあった。いよいよ大会になり、天皇陛下のおいでになった時の審判の時、すごく緊張し手の震えを押さえる事が出来なかった。選手に気付かれないよう握りしめ机に押しあて我慢した。私に比べ選手もどんなにか緊張しているだろうと、気を取りなおし審判に臨みました。

試合が始まると、今迄の緊張が、自分でも信じられない程、声も出、ジェスチャーも大きく、今まで、いく度となく講習で練習してきた、成果が出てきたのです。私は、第1日目にして、体の不調で医者の世話になるあり様で、審判を断念する様な状態でした。そんな時、自分も審判をして疲れているのに、他人の世話まで甲斐しく、世話をしてくれた良き仲間に助けられ、決勝戦迄、審判を務める事が出来ました。

いろいろの苦労もありましたが、最後に「良かったですよ」と、審判長（白川さん）の評価に、最

後迄、成し遂げた重大さ、喜びを感じながら、私の人生に忘れる事の出来ない宝物として、思い出に残したいと思います。

「第50回ふくしま国体審判員」として思い出

佐　藤　アヤ子

第50回ふくしま国体の卓球競技の審判員となるために少し勉強をしないかと壁谷先生に言われた。それは、「今持っている3級審判員の上の、2級審判員の資格を取る為にだよ、今のところ、我が県には女性の2級審判員は1人も居ないので是非貴方達に取って貰いたいのだ。」これはいつも、東京の審判に行くと思うのです。

俺もしっかり教えるから‥‥3人で相談して、皆、主人の許可を貰った。それでは、平成5年12月にそのテストがあるので、そこを目標に始めた。最初はトーナメント法の組合わせ、次にシード選手はどこに入れるか、等から入った。今度はルールのしくみについて、まず第1に日本卓球ルール細則を全部覚えること。次に、日本卓球ルールの基本ルール・競技ルールと、大分勉強してからは、わたしがプリントに問題を作ってそれをやらせた。12月のテストは男性3人、女性3人、全員合格した。

平成6年11月、長野県楢川村ナショナルトレーニングセンターで、第3回地球ユース卓球選手権日本代表決定大会に壁谷先生に連れられて、東京からも20名の審判員と一緒に組んで本当の審判法を教わった審判実務が本当に自信になりました。

国体の3ケ月前から毎週午後6時から須賀川で勉強会があった。特に大会の運営について、試合の事を考えると眠れない事もありましたが私は、第7コート主任を命ぜられ、皆良い人ばかりでチームワークも良く順調に試合も運び、1日目、2日目と日を追う毎に慣れて不安も消え、一流選手の試合が間近で見れるという楽しみを感じることが出来るようになりました。又、最終日には、励まし合いながら続けてきた友と一緒に、団体の決勝戦の審判をすることができとても光栄で、想い出深いものとなりました。

今国体を振り返ってみれば、同じ目標に向かって、皆んなが1つになり燃え、協力して、とても楽しい時間を過ごしてきた様に思います。私自身が審判をやり通せたのは、導いて下さった壁谷先生、そして協力してくれた仲間がいたからだと思って感謝しています。このすばらしい経験は永久に忘れることなく私の心の中で輝いているでしょう。

「第50回ふくしま国体審判員」の思い出

―2級審判資格の尊さ―

菊　地　久　子

第50回ふくしま国体が近づく事で、ルールの勉強に入り、何回も講習会を受けました。今度の試験は今持っている3級の資格の上、2級審判の資格なのです。この資格を取った女性は、まだ我が県には1人も居ないので、是非取って欲しいとのことでした。

そのためか、壁谷先生の特訓も、とてもきびしかったです。私は試験までには、何回も止めようと思いました。なにしろ内容がむずかしく、3級の資格試験とは比べものにならないのです。しかし、仲間に、せっかく始めたのだから、ここで止めたら、おそらくもうチャンスは訪れないよと励まされ、心を入れ替えて、猛勉強をしました。

そして、平成5年12月に受験したのです。2週間程過ぎて、壁谷先生に呼ばれ、ドキドキしながら

行ったら、「おめでとう」と言われ、本当にうれしく天にも昇る思いでした。努力が報われたんだ、何事も苦しさから逃げては成功しない事を教えられました。

そして、先生に、「貴方達（3人）は、これから全国大会の、準決勝、決勝の審判をする資格を、取ったのです。」と言われ、またびっくりでした。

次の年、平成6年11月14日に、長野県梢川村ナショナルトレーニングセンターで、第3回地球ユース卓球選手権日本代表決定大会に、壁谷先生に連れられて始めての審判実務。東京からも、20名の審判員が来ました。

ここで、2泊3日、東京の審判員と一緒に組んで、本当の審判法を教わったのが、私達の自信になったのだと思います。又、壁谷先生は日本卓球協会からこの大会の審判長に指名され、立派に大会を終了させたのですから、たいしたもんだと思います。私達も、コート主任を福島国体で務められたのも、このおかげだと思っています。

福島県で国体ができたので、私の弟も、成年男子の剣道に出場し優勝しました。大会が成功する事と一緒に嬉しいです。

しかし何と言っても、主婦が家を空けて大会に協力できるのは、家族の協力、特に主人の理解と協力は不可欠で、いつも笑顔で送ってくれた事に心から感謝しています。

「第50回ふくしま国体審判員」を経験して

津　島　佳　子

突然、降ってわいた国体審判の話、お引き受けするまで随分悩みました。中学・高校と夢中で卓球をやったのに……このところ大部卓球とは縁がなかったので（子育てのため）、上手にと言うより、ミスをしないで、立派にジャッジが出来るかが、不安だったのです。でも先生が言うのなら大丈夫と思い引き受け一生懸命やりました。

あの「ふくしま国体」から、もう4年にもなるんですね。

仕事が、忙しく、感性が、少しずつすりきれているなーと思っていた矢先、審判の仕事は、神が与えてくれた、生活のリズムへのスパイスだったのかも知れません。

最初、「何んで、私が国体での審判に……」という気持ちもありましたが、先生に話を聞いて、40歳代で、度胸も持ちあわせた人が、審判員として欲しいのだと言われました。

日曜日ごとに、東北道を飛ばして、講習会に参加、1度も休まず、須賀川アリーナでの、ルールの勉強、自分が高校時代の時とは大部変わっている事に気付き、的を得た質問がとびかうようになってきた時は感動でした。

ルールの変わった所をどんどん覚え、皆と話をするうちに、意識も高まり、国体一色になっていったような気がします。

ルール勉強が一段落すると、今度は宣告と、ジェスチャーの練習、ごく自然に声と手が出るのには大部時間がかかった。家で鏡の前で声を出し、ジェスチャーの練習をするように先生に云われてやったのですが……遂に大会当日が来ました。私は、大きな大会で、審判実務を経験しなかったので、最初の審判、二日目の天皇陛下のおいでになった時の審判は、ともに副審だったのに、緊張のあまり声もジェスチャーも出来ず、夢中でした。でも福島国体に携わった事は、ここ4年間の私のステータスとなり、大きな自信となりました。この体験をさせて頂いた、先生始め関係者の皆様、同じグループで手足となって私の世話をして頂いた皆様本当に有難うございました。

この事は、いつも忘れず「心の宝」として大事に生きて行きます。

ふくしま国体の思い出

小野田　純　子

五十年に一度の国体がやってくる。しかも卓球競技が須賀川で開かれると決まった時の喜びと興奮は、いまだに鮮明に私の心に残っている。

さてそれから国体が開かれるまでの数年間は、平石家治競技委員長を中心に、関係者の方々の、御尽力は大変なものであった。毎年、各県での国体に視察団を派遣したり、地元で国体の記念大会を開いたり、講師に水村治男氏（富士短大教授）をお呼びしての講習会、選手強化会、審判の育成など多方面に渡る努力が積み重ねられた。また、会場についても初めは須賀川一中の体育館で開くということであったが、やはりやや会場の規模が足りないという事で、須賀川アリーナの建設が決まり、県内でも屈指の体育館が建てられた。それと同時に、市内にも各地区ごとに地域体育館が整備され、須賀川市民の意識も加速度的に大きく盛り上がっていったのである。「自分達の手で国体を成功させよう」この熱い思いが国体大成功の原動力であったと思われる。

平成七年十月、大会本番では私は記録委員として参加させていただいた。記録委員長は長場壮夫氏、副委員長には岩田悦次郎氏、同じ委員としては武田喜美男、三浦喜春、北村武宣、村越幸市、中村行雄、小澤俊恵各スタッフと共に大会の記録及び記録集の編纂に当たった。記録室には記録関係者以外にも印刷（主任堀田賢治氏）、掲示（主任鹿岡国俊氏）、送受信（主任入谷みちこ氏）の関係の方々もおられ、一つ一つの係内での仕事はもちろん、試合が始まってからは係同志の流れがスムーズにいくかが重要であった。しかしそこは卓球を通しての仲間同志、長場氏、調整の今泉一二氏（総務）のもと、初めはお互いに多少の戸惑いもあったがすぐに慣れ、一週間の大会がアッという間に終わった。誰もが一個人を離れ、国体の成功のみにかけた一週間であった。大会も地元の小塩浩選手の活躍や最後の成年二部の選手達の素晴らしい戦いぶりで大いに盛り上がり、結果も過去最高の総合二位となった。総監督の深谷秀三氏の喜びと安堵の顔が忘れられない。

五十年に一度の国体…終わってみてもその成功にかけた一人一人の熱い思いが、今も私の中に生き続けている。

私のふるさと

藤　田　由　稀

♪安達太良山の空青く～
♪安達太良山に父想い　阿武隈川に母偲ぶ～
♪安達のまゆみ古えの～

智恵子の言う“ほんとうの空”。光太郎と同じ様に私は、ふるさと福島を愛して止みません。福島に生まれ育ったからこそ、今の私があり、卓球人生があると思うのです。そしてその始まりは小学生だった私にある日突然やってきたのです。

両親は新聞を見ていました。三浦卓球道場との出会いでした。そしてそれは恩師、三浦勝美先生との出会いだったのです。最初は週2～3日でした。練習というより遊び場でした。礼儀から勉強まで三浦先生夫妻は、道場は私にとって、もう一つの家でした。小・中学校までは、好きな事ばかりしてても勝っていました。苦しい事など何一つない、ただライバル達に勝つ事が楽しく負ける事が悔しくて、大人の期待が嬉しくて。ずっと一番でいたい、だけど好きだから全然苦しいと感じなかったわけです。そして私は最もつらい3年間を味わう事となるわけです。国体にかけた情熱と裏はらにもがく毎日。応援までがプレッシャーとなって私をナーバスにして行きました。（好きな事をどうして楽しく出来ないんだろう…？）自分の可能性をあきらめかけた時期もありました。やめたくて、楽になりたくて泣きました。今でも、どっちの道が楽だったのか良く分かりません。

勝つ為に費やす時間の長さ、つらさは時に気が遠くなりそうな程です。でも好きなんです。卓球が。温かい応援が。支えてくれる人達の笑顔が!!

卓球を始めた事によって私は素敵な出会いを幾つもしました。多くの指導者、ライバル、応援してくれる人達。私の宝物です。お金では買えないものを卓球は私に与えてくれました。福島が生んだ仲間達は私を含め、今、全国各地で風を吹かしています。国体で得た、プレッシャーに勝つ精神力、数々の全国大会で得た最後の一本まであきらめない根性、勝つ事への執念、そして自分は“福島っ子”だという誇り。そのプライドは常に私を励ます。悔し涙も嬉し涙もあります。下を向いて悩む時、その偉大なる力は私の背中を押してこう言うのです。「真っすぐ前を向きなさい。暗くても止まらず歩き続けなさい。手探りでもいいから進みなさい。光りは必ず見つかるから。」と。

福島から全国に、そして世界に！福島っ子は感謝の気持ちを忘れずに今日も羽ばたきます。

思　い　出

増　田　淳　子

この度は福島県卓球協会設立70周年、まことにおめでとうございます。

今回のお話しをいただき、卓球一筋だった若かりし時代を懐かしく思い返しました。

私が卓球をはじめたのは今から30年ほど前。長谷川選手や伊藤選手、河野選手などが世界の舞台で華々しく活躍していたころです。日本の卓球はすごい！私もがんばろうと体育館の片隅で“ピンポン”をしながら、夢だけは大きく持っていたようです。それ以来、中学では佐久間先生、高校では深谷先生、大学進学の際には松崎先生はじめ協会の諸先生と、多くの方々のお力添えをいただいて進んでいけたと、今更ながら思います。

卓球をやれることが何よりうれしかったあのころ。思い出はさまざまありますが、ひとつ挙げるとすれば高校2年の時の国体東北予選でしょうか。当時、福島県の高校女子はいまほど強くはなく、青森や岩手、山形など卓球王国がひしめく東北で予選を勝ち抜くのは、かなり難しい状況だったと思います。ところが、宮城、岩手、秋田に勝ち、次の山形に勝てば東北代表の2県に入れるところまできました。結果は一進一退の攻防の末、3対1で勝利。

これが団体戦の醍醐味をはじめて知った試合でした。そして、日の暮れた弘前公園を黙々と歩くうちにこみ上げてきた例えようもない心地好さは、いまも鮮明に覚えています。

この後、大学、社会人と、卓球に関わった11年余り。こういう心地好さ以上に苦しさもたっぷり味わいましたが、その分、やっただけの成果は必ず返ってくると教わったのもこの時期。今回あらためて、卓球で得たことが基本にある、卓球をやって本当によかったと、思いを深くしました。

このような機会をいただいたことに感謝しつつ、福島県卓球協会のますますのご発展をお祈り申し上げます。

「第50回ふくしま国体審判員の想い出」

西　片　美代子

卓球競技が須賀川市開催に決定してから大きな大会が開催され、私も競技役員として参加する様になりました。今思うと国体当日よりそこまでのプロセスの中に沢山の思い出と感激を経験した様な気がします。最初は恐ろしいもの知らずで審判をしておりましたが思い出すと顔から火がでる思いです。まさか国体で審判員をするとは思いませんでしたので、壁谷先生よりお話しがあった時は驚きました。でも一緒に頑張ってくれる友達がいた事もあり、まずは2級審判員試験に挑戦致しまし

た。プレイをルールに合わせて判断し、文章に正しく表す事は大変難しく、無事合格した時はホット致しました。反省点の多かった審判は国体前年に行われたリハーサル大会で、女子の部の主審をした時です。大変な接戦で選手も一球一球に集中、結局三時間半以上かかってしまいました。審判長からスピードアップするように注意されるのですが、私自身が試合にのまれた事とコートが本部席のすぐ前という緊張も重なり、オーダー表、コールの間違い等本当に落ち込んでしまいました。同じ年の12月「全日本卓球選手権・個人の部」の審判員として他の方と一緒に東京武道館に行って来ました。前回の失敗を含めてとてもよい経験になりました。際どいプレー、早いボールの見極め、正しい判断と自信を持っての動作それらの技術を身につける為の必死の3日間でした。又、皆さんと「ふくしま国体」の成功を誓い語り合った事も楽しい思い出になりました。

いよいよ大会当日、不安の中に無我夢中でスケジュールをこなし「あっ」と言う間に終わりました。選手の熱気、地元の声援、国体に関わった方々の熱意、すばらしいアリーナそういうものを感じながらの充実した期間でした。最終日の決勝戦は緊張しながらも無事終える事ができましたがきっと小さなミスが沢山あったのでしょうね。選手の皆さんが力を出せるような審判が出来たかどうかわかりませんがきっと私達の思いは伝わった事と思います。

最後に一緒に審判員をした皆様、ご指導して下さった壁谷先生本当に有り難うございました。又、補助員をしてくれた高校生、快く動いてくれて有難う。卓球協会、国体課の皆様ご苦労様でした。国体で出会った方々、そして経験をこれからも大事にして行きたいと思います。

「国体出場の想い出」

反　畑　秀　彦

昭和34年の第13回東北高等学校卓球選手権大会（山形県山形市）は、私の母校、相馬高校（木幡・佐々木・門馬・反畑）が、団体戦優勝、個人戦ダブルス1、2位となる等低迷していた福島県の代表としては歴史的な成果を収めた。

引き続き行われた国民体育大会東北ブロック予選会には、フットワークを生かした速攻型の木幡（相馬）、カット主戦の反畑（相馬）、右ドライブの白幡（郡山商業）の3名がチームを組み出場した。試合形式はシングルス4、ダブルス1で3点先取。福島県チームはシングルスに木幡、反畑、ダブルスを木幡・白幡のオーダーを基本にした。当時、協会や高体連関係の先生方の話によれば、例年の東北ブロック予選会は青森、秋田、宮城、山形が強く、予選通過となる2県には福島県は全く力が及ばない状況が続いていたと言う。いつも4県の中心選手にインターハイの上位選手がいたからである。

しかし、結果は神懸かりのように5戦全勝で東北ブロックの代表になってしまった。

全勝でブロック代表となったのだから木幡選手も白幡選手もかなりの勝率を挙げたが、カット主戦の私は何度か上位選手を破り全勝した。母校の引率の先生に「反畑、ずい分強くなったなー」と言われた言葉が思い出される。

その年の秋、国民体育大会は東京で開催された。東京オリンピックで改装される前の千駄ケ谷の国立競技場で開会式が行われた。すり鉢型で満員の国立競技場のメインスタンド前を行進する時、鳥肌が立ち感激したのを覚えている。地元の東京都のユニフォームが高校生ながらカッコ良く、スマートに見えて憧れ、"一度あのユニフォームを着てみたい" この思いが後の東京代表として国民体育大会（新潟県）に出場する源となった。

卓球会場は浅草駅から徒歩約15分、隅田川のほとりにある台東体育館であった。

監督は郡山女子高校の宇賀神喜嗣先生。先生も福島県高校の部の出場が東北ブロックの予選を勝ち抜いての画期的な出場で、上位入賞が可能との期待もあったのだろうか、緊張気味で無口であったように思う。作戦的コーチはほとんどなく、以外性を発揮する私たち選手を真剣に見られていたような気がする。

そして、福島県は勝ち進み京都府と対戦した。当時、京都府は名門東山高校の有名選手を揃えていた。それに比べ福島県はおそらく無名選手のチームであったろう。結果は、2対3で惜敗した。

試合が終わって観覧席の福島県ベンチに戻ると、県出身者の卓球指導者がいて、"ダブルスの3セット目のサーバー、レシーバーの相手をどうして優勢だった2セット目と変えたのか、変えなければ3セット目後半は有利になり勝てたのに…、惜しい試合を落とした"と何度もくり返された。私たち選手以上に残念でくやしい思いだったようだ。

この団体戦の敗戦は私のその後の選手生活の糧になった。

高校生の若さゆえ、練習量で培った勘と勝つことに対する執念のようなもので、ただ一生懸命卓球をしていた私に、戦略、戦術の重要性を教えてくれた。この事をさらに実践的に知ったのは、大学に進学し、今は亡き萩村伊智朗先輩と出会ってからである。　　以　上

ピンポンから卓球へ

井　上　六　郎

私がピンポンを始めたのは小学6年ごろでした。その当時の球はセルロイド製の玩具のようなもので軽く、柔らかくて、すぐに割れ目が入り、それを子供ごころに飯粒の糊で張り合わせ縁側などで一人で楽しんでいたことを今でも懐かしく思い出します。

しかし糊で張り合わされたものですからすぐに使い物にならなくなります。代わりの物を手に入れようとしても、金も無く物も不足していた時代で思うようにいきませんでした。

へら（ラケット）も手作りの板製のものでした。

その頃から退職時まで卓球を友に楽しんできました。昭和45年、原町二中に転任したころ、福島県卓球連盟との交流が始まりました。間もなくして福島県卓球連盟、相双支部に係わるようになりました。そして、多くの大会行事が組まれ、活気あふれるようになりました。昭和51年、双葉中に赴任し卓球の部の専門委員長に推され本格的に福島県卓球協会と関わるようになりました。

52年、県中体連が初めて浜通り地区で開催され、卓球は双葉町体育館が会場となりました。まずコートを確保しなければなりません。当時16台備えたところはありませんでしたので、南は楢葉、北は浪江まで足をのばし16台を集めました。次は審判の確保、これは近隣の高校にお願いしました。そしてカウンターの準備。市販されたものはなく当時、県立原町高等学校勤務の西郷先生（現協会長）の手作りのものをお借りしそれを見本にカウンターを作りました。西郷徹夫先生には大会について、いろいろとアドバイスをいただき今でも感謝しております。

双葉町には、会場はあるが宿泊するところが少なく、浪江まで足をのばさなくてはなりません。

宿泊係がその責任を果たすべく、旅館の割り振りをしたことにより、旅館組合長よりひどくお目玉をいただいたことも懐かしい思いでです。

その後、度々県大会、東北大会などが開催されるようになり大会及び、会場運営にあたりました。

卓球協会が関わっていただくようになってからは、中体連も、トラブルが少なくなり、大会もスムーズに運営できるようになりました。

会場を設営し、大会を運営することの労苦も今は、懐かしい人生のひとこまになっています。

福島県卓球協会の皆様のご健勝と、益々のご発展をお祈りいたします。

卓球に魅せられて

斎　藤　恵美子

最近テレビのコマーシャル等に、いろいろと面白い情景で登場するようになった卓球。卓球愛好者の私としては嬉しい限りです。なにしろ暗いスポーツの代名詞のように言われて、いささか腹立たしい思いでいたので、スポンサーの方に「ありがとう」と、拍手を送りたいくらいです。

今までの白いボールがオレンジ色となり、卓球台もグリーンから鮮やかなスカイブルー、ユニホームに至っては油絵の抽象画のように華やかな色柄になって、"明るいスポーツ卓球"をイメージさせています。

ところで硬球に関して言えば、年齢、体力が大いに関係するところですが、"ラージボール卓球"これは年齢も男女の差もほとんどありません。

ボールは大きくて軽く、打っても打っても嫌になるくらい返ってきます。最初このボールを目にして、耳にした時に、なんて変な音なんだろうと、打球音に拒否反応を示したものでした。弾まないし、落ちるし、早い打球をする私にはこれは向いていないと思いました。でもそれは大きな間違いで、ただ単に私が下手だった訳です。

いわき卓球協会会長の佐藤昭典さんや、いわき卓球センター社長の橋本義一さんに飽きずに教えていただき、お陰で、今では週二回、気のおけない仲間たちと思いっきり打って、打たれての快感を味わっています。

佐藤昭典さんといえば私には無くてはならない恩人です。楽しさ、苦しさ、そして感動の喜びを学生時代に味わわせて下さった方なのです。

また部活の顧問であった安田一三先生も、そのお一人です。生徒よりも早くから部室に来ては、腕組みをして私達を待っていてくださったものでしたが、"親の心子知らず"の不肖のキャプテンは、コーチの佐藤さんの方だけを見ていた記憶があります。

しかも、無器用の上に負けず嫌いの私には人一倍手がかかったことでしょう。

インターハイ・国体・全日本選手権大会等の貴重な経験は、お二方と、部活を共にした友から戴いた宝物だと思っています。

これからも卓球を楽しんでいきたいと思います。現在、一緒に練習をしている皆さん、どうぞ、今後共、よろしくお願いします。

私と卓球

田　辺　ふみ子（旧姓 佐藤）

私と卓球との出会いは、中学生になってからで、中学校時代は遊びの域を出ないものでした。郡山女子高校に入り、深い考えもなく卓球を選び宇賀神喜嗣先生と巡り逢ったことが、いまに繋がる卓球生活の始まりです。郡女卓球部は、規律も練習も厳しかったので、三年になると部員は数名となってしまいます。私は一年の初めの頃はランニングにはついていけないし、技術も下手でしたので副顧問の梅田秀男（旧先崎）先生にもお世話になりました。

伝統のある学校とは知らず、偶然選んだことに縁の不思議さを感じます。宇賀神先生は技術面では基本の大切さを、メンタルな部分では座禅なども取り入れたりしながら、いろいろと教えてくれました。今になってようやく先生の話していた事、話したかった事が分かるようになりました。

高校では、県大会で団体初優勝をし、個人でも優勝カップを何度か手にしました。インターハイを二度経験し、三年の時には個人でベスト8に入り、目標としていた成績を残すことができました。また全日本に出場できたことも、良い思い出です。今は母校も郡山東高校となり、共学になったと耳にし時代の流れを感じています。

卒業後、トーアエイヨー㈱に入社して、26回国体の女子団体のメンバーとなりました。トーアエイヨーの卓球部でも、全日本実業団軟式で準優勝などいろいろの思い出があります。在職中、卓球はもちろん職場でも周りの方々に恵まれ、主人にも巡り逢いました。その後暫く卓球から離れていましたが、15年程前まら、豊島区で再びラケットを握っています。現在は、豊島区で卓球連盟副理事長・区立体育館個人公開指導員・区立中学校スポーツ解放管理指導員・区体育協会レディース常任委員などとして活動し、地域の方々と一緒に卓球をしております。

選手としては、近隣のオープン戦・クラブチーム戦・都民大会の代表や、東京選手権には年代別で東京代表として出場しています。

卓球を始めてから30年以上になりましたが、これからも、教えてもらったり教えたりしながら、たくさんの仲間や友人と共に、卓球に関わって行ければと思っております。自分を振り返ってみてあらためて、育ててくださった先生はじめ、卓球関係の皆様に心からお礼を申し上げます。

「第50回ふくしま国体審判員」

横　山　正　子

第50回ふくしま国体が成功に終わり、早いもので4年の月日が経とうとしています。先日の事のように思い出されます。卓球会場が須賀川に決まり、私も卓球に携わっていましたので国体のお手伝いをしなければと思っておりましたが、まさか卓球審判の役目を仰せつかるとは思ってもおりませんでした。国体副審判長をなされました船引町の壁谷先生よりお電話をいただきまして「審判を須賀川地元の人達がやらないでどうするのだ！」とお叱りを受け、それからの一年間が大変でした。3級審判は持っていたものの、2級審判は持っておりませんでしたので、取得の為の勉強が始まり本当に学生以来の勉強、繰り返し繰り返し覚えようとする文字を頭の中に入れようとしても、反対から抜けてしまい、今になって頭の回転の鈍さに、自分自身情けなくなってしまいましたが、その成果があって二級審判合格「やった！」という思いがいっぱいで、とても嬉しく学生時代に戻った様な気分になれました。

平成6年全日本卓球選手権団体が11月18日から20日までの3日間須賀川アリーナで行われ、又東京武道館で行われました全日本卓球選手権大会の個人の部の審判に行った事も懐かしく思い出されてきます。暮れの12月21日から3日間忙しい中に貴重な体験をしてきましたが東京、大阪、広島、それぞれの次期国体開催の審判の人達、2年後の開催地の人達も審判の勉強に来ているのに驚いてしまいました。武道館での審判のスケジュールがとてもハードでしたから、朝から夕方まで大変だったと記憶しています。緊張もしましたし、無我夢中でした。副審判でしたので、皆さんにいろ々と教えていただき東京大会の審判が、すごく私に自信をつけさせてくれました。その結果として、国体の審判も胸を張り自信を持ってする事が出来たと自負しております。私もまだまだ卓球に携わっていきたいと思っており、お母さん相手に卓球をしたり、スポーツ少年団の子供を相手に楽しんでおりますが、中年になっても昔とった柄で（たいした腕ではないのですが）大いに健康に役立っており、一生の友として行きたいと思っております。

「喜多方高校卓球部OB会設立30周年を迎えて」

喜多方高校卓球部OB会　五十嵐　修　二

県卓球協会創立70周年おめでとうございます。

さて、私たちの母校である喜多方高校も昨年創立80周年を迎え、また、喜多方高校卓球部OB会も30周年を迎えることができました。そこで、当会の歴史について投稿させていただきます。

喜多方高校卓球部OB会は、会員総数約300名余りで、文字通り喜多方高校卓球部の卒業生で構成されている。設立は昭和45年1月に当時卒業したての秋山昭正氏（現会長）、三橋信一郎氏、高麗正規氏、そして一年先輩の田部幹夫氏ら数名で発足し、毎年正月に総会と卓球交流会を行ったのが始まりである。昭和53年、10周年を機に毎年8月の開催となり、この年に現役への卓球マシーン贈呈と元世界チャンピオンの伊藤繁雄氏を招いての講習会を開催した。また、昭和63年には20周年記念事業として、現役へ『燃えろ、桜壇健児』の部旗の贈呈、記念誌の発行、北山中や喜多方1中などで幾多の県優勝など輝かしい指導歴をお持ちの水戸昇氏（昭27年卒）と、関東方面で事業の大成功を遂げている高麗正規氏（昭43年卒）の記念講演会を行った。平成10年の30周年記念事業では、現役への卓球台の贈呈、記念誌の発行、㈳日本卓球協会マスターズ委員長で唐橋卓球㈱代表取締役社長の唐橋博氏（昭26年卒）の記念講演会を行った。

OB会の活動としては、毎年現役への資金援助、地元OBで構成されている月例会開催、OB会の関東支部結成、そして、佐藤誠氏（昭56年卒）の呼びかけで始まった今年で7回目を迎える全会津小学生対象の喜高OB会杯スポ少交流大会などがある。

喜多方高校の大会実績では、会津や県大会での多くの入賞者を輩出してきたが、県優勝記録は須藤泰子さん（昭53年卒）、昭和53年の県総体女子団体、内海香津代・鈴木真由美組（昭55年卒）、小田切敬氏（昭56年卒）、岩本爾郎氏（昭58年卒）、武藤小百合さん（昭59年卒）などがある。

歴代顧問では、三留昭男先生、手代木健先生、遠藤良市先生らが選手の育成に努められた。

現在では、県や会津、地元の卓球協会などで要職を担っている方も多く、中でも菊地敏美氏（昭53年卒）らが活躍している他、学校やスポ少などでの指導者として頑張っておられる方も多い。

また、岩本爾郎氏は県のトップクラスとして現在も活躍している他、各地域で多くのOBが頑張っている。

県卓球協会の発展に負けぬよう、これからも我が喜高卓球部OB会も頑張りたいと思います。

「ふくしま国体の想い出」

生　井　一　弥

「ふくしま国体」という言葉を聞くと、今でも当時の記憶が鮮明によみがえり、あの当時の感動がありありと思い出されます。

当時私は、県立白河高等学校に勤務しており、「ふくしま国体」には、平成7年4月から授業や部活動の指導の合間を縫って本番へ向けての準備に微力ながら係わっておりました。

役員への制服が支給されたときは、正直な話、ホッとしました。これで自分も「ふくしま国体」に携わることができるんだという実感がわいてきたものです。

卓球競技の制服は開催地、須賀川市のシンボルでもある「牡丹」をあしらった、シンプルな中にも力強さを感じさせるネクタイ、そして制服そのものも中々好評でした。

そして本番を迎えるわけですが、私の係は、総合成績計算委員ということで、飛田徹先生（当時郡山女子高等学校、現在須賀川高等学校勤務）と2人で各部門からの結果報告を基に得点を計算し、大会本部へ送るという仕事でした。間違いがあってはならないということで何度も見直しをした覚えがあります。

また、総合成績を計算し、外部に送るということで、専用の部屋に詰めており、そこから本県選手の活躍を応援していました。どの試合も手に汗握る熱戦であり、国体に懸ける各県の意気込みが伝わり、とても素晴らしい試合が多くつい仕事を忘れ熱中してしまうこともありました。

とにもかくにも、本県としては、選手・役員・地域の方々やその他大勢の人々に支えられて、国体が成功したのだということを肌で感じることができ、とても好い経験をさせていただきました。この経験を生かし、今後の人生においても常に感謝の気持ちを忘れずに頑張っていきたいと思います。また、これからも本県の卓球協会が益々発展していくように微力ながらも協力していきたいと思います。

「東京選手権サーテイの部優勝を果たして」

原　　晃

平成10年度東京卓球選手権大会サーテイの部で念願の全国初優勝を果たすことができました。

これまで、全国大会の決勝には2度進出しましたが、1度は全日本軟式大会で徐向東選手、2度目はクラブ選手権で斉藤清選手に敗れていますので、3度目の決勝戦挑戦でした。

私は、中学1年生から卓球を始めましたが、夏休み前に医者から貧血と診断され、夏休み1か月間の練習を休むようなひ弱な体でした。中学3年間で最高の成績といえば3年生の時の中体連県大会ベスト8でした。

また、高校では3年生の時、インターハイには出場しましたが、1回戦で負けました。

その後、地元の東京電力㈱福島第二原子力発電所に就職し、卓球を続けています。

福卓会の発足と同時に同クラブに入会し、良き先輩・良き指導者に恵まれ、各種全国大会で上位入賞ができるようになりました。

これからも生涯現役にこだわりながら、後進の指導に情熱を注いでいきたいと思います。

「卓球と出会って31年」

大和田　元　一

福島県卓球協会設立70周年、おめでとうございます。その年に役員として携わることができ、とてもうれしく思います。

私が卓球に関わったのは31年前、小学6年の春頃、友達と近くのメリヤス工場に遊びに行った時、板を何枚も継いで作った卓球台で先輩がピンポンをしているのを見て興味を持ったことからでした。中学入学後、そこで練習をしていたその先輩方がとても上手に見えたものです。当時、一年生は殆ど素振りと球拾いだけで、実際に台で打てるのは、練習終了前30分程度でしたが、とても楽しく感じました。顧問の大澤先生に恵まれ、翌年の新人戦から中体連まで地区で1位になりました。しかし所詮「井の中の蛙」で県大会では、なかなか初戦を突破することができませんでした。

高校に入ると、中学時代とは違った雰囲気に期待と不安を抱きながら卓球を続けました。辛かったことが多かったはずなのに、現在は楽しかったことしか思い出せません。県大会1回戦、緊張のあまり試合にならなかったにもかかわらず宿舎で大騒ぎ、先生に叱られたのも懐かしく思い出されます。

高校を卒業し社会人になると、市卓球協会関係者と、お付き合いが始まり、徐々に協会のお手伝いをするようになりました。当時は、何の役もなかったせいか、気楽な気持ちでしたが、その後理事になり会計の仕事を任されてからは、協会の一員であることの自覚を一層持つようになりました。

第50回福島国体卓球競技では、役員として参加することができました。準備作業は、毎週のように各係り毎に開かれ、大会の盛り上がりを肌で感じることができました。十分に準備を済ませて、大会に臨んだはずでしたが、いざ開会すると、思いがけないことが出て会場内をかけずり廻ってました。それでも、福島県の試合になると、持ち場を離れてつい応援に夢中になっていました。終わってみれば、輝かしい本県の成績、とても嬉しく、喜びました。約1年間の準備、数日間の大会でしたが、私にとって、忘れることができない1ページとなりました。

その後、県中支部小中学担当理事として、県の仲間に加わり、現在諸先輩方と、競技力UPに努力しているところです。

「ふくしま国体」の審判員を務めて

河　村　朝　子

平成7年福島国体が開催されてから、早くも4年が過ぎようとしています。国体の卓球競技役員の依頼をいただいたときは、嬉しく思いました。当初は記録掲示係ということでしたが、その後、須賀川市を会場に開催される国体なので、審判員を務めることになりました。「やってみたい」という気持ちはありましたが、不安で眠れない日もあったのを覚えています。

壁谷之夫先生の励ましもあって2級の資格を取得し、平成6年度全日本卓球選手権大会（個人の部）の審判をすることになりました。会場は東京武道館でした。これが国体の審判をするうえでとても良い経験になりました。ドキドキしながら1日に12試合の審判をしました。有名な選手も出場していて大変光栄に思いながら仕事をしたことを覚えています。

平成7年には県内外の審判員の人達と講習会を受け、また県内の中学校の県大会決勝の審判を何回かしていくうちに少しずつ不安もなくなり、また、審判員同志も気心の知れるようになって、当日を迎えることができました。

コート主任としては、緊張の毎日でしたが、決勝の審判が終了した時は、地元の国体で審判ができた感動にひたっていました。

国体の審判員として経験できたことは、私の人生の1ページとして、すばらしいものになりました。また、会場に飾られた通常の開花時期と違う10月に咲いている牡丹の花のすばらしさに感動しました。選手、役員を歓迎して咲いているようでした。私は毎日、赤やピンクの牡丹の花に励まされていました。

第50回国体に私と長女は卓球、夫は体操、次女は水泳と家族全員がそれぞれ立場は違っても、携わることができたことも嬉しく思っています。

最後にこのような経験をすることができたことに対して、また大変お世話になった副審判長の壁谷之夫先生をはじめ多くの方々に対して今でも感謝をいたしております。

ふくしま国体と私

大　越　　守

「地元の選手の活躍が素晴らしかったね」「両陛下もお出でになられたからな」「大成功だよ」今でも、国体が話題になると、多くの方々からお褒めの言葉をいただき、国体に携わったことを、喜びと共に誇りに思っています。

国体時は、卓球競技の会場委員長として、係のスタッフ、審判員、式典係をはじめ沢山の人達の協力を得ながら、会場の設営に当たり、無事に役目を終えることが出来たことを心から感謝しています。

私にとってのふくしま国体は、特に思い入れの深いものなのです。といいますのは、昭和60年当時須賀川市教育委員会保健体育課長を務めていました、高木市長から「国体の種目は、何を考えているのか」とのご質問があり、「卓球、銃剣道とクレイ射撃を考えております」とお答えしました。特に、卓球を第一候補にしたその理由として、多くの大会運営を手がけ、競技運営に精通する人材が揃っていることを挙げ、ただ、市には会場となる体育館がありませんとお答えいたしましたところ、建設計画中の須賀川一中体育館を、国体の出来るよう建設部と相談するよう命ぜられました。

当時の国体では、設置台数10台ということで、それに見合う床面積、引き出し式の座席とギャラリーを合わせて約1,000人の観客を収容する案を持って、建設部と協議し、中学校としては県下で1、2位の床面積を持つ体育館が建設されたのです。しかし、卓球関係者としては、より国体会場に相応しい本格的な体育館を建設することが悲願でした。

ご承知のように、その後立派な須賀川アリーナが建設され、新しく、大きく、優れた設備、空港も近く、高速道路インターを降りるとすぐという便利さ、広い駐車場、加えて景観の素晴らしさ等、両陛下がお出でになられる会場に選ばれたのもうなずけます。

教職を退職後、国体課に勤務させていただき、開閉会式の企画・演出、誘導員の中学生の指導、炬火リレー搬送指導等に携わることができ、その上、会場係としてその成果を、始めから終わりまで見届けることが出来たのですから幸せというほかありません。

今後も、福島県卓球界の益々の発展を期待すると共に、自分の健康維持のため、しばらくぶりにラケットを握ってみようと思っています。

「私の思い出」

岡　田　晶　子

私は今年4月から「NEC相模原」に入社して、卓球部に入部し、現在慣れない仕事と卓球の両立に追われる日々を送っています。この不況の中、卓球を通して就職できたことを大変うれしく思っています。こうして今でも卓球を続けてこられたのも、福島県卓球協会の方々のご理解とご協力があったからだ、と痛感しています。

私は小学2年生からラケットを握りはじめ、大学4年生まで「福島県」の選手の1人として、数多くの試合に出させていただきましたが、印象深い大会が2つあります。

1つは、「ふくしま国体」です。私は当時大学1年生でしたので、「成年女子1部」で出場したのですが、国体の試合に参加するのは初めてで、なおかつ地元開催であり、普段以上に緊張していたことを覚えています。総合開会式で行進した時の歓声と興奮は今まで参加した国体の中で最大だったと思います。

もう1つは、去年開催された「かながわ国体」です。去年の東北総体で東北6県中2県という、厳しい予選を通過しての試合でしたが、ベスト8入賞ということが大変うれしく思いました。福島県から出場する大会で団体戦は最後でしたので、のびのびと楽しみながら、しかし悔いの残らないプレーを心掛けました。成年女子で入賞したのは初めてだ、と聞かされて、喜びは倍増でした。特に印象深い大会を2つ挙げましたが、中学、高校時代の思い出としては、強化リーグと県外遠征があります。2ヶ月に1度の強化リーグは、戦術的にも体力的にも成長できたと思います。また強化リーグの成績が良ければ県外の競合選手と試合ができたので、レベルの差を肌で感じる機会が得られました。このことがあるおかげで、本番（国体や他の全国大会）で活躍することのできる選手を輩出しているのではないか、と思います。

冒頭にも書きましたが、今年4月から社会人として新たな出発をしました。今後は「神奈川県」から出場することになりますが、心の中ではいつも「福島県」を応援しています。

福島県卓球協会の益々のご発展を心からお祈り申し上げます。

卓球生活の回想

福　島　正　子（旧姓 尾形）

「福島県卓球協会70周年」誠におめでとうございます。

私は中学から卓球を始めましたが、現在でも仕事の傍ら余暇は卓球第一の生活をしております。福島県卓球協会にお世話になりましたのは高校生まででしたが、若い時分に培ったものが、これ程までに私の人生に豊かさを与えてくれたことは何物にも変えがたいものであり、このことを考えるとお世話になった協会に感謝せずにはいられません。

また、お手紙で宇賀神先生がこの度の編纂委員長ということを知り、昔お世話になったことを考えると何とか手記をとペンをとりました。私の高校時代は、顧問の斎藤先生と大内コーチという指導者に恵まれたお陰で、精一杯のびのびと卓球生活ができ、そして県内の各大会で優勝という経験を味わうことができました。ただ残念なのは県外の大会になるといつも2・3回戦という結果に終わってしまったことです。今考えると、井の中の蛙で目標が小さかったなあとつくづく思うものです。こうしてペンをとりながら昔の出来事をひとつひとつ思い巡らせると走馬灯のようになつかしく思い出されます。その中で一番印象に残ったのは、何と言っても高校3年のオールジャパンジュニアの部で第3位になったことです。その一つの出来事と言うか戦績で私の人生が大きく変わりました。

その後、専修大学へ、そして日興證券株式会社で現役を過ごし、結婚後は埼玉に移り、所沢市役所に入って社会体育の一環として、家庭婦人の組織をつくりました。仕事を受け持ち、市内各地で卓球教室を開催し家庭婦人部という組織をつくりました。今では所沢市の家庭婦人だけで350名という多くの会員が活発に活動しております。福島で芽を出した私の卓球人生は、専修大学・日興證券で育ち、最後は所沢市に根をはることができました。全国レディス等で福島県チームと出会うことがありましたが、もし私がふるさとを離れていなかったらレディス大会では福島県の代表としてご一緒したかもしれないなどと思った次第です。

何と言っても、ふるさと福島県には強い思いがあります。福島県卓球協会の今後の発展に大いにご期待申しあげ、私の回想といたします。

私の卓球人生の中での忘れられない中国遠征

佐々木　トシ子（旧姓 橋本）

この度は、福島県卓球協会創立70周年おめでとうございます。

このような記念すべき時に、私の卓球人生を振り返る機会をいただき幸せに思います。

思いおこせば、昭和33年4月郡山女子高等学校に入学し、卓球部の練習を眺めているうち自分もやってみたいと思い卓球を始めました。少し上達すると楽しくて勉強は二の次となり放課後が待ち遠しくなっていった事を覚えております。また顧問が宇賀神先生で部活動に大変熱心な先生でした。

その先生と先輩方のご指導により、三年生の時地元郡山開催での東北大会に出場でき選手宣誓という大役迄経験させていただきました。そのうえ岡山でのインターハイにも出場できました。

もっと強くなりたいという思いから、卒業後東京の三井生命保険相互会社に入社し、そこでもまたまた熱心な浅田監督との出会いがあり、大きく育てて頂きました。

入社した昭和36年5月全日本実業団軟式の部でチーム優勝し、その後もチームは常に上位にいて、昭和42年の大会では硬式の部で準優勝しました。

個人戦では昭和39年度全日本軟式選手権大会優勝、と自分でも信じられない成績を残せた事が後々の私の卓球人生広がりの礎となりました。そしてこの優勝をきっかけにして全日本の強化選手に選ば

れ合宿に参加し萩村伊知郎氏を始め素晴らしいコーチの方々にご指導を受けることができました。

私は運よく中国遠征代表選手のメンバーにも選ばれ、昭和41年8月22日から9月21日迄の1ヶ月間、広東、上海、杭州、北京と転戦して参りました。折しもそれは歴史に残る文化大革命の始まった年であり、未だ日中国交も正常化されていない時でした。今でもあの革命闘争の様子と雄大な大地の光景は脳裏に焼きついております。

昭和41年12月に行われた全日本硬式選手権大会では、シングルは16位決定で敗れましたがダブルスでは専修大学の磯村選手と組み準優勝しました。今こうして振り返ってみますと走力筋力も無く運動神経の鈍い私がよくここまでこれたとつくづく思います。救いは柔軟性があったことと、自分の運動音痴に気付いていなかったことです。

現在は大病を患い苦しみましたが、リハビリと卓球仲間の励ましによりママさん卓球の球出し位はできる様になりました。卓球で出会った方々に育て助けて頂いたと思い感謝の気持ちで一杯です。

「卓球と協会との出会い」

大　嶋　克　子

私が初めて卓球部の顧問となりましたのは、いわき市立内郷第三中学校でした。県の中体連の女子の部で優勝を飾った芳賀利允先生の後任となり、単にピンポンを楽しんでいただけの私には、苦難の道となりました。大役を引き受けた以上はしっかり責任を果たさなければならないと思いました。卓球の選手として頑張った夫に理論と実技を教えてもらいながら歩みはじめました。そして、更に選手を強化するために門を叩いたのが、磐城第一高等学校でした。その当時の顧問をしていたのが鈴木理介先生でした。それがきっかけで、理介先生の手伝いをすることになりました。時々やっていた組合わせが、実は協会の仕事だということを初めて知りました。やがて協会の理事になるなんて予想もしませんでした。

あれから28年。私から卓球を切り離すなんて考えられないようになりました。いわき市の中体連卓球の専門部長として20年余りを頑張り抜いた武田喜美男先生の陰になり、又コンビとして中体連と協会の連携をはかるため、無我夢中で橋渡しをしてきました。何が何だか分からずの行動。そして協会の仕事が目に見えて理解でき、どんな活動をすべきなのかを悟り、何とか動けるようになったのは、ここ10年位であると思います。中体連と高体連と協会と協力・理解し合えて活動をしています。今日までになるには、何かと困難な道程であり、協会では大変な苦労を重ねられてきたことを伺われます。レールが敷かれた上で活動してきた私は、頭が下がる思いで一杯です。幸か不幸かそんな中で、ふくしま国体に際して、審判員として参加できたことが、私にとって一番誇りに思うことであり、そのうえ自信につながったことです。国体の為に何度も何度も繰り返し行われた打合せ、そして講義や実地訓練。曖昧だったルールも学習していくたびによく理解でき、自分の知識のなさを情けなく思いますが、本気で学んだあの日々。厳しい中にも優しく指導して下さった壁谷之夫先生。本当にありがとうございました。そしていざ出陣！。リハーサルを兼ねた東京体育館での全国大会。初めての体験にしては、あまりにも大きすぎる大会。緊張で手がサッとあがらず、ワンテンポ遅れがちなカウント。しかも声もうわずって、全身が冷汗で一杯でした。あの時のことは、決して忘れられない思い出の一つとなっています。そして本番。一週間宿泊をしながら審判に明け暮れたふくしま国体。有名な選手。一つ一つの素晴らしいプレー。目のあたりに感動と緊張とが交差し、頭の中が真っ白で、ただ肉体だけが反応しているような、なんとも言い表わせない情景であったと思います。ふくしま国体が終了と同時に、肩の荷がやっと降りた時のあの安堵感。いずれも忘れたくても忘れられない思い出です。そして、たくさんの人との出会いができたことは、素晴らしいことでした。一つのことに一致協力し、出来た喜びを共に笑い、手を取り合い、「ごくろう様」を言い合ったふくしま国体も、随分昔のように懐かしく思われます。あの時の出会いは、今日で

も身近で、互いに声を掛け合い、特に協会の大会では、顔を合わせ親しみ感に浸っています。

学校という教員の輪から脱した人との出会いは、私を大きく飛躍させてくれました。そして協会の理事として、中体連いわき市の卓球専門部長として、たくさんの人に手を差しのべられながら、一生懸命責任を果たす為に努力している今日です。

「道程」僕の前に道はない　僕の後ろに道は出来る　ああ　自然よ　父よ　僕を一人立ちにさせた広大な父よ　僕から目を離さないで守ることをせよ　常に父の気魄を僕に充たせよ　この遠い道程のため　この遠い道程のため

偉大な力を持つ自然に祈り、その自然のように力強く自由に生き抜いていきたいという決意が感じられる、高村光太郎の詩ですが、私が人生の歩みの手本としています。人生の中で一番大切なこととは、人との出会いです。出会いによって生き方も違ってきます。だからこそ、人との出会いは大切にしたいと思っています。私にとって、人との出会いは、自分を大きく成長させ、てきぱきとした判断力により、自信をもたせてくれました。だから今後とも人との出会いを大切にして行きたいと思っています。

「大会参加の想い出」

松　本　厚　子（旧姓 奥村）

卓球協会　設立70年　おめでとうございます。

一口に70年と申しますのも色々な歴史があったかと思います。今から思い起こせば昭和28年高校1年の時に、徳島県での国体に参加して強豪京都府に勝って嬉しかったことです。帰りに金毘羅さんによって階段を奥の院まで昇ったら1,400段近くもあったこと。また、栗林公園では錦鯉がいっぱい泳いでいたことなどの記憶もあります。その後、その年の11月に奈良県の全日本硬式選手権大会で5回戦まで勝ってトントン拍子に勝つことができました。その後油断が出て、高校2年の時に、スランプに陥りました。苦しい経験の中で得た結論は「今までの成績に甘んじていてはならない」と気がつき一から出直すことの必要性が分かりました。高校3年の東北大会でダブルスで優勝しシングルスは第2位でした。さらに、その年の7月に札幌市で行われたインターハイの全国大会で勝ち得たものはシングルス第二位という成績でした。帰ってくるなり福島駅の改札口で先生に叱られた思い出があります。「なんで優勝して帰ってこれなかったのか」と云われたのですが、優勝カップがチラツキ負けたといって苦笑するしかありませんでした。本当は実力の差だと痛感したところです。

32年に卒業と同時に静岡県の富士紡績に入社、静岡県代表になって初めて郷里の福島から離れてしまい残念な思いもしました。思い出の一ページは33年の富山県の国体で世界選手権で6回優勝をしているルーマニアのロゼアヌ選手を敗った山口県の田阪選手に勝って国体で3位入賞した時は大変うれしい思い出となっています。そのうえ、大会では福島の選手のみなさんにお会いして色々近況をお聞きしお互いに声をかけ合って頑張ってねと励ましあった懐かしい思い出もあります。

昭和36年の豊橋市の全日本軟式大会のダブルスで優勝して思ったことは、どんな大会でも勝ち進んでいくのには、心のバネと強い意志と精神力だと思います。国体代表連続9回出場しましたが東京での国体の時に父キトクの電報を受け取り出場を断念しました。昭和33年から4年連続で全日本硬式選手権のランキング第7位、第10位となりました。卓球をやってきて本当によかったことは友達がいっぱいできたことと何によりも手紙のやりとりを通じて心のつながりが出来たことです。高校2年生の旭川市での国体の帰りに層雲峡を見学、近くを流れている石狩川の大きさと自然の織りなす光景や函館の夜景のすばらしさに大いに感動しました。トラピスト修道院の鐘の響きわたる海辺の黄昏時はほんとうにロマンチックで旅行だったらいいなあとしみじみ思ったりもしました。

今も心に焼きついている思い出の一つに札幌市でのインターハイに宿泊した旅館のご主人が、朝早くアイヌの部落までわざわざ木彫りの親子の熊を買ってきて福島に帰る私に記念のプレゼントされ、とても感激しました。インターハイで決勝までいって2位になったのを可愛想だといって励ましてくれた

時は、本当に人の心のあったかさを感じさせられた思いです。帰って来てからお礼の手紙を差し上げましたが、その熊をみる度、当時の情景が走馬灯のように浮かびます。青函連絡船に乗ること5時間退屈しなかったのは船の廻りをイルカがいっぱい泳いでいました。船に乗っているお客さんが食べものを与えるので寄って来たのです。みんな楽しい思い出ばっかりです。

卓球を志していらっしゃる皆さん頑張って下さい。大会の成績も大切なことと思いますが何によりも精神面を鍛えることが大事だと思います。卓球をやって来て良かったと今振り返ってみて思うことは、精神面の強さと周囲にまけない根性がうえつけられた様な気がします。絶好調ばっかり続くわけもなくスランプもあります。その中から抜け出すのも自分自身の気力だと思います。負けずに練習を重ね自分のため福島の卓球のため前進あるのみです。

最後になりましたがこの記念すべき70年史に原稿執筆の依頼を受けました事は大変光栄に存じております。心から感謝申し上げますと共に福島県卓球協会並びに会長さん始め関係者のみなさま方のますますのご発展とご活躍をお祈り申し上げます。

「卓球は不滅」

橋　本　義　一

ここ何年か卓球王国であった日本がどうしたわけか金メダルがとれなくなって久しい。日本の選手も一生懸命にやっているのだが、中国の選手のように死にもの狂いでやっているところのチームには勝てない。

一生懸命と死にもの狂いでは、後者が勝つに決まっている。

私の持論で恐縮だが、東京オリンピックを境に、日本のスポーツは、もう勝てないと思った。日本は、裕福になり過ぎたのである。あの時、新聞、雑誌、テレビは、こぞって大和魂を、悪者扱いをしていた。スポーツは、苦しい猛練習よりも、楽しく練習することが、正しい練習方法となったのである。このことについて、良いとか悪いとか言うことは毛頭ない。

たしかに現在、スポーツは隆盛をきわめ、生涯スポーツ、高齢者スポーツなどと言われるように、国民総スポーツマンの時代である。これがスポーツの歴史なのかもしれぬ。

私は学生の頃、東京に住んでいたが、母の実家が田村郡の三春にあったので、地元の田村高校に、よくコーチに行った。

部員達は、よく私のスパルタ式指導に、ついてきたと思う。この甲斐あって、県大会でも、団体戦では、上位入賞を果たし、又個人戦にいたっては、何人かは、優勝、準優勝をしているはずだ。

その後、いわき市に居住し、たくさんのすばらしい卓球関係者や選手にめぐり逢えたことは、本当に幸せだった。

その頃、協会から頼まれ、平商業高校を指導するようになり、ずい分夜遅くまでしごいた。

遠い所から通って来て乗り継ぎのバスがなくなる生徒もいたが、その子は、「歩いて帰ります。」と言って、練習を決してやめなかった。ある日、練習の途中から雨が降り出し、やむ気配がないので、練習後、この女生徒を送っていった。驚いたことに、あたり一面の真っ暗闇の山道、痴漢が出るというよりも、山賊が出るような所である。歩けばたっぷり30～40分はかかる。この環境が、彼女を強くさせたのだろう。さすがに県大会では優勝して、インターハイに出場している。

他にも、多くの選手を育ててきたが、もう私の指導方法は、通用しないだろう。うさぎ跳びグランド10周、うで立て100回などの号令がとぶ練習風景は、いまはあまり見られなくなって来ている。しかし私には、それらをもくもくと、こなしていた部員達の姿が、今でも目に浮かぶのである。

今、振りかえると、100校以上に及ぶ、卓球の指導は、私の青春そのものだったような気がする。

卓球を通じての人との出会い

根　本　裕　子（旧姓　佐藤）

私が卓球と出会ったのは、尚英中に入学して、友達に誘われたのがきっかけでした。当時の私は卓球のタの字も知らなかった時です。顧問は佐藤二男先生でした。伝統のある中学校で、上手な先輩が沢山いました。練習は、毎日がフォア打ちの連続でしたが、一度も休まず練習にうちこみました。しかし、残念ながら、良い成績は残せませんでした。

相馬女子高に入学した時は、迷わず卓球部に入部しました。西郷徹夫先生の御指導のもとで伝統もあり、先輩達の残したすばらしい成績のある学校でした。厳しい基礎トレーニングとともに先輩後輩の間の厳しさには、びっくりしました。最初の頃は、練習についていくだけで精一杯でしたが、ボール拾いから始まり、初めて台について練習できた時は、とてもうれしく思いました。ミスをすると竹の棒でおしりをたたかれるたび、この次こそはと思いながらがんばったことが心に残っています。西郷先生には、基礎をしっかり教えて頂きましたが、残念なことに、次の年に先生が転勤になってしまい、とてもこのときが貴重な一年でした。二年生でキャプテンとなり、相女の伝統を守らなくてはという思いから、浜名コーチを始めとする皆さんに支えられ、とにかくがんばりました。全員で必死に練習に励んだ結果、昭和50年のインターハイ県大会での団体優勝、また、ミニ国体出場といい思い出をたくさん作ることができました。

卒業後、東亜栄養（トーアエイヨー）に入社し、ここでも伝統に押しつぶされそうになりながら、加藤監督や勘野さん（現監督）、諸先輩方に支えられながら、なんとか成績を残すことができました。実業団全国3位（4回）、県総体個人戦に3年連続優勝し、優秀賞を頂いたことが私にとっての一番の思い出です。トーアエイヨーでの8年間は、とにかく練習をしました。加藤監督には、今のままでは、試合に勝てないと言われ、まるっきりフォームをかえていただきましたが、なかなか思うようにいかず、毎日泣きながら練習を続け、自分との戦いに明けくれました。なんとか、県でチャンピオンになりたいという一心から、早朝、昼休み、夜と卓球づけでした。仕事をしている時でも、いい作戦がうかぶとよくメモをしておいたものです。お蔭様でいろいろな大会で勝てるようになりました。トーアエイヨー時代もいろいろな人に支えられ、すばらしい経験ができました

子供がお腹にいた時以外は、ずっと卓球づけの毎日でした。現在長男が中一、長女が小五で富久山卓球クラブ、深谷秀三先生のもとで親子共々お世話になっており、365日練習の毎日で、卓球が生活の一部となっています。深谷先生が出している会報には、昔よく言われたことが書かれており、納得することがたくさんあります。また、先生の卓球への情熱には、頭の下がる思いです。

私は、現在家庭婦人でも活動していますが、周りには、影山さん初め、暖かい人達が多くとても楽しくプレーをしています。卓球を始めて以来、すばらしい指導者にめぐりあい、その中でいろいろ学び、友人にも恵まれ、本当に良かったと思うばかりです。今後子供達も卓球を通じ、すばらしい経験を経て良い人生を送ってくれればと思います。今まで出会えた人達と私に好きなことを存分にさせてくれた両親、家族に感謝したいと思います。ありがとうございました。

学長にほめられて

伊　藤　二　郎

50年位前、安達中学（現安達高校）の体育館に師範学校（現福島大学）の卓球部の選手が練習試合にきました。キャプテンだった私は誰にも負けなかったようで、師範に入るようすすめられました。

当時は中学5年で専門学校を受けるか、新制の高校3年生へ進むか、同級生がみな迷っている時代でもありました。戦争が終わったばかりですが野球・卓球

が盛りで、卓球をやりたい思いで、福島師範を受験しました。

入学式直後に体育館に呼ばれ、早速卓球部員として練習し、翌月5月東北の師範、青年師範学校の東北大会が青森の弘前市でで行われました。昔から青森は卓球県として全国で有名でした。

団体戦は決勝で青森に敗れ準優勝でしたが、個人戦では前年優勝の青森師範の三上という人を1年生の師範に入って2ケ月目の私が敗って、新人の私が個人優勝ということになりました。試合が終わり学校に戻ってからすぐに、学長室に呼ばれ、栗原学長（後の県教育長）がにこにこした顔で、東北大会個人優勝おめでとう、と言われ、その時はうれしい気持ちでいっぱいでした。

福島師範としては、その年の全国大会出場は、女子バスケットと、卓球個人の私の二種目だけだったようです。

師範学校2年の時、国では現在の高校3年から新しい大学の制度が出来ましたが、9月に師範生も高校3年生（同級生）と大学受験をし、旧福島経専と旧福島師範が一緒になり、福島大学の中の経済学部と教育学部が誕生しました。

当時、東北では東北大学、東北学院が強く、私はダブルスで2、3位、シングルで5位で、全国大学選手権に出場しました。

教員時代も卓球の指導にあたり、一応の成果をおさめ、また福大卓球部の後輩を応援しようと、深谷先生方のご尽力で福島大学卓球会が結成され、私が会長に推され、発展に努めております。

学生時代、教員時代、退職後も卓球にかかわり続いているのも、栗原学長のあの笑顔と、おめでとうの言葉によるものと、感慨を深くしております。

第8回　東北地区大学総合体育大会

団体準優勝　単・複　優勝成る！　1955.6.19

高　橋　敏　夫

《団体戦》 福島大学校対抗戦主メンバー

- 渡辺　敏郎　　福高
- 高橋　敏夫　　福高
- 西郷　徹夫　　相馬高（現県卓球協会長）
- 村上　長一郎　岩手

上記のメンバーが主となって出場し、運よく勝ち進み、準優勝することが出来た。その時は、今のように1部・2部などの制度がなく、すべてオープン参加出会った。4名の特徴を生かし、オーダーで工夫し、一丸となって勝ち取った。感激の余り、目の前がボーッとかすんだのを覚えている。

《個人戦》　種目　男子ダブルス

準優勝　渡辺・高橋　組　1955．6．19　東北選手権大会
優　勝　渡辺・高橋　組　1955．6．29　東北総合体育大会
優　勝　渡辺・高橋　組　1956．6．29　東北総合体育大会

私達は、2連覇することができた。それは、練習の結果だと思うが、「なぜできた」と問われれば、理由は3つあると思う。

その1．サービスで主導権をとり、攻撃的に進めたこと。そのためのサービス研究を多くしたこと。

その2．お互いにサインなしでもプレイできたこと。状況に応じてどう対応するか考え方が一致していたこと。台から離れず、前迅速攻型でタイプが似ていたこと。

その3．福島県大会等で、何度か優勝し、経験が豊富であったこと。などが考えられる。

《個人戦》　種目　男子シングルス

優　勝　高橋　敏夫　福大
準優勝　渡辺　敏郎　福大

ダブルスを一緒に組んでいる敏郎さんと、東北大会で決勝戦になるとは夢にも思わなかったが、現実となり、お互いに、やりにくかったのを覚えている。結果は、3－2のフルセットで決着が付いたが、内容はどちらが勝っても不思議ではなかった。

《道のり・忘れられない出逢い》

その1．1年生のとき初めて東北大会に出て、岩手大の藤井さん（カット主戦・後に、全日本強化選手）と対戦した後、「カット打ちがうまいですね。」とほめられたことである。いくら打っても守備範囲が広く、壁に打っているような感じで、完全に参っていたのが実情であったのに……。

その2．渡辺敏郎さんとの出逢い。

野球部の4番バッターで当たればHRというすごい人物である。メジャーのソーサ選手の様にがっちりした体格で、反射神経、動体視力、持久力ともにすばらしかった。一緒に練習を重ねお互いに切磋琢磨した。

その3．関東学生選手権で、野平選手（後に世界第3位）とフルセットで敗退したこと。今でも一球一球が目に浮かぶ。敗因は、フットワークの差と、七色の変化サービスでなく三色のサービスだったかもしれない。

その4．全日本選手権で、渋谷選手（カット、後に全日本監督）との試合の時、バックへ決めたはずのボールが返って来たり、最高のストップをすると、逆サイドへバックでスマッシュされたり、手も足でなかったことを思い出します。単に守るだけでなく攻撃のできるカットマンの時代へとなってきたと思った。

その3．福大の卓球練習場も旧から新体育館となり、明るく、広くなって良かった。柔道の針金先生のお姿や、空手糸東流の面々、一つ屋根の下で汗をかいたことが忘れられない。

毎日が卓球だったことがあの青春の日々が、私の宝である。

青春時代

片桐　　寛（旧姓　日下）

私は、どうやら「福島大学学芸学部」に入学したのではなく、「福大卓球部」に在籍したのに違いないと考えています。

とにかく講義に出席した時間より、体育館にいた時間の方が長かったような記憶が強いのです。

初年度は、床の抜けそうな、埃だらけの古い体育館、向こうの方では空手部が練習していました。雨漏りがしたこともあり、それでも結構楽しく過ごしていましたが、明るくて広い、ピカピカの新体育館に移った時の嬉しさははっきりと思い出されます。

国立大学としては当時の福大卓球部は強かったのではないでしょうか。特に女子は、男子の先輩はじめ部員の方々と一緒に練習したので力をつけることが出来たようです。練習が辛いと思ったことなど一度もなく、今もただ懐かしい想い出ばかりです。団体戦の決勝で2－2になって、さあ、と緊張した時、相手チームからの「5番目の選手がいないので、これで辞退します。」との申し出にビックリしたこともありました。全国大会では早々と負けてしまいましたが、萩村はじめ当時の世界レベルのそうそうたる選手の妙技を見ることが出来、今思うととても贅沢な経験をしました。

東京でも大阪でも、遠征は夜行列車で何時間もかけて行きました。新幹線や飛行機で移動する現代から見たら全くのんびりしたものでした。

東北代表（昭和29年東北学生卓球選手県大会　シングルス優勝）になった時は、たった一人の女の

子の遠征の引率（用心棒？）に、大先輩が二人も付き添って下さって、心丈夫なことでした。

大学の駅伝大会には、卓球部は「あすなろ」チームとして参加、優勝したように覚えています。とにかく、いい人々に恵まれて、ひたすら楽しく過ごし、あれこそが青春時代だったと確信しています。

ちなみに、当時のダブルス“イノチカ”コンビの相棒“イノちゃん”とは、今に至るまで長―いおつきあいが続いており、これも福大卓球部のおかげと感謝しております。

魅せられて

田　中　滋　子（旧姓　猪瀬）

あれからもう四十数年が経っていたと、いま改めて思う。十代から二十代にかけての、人生の中のあの短い年月を青春というなら、福大卓球部に在籍した時期は、まさに青春の凝縮された時間だったと思う。

子どもの頃から卓球に馴染み、卓球が好きであったのに、卓球というものに本気で付き合ったのは、福大に入ってからである。すでに高校で選手として活躍していた、わが相棒のチカちゃん（現片桐寛さん）に連れられて、体育館を覗いた。まだ旧い体育館の頃でかなり歴史の刻み込まれた建物であり、空手部やフェンシング部と共同で使っていた。隅の方に小さな更衣室があった。

部員の方々はそれぞれ個性的で楽しい面々であった。温かい雰囲気がいつもあり、何とも居心地のよい場所となった。放課後といわず、休講の空き時間も殆ど毎日体育館に通ったものである。

初心者の私はいつか卓球に魅せられ、卓球部の空気に魅せられ、そしてのめり込んでいった。臆面もなく数々の試合に出させてもらって、当然のことながら、卓球が生活の中の大きなウエイトを占めることとなった。チカちゃんとダブルスを組むことになり、シングルスとは別な愉しみを知った。足手まといであったろう私を、チカちゃんはよくリードして下さった。そして部員の皆さんが温かく指導して下さったと思う。チカちゃんとは、寮で寝食を共にしていたから、いつも一緒で、まさにイノ・チカコンビ（旧姓猪瀬）であった。

狭いテーブルにネットを張り、小さなボールを打ち合う。ただそれだけの中に、一つの世界がある。相手の心の動きや感情が微妙に伝わってくる。それがおもしろい。そして十分汗を流した後の爽快感は、何ものにも代え難いものがある。

ついにダブルスで東北大会優勝があり、東日本大会、全日本学生選手権大会にも出場できた。第一シードの組との対戦では無我夢中。勿論初戦敗退であったが、当時日本の第一級の人たちとプレーできた興奮は、今も鮮やかに心に残っている。

福大での、卓球に魅せられて過ごした、大いなる時間と空間、そこには喜びがあり、苦しみがあり、そして自分との葛藤でもあった。何よりも、卓球を通じて、得難い人たちにめぐり合えたことを心から感謝している。

☆記念誌に寄せて～役員のページ

もくじ

県協会理事長の想い出 ――郡山女子高校時代――	宇賀神喜嗣（顧　問）	…… 99
卓球とのかかわりの中で	佐藤　昭典（顧　問）	…… 102
大会の思い出	土屋　　弘（顧　問）	…… 102
「第50回ふくしま国体審判員」を育てて	壁谷　之夫（顧　問）	…… 103
卓球こそわが人生	松崎　俊一（顧　問）	…… 106
南東北弱小三県	深谷　秀三（副会長）	…… 108
「回想」	伊東　守信（顧　問）	…… 109
卓球との出会いと旅路	平石　家治（副会長）	…… 109
「回想」	野木　孝夫（会長指名理事）	…… 110
卓球を通して	菊地　敏美（県教職員理事長）	…… 111
協力会員としての想い出	渡部　信行（監　事）	…… 112
私の人生と卓球との出会い	宗像　次男（県中支部長）	…… 113
うつくしまふくしま大会	伊藤　秀行（理事長）	…… 114
国体監督の想い出	渡部　洋一（前理事）	…… 115
私の卓球の思い出	伊藤恵美子（前副理事長）	…… 115
出会い・感動・挑戦・歓び・挫折・感謝	西郷　徹夫（会　長）	…… 116
あの頃の想い出	二木　康視（副会長）	…… 124
回想・雑感（60余年）	三浦　勝美（名誉会長）	…… 125

県協会理事長の想い出
～郡山女子高校時代～

福島県卓球協会元理事長　宇賀神　喜　嗣

昭和31年1月、猪苗代高校から郡山女子高校に転勤、そして卓球の顧問になる。

県中地区の顧問会議のとき郡山商業高校の本田克彦先生から高体連卓球部の県中地区委員長は郡女からと云われ何の考えもなく引き受けた。

直後の高体連の理事会の時、県中地区委員長が県の委員長になってくれと要請される。猪高時代の顧問歴が2年だけで卓球の事など分からない者に勤まる訳がないので固辞する。然し高体連理事の郡女の横田源助先生が脇から私も手伝うからと云われるので仕方なく引き受ける。

高体連の県大会は迫って来る。申し送りも何も何い。三浦勝美先生が心配して笹山先生と一緒に県卓球連盟理事の志賀一さん宅に行くからと云う連絡を受けて私も志賀一さん宅に行く。初対面の挨拶のあと三浦先生から申し送りを受ける。このあとは、宇賀神のいるところ三浦ありで、絶えず教示を受け支援されて私は大役を果たして行く。

地区委員長は、県北 斎藤正雄、県中 本田克彦、県南 和知 一、会津 武山 博、相双 松崎義次、磐城 富樫和雄、でこの方々にばかり各地区より500円ずつ支出してもらい3000円で高体連卓球部の運営をする。県からの交付金のあることはこの後わかる。

この年であったと思う。東北高校卓球選手権大会の帰路ニッタクの向原一雄専務が訪ねて来た。

要件は来年の東北高校卓球選手権大会の試合球の事についてであった。話を聞いただけで別れた。

郡商の本田先生の紹介でYSPの鎌田光隆さんに郡女の卓球のコーチをお願いした年でもある。

東北高校卓球選手権大会の当番県が廻ってきた。

東北5県の委員長さんに試合球を従来のニッタク一球にYSPを加えたいと希望を述べ相談したところ、ニッタクのみが3県、YSPを入れてもよいが2県、そこで当番県と云う事で2球にして大会要項を作成した。虫のいい話だが、まずニッタクに行き資金援助のお願いをする。専務さんの返事はワイエスと同じにと云う事であった。次にワイエスに行き事情を話す。ニッタクと同じにと云う返事を貰う。この時は長女をつれての旅。ニッタクの社長さんは帰り際にわざわざ広小路のデパートまで送ってくれて娘に土産を下さった。誰にでも出来ることではない。人間が違うと思った。このような訳で試合球を2球にした為に収入は半減した。

昭和33年、平での県大会のとき、会津女子高校には勝てないが決勝まで行く積もりだった。それが松崎さんの浪江高校に一回戦か二回戦で破れる。

シェークハンドのカットが2人いてこのカットに勝てなかった。（今泉英子は県体の時は運よく勝てて、会女の平野幸子、もう一人は若女だったか福光町会場の富山国体に参加）

シェークハンドのカットの選手を作ることが私に課せられた。橋本トシ子（1年）平原千賀子（2年）が協力してくれた。今から考えるとなんでもない事だがカットの教え方が分からずニッタクに席を置いた早稲田大学の野村斐先生にまず私が習いそれを橋本に伝えた。勿論橋本も野村先生から直に教わったが私の方が余計先生に接する機会が多かった。期間が短く平原には教えられなかった。この年の前後、秋田の田村悦郎先生が病気になり、宮城の庄司秀一先生のお世話で後任として全国高体連卓球部の監事になる。松山市道後町の仙波光先生の薫陶を受け、又柳井の中村清二先生に秘かに近づき先生の卓球指導を盗み聞きしたくて一緒に風呂に入ったのも監事になれたからで、御陰で庄司先生とはこの後も長い付き合いをさしていただく。

今泉英子たち4人が卒業した年、郡女は弱体化した。弱くはなりたくないとしみじみ思った。それは地区予選の組合せを作るときに現われた。郡女と戦っても負けないと云う気がありありとしていた。今泉たちを育てる時の指導方法が悪かった。女は男と違う。それが分かったような気がした。

この時まで地区委員長の仕事もしていたが、次年度にはやめる。生徒に対しては1年、2年、3年とも同じように接することにした。ある学年だけを偏重しない。この事の大切さが分かった。生徒の方

にも変化が現れ練習場の雑巾がけを云わなくともやるようになった。

昭和35年には橋本トシ子が岡山市のインターハイに行き、昭和37年には五十嵐京子（中学ではバレー）が鹿児島市のインターハイに、そして昭和38年には吉田マサ子が浪江町の県大会に優勝する。橋本・五十嵐・吉田とシェークのカットが続いて全国大会に出場出来たのはカットに負けた口惜しさの御陰である。吉田まさ子は中学の時は水泳。昭和38年度は、吉田マサ子、古川豊子、野呂敏子、上杉八重子、遠藤久美子、佐々木恒子、菅野秀子、佐藤留美枝と8人いた時で郡女は強かったが福島女子高校、磐城女子高校も強かった。

福女が「郡女なんかに負けない」と云っていると云う事が私の耳に入って来た。郡女に負けたくないと云うのなら分かる。『なんかに負けない』と云われた事にカチンと来た。他に負けても（これは良くなかった）福女には絶対負けるなと云う事になった。オーダーを前夜選手と一緒に真剣に考えた。ショート主戦の遠藤を一番にして高倉（カット）に当てる作戦、これが適中し遠藤はストレートに勝った。ここが圧巻。この晩は小野哲男コーチ以下泣いたと聞く。

前年度は会津だったと思う。郡女は磐女に勝って帰りの列車の中で安田先生に色々と良い気分で話しかけた。安田先生の口惜しさに気付いたとして良い気分が先行していたらしい。後になって安田先生と話し合った事を復元しながら書いている。

浪江の県大会の前に小野町で磐女と練習試合をやっている。お互いの技術を高めるために悪いことではないが、この時期に行ったこと、相手を十分に観察しなかった事が孫子を3回も読んだのにと云う事になる。安田先生には卓球の技術指導は出来ないと思っていた。卓球技術の指導はしなくとも練習の監督は出来る。安田先生は、怠けているか本気か、それだけを見極めて、朝授業前に、2校時終わりに食事させ昼休みに練習、そして放課後と徹底させた。私も鬼と云われると聞いた事があるが、安田先生は私以上の鬼だったと思う。

この鬼に佐藤昭典さんが技術指導に当たった。鬼に金棒である。

京都の全国大会には、学校対抗とダブルスが磐女、シングルスが郡女2、福女2、国体は山口県の柳井市で磐女は斎藤恵美子、磯上佳津、郡女は古川豊子、野呂敏子が行く。

安田先生と一緒だったので帰路の観光も楽しかった。

昭和39年度は決戦で福女に負ける。この時はラストまでゆき木ベラの高橋に須賀が対戦して負ける。木ベラ対策は講じていたのだが私の木ベラではどうしようもなかった。卓球用具の発達の面から考えて見て木ベラは時代遅れであるが、それが通用したのは相手が不慣れであるからで、慣れられては勝てない。

コーチの小野さんは入院中だったが練習時間がくると病院を抜け出して練習を見たと聞いている。これに負けたと私は思っている。磐女のときも福女のときも負けるべくして負けたと思っている。

全国大会は三重県伊勢市で、学校対抗、ダブルス、シングルス3が福女で、郡女は三瓶利子（優勝）ダブルス（2位）三瓶・松坂

伊勢に行く途中東京の三井生命に寄って橋本トシ子に練習をして貰った。シングルスの決勝はカットの菊田（福女）、この時は安心して見ていた。同じカットでも橋本は違う。勝てる訳がない。ランク入りの直前で東京のカットの試合を見ながら橋本と練習させた事を悔やんだ。大事な試合を前に自信喪失につながる試合はやらせるべきでなかったと思う。

三瓶は郡女卓球部の秀才と私は思っている。1年のときは家事をしていた。それに解放されてから力をつけて来た。

私の卓球ノート（№2）に昭和39年1月5日、6日の栃木県真岡でのシングルスの練習試合の記録がある。このときは三瓶利子、今泉幸子、柳田恵子をつれてであった。新潟県の選手との試合もあるがそれは省略する。

三瓶（2年）$\left\{\begin{matrix}4 & -21\\ 9 & -21\end{matrix}\right\}$ 大島（3年）　　今泉（1年）$\left\{\begin{matrix}3 & -21\\ 7 & -21\end{matrix}\right\}$ 大島

練習が終わって真岡の校門の前でバスを待つ間、見送りに来ていた大嶋俊之助先生が「家内が私に

今年は経費は昨年より安く、収穫は多かった」と報告してくれたと云った時の先生は秘々と奥さんに感謝していた。もう一つ、真岡は朝一時間練習するが郡女はしていない。

大島先生とはこの後2、3度はお会いしたと思う。

昭和40年度は青山佳代子が長崎の全国大会に行き県総体では今泉幸子が優勝する。

長崎へは三浦先生と一緒に行くのだが、三浦先生には申し訳ないと今でも思っていることがある。

生徒に関しては、熱心に練習した生徒が9人残った。どうしても1人はベンチに入れられない。それで1人にやめて貰った。何か別に良い方法が無かったかと忘れることのない思い出である。

昭和41年3月12日、県理事会で、高体連の委員長をやめた事を報告する。途端に笹山先生から、理事長を引き受けてくれと要請される。鈴木重郎治、三浦勝美、斎藤正雄の三人から別室で膝づめで引き受けろと云われた記憶がある。

自分の意志から10年もやったんだからと高体連の委員長をやめたのだが、何とも云えない寂寥を感じて志賀さん宅を訪ねて酒を飲ませていただいた。

卓球の試合の度に卓球台の運搬をはじめ色々とお世話になった。

高体連卓球部は零からの出発であったが、県卓球連盟の方は負債を背負っての出発だった。

福島県卓球連盟日記（No.1）備忘録の1頁に41年度理事会祝金YSP3,000円、ニツタク5,000円、入金8,000円、3月14日内7,000円、大東相互に新たに口座を設けて入金。

成蹊女子高校は、どうしても勝てない相手だった。一度、斎藤先生に私を理事長にしたのは郡女に勝たせない為かと八当りしたこともある。

理事長と委員長では仕事の比重が違う。卓球部の指導もそれだけ手うすになる。それなら囲碁も麻雀も誘われてもやらなければ良い訳だが中々旧来のろう習は直らない。

郡女で最初に名前を憶えた生徒、田中征子（七海）から先生は材木屋と云われていた。然し一方では卓球は下手だが教え方は上手いからよく指導を受けろと陰では支えてくれた。

初めて天和（麻雀）であがったのもこの頃であったと思う。卓球も下手だが囲碁も麻雀も下手、気が多い性である。

昭和41年度は日山良子、三瓶京子、柳田純子、昭和42年度、小幡泰子、上石洋子、小田トキ江、この中に染田がいた。郡山一中で小幡と一緒に卓球をやっていて郡女に来てからも小幡・染田のダブルスは中々良い成績をあげていた。私の家は平屋6畳2間に娘達と私達がすみ長男は3畳、4畳半2間に母達が住み、とても下宿させる環境ではなかった。染田は山陰の方に転校する。白河に大越守先生の育てた森山志代子がいた。私の住宅にもう一人下宿させる余地があったら森山には郡女に来た貰ったと思う。三瓶利子と同じ位期待していた小幡は貧血症で、私の期待がプレッシャーになっていたかも知れない。小田の中学の後輩で陸上・走り高跳びの蛇石洋子を小田が6月頃連れて来た。カットに育てる。このカットに森山さんは泣いたと思う。小幡たちは白河女子高校の森山に泣かされる。

2年連続全国大会には行けなかったが、昭和43年度には、呉のインターハイと福井国体に参加する。蛇石は運の良い選手である。

昭和42年度東北高校卓球選手権大会及び国民体育大会東北地区予選が郡山市田村徳定の日本大学工学部の体育館で行われた。競技も終わりに近づき、表彰式を準備していた時、会長に所要があって、帰られた事が分かった。斎藤正雄先生も副会長だから代わりにとも思ったが、斎藤先生は、競技役員でもある郡女の畑校長先生に大会副会長として表彰式に出席していただき、無事大会を終了させて貰った。畑先生からは楽しい話を聞かせていただいたその中から一つ。

先生は戦時中ビルマで日本語の先生をしていた。先生がメコン河を舟で下っていた時、コーヒーを飲みたくなって上陸したそうです。その直後船は爆撃を受けて沈没してしまった。

昭和44年度は運よく佐藤ふみ子が2年生で千葉のインターハイに出場する。この経験は翌年に生きてくる。昭和45年に入り相馬での新人大会には三浦先生の安達に敗れる、。県大会は須賀川市で磐城一高、安達高の強敵を控えた朝、父の位牌の前で久し振りにめぐり来たチャンスです、応援して下さい。父をはじめ先祖にお願いする。

この効果は磐一のときラストの青山に現れた。親爺頼むと念ずるとネットイン、エッジ等が出て、ポイントを稼いだ。青山には運があると思った。決勝の安達の時は佐藤が頑張った。良く勝てたと思う。名古屋のインターハイでは名門真岡女子高校と対戦する。佐藤が1勝し、負けはしたがダブルスが善戦した。

真岡と聞いただけで駄目だと思った。だから気楽に戦えたかも知れないが、勝つチャンスもあったかも知れない。戦う前から駄目と思った事には自己嫌悪を感じた。

もう一つ今だに悔いていることがある。ランクに入った時、ベスト8に入れればよい、と、云って了った。京浜女子の猪狩英子とベスト4をかけて対戦した。苦しい試合の最中に私の失言が頭をかすめることが、(失言がなくても猪狩の試合ぶりは今でも目に浮かぶ素晴らしいもので勝てる相手ではなかった)なかったとしたら今でも忘れられない。

この経験が、よし全国制覇を狙おうと思わせた。

昭和46年度は石井てい子が徳島に行く。

私の卓球指導のノートには、昭和47年4月14日付郡女卓球部は46年度の卒業生をもって一応終わり新しい楽しい卓球部をこれから作る。と決意がかかれている。3年生はいなかった。

そして、この時の2年生の卒業を見ないで郡山西工業高校に転勤する。

西工には4年漸く県大会に出場出来そうになった時に、郡山工業高校との統合が始まり郡山北工業高校と校名が変り、卓球部の顧問からも外れる。

郡女を去って2年、県の理事長もやめている。

卓球とのかかわりの中で

福島県卓球協会顧問　佐　藤　昭　典

私が卓球を始めたのは、昭和14年小学校4年生の時でした。当時、相馬商業学校卓球部に入り、練習をしておりました3歳上の兄貴に時々連れて行ってもらったのが最初でした。

昭和21年相双選手権大会に優勝し、意気揚々として、第一回福島県卓球選手権大会に参加、2回戦にて敗れ大変悔しい思いをしたことがありました。その当時小高の半谷銀砂工場内の卓球場に週2回位ずつ練習にまいりました。練習相手は半谷、佐藤忠、石田留治郎、紺野幹夫、藤、増子、松崎、只野、畑田、梅原実、塩等々一般人、高校一緒の練習でした。その当時が、大変なつかしい思いです。

昭和22年から23年にかけて、一般では、半谷さんがシングル、私と紺野幹夫がダブルス優勝、高校では、梅原実、畑田がシングル優勝と県チャンピオンは、相馬の時期が続きました。そのころ、双葉中学、相馬中学それぞれ東北大会優勝の成果を上げた時期でもありました。相双の卓球は、戦前・戦後を通じ、半谷卓球場を中心に発展したものと思っております。昭和23年からいわき卓球協会にお世話になり、早や47年、その間実業団の選手、また役員として頑張ってまいりました。

現在は、ママさん卓球の指導に専念しながら、ラージボール卓球の普及に頑張っております。

大会の思い出

福島県卓球協会顧問　会津支部　土　屋　　弘

昭和10年にはすでに喜女卓球部が、創立し部活動を開始していた。顧問の安達善吉先生が指導、その後丹藤祐輔、満田三平、慶徳先生等も良き指導者であった。喜多方市も卓球協会が設立されていて、一般人も活躍して大いに気をはいていた。若松は若商校OBのテニス部、陸上部が主体となり卓球愛好者を集め、小さな大会も開いていたと聞く。昭和23年8月、喜多方から矢部平作、猪俣俊夫、江川昌彦、冠木新助各氏、若松から本田栄、岩田喜一、平出雄次、日夏秀雄各氏、又柳津の橋本新一氏等が発起人となり会

津卓球連盟の設立を見た。会長本田栄、副会長岩田喜一、理事長平出雄次、三役にて運営、福島県卓球連盟に加入した。昭和56年会津卓球協会に改称した。歴代会長 本田栄、吉川景亮、星善六、土屋弘、現在松崎繁、理事長は 平出雄次、土屋弘、千葉恒夫、現在北沢宏。

昭和21年復員し、22年頃から平出雄次氏に、師事を受け、初心者の仲間入りした。球歴は、昭和30年ミニ国体に、同年全軟直江津大会に出場。昭和42年壮年で、ミニ国体に。昭和40年岐阜国体卓球競技監督、男子（一般）として参加、個人はいずれも軟式での出場。昭和27年25才で理事になり、卓球界に足を一歩踏み入れた。当時は県大会で三回戦まで進むのが精一杯だった。理事会は後藤寿二会長宅の花月で行われた。各地区のメンバーは、県大会のチャンピオン、シニアでは全国のランクプレーヤー錚々たる顔ぶれであった。私など卓球を語ること、おこがましいことであった。あれから平成8年役員辞職するまで43年間大変お世話になりました。

昭和29年ロンドンの世界卓球選手権大会で、日本が団体戦アベック優勝、この大会に後藤英子選手も参加され大いに活躍した。翌30年第9回全国都市対抗三競技卓球大会を、会津若松市謹教小学校で開催された。

平出雄次会津卓球連盟理事長を先頭に会員、総力を結集して取組む。会員約30名三級公認審判を取得し、大会に万全を期した。田舎者の我々は世界の王者荻村、田舛、女子では江口、大川等のプレーを目の当たりに見るチャンスを得た。試合は、ただただ感銘を深くした。プレーの連続、何か本当の卓球を自分なりに知った感じがした。この大会には市の保体の応援を頂き感謝しました。

世界の王者になった日本の卓球が契機になり一般の職域大会が、軟式から硬式に変わった年でもあったと思う。

私が、進行委員長で昭和62年全国社会人卓球大会を郡山総合体育館で開催された。大会も思い出の大会でした。開会式と会場準備が遅れ、タイムテーブル計画通りいかず、選手控室、審判員も混雑し、正常に戻るまで進行委員、審判員が食事を遅らせ、午後2時なんとかタイムテーブルに漕ぎつけた。役員の皆さんにお世話になり、役目が遂行出来たこと今でも感謝の念で一杯です。ただ残念なことは、選手2名二日目、タイムテーブルに遅れ失格になった。これもルール、仕方のない処置だった。

第40回中津川国体に監督とし参加、一回戦は佐賀を破り、2回戦で広島に負けたが、反畑、伏見、安藤、鈴木の各選手が一生懸命頑張った。特に反畑主将には未熟な私を支えてくれた。その人柄に心からお礼を申し上げます。

卓球協会として最大のイベントは、平成7年第50回福島国体の成功だ。第50回国体が福島県と決定を見たときから、役員は国体終了まで改選なく協会一丸となり、卓球競技総合優勝を期すべく準備や選手強化に全力を尽くす決意をする。

県内選手で参加する当初の考えが、平成6年後半から勝つ為に、輸入選手補強の声が高くなる。結局これに依り、選手の入替も余儀なくされ、平成7年国体開始まで、何回も役員会議を開き、会長、理事長始め関係者が頭を痛めた日々が多かったと思う。最終会議でなんとか決定まで進む。決まった以上は心新にし協会一同結束をかため成功に邁進した。

協会一同の努力が結集され、結果は総合二位となり面目をほどこした。だが忘れてならないものがある。喜びの陰に涙した人がいた。何から何までも心に残る国体であった。

「第50回ふくしま国体審判員」を育てて

第50回ふくしま国体副審判長　壁　谷　之　夫

昭和70年に第50回国体が福島県に（第2回目）来ると言うことが、昭和57年頃から耳にするようになった。そこで中学生の強化に力を入れてほしいと云うことで、私がその責任者に選ばれ卓球指導の出来る先生方と相談し、夏・冬休みを中心に強化合宿等を各地区で実施した（私は特に実技より精神面の指導を受け持った）回を重ねる毎にその成果も上り始めて皆と喜んでいるところに、「昭和63年

7月18日付で、第50回国民体育大会審判員養成講習会の講師に委嘱します」第50回国民体育大会福島県準備委員会、会長　松平勇雄氏よりの委嘱状だった。

私は今迄中学生の強化にのみ力を入れていたのに今度は、審判員の養成と云う仕事に専念せねばならなくなったわけであるが、この仕事は今迄のように先生方に相談して出来るものでもない。先づ何から手をつけるか困った。そこで第一にルールの勉強から始めた（大体は知っているが）ルールブックを隈無く理解し暗記した。でも覚えたと思う反面忘れるのも早かった。だからルールブックは風呂以外は身から離さず持ち歩いて暇さえあれば、同じ場所を何度も繰り返し学習した。この事が一番多くの時間を要したし辛かった。

さて、最初の「審判講習会」は昭和63年8月21日、郡山中央公民館・サンライフ郡山で行った。その方法は、午前9時より120分間、私がルールの講義をする。その後60分は講義での不明な点や、平素疑問に思っていた事を出し合って受講生全員で話し合って結論を出させる。解決しない時私が正しい指導をする。そして昼食後、ペーパーテストの始まる前に質問を受ける。質問が出なくなったらペーパーテスト（約60分）

それが終わって実技（腕の上げ方等）を30分位やって講習会全部終了する。

以上の方法で、昭和63年から平成7年4月29日迄8年間で「審判講習会」69回、場所は、福島体育館、郡山中央公民館、サンライフ郡山、須賀川体育館、須賀川アリーナ、白河体育館、船引体育館、平工業高等学校、原町体育館、会津若松市、と県内全域で実施した。一般人275名、高校生353名、合計628名の日本卓球協会公認三級審判員が誕生したわけであるが、ここでホット安心するところではなく大変心配なことが出てきたのである。

それはルールの第2章競技ルールの抗議（Appeais）の所の2・3・3・5に「個人戦での抗議は、問題が生じた場合に参加した競技者のみが行うことができる。団体戦での抗議は問題が生じた試合に参加したチームの監督のみが行うことができる。即ち国民体育大会の卓球競技は全種目が団体戦で、しかも各県1チーム以外はすべて各ブロックの予選を勝ち抜いて参加するチームばかり、しかもその監督から抗議を受けた時即座にハッキリと正しい判断を下さねばならないわけである。従って20代の若い審判員ではその監督に立ち向かえるかどうか？ 或る程度の年令が必要でルールもしっかりマスターした度胸も要求されると考えた。そこで三級合格者の中から30代以上の男性40名、40代以上の女性（子育てが一応終わった）40名、計80名を国体審判員の候補者と仮決定をし本人からの承諾を得て、特訓に入ったが声は低い。動作が緩慢でなかなかスムーズに運ばないので、リーダー養成を考えた。上級の二級審判員資格に挑戦する者を集めたがさっぱり集まらない。理由を聞くと自信がないと遠慮するのである。そこでこちらからめぼしい者男性8人、女性8人を説得して、やっとのこと二級の資格を取得してもらうことにした。しかしこの勉強が大変だった。船引町と須賀川市の人達は、夜の勉強会（1日2・3時間）、その他のいわき市、会津若松市の人は日曜日に私が足を運んでマンツーマンの特訓をして実力をつけさせた。

その甲斐あってか、全員合格した時はとても口には出せない嬉しさだった。「上級公認審判員おめでとう……」

◎平成10年4月1日より

日本卓球ルールの改正が行われた。

審判員については……

○従来の資格→新改称

「名誉審判員」――→「名誉レフェリー」

「1級公認審判員」→「公認レフェリー」

「2級公認審判員」→「上級公認審判員」

「3級公認審判員」→「公認審判員」

やっと二級審判員が誕生した。それも女性が8名（これは福島県で始めてである）大変すばらしい事だ。男性に負けず立派にやってほしい。

◎審判員の任務

1．主審は、競技上の事実の判定に対して全責任を有する。このことに伴って、競技者が不審を抱かぬよう細心の注意を払うこと。又宣告は、正しい発音と、明快な音声をもって行うこと、手によるジェスチャーも、節度あるものにすること。

2．副審は、主審と十分な協議をする。任務の分担をする。（サービスやその他に主審と判定権が同等のものがあるので）副審が2名なので（福島国体では）

① 主審に向かって右側の副審が、タイムキーパーを行う。

タイムキーパー内容は、練習時間・実競技時間・ゲーム間の休憩時間・怪我等によるゲームの中断時間の計測を行う。

② 促進ルールが適用された場合、レシーバー側の副審が、起立してストローク・カウンターを兼ねる。

③ カウント器の操作

競技者が到着したらゲームスコアの表示を「0」「0」にする。次に主審の宣告で点数の表示をする。

◎公認審判員が自覚と誇りを持つよう常に心掛ける。そのためには、ルールに精通し、公正で的確な判断と、敏速な処理が行えるように日頃から審判技術の向上に務める。又審判員の使命を考え、審判実務については常に反復練習を行い、的確で素早い判定技術を身につけることである。

○コート主任……上級公認審判員の資格を取った人にやって貰った。

種目別：成年男子1部・2部、少年男子

種目別：成年女子1部・2部、少年女子

以上の種目の団体戦だったので、男性には男性の審判員を、女性には女性の審判員を配当した。

◎審判実務

上級公認審判員の有資格者になったからには、先ず審判員の任務について充分知っていなければならない。そしてそれが実際の試合にどれだけ生かせるかである。

私も平成2年に始めて東京の綾瀬にある東京武道館で行われる、平成2年度全日本卓球選手権大会と(12月下旬)、3月の下旬に東京体育館で行われる東京選手権大会に、審判実務で参加したが、先ず、会場の広さ、ボールの速さにびっくり、思うように声は出ない。手信号も自信をもって出来ない。それに東京の審判は赤ブレザー、私は県卓協で決まったものが無いので、紺のブレザーを着用しての審判なので、一番目につく為夢中で心臓の止まる思いだった。

そこにいくと、東京の赤ブレ審判員は、試合の流れを滞らせないで、スムーズに運んでいた。

私のようなぎこちなさが見られないのである。そして、とても親切に教えてくれた。私もそのように10試合位やったら肩に力が入らず、とても良く出来るようになった。

そこで、審判員に私と同じこの経験をさせる事だと考え、国体事務局の今泉一二君、県理事長の平石家治氏、事務局長の伊東守信氏に話をして、何とか派遣の了解を得て、審判実務に入ったわけである。

最初に、平成6年11月14日から3日間、長野県楢川村ナショナルトレーニングセンターで、第3回地球ユース選手権大会日本代表決定大会に6名、東京から20名、私が日卓協より審判長に指名された大会だった。

次に、平成6年12月、綾瀬の東京武道館での全日本卓球選手権大会に15名。

平成7年3月下旬の、東京選手権大会に16名合計38名が、福島国体の核となって活躍することだろう。

又コート主任とそれと一緒に活躍する人達で、7月より毎土曜日夜、須賀川に集まり、選手団の入場、退場等の誘導から、その他細かい事についての打ち合わせは大変だった。

今思うに国体は大変でした。よくやったなと感心します。

先輩の副会長さん方から、審判は大変だといつも云われていました。しかし審判が良く出来ればその大会は大成功だと云われていたので、やりがいもありました。

審判で何のクレームもなく出来たのは始めてだと云われ、満足しています。
審判の成功は、大きな大会に出して「審判実務」をさせた事と思っています。
どんな大会が来ても立派にやる自信がつきました。

卓球こそ　わが人生

福島県卓球協会顧問　松　崎　俊　一

昭和22年春、20才で勤めた郡山市立桃見台中学校は、新制中学校として桃見台小学校に併設されたもので、2、3年生は高等科の男子生徒が進級の形で移行した。1年生のみが戦後初めての男女共学の生徒で、校舎は高等科の建物をそのまま使用した。

広い中央廊下に卓球台が1台置かれてあり男子生徒が楽しそうに遊んでいた。ここで初めてラケットを握り、教えてもらって熱中した。戦時中の学生生活はスポーツとは無縁で、こんな面白いものがあったのかと。3年目に3年生の担任となり只1台の卓球台を自分のクラスの教室に運び込んで、練習した。放課後掃除当番が机の半分を廊下に出し、残り半分を教室の両側に重ねて真中を空けて卓球台を入れる。そして男女十数名の生徒が交互に打ち合う。ミスすると交替するきまりなので真剣そのものであった。天井には60Wの電球が1つぶら下がっているので球が見えなくなって終わり。早朝から練習、授業10分前に生徒全員で机を並べる毎日だった。クラスの生徒には感謝あるのみ。1秒を惜しむ練習でメキメキ上達して、この年の市中体連大会で男女とも優勝した。特に女子は強く専ら安女、郡女、社会人を相手に練習して引けを取らなかった。この時の生徒が高校に進学して3年生の高校大会て、松崎周二（安高）七海和子（郡女）がダブルスで優勝している。

週5日制だったので、土・日・祭日と一日も休むことなく朝から夕方まで練習、ロクに食べる物もなく空腹をかかえ頑張った事は称賛に値する。

6年目に郡山五中と改名されて新校舎に移った。空教室が幾つかあり1つを卓球室として専有して時間が空いている時は何時でも利用した。宿直の晩など一人でサービスの練習をした事を思い出す。市内大会は常勝で、29年から開催されるようになった県中大会で男子が初優勝を遂げた。

また、同年から開催された県中学選抜大会（須賀川一中主催・高久田大一郎氏）では、男子が3連覇、女子は壁谷氏の率いる瀬川中が3連覇して共にカップをもらい切りにした。五中9年間の卓球に明け暮れた佳き時代の思い出である。

31年に郡山一中に転勤、大規模校で1つの体育館の中で室内競技がすべて行われるので卓球は壁ぎわに追いやられて練習もままならない。それに進学指導の補修（数英）で時間をとられて卓球で生徒と一緒にいることが少なくなった。

市の中体連卓球部長として、大会会場の確保が頭痛の種だった。安高、郡商、郡工、安女等の講堂を借りたが一中に移ってからは会場は一中に固定し、台は郡商からリヤカーで運んで実施するのが常であった。終了後リヤカーで返しにゆくのは大変で生徒がかわいそうでならなかった。郡商の顧問の本田克彦氏にはお世話になった。

35年から県大会が実施されて、会場は郡山一中で行われたので、責任者としてその運営には苦労した。37年の大会では男子が準決勝で中村一中と対戦したが、オーダーミスで1－3で破れた。相手が優勝しただけに残念だった。まして中学校の教員として最後の年だっただけに無念の思いが残った。中学校生活16年に別れる事になった。

38年に第一次団塊の生徒増の為に新設された郡山西工業高校に移った。第一期生の学年主任・生徒指導部長として、新しい学校作りで卓球どころではなかった。3年目の終わりに父兄の寄附金によって体育館が建ち卒業式を行うことが出来た。

生徒は郡山市外から通っている者が多く、交通の便の悪さから部活動に参加する者は少なく、卓球部の顧問とは名ばかりで指導する暇もなかった。正直いってこれで卓球とは縁が切れたかとホッとす

る一面もあった。しかし、大会の組合わせ会に出席してびっくり仰天、朝から各校の顧問と生徒代表が集まって一日がかりの仕事だ。顧問は卓球についてズブの素人が殆どで全て生徒まかせ、特に有力選手を抱える学校の生徒が慣れ合いで取りしきっていた。おかしな慣習だった。

43年に、地区委員長の宗像次男が郡山卓球協会長を引き受けるようになったのでお前がその後をやれとの事、市保育所保護者会長・町内会長等をやっていたので、とても引き受けられないと再三断ったが他に適任者がいないとのことで止むなく引き受けるハメになった。早速の初仕事は、組合わせ会の生徒参加を中止して顧問のみで行うことにした。ルールさえ作っておけば簡単なことである。

県大会の際、地区委員長として運営に参加するのに自校の生徒が出場しないと旅費の支出に支障があるので、別枠で1名確保することにし、その適用第1号は僕だった。45年、専門委員長に大橋柾氏を選出して以来62年に退職するまで、その補佐役として、高体連卓球部のご意見番としての職責を全うすることが出来たことは誇りに思っている。

県卓球協会の中枢は、高体連関係者が占めているので、我々や高校生が範を示すことが一般や小中学生のマナーの向上に役立つことだった。

その高校生がゼッケンは忘れ、オープンハンドサービスは守らない。監督は、試合中一球ごとにベンチによんでアドバイスする有様だ。厳しく改善に取り組んだ。3年ほどして漸く何とかまともになった。

県の高校の大会の組合せ会も出場選手校の顧問が一堂に会して行っていたが、各地区委員長がその地区の代表として作業に当ることにした。地区によっては自校選手の組合せに苦情を云う顧問もいて、委員長が立腹して替わってやらせたら、とても大変なことがわかって詫びたことなどもあった。

インターハイの県大会の学校対抗の2位は組合せに左右されるので、ベスト4からのリーグ戦で1、2位を決めること等新しい方法を取り入れた。

県総体に新人による団体戦は、1年生対策も考えて実施し現在に至っている。

48年春、永年勤続者の強制移動で、宇賀神氏と交換で郡女に赴任することになった。男子高から女子高にかわって鬼の松崎が佛の松崎に変身したと云われた。前年度から宇賀神理事長の仕事を手伝っていたが、この年から本格的に事務局として活動することになった。まず財政の確立が急務で、会計に菅野源吉氏を得て、その堅実無比な仕事ぶりによって納入金が飛躍的に増加した。

49年から新設された郡山総合体育館が利用できるようになった。それまでの県中の高校大会は郡山市内の高校の体育館で実施したが、卓球台が少なく試合の終了が夜になることが多く、女子生徒の親からは心配の声が寄せられた。総合体育館では土日は一般人の使用が原則なので高校には貸さないという。高体連事務局では、大会は土日を中心にして行うように固執したが、公認の大会を授業日に行うことが道理なので平日に体育館を借りて実施した。他種目でも卓球に右ならえでやるようになり、それが当たり前になった。

53年高校総体の卓球が県内で実施されなかったことは返す返すも残念だった。郡山でと主張したのが裏目に出たのだと思っている。

50年から54年まで三浦理事長の下で協会は確固たる基盤も出来、登録者の増加で予算も潤沢になり、東北の万年6位から浮上して、2、3位に食い込むようになった。

53年9月に待望久しい全国大会を開催することになった。全日本社会人卓球選手権大会である。僕は実行委員会事務局長としての大役に汗を流した。プログラムの広告獲得に奔走した。授業の合間や放課後に自転車で、遠くは菅野源吉氏の車で回った。予想をはるかに超えて、余剰金を協会の積立金として残すことが出来た。組織の点では進行の責任者としての会津の土屋弘、渡部洋一両氏のコンビの綿密な仕事ぶりが忘れられない。

その後、地の利から郡山総合体育館で4つ全国大会が開かれたが地元の故でいつも運営に参加することが出来て、全国レベルのプレイを眼のあたりに見て感激することが多かった。

特に、63年11月に開催された全日本卓球選手権（少年の部）で競技委員長を務めたことは望外の喜びであり、生涯の宝である。

62年春の退職まで卓球協会の各種会合に会場を提供してくれた郡女には謝意を表したい。

私が郡女に赴任した時には、卓球部員が僅か8名で、3年生と2年生が各2名しか残っておらず（前顧問の宇賀神氏の厳しい叱責の故か？）学校対抗予選通過もならず、県大会不出場という創部以来の窮地にやられた。危機をのり切るべく、チームワークを第一に考え、「一人はみんなのため、みんなは一人のために」をモットーに、部員を中心にして自主活動を推し進め、話し合いによる全員合意の無理のない継続的練習を大切にした。その甲斐あって、3年目の県高校大会では団体で準優勝（優勝は西郷徹夫氏の引いる相馬女子高）を果たして東北大会へ駒を進めた。全くの無名選手の集まりが、団結の力で勝ち取ったものだけに、その喜びは言うも言われぬものだった。それ以来連続東北大会出場を重ね、53年高校総体に備えての強化指定校となり、練習を積んだが準優勝で終わり、全国大会に出場ならず無念の涙をのんだ。以後、団体では東北大会出場の常連となったが、喜女の全盛時代とぶつかり常に苦杯をなめさせられて、全国大会出場の夢は成らなかった。県大会等出場の際は、選手以外の生徒も旅費は全員平等に負担して可能な限り連れていった。二十人余も泊ると実に賑やかなものだった。

合宿も楽しい想い出だ。宿泊所がなく教室の床に畳を敷いて生徒は寝る。僕は、机を並べてその上に畳を敷いて寝る有様だ。生徒は緊張し、僕はちょっぴり窮屈だった。10時消灯、卓球部は模範的だと巡回の人には何時もほめられたものだった。食事はとてもおいしかった。家庭科の生徒の献立は堂に入ったもので授業の成果の現れだった。

僕は、郡女14年の勤務の中で一度もクラスを担任しなかった。卓球の関わりが障害になったと思っている。しかし、その間に育てて卒業させた卓球部員は、約百名で2クラス分の人数だ。退職後その子達たちが「松卓会」を作って毎年集まってくれている。教師冥利に尽きるというべきだろう。

平成7年の福島国体では、副会長という立場で関与し、協会の総力をあげた体制ですばらしい成績を残すことができて、心残りなく後進に託する倖せを味わっている。

書きたいことの一端を記して筆をおく。

南東北弱小三県

福島県卓球協会副会長　深　谷　秀　三

福島大学2年生の時、自己流で始めた卓球で、県総体初出場があれよあれよという間に、決勝まで進出、日本大学の反畑選手にこてんこてんにやられたことが、脳裏に焼き付いている。ベスト4の選手が、即国体予選に県代表として出場する時代であった。秋田県本庄市で行われた東北大会は、そのレベルの高さにただ驚かされた。その後、何度か国体の東北予選会に出場する機会があったが、ただ出場するだけで、1勝することも適わぬ時代であった。特に屈辱的であったのは、ある県と対戦した時に、その県のオーダーは、4名の選手の弱い順に組まれていたことである。福島県は、ここまで見くびられているのかと、泣きたい気持ちであった。それだけ、実力的にも劣っていたことも事実であった。

その後、監督としても長い間東北総体にかかわってきた。そのころ、福島県は、宮城県と山形県の両県とともに、南東北弱小三県と揶揄されていた。こんな悔しい思いがあって、福島県卓球協会に強化部が組織されることになったのである。昭和49年に強化部が発足したが、その年に第1回の東北総合体育大会が開催された。（それまでは、各種目ごとに国体予選会を実施していた。）場所は、盛岡市であった。その第1回大会で、成年男子で福島県が見事に優勝することができ、強化部の必要性を痛感したものである。その時の強化部長が、現副会長の平石家治氏、男子監督が私であった。昭和55年に、平石さんから強化部長を引き継ぎ、平成7年までこの職にあった。

福島県が、東北の予選を通過して国体に出場できるようになったのも、強化部ができた後である。少ない予算の中で、選手選考法の改善を図り、選手強化のためにいろいろな手立てを考えた。昭和60年からは、ふくしま国体の強化対策が真剣に考えられ始め、現在に至っている。福島県独自の大会が続けられているが、そのすべてが、小中学生の強化が前提にあるということは、言うまでもない。中学校新人大会、中学校新人選抜大会、小中学生学年別大会などは、ぜひ継続していきたいものである。中

でも年6回行っている小中高校生選抜強化リーグ大会は、最大の強化事業であろう。関係各位に敬意を表する次第である。いつの東北総体の後であったか、宮城県と山形県の卓球関係者に、「福島県を南東北弱小三県から除名する。」と冗談半分に言われたことが、今でも忘れられない。

「回　想」

福島県卓球協会顧問　伊　東　守　信

昭和55年2月の県卓球協会定例総会において、平石理事長が誕生し、事務局を須賀川に置くことになって私伊東が事務局長、渡部氏が会計に選ばれた。それから平成7年第50回福島国体までの15年間、体調を崩し、半年間に及ぶ入院生活を強いられるなど様々な出来事があったが、周囲の皆さんの御協力のお陰で無事任務を遂行できて、本当に嬉しく思っている。特に選手強化に力を注ぎ、三浦会長はじめ協会役員の皆さん、そして関係各位の努力の結果、地元国体で本県が素晴らしい成績をおさめ、運営その他を含めて大成功裡に終了できたことは、関わった一人として最大の喜びとなった。余談になるが、早くから民泊受け入れを希望していたので、4月に新築に着工し、8月末に完成、どうにか間に合わせることができた。兵庫県成年女子1部の一行4名を迎えたが、家族にとっては本県選手団同様、いやそれ以上に応援に力が入ったのも、成り行きとしては当然のことだった。悲喜交々の毎日であったがこれも今ではなつかしい想い出の一つとなっている。これが縁で今でも交流が続いている。毎年のようにスキーに来る者、大学生で全国ランクに入り、卒業後も実業団で活躍している者もいて、遠くから家族全員で声援をおくっている。

さて、就任当時のことを振り返ってみると、前任の松崎氏が、それまでの協会内部を見直し、改革、改善に取り組まれたことは、以後の事務局運営に大きな影響を及ぼした。特に本部の庶務と会計の分離、各支部事務局への働きかけと改善、大会運営上の申込及び選手変更期限の厳守、開、閉会式を含め、選手のマナーの向上等々に力を注がれた。その主旨が徐々に行き渡り、けじめのある運営ができつつあった。それにしても県予選から全国大会申込みに至るまで、仕事の分量はかなりのもので「手書き」まで引き継いだ私として、大変神経を使い、慣れるのに2～3年かかったことなど今ではなつかしく想い出される。国体が近づくにつれ、特に深谷秀三氏そして今泉一二氏には仕事の何割かを受け持って助けていただいたことは忘れることが出来ない。あらためて紙上をかりて感謝申し上げたい。この70年史発行を機に、本県卓球界、そして卓球協会が益々発展することを御祈念申し上げ、ペンを置くことにする。

卓球との出会いと旅路

福島県卓球協会副会長　平　石　家　治

昭和30年4月福島県立須賀川高校へ入学。

高校生活で何か部活をと考えたがとくに自分が得意とするものがなく、ただなんとなく卓球部へ入部した。練習にも参加せず一学期も終わろうとするころ、化学の高橋宗司先生と出会った。その先生が卓球部の顧問だったのである。やさしい先生で私の家が学校まで徒歩2分ということもあり、先生は家まで迎えに来てくれ卓球で楽しく遊んではと熱心に誘われた。これがきっかけで、卓球をはじめた。これほどまでに卓球に係わるようになるとは想像できなかった。人生で一人の恩師に出会うことが自分の運命を変えることになった。以後、数多くの卓球関係の仲間達と出会うことになる。

高校2年の県総体で初めて地区代表になり、下級生の練習相手にも何とかなれるようになった頃、須賀川市の卓球関係者が選手強化の講習会を開催してくれた。会場は夜間高校の体育館だった。

高久田大一郎氏、及川邦夫氏、滝沢昌昭和氏、それに飯坂から転居してきた井上安正氏そして講師

として井上氏の友人で早稲田大学の野村監督が大学生をともなって来てくれた。

林選手、高柳選手などが印象に残っている。その会場で野村先生が私に対して直接手を取り指導され「君には素質がある。頑張れよ」との一言が以後の自分にとってとても勇気づけられ励みとなっていった。それからは毎日卓球だけの生活となった。3年の高校総体で三位、国体予選会でも三位となり、その年第12回静岡国体（吉原市）へ出場できた。そのうえ天覧試合で大変感激した。試合は東京代表に惜敗したが、悔いはなかった。笹山進監督、諸星（相馬高）三林（福島高）と私だった。当時高校で活躍した選手には、高城（原町高）林（磐城高）矢吹、安藤（郡商）木村（福島高）馬庭（福島商）などがいる。同年郡山工業高校体育館で開催した東北高校選手権では、諸星君が優勝した。

また、須高では、1年生に横山広昭君が入部し、卒業後もよく練習を共にし、ダブルスでは県大会で数多く優勝し、全国大会に参加したものである。

社会人となって、公立岩瀬病院に奉職、滝沢氏を初め卓球に理解ある上司に恵まれた。看護学院には、卓球台が常備されており、当時では環境の整った職場状況であった。須賀川労働基準協会主催の管内職場大会で10年連続優勝、福島県市町村共済組合主催の県大会での5年連続優勝は特に忘れられない。

この頃から県卓球協会とも係わりをもつようになり、県南支部が独立発足の初代理事長として県卓球協会への参画が本格化するのである。昭和55年第7代の理事長として、16年間卓球協会の仕事をさせていただいた。須賀川に事務局を移し、事務局長、伊東守信氏、会計、渡部信行氏と素晴らしい仲間にめぐりあうことができ、思い出多い出会い感謝するのみである。その間、東北卓球連盟への参画、㈶日本卓球協会東北代表理事5期10年の参画で東北、全国に友人がたくさんできた。アメリカオープン卓球大会の日本選手団の団長として、ロスアンゼルスに派遣され、当時の副会長で国際卓球連盟会長の故萩村伊智朗氏との出会うことができたのも自分にとって忘れられないものである。

平成7年、第50回ふくしま国体が須賀川アリーナで開催され、天皇皇后両陛下をお迎えして、盛大に全行事も無事終了できたことに関係者の皆様に感謝する次第である。国体の経過等苦労話は数えきれないが、今はこれを区切りとして理事長職を辞任したことで心に安らぎを保っているところである。

人との出会いを大切にして、今後の人生を卓球と共に歩き続けていきたいと考えている。

回　想

福島県卓球協会審判委員会　委員長　野　木　孝　夫

東京三鷹市上連雀に昭和20年代後半から30年代にかけて大活躍をし、当時世界チャンピオンの萩村伊智朗氏が練習していた卓球練習場があった。昭和30年ごろ学生時代を三鷹で過ごした私は、この練習風景に直に接し、身震いを感じたのを覚えている。

昭和38年新採用で勿来工業高校に赴任早々卓球部副顧問を命じられた。幸いにも正顧問に中学校で選手の育成にすばらしい実績をあげてこられた三宅照夫先生がおられ、その指導法を学ぶことができた。当時は、コンクリートのたたきの上に2台程卓球台を出しての練習であった。大会ともなると近くの磐城農業高校や勿来高校から卓球台をかき集め、夜遅くまで会場設営にあたったものである。

現在の名誉会長である三浦勝美先生より、平工業高校（現在はいわき市庁舎のある場所）の図書館の2階で3級公認審判員の講習を受けたのは、昭和41年であるからかれこれ35年ほど前のことになる。白系統以外の濃単一色のユニフォームで、暗幕を締め切った熱気ムンムンとした体育館の中で黙々と白球を追うという、どちらかというと暗いイメージの競技のように思えた。今の広い換気の行きとどいた体育館で、ライトブルーの卓球台、オレンジボール、そして色とりどりのファッションユニフォームという明るいイメージとは隔世の感がある。

理屈では科学的・効率的な練習法が望ましいと思われるが、経験の無い私にとっては、卓球の上達

は体力作りと練習量であるという信念で、正月の2日を除いて、毎日5キロのランニングと20分のハードトレーニングを課し、夜食持参での練習を重ねた。当然のことながら保護者からの非難の声もあったが、話し合いを持ち協力していただいた。選手の熱心な練習の姿勢にも恵まれ、特出した選手もいない中で、昭和44年、昭和48年と、高体連県大会団体優勝の栄を得ることができた。平工業高校の大橋征先生、磐城一高の山崎勲先生、鈴木理介先生、郡山女子高の宇賀神喜嗣先生、松崎俊一先生、喜多方工業の清水徹先生、喜多方女子高の渡部長二先生そして事務局を担当しておられた伊東守信先生（当時は石川高校だったと思います）との出会いは、このころである。全国インターハイでは磐城女子高のコーチをしておられた信澤先生とは枕を共にし、それぞれの先生方からの特色ある指導方法等を吸収させていただいた。

昭和53年5月31日に日中文化交流協会・日本卓球協会主催、いわき市・福島県卓球協会主管で、いわき市常磐の関船体育館に特設会場を設営し、日中交歓卓球大会が催された。現会長の西郷徹夫先生や副会長の平石家治氏等とともに主審を努めさせて頂いたが、国際試合の審判は始めてとあって脇の下にじっとり汗をかきながら進めたことが思い出される。当時の資料によると、中国の男子選手団には、郭躍華、李振恃、黄統生、成応華、魏京生、任国強の各選手が、日本側より、高嶋規朗、阿部博幸、坂本憲一、前原正治、葛西順一の各選手が出場し、1W6Sの団体戦が行われたが、3－4での惜敗であった。女子団体戦は中国側より曹燕華、童玲、張徳英、孫敏の各選手、日本側より、長洞久美子、嶋内よし子、高橋省子、神田絵美子、福田京子、菅谷佳代の各選手が出場したが、0－7の結果となった。特に中国選手の郭躍華、曹燕華、童玲は後に世界チャンピオンになるが、郭の鉄壁といわれるまでの完成された卓球、曹や童は、当時14歳という若さで、はつらつとした華麗な妙技に堪能させられた。

中国の卓球といえば、平成8年に、いわき市と友好都市締結をしている撫順市の招待を受け、スポーツ交流訪中団の一員として訪中の機会を得、公営体育学校卓球科での学習状況等を張晶清副校長の案内で見学させて頂いた。毎日実技だけでも1日6時間という徹底した指導を目の当たりにして、中国の強さもありなんと感じてきた次第である。

平成7年のふくしま国体の卓球競技では、やればできるという自信とすばらしい感動を体験させていただきました。

すばらしい成果のなかで協会発足70年を迎えられましたこと誠におめでとうございます。

福島県卓球協会の益々の発展をお祈りします。

（平成11年5月31日記）

卓球をとおして

福島県教職員卓球連盟理事長　**菊　地　敏　美**

私が卓球を始めたのは、小学校4年生頃だったと思う。当時母校の小学校には、空き教室に古い卓球台が2台おいてあった。もちろん体育館にも3台おいてあったが、それらはいつも上級生が使っているため、下級生はもっぱら空き教室の古い卓球台を競い合って使っていた。ゲームは5本勝負で「ノータッチ」と呼ばれる1回もボールに触れられない場合は、その場で負けというルールであった。もちろん勝ち抜き戦で、強いといつまでもやれるため、自分も強くなっていつまでもやっていたいと思ったものだった。

喜多方第三中学校に入り卓球部に所属したが、1年生の頃は先輩の球拾いに明け暮れた。2年生のときに故蓮沼昭先生が赴任してこられ、初めて専門的に卓球を教わった。あの頃は、中体連県大会に出場することが夢で、耶麻郡優勝を目標に毎日遅くまで練習に打ち込んだ。そのかいあって、県大会に出場することができ、ベスト8に入ることができた。今思うと、蓮沼先生からは、卓球の技術的なことともに、努力することの大切さと必要性を教えていただいたと思っている。

喜多方高校に入ってからも卓球を続けた。上級生がいなく苦労したが、手代木健、三留昭男両顧問

の先生とOB会の方々の励まし、そして後輩に恵まれ十分な活動ができ、しかも県大会3位という成績をおさめることができた。

大学では、長馬先生や上石先生と一緒に活動することができ、また、充実した時間を過ごすことができました。お蔭様で東北学生リーグ3部から1部に昇格することができ、京都で行われた全国国公立大学卓球選手権大会では3位に入賞することができた。今でも京都の暑さと入賞の喜びは鮮明に思い出すことができる。

教職の道に入り、振り出しが小学校だったために卓球をやる機会は少なく、陸上競技や水泳の指導に明け暮れた。それでも、休み時間やクラブ活動でたまにやる卓球は楽しみであった。その後、熱海中学校に転勤となり念願だった卓球部の顧問を務めることができた。もちろん技術的なことも指導したが、自分が中学校時代蓮沼先生から教えていただいた、努力することの大切さとチームワークの重要性もいっしょに指導したつもりである。

荒木先生率いるザベリオ学園と何回か優勝決定戦で対戦できたことは大変光栄である。また、時を同じくして、郡山市において平成2年度第35回全国教職員卓球選手権大会が、福島県卓球協会ならびに郡山市卓球協会、そして多くの先生方の協力を得ながら盛大に開催できたことはこのうえない喜びである。

平成7年開催の第50回ふくしま国体においては、深谷秀三先生のお誘いで強化部事務局会計として務めさせていただいた。資金の調達や配分等で頭を痛めたが、おおぜいの方のご支援をいただき責任を果たすことができた。国体前の強化練習会や県外遠征では、大変貴重な体験もさせていただいた。大阪の四天王寺学園や上野宮高校などでのトップのきびしい練習や、田舛卓球場での宿泊しながらの夜間練習等、その当時は切羽詰まった緊張感のためじっくり考えることもできなかったが、今ではたいへん懐かしい思い出である。また、二本松市で行われた強化合宿では、中国人のコーチを招請し、内容の濃い練習ができた。宿泊先のサファリパークでは、ライオンの泣き声で睡眠不足になった選手も多くいたようだった。

国体本番では、夕方遅くまで会場を沸かせた一般1部男子の対滋賀県戦は、前日の対新潟戦での敗戦の鬱憤を晴らすかのようなすばらしい試合で、応援に来ていた卓球を知らない一般の市民の方にも、感動と勇気を与えてくれたものと思っている。成年2部女子の優勝を決定したシーンは、今での苦労が報われたように感じられ、昨日のことのように思い出される。それぞれのチームでの、一つ一つの感動するシーンは、緑の下で働いてきた私たちにとって、とても大切な宝である。

卓球と出会って30年が過ぎようとしている。はじめは強くなりたくて、夢中で練習に取り組んでいた。しかし、現役の選手を退いて思うことは、卓球をとおして多くのことを学び、そして多くの方々から貴重なものを教えていただいたということだ。現在は職場の関係で卓球の指導は行っていないが、今までお世話になった方々のために、何らかの形で恩返しができればと思っている。

福島県卓球協会のますますの発展を、心からお祈り申しあげます。

「協会役員としての想い出」

福島県卓球協会監査　渡　部　信　行

協会設立70周年おめでとうございます。

諸先輩が築かれて来られ更に現役役員選手諸君又は各地区の先生方、一般の指導者の方々の更なる協力のもとに21世紀に向けて躍進している事を非常にうれしく感じております。本当におめでとうございます。私も協会の役員をしていた頃の思い出がありますので（会計担当の頃を思いうかべて筆をとらせていただきます）約20年前当時の三役（理事長三浦さん、事務局松崎先生、会計菅野先生）は県中地区で担当されておりました。それを県南にバトンタッチということで須賀川で三役を引き受け理事長平石家治さん、事務局長伊東守信先生、会計が私でした。

引き継ぎも須賀川で行われ菅野先生が縞の風呂敷づつみギッシリ書類関係を持参して来られ数年前からの領収書綴、決算書類等がキチット年度毎に整理されていたのが印象的でした。引き継いだ当時会計収入は180～200万ぐらいであり繰越金は20～30万ぐらいと記憶しています。

収入源はもっぱら登録料と一般と高校の参加料ぐらいでした。ですから登録料を県体前に各地区で集金していただかないと4月5月頃の大会運営に繰越金が少なくて穴があきそうになる事もありました。

又参加申し込み用紙には必ず県卓球協会の登録者番号を記入しないと出場出来なくなる仕組みになっておりました。参加申込と同時に参加費を添えて初めて参加資格が生まれ組合せ会議で名前と登録者番号確認し試合ができるようになります。当時の各地区の理事長さんは大変だったことと思います。組合せ会議のたび出張予算がなくて手当なし食事のみ、そのうえ参加料不足や登録されていない選手の分の立て替え等、私も会計担当の各地区の理事長さんや代行責任者の方々へ申し訳なくも取り立てするしかありませんでした。あの当時がなつかしく思い起こされます。紙面をおかり致しまして当時の各地区の理事長さん、代行者の方々に感謝とおわびを申し上げます。

その後各地区でスポーツ少年団を中心に底辺拡大をめざして熱心に指導育成され卓球登録人員も大巾にアップされて来ました。又県卓球協会主催の小中学生の試合も年間行事に取り入れられて参加料も大巾アップして予算も増加しました。

この頃福島国体が決まり、その為には先だつもの、資金が必要であるとの事で先ず年度計画で毎年一般会計から特別会計へ毎年数十万円ずつ積立の開始が始まりました。国体開催までに全国大会を二度開催。予算もかなり積立てる事ができました。

国体の数年前からは各役員から特別寄付をいただき国体運営資金にさせていただくなど、振り返り見ますと当時の諸先輩方と協会運営の一翼を担って目的の為に苦労を共にした時がなつかしく思います。特に当時の理事長平石さん事務局の伊東守信先生には公私共ども御指導いただき協会の役員をやってよかったと今でも思っております。又その他にも各地区の役員の方々名前を出せばきりがありません程大勢の人とお付き合いをさせていただいております。

会社の仕事とは別な人の出会い、めぐりあいがあります。これはボランテイア精神の仲間だろうかと思います。現在は会計監査にたずさわっておりますので、特に会計の収入、支出等を監査する毎に毎年協会の確実な発展と低学年の増加、登録人員参加者数将来性を見いだせる資料を見るたびうれしさがこみあげてきます。

諸先輩も役員で卓球協会を引っ張っている方々、又各地区の小中高の指導者の方々等情熱に燃えている人達が大勢いる事が何より頼もしい限りです。

どうかこれからも80年、100年と協会を大きく育ててください。そして東北に全国に福島県卓球協会ありと名実共にすばらしい協会になる事をお祈り申し上げます。

今日の卓球協会を育てて下さった諸先輩そして各地区の関係者の皆さん、本当に御苦労さんでした。協会70周年本当におめでとうございます。

私の人生と卓球との出会い

前郡山市卓球協会長　宗　像　次　男

卓球との出会いは、小学校4年の秋の頃、小さな小学校に一台の卓球台が購入され、放課後遊びながら始めた。秋から冬にかけて、夢中になり、夕方遅く帰宅し、親に叱られることがたびたびだった。

その後暫く卓球とも離れていたが、昭和25年喜多方商工高校に奉職、S26年の春より卓球部顧問になり、生徒と一緒に放課後クラブ活動に打ち込むこことなった。特にS30年都市対抗卓球大会が会津若松市、謹教小学校で行われる事になった。萩村選手を初め一流選手が来るため、是非公認3級審判の取得が必要といわれ、講習を受け7月1日取得、8月の

大会を無事終了することができた。平出、土屋その他の役員達と共に喜び合った。その後S31年4月より33年春まで会津地区高体連卓球委員長の大役を引受け、皆様の御協力を頂き無事務めることができた。S32年の国体では、山形酒田に小荒井俊雄君を引率、喜女の丹藤先生と同行、全国大会の厳しさを味わって来た。S34年4月郡山工業高校に転勤、安女の那知上先生が35年福大に栄転になり、その後の県中の卓球委員長を引き受け、県委員長の宇賀神先生、郡商の本田先生のご支援を頂き、43年3月まで大過なくつとめることが出来た。しかし市の体育館が整備されなかったので、大会の度に会場の借用、卓球台の運搬等、会場の設営に苦労が多かった。S43年4月日本卓球協会本部にて公認2級審判に合格、又4月から進路指導主事になり多忙の為、県中高体連卓球委員長を松崎先生にお願いすることになった。なお郡山市卓球協会長横井県議並に理事長志賀氏等が辞任されたので、その前後策として、郡山三中の佐久間直先生とご相談の上県中支部長を引受ける事になった。早速S43年からの各種県大会の予選等の計画を検討する。S43年の東北高校卓球大会が郡山で実施されることになり、日大の体育館をお借りすることになった。その際、前夜祭の最中に秋田女子高3年今野安子さんが前年度アジア大会に出場したので明日の開会式で、是非表彰したいと云う事になった。その表彰状をわたしが書くことになり、用紙を市内中捜し夜中までかかって、次の開会式に間に合はせることができたのは、今でも忘れる事のできないエピソードである。

尚県総体に先立ち（S47橋本栄一さんを郡山市の会長にお願いし、副会長として補佐の任に当る）S44年1月、中通り卓球選手権大会を郡山三中と郡女の2校で開催、雪の降る寒い日であったが盛会に終わり、現在も継続されている。S44年秋田で行われた東北大会にダブルス2チーム、シングルス2名出場するも壁は厚く夫々一回戦で敗退する。S45年盛岡で行われた東北大会に団体出場、残念ながら一回戦で敗れる、46年高校総体全国大会（徳島市体育館）に参加、ダブルス（青山、水野）一回戦で惜敗、47年3月健康を害し生徒の卓球指導も思うにまかせず、その上役員会も欠席がちになり、49年4月から定時制に移り、生徒の顧問も辞めた。一時期卓球から遠ざかっていたが、S54年9月21日～23日、全日本社会人卓球大会が郡山総合体育館にて開催されることになり、再三の打合せを重ね、広告等のお願い、準備が大変であったが、この大会終了後、55年3月より郡山市卓球協会長を引受ける事になった。県の理事その他は全て辞退する。S56年3月教員退職を記念して、宇賀神先生と宗像が優勝カップを用意し高校生の競技力向上を祈念し、南東北卓球大会を新設した。福島放送の協力を得て、うすいさんをスポンサーに数年間開催したが、年々高校生の参加が減少している数年前から、中学生を主体に大会を開催し、特に富久山卓球クラブの活躍により、県外からの参加者も多くなり、年を追って盛会になってきている。

平成11年3月末を以て郡山市卓球会長を辞退する事にした。20年間会長をつとめ年令も80才近くなり皆さんに迷惑を掛ける事が多いと痛感したためである。この20年間さまざまな大会があったが大過なく勤めることができた事を感謝しながら執筆を終わりたいと思う。

うつくしまふくしま大会

福島県卓球協会理事長　伊　藤　秀　行

【感動の二日間】

うつくしまふくしま大会を、振り返って見ると、緊張と感動の2日間でした。29回、30回大会と様々なすばらしい大会を視察してきて、わたしたちでも開催できるのかと、不安が先に立ってしまいました。

しかし、2日間の大会は、あっと言う間に過ぎてしまいました。閉会式が進むにつれて、大会の感動がようやく伝わってきました。青く澄みきった空、感動する選手、そして私たち競技役員は、これで本当に大会が終わったと言う実感に浸り涙が込み上げてきました。

初日聴覚障害者の和太鼓サークル「響」の霊山太鼓の演奏に始まり、第1試合が開始されました。2日目は、皇太子御夫妻の御観戦、最後の試合と、緊張の中のできごとでした。その中にも、すばらし

い感動が幾つもみられ、初めて会った選手同士が、試合後握手をし笑顔で会話がはずむ、地元選手の応援団、家族の声援に応える姿がありました。

大会は多勢の人々に支えられました。ボランティア、コンパニオン、そして競技役員、審判員のみなさん、とくに盲人卓球の審判員は約2年間数十回に及ぶ審判の練習でした。厳冬の中で、40度に近い真夏の中で、本当にご苦労さまでした。

【うつくしまふくしま大会】、【つなぐ手にあふれる感動わく勇気】は、選手、家族、そして大会を支えた人々全員のものだったと思います。感動を与えてくれた、第31回全国身体障害者スポーツ大会は、私の生涯の思いでになることでしょう。

国体監督の想い出

前福島県卓球協会理事　渡　部　洋　一

私が国体少年女子の監督をしたのは、昭和51年からの6年間でした。この頃の東北は北三県が強く、本県が東北予選を勝ち抜き、本国体に出場することは、非常に難しいことでした。強化練習を重ね参加するのですが、選手層の薄さはどうしようもなく、東北予選で4位になれば良いほうでした。ただ4年ごとに全県出場できるチャンスがありましたので、私は52年の青森国体と56年の滋賀国体に監督として参加しました。特に想い出に残るのは滋賀国体のときです。代表選手に井戸川選手がいました。彼女は東北インターハイで優勝という実績があり、期待も大きかったのです。しかし、東北大会では最下位でした。本国体に出場できると言うのに、この結果を思うと頭が痛くなるばかりでした。この年の試合方法はエースが前半とラストの二回出場できる方式でしたので、エースが2勝し、誰か一人が1勝すれば勝てるのです。しかし強化費もあまりいただけない状況でしたので、大変苦労しました。その中でトーアエーヨーで行った一般女子チームとの合同合宿は彼女達に大きな刺激を与えたようです。

滋賀国体の会場は草津市でした。宿舎は市内志那町という琵琶湖の東側にある町で、一般の家庭でした。私共役員選手は大歓迎されました。草津の市長さんは志那町の方で、福島県の一般女子選手は、市長さん宅での宿泊でした。夜には私と少年女子の選手もおじゃまして、歓待を受け、楽しい一時を過ごさせていただきました。

一回戦の相手は千葉県でした。強いチームですので、そう簡単に勝てる相手ではありませんでした。しかし幸いなことにカットマンに強い志賀選手がカットマン選手と対戦するオーダーとなったのです。試合当日には、市長さんの奥様や宿泊した家の方々も駆け付けていただき精一杯の応援をして下さいました。その甲斐あってか、本大会で1勝することができ、選手達と喜びを共にしました。また愛知県との2回戦の時は昭和天皇がお出でになられ、私達の試合を目の前でご覧いただいたことも、良い想い出になりました。

福島県のふくしま国体、そして、その後の活躍を思うとき、本当に強くなったものだと感慨も一入です。今後ますます本県選手のご活躍を期待しております。

私の卓球の思い出

前福島県卓球協会強化委員長　伊　藤　恵美子（旧姓 渡辺）

卓球協会の70年史、おめでとうございます。

私が卓球を始めてから35年になります。想い出は数えきれないほどあります。その中で勉強や人との大切なふれあいがたくさんありました。

42年富士短期大学に入学、1年生ながら関東学生リーグ戦1部に出場し、その

すばらしさと伝統と緊張に震えたこと、2年生の春季リーグ戦に敢闘賞を頂いたこと等、この2年間は私にとって卓球の原点のように思います。

44年に富士短大の職員として、第3回全日本社会人大会において優勝、ユニフォームの用意がなく困りました。この時男子の優勝が長谷川信彦氏で二人で写った卓球誌の表紙は今でも大事にしてます。この年の国体（福井）に東京代表として（大関、境田、亀山、私）出場し2位となりました。この時初めての国体出場に開会式の感激が忘れられませんでした。同じ年の全日本にて8位入賞で翌年の名古屋のアジア大会出場につながりました。

この時全日本の合宿に数回参加するようになり、卓球の厳しさや自己との戦いや孤独な辛さを知ったことも大きな財産だったと思います。45年、福島に帰り実業団日東紡福島チームを作り52年まで続けました。

当時の福島はまだレベルが低かった。そこで“福島だって”これにはチーム戦である国体に出ることだと思いました。昭和45年岩手国体に男女が出場、男子選手の中に深谷先生もいました。

46年和歌山国体でベスト8に入りました。（遠藤潤、渡辺三代子、佐藤ふみ子、私）その後入賞はできませんでしたが出場する回数が多くなりました。でも平成4年山形国体では、44才の私が一般で出場と何とも言えないことでした。（東條、深谷純子、私）そして平成7年記憶に新しい福島国体に2部優勝を飾ることができて、たいへん喜んでいます。（坂本、東條、私）ほんとうにすばらしい大会でした。

卓球は、生涯スポーツとして近年盛んになり公式戦においても年代別という種目の大会ができ、私たちにもチャンスがありました。全日本社会人、全日本日軟式の年代別で30代の時、優勝2、2位5、3位3で、40代では、優勝4、3位1がありました。この中で40才に入った年の社会人大会です。沖縄の暑い体育館でした。決勝戦、促進ルールでの3セット目で18－20で負けていました。ボール拾いに行った時、物陰から、東京の方から「がんばりなさい」の一声で、ふしぎな力が湧きあがり4本連続とり逆転優勝をしました。この時うれし涙を流したことを忘れられません。

こうして多くの人の暖かい応援や力添えがあってこそ永く続けてこれました。ありがとうございました。今は千本松毛晒工業の卓球部として理解ある中でやらせて頂いています。これからも卓球を愛し楽しく続けていきたいと思います。

（成蹊女子高→富士短大→日東紡福島→千本松毛晒工業）

出会い・挑戦・感動・歓び・挫折・感謝　～卓球と私～

福島県卓球協会会長　西　郷　徹　夫

卓球との出会いは、中学1年生の秋である。

校内球技大会で上位に入賞したのがきっかけで、当時、卓球を指導されていた森口正作先生から卓球部への入部を勧められてからである。

同学年には、渋谷、佐々木、1年後輩には古山、2年後輩には梅原（現：中央大学女子監督）、佐原、佐藤（光）をはじめ、後に相馬高校の黄金時代を築いた諸星光雄（東北高校選手権〈昭和32年第11回大会〉シングルス優勝）をはじめ、昭和34年第13回東北高校大会で学校対抗で優勝したメンバー、木幡、佐々木、反畑（世界卓球選手権〈26回大会日本代表〉）、その1年下の伏見（県高校大会シングル

ス優勝〈2連勝〉）などを輩出した名門、中村第一中学校卓球部である。

2年生から中村第一中学校卓球部のレギュラーとして共に練習に励んできた事を誇りに思っている。

相馬高校へ進学してからは、学業との両立に苦しみ、思う存分卓球に打ち込むことができないまま、高校時代が過ぎてしまった。

その後、保健体育の教員をめざし、福島大学に進学してからラケットを握ることになった。

（中村一中卓球部時代）
前から二列目、向かって右端が森口先生、前列二人目が梅原、右端が西郷

上級生には、井上孝夫、佐々木十志春、大越　守、高橋敏夫、渡辺敏郎、同学年には村上長一郎、後輩には、中津川伸二、伊藤武志、大石隆俊、女子部には、日下　寛、猪瀬滋子、高野嘉子、佐藤孝子、半杭恭子などと共に卓球をとおして青春時代を謳歌した想い出がある。このメンバーとは、平成8年1月、実に卒業以来30数年ぶりに再会を果たし、その後、毎年小旅行を計画し旧交を温めている。

卒業後、小学校にも勤務していたこともあり、しばらく卓球から遠ざかっていたが、教師になってから、7年目にしてはじめて卓球部の顧問になった。

それまでは、校務分掌のうえで、陸上競技やサッカーなど部活動の顧問の引き受け手のない部の顧問を担当せざるを得なかった。それは体育主任として運動部全体の責任をもつ立場からである。

◇中村第一中学校時代（昭和37年～昭和38年）

いわきの永井中学校から転任し、母校の卓球部の顧問になれたことが大変嬉しく、当時20代の私にとっては、放課後の練習が待ち遠しく、選手が体育館に入って来るのを首を長くして待っていた。一人ひとりの選手について、基本打球からシステム練習にいたるまでマンフォマン方式で練習の相手をした。帰宅して夕食をとったら、そのままダウン、教材研究は朝早く起きて授業の準備をするという日々が続いたのを記憶している。

当時の県中学卓球界では、好間中学が全盛で、「打倒好間中」が大きな目標であった。

卓球の監督としてのデビューは、第5回県中学校体育大会であった。

団体戦は、好間中学校と決勝を争ったが、残念ながら3対2の大接戦を展開し敗れた。

しかし、シングルスでは、横村眞一選手（カットマン）が団体戦の決勝戦で対戦し惜敗した好間中学のエース、佐藤　武選手を降し、団体戦の雪辱を果たしたことが今でも強く印象に残っている。

◇相馬女子高校時代（昭和39年～昭和49年）

以前からずっと憧れていた高校の体育教師の夢を捨て切れず、当時厳しかった高校の教員採用試験に挑戦し、幸いその夢が得られた。28歳になってからである。

相馬女子高校に内定を受けたが、その条件の一つに部活動はバスケットボールの顧問を担当するということであった。

私としては、当然のことながら、自分の専門種目である卓球の指導をしたかったのであるが、体育教師の宿命であると受け止め、内定後の約3か月、相馬高校時代の恩師吉田道夫先生〈現役の選手時代は神宮大会出場〉に推薦していただいたバスケットボールの専門書を購入、理論と実技の研修に努めていた。

いよいよ4月1日に着任し、当時の体育主任であった持舘松彦先生（バレーボールの名指導者）から、校務分掌等、今後の校務について指示を受けることになったのであるが、主任の口から意外なことが告げられたのである。

「部活動顧問の県であるが、先生には卓球部の顧問をお願いしたい。」というのである。理由は、「先生の専門性を生かすために考えた結論であり、このことは、卓球部の選手を大きく育てることに繋が

ることを期待しているので、しっかり頑張ってほしい。」ということであった。

自分の好きな卓球が指導できることになった喜びで胸がいっぱいになり、その後の卓球の指導に情熱を燃やした。

実はこの部顧問の任命については、後になって同僚から耳打ちされたことであるが、3月の合宿練習中に、当時の卓球部員、種村繁子、目黒アイ子、菊地邦子、菊田キミ子（現：相馬卓球クラブ会長）が体育教官室に体育主任の持舘先生に面会を求め、「新任の西郷先生を是非、卓球部顧問にしてほしい。」と訴えたということである。

持舘主任は、その熱意に打たれ、バスケットボールの方は副顧問とし、卓球と兼務するということで、校長の承認を得た、といういきさつがあったそうである。

今、振り返ってみると、この4人の生徒との出会いが、相馬女子で10年間、選手の育成・指導に励む糸口ともなり心の支えになったと思っている。

私を相馬女子高校に採用してくださった校長は、豊田要三先生（東京帝大卒）である。

後に学務課長（現在の高等学校教育課長）を経て、磐城高校の校長（昭和46年、磐城高校が全国高校野球で、夏の甲子園を沸かし準決勝を飾った時の校長）になられた方である。

これも後になってから分かったことであるが、先生は、かつて双葉高校の卓球部の監督として、昭和24年・昭和25年の2年連続全国大会に出場し、いずれも準々決勝まで進出した経歴を持つ指導者であったのである。

私が高校卓球の指導者の一人として、その活動の舞台に立たせてもらい、ご指導を賜ったお陰で今日の自分があると今でも先生には深く感謝している次第である。

当時の相馬女子の練習場は、旧校舎時代の雨天体操場半分で卓球台4台であった。校舎の老朽化に伴い改築が進められていたが、この雨天体操場は、「体育館一つで体育の授業に支障を来す」という理由で、移築補強して使用することになった。

移築間もない、昭和40年1月9日、県下に吹き荒れた強風のため、午前10時20分轟然たる音響と共に一瞬のうちに崩壊した。

この体育館で私は体育の授業（マット運動）を行っており、準備運動を終えたばかりであったが、体育館の雨どいが継ぎ目からすべてはずれて、一方向に向いており壁が波打っているように見えたので、危険を感じ生徒全員（55名）を新体育館に移動させた。避難後約10分後にこの体育館が黄色い土煙を上げて崩落したのである。（卓球台が4台とも潰れていた）

練習場を失い、途方に暮れていたところ、災害復旧で小体育館を建ててもらうことになった。完成したのは1年後であった。その間は旧校舎の空教室に卓球台2台を並べての練習を余儀なくされた。

相馬女子高校卓球部には初心者が多く、中学校での卓球経験があってもほとんどが無名の選手であったので、先ず2年生の新人大会に地区予選を通過させることに目標をおき、基本打球の指導に力を注いだ。その中で育ってきた忘れられない選手は、昭和42年（第13回）高校大会でダブルスに優勝した海東さみ・富谷明子である。高校に入学して初めてラケットを握った選手である。

決勝戦の相手は、磐城女子高校の長谷川・緑川組で、セットオールのジュース・アディンを繰り返し大接戦の末、決まった瞬間の感動は今でも忘れられない想い出であり、また、あの時が私の高校卓球の指導者としてのデビューであった。

次の目標は、学校対抗に優勝することであった。中学校の無名選手や初心者を集めてのチャレンジである。

当時の県高校卓球界は磐城一高、磐城女子、成蹊女子、郡山女子、福島女子などが強く、中でも磐城一高（監督：山崎　勲　※現校長）が群を抜いていた。

昭和39年に相馬女子の監督に就任してから、念願の学校対抗優勝は、昭和45年（第9回）県高校新人大会（福島女子と決勝）で、学校対抗の初優勝まで7年も経ってからである。

次の年の昭和46年、新装なった磐城一高体育館で開催された第17回高校大会では、宿敵磐城一高を決勝戦で破り高校大会初優勝、ダブルスも加藤幸子・天野和子組が優勝、さらに、高橋則子・斎藤

恵子が第3位に入賞し、ようやく相馬女子を県高校卓球界の頂点に立たせることができたのである。

この時の選手たち（上記4名の他、本内千恵子と大竹磨喜子）の喜びと感動の姿は今でも脳に焼き付いており、終生忘れられない思い出である。

その後の学校対抗戦では、善戦健闘及ばず、磐城一高には昭和47年（第18回）高校大会で決勝を争い敗れ、昭和48年（第19回）大会では準決勝で敗れるなど、磐城一高の山崎監督には優勝の夢を打ち砕かれ、何回も苦杯を味わったことが思い出される。

その後、昭和50年（第21回）大会では、相馬女子時代の最後の教え子である佐藤祐子（現在：根本〈富久山クラブ〉）浜名則子（現姓：浅野）、米山由美子（現姓：中和田）を中心としたメンバーが優勝を飾っている。

相馬女子の監督10年の中で、多くの選手を指導してきたが、上述以外の大会で活躍した主な選手には、昭和46年（第24回）県総体シングルス優勝の加藤幸子（平成11年：全日本軟式40歳の部で優勝〈現姓：小林〉）、昭和49年全日本県大会ジュニアシングルスに優勝（当時、北山中学校3年の須藤泰子選手と決勝を争った。）した石橋久美子（現姓：三谷）がいる。何れもカットマンである。

学校対抗では、昭和43年（第21回）県総体準優勝（磐城一高と決勝）、昭和45年（第23回）県総体準優勝（安積女子と決勝）の記録がある。

◇原町高校時代（昭和49年～昭和52年）

相馬女子時代でも経験してきたが、原町高校に転任した年は、校舎の移転改築で旧校舎（小川町）から現在の校舎に移転が開始された年であった。田んぼの真ん中に建った新校舎には体育館がなく、卓球の練習場は空教室か、遠い小川町の旧校舎の体育館であった。新体育館は3年も経った後に、ようやく建てられたのである。

女子の新入生の中には、中学時代の優秀選手や素質のある選手が8名ほど入部してきた。相馬女子時代の初心者からの指導ではなく、即戦力となる選手も多かったので、練習場には恵まれなかったが、選手には恵まれたと思い、張り切って指導に打ち込んだ。

原町高校は男女共学のいわゆる「進学校」である。全員課外授業があるので、練習時間の確保がむずかしい状況にあった。卓球は時間をかけた反復練習が不可欠である。練習の質も大切であるが、量（時間）の確保も絶対条件である。

考えた末に、当時注目を集めていたスウェーディン製の卓球のロボットマシン（STEGA社）の購入を決断し、6月のボーナス（34万円）でこれを現金で購入するなどして選手の指導に情熱を燃やした。

やがて第1学期が終り、夏休みの合宿練習の計画を立てているところへ、「優秀な新入部員」が一人、二人と退部を申し出てきたのである。

第1学期の通知表は保護者との三者面談（進路相談等）のうえ、手渡しされることになっており、その際に学級担任から「大学への進学を希望しているならば、すぐに卓球をやめなさい。自分の経験からいうと、部活動と勉強は両立はできない。」との指導を受け、親からも部活動を続けることに反対されたことが、退部の理由である。

自分の経験や多くの例をあげたり、合理的な学習計画等を示して説得したが、その8人の優秀な新入部員が退部していったのである。落胆のあまりショックからは、しばらく立ち上がれなかったことが思い出される。

学級担任の多くは、高校時代に部活動の経験がなく、自分がやれないことは生徒もできないと思っているのであろうか。このような教育観や指導観は、果たして正しいものであろうかと、強い疑問を持ったが、その壁や流れには逆らえず苦悶したものである。

生徒たちは無限の可能性を秘めており、部活動には友人との「心の交わり」がある。部活動から得られる貴重な体験や感動が、その後の人生の窓を開くことになると、私は確信しているのであるが、人それぞれの価値観や人生観には様々な違いがあるのは当然のこととして割り切ることができればいいのであるが……。

この「優秀な8人の生徒」には、その後会ったこともなく、申し訳ないと思うが、顔も名前も思い出

せないのである。

原町高校時代、特に印象に残っている選手は、昭和50年度全日本県大会ジュニアシングルス準優勝（磐城高校の田子選手と決勝）した遠藤選手である。

その年の3月に全日本選手権大会に出場することになったが、当日は全国の交通ゼネストが展開され、すべての交通機関がストップしたので、当時は自動車の運転免許を取り立てであったが、自家用車に初心者マークをつけて二人の選手を東京まで引率したことが想い出に残っている。

◇須賀川市教育委員会保健体育課時代（昭和53年～昭和54年）

派遣社会教育主事（スポーツ担当）として2年間、須賀川市教育委員会に出向（単身赴任）を命ぜられ、社会教育の普及振興の業務に携わった。

須賀川市では、新しい多くの友人との出会いがあり、また、本協会の平石家治（現：副会長）、伊東守信（現：顧問）、渡部信行（元：会計・監査）、須賀川市卓球協会の横山廣昭、薄井充良の各氏には仕事の面でも支えられ、大変心強くお世話になったことを今でも感謝している。

この時代は、仕事の合間を縫って時々卓球を楽しんだことと、郡山市で開催された全日本社会人大会の式典担当として、大会運営に携わったことが思い出にある。

◇小高工業高校時代（昭和55年）

2年ぶりの現場復帰で、卓球の指導ができる喜びで張り切っていた時代である。

普通乗用車を9人乗りのワゴン車に変えて、選手を乗せて練習試合に出かけたものである。当時の選手で印象に残っている選手は、現在も現役の国体選手として活躍している原　晃選手である。卓球の選手として優れた素質に恵まれいてるほか、性格が素直で、意志が強く、何よりも集中力に優れた選手である。

ある日の練習で、全選手にツッツキ打ちをバック・クロスに50本、ストレートに50本を命じていたが、途中緊急の打ち合せが入り、体育教官室に戻ったが、練習が気になって打ち合せの合間を縫って、時々体育教官室の小窓の隙間から選手の練習を観察していたところ、他の選手は与えられたノルマを果たせないまま、床に座ったり別な練習を始めたりしていたが、原選手だけは黙々と50本、100本の練習目標に向かって一心不乱に練習を続けていたことが印象に残っている。

後に「ふくしま国体」で本県の代表選手として活躍している姿を見たり、また、平成10年度東京選手選手権大会サーティの部で優勝するなど、選手として大きく成長したことに陰ながら喜んでいる。

一年間の指導であったが、原選手の指導をとおしていえることは、大きな選手に育てる最も重要なことは、「正しい卓球の技術」の徹底した基礎・基本の指導にあることは言うまでもない。

◇相馬高校時代・前期（昭和56年～昭和57年）

教員となった以上、できれば一度は母校の教壇に立ちたいというのが多くの教員の望む思いである。

母校への転任は、46歳の時である。伝統ある母校相馬高校の卓球を復活させようと努力はしてきたが、校務分掌の上で、学級担任、加えて学年主任をはじめ、中堅の教員としての職責が重いため、思うような卓球の指導ができないまま2年間が過ぎ去った。

◇県教育庁保健体育課時代（昭和58年～昭和61年）

福島県が、昭和70年（平成7年）に第50回国民体育大会を開催することが内定した時期に、保健体育課（現在のスポーツ健康課）で社会体育担当として仕事をすることになり（単身赴任2回目）高校卓球の現場から離れることになったが、三浦勝美会長（現：名誉会長）の指名理事として県協会に残り、外から県卓球協会の活動を支援してきた。

勤務して4年目の昭和60年6月、県立医科大学付属病院で胃潰瘍・食道潰瘍の外科手術を受け、6か月間、肉体的にも、精神的にも、挫折感を味わいながら苦しい闘病生活を余儀なくされた。

「重体説」が流れたこともあって、多くの先輩や友人、そして教え子が激励の見舞に駆けつけてくれたのであるが、そのほとんどが卓球をとおして出会いのあった方々であり「卓球で結ばれた絆」がいかに太く、深いものであるかをしみじみと感じ、病床に感謝の涙を流したことが終生忘れられない。

◇相馬高校時代・後期（昭和62年～平成2年）

職場復帰を果たしたものの、激務に耐えられないだろうという、ご当局の「ご配慮」により母校の相馬高校に再び戻されたのである。

体力回復を図りながら、卓球の指導にも努めてきたが、校務が忙しく、毎日が激務で、仕事や会議・打合せの連続で、その日の仕事が終わった時には、卓球練習の講堂の電灯がすでに消えているという日が多かった。そんなことで、土曜日や日曜日に練習計画を立てて、指導を補おうとしても、選手のほとんどが消極的で、「伝統を誇る、相馬高校卓球の復活」の実現にはほど遠く、4年間が過ぎ、相馬高校を去ることとなった。

事実上、これが私の高校卓球の指導者としての最後である。

その後、白河第二高校の教頭を経て、三度目は母校相馬高校教頭として戻ってきたのではあるが、職責上、卓球の指導から離れ、平成7年「ふくしま国体」が終わった次の年に38年間の教職生活にピリオドを打ったのである。(高体連相双地区委員長：通算14年)

◇県卓球協会を引き受けて（平成8年～現在）

定年退職までの残り少なくなった3月の中ごろ、当時、理事長であった平石家治氏（現：副会長）から突然電話があり、「三浦会長の後任を引き受けてくれないか」という打診があった。正直なところ、38年間の教職生活の疲れと「ふくしま国体」が終わった今、卓球界からも解放されて「自由の身」になりたかったので、返事をしなければと思いながらもなかなか引き受ける決心がつかず、退職の日が近付いてきたのである。

振り返ってみると、これまでの自分の人生の中で、とりわけ教職生活のほとんどが卓球との関わりで生きてきたその歩みの中には、卓球をとおして多くの人との出会いや感動があり、「私の人生の窓」を開いてくれたことを思い、これまでのつたない経験と私の残り少なくなった人生の僅かな時間を提供することが、卓球界のために少しでも役立つならば、こんな嬉しいことはないと考え、自分の力量を顧みず、思い切って会長を引き受けることになったのである。

「ふくしま国体」の開催を契機に高まった競技力の維持・向上、「生涯卓球」の普及推進など、テーマが山積しているが、今後とも、より良い人間関係を保ちながら、協会発展に微力を尽くしたいと考えている。

【付記】

手　記

「第31回世界卓球選手権大会に学ぶ」

西　郷　徹　夫

今春、名古屋で開催された世界卓球選手権大会の審判員として、世界各国選手の姿を目のあたりに観る機会に恵まれた。技術面もさることながら、中国をはじめヨーロッパ各国選手の競技、マナーに深い感銘を受けた。

「さくら　さくら」「荒城の月」など、日本の音楽をアレンジした軽快なマーチが流れる。第31回世界卓球選手権大会の華やかな開幕である。

各国選手団がプラカードに先導され、次々に目の前を行進していく。割れるような拍手がわき起こった。文化大革命の厳しい試練を経て後、6年振りに再び参加した中国の大選手団、戦火の下からやって来たカンボジア・ベトナムの選手団に対するさかんな拍手である。

白い小さなボールが跳びはねている会場は、友好ムードであふれている。

中国選手達は言う、「卓球を通して世界の人民と友好を深めるためにやってきた。」「一に友好、二に勝負」だと。

北京の打ち込んだ「ピンポン外交」が米中関係の改善に、そして、友情のラリーが世界平和に役立つとすれば、「軽薄」の代名詞として文字通り軽くて、薄いピンポンと跳びはねて、一つの場所に定着することのない小さなボールの使命は重大である。「政治がスポーツを動かし、スポーツが政治を動かす」スポーツと政治とは切り離すことのできない関係にあることをつくづく感じさせられた。

男子団体の決勝進出をかける日本対ユーゴ戦の主審台に立った時のことである。4対4でむかえた最終戦、カラカセビッチが対河野戦にみせたムキだしの闘志を主審台の上からみつめながら、深く考えさせられるものがあった。

私の再三にわたるシャウテング（ラリー中は声を出してはならない）の注意にも拘らず、流れる汗をふきとりもせず、大観衆の前でわめきながら仁王様のような真っ赤な顔をして奮闘している姿を見て、昔からの日本人が持っていた「大和魂」的なもの―現代はそれを失いつつあるようだが―を身につけていたからである。

スウェーデンの18歳のベントソンは激しく美しいラリーの応酬で、日本の伊藤を降し世界のチャンピオンになった。ゲームが終わると敗者の伊藤に走り寄りあいさつをした。しかも日本の現代っ子がとっくに忘れているような日本式の丁寧なお辞儀で……。

彼は一昨年の10月、日本に武者修行にきて萩村氏の厳しい指導のもとで4ケ月間鍛えあげられた。畳の上で、日大部員とせんべい布団でザコ寝して、日本の卓球技術だけでなく、それを支えている「精神」を学んだという。

東京選手権に出場して、無名学生選手に簡単に敗れ去ったと聞いている。帰国後の1年半の間に彼は見違えるほど成長していた。

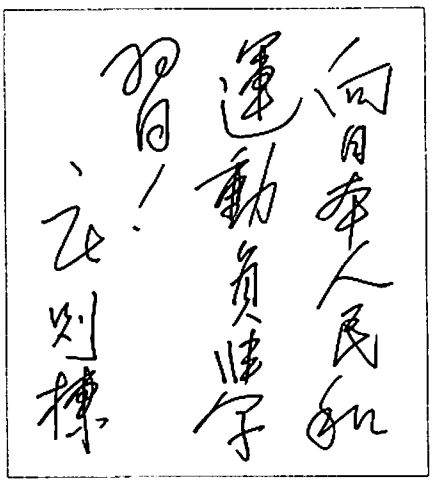
かつての日本の卓球は、強烈なドライブで、鉄壁のカットをほこるヨーロッパに挑戦し世界の王座についた。これに対して中国は、前陣速攻の布陣で毛語録を胸に日本からタイトルを奪った。

卓球競技の特徴は、人間対人間の対決である。したがって「心」と「技」が一体となった時、はじめてその真価が発揮されるものである。技術は精神に支えられたもので、「心の姿勢」があってはじめて向上するものであるとの確信を深めた。大選手といわれる人は、自分のプラスになることを数多く積み重ねていった「前向きの姿勢」を持った人であり、より困難なことに挑戦し続けた人なのだ。

男子決勝戦は、宿命の日中対決であった。私は興奮でふるえながら競技役員席の片すみでこの激突を見守った。予想通りの大激戦となった。

中国の優勝が決まった瞬間、ワッと日本側ベンチに全員が走り寄って握手を求めていた。役員席からの私の祝福のことばに大きなゴツイ手をさしのべて握手を求めてきた選手。技術だけでなく、名実ともに世界の王者の姿を観てさわやかだった。近くに中国のカメラマンがいた。中国友好の姿を沢山撮りたいといっていた。荘則棟の「向日本人民和運動員学習！」のサインが私の机の上にある。日中友好関係が成立する日の遠くないことを期待しながら、ときおりながめては、これを心の糧として毎日の仕事に励んでいる。

31回世界大会（1971：名古屋）
向かって右端が萩村伊智郎氏
真ん中が西郷徹夫



書庫を整理していたら、数枚のサイン入りの色紙と一緒に古びた大きな封筒が出てきた。それには1971年（昭和46年）名古屋で開催された第31回世界選手権大会の審判員として参加した際の上記「手記」と各選手と交換したバッヂが10数個、それに当時の世界卓球を報じた関連の新聞記事が入っていた。今から28年も前のものである。

当時、記した「手記」を懐かしい思いで読み返しているうちに、拙文であるが、あの時の感動のシーンが糸をたぐるように次から次と蘇ってきた。

さらに、当時、展開された「米中ピンポン外交」の記事を見つけた。〈「友好第一、勝敗第二」の方針を掲げて参加した中国が、アメリカ卓球団を中国に招待すると発表〉という記事である。あれは、世界卓球の団体戦が終り、次の日が中休みという日、3月30日の出来事であったと鮮明に記憶している。

警護上の理由から、特別に設けられた大会関係者や中国選手団のための駐車場で、中国選手団を乗せたバスにヒッピースタイルのアメリカのコーワン選手が迷い込み、ステップに足を掛けたが、乗るバスが違うことに気がつき、あわてて立ち去ろうとした。この様子を見ていた中国選手がコーワン選手に手招きをして、バスの窓から顔を出し「われわれのバスに乗ってもいいよ」というジェスチャーをしたり、拍手をしたりして、歓迎の意を表す選手の様子と、コーワン選手を乗せた中国選手団のバスが通り過ぎてくのを隣のバスから、その様子を見ていたのである。

3月20日から始まった大会も、4月7日に終了した。私は、翌日帰途についた。途中、東京駅で購入した新聞にこの場面が写真入りで大きく報道されており、米チームが北京に招かれたことを知り心が躍った。

その後、4月10日に米チームが北京に到着、その舞台裏ではキッシンジャー米大統領補佐官が周恩来中国首相と会談し、ニクソン米大統領訪中の準備が進められ「ピンポン外交」が展開されていったのである。

その鮮やかな「ピンポン外交」に世界は衝撃を受けた。1971年（昭和47年）2月、アメリカのニクソン大統領が周恩来中国首相と会談、朝鮮戦争以来、22年間の敵対関係を解き、上海で、相互不可侵、平和共存など「平和5原則」を米中合同コミュニケで発表したと報じている。

アメリカは、中ソ関係の対立を利用し、「ピンポン外交」を展開して米中和解の布石をつくったのである。

当時の日本では、日中関係が何ら具体的な進展を見ない内に、突然アメリカによる「頭越し外交」が実現されたため、当時のマスコミは、中国敵視と政経分離を唱えてきた佐藤内閣の外交路線が痛烈な打撃をうけたとも報じていた。

私は、その「ピンポン外交」の端緒となった歴史的な場面を、その時、その場に居合わせ目撃した

のである。

以来、私はその後の米中関係には、ずっと強い関心を持ち続けているのである。

9月10日、NHK・BSの特集番組では、「修復なるか、米中関係の今後」が論じられていた。それによると、あの「ピンポン外交」以来、まだまだ解決しなければならない多くの課題が横たわっている。

大きくあげると、一つは、天安門事件（人権問題）、二つ目は深刻化している台湾問題（一つの中国）、今年になって起こった、コソボ・ユーゴ空爆の中国大使館誤爆事件の三つのトゲをどう取り除くかである。そして、我が国の中国に対する今後の外交は、アメリカ一辺倒ではなく、日・中・韓の対話の枠組みを広げ、環境・経済・日米安保・北朝鮮問題等に対してどう対応するかが課題であると報じている。

28年前のあの「ピンポン外交」がせっかく卓球が取り持つ縁でスタートした。平和外交が、その壁を乗り越えて花開く時を期待したい。21世紀は、もうそこまで来ている。

あの頃の想い出

福島県卓球協会副会長　二　木　康　視

私が本格的に卓球を始めたのは、福商に入学した年の夏休みが終わり2学期が始まった9月頃からです。靴材料卸を営んでおり、私が中学2年の時、父を亡くした為、学校の授業が終るとすぐ家業の手伝いをしなくてはならない為クラブ活動どころではなかったのですが、どうしても卓球をやりたくて、母に相談したところ、高校時代は二度とないからと、気持ちよく許してくれたので、勇んで卓球部の門をたたきました。入部してびっくりしたのは、たった5ケ月なのに同級生との実力の差は歴然としており、梅津君、大宮君等は、県北予選を通過して、県大会に出場するまでになっており、皆生き生きと練習に励んでいたことでした。当時福島県の国体選手で先輩の戸田さん、大内明雄さんの二人が毎日の様に、我々のコーチに来てくれていました。私が3年生の年、先輩達が果たせなかった団体戦で優勝して全国大会に出場しようと大きな夢を抱いて、毎日毎日放課後、夜の9時頃まで猛練習を積み重ね、インターハイに望みました。県北予選では宿敵福高に勝って優勝、その余勢をかって郡山で行われた県大会に望んだが、準決勝で若商に敗れてしまった。決勝戦は若商対福高、接戦の末県北大会では我が校に敗れた福高が優勝、我々は眠れない一夜を過ごした。卒業後、家業を継ぐ為、東京に就職、東京でも仕事が終わると近所の卓球場で毎日練習を続けており、大東区の大会で個人優勝等の思いでもあります。

36年福島に帰って来て、家業を継ぎ、暇をみつけては福商に後輩のコーチに行くようになりました。福商卓球部がインターハイ県大会で優勝し全国大会に出場したのは、第18回大会（昭和40年）レギュラーは鴫原勇・藤橋道夫・蓬田治雄・横山幸二で4人共練習熱心で、毎日毎日9時頃まで、そして日曜日は実業団の選手の胸を借り猛練習を重ねました。その成果が実を結び福商卓球部が、はじめてのインターハイ県大会団体優勝という偉業を成し遂げ、ダブルスでも鴫原・蓬田組が準優勝しました。昭和52年、保原高校で全国大会出場経験のある、伊藤武司先生が、転勤、1時間の早期練習、夜は9時までと厳しい心練習が始まりました。選手達も伊藤先生を信頼してついてきて、その年の喜多方で行われたインターハイ県大会での準決勝、磐城高校との試合は、最後までもつれ、延々と4時間もかかり4対3の小差で逃げきり、決勝戦は四連覇を狙う、絶対本命の喜多方工業高校を4対1の大差で圧勝し、12年ぶりの優勝を果たしました。メンバーは、村山一衛・寺島和雄・渡辺英雄・宍戸次男・斎藤達也・今野政寿・個人戦では、斎藤が3位・今野が6位・村山が16位と入賞しました。

26年間、福商卓球部のコーチとして振り返った時、特に印象に残る選手は、昭和37・38年県総体で連続優勝した菅野孝君、昭和43年全日本ジュニアの部県大会で優勝した甚野道雄君、彼は高校に入ってから初めてラケットを握り、1年半で県大会の栄冠に輝きました。現在もトーアエイヨーの監督として、又県北卓球協会理事長として活躍中です。

回想・雑感（60余年）

福島県卓球協会名誉会長　三　浦　勝　美

◇中学時代～終戦

昭和10年（小学6年）頃、飯台（机）の上でボール遊びをしたのが、卓球とのかかわりのはじめとなりました。

中学時代（昭和11年～15年）には、日本が戦時体制に入り、卓球は軟弱なスポーツとみられ、肩身の狭い思いで、雨天体操場の片隅で、うす暗いハダカ電球の下で、毎日練習をしたものでした。（指導者も居らず、卓球台は1台）

当時の卓球部といえば、特に大会等もなく、同好会的活動でした。部の予算もなく、ボールは勿論のこと、ネット、サポートまで自己負担であり、そのような状況の下、練習をしていたのは、卓球が好きだったの一言につきるのかも知れません。

ラケットもペンの木ベラしかなく、材質は桧、朴、桐、松等が主なものでした。ラケットは、当時の物価で1円、ボールが1ケ10銭位でした。（当時の中卒の初任給は30円位でした）

2年生のとき、福島高商（現福島大学経済学部）創立15周年記念卓球大会に出場し、早川選手（福島師範5年生・現福大教育学部、後の教授）と対戦し、5才年上の早川選手とはまるで問題にならず、大敗したことが、強い印象として今なお残っています。この大会出場が中学時代の最初にして最後の大会となりました。

当時の体育の授業は徒手体操、鉄棒、跳び箱等が中心であり、剣道か柔道が必修となっており、身体の鍛練が主な内容のものでした。球技等は次第に出来なくなった時代です。

昭和16年、大東亜戦争に突入、その後は、卓球も思うようには出来なくなり、大会等も開催されず、卓球界も停滞状態がしばらく続き、終戦を迎えることになりました。

◇戦後の学生時代（昭和21年～24年）

終戦後の日本の社会は、極度の物資不足の時代であり、卓球をするのにもボールがなく、1ケ月1ダースしか協会からは配給されない状態でした。

練習といっても、大学の講堂の片隅で長椅子を片づけて、卓球台2台での練習でした。当時、斎地繁敏さん（全軟優勝、全日本硬式2位）が時折来られて、指導もしてくれました。中田鉄士さん（マ杯優勝、魔球中田といわれたペンのカットマン）にも何かと指導を受けたものでした。

昭和22年、学連結成の動きが高まり、関東学連、関西学連に次いで、全国で三番目に、東北学生卓球連盟の設立をみるにいたりました。学連設立の準備段階において、東京に出かけ、日本学生卓球連盟幹事長（早大）の蒲田さんから規約や運営等について指導、アドバイスを受けての設立でした。その時昼、夕食用として持参したおにぎりが東京の人にとっては何よりの「おみやげ」として珍重されました。当時の食糧事情が如何にひどかった事がうかがえるでしょう。

学連設立を記念して、同年第1回東北学生卓球選手権大会が仙台市（東北大学講堂）で開催されました。依然としてボールの入手事情が悪かったので、学連として、メーカー側と接渉し、全面的な協力を得て、東北各県の大学と宮城県下の高校に3ダース位ずつ配給の労をとり、喜ばれたものでした。特に現在はなくなりましたが有楽町のガード下のA.J.P.Aのメーカーの方には本当にお世話になりました。

当時を振りかえると、物資、食糧が極度に不足していた学生時代が苦しくもあり、また、なつかしく思い出されます。50年前のことです。

◇福島県に戻って

昭和24年、福島県に戻り、県総体（会場は福島一小の講堂）のとき、いきなり、審判長をやってくれといわれ、とまどった次第です。最初から、県卓連と高体連の役員として、二足のワラジを履いた格好で県卓球界とかかわりを持つようになり、今日にいたっております。

◇大会での思い出

(1) 昭和22年、東北高校卓球大会と東北卓連総会が鶴岡（山形）で開催されました。

東北学連加盟の大学生の県登録料免除要請のため、総会に出席させていただき、また大会も観戦いたしました。どういう訳か決勝の審判をやることとなり、対戦相手は、宮本選手（青森・当時としては珍しいシェークのカットマン）と角田啓輔選手（宮城・古川高）の二人です。角田選手のサービスを宮本選手がネットインと思ったのでしょう、返球をしなかったのですが、私の右手は、すでにセーフのジェスチャーをしており、判定通りとなりました。当時の青森は卓球王国として天下にその名を馳せていた時代で、監督、役員も錚々たる人達でしたが、抗議もなく、事なきを得ました。

判定のタイミングが大切であることを痛感しました。（角田選手は中大に進み、元アジアチャンピオンです。）

(2) 昭和30年の兵庫国体のときのことです。

高校女子は京都（華頂女子高が主力）が優勝候補でしたので、報道陣の取材、カメラのフラッシュを浴びている姿を眼のあたり見て、うらやしくもあり、また、なにくその闘争心にも燃えていました。この京都と3回戦で対戦、3時間余の大熱戦の末京都を破り、ウップンをはらしたことが今なお記憶を新たにしております。準々決勝では、昼食をとる暇もなく、3時頃、愛知との対戦となり、敗れましたが、思い出深い一戦でした。

団体戦では、チームのメンバー全員の勝利への可能性を求めての闘争心と集中力が、実力以上の結果をもたらした好例でもあると思います。当時のメンバーは、平山恭子（福女）新田千恵子（喜女）吉田登美子（喜女）奥山厚子（成蹊女）の皆さんでした。

(3) 昭和40年の全国高校卓球大会（長崎）のときのことです。

渡辺二郎（安達高）が参加することになり、乗車券の手配が遅れ、急行寝台の予約席がとれませんでした。郡女の宇賀神先生と同行したいので、東京駅で、助役さんにお願いして、座席のとれない寝台車に乗りました。午後4時の頃です。日中は3人掛けをしてくれましたのでよかったのですが、7時になると座席が寝台となり、2人で通路の丸椅子に座ることになりました。渡辺君は、通路に新聞紙を敷いて寝ましたが、私はそうもいかず、一晩中（朝の7時まで）尻の置き場もなく過ごし、10時間がいかに辛かったか、今思うとぞっとする位です。降りるとき、車掌さんが、20年間勤務しているが、こんなお客さんに出会ったことはありませんと笑顔で降ろしてくれました。長崎駅に着いたのは12時頃で、延々20時間の列車の旅でした。

一方、大橋先生（平工）の一行は、夜行列車で乗客も少なく、のんびり、悠々と寝そべって長崎に来られたとのことでした。

(4) 昭和45年の県高校卓球大会のときのことです。

当時、女子では、郡山女子高、磐城女子高、平商高、安達高がせり合っていた時代です。決勝は郡女と安達の対戦となりました。新人戦では安達が3－0で郡女に勝たせて貰いましたが、内容的には大接戦の末の勝利でした。本番でのオーダーは、何度も書き直し、頭を痛めた結果の末提出したものでした。宇賀神先生も同じ思いだったと思います。

新人戦に敗れ、雪辱に燃える郡女の宇賀神先生と選手達の勝利への執念と意気込みはものすごく、佐藤（ふ）選手が、新人戦で負けた遠藤選手に、また熊谷選手（カット）に共にセットオールで勝ち二勝して2対2となり、5番は、カットの渡辺選手と左、表ペンの青山選手との対戦となり、途中促進ルールが適用され、攻撃にまさる青山選手が勝ち、郡女は念願の優勝を果たした次第です。

平成10年8月、当時のチームのメンバー全員（7人）が30年振りに顔を合わせ、岳温泉のホテルで、当時の思い出話に花を咲かせ、夜を徹して青春時代の苦しかったこと、楽しかったことなど語り合い、思いで深い一夜となりました。誰がつけたのか、部屋のドアーには、「三浦先生を囲む美女軍団」と書いてありました。

当時の新人大会、高校大会の決勝の戦績は次の通りです。

〈新人大会〉

	安達		3－0		郡女
1.	熊谷(C)	2	21－19 21－11	0	石井
2.	遠藤	2	12－21 21－19 21－16	1	佐藤(よ)(C)
3.	遠藤 児玉	2	19－21 21－15 21－15	1	根本 青山(表)ペン
4.	児玉		――		青山
5.	渡辺		――		石井

〈高校大会〉

	安達		2－3		郡女
1.	遠藤	1	17－21 21－19 18－21	2	佐藤
2.	熊谷	2	21－15 21－19	0	石井
3.	遠藤 児玉	2	19－21 21－1 21－15	1	石井 青山
4.	熊谷	1	14－21 21－16 15－21	2	佐藤
5.	渡辺	1	11－21 21－17 11－21	2	青山

◇協会の役員としての30年

(1) 県高体連卓球部委員長時代

昭和30年、いつの間にか委員長になっていました。初代の委員長ということです。まず、年度はじめの仕事として、大会の日程、要項の作成、支部との連絡等、無我夢中で過ごし、なんとか大会開催に漕ぎつけました。全く多難の時代でした。

当時、会津地区には、委員長として、後に教育長になられた佐藤昌志先生（会工）が活躍されていました。

翌31年、宇賀神先生（郡女）が県の委員長になられました。諸連絡と引き継ぎのため郡山に行き、駅で初対面の挨拶となりました。それ以後、宇賀神先生とは40年余のお付き合いをすることになりました。

(2) 理事長時代（昭和50年～昭和54年）

宇賀神先生や松崎先生から、全面的に協力するから理事長をやれとの強い勧めもあり、理事長をひき受けることになりました。事務局長に松崎俊一先生、会計に菅野源吉先生のコンビが誕生し、組織、運営、会計等の面で、大きな変革とともに、卓連の活動が新しい段階に入り、活性化が見られるようになりました。

(3) 会長時代（昭和59年～平成7年）

昭和59年4月、多くの方々のご支援の下、会長をお引受けすることになり、「ふくしま国体」に向け、第一歩を踏み出すことになりました。

また、その年、高校卓球界に夢と希望達成への一助ともなればとの願いから、優勝旗を寄贈する運びとなりました。その後、大橋柾先生も新人大会に優勝旗を寄贈されております。

昭和60年からの10年間は「ふくしま国体」優勝に向けての選手の育成と競技向上のため、どのように取り組むかが大きな課題であったと思います。

卓球関係者・役員・監督・コーチ・選手が一丸となり、可能性の実現と目標達成への絶ゆまざる努力の成果が総合第2位というすばらしい成績を生み出したものと思います。「ふくしま国体」に向かって、長い間、ご支援、ご協力いただいた多くの方々に対して、敬意と感謝を申し上げる次第です。

◇卓球場設立について

第二の人生をどう過ごすかについては、退職2年前程からいろいろ考えておりましたが、これを決定づけたのは、自分は戦争で、（海防艦乗組員として）何度も死んだ人間ではないのかということでした。若き青春時代を謳歌することなく戦場で散った多くの仲間達のことを思うと、おめおめと生き長らえては申訳ない、お世話になってる社会に対して、何かをしなければならないという念にかられておりました。自分に出来ることは、50年間かかわってきた卓球関係のことしかないとの思いが、昭和59年11月の卓球場の設立となりました。設立の趣旨は、卓球の普及と底辺の拡大ということですが、10年後には、「ふくしま国体」がやってくる、10年かければ、全国で活躍できる選手も育つだろうとの願いもありました。

最近は、各地区の熱心な指導者の努力の成果がみのり、全国でも通用する選手が現れてきていることを思うと、生きがいを感じるこの頃となりました。

☆各種団体の活動

1　飯野中、女子卓球、県大会３年連続優勝 …… 伊藤　二郎　129
2　富岡一中時代の活動について …… 鎌田　益實　129
3　北山中、若松四中の卓球部指導から …… 水戸　昇　130
4　植田中、天栄中の卓球回顧 …… 菊池　進　131
5　玉野中、尚栄中の想い出 …… 佐藤　博　132
6　喜多方三中時代の卓球 …… 岩本　爾郎　133
7　福島商業高、保原高時代の思い出 …… 伊藤　武志　133
8　平工業高校の想い出 …… 大橋　柾　135
9　相馬高校のあゆみ …… 西郷　徹夫　138
10　懐かしい喜多方工業高時代の思い出 …… 清水　徹　139
11　尚志高校（日大女子工業高校）卓球部 …… 網田　雄治　140
12　「毎日が祭りだった」(喜多方女子高時代を振り返って) …… 斎藤　隆弘　142
13　小高工業高校卓球部の組織と活動について …… 木村　哲也　142
14　トーアエイヨー卓球部 …… 甚野　道雄　143
15　すみれクラブ、日東紡卓球部の活動 …… 伊藤恵美子　144
16　須賀川信用金庫卓球部の活動 …… 伊藤　平男　145
17　三浦卓球クラブの活動 …… 三浦　勝美　145
18　福卓会の組織と活動 …… 柴田　広道　147
19　セントラルクラブのあゆみ …… 斎藤　一美　148
20　中島ＴＴＳの活動 …… 中島　静　150
21　みやた卓球クラブの活動 …… 宮田　英夫　151
22　勿来卓球クラブの活動 …… 三瓶　清次　152
23　古殿卓球スポーツ少年団の活動 …… 鈴木　良一　152
24　富久山卓球クラブの活動 …… 深谷　秀三　153

飯野中、女子卓球県大会3年連続優勝

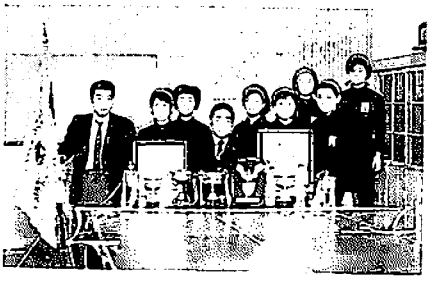
元飯野中教諭　伊　藤　二　郎

昭和37年、県中体連で本校女子卓球団体は、3年連続した優勝を成し遂げました。町ではPTAが音頭をとり、消防車をくり出し、町内パレードを行うなど大変な盛り上がりでした。

今考えると、3年連続というのは種目にかかわらず非常に困難なことで、県内では福島一中のソフトと飯野中の女子卓球だけだったと思います。

当時の県内は、会津や浜通りが絶対的に強く、1年目の優勝は、3年生3人、2年生1人で、他の学校からマークもされず、案外楽に優勝してしまった、という感じでした。

しかし、1回県で優勝すると大変です。2年生1人が残ったが、あとは卓球部に入ったばかりの1年生です。私が体育主任で、バスケット部の顧問も兼ねていたので、体育館は他の部にゆずり、卓球部は、授業が終わった後、机と椅子を片付け2教室で男女の練習をしました。



2年目の県大会では、男女とも1日目の準々決勝を勝ち進み、2日目は女子の決勝が先で、3年生1人、2年生3人の飯野中が優勝。続いて男子の決勝戦、飯野中対好間中に会場の目が一つになり、2対2のあとの5番目、フルセットで大接戦の末破れ、男女両方の県大会優勝はなりませんでした。

3年目は、前年度優勝チームの3人が残っており、強すぎて中学校では練習試合ができず、福島女子高や成蹊女子高に遠征して力をつけてきましたが、大会1週間前にキャプテンが家の前で足を捻挫し、一抹の不安を持ちながら県大会へのぞみました。

県大会1日目の試合は、相手校が負けてもともとと挑んでくるので、私としては3年間で最も苦しい試合となりましたが、2日目の準決勝、決勝は、逆に飯野中に勝てば優勝という意識がでて、こちらは試合がやり易くなり、3対0、3対0と3年連続の優勝を成し遂げることができました。

スポーツは、心、技、体、すべてに全力をそそぐことが大切だ、と、今でも思っています。

富岡一中時代の活動について

双葉町前田字坂下59－1
鎌　田　益　實

1　はじめに

リターンして早10年になろうとしている。私が中学校に赴任したのは昭和24年で、その間卓球指導に明け暮れた。昭和36年から10年間富岡一中に在籍した。その10年間は、今でも指導体験を生かし、充実した指導がなされたものと思う。自分が果たせなかった夢を生徒に託し、土日も休まず練習の毎日であった。

2　指導事例の一部紹介

当時はスポ少の組織もなく、中学1年生で始めてラケットを握る生徒がほとんどで、その指導から始めるので、指導の時間に余裕がなく、3年生の中頃にはもう、中体連関係の試合が始まるので、いかに効果的に練習をするかが課題であった。例を上げると、当時県内の女子中学生は、一般的にカット対策が甘く、まともに打てる選手は少なかった等から、マニュアル的な指導より現状に即した指導方法をとった。タイプとしては、カットマンが多かったのはその為である。さて、指導にあたっては3年間の指導カリキュラムを作成し、例えばカットマンの指導では、1年生はツツキだけの練習で、変化をま

ぜて、ノーミス100回を目標とした。ツツキができる頃には、もう1年生の後半となり、いよいよカットの指導に入るので、反撃の指導までの時間がなく、徹底的に守備に徹した。女子は県中体連連勝を重ねていく中で、促進ルールが適用され、守備力ある選手が、促進に持ち込まれて敗退した苦い経験があったので、ツツキに変化をもたせる指導でカバーした。

その頃中学生は、全国大会が認められず、そのため68年、卓連主催の第一回全国少年少女交流大会が、名古屋市で開催され、猪狩栄子さんが優勝した。その後彼女は、高体連全国大会個人優勝、またその後輩の坂本由紀子さんは、高体連全国大会の個人で準優勝した。私の指導方法は、当時としては間違いではなかったと、今も思っている。県中体連関係では、65年度～67年度女子団体が優勝し、68年度女子団体準優勝となり、69年度女子団体で再度優勝した。通算4回女子団体優勝の成績をあげることができた。

3　まとめ

特に、女子選手が上記のような成績をあげることができたのは、先輩・男子選手の協力があったからであり、掛田俊之君（現在東京の中学校長）渡辺雅文君（現コンサルタント経営）等、その他ここに紙面の関係で、名前をあげられないことを謝すが、男子も各種大会、特に郡大会団体で10年間不敗のすばらしい成績を残した。私は現在諸役職を退任し、昨年から小中学生相手に卓球指導を始めたところである。

北山中、若松四中の卓球部指導から

喜多方市1－4560－4
水　戸　　昇

1　卓球部指導の目標　～人格の形成～

「可能性を求めて」日々自分を磨くことにより「やればできる」実体験を日常生活に生かす。

2　きびしい練習条件

(1)　北山中～卓球部創設からゼロのスタート

(2)　若松四中～週3回の体育館の練習

3　創意を生かした練習

(1)　日本のトップの指導者による意欲づけ

・河野　満氏　・山中教子氏　・吉田安夫氏

(2)　日本のトップ校との合同練習

・野木中（吉沢久治先生には特にご支援いただく）　・下館北中（田村利夫氏）

・春日中（田村明人氏）　・上福岡中（古川裕治氏）

(3)　会津卓球協会のリーダーによる実践指導

・土屋　弘氏　・渡部洋一氏　・松崎　繁氏

・清水　徹氏　・渡部長二氏　・斎藤隆弘氏

(4)　卓球台、マシンの購入（自費）

(5)　学習、生活、卓球の目標をゼッケンに書く。

4　北山中（S48～51）の主な活躍

(1)　S48卓球部創設3年目で、県中体連女子団体、個人初優勝（千葉治恵…専修大卓球部主将）,東北中体連2位、全国大会出場（予選リーグ2勝1敗）

(2)　S49県中体連女子団体、個人共に2連勝（須藤泰子…共立女子大）東北中体連2位、全国大会出場ベスト14、個人ベスト16

県卓球選手県大会ジュニアの部で高校生相手にベ

昭和53年8月
全国中学生卓球大会（北九州市）男女出場

左寄り小沼、森山先生、須藤、菅家、長谷川、斎藤、遠藤、鈴木、古川選手、水戸

スト4独占（須藤、樟山、井上、中川）

(3) S50県中体連女子個人3連勝（内海光子…藤園女子高）全国大会出場

(4) S51県中体連女子団体、個人（4連勝）（東條恵美…大正大学）全国大会でベスト8、個人ベスト16、東北大会3位、男子団体2位、個人優勝（武藤雄治…川崎製鉄）全国大会出場

5 若松四中（S53～55）の活躍

(1) S53県中体連団体男女共優勝、女子個人優勝（小沼ヒロ子…富士通）、3位（須藤敬子…福島大）（植林俊之…法政大卓球部主将）全国大会、東北大会出場

(2) S54県中体連男子団体3位

(3) S55県中体連男子個人優勝（酒井健二…駒沢大学）団体3位、女子団体2位東北大会出場

6 まとめ

それぞれの分野で活躍している卒業生の前途に幸多からんことを祈ります。

植田中・天栄中の卓球回顧

現稲田中学校教頭　菊池　進

私が卓球部顧問として指導にあたったのは、何もわからない新任校の植田中学校であり、昭和56年から61年までの6年間がスタートである。植田中は、すでに県内で優勝するなど有数の強豪であり、県大会の常連校であった。その時の顧問が、黒澤泰弘先生（現いわき教育事務所指導課長）である。卓球には素人であったようであるが、練習計画が徹底しており妥協を許さない厳しさを持っているとともに、子どもたちから大変好かれている先生であった。私が部活動の指導についての考え方を学んだのは、黒澤先生といっしょに顧問をしたこの1年間が大きい。

さらに、宮田英夫コーチ（いわき市役所勤務）との出会いをあげなければならない。卓球部の指導を通して、また遊び友達として、私が植田中にいる6年間、お付き合いをいただいた。ほとんどが奉仕である外部コーチという立場で、子どもたちを勝たせるために情熱をもって指導した姿には、今でも頭が下がる思いである。東北大会や全国大会などいっしょに動き回ることも多く、よい思い出となっている。

また、植田中学校卓球部で忘れてならないのが、OBや保護者会の力である。中体連県大会前の6、7月には、下山田守一さんや田子光政さんをはじめ、その他数多くの先輩方に協力していただき夜遅くまで充実した練習をすることができた。保護者会も充実しており、大会時に県内各地はもちろん県外にまで引率や応援をしていただき、皆で広げる昼食のお弁当が大変おいしかったのを憶えている。植田中学校時代の成績については、次のとおりである。

◎植田中学校の成績

昭和56年度	中体連福島県大会	男子団体（優勝）
57年度	中体連福島県大会	女子団体（優勝）
		男子団体（3位）
58年度	中体連福島県大会	男子団体（3位）
59年度	中体連福島県大会	男子団体（3位）
		女子団体（3位）
	中体連東北大会	女子団体（3位）
		※全国大会出場
60年度	中体連福島県大会	男子団体（優勝）
61年度	中体連福島県大会	男子団体（優勝）
		女子団体（2位）

卓球部指導の2年間のブランクの後（勿来一中では女子バレー部顧問）、天栄中学校に転勤し再び卓球部の顧問となる。中学校の近くにある村の体育館を常時使用できる恵まれた環境にあり、素直でやる気のある生徒が多く、ある程度成績を残すことができた。しかし、始めの1,2年は、ピンポンの世界から脱せず、岩瀬地区においても勝つことはできなかった。ようやく県大会に出場し上位に入るようになったのは、選手がそろった3年目あたりからである。5年間に中体連県大会で優勝できなかったことが、非常に残念であるが、5年目に県中地区大会で男女そろって優勝したことや、男子団体が東北大会において、全国大会出場一歩手前のベスト8までがんばってくれたことに感謝したい。主な成績については、次のとおりである。

◎天栄中学校の成績

平成3年度	県選抜大会	女子団体（優勝）
4年度	中体連福島県大会	女子団体（3位）
5年度	中体連福島県大会	男子団体（2位）
		女子団体（3位）

玉野中、尚栄中の思い出

現原町第一中学校教諭　佐　藤　　博

卓球部顧問として玉野中に5年間、尚栄中に8年間勤務しました。この13年間は県中体連の常連校として団体で連続12回出場しました。団体の主な成績は、優勝2回、準優勝1回、3位3回、5位4回、また東北中体連に団体で5回（玉野2回、尚栄3回）出場、その中で予選リーグを突破し決勝トーナメントに進出したのが平6尚英と平9尚栄の2回。個人でも長谷川（平2玉野）、阿部・畠（平6尚栄）、小野（平9尚栄）が東北中体連で活躍しました。さらに平成2年度から県中体連に新設されたダブルスにおいては長澤・松山組（平2玉野）が初代優勝ペアとして素晴らしい結果を残しました。その他、全日本卓球選手権大会にも寺島、高玉（平元玉野）、高橋（平2玉野）、阿部（平5尚栄）が個人で、また島田・荒組（平8尚栄）がダブルスで出場しました。これまで結果を残せたのは何れも選手のひたむきな努力と保護者会および卓球関係者のあたたかいご理解と協力があったからです。指導者一人で、しかも中学校の部活動の時間だけで結果を残せるはずがありません。そういう意味で今までお世話になった保護者の方々、および卓球関係者、学校関係者に対しあらためて深く感謝申し上げなければなりません。ありがとうございました。ところで、私の指導の根底にあるのは「クラブ出身選手に追いつき追い越せ」という意識です。東北大会や全国大会に参加する選手はクラブ出身者が多いです。しかし、中学校の部活動だけでも指導者が“情熱と夢”を持ち続ける限り全国大会に出場できる可能性は十分あると思います。全国大会に出場したある学校の監督はこう話しています。「私は卓球は初心者であるが子どもにかける情熱は誰にも負けない」と。子どもと共に歩み、そして一緒に全国大会へ行こうという指導者の熱意が必ず子どもに伝わるものです。子どもたちを心技ともに強固なものにするためにどうすればよいか、何をしなければならないか指導者自身よく考えてみることが大切だと思います。私は卓球というスポーツを通して県内外のたくさんの人々と出会いました。そして多くの思い出とともにスポーツマンとして真の強者とはどうあるべきか学んだつもりです。部活動は学校の授業で教えてくれない人間として大切なものを教えてくれます。21世紀に向け、子どもたちに“たくましさ”を身につけさせるために今後も卓球を続けていきたいと思います。

喜多方三中時代の卓球

現二本松第三中学校教諭　岩　本　爾　郎

私の出身中学は、喜多方第三中学校で、顧問の故蓮沼昭先生の熱心な指導のもと、優秀な先輩（五十嵐修二さん、小田切敬さん、佐藤誠さん）やライバルでもあった同級生（渡部洋二君、佐藤隆司君）に恵まれ、部活動はもちろん、家に帰ってからも先輩たちと夜ランニングなどをして、卓球漬けの毎日でした。

厳しいながらも、勝つことの嬉しさは格別だったため、卓球をやめようなどとは思いませんでした。さらに上位を目指すために、卓球の雑誌を毎日のように読み、一流選手の連続写真などを何回も見ては、部屋の中でイメージしながら素振りをやっていたのを覚えています。

この中学三年間の思い出の中で、一番心に残る試合は、昭和54年の福島体育館で行われた東北大会です。大会前に、粉末のスポーツドリンクが新発売され、それを自分で作って夜に毎日2～3リットルぐらい飲み続けていたところ、下痢が止まらず、大会一週間前からほとんど何も食べられない状態で、無気力状態のまま大会に突入しました。りきみがない状態が功を奏したのか、個人戦ではあれよあれよと決勝まで勝ち上り、青森の五所川原二中の小林史幸君に完勝し、優勝してしまったのです。団体戦も決勝まで進み、1番で私がセットオールの末に破れ、チームまでもが負け、惜しくも準優勝にとどまりました。

その後、新聞記者に写真を撮ってもらい、翌日の新聞に掲載されましたが、下痢のために頬がこけ落ちて精彩を欠く顔だったため、周りの人に『爾郎は40代のおやじのような顔だ。』と笑われたのを覚えています。

この大会で得たものは、腹に力が入らず、勝ち負けなど何も考えられない無心の境地でやることが、ナイスプレーにつながるということ。体調を考えた日頃のコンディションづくりがいかに大切かを身をもって感じました。今も現役でプレーしていますが、時折、お酒の飲み過ぎ等で体調を崩して大事な試合に負けてしまうことがあります。この点に関しては、あまり進歩していないようです。

この後の全国大会では、東北大会優勝者はレベルが高かったため、優勝候補の一人になっていたようでしたが、3回戦で敗れてしまいました。ですが、卓球に対する情熱は益々燃えていったのを記憶しています。

福島商業時代の思い出

元福島商業顧問　伊　藤　武　志（52～58年）

12年ぶりのインターハイ優勝

福商の団体優勝は、昭和40年（鴨原、蓬田、藤橋、横井、全国大会は、中京商業に勝つ）と、52年の二回である。

試合毎にヒーローが

52年は1複6単の試合。大砲は2本、斎藤と今野の複とそれぞれの単で3点しか取れない。よく勝てた、今でも生徒に感謝する。試合毎にヒーローが出た。1回戦は原町、2回戦が若商、次が山場の磐城、今野は負けたが、宍戸がカットを打ち抜き、弱いエースの寺島が大奮起、3－3の後、斎藤からファイナル・ゲームを21－18で勝ち、4－3、準決勝は、喜多方に4－0で楽勝、決勝は喜工、スコアは4－1だったが、すでに6、7番は負けていた。カットマンの主将村上のバックハンド反撃がストレートに5、6本抜けた。優勝の瞬間、村上が踊り上がった。

東北大会では、仙台商業に勝ったが、全国では宮崎義仁エースの鎮西学院に3－4で負けた。翌年53インターハイ（福島、山形開催）の県予選で喜工に敗れ、二位となり、連続出場を逃した。

全国、東北大会出場、ランク入りの選手たち

私がいた7年間で優勝した選手は、斎藤達也が新人戦の単（52年）、複で斎藤・今野組、大内・高野組が連覇（53年、54年）、2位はインターハイ単で左腕の大内（54年）、新人戦団体と、柔らかいドライヴの高野が単で（55年）、東北大会の出場者は、渡辺富雄（55年）と清野、森（56年）、二木・中鉢組（57年）、ランクを取ったのは上記の選手のほか砥石（53年）、阿部昭夫（57年）、八巻英樹（59年）だ。

先輩のバックアップ

二木さんをはじめ、渡辺要、鴫原、田中さんなどの先輩が来てくれた、有り難いことです。夏にはアイス、また、カツ丼と御馳走になりました。

思い出の名選手

私がボールを打った、戸田源吉（27年）、大内明雄（28年）、菅野　孝選手について。一枚ラバー、オールラウンドの戸田、ペンカットの大内、最後にペン表の菅野選手。37年の高校3冠王、梨本　甫選手（中大杉並）が卓球レポートに「4回戦、菅野選手の表ソフト・ドライヴには大苦戦、3セット、18本で辛勝しました」と語ったそうだ。また、梅津勝雄選手（31年ペンカット）が県総体、甚野道雄選手（43年、カット）が全日本の県予選で優勝している、双子の紺野兄弟（46年）も良い選手だった。

保原高校時代の思い出

元保原高校顧問　伊　藤　武　志（38～51,59～平9）

保原高校から、5人のチャンピオンが出ている小原公子（32年）、菅野昭平（46年）、斎藤京子（49年）、長澤美奈子（55年）、八巻貴子（60年）の各選手である。

インターハイ初優勝、昭和49年5月、於福島

選手は斎藤英、斎藤京、宍戸、一条、小野、1複6単で、ドライブ、イボ、カットといい構成だった。主将は斎藤美代子、真面目過ぎ、審判がアウトとコールしたのに、「入りました」と自主申告、みんな呆れていた。宍戸はイボ、卒業後トーアエイヨーで活躍した。

最大の敵は便秘と腰痛

一条はカット、必ず一点取ってくれたが、合宿、遠征で、よく便秘になった。エースは斎藤京子、平商 鈴木春枝選手のフォア前サーヴィス後のバックハンド攻めに敗れ、三冠王は逃したが、器用で、投げ上げサーヴィスも上手だった。カットの本田が腰痛のため、2年生の小野を起用した。

5月迄が長かった

県大会の2回戦、小野に4－0、3回戦、県石に4－1、準決勝は箭内選手がいた田村高校、3－3の後、京子がゲーム・オール21－11でエース渡辺を破る。決勝は郡大附属、4－2だった。

雪の若松の新人戦団体優勝後、5月、福島での本番までが長かったのを覚えている。

名コーチのおかげ

卒業生の菅野平吉君（42年）のコーチ術も円熟し、いい選手に恵まれ、OB会からの援助もあり私も、フットワークの練習相手をした。

東北大会出場

私が顧問になって初めて、東北大会に出場したのは、女子複の斎藤・柳沼組（48年）、女子団体は（60、61年）が県2位、複の長澤・佐々木組、単の佐々木まゆみ、池田弘美（63年）、女子団体が2位で東京選抜に（元年）、女子複で金子・八巻組、単で八巻征子（3年）、阿川　愛（4年）、菅野真紀（6年）である。

保原高校の優勝のメンバー　昭和49年5月

全国大会出場

菅野昭平が全日本と、インターハイに（46年）高松志

津子が全日本県予選で2位（51年）、八巻貴子がインターハイと国体に（60年）、長澤智美が高知のインターハイに出場した（2年）。

ランクを取った選手

私が顧問のとき、ランク入りしたのは、酒井則雄（38年）、関根久美子（45年）、全日本予選3位の清水正紀（48年）、斎藤和子（48年）、斎藤秀幸（59年）、相原直美（60年）、佐藤清美（61年）、男子複の斎藤喜和・畠組、単の斎藤喜秀、高野英憲（63年）、菅野裕美（元年）、伊藤その美、阿部幸恵（2年）、深谷久美子（3年）選手だ。

平工業高校卓球部の想いで

元平工業高校卓球部顧問　大　橋　　柾

(1)　草創期から初優勝を飾るまで

卓球部の創部は何時かさだかでないが、戦災を受けた梅本校舎が再建された年、昭和23年に発刊された平工高新聞によると、校友会予算に卓球部9,650円と計上されている。また、この年の県大会個人戦に出場しているので戦後間もなく創部されたと考えられる。

昭和30年に第1回福島県高等学校総合体育大会が開催され、金成・宮崎組がダブルスに出場したが1回戦で敗退している。

昭和32年初代顧問の高木正行が定時制に移り副顧問の大橋柾にバトンタッチされた。

第4回高校大会が石城地区で開催されたとき地元増として学校対抗に初出場することができシングルスにも草野勝哉・川崎国生・鹿島忠男の2年生トリオが出場したが学校対抗・シングルスともに1回戦で敗退した。

第6回高校大会から学校対抗は地区から3校参加はできるようになり2回目の出場を果たす。

1回戦で対戦した小高農工に1セットも取れず惨敗を喫した。個人戦では門馬正衛（3）が3回戦に進んだが第2シードの橋本（相馬）に敗れた、山野辺隆一（2）も2回戦に勝ち上がったが第5シード富田（福島）に楽敗でシードの壁の厚さを感じさせられた試合だった。

翌年の第7回高校大会から学校対抗は地区から4校参加できることなり地区予選を通過するのが楽になった。この大会でまた1回戦で小高農工に当り、今度は3－2と雪辱して3度目の出場で嬉しい県大会初勝利をあげた。2回戦も喜多方商工に3－1で勝ち、準々決勝で第4シード田村と対戦する。エース対決となったトップで山野辺隆一が米川に2－0と勝ち、さい先の良いスタートであったが1－3と逆転されてしまった。

この年の県総合体育大会で山野辺隆一が第1シードを破って準々決勝に勝ち進み、敗退するがベスト8で平工初のランクプレーヤーとなった。

第8回高校大会では準々決勝で優勝した相馬高校と対戦、2－3で負けたが互角に戦うことができたことで、この頃から県大会優勝を目標に掲げて一層練習に励むようになった。

第9回高校大会は学校対抗で磐城高校が優勝、平商業が2位、平工業3位、女子では磐城女子高校が優勝、磐城第一が3位と石城勢が頑張り個人戦でもダブルスの佐藤・佐藤（平商）斉藤・磯上（磐女）が優勝、園部・石井（磐一）が2位、シングルスでも伊藤昌夫（平工）が優勝、平商業の佐藤兄、佐藤弟が2位、3位に入賞した。

伊藤昌夫は平工業初の優勝者で東北大会と京都インターハイに出場した。それまで高校大会は種目別選手権大会として各地で開催されてきたが昭和38年から同一地区で開催することなり名称も全国高等学校総合体育大会（インターハイ）と呼ぶようになった。この記念すべき第1回京都インターハイに初出場で参加できたのはラッキーであった。

昭和39年は東京オリンピックの年で県総体が6月に行われた。学校対抗で須賀川、原町、郡山商と連破して決勝に進んだが福島商に0－3と敗退する。

学校対抗で初めて東北大会に出場した。また、シングルスで井上健一が準々決勝で第1シードの浅坂（会工）を2－1下し、準決勝、決勝はともに2－0で勝って初優勝を飾った。

この年に行われた第10回高校大会の団体メンバーは主将が井上健一（3）鳩野幹雄（3）鈴木雅治（3）小川正浩（2）鈴木啓（2）桜沢秀二（1）、予選で磐城に勝って初優勝して臨んだ県大会は第2シードだった。2回戦で福島工3－0、3回戦は安達3－2、準決勝県北1位で過去2回優勝している強豪、福島であった。①井上1－2小浜②桜沢1－2③井上・小川2－0河野・小浜④鳩野2－0河野⑤小川2－0阿部、前半に2点先取される苦しい試合であったが、④番鳩野が22－20,23－21と福島のエース河野を下す大金星がこの試合の勝利を決めた。

決勝は東北工と対戦、桜沢（1）の活躍もあり3－0で勝ち念願の学校対抗で初優勝を飾ることができた。

インターハイは伊勢市で行われ、2回戦で地元津工業に3－2で勝ち、初勝利を挙げて3回戦に進んだが北陸ブロック優勝のシード校高田工に0－3で敗退した。

(2) 平工業卓球部の全盛期

各種県大会の優勝記録のみを挙げる。

①高校総合体育大会

学校対抗 39,43,45,46,54（年）・ダブルス 40,43,46,48,51・シングルス 38,40,41,48,51,54,55

②高校新人大会

学校対抗 41,45,46,49,50,52,53,54・シングルス 30,47,50,53,54

③総合体育大会

学校対抗 50,54・シングルス 39,47,48,51,54

(3) 個人戦インターハイ出場者

38 伊藤昌夫(S)　39 小川正浩(S)　40 鈴木　啓(W-S)　小川正浩(W-S)　41 桜沢秀二(S)

42 山野辺栄、吉田峰雄(W)　43 渡辺勇、日向寺良幸(W)、佐川澄男、山田由勝(W-S)

45 原田政和、佐藤博美(W)、黒沢義信(S)、46 山口健二、佐々木幸雄(W)

47 酒井正孝(W)下山田守一(WS)　48 下山田守一(W-S)水野幸彦(W)

50 江尻 昭(S、)下山田守夫(S)　51 下山田守夫(W-S)高田篤、(W)馬場幹雄、生田目孝(W)

53 田沢裕浩(S)　54 小島篤(S)、田沢裕浩(S)　55 鈴木誠一(S)、大平隆司(S)

60 澁谷博光(S)

学校対抗は昭和54年以降は決勝リーグに残るが、2，3位、インターハイには澁谷の後は出場の機会に恵まれていないのは淋しい、名門平工業の復活を期待したい。

(4) 卓球部O・B

母校卓球部の向上・発展と会員相互の親睦を計る目的で設立総会が開かれ、趣旨は現在も引き継がれている。

期　日　昭和53年1月1日 13：00

場　所　太平ガーデン　いわき市平中塩字石川1

発起人　山野辺隆一　伊藤　昌夫　鈴木　雅治　鈴木　啓　桜沢　秀二
清野　久司　山野辺　栄　小川　正浩

◎設立当初の役員

会　長　山野辺隆一

副会長　伊藤　昌夫、鈴木　雅治

幹　事　鈴木　啓、山野辺　栄、市井　伸二、澁谷　栄、桜沢　秀二、清野　久司、
吉村　富夫

監　査　斉藤　申次

事務局長　小川　正浩

事務局　母校卓球部、小川正浩宅

◎現在のO・B会役員

会　長　　下山田守一
副会長　　馬場　幹雄、緑川　雅之
幹　事　　伊藤　栄弘、加藤　　恭、鈴木　誠一、曽我部恭司、田巻　幸一、鈴木　秀樹、
　　斉藤　晃弘、宮島　秀昭、澁谷　博光、三浦　健一、熊田　　清
監　査　　下山田守夫、片寄　勇二
事務局長　根本　春彦
次　長　　上遠野広一
事務局　　旧平安卓球場内（いわき市平堂前3）

(5) 平安卓球クラブ

学生時代、平安卓球場で練習をした仲間が卒業後平安卓球場に集まり、旧交を温め卓球大会があると平安卓球クラブとして参加した。特に平工業の選手が在校中或は卒業後に下宿していた関係もあり、卓球場井戸川さんご夫妻にお世話になった平工卓球部OBの選手が多くを占めている。ご夫妻の没後もご子息の好意によって旧平安卓球場の自宅を使用させてもらい平安クラブと称する親睦会を作り、いわき地区各高校の卓球部OB・OG有志が、いまでもご夫妻を偲びながら旧交を温めている。連休・盆・正月になると学生時代に平安卓球クラブで練習した選手達が帰郷して訪れるので賑う。

(6) 回　　想

昭和25年平工業に奉職、高木正行初代卓球部顧問が隣席だった関係から卓球部を手伝うことになる。昭和32年卓球部顧問となる。この年に、いわき卓球協会（当時、石城卓球協会）の設立総会があり、高校の卓球部顧問は協会理事となる。

平工業は地理的関係から卓球会場を引き受けることが多く協会の仕事も手伝うことになる。

今までの碁会所通いもやめて卓球一筋に頑張るようになったのもこの頃からであった。大会では進行係が多く、その後協会の事務局を担当した、昭和39年山崎勲委員長のあとを受け、高体連専門部の地区委員長になる。この年は、念願の学校対抗で初優勝を飾った年でもあった。その後、選手にも恵まれ県内では卓球の名門校と言われるような実績を残すことができた。

昭和45年に斉藤委員長のあとを受けて福島県卓球部専門委員長に就任、53' 福島インターハイは県外種目となったが多くの先生方の協力を得て選手強化に専念でき、高校生のレベルアップ少しは貢献できたのではと思っている。

平工業は52年の新人戦に優勝し、2次強化指定校としてインターハイ出場を目指したがエース高橋典彦が過労による急性腎炎で血尿がでたアクシデントのため決勝リーグで敗退する不運があり涙をのんだ。翌、昭和54年の平工業は強化が実った最強のチームで全員ランク選手で県総体でベスト8に入った坂口祐二が団体戦に出場できない豪華さであった。この年の東北大会で強豪青森商業に4－2で勝って、準決勝で優勝した三本木高校と互角の試合ができた。東北高校選抜大会の準決勝でも優勝した三本木高校と対戦、桜田監督に実力を認められたほど堂々の三位であった。

小川正浩・鈴木啓・桜沢秀二を擁した高校大会2連勝を目指した11回大会も桜沢（2）が出場できず福島商に2－3で敗れる。ダブルス　シングルスに優勝唯一3冠のチャンスを逃した大会でもあった。

選手の思い出は尽きないが平工業の最強選手を挙げると現O・B会長の下山田守一選手である。

インターハイは3回戦で1－2とランクに入った木下（和歌山・海南）に敗れたが東北総合体育大会ではインターハイ3位になった大沼（山形・寒河江）・東北高校大会2位の成田（青森・青森商）に勝って少年男子2位の原動力になった。

当時レベルの低かった福島県の選手としては驚くべき大活躍であった。卒業後川崎製鉄に入社し実業団選手として活躍、全日本選手権でもランキングに名を連ねた。

私は、昭和57年からは東北高体連卓球専門部理事長として東北を代表し、全国高体連卓球専門部常任理事となって運営に参画するとともに、高体連卓球専門部選出の日本卓球協会評議員を6年間勤めた。

昭和50年代の後半は校務と県・東北・全国高体連卓球専門部・同窓会事務局等の仕事に追われる毎日で出張も多かった。卓球部の選手が練習を終えて帰るころはまだ仕事が残っていて家に持ち帰るこ

との繰り返しで今考えるとよく病気もせず頑張れたと思う位です。

母校、平工業に勤務して卓球と出会い、良い選手達に恵まれ、また卓球を通じて素晴らしい方々と巡り逢うことができて幸せであったと思っております。

平成元年3月無事定年退職しましたが、再就職して今でも勤務しています。退職後も平工業卓球部O・B、平安クラブの若い皆さんと時折旧交を温めておりますが、これも卓球が取り持つ縁と感謝している毎日です。

卓球の想いでは尽きませんが、今迄頂いたご厚情に感謝しながら皆さんのご多幸をお祈り申し上げます。

相馬高校のあゆみ

創立百年記念誌より抜粋　―部活動のあゆみから―

元相馬高校教頭　西　郷　徹　夫

卓球部～昭和30年代、県の頂点に立つ～

相馬高校卓球部は、当時実際の技術上の指導にもあたられた森口教諭を部長とし、その基礎作りが始められた。創部間もない昭和24年には、只野喜弘選手が東北大会に出場している。

昭和30年に開催された、第一回福島県高校体育大会において、本校卓球部は第一期黄金時代を築くこととなる。すなわち、個人戦シングルスにおいて佐原昌幸選手が優勝、梅原哲二選手が準優勝、ダブルスにおいても佐原・梅原組が優勝を果たしている。団体戦でも準優勝となり、青森での第九回東北高校卓球大会においては団体、個人とも三回戦まで進出している。

続く昭和31年の高校体育大会県大会においても諸星光男選手がシングルスで優勝するなど活躍している。諸星選手は翌年の福島県総合体育大会においても準優勝し、国体に出場、活躍をしている。次に『東北高校卓球選手権大会記念誌』に寄せられた諸星氏の思い出の記事を引用させていただく。

「卓球との出会い、福島は相馬市（旧中村町）の町立中学校の二年生の時、野球では見込みがないので、卓球を始めました。

地域の中学では強い方で小生は補欠の存在でした。しかし、遅く始めた小生は徐々に面白くなり、高校進学準備もせず、下級生と卒業時期まで休むことなく練習を続け、昭和30年4月相馬高校に入学、上級生とは技の差があり、ほんの時々手合わせをして貰える程度でした。

一年生の夏休み過ぎから上級生は進学の準備で練習場には来なくなり、その時只一人全日本硬式ジュニアに出場が決まっていた梅原哲二（中大卒）が小生に教えながら練習台として大会に臨み、福島県の田舎高校から第五位とすばらしい成績を残されました。

小生も感動し、更に練習に力が入り、二年生の春、県の大会には何とか人数を集め参加し、小生がシングルス優勝したため、廃部は何とかまぬがれ、後輩（中学生）の事も考え、練習に明け暮れました。

学校の部予算も少なく、大会出場は春のインターハイ・国体県予算のみで、全日本硬式ジュニアは認めて貰えませんし、全国大会に出場してもたかが一、二回戦でしょうし、まだどこの家庭でも経済的な余裕がありませんでした。

小生の練習は他流試合もしないし、学校のみでの練習で休みになると来て下さる梅原、西郷（福島大→現県協会会長）の大学生のボールと触れることが待ち遠しく又教わったこと・感じたことを、次に来る時までマスターすることを心がけました。

このような環境で三年生の時東北で優勝した訳ですが、正直なところ他流試合もしてませんでしたし、地元で強い大人もいませんでしたので自分の実力がどの位かわかりませんでした。ただ言えることは年に数回レベルの高い指導を受けていたのだと後になってわかりました。

小生三年生になり、待ちに待った後輩が五名入部し、教えながら小生の練習のプレーの幅も広くなったような気がします。

二年後その後輩達がシングルスは準優勝でしたが、ダブルス・団体優勝を果たしてくれました。」

当時の部の活動内容が偲ばれる文章である。ここで登場する「後輩」が、昭和34年に大活躍する門馬・反畑・木幡・佐々木等の強力選手団である。福島県高校体育大会において団体戦優勝、個人でもシングルスで門馬が優勝したほか、二位から四位までを独占、ダブルスにおいても相馬ペア同士の決勝戦を演じ、門馬・反畑組が優勝と、完全に県を制圧する。続く東北大会においても団体戦優勝、ダブルス木幡・佐々木組優勝、門馬・反畑組第二位と万丈の気を吐いた。しかし、全国大会においては、その壁は厚く、慶応高校に敗退する。

この中で、反畑秀彦選手は相馬高校卒業後、日本大学法学部に進学。一年時よりレギュラーとして活躍し、その年の全日本卓球選手権大会においてダブルス第八位、続いて都市対抗（東京代表）全国大会二位、全日本学生選手権ダブルス三位、関東学生選手権シングルス二位、東日本学生選手権ダブルス三位、さらに大学四年の時は日本大学副キャプテンとしてチームを関東学生リーグ春・秋優勝、全日本学生選手権王座獲得に導いている。卒業後三井生命に入社、昭和42年には第29回世界卓球選手権スウェーデン大会に全日本代表選手として参加、単・複とも三回戦まで勝ち進む活躍を見せている。

当時の監督は新妻教諭で、毎日必ずといっていいほど、練習場に使われた講堂に姿をあらわし、椅子に腰をおろし、じっと練習風景を見つめていたことが、何よりも各選手の励みとなり、練習を重ねた結果がこの成績を生み出したといえる。

その後、昭和35年、36年には伏見利博選手が県大会において二年連続シングルスで優勝を果たすという快挙を成し遂げ、団体戦でも36年、37年と県大会で優勝をしている。さらに昭和41年にも加藤選手を中心として団体優勝を果たしている。これらの活躍の陰には部員達の練習に明け暮れるたゆまぬ努力があったことはもちろんだが、母校を巣立った先輩達の励ましと指導があったことを忘れてはならない。西郷徹夫現福島県卓球協会会長は、大学生時代から後輩の技術的、精神的指導を続け、その功績は真に大きい。

昭和47年、福島県高校体育大会で、団体では第七位であったが、個人戦ダブルスで佐々木・鈴木組と南部・門馬組が東北大会出場を果たす。その後はめざましい活躍からは遠ざかっているが、現在、現役部員達は講堂において無心にボールを追い、練習を重ねる日々を送っている。

懐かしい喜多方工業高校の思い出

現福島県立小高工業高等学校長　清　水　　徹

昭和40年4月、始業式は南前庭で行われた。体育館もなく、校舎や実習棟も建設途中で体育の指揮台上から新任の挨拶を緊張の中で行われた。

翌年の41年度に同好会から卓球部に昇格し、卓球台を2台購入した。顧問は、喜多方女子高の初期の黄金時代を築いた満田三平先生と、強豪喜多方商高の冠木常雄先生がいて、私を含め3人で試合をして勝った者がやることになった。たまたま勝ったのが私で、今後は若者に託してと言ってその夜喜多方の街を3人で飲み歩きしたのも懐かしく思い出される。御二人はもうこの世にはいない。

初めての会津地区大会は3年生を主体にして臨んだ。団体戦も個人戦も歯がたたず、ほとんど一回戦で敗退だったが、新一年生の目黒新一君だけが代表決定戦まで行って惜敗した。全試合終了後のミーティングでその目黒君がいないので探したところが、校舎の隅でしょんぼりうなだれていた。彼は只見出身で何かの手違いで喜多方に来てしまった。負けた悔しさと、進路の後悔で泣いていたのだ。重い口をやっと開き、全国大会に出場するのが夢という。とてつもないことを言い出した。驚いてばかりもしていられないので、下宿のおばさんに頼み込み、目黒君と襖一枚の下宿生活が始まった。

次の会津総体からは1年生であろうが、校内で強い順から選手を選びチームを編成することを提案した。3年生が猛反対して来たが、考えを変えなかったため退部者が続出した。方針に従った者だけが厳しい練習を続けることになった。当時1年生の中には山都から数人の有望な生徒もいて、1年生だけでもかなりのチームに成長した。ただ目黒君自身の目標が高く、体育館が出来てからは、週2回練習出来

ない日には10K目黒の長距離マラソンとトレーニングが続き、私の目からもかなり厳しい練習であったため、一人、二人と退部者が続き彼が3年生の時には最上級生は二瓶幸治君と二人だけになってしまった。3年目の地区予選は母校喜多方工高が会場となった。目黒君が選手宣誓を行ない念願の個人優勝と初の団体戦3位の原動力となった。3年間の努力が稔り、県大会の相馬高校では10名の団体で意気揚々と行進したものである。

団体戦では残念ながら1回戦で敗退したが、目黒君は夢の全国大会には届かなかったが、ベスト8位入りし、東北大会に出場することになった。

当時の就職試験は6月に実施されていたが、東北大会が重なり、特段の計らいで試験日を後日に延ばしていただくことになった。八戸での大会は青森の選手に負けてしまったが、表情はさわやかだった。就職試験には合格し、晴れて日立本社営業所へ内定することが出来た。学業と部活の両立を実証出来たことで自信を深めたのである。

昭和44年に目黒君が卒業した。私事で恐縮ですが昭和45年の春に結婚し、部活も特に厳しいものではなかった。そんな時の昭和46年度新入生の中に江川淳一君が入学してきた。彼は文字通りピンキチである。今までの卓球部のあらゆる常識を打ち破っていった。まず球拾いを拒絶し、ボールを打ちたいと言い出した。当時は入学後1～2ケ月はボール拾いが常だったが、本人は入部後5～7日目に言う事を聞かなかった。練習は7時を越し8、9時にもなった。彼が3年になると新入生の木村義栄君を誘い、朝は7時から、夜は10～11時に到るまでカット打ちに明け暮れた。私は毎朝警備員か教頭から小言を言われない日はなかった。そんなある日警備員さんが根負けして、気の済むまで練習せよ、ただし、消燈と施錠は責任をもってやれば協力するので、最後までやり通せと激励された。こうなれば時間を忘れて夢中でボールを打っていた。

このチームは2年の新人戦で県大会で3位に団体戦入賞し、江川君も3位に入り、3年のインターハイには団体戦ともども大いに期待されていた。そんなすばらしいチームだったが、会津地区大会の3回戦で会工によもやの敗退、慰めの言葉も見つからず呆然としていた私の顔に一滴の水滴が落ちてきた。上で応援していた2年生の悔涙であった。この涙に今まで以上に胸の奥底から熱い闘志が沸いてきた。生徒達に二度とこの悔涙を流させないことを強く、強く誓ったのである。

江川君は個人戦で伊勢のインターハイに出場し、全国大会初出場の感動を与えてくれた。この感動を新チームの全員に与えてやるのが私の使命であるとさらに意を強くしたのである。

それからは部創立当時の目黒君や1年先輩の江川君の意志を継ぐ猛練習が始まった。優勝して全国大会に出場を夢みて、福島県一、全国にも誇れる練習から昭和49年度県高校総体で初優勝、その後3連覇し、1年おいて53インターハイ地元開催にも出場できたことは夢のようであります。

今、出会った一人一人の生徒を思い出し、地元や保護者の暖かい励ましを感謝しながら昔を懐かしんでいるところです。

尚志高校（旧日本女子工業高校）卓球部

旧日本女子工業高校顧問　網　田　雄　治

○創立日　昭和39年4月
○指導者　昭和45年4月～昭和59年3月
　　網田　雄治、鈴木　正子
　　昭和59年4月～現在
　　寺西　礼子、橋本　　裕
　　桑原　要勝（平3～5）
○現在の部員数　17名（男10名女7名）
○活動状況

開校と同時の創部で、教室や実習室を練習場にわずか1台の卓球台で練習をしなければならなかった時代を経て、顧問の熱心な指導の下、徐々に力をつけていった。

昭和49年、初めて県新人戦団体戦において3位に入賞、個人戦で佐藤尚美が初優勝を遂げた。以後50年には、佐藤尚美、桑原優子の2名がシングルスで全国大会に出場、51年には、県大会団体3位、54年、55年2年連続新人戦で団体優勝をした。

昭和55年度の高体連創立30周年記念大会において、団体準優勝、ダブルスで安藤ひとみ・志賀豊子組が初優勝。高知インターハイにおいては、山梨、愛知の代表を破り3回戦まで進出した。これ以後、東北大会、全国大会、全日本等の大会出場への足がかりをつくった。科学的、合理的な練習を行い、講習会等にも積極的に参加した。指導者は、北京や上海の業余学校に技術や指導法を学びに行った。また、部員が毎日つける日記と毎月発行される「卓球部だより」は、現役と卒業生の絆となっている。

顧問は、昭和59年に網田から寺西に引き継がれ、県のトップ水準を維持した。卒業後は、卓球を生かして一流私立大学に進学する選手が輩出され、県卓球界において高く評価されるようになった。

平成3年指導者に桑原要勝を招き、指導体制を一層充実させ、平成3年度の県高校総合体育大会において念願の団体優勝、シングルスにおいては菊地弓子が県のタイトル全ておさめる成績をおさめ、全国大会に入賞するなど尚志高校卓球部の名前を不動のものにした。

○卓球部成績（団体、個人、県大会優勝以上）

S49年度	県高校新人戦個人	佐藤　尚美	優勝
S50年度	県総合体育大会団体		優勝
S51年度	県高校学年別大会	沼田　弥生	優勝
S54、55年度	県高校新人戦団体		優勝
S56年度	県高校総体ダブルス	安藤・志賀組	優勝（全国大会3回戦まで進出）
S56年度	国体県代表選手になる。	志賀　豊子、吉田　朱美	
S62年度	県高校選抜大会団体		優勝
H3年度	県高校総合体育大会団体		優勝
H3年度	全日本県予選ジュニア	菊地　弓子	優勝
H3年度	県高校新人戦個人	菊地　弓子	優勝
H3年度	全国高校選抜大会個人	菊地　弓子	第3位
H4年度	県高校総合体育大会個人	菊地　弓子	優勝
H4年度	県総合体育大会個人	菊地　弓子	優勝
H4年度	東京卓球大会個人	菊地　弓子	第3位
H4年度	県高校新人戦個人	菊地　弓子	優勝
H5年度	県高校総合体育大会個人	菊地　弓子	優勝
H5年度	県総合体育大会個人	菊地　弓子	優勝
H5年度	全日本県大会ダブルス	菊地　弓子	優勝

1980年（昭和55年）2月
県高校新人戦・団体初優勝
（棚倉町体育館）

「毎日が祭りだった」（喜多方女子高時代をふりかえって）

現郡山東高等学校教頭　斎　藤　隆　弘

わたしが、喜多方女子校につとめたのは、昭和49年の4月からでした。その頃喜多方には、水戸昇（北山中学）、蓮沼昭（喜多方三中）、清水徹（喜多方工業）先生という、独自の理論を持った希有な、見事な指導者がいました。ただ高校女子だけが県で勝てないという状況だったと思います。そんな周囲の環境に励まされながら、先生方の教えを請いながら、卓球を始めました。土曜、日曜になると、練習場は近くの一般の卓球愛好家の皆さんでいつも活気に溢れていました。生徒のためにというよりは、自分の楽しさのために卓球にのめり込んでいったと思います。卓球に関して全くの素人だったわたしは、試合に負けると誰にでもアドバイスをお願いしました。練習のこと、試合のこと、用具のこと、精神面のこと、その道の達人という人がいると誰にでも可能な限り尋ねました。勝ちたかった一心だったのです。

それにしても、試合のあとの先生方との、あるいは一般の愛好者との議論はどんなに楽しかったかしれません。酒を交わしての卓球談義がどんなに充実した時間であったかしれません。

喜多方女子高校には、12年間勤め、さらに転勤しても4年間卓球の指導に通いました。その4年間すべての県の団体で優勝することができました。Hという日本一（わたしは今もそう思っています。）の指導者との出会いが、わたしの指導者としての技量を大幅に高めたのです。これで夢にまで見た日本一になれる。そう思ったときは、卓球に夢中になれる環境ではありませんでした。

わたしは今、転勤して郡山東という高校に勤務しています。そこには、わたしがいままで見たこともない才能の生徒たちがいます。熱心なクラブの指導者が辛苦して育てあげた選手たちです。これほどの選手を毎年育てあげる、その卓球に対する情熱と、指導力は見事というほかありません。しかしそんな選手たちを育てあげる環境が、高校にはありません。高校の熱心な指導者が少なすぎるのです。これでは、選手が県外の卓球有名校を目指すのは当然です。ぜひ高校の優秀な指導者を育てる作業を根気強くすべきだと思っています。

卓球に夢中であったあの頃は、いつも祭りでした。「卓球」という祭りを毎年、毎日楽しんでいたように思います。あの頃の祭りの関係者とのひとときがわたし自身の現在の最高の楽しみになっています。ぜひ日本一の卓球の熱心な県になってほしいと思います。

県立小高工業高校卓球部の組織と活動について

現福島高等学校教諭　木　村　哲　也

私は現在、県立福島高等学校に勤務していますが、前任校である小高工業高等学校は私にとって大変思い出多き学校であり、大変貴重な経験をすることができました。小高工業卓球部は県代表選手や県代表監督を数多く輩出してきました。齋藤一美さん（現県強化部長、福島国体成年女子二部優勝監督）、佐藤敏行さん（県総体シングルス四連覇、監督としても豊間中、飯舘中で団体全中出場）、原晃さん（東京選手権男子サーティーの部優勝、福島国体成年男子一部五位入賞選手）などが代表的なOBとして挙げられます。また、毎年2月にはOB会主催の浮舟杯という大きな大会が開催されます。このように小高工業卓球部は大変伝統ある部であります。そして、生徒たちも全国入賞を目標に日々の練習に励んできました。ここで主な成績を振り返ってみたいと思います。

平成6年度

インターハイ　男子学校対抗ベスト16

大越　弘之、齋藤　洋一、柴田　俊生、遊佐　充裕

東北選抜卓球大会　優勝

齋藤　洋一、柴田　俊生、佐藤　正光、遊佐　充裕

平成7年度

福島国体少年男子団体3位入賞　遊佐充裕

全日本ジュニア5位入賞　遊佐　充裕

東京選手権ジュニアの部優勝　遊佐　充裕

平成8年度

東北高校卓球選手権大会ダブルス2位　遊佐　充裕、齋　藤亮組

国体少年男子団体5位入賞　遊佐　充裕

国体少年女子団体5位入賞　三原　香織

全国選抜卓球大会　女子学校対抗出場　三原　香織、伊藤　絵美、大峯　礼、庄司由希子

平成9年度

インターハイ　女子学校対抗出場　三原　香織、伊藤　絵美、大峯　礼、庄司由希子

国体少年女子団体5位入賞　伊藤　絵美

平成10年度

インターハイ　女子学校対抗出場　八巻　由美、大峯　礼、庄司由希子、門馬　千恵

わたしがこの伝統のある卓球部の顧問を5年間も努めることができたのはOBの皆様や学校内の先生、保護者など、周りの方々による支援のおかげであります。本当にありがとうございました。

トーアエイヨー卓球部

監督　甚　野　道　雄

1．設立年月日　昭和22年10月

2．役　員　部長　斎藤　閑朗　　監督　甚野　道雄　　選手　女子5名

〈卓球部の始まり〉

＊トーアエイヨー卓球部は、昭和22年10月に発足した。当時の社長がスポーツに対して理解があり、また下記の理由で数あるスポーツから卓球が選ばれた。

①雨が降っても、雪が降ってもいつでもできる。

②スペースをあまり取らない。

③怪我も他のスポーツに比べて少ない。

④年齢に関わらず、男女を問わず、その人なりにできる。

⑤企業のイメージとして、卓球があっている。

〈卓球部の成長の課程〉

＊卓球部が始まった頃は、部員の中心は中学卒の初心者でしたが、昭和26年から高卒の卓球経験者が入社するようになり、チームのレベルアップがされました。その結果、労組大会の東北大会で昭和26年～昭和35年の間,10年連続優勝の快挙を成し遂げました。

また、昭和49年の全日本実業団卓球選手権大会軟式女子の部で決勝まで勝ち進み、優勝まで後一歩というところまでいったことが、やればできるという大きな自信につながり、その後も実業団において上位入賞をはたし続けている原点となっています。

3．成績（団体）

昭和26年～35年全国労働組合卓球大会　女子チーム 10連勝を達成

昭和49年	全日本実業団卓球選手権大会	軟式女子の部	準優勝	（東京都）
昭和58年	〃	〃	〃	（草津市）
昭和62年	〃	〃	〃	（上尾市）
昭和51年	全日本実業団卓球選手権大会	軟式女子の部	第3位	（千葉市）
昭和53年	〃	〃	〃	（東京都）
昭和54年	〃	〃	〃	（米子市）

昭和55年　〃　〃　〃　（上越市）
昭和56年　〃　〃　〃　（旭川市）
昭和59年　〃　〃　〃　（上山市）
昭和60年　〃　〃　〃　（新南陽市）
昭和61年　〃　〃　〃　（岐阜市）
平成２年　〃　〃　〃　（青森市）
平成10年　〃　〃　第５位（大分市）

＊平成２年　文部省より「社会体育優良団体」として表彰される

（個人）

昭和58年　千葉市　全日本軟式卓球選手権大会　安藤ひとみ・内藤由里子　女子複　準優勝
平成元年　甲府市　全日本軟式卓球選手権大会　星　智恵・石川美智子　女子複　第３位
平成10年　高崎市　全日本軟式卓球選手権大会　金澤　有・三瓶　直美　女子複　第８位

４．年間予算額　（250～300万円）

５．今後の抱負　現在少ない部員数なので、以前の様に活気あふれる部作りをして行きたいと考えております。

すみれクラブの活動

代表　伊　藤　恵美子

昭和50年代前半は、まだ主婦がスポーツをするということが、そんなになかった時代でした。始まりは、福島市内の小関さん、母袋さんなどが最初に全国レディースに出場されたらしく、その翌年に声をかけて頂き、初めてママさん（家庭婦人）として全国大会（昭和54年第２回）に行ったのがきっかけでした。

その後、福島市に家庭婦人連盟ができ、春と秋のリーグ戦が始まりました。そこで、私と同級生だった菊地さんに声をかけ、高校時代の仲間や実業団でやっていた仲間に声をかけ、すみれクラブができました。卓球選手権大会経験者が集まったので、常にＡクラスとしてやってきました。でも、子育てをしながら、家族に迷惑をかけないことをモットーにし、卓球台の側に寝かせたり、おもちゃやミルクを持っての練習風景、その子が今や成人を迎えています。こんなお母さんも、時には緊張することもいいかなと試合に出るようになりました。

でも、練習はなかなかできず、月１～２回するのが精いっぱいでした。しかし、平成10年広島大会の全国レディースに久し振りに出場して、悔しさと楽しさを味わいまして、今は週１～２回の練習に変わりました。最近は仕事をもつお母さんが多くなり忙しい日々ですが、時間を作り集中するのもいいものです。その後の会話がそれ以上に楽しいもの、現在は12名の部員で20歳代～50歳代と卓球を通して勉強をしています。目標も市大会から県大会へ、今は全国大会へと夢を広げています。

事務局　伊達郡保原町字元木88－１　リーダー　伊藤恵美子

日東紡卓球部の活動

元部員　伊　藤　恵美子

昭和44年私が東京にいる時、女子の実業団チームを作りたいと日東紡からお話がありました。地元には、東亜栄養という実業団チームがありましたが、日東紡チームを作ることにしました。一つしかない実業団よりライバルを作れば、福島の一般の卓球人口の底辺拡大とレベルアップもできると思いました。

昭和45年、地元の高卒の6名と私と男子の数名でスタートしました。

翌年（昭和46年大阪）の実業団大会で、当時5連勝していた大成信用組合に負けはしましたが、ベスト8に入賞したことは今でも忘れられません。木ベラの紺野（成女),松浦（西女）がいました。その後、奥山節子（福女）が入社、岩手国体の代表になるなど日東紡チームも少しずつ強いものができあがってきました。

その後、相女から天野和子、鈴木礼子、星幸子、西女から吉田強子、石川宣子、成女から長尾洋子磐女から佐藤久美子、安女から藤田知子、増子佳絵、喜女から小田切佳代、佐藤誠子等ほかにもたくさんの選手がいました。

しかし、選手の確保が一番大変な仕事でした。

そんなところへ昭和50年に男子の安達広や星哲太郎など男子の入部で女子の強化が促進され、群馬国体の代表に長尾洋子、鳥取国体の代表に佐藤久美子選手が選ばれました。

昭和54年には、郡山市で開かれた全日本社会人卓球選手権大会で、安達・星組のダブルスが3位に入賞する快挙がありました。これで日東紡に男子の実業団チームもできあがり現在に至っております。

現在は、女子部は休部になって残念に思いますが、またいつか若い力で新しい実業団ができることを望んでいます。

主な成績

男子	平成7年全日本実業団大会	1部トーナメント	第3位
女子	昭和46年全日本実業団大会	硬式女子の部	ベスト8

須賀川信用金庫卓球部の活動

代表者　伊　藤　平　男

○設立年月　平成50年4月

○役　員　部長　高原　高

監督　伊藤平男

選手　男子 7名

○成　績

平成7年全日本実業団大会軟式男子　第6位

平成9、10年全日本軟式大会　小塩　浩　男子シングルス　優勝

三浦卓球クラブの活動

代表者　三　浦　勝　美

〈設立年月日〉　昭和59年11月1日

〈役員と指導者〉　石　井　徳　寿　長谷川　賢　治　渡　辺　悦子　菊　地　純　代

〈活動状況〉

・構成人員

	小学生	中学生	高校生	計
男子	7	4	3	14
女子	10	12	4	26
計	17	16	7	40

・成　績

△団体(1)全日本クラブ卓球選手県大会　女子4部…10回連続出場　日本卓球協会　特別表彰

優勝4回　準優勝4回（平10）

(2)全国ホープス卓球大会　　優勝（平成元年）

△活躍した選手

○藤田　由希

S62	全日本卓球選手権大会	カブ女子	優勝
H元	〃	ホープス女子	優勝
H元	第4回アジア卓球選手権大会	ホープス女子	優勝
H2	全日本卓球選手権大会	カデット女子	優勝
H3	地球ジュニア卓球大会	カデット女子	優勝
H3	全日本クラブ卓球選手権大会	女子4部	優勝
H4	東北中学校卓球大会	女子シングルス	優勝
H4	全国中学校卓球大会	女子シングルス	優勝
H5	全国スポーツ少年団交流卓球大会	女子シングルス	優勝
H5	フランスユースオープン	女子ダブルス	優勝

○高橋美貴江

S62	全日本卓球選手権大会	女子バンビ	優勝
H2	全日本卓球選手権大会	ホープス女子	5位
H3	地球ジュニア卓球大会	ホープ女子	2位
H3	全日本クラブ卓球選手権大会	女子4部	優勝
H5	〃	〃	優勝
H5	東北中学校卓球大会	女子シングルス	2位
H5	全日本卓球選手権大会	カデット女子ダブルス	3位
H6	東北中学校卓球大会	女子シングルス	2位
H6	全日本卓球選手権大会（中3）	ジュニア女子シングルス	5位

○今福　愛

S62	全国ホープス卓球大会	女子団体	3位
S63	全日本卓球選手権大会	女子カブ	5位
H元	全国ホープス卓球大会	女子団体	優勝
H2	全日本卓球選手権大会	ホープス女子	5位

○藤田　小夜

H元	全国ホープス卓球大会	女子団体	優勝
H3	地球ジュニア卓球大会	カブ女子	3位
H3	全日本クラブ卓球選手権大会	女子4部	優勝
H5	全日本卓球選手権大会	ホープス女子	3位
H5	全日本卓球選手権大会	カデット女子	5位（小6）
H6	全日本クラブ卓球選手権大会	女子4部	優勝
H7	全日本クラブ卓球選手権大会	女子4部	優勝

○今福　久美

H3	全日本卓球選手権大会	バンビ女子	3位
H4	〃	バンビ女子	優勝
H5	全日本クラブ卓球選手権大会	女子4部	優勝
H6	〃	女子4部	優勝
H6	全日本卓球選手権大会	カブ女子	3位
H7	全日本クラブ卓球選手権大会	女子4部	優勝
H8	東アジアグランプリ杯ホープス卓球大会	女子団体　日本Aチーム	3位

〈活動計画〉

練習時間　週6回 19：00～22：00

〈回数、時間…自由選択〉

〈クラブのモットー〉

・努力・燃えて挑戦・他人への思いやり・挨拶は大きな声で元気よく

〈年間の予算額〉80万円

〈今後の抱負〉　普及と底辺拡大　低年層には楽しい卓球

全国で活躍できる選手の育成

〈事務局所在地〉　二本松市若宮1－346

TEL 0243－22－2852　FAX 0243－23－4326

〈その他〉

平成4　文部大臣表彰（スポーツの振興）　（三浦卓球クラブ）

平成10　文部大臣表彰（三浦勝美）　（社会体育の普及・振興）

福卓会の組織と活動

監督 柴田広道

○代表者　柴田広道

○発足　昭和63年3月

会長　吉原清隆

顧問　橋本義一、深谷秀三、大藤　務、古山　浩、横山　実、斎藤一美

選手　佐藤敏行、田子光政、大内雅之、原　晃、岩本爾郎、落合茂幸、本間尚雄

以上15名で結成し今日にいたる。女子部が平成2年にスタートした。

○役員　監督　柴田広道

総務　本間尚雄

主務　岩本爾郎

男子主将　原　晃

女子主将　東條由美

○会員　男子 10名　女子 8名（学生1名）

○会の目標

「全国優勝」と共に、若手中高校生の育成。

○主な目標

全日本クラブ卓球選手権大会　優勝 2回

平成4年　郡山市…佐藤、大内、原、落合、小澤

平成8年　北九州市…原、落合、深谷、馮、小澤

第3位 4回

個人戦　準優勝　原　晃　第3位　佐藤　敏行

日本クラブリーグ

優勝 4回　準優勝 2回　第3位 3回

最優秀選手　原　晃 1回　深谷　亮幸 3回

国体

平成3年　石川成年男子2部 5位…田子、岩本

平成7年　福島成年男子1部 5位…原、深谷
　同　　同成年女子2部　優勝…東條
平成8年　広島成年男子1部 5位…原、岩本、深谷
平成10年　東京卓球選手権大会　男子サーティ　　優勝　原　　晃
○年間予算　　10万円プラスアルファ
○抱　　負　　男女アベック優勝
○連 絡 先　　960－8012
　福島市御山町6－13 スミキビル　　柴 田 広 道
　☎・FAX 024－533－2299

セントラルクラブのあゆみ

総監督　斎 藤 一 美

昭和54年4月1日、自宅に5台コートの卓球場を開設する。原町市から「日の丸選手！」を目標に『感激』を道場理念に掲げ、セントラルクラブを創設した。

一期生は高田文彦君ただ一人で、マンツーマンの指導こそ日の丸の近道と考え、中学の3年間、朝7キロのランニング、夜6時から9時30分まで、基礎中心に練習、2日以上の連休は遠征である。大人の世界に高田君一人だけでもまれた3年間は大変つらかったろう。回顧すること反省ばかりであるが、県中体連2位の実績で、全国屈指の強豪東京実践商業高校へ越境入学し、レギュラーで活躍し、日本大学卒業後、東京の外資系会社の営業マンとして大活躍しておるのが、せめてもの罪ほろぼしである。高田君を卒業させてから、部員構成は10人以上、高校は県外の一流高校へ越境入学させる方針を立て、以後6人の選手を送り出し、それぞれのエースとして活躍してくれた。

平成3年に入り、「平成7年ふくしま国体」へ向けて、県の強化事業計画が決定した。当クラブも方針を改め、「当クラブから国体選手を！」を合い言葉に越境入学をやめ、小高工業高校とセントラルクラブを併合して強化を始めた。以後選手は全員小高工業へ入学することになる。県内のクラブも同様に強化に乗り出し、続々とライバルが現れたことも幸いし、当クラブも斎藤　亮が全日本バンビ、カブで3位、全日本クラブ団体2位、柴田俊生が全日本中学5位に入賞するなど、全国でも知られるようになった。

平成5年、福島県のホープ遊佐充裕選手（平成4年全国中学大会5位）、高校入学の去就が県の注目の的であったが、所属クラブ（あづま卓球スポーツ少年団）の吉原清隆氏より当クラブへ入部（小高工業高入学）させていただいたのを機に、中国人トレーナー毛大宝氏を招聘し、2年間指導して頂いた。また、平成6年中国河北省より馮海濤選手を松栄高校へ留学させた。遊佐、馮、私の子ども3人が同宿し、道場の熱気あふれる中での練習で、一気に5人もの全日本ランキング選手が誕生した。ふくしま国体では、少年男子（遊佐、馮）3位、インターハイ2年連続2位の馮、全日本ジュニア5位の遊佐、特に、平成8年第48回東京卓球選手権大会ジュニアの部で、遊佐と馮が決勝戦で対決（遊佐2－1馮）した喜びは忘れられない。また、平成6年、斎藤　亮が全日本カデットで準優勝、翌年第43回世界卓球選手権大会（中国天津）に、ジュニア予備選手として「日の丸」をつけてくれたことは、クラブの夢を半分実現してくれうれしかった。

馮選手を除き、全員が小高工業高校へ入学し、大越弘之が、平成6年第20回全国高等学校選抜大会で優勝したのを機に、平成7年インターハイ団体でベスト16入りし、翌8年東北高校選抜大会で青森山田高校を3－0で破り、初の福島県優勝を飾った。平成3年より9年の選手は、3期生と呼んでいるが、数々の成績とよき思い出を作ってくれた黄金時代であった。この陰には創設と同時に20歳からコーチ専任で指導に当たっている高田信広氏、小高工業高OB会の諸氏、コーチ選手兼任で福島県卓球界若手のホープ原　晃君、ふくしま国体出場のため2年間在籍した大掛美奈さん、中国人毛大宝コーチ、

毛氏、馮君を紹介してくれ、これまで3度の中国遠征を含め、12年間指導してくれている徐向東氏、他多くの諸先輩、仲間のお陰である。

平成11年4月1日より、第4期生が船出したばかりである。これまでの経験を生かし、初心忘れることなく歩んでいきたい。

○スタッフ紹介

総監督　斎　藤　一　美（49歳）　㈱セントラル住設代表取締役
　ふくしま国体成年2部女子監督として優勝
監　督　高　田　信　広（39歳）　㈱セントラル住設勤務
コーチ（兼選手）原　　晃　㈱東京電力勤務
　国体福島県代表として12回出場（入賞2回）
　平成11年第51回東京卓球選手権大会　サーティの部　優勝
　福島県のリーダーとして活躍
コーチ　柴　田　俊　生　㈱福島ゼロックス勤務

○団体戦の成績

昭和63年　全国ホープス大会　第3位（大越弘之、斎藤洋一、柴田俊生）
平成4年　全日本クラブ卓球選手権大会　男子4部　第2位（柴田俊生、斎藤　亮、伊賀　誠）
平成4年　全国スポーツ少年団卓球交流大会　優勝（大越弘之、斎藤　亮）
平成5年　全日本クラブ卓球選手権大会　男子4部　第2位（大越弘之、斎藤　亮、柴田俊生）
平成6年　全国高等学校卓球大会　小高工業高校　ベスト16
（大越弘之、斎藤洋一、柴田俊生、遊佐充裕）
平成8年　東北高等学校選抜卓球大会　小高工業高校　優勝
（斎藤洋一、柴田俊生、佐藤正光、遊佐充裕）

○活躍した選手

高　田　文　彦（原町二中―東京実践商業高―日本大）
　昭和52年　県中体連シングルス　第2位
二本松　俊　雄（小高中―東京実践商業高―日本大）
　平成元年　全国高校選抜大会　団体　第3位
種　村　明　美（鹿島中―山形城北高―中央大）
　昭和62年　東北高校大会　団体　2位　単3位
吉　田　真　国（原町一小―東京中野一中―東京実践商業高―法政大）
　昭和62年　全国中学校大会　団体　第2位
村　松　誠　一（原町三中―東京実践商業高―法政大）
　昭和63年　東北中学校大会シングルス　第2位
種　村　恵　理（鹿島中―山梨甲府商業高―中央大）
　平成4年　山梨県高校大会　三冠王
大　越　弘　之（原町三中―小高工業高―中央大）
　平成7年　全国高校選抜大会シングルス　第1位
柴　田　俊　生（原町二中―小高工―福島ゼロックス）
　平成5年　全国中学校大会シングルス　第2位
斎　藤　洋　一（原町二中―小高工―愛知工業大）
　平成3年　全日本カデット大会　複　第3位
遊　佐　充　裕（あづま卓球―小高工―愛知工業大）
　平成3年　東北中学校大会シングルス　優勝
　平成8年　東京卓球大会ジュニア　優勝
　平成11年　大阪国際大会　ダブルス　第2位

馮　海　濤（中国石家荘体育学校―松栄高―大正大）
平成7、8年　全国高校大会シングルス　第2位
平成8年　東京卓球大会ジュニア　第2位
伊　藤　絵　美（原町一中―小高工―日立多賀工場）
平成9年　国民体育大会　少年女子　第5位
斎　藤　亮（原町二中―小高工―東邦学園）
平成6、7年　東北中学大会シングルス　第2位
平成6年　全日本カデット大会　第2位
平成9年　東北高校大会　ダブルス　第2位
村　松　伸　彦（原町三中―小高工業高）
平成6年　全日本卓球大会カブ　第5位
伊　賀　禎（原町一小―原町一中）
平成7年　全日本卓球大会カブ　第5位

○ＯＢ紹介

二本松　賢　治（相馬農高）
松　井　和　子（原町高―昭和女子短大）
松　坂　健　二（小高工―東京電力）
佐　藤　美　幸（小高工―札幌女子短大）
斎　藤　卓　也（小高工―中国第二外国大）
門　馬　千　恵（小高工―㈱栄製作所）
大　越　秀　一（小高工―千葉商科大）
種　村　明　彦（鹿島中―日大山形高―中央大）
吉　田　三　起（原町高）
佐　藤　正　光（小高工―東北福祉大）
鈴　木　誠（小高工―ブティック店員）

中島TTSの活動

代表　中　島　静

○設立年月　昭和57年4月　若愛クラブ
昭和62年4月　中島TTS（名称変更）

○役員と指導者

総監督　中　島　静
監督（コーチ）　中　島　龍　一
マネージャー　鈴　木　弥　生　薄　文　子
コーチ　関　本　さつき　大　島　和　彦　米　山　貴　之

○構成人員　男　小学生 5名　中学生 2名
女　小学生 3名　中学生 4名

○成　績

福島県卓球選手権大会女子団体ホープスの部で3年連続優勝～昭和58、59、60年
58年　大河原加代子、鈴木　紀子、小林めぐみ、薄　香織
59年　薄　香織、長谷川まり子、薄　香澄、小林　和美
60年　長谷川まり子、薄　香澄、小林　和美、鈴木　直美
シングルス活躍メンバー
田崎　恵、大河原加代子、薄　香織、長谷川まり子、薄　香澄、中島　龍一、物江　真理、物江　真希、久力　亜矢、中島　仁、渡部　諒子、鈴木　未央、大堀美奈子、角田　大樹

○クラブのモットー　一球入魂

○年間の予算

年　会　費	3千円×14名×12月＝54万円
強化練習会	5千円×14名×6回＝　42万円
各種大会費	3千円×14名×10回＝42万円
遠　征　費	1万円×14名×4回＝　56万円
合　計	194万円

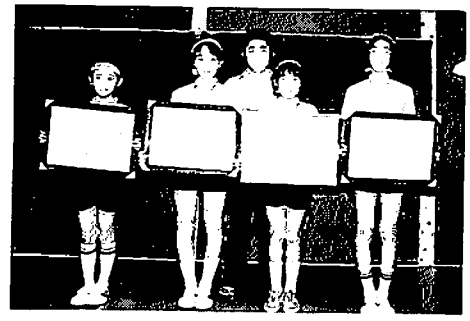
○今後の抱負

JAPAN・CHAMPIONをつくりたい。

○事務局所在地 FAX 969－6573

河沼郡会津坂下町大字大沖字大江2335

中　島　　静　　☎・FAX 0242－83－1303



みやた卓球クラブの活動

代表 宮田英夫

1	設立年月日	平成2年10月1日
2	現在の役員	会長　田巻　幸一 会計　玄　恵子 監督　宮田　英夫 コーチ　渡辺　貴史　太田原　保　丹野　哲也 田子　光輝　岡部　和恵
3	活動状況	構成員　男子　佐藤　健介（中2） 佐藤　厚志（中2） 吉田　和真（小6） 馬越佑太郎（小6） 小野　翔平（小6） 後藤　拓也（小6） 田巻　隼一（小1） 女子　馬越　恵子（中1） 田巻　翔子（小5） 玄　祥子（小5） 三浦　梨紗（小5） 石井加緒里（小5） 新妻由季子（小5） 新妻未佳子（小4）
4	活動内容	練習日　週3回～4回
	大会参加	県ホープス大会 県強化リーグ大会・その他
5	クラブのモットー	創意・工夫・努力
6	年間予算額	30万円（大会参加費・交通費は個人負担）
7	今後の抱負	ライバルチームとして意識してもらえるよう努力
8	事務局所在地	〒970-8026 いわき市平字作町一丁目2－2 神田ビル201号 ☎0246－22－0131

勿来卓球クラブの活動

代 表　三　瓶　清　次

○団体名称　勿来卓球クラブ（スポーツ少年団）
○代 表 者　三瓶　清次
○設　　立　平成5年9月
○指 導 者　三瓶　清次　三瓶ミツエ　落合　勝彦　渡辺　和奈
○役　　員　スポーツ少年団のため保護者会の役員組織あり
○構成人員　小学女子8人　中学女子7人　計15人
○過去の成績　主なもの（福島県大会）

平成8，9年総合体育大会小学団体　1位
平成9年ホープス団体　1位
ホープス以下の部個人戦　1位　数回

福島県内の大会では、そのほかにも小学生、中学生の部で優勝や上位入賞はいくつかある。ただし、県外の大会で成績を残した選手は出ていない。

○活動計画　週4日の練習（各2時間）
各種大会への積極参加
○年間予算　クラブ員1人1,000円／月としボール代その他
○今後の抱負

スポーツで戦うには「勝ち」を意識しなければならない。そのためには、技術、体力、精神力を鍛え、強くならなければ。これまでは、県内ではある程度通用できるレベルまで育てることができたが、次のステップとして、もう一つ上の大会で活躍できる選手を育てることを目標としている。強くなれば、多くの人と交流し友情の輪が広がっていく。

子供たちと一緒に「夢」を追ってみたい。

○事 務 局　979－0142
いわき市勿来町酒井字酒井原66－2
三瓶　清次
電話　0246－65－4717

古殿町卓球スポーツ少年団の活動

古殿町役場　鈴　木　良　一

○代 表 者　本部長　鈴木　良一
○設立年月　昭和51年4月
○指 導 者　監　督　菅生　昌広
コーチ　矢内　伸一　本郷　正信　山本　勝
○活動状況
団 員 数　小、中学生30名

団員相互の親睦と自己研鑽に努めると共に、各種大会に参加し友情を深める。団員の卓球技術の向上は勿論のこと、団員の健全育成のため、各種事業を開催している。特に、発足と同時に開催している「ふるどの小中学生卓球大会」は、毎年多くの参加があり、県内の卓球技術の向上と友好に多いに貢献しているものと自負している。県内のみならず、東京、栃木、千葉、茨城、山形等県外の参加者も多く、県内の参加者と共に交流を図っている。卓球技術の交流と共に団員の家での民泊を通じ、心の交流を図っている。

○成　　績

県大会を始め、東北大会、全国大会に参加、第1回全国スポーツ少年団大会では、第3位に入賞した。中体連全国大会個人16位入賞、東北大会個人優勝（渡辺厚子）、団体女子　準優勝、団体男子 3位（2回）がある。

スポーツ少年団終了者が高体連等で活躍した。

鈴木誠一（平工）我妻利真、最上幸夫（湘南工大付）吉田真久、渡辺家伸（学法石川）渡辺厚子（武蔵野）山本　勝、窪木清彦（学法石川）三瓶直美（日立明秀）

○今後の抱負

団員の健全育成は勿論のこと、他団体との交流を深め、一人の人間として立派に成長すること。

○事 務 局

石川郡古殿町大字松川字新桑原31

古殿町役場内　　矢内　伸一

富久山卓球クラブの活動

代 表　深　谷　秀　三

富久山卓球クラブの発足は昭和63年で、今年で12年目になる。この間、たくさんの子供たちが入会し去って行った。発足の願いは、郡山市や県中地区から県を代表して活躍できる選手を育てたいということであった。趣味で卓球をしていた者が、自分の子ども以外の子どもを教えるということは、責任重大である。毎日が試行錯誤の繰り返しであったが、自宅に卓球場のある強みで、毎日練習できることを最大の武器に現在に至っている。現在は、小中高校生がほぼ同数ずついるので、一貫した指導ができるようになり、ある程度の成績が残せるようになった。今までの成績で印象に残るものを上げていく。

全日本クラブ卓球選手権大会

男子優勝2回

平成6年　　渡辺　和幸、隆司、芳博の三兄弟

平成10年　　渡辺　芳博、大和田直樹、松岡　達也

女子優勝2回

平成4年　　菊地　弓子、今福　　愛、荒井　沙織

平成9年　　荒井　沙織、五十川芙美、柏原　亜紀

女子個人戦　　平成8年　3位　今福　麻美

全国スポーツ少年団卓球交流大会

団体　　平成8年　3位　渡辺　芳博、大和田直樹、柏原　裕治、五十川芙美、高橋　祥絵

個人　　平成5年　男子2位　　渡辺　和幸

女子5位　　根本恵美子

平成7年　　優勝　　渡辺　隆司

2位　　今福　　豊

平成11年　　優勝　　渡辺　芳博

5位　　大和田直樹

全日本卓球選手権大会（カデットの部）

女子ダブルス　平成9年 2位　五十川芙美・高橋祥絵組

北日本ホープス卓球選手権大会

団体　男子3位　樫村　健太、松岡　達也、根本　岳、木村　裕樹

中体連、高体連の個人戦における優勝者

中体連シングルス優勝者	深谷　亮幸、深谷　純子、今福　愛、玉木　尚子、玉木　杏子、大和田直樹
高体連シングルス優勝者	深谷　亮幸、今福　豊、深谷　純子、菊地　弓子、玉木　尚子、五十川芙美
ダブルス優勝者	渡辺　和幸・横田　敬春、横田　敬春・渡辺　隆司、今福　豊・渡辺　隆司、根本恵美子・山木　成愛、玉木　尚子・荒井　沙織 大和田ゆかり・美野佐知子
高校新人シングルス優勝者	深谷　純子、岩崎　力、菊地　弓子、渡辺　隆司、今福　豊、玉木　尚子、荒井　沙織
ダブルス優勝者	深谷　純子・小川　音々、根本恵美子・山木　成愛、横田　尊春・横田　敬春、横田　尊春・今福　豊、渡辺　隆司・今福　豊、佐藤　友美・安斎　由美

など多数の選手を数えることができる。まだ、発展途上なので、これからも精進していきたい。

第2部　福島県卓球協会設立70周年記念事業

第1節　記念事業実行委員会の設置と活動 …… 155

第2節　記念事業の概要 …… 160

第1節　記念事業実行委員会の設置と活動

1．実行委員会の活動経過

～福島県卓球協会70年史編纂委員会～

福島県卓球協会史の編纂が長年の懸案であったが、平成9年1月に開催された定例理事会において、西郷会長から平成11年には当協会が設立70周年を迎えることから、「70年史」の編纂・刊行について検討してはどうか、という提案があり協議の結果、「編纂委員会」を設置して「70年史」の編纂計画を企画することになった。

平成9年6月11日（郡山総合体育館）第1回福島県卓球協会70年史編纂委員会（以下編纂委員会という）を開催し、委員長には顧問の宇賀神喜嗣、副委員長には名誉会長の三浦勝美と副会長の深谷秀三及び事務局長 伊東守信を選び、15名の委員から成る編纂委員会がスタートした。

平成9年9月28日（福島体育館）第2回編纂委員会、平成9年11月24日（須賀川アリーナ）第3回編纂委員会の審議を経て、「福島県卓球協会70年史」編纂計画（草案作成：西郷）を成案化し、平成9年12月13日、理事長会の議を経て常任理事会に提案し承認を得た。

～福島県卓球協会70周年記念事業実行委員会～

○平成9年9月28日、第2回編纂委員会において、本協会が平成11年に設立70周年を迎えるに当たって、「協会70年史」を編纂刊行するだけでなく、70年の歴史を歩んできた協会にふさわしい記念事業について検討してはどうかという提案があり、記念事業の推進に向けて事業計画案を作成することになった。

○平成9年11月23日、理事長会議に「福島県卓球協会70周年記念事業の構想と推進計画」（案）を提案（草案作成：西郷）し、承認を得た後、平成9年12月13日開催の常任理事会の協議を経て成案化し、平成10年1月24日開催（飯坂・花水館）の定例理事会においてほぼ原案通り決定した。

『福島県卓球協会設立70周年記念事業の構想と推進計画』

◇福島県卓球協会設立70周年を迎えるにあたり、輝かしい協会発展の歴史を祝うとともに来たるべき21世紀に向けて新たなる飛躍を誓い、なお一層本協会の充実発展と県民スポーツの普及・振興に寄与するため、次の事業を推進する。

〈記念事業〉

1 記念式典の挙行
2 記念祝賀会の開催
3 福島県卓球協会シンボルマーク公募・作成と協会旗の作成
4 記念誌「福島県卓球協会70周年史」の編纂刊行
5 感謝状の贈呈と功労者の表彰

◇記念事業を推進するため、次の専門委員会からなる「福島県卓球協会設立70周年記念事業実行委員会」を設置する。

実行委員会は、本協会の役員の中から選任し構成する。

〈実行委員会役員〉

顧　問	三浦勝美（名誉会長）	副会長	平石家治（副会長）
会　長	西郷徹夫（会　長）	副会長	深谷秀三（副会長）
副会長	二木康視（副会長）	副会長	根本健作（副会長）

〈総務委員会〉

委員長	伊藤秀行（理事長）	委　員	伊藤平男（県南理事長）
副委員長	斎藤一美（副理事長）	委　員	斎藤一美（相双理事長）
委　員	甚野道雄（県北理事長）	委　員	岸　ひろみ（事務局会計）
委　員	荒井孝芳（県中理事長）	委　員	北澤　宏（会津理事長）
委　員	白土正衛（いわき理事長）		

〈式典委員会〉

委員長	二木康視（副会長）	委員	佐藤紀雄（県北理事）
副委員長	甚野道雄（県北理事長）	委員	大藤　務（県北理事）
委員	岸　ひろみ（県北理事）	委員	上石健一（県北理事）

〈事業委員会〉

委員長	平石家治（副会長）	委員	長場壮夫（県南理事）
副委員長	伊藤平男（県南理事長）	委員	武田和久（県南理事）
委員	吉田真久（県南理事）	委員	入谷みちこ（県南理事）

〈協会史編纂委員会〉―― 特別委員会

委員長	宇賀神喜嗣（顧問）	副委員長	深谷秀三（副会長）
副委員長	三浦勝美（名誉会長）	委員	佐藤昭典（顧問）
委員	土屋　弘（顧問）	委員	壁谷之夫（顧問）
委員	松崎俊一（顧問）	事務局長	伊東守信（顧問）
委員	大橋　柾（顧問）	委員	平石家治（副会長）
委員	西郷徹夫（会長）	委員	甚野道雄（県北理事長）
委員	伊藤秀行（理事長）	委員	長場壮夫（県南理事）
委員	渡部長二（高校理事）	委員	菊地敏美（教職理事）
委員	影山　澄（県中理事）		

2．編纂委員会の活動経過

【第1回編纂委員会】

○日　時　平成9年6月11日（水）13：30～

○場　所　郡山市「郡山総合体育館」会議室

○出席者　三浦　勝美　宇賀神喜嗣　松崎　俊一　大橋　柾　西郷　徹夫
伊東　守信　深谷　秀三

○内　容

1　福島県卓球協会70年史編纂委員会の設置について

①　設置の趣旨

②　委員の構成と正副委員長・事務局長の選出

2　㈶日本卓球協会史編纂（加盟団体編）の原稿作成に伴う「福島県卓球協会70年史」の編纂について

3　「福島県卓球協会70年史」の編纂計画について

①　予算について

②　見積概算

③　発刊予定

④　内容の構成

⑤　編纂委員会の開催計画

【第2回編纂委員会】

○日　時　平成9年9月28日（日）10：00～

○場　所　福島市「福島体育館」会議室

○出席者　三浦　勝美　宇賀神喜嗣　壁谷　之夫　大橋　柾　西郷　徹夫
伊東　守信　平石　家治　深谷　秀三　伊藤　秀行　甚野　道雄
長場　壮夫　影山　澄　渡辺　俊雄

○内　容

1　「福島県卓球協会70年史」の編纂計画（案）について（提案：西郷）

① 基本方針　② 内容の構成　③ ページ数・体裁　④ 予算と配布計画
⑤ 業者の選定　⑥ 発刊予定　⑦ 今後の編纂委員会の開催計画

2 執筆担当について

3 記念事業の企画立案と推進について

【第3回編纂委員会】

○日　時　平成9年11月24日（日）10：00～

○場　所　須賀川市「須賀川アリーナ」

○出席者　三浦　勝美　宇賀神喜嗣　壁谷　之夫　大橋　征　松崎　俊一
西郷　徹夫　伊東　守信　平石　家治　深谷　秀三　伊藤　秀行
長場　壮夫　菊地　敏美　影山　澄

○内　容

1 「福島県卓球協会70年史」の編纂計画について

☆前回の確認

① 基本方針　② 内容の構成　③ ページ数・体裁　④ 予算と配布計画
⑤ 業者の選定　⑥ 発刊予定

2 執筆担当とページ数の割り振りについて

① 第1部　福島県卓球協会の活動とあゆみ
② 第2部　福島県卓球協会設立70周年記念事業
③ 第3部　福島県卓球協会各支部の組織と活動
④ 第4部　福島県卓球協会加盟団体の概要
⑤ 第5部　資　料

3 原稿の提出期日について

平成11年3月31日までとする。

【第4回編纂委員会】

○日　時　平成10年8月9日（日）13：30～

○場　所　須賀川市「須賀川体育館」会議室

○出席者　三浦　勝美　宇賀神喜嗣　壁谷　之夫　大橋　征　松崎　俊一
佐藤　昭典　西郷　徹夫　長場　壮夫　菊地　敏美

○内　容

1 「福島県卓球協会70年史」の編集内容の構成と執筆分担について

① 巻頭文　② グラビア　③ 「福島国体」関係写真　④ 座談会
⑤ 特集　第50回「ふくしま国体」
⑥ 第1部　福島県卓球協会の活動とあゆみの年代区分と執筆分担について

2 編纂委員会の今後の日程と進め方について

【第5回編纂委員会】

○日　時　平成11年3月13日（土）10：00～

○場　所　福島市「国体記念体育館」第1研修室

○出席者　三浦　勝美　宇賀神喜嗣　佐藤　昭典　大橋　征　西郷　徹夫
深谷　秀三　伊藤　秀行　渡部　長二　甚野　道雄　長場　壮夫
影山　澄

○内　容

1 「福島県卓球協会70年史」編集計画について

2 座談会の開催計画について（第1部・第2部）

3 「回想」「記念史に寄せて」の編集と執筆について

4 第1部　福島県卓球協会の活動とあゆみの編集について

① 項目の整理　② 執筆担当と役割分担　③ 写真の収集分担

【第6回編纂委員会】

○日　時　平成11年6月12日（土）13：30～

○場　所　郡山市「郡山市西部体育館」会議室

○出席者　三浦　勝美　宇賀神喜嗣　佐藤　昭典　大橋　征　松崎　俊一
西郷　徹夫　深谷　秀三　甚野　道雄　菊地　敏美　影山　澄

○内　容

1 「福島県卓球協会70年史」編集計画について

① 編集作業の役割分担について

◇ 協会編

＊第1部　宇賀神喜嗣　大橋　征　西郷　徹夫　平石　家治　深谷　秀三

・第5節　伊藤　秀行　甚野　道雄

・第6節　西郷　徹夫

＊第2部

・第1節　第2節

＊座談会　第1部　長場　壮夫　第2部　菊地　敏美

＊「回想」　宇賀神喜嗣　西郷　徹夫

＊クラブ・学校・実業団の活動　深谷　秀三

◇ 加盟団体編　大橋　征　西郷　徹夫

◇ 協　会　編　西郷　徹夫

2 第7回編纂委員会の開催について

【第7回編纂委員会】

○日　時　平成11年7月31日（土）10：00～

○場　所　郡山市「郡山中央公民館」

○出席者　土屋　弘　佐藤　昭典　大橋　征　松崎　俊一　壁谷　之夫
西郷　徹夫　平石　家治　伊東　守信　伊藤　秀行　菊地　敏美

○内　容

1 「福島県卓球協会70年史」の編集作業

① 「県協会」の編集　② 「各支部協会編」の編集

③ 「各加盟団体編」の編集　④ 特集「ふくしま国体」の編集

⑤ 「回想」・「記念誌に寄せて」～役員のページ～ の編集

2 第8回編纂委員会の開催について

【第8回編纂委員会】

○日　時　平成11年8月10日（土）10：00～

○場　所　郡山市「郡山市中央公民館」

○出席者　三浦　勝美　土屋　弘　佐藤　昭典　大橋　征　宇賀神喜嗣
壁谷　之夫　西郷　徹夫　平石　家治　伊東　守信　影山　澄
甚野　道雄

○内　容

1 「福島県卓球協会設立70周年記念誌」の編集・校正

2 次回編纂・委員会の開催日程と内容について

3．実行委員会の活動経過

【第1回実行委員会】

○日　時　平成11年4月29日（木）10：00～

○場　所　　福島市「国体記念体育館」第1研修室
○内　容
1　専門委員会 10：20～
☆総務委員会
①　予算について　　②　感謝状贈呈と功労者表彰について　　③　役割分担について
☆式典委員会
①　式典の準備計画について　　②　祝賀会の準備計画について　　③　役割分担について
☆事業委員会
①　シンボルマークの募集について　　②　協会旗の作成について　　③　記念品について
④　役割分担について
☆記念誌編纂委員会
①　編集計画について　　②　座談会の計画について
③　記念誌「70年史」のレイアウトについて　　④　役割分担について
2 総　　会　11：30～
①　各専門委員会からの提出議案について
・予算　・表彰　・式典　・祝賀会　・シンボルマーク　・協会旗　・記念品
・座談会　・記念誌のレイアウト
②　今後の記念事業推進計画について
【第2回実行委員会】
○日　時　　平成11年8月21日（土）13：30～
○場　所　　福島市「福島体育館」
○内　容
1　専門委員会　13：50～
☆総務委員会
①　予算について　　②　感謝状贈呈と功労者表彰候補者について
③　案内状・招待状の発送について　　④　あいさつ・祝辞の依頼について
⑤　感謝状・表彰状・賞状（シンボルマーク）などの筆耕依頼について
⑥　役割分担について
☆式典委員会
①　式典の開催準備計画について　　②　祝賀会の開催準備計画について
③　役割分担について
☆事業委員会
①　シンボルマークについて
・入選作について　　・補作について　　・入選者の表彰について
②　協会旗の作成について
・本部　1旗、支部各1旗　計7旗　　③　記念品の選定について
・ボールペン（1,000円以内）　　・贈呈計画について
④　役割分担について
☆記念誌編纂委員会
①　編集作業計画について
・10月2日（土）10：00～（郡山市中央公民館）
②　記念誌の計画について　　③　役割分担について
2 総　　会
※各専門委員からの提出議案を一括審議
※第3回記念事業実行委員会の開催について

・11月6日（土）9：30～　　・郡山市中央公民館

【第3回実行委員会】

○日　時　　平成11年11月6日（土）10：00～

○場　所　　郡山市「郡山市中央公民館」

○内　容

1　70周年記念事業の準備計画について

①　式典・祝賀会について

②　記念品について

③　感謝状贈呈・功労者表彰候補者について

2　記念誌の編集・原稿・校正・頒布計画について

第2節　記念事業の概要について

本協会の設立70周年記念の事業計画については、実行委員会の設置の項で述べているがその事業は次の通りである。

『記念事業』

1　記念式典　　2　記念祝賀会　　3　シンボルマークの公募作成と協会旗作製

4　記念誌「福島県卓球協会70年史」の編纂刊行　　5　感謝状の贈呈と功労者表彰

記念事業の具体的な内容は、次の通りである。

〈記念式典〉

○日　時　　平成11年12月11日（土）11：00～

○会　場　　福島市「杉妻会館」

～式典次第～

1　開式のことば

2「福島県スポーツの歌」斉唱

3　感謝状贈呈

4　表　　彰

・功労者　　・シンボルマーク入選者

5　あいさつ

・福島県卓球協会長　　西郷　徹夫

6　来賓祝辞

・㈶日本卓球協会長　　飯田　　亮様

・㈶福島県体育協会長　　佐藤栄佐久様

・福島県教育委員会教育長　　杉原　陸夫様

7　祝電披露

8　受賞者代表謝辞

9「若い力」斉唱

10　閉式のことば

〔感謝状の贈呈と功労者表彰〕

本協会の設立７０周年記念式典を挙行するにあたり、永年本協会の発展に尽力された方々に対し、その功績を称えるとともに敬意と謝意をこめて感謝状を贈呈する。

また、本協会の発展と卓球競技の普及振興に貢献した方々を表彰し、その功績を称える。

第2部　福島県卓球協会設立70周年記念事業

第1節　記念事業実行委員会の設置と活動 …… 155

第2節　記念事業の概要 …… 160

・11月6日（土）9：30～　　・郡山市中央公民館

【第3回実行委員会】

○日　時　　平成11年11月6日（土）10：00～

○場　所　　郡山市「郡山市中央公民館」

○内　容

1　70周年記念事業の準備計画について

①　式典・祝賀会について

②　記念品について

③　感謝状贈呈・功労者表彰候補者について

2　記念誌の編集・原稿・校正・頒布計画について

第2節　記念事業の概要について

本協会の設立70周年記念の事業計画については、実行委員会の設置の項で述べているがその事業は次の通りである。

『記念事業』

1　記念式典　　2　記念祝賀会　　3　シンボルマークの公募作成と協会旗作製

4　記念誌「福島県卓球協会70年史」の編纂刊行　　5　感謝状の贈呈と功労者表彰

記念事業の具体的な内容は、次の通りである。

〈記念式典〉

○日　時　　平成11年12月11日（土）11：00～

○会　場　　福島市「杉妻会館」

～式典次第～

1　開式のことば

2　「福島県スポーツの歌」斉唱

3　感謝状贈呈

4　表　　彰

・功労者　　・シンボルマーク入選者

5　あいさつ

・福島県卓球協会長　　西郷　徹夫

6　来賓祝辞

・㈶日本卓球協会長　　飯田　　亮様

・㈶福島県体育協会長　　佐藤栄佐久様

・福島県教育委員会教育長　　杉原　陸夫様

7　祝電披露

8　受賞者代表謝辞

9　「若い力」斉唱

10　閉式のことば

〔感謝状の贈呈と功労者表彰〕

本協会の設立７０周年記念式典を挙行するにあたり、永年本協会の発展に尽力された方々に対し、その功績を称えるとともに敬意と謝意をこめて感謝状を贈呈する。

また、本協会の発展と卓球競技の普及振興に貢献した方々を表彰し、その功績を称える。

「感謝状」

★㈳日本卓球協会感謝状

三浦　勝美（名誉会長）　土屋　弘（顧　問）　宇賀神喜嗣（顧　問）
大橋　柾（顧　問）　佐藤　昭典（顧　問）　伊東　守信（顧　問）

★福島県卓球協会感謝状

信沢　要（顧　問）　壁谷　之夫（顧　問）
松崎　俊一（顧　問）　浜名　秀雄（元　顧問）
斎藤　正雄（元　副会長）　後藤　英子（県家庭婦人連盟名誉会長）
加藤栄治郎（元　県北支部副支部長）　宗像　次男（元　県中支部長）
小幡　次郎（元　県北支部長）　及川　邦夫（元　県南支部長）
相沢　辰男（元　相双支部長）　渡部　洋一（元　県高体連副委員長）
菅野　源吉（元　会計・監査）　渡部　信行（元　会計・監査）
山崎　勲（元　いわき支部理事長）　吉沢　昭夫（元　いわき支部理事長）
雨澤　哲弘（元　いわき支部理事長）　佐久間　直（元　県中支部理事長）
那須　喜明（元　県中支部理事長）　滝沢　昌昭（県南支部長）
横山　廣昭（元　県南支部理事長）　薄井　充良（元　県南支部理事長）
今泉　一二（元　県南支部理事長）　堀川　清光（相双支部長）
小野　哲男（元　県北理事長）　鎌田　尊（元　相双支部理事長）
横山　実（元　相双支部理事長）　平出　雄次（元　会津支部理事長）
千葉　恒夫（元　会津支部理事長）　吉原　清隆（あづま卓球スポーツ少年団）

「功労者」

〈県北支部〉

鴎原　勇（元　県北支部事務局長）　藤沼　賢二（二本松市卓球協会顧問）
安斎　洪基（二本松市卓球協会顧問）　服部　保治（二本松市卓球協会会長）
大波　一明（二本松市卓球協会）

〈県中支部〉

柳田　芳郎（郡山市卓球協会）　猪狩　修一（郡山市卓球協会）
飛田　徹（郡山市卓球協会）　根本　孝司（郡山市卓球協会）
網田　雄治（郡山市卓球協会）

〈県南支部〉

樫村　義照（元　須賀川市卓球協会長）　岡部　良（石川町卓球協会長）
荒明　健二（石川町卓球協会）　鈴木　規之（石川町卓球協会）
鈴木　理平（白河市卓球協会）　堀田　賢治（白河市卓球協会）
北村　武宜（白河卓球協会）

〈会津支部〉

星　善六（会津若松市卓球協会長）　松崎　繁（喜多方市卓球協会長）
水戸　昇（喜多方市卓球協会）　安斎　驟遥（会津若松市卓球協会）
五十嵐久夫（喜多方市卓球協会）　滝口　静枝（会津若松市家庭婦人卓球連盟会長）
岩田　弘（喜多方市卓球協会）　渡部　栄一（喜多方市卓球協会）
小荒井俊雄（喜多方市卓球協会）　外山　義彦（喜多方市卓球協会）
渡部まつ子（喜多方市卓球協会）　田部　幹夫（喜多方市卓球協会）
佐瀬仁之助（喜多方市卓球協会）　小林　義栄（喜多方市卓球協会）
五十嵐修二（喜多方市卓球協会）　佐藤　誠（喜多方市卓球協会）
菊地　正雄（会津若松市卓球協会）　芳賀　善光（会津若松市卓球協会）
佐藤　一（猪苗代町卓球協会）　橋谷田英実（会津若松市卓球協会）

小澤　晶利（会津若松市卓球協会）　　中島　　静（会津若松市卓球協会）

〈相双支部〉

牧野善次郎（元　理事）　　井上　六郎（元　理事）

鎌田　益實（元　理事）　　梅原　　實（元　相馬市卓球協会長）

佐々木政喜（元　相馬市卓球協会理事長）　　横山　芳茂（相馬市卓球協会副会長）

伏見　利博（相馬市卓球協会副会長）　　鈴木　誠一（相馬市卓球協会理事長）

佐原　英夫（相馬市卓球協会）　　小泉　直人（相馬市卓球協会）

高玉　忠利（相馬市卓球協会）　　長谷川幸一（小高卓球協会）

佐藤　春夫（富岡町卓球協会）

〈いわき支部〉

鈴木　理介（いわき卓球協会副会長）　　吉田　　武（いわき卓球協会）

宮田　英夫（いわき卓球協会）　　佐藤トミ子（いわき卓球協会）

佐藤　富弘（いわき卓球協会）　　高荻　光二（いわき卓球協会）

坂本　良弘（いわき卓球協会）　　鈴木　栄喜（いわき卓球協会）

武田喜美男（いわき卓球協会）

【福島県卓球協会設立70周年記念誌の刊行】

これまで、本協会の沿革や支部協会並びに加盟団体の組織・活動の状況等について集大成したものは残念ながらない。

協会設立70周年を迎えたのを機に記念事業のメィーンとして、70周年のあゆみをまとめておこうという気運が高まり、記念誌の編纂・刊行について検討することになった。

平成9年1月に開催された定例理事会において、平成9年6月11日、宇賀神喜嗣を委員長とする17名から成る「福島県卓球協会設立70周年記念誌編纂委員会」をスタートさせ、記念誌の編纂刊行に取り組んだ。

「福島県卓球協会設立70周年記念誌」編纂の概要は次のとおりである。

☆基本方針について

1　福島県卓球協会の70年にわたる足跡を全体的な視野から集大成し、「福島県卓球協会設立70周年記念誌」として編纂・刊行する。

2　福島県卓球協会並びに各支部及び加盟団体の組織活動の状況、役員、功労者、活躍選手を中心に編纂する。

☆内容構成について

巻頭言、グラビア、に続いて

第1部　福島県卓球協会史（第1節～第5節）

活動のあゆみ、歴代役員、組織及び役員構成、全国大会の開催、活躍した選手、功労者

◇座談会（第1部・第2部）

◇特集：第50回「ふくしま国体」

◇特集：第31回　全国身体障害者スポーツ大会「うつくしまふくしま大会」

◇特集：第53’全国高等学校総合体育大会

◇回想

◇記念誌に寄せて～役員のページ

◇各団体の活動

第2部　福島県卓球協会設立70周年記念事業（第1節～第2節）

・実行委員会の設置と活動

・記念事業の概要

第3部　福島県卓球協会各支部の組織と活動（第1節～第6節）

・県北・県中・県南・会津・相双・いわき
第4部　福島県卓球協会加盟団体の概要（第1節～第6節）
・高体連 ・中体連 ・教職員 ・実業団 ・家庭婦人 ・ベテラン会
第5部　資　料
・協会編・加盟団体編
以上の5部構成として、総ページ数257ページ、発刊部数は1,000部である。

福島県卓球協会シンボルマーク

平成11年、本協会設立70周年を記念して公募したもので、喜多方市さつきが丘137にお住まいの渡部真喜子さんの作品です。

図柄は、ふくしま県の「ふ」をモチーフにだれでもが手軽に楽しめる卓球を親しみやすく表現したものです。

【福島県卓球協会シンボルマークの公募】

シンボルマークを持たない協会は、県内でも少なく設立70周年記念事業として公募による作成を実現させようという意見がまとまり、次のような「募集要項」を作成し公募を行った

募集要項の概要は次のとおりである。

○募集作品は、21世紀に向けて卓球競技の普及振興と競技力の向上を担う福島県卓球協会にふさわしい内容であること。

○用紙のサイズは、B5版白紙でデザインの大きさは、10cm × 10cm以内、簡単な説明を入れる。

○一人3点までで、自作、未発表のものに限る。

○入選作1点には、賞状と副賞3万円、佳作3点には、賞状と副賞1万円を送るというもので、広く県民への周知を図るため、福島民報社、福島民友新聞社各紙への掲載を依頼し協力をお願いしたほか、各種大会の開催時に参加募集要項を準備して、参加へ応募を呼びかけた。寄せられた応募作品86点については、平成11年7月18日（日）常任理事会において作品審査を行い決定した。

入選は喜多方市にお住まいの主婦、渡部真喜子さんの作品で、佳作には東京都在住鈴木智子さんと岳陽中学校1年生の角田仁美さんの作品が選ばれた。

【福島県卓球協会旗の作製】

上記で決定したシンボルマークを基に「福島県卓球協会旗」を各支部協会に各1旗（6旗）、県卓球協会本部に1旗の計7旗を作製した。

※単価25,000円×7旗＝175,000円

第3部　福島県卓球協会各支部の組織と活動

第１節　福島県卓球協会県北支部 …… 165

第２節　福島県卓球協会県中支部 …… 169

第３節　福島県卓球協会県南支部 …… 175

第４節　福島県卓球協会会津支部 …… 179

第５節　福島県卓球協会相馬支部 …… 186

第６節　福島県卓球協会いわき支部 …… 202

第1節　福島県卓球協会県北支部

支部長　二　木　康　視

設立年月日：昭和4年12月1日

設立の経過：明治の末期頃から、福島市や当時の飯坂町の子供たちの間でピンポンゲームが流行し、大正時代の末期から昭和の初期にかけて、当時の百七銀行の石川洋爾氏や農工銀行の諸橋氏が卓球を熱心に指導していたのが引き金となって愛好者が多くなり、卓球協会設立の気運が高まり、昭和4年12月1日に目黒宗英氏を会長、田辺栄治郎氏を理事長に選び、発足した。

〈歴代の支部長〉

氏　名	期　間	職業・勤務先
目黒　宗英	昭和4～23	目黒薬局
後藤　寿二	24～42	花月旅館
笹山　進	43～48	緑ケ丘高校
菊地　英作	49～54	東亜栄養化学工業
紺野　政男	55～60	国鉄職員
三浦　勝美	61～平成2年	教員
二木　康視	平成3年～現在	二木商店

〈歴代の理事長〉

氏　名	期　間	職業・勤務先
田辺栄治郎	昭和4～23	東北配電
菱沼　欽二	24～30	郵便局
佐藤利三郎	31～35	福島県庁
笹山　進	36～40	福島女子高校
小幡　次郎	41～44	卓球用品店
小野　哲男	45～48	小野電機
二木　康視	49～平成2年	二木商店
伊藤　秀行	平成3年～7年	東邦銀行
甚野　道雄	平成8年～現在	トーアエイヨー㈱

〈現在の主な役員〉

名誉会長　三浦　勝美（元教員）
支部長　二木　康視（二木商店）
副会長　佐藤　紀雄（福島西高校）・伊藤　秀行（東邦銀行）・岸　ひろみ（主婦）
副理事長　大藤　務（大藤機械）
理事長　甚野　道雄（トーアエイヨー）
事務局長　渡辺　邦彦（アルペンスポーツ）

〈現在まで実施した主な事業・行事〉

平成元年6月：日中交歓卓球大会（福島体育館）

〈現在行っている年間大会名〉

大会名	開始年度	参加人員
全日本卓球選手権予選大会	昭和23年度～	1,000名
北福島オープン卓球選手権大会	昭和43年度～	980名
小・中学生学年別卓球選手権予選大会	昭和48年度～	540名
県北団体卓球選手権大会	昭和49年度～	600名
福島市家庭婦人卓球大会	昭和53年度～	100名

ＴＰＳ杯卓球選手権大会	昭和55年度～	650名
全日本カデットの部予選大会	昭和59年度～	550名
県北ダブルス卓球選手権大会	平成元年度～	400名

〈卓球の普及・発展に貢献した功労者〉

（1）目黒　宗英

福島県卓球協会・福島県卓球協会県北支部初代会長として、長年にわたり卓球の普及・発展に尽力し、卓球会の基盤を築き上げた功労者である。

（2）田辺栄治郎

福島県卓球協会・福島県卓球協会県北支部初代理事長として、組織の充実に努力され昭和初期には、県内一の技術を発揮し、明治神宮大会、その他の全国大会・東北大会では、輝かしい戦績を残し、全国に田辺選手ありと名声を上げ、長年にわたり本県卓球の普及・発展に尽力した功労者である。

（3）後藤　寿二

昭和24年に福島県卓球協会・福島県卓球協会県北支部二代目会長に就任し、長年にわたり、本県卓球の発展に尽力し、これらの功績により福島県体育功労賞を受賞した。又、日本卓球協会より功労賞（金賞）を受賞するという栄誉に輝いた功労者である。

又、卓球一家として、長女文子、次女昭子、三女英子、長男金治の４人の子供を卓球選手として育て上げ、全日本の大会で輝かしい成績を挙げ、特に三女英子は、世界選手権大会に日本代表として出場し、優勝を果たした。

尚、故高松宮殿下とは卓球を通してのご高誼を賜り、幾度となく旅館「花月」に、ご宿泊の栄に浴した。

〈各種受賞者〉

年　度	氏　名	受賞名称
昭和25年度	後藤　寿二	福島県体育功労賞
昭和25年度	後藤　寿二	日本卓球協会功労賞（金賞）
昭和33年度	笹山　　進	福島市体育功労賞
昭和40年度	笹山　　進	福島県体育功労賞
昭和39年度	斎藤　正雄	福島市体育功労賞
昭和59年度	甚野　道雄	福島市体育協会優秀指導者賞
昭和62年度	甚野　道雄	福島県体育協会優秀指導者賞
平成３年	吉原　清隆	福島市体育協会優秀指導者賞
平成３年	菅野　平吉	福島県卓球協会協会優秀指導者賞
平成３年	吉原　清隆	福島県体育協会優秀指導者賞
平成３年	岸　ひろみ	福島市体育功労賞
平成４年	柴田　広道	福島市体育協会優秀指導者賞
平成４年	二木　康視	東北卓球協会功労賞
平成10年	三浦　勝美	文部大臣表彰

〈国際大会で活躍した選手〉

選手名	大　　会	年度	開催地	出場種目	成績	備　考
後藤　英子	第21回世界選手権大会	昭和29年	ロンドン	ダブルス	優　勝	福女出身
後藤　英子	国際卓球選手権大会	昭和29年	ドイツ	ﾐｯｸｽﾀﾞﾌﾞﾙｽ	優　勝	福女出身
渡辺恵美子	アジア卓球選手権大会	昭和45年	日本（名古屋）	ダブルス	第８位	成蹊出身
渡辺恵美子	アジア卓球選手権大会	昭和45年	日本（名古屋）	ﾐｯｸｽﾀﾞﾌﾞﾙｽ	第８位	成蹊出身

〈明治神宮大会で活躍した選手〉

回	年度	開催地	選手名	(所属)	出場種目	成績
10	昭和14年	東京都	田辺栄治郎	(東北配電)	男子シングルス	第4位

〈国民体育大会で活躍した選手〉

回	年度	開催地	選手名	(所属)	出場種目	成績
54	平成7年	福島県	伊藤恵美子	(千本松毛晒)	成年女子2部	第1位
54	平成7年	福島県	東條　由美	(福島市役所)	成年女子2部	第1位

〈全国大会で活躍した選手・チーム〉

年度	開催地	大会名	選手名 (所属・チーム)	出場種目	成績
昭和28年	函館市	全日本軟式卓球選手権大会	後藤英子 (福女出身)	女子単・混複	優勝
昭和28年	東京都	全日本卓球選手権大会	後藤英子 (福女出身)	混合複	優勝
昭和29年	東京都	全日本卓球選手権大会	後藤英子 (福女出身)	混合複	優勝
昭和44年	東京都	全日本社会人卓球選手権大会	渡辺恵美子(成蹊女高出身)	女子単	優勝
平成2年	長野県	全日本クラブ卓球選手権大会	あづま卓球スポーツ少年団	女子4部	優勝
平成3年	千葉県	地球ジュニア卓球大会	遊佐充裕(あづま卓球スポ少)	男子ホープスAクラス	優勝
平成3年	千葉県	地球ジュニア卓球大会	岡田晶子(あづま卓球スポ少)	女子カデットAクラス	優勝
平成4年	福島県	全日本クラブ卓球選手権大会	福卓会	男子1部	優勝
平成5年	静岡県	第15回全国スポーツ少年団卓球交流大会	遊佐充裕(あづま卓球スポ少)	男子個人戦	優勝
平成8年	福岡県	全日本クラブ卓球選手権大会	福卓会	男子1部	優勝

〈三浦卓球クラブ〉 —12年間のあゆみ—

年月	場所	大会名	成績	選手名
S・62・11	北九州	バンビ女子 (小2以下)	優勝	高橋美貴江 (平石小2)
		カブ女子 (小4以下)	優勝	藤田　由希 (北　小4)
H・元・8	東京	全国ホープス卓球大会	優勝	根本　喜子 (平石小5)
				藤田　小夜 (北　小2)
元・11	岐阜	全日本卓球選手権大会ホープス女子 (小6以下)	優勝	藤田　由希 (北　小6)
元・12	ニューデリー	第4回アジアジュニア卓球選手権大会ホープス女子	優勝	藤田　由希 (北　小6)
2・9	旭川	全日本卓球選手権大会カデット女子 (13才以下)	優勝	藤田　由希 (松一中1)
3・5	千葉	地球ジュニアカデット女子	優勝	藤田　由希 (松一中2)
3・7	長野	第10回全日本クラブ卓球選手権大会	優勝	高橋美貴江 (平石小6)
				藤田　小夜 (北　小4)
4・8	盛岡	東北中学校卓球大会女子シングルス	優勝	藤田　由希 (松一中3)
4・8	松本	全国中学校卓球大会女子シングルス	優勝	藤田　由希 (松一中3)
4・9	姫路	全日本卓球選手権大会バンビ女子	優勝	今福　久美 (岳下小2)
5・3	静岡焼津	全国スポーツ少年団卓球交流大会女子シングルス	優勝	藤田　由希 (松一中3)
5・5	フランス	フランスユースオープン大会女子ダブルス	優勝	藤田　由希 (安達高1)
5・6	喜多方	東北高校卓球選手権大会女子シングルス		

			優勝	藤田　由希（安達高1）
5・7	長　岡	第12回全日本クラブ卓球選手権大会女子4部		
			優勝	三浦卓球クラブA
				藤田　由希（安達高1）
				高橋美貴江（松二中2）
				今福　久美（岳下小3）
6・1	ｺﾍﾟﾝﾊｰｹﾞﾝ	デンマークジュニア・オープン女子シングルス		
			優勝	藤田　由希（安達高1）
6・7	静　岡	第13回全日本クラブ卓球選手権大会女子4部		
			優勝	三浦卓球クラブA
				藤田　由希（安達高2）
				藤田　小夜（松一中1）
				今福　久美（岳下小4）
7・6	仙　台	東北高校卓球選手権大会女子ダブルス		
			優勝	藤田　由希（安達高3）
			優勝	高橋美智子（安達高3）
7・8	浜　松	第14回全日本クラブ卓球選手権大会	優勝	高橋美貴江（安達高1）
			(3年連続4回目)	藤田　小夜（松一中2）
				今福　久美（岳下小5）
8・6	盛　岡	東北高校卓球選手権大会女子シングルス		
			優勝	高橋美貴江（安達高2）

〈二本松卓球協会の組織及び活動状況等〉

	氏　名	大会月	大会名等
1．会　長	服部　保治	活動状況	年間の事業（大会・行事・普及教室等）
2．副会長	大藤　　務	5月	安達地方小中学生卓球大会
	佐藤　　茂	7月	市長杯争奪親善卓球大会
3．理事長	丹野　光一	9月	市民体育祭参加卓球大会
4．事務局長	丹野　光一	10月	二本松の菊人形杯卓球大会
5．幹事等	菅谷　孝夫	2月	安達地方卓球選手権大会
	川島　芳夫	11月	中体連新人戦県北大会

年間の予算額（160万）

事務局所在地（連絡先）二本松市表二丁目871－10　丹野 TEL 0243－22－2856

その他（東北・全国で実績を残した指導者・選手）

指導者	選手
三浦勝美	藤田由希
大藤　務	高橋美貴江
武田勇治	高橋美智子
高橋庄一	藤田小夜
桑原要勝	西山亜希子
上石健一	今福久美
渡辺悦子	今福　豊

第2節　福島県卓球協会県中支部

支部長　宗　像　次　男

〈郡山市の卓球〉

1　組　　織

郡山市の歴史をひもといた時、昭和30年代までは、規模の小さい組織であり、大会も少なかった。昭和40年代に、佐久間直が理事長職に就いた時から、本格的な活動が始まったと言える。その時代の会長は、橋本栄一であった。会長は、その後、宗像次男に代わり、現在に至っている。理事長は、深谷秀三、那須喜明、荒井孝芳と続き現在に至っている。

平成10年の組織は以下のとおりである。

顧　問	宇賀神喜嗣	松崎　俊一	佐久間　直	壁谷　之夫	
会　長	宗像　次男				
副会長	深谷　秀三	猪狩　修一			
理事長	荒井　孝芳				
副理事長	荒木　久勝	向井　隆一			
会　計	大和田元一				
監　査	国分　利雄	影山　　澄			
理　事	那須　喜明	根本　孝司	佐藤　敏夫	熊谷　勝明	菊地　敏美
	渡辺　和博	飛田　　徹	玉木志代子	荒井　祐子	太田　範子
	寺西　礼子	大竹　政行	相原　　健	石橋　　勉	柳沼　清正
	深谷　純子	今福　麻美	斎藤　光則	根本　裕子	

2　郡山市独自の卓球大会

郡山市卓球協会は、県大会につながらない協会独自の大会を多数行っている。

(1) 郡山卓球選手権大会

この大会は、昭和45年頃に第1回大会が行われ、年3回ペースで大会を実施し、平成11年4月に第82回大会を開催した。

(2) 中通り卓球選手権大会

中通りの中高校生の競技力向上を目指して昭和44年に始められた。1月の第1日曜日を開催のめどにしている。31回を数えた。

(3) 南東北卓球選手権大会

郡山市の卓球発展に尽力された宇賀神喜嗣、宗像次男の両名が高校教諭を退官されるのを記念して創設された。現在は、小中学生の団体戦を3月末の土日を利用して開催している。平成10年3月で17回を数える。

(4) NHK杯卓球フェアダブルス大会

全国教職員卓球選手権大会の開催をきっかけにNHKと共催の下にダブルス大会を実施9年になる。

(5) バタフライダブルス大会

㈱タマスの協賛をいただき、ダブルスの普及を目指して毎年12月に開催し9年目になる。

(6) サンフレッシュ郡山卓球選手権大会

勤労者の施設、サンフレッシュ郡山が開館したのを記念し、サンフレッシュ郡山体育館で一般と中学生の団体戦を実施している。

(7) 郡山市民体育祭卓球競技

市民体育祭の一環として、10月の土日2日間をかけてママさんの部、ラージボールの部を始め

すべての市民が参加できるようにしている。

3　全国大会の開催

郡山市で特筆されるのは、全国大会の開催である。郡山総合体育館という東京体育館のフロア面積に匹敵する施設と役員、審判の動員ができるという組織が確立され、福島県には例を見ない回数の全国大会を開催している。

○第13回全日本社会人卓球選手権大会の開催

昭和54年9月21日～23日　　郡山総合体育館

昭和49年に郡山総合体育館が竣工し、その施設のすばらしさに圧倒されていた当時、体育館長との雑談に卓球も全国大会を開催してはどうかとの勧めもあり、卓球協会にも機運が盛り上がり、開催の運びとなった。県卓球協会の事務局長だった松崎俊一、郡山市卓球協会の理事長だった那須喜明を中心に、大会の準備とともに資金集めに奔走した。福島県にとっては久し振りの全国大会とあって、県卓協あげての準備のかいもあり、マスコミも大きく取り上げ、大成功に終わった。

○第11回全国高等学校選抜卓球大会の開催

昭和59年3月27日～29日　　郡山総合体育館

高体連主催の大会であったが、当時の大橋高体連委員長を中心に、県中地区の高等学校卓球部の顧問及び卓球部員が主力となり運営をした。なお、開催権を代表して、男子は喜多方工業高校、女子は喜多方女子高校が出場した。

○全日本卓球選手権大会（少年の部）の開催

昭和63年11月19日～20日　　郡山総合体育館

昭和61年から少年の部は、東京の全日本卓球選手権大会から分離され地方開催となり、三重県伊勢市で開催された。これに娘が出場し引率した常任理事の深谷秀三は、その観客の多さに驚いた。監督や応援の父母で観覧席が満杯なのである。小中学生の励みにもなり、地元開催で選手が多く出場できるこの大会の福島県開催を強く要望した。その結果、2年後の大会誘致に成功した。先程の深谷と理事長の荒井孝芳を中心に準備、運営に尽力した。全国から多数の出場者が来県。盛り上がりの多い大会になった。

○第35回全日本教職員卓球選手権大会の開催

平成2年8月5日～8日　　郡山総合体育館

少年の部の大会開催の2年後の、教職員の全国大会が開催された。教職員の全国大会は、インターハイの全国大会を実施する近県で行うことが原則になっている。平成2年のインターハイは、宮城県で実施されるため、候補地は、岩手、山形、福島の3県であった。決め手は、同じ日程で開催される仙台七夕祭りに行きやすいところということになり、福島県に決定したいきさつがある。伊東守信県教職員卓球協会長のもと理事長の菊地敏美、高体連委員長の渡部長二、郡山市卓球協会理事長の荒井孝芳、それに深谷秀三が中心となり、大会の準備運営に当たった。郡山会館での前夜祭も思い出に残る。

○第11回全日本クラブ卓球選手権大会の開催

平成4年7月31日～8月2日　　郡山総合体育館

2年ごとに3つの全国大会を引き受けた郡山市にとって、また2年後に全国大会を開催するとは夢にも思わなかった。全日本クラブ卓球選手権大会は規模も拡大し、大会を開催する場所が決定せず、大会中止やむなしの声が日本卓球協会からでていた。福島県はクラブ大会への出場チームも多く、平成7年に国体が開催されることから、どうしても引き受けてほしいと懇願された。このため、引き受ける条件として、国体開催の県南地区と合同での運営なら引き受けることにした。大会準備は、理事長の荒井孝芳を中心に影山澄、荒井祐子、深谷秀三が担当した。会場は郡山総合体育館が県中地区、郡山西部体育館が県南地区が担当した。開会式は、郡山市の花火大会の日であり、前夜祭は花火を見物しながら行った。なお、女子4部で地元の富久山卓球クラブが初優勝した。

4 選手の活躍

県中地区の選手の活躍は、それぞれの時代の名監督によってすばらしいものがある。それぞれの種別での活躍をたどってみたい。

(1) 小学生

小学生の県、全国レベルの大会は、少年の部の小学生以下の部、団体のホープス大会、スポーツ少年団の県大会、全国交流大会があげられる。小学生で活動があるのは、安積地区、小原田地区、大槻地区などである。広域クラブとして活動しているのが富久山卓球クラブ、本宮卓球クラブがある。中でも、富久山卓球クラブは、県大会、全国大会でも数多くの入賞をしている。全国スポーツ少年団卓球交流大会では、小学生のみの団体戦になってから7年目になるが、そのうち福島県を代表して6度の出場を数え、平成8年の伊勢市での18回大会では、渡辺芳博、大和田直樹、柏原裕治、五十川芙美、高橋祥絵のメンバーで見事3位に入賞している。また、平成10年度の北日本ホープス卓球大会では、樫村健太、松岡達也、根本岳、木村裕樹のメンバーで3位に入賞した。

(2) 中学生

中学生は、中体連の県、東北、全国大会を中心に、活躍した選手を紹介していく。中体連県大会は、平成10年度で41回を数える。男子団体は、昭和44年の郡山五中の優勝がただ1回である。それまで、郡山一中、郡山二中、郡山三中、日和田中などがベスト4に入賞しているものの優勝1回は少し寂しい。女子団体は、昭和39年の船引中が壁谷之夫監督の指導により優勝したのが輝いている。郡山ザベリオ学園中が荒木久勝の指導の下に初入賞したのが昭和53年である。そして、初優勝が10年後の昭和63年であり、現在まで5回の優勝を数える名門校に名を連ねるようになった。個人戦では、男子は、個人戦が加えられた昭和36年の第1回大会で鈴木秀治（郡山三中）が優勝して以来、昭和60年の第28回大会で優勝した深谷亮幸（行健中）の2人しかいない。女子も、昭和62年、63年の連続優勝の深谷純子（ザベリオ中）と平成7年第38回大会の玉木尚子（行健中）の2人を数えるだけである。

東北大会は、昭和63年に深谷純子がシングルスに優勝、そして、10年後の平成8年にザベリオ中が優勝したのが歴史にあるのみである。全国大会になると、道はもっと厳しくなるが、ザベリオ中が団体に4回出場しているのが記録に残っている。個人戦は、深谷純子、玉木尚子、五十川芙美（ザベリオ中）の3名が、ベスト16にすすんだのが最高の成績である。

全日本卓球選手県大会（カデットの部）では、平成9年に女子ダブルスで五十川芙美・高橋祥絵組（富久山卓球クラブ）が準優勝。全国スポーツ少年団卓球交流大会では、平成5年第15回大会、中学生男子シングルスで、渡辺和幸（富久山卓球スポ少）が準優勝、平成8年第18回大会で、渡辺隆司と今福豊（いずれも富久山卓球スポ少）が決勝を争い、渡辺隆司が優勝した。そして、渡辺三兄弟の三番目の渡辺芳博（富久山卓球スポ少）が、平成11年第21回大会でシングルスに優勝するという快挙を成し遂げている。

(3) 高校生

高校生も、高体連の県、東北、全国大会を中心に、活躍した選手を紹介していく。男子学校対抗は、昭和33年、昭和42年、昭和47年の3回に渡って郡山商業高校の優勝が光る。特に、昭和47年は、ダブルスで佐藤光昭・横山俊秀組、シングルスで佐藤光昭が優勝し三冠王を達成した。当時の根本孝司コーチの指導が記憶に残る。その23年後の平成7年に熊谷勝明が率いる帝京安積高が初優勝し、平成11年まで5年連続優勝している。女子学校対抗は、宇賀神喜嗣が指導する郡山女子高が、昭和45年に初優勝し、その後校名を郡山女子高から郡山東高に変えて2年目の平成11年2度目の優勝を飾った。平成3年には尚志高も優勝している。男子シングルスは、前述の佐藤光昭の次は、深谷亮幸（安積高）が昭和63年に、平成10年に今福豊（帝京安積高）が三冠王となり、平成11年に佐藤久也（帝京安積高）が郡山地区からの4人目のチャンピオンになった。女子シングルスは、昭和38年に吉田マサ子（郡山女子高）、昭和39年に三瓶利子（郡山女子校）、昭和45年に佐藤ふみ子（郡山女子高）が優勝、その20年後に深谷純子（安積女子高）が平成2年、

3年と連続優勝し、平成4年、5年は、菊地弓子（尚志高）も連続優勝した。平成10年には玉木尚子（郡山東高）、平成11年には五十川芙美（安積女子高）が1年生ながら優勝している。男子ダブルスは、昭和39年に佐藤英幸・坂本正則組（郡山商業高）昭和47年に佐藤光昭・横山俊秀組（郡山商業高）が勝っている。昭和61年には、ノーシードの壁谷卓・黒森伸夫組（安積高）が優勝しあっといわせた。平成6年から10年までの5年間は帝京安積高ペアの優勝で、渡辺兄弟が5年連続で優勝にかかわっている。平成6年渡辺和幸・中島仁組、平成7年渡辺和幸・横田敬春組、平成8年横田敬春・渡辺隆司組、平成9年横田敬春・渡辺隆司組、平成10年渡辺隆司・今福豊組となっている。女子ダブルスは、昭和47年に太田範子・増田淳子組（安積女子高）が郡山勢としては初めての優勝、ついで、昭和55年に網田雄治が指導する日本女子工業高の安藤ひとみ・志賀豊子組が優勝する。平成7年には根本恵美子・山木成愛組（郡山女子高）、平成10年に玉木尚子・荒井沙織組（郡山東高）、平成11年には大和田ゆかり・美野佐知子組（郡山東高）が優勝している。

東北大会では、昭和24年の第3回大会で郡山女子高が学校対抗で優勝、女子ダブルスは秋澤静江・大原芳枝、女子シングルスでは、秋澤静江（郡山女高）が優勝している。男子は、平成8年に帝京安積高が初優勝し、ダブルスでは同じく横田敬春・渡辺隆司組が優勝している。全国大会は、平成10年に帝京安積高が学校対抗で3位、ダブルスで渡辺隆司・今福豊組が3位、シングルスで渡辺隆司、今福豊がともにベスト8に入賞という快挙を成し遂げている。平成7年のふくしま国体の少年男子では渡辺和幸が3位、根本恵美子が少年女子でベスト8に入賞している。

(4) 一　般

大学生、一般の活躍いついては、県総体での活躍を中心にあげていく。一般硬式男子では昭和45年に深谷秀三が優勝したのが初めてで、昭和47年と49年に中村豊が優勝したのみである。一般硬式女子は昭和29年に秋澤静江の次は、昭和60年と昭和62年に増田淳子が、そして、平成4年、平成5年、平成7年に深谷純子が優勝している。壮年男子は、昭和40年と昭和43年に山本栄三、昭和47年と昭和49年に大野敬が優勝している。壮年女子は、昭和43年から3年連続西本和子、昭和46年と平成10年に玉木志代子が優勝。一般男子2部では、平成7年に相原健、一般女子2部では、平成5年、平成8年、平成9年、平成10年と根本裕子が4回優勝を飾っている。教職員の深谷秀三が19回優勝している。平成7年、8年の国体では、深谷亮幸が2度にわたり福島県代表としてベスト8に入賞している。

(5) クラブ

郡山市には、郡山卓球クラブ、LLC、石渡会、郡山市役所、ママさんのKYレディス、コスモスクラブ、桑野クラブ、安積クラブなどが活躍している。中でも富久山卓球クラブの全国大会制覇について紹介する。全日本クラブ卓球選手権大会での初優勝は平成2年の第9回大会の女子4部は、あづま卓球スポ少で出場しているが、陣容は富久山卓球クラブの深谷純子と山木静香が主力メンバーであった。その後、第11回の地元郡山大会では、富久山卓球クラブという名称で出場した最初の大会である。女子4部は、菊地弓子、今福愛、荒井沙織のメンバーで激戦を制して初優勝を飾った。平成9年は、荒井沙織、五十川芙美、柏原亜紀で2度目の優勝を飾っている。一方男子の4部では、初優勝が平成6年の静岡大会で、渡辺和幸、渡辺隆司、渡辺芳博の三兄弟で初優勝しており、2回目は、平成10年長野県のエムウェーブでの会場で、渡辺芳博、大和田直樹、松岡達也のメンバーで優勝し、今日にいたっている。

〈田村郡船引町でのこと〉

船引町卓球協会会長　**壁　谷　之　夫**

私が教師になって、始めて赴任したのが、移中学校、卓球台は、宿直室のわきに、雨ざらしだった。とてもがっかりしたのを今も脳裏にひらめく。この学校に2年、次に瀬川中に8年、その次に船引中、何とか生徒を強くしたい、それには生徒に多くの試合を経験させたい、郡山市の大会には金がかかるし、レベルが違う。そこで協会を作ることを考え、知人友人、町内の中学の卓球の顧問を集めて、船引町卓球協会を作った。我が町には柔剣道、野球の3協会したなかったので、四番目になり、町からも補助金を少し戴けることになり、早速協会主催の大会を開催したいが、会場と、卓球台を運ぶのは大変だった。当時は卓球台を運ぶのはリヤカーであるから、年3回の予定だが1回の開催がやっとだった。協会が昭和37年9月に発足し、10年位過ぎ大部各学校にも、台が購入され、大会を開催するのも楽になった。

この大会があり、その恩恵を受けた選手も大部あるようだ。

田村郡卓球協会　－設立－　　会長　壁　谷　之　夫

船引町にやっと協会が出来て大部過ぎるが、田村郡の卓球レベルを上げる為、郡の協会を作る話を各町村の知人に話をしたところ、皆さん心よく集まってくれた。船引卓球協会ができて約20年になるのである。

◎田村郡は、1村、6町の7ヶ町村です。

都路村・小野町・滝根町・大越町・常葉町・船引町・三春町

○昭和55年3月1日、三春町商工会館で、田村郡卓球協会の設立総会を開催した。

○田村郡卓球協会の設立記念・第一回田村郡親善卓球大会を大越町体育館で開催する。

昭和55年3月9日（日）

成績	男子団体	1位	滝根	2位	船引
	女子団体	1位	小野	2位	大越

◎船引町卓球協会の活動状況

船引町は一町・七ヶ村が合併して出来た町で、現在県内では二番目の大きさの町なので、中学校が5校、小学校が13校あり、年に4回の大会を開催している。内容は、小学の部、中学の部、高校の部、一般の部に分けて実施している。

特に力を入れているのは、毎年2月の最後の日曜日には、新春卓球大会と卓球教室を開催している。日程は、最初に、簡単なルールの説明、中学、一般には日本卓球ルール細則を中心に新ルールの説明、続いて小、中学に分けて基本の実技の指導を行ってから、模範試合を見せて、11時頃から普通の試合をさせるのである。

この卓球教室も本年で21回目になった。

勿論、この卓球教室は、船引だけでは出来ないので、県中の役員、特に、深谷先生、荒井県中理事長、ザベリオ中の荒木先生、その他の役員等の応援を得て、実施しています。

ただこの2月は、とても寒くて、指導していただく方に申訳なく思っています。でもその、おかげで、田村郡のレベルも大部良くなったと、私は思っています。そしてこの大会は、県中の行事にも入れて貰っているのです。

◎田村郡卓球協会の活動

田村郡の協会は、今年で20年になったわけで毎年の行事も、年に3回、春に、社会人卓球大会、夏には、県民スポーツ県中地域大会の予選大会、冬に、町村対抗親善卓球大会の3回を行って来たが、どうも若い人が居なくて、年々参加人数が少なくなっているのが、残念である。

そこで、魅力的なものはないかと考え、福島国体記念、田村郡卓球選手権大会を11月に開催したところ、めずらしくてか、第3回迄は大変良かったが、昨年は大部参加者が少なかった。本年、5回大会

はどうか？

又、冬に行う町村対抗親善卓球大会は、個人戦のシングルスを無くし、ダブルスにした。しかもそれをミックスにし、しかも同町村では組ませないで、別町村の男女が組むようにした。これは最初の年は嫌がったが、最近は、和気あいあいでとても好評を得ています。

そして、このミックスの試合で、優勝した組は永久に組めない、と云う規則を作ったので皆喜んでこの大会に出るようになりました。又、試合後、全員で懇親会、これがとても盛り上がってとても楽しいです。

なお、大会は、すべて町村持ち廻りなので懇親会の会場も、毎年違うのも良いようです。

◎船引町卓球協会の中で、新春卓球大会と卓球教室には、田村郡内中学校（16校）にも案内を出してほしいとの要望があり、全校に出し、大会にも参加しているので、田村郡卓球協会に入れるのは良いのかも知れません。

◎福島国体記念、田村郡卓球選手権大会は

・小学の部、男、女 ・一般の部（中学生以上）の二部門で実施しています。最初の第1回大会の時は、一般の人がチャンピオンになりましたが、2回大会は、中学生男子がチャンピオンになりました。

◎どの町村も、卓球人口を増やそうと、各大会を町村持ち廻りにしているのですが、やっぱり差ができて困っています。

郡の協会が発足した当時は、小野町の女性は大変多かったのですが、7年前あたりから大会に出場しなくなり、県民スポーツの予選にも出場しないありさまです。

又、都路も出なかったので、渡辺幸男が、役場に就職したので、彼と話をし、都路で大会を開催したところ、都路から2チームが出場し大盛会だったし、今後も良いなと思っていた所、次の年から出場しなくなりました。

私も、船引の協会長、約40年、田村郡の協会長、20年、本当に人集めのむずかしさを、毎年痛感しています。

でも、私が止めたら誰がやる、といつも考え、老兵にムチ打ち、頑張っています。

これからも頑張るつもりです。

◎田村郡卓球協会に、自分の町村の協会の為に、選手や役員として活躍している人は、次の通りです。

○三春町　佐久間眞、黒羽キミエ、大内秀夫、影山節子

○船引町　村越崇行、佐藤安次郎、大山巧（郡事務局）林守、佐久間好浩、斎藤武、佐藤アヤ子、飛田和広、小林文子、菊地久子

○常葉町　浦山正一、渡辺信一、吉田哲夫

○大越町　松崎一男

○滝根町　渡辺行雄、高橋道隆、猪狩精一

○田村郡出身者で、全国大会に出場した者

渡辺　幸男　林　守　斎藤　博　佐藤　好則　壁谷　卓

佐藤　洋子　小林　文子

◎渡　辺　幸　男（S32.7.19生）　都路二中→田村高校

昭和48年	全日本ジュニア県予選	シングルス3位（高校1年）
	県高校新人戦	シングルス1位（高校1年）
昭和49年	高校総体予選	シングルス1位（高校2年）
	県総合体育大会	シングルス2位（高校2年）
	全日本ジュニア県予選	シングルス2位（高校2年）
	県高校新人戦	シングルス2位（高校2年）
昭和50年	県総合体育大会	シングルス3位（高校3年）

◎林　守（S32.9.22生）　船引中→船引高校

◎斎　藤　博（S32.8.14生）　瀬川中→船引高校

昭和50年　県総合体育大会　ダブルス　2位（高校3年）
◎佐　藤　好　則（S34.2.11生）　船引中→船引高校
昭和51年　高校総体県予選　シングルス3位（高校3年）
県総合体育大会　シングルス3位（高校3年）
昭和53年　全日本軟式（高松市）　シングルス・混合ダブルス出場　1回戦敗退
昭和54年　全日本軟式（秋田市）　シングルス・ダブルス出場　1回戦敗退
全日本県予選　ダブルス2位
昭和55年　全国社会人選手権（郡山市）　ダブルス出場　1回戦敗退
◎壁　谷　　卓　　船引中－安積高
昭和61年　県高校総体予選　ダブルス優勝→山口の全国大会に出場
◎佐　藤　洋　子　　瀬川中→田村高
◎小　林　文　子　　船引中→船引高、卒業して神奈川県に就職、神奈川県代表で国体に出場

第3節　福島県卓球協会県南支部

〈須賀川卓球協会のあゆみ〉

支部長　滝　沢　昌　昭

1．須賀川卓球協会設立について

戦前戦後の社会情勢の不安など混乱期が長く続いたため、現須賀川卓球協会の前身であった卓球愛好者の活動も一時中断されており有名無実の状態であった。昭和23年頃から中学校、高等学校などに他の競技団体にさきがけ卓球部が創設され、年を追う毎に活発な活動状況がみられるようになった。こうした状況のなかにあって当時須賀川市立第一中学校の教諭であった高久田大一郎氏（故人）並びに福島県卓球協会の役員を努められ、戦前福島県軟式卓球選手権保持者であった井上安正氏（故人）が、昭和24年に飯坂町から須賀川に移住されたのを機会に須賀川卓球愛好者をはじめ、中学生、高校生の指導に連日あたられており卓球関係者から感謝されたものである。

卓球熱が盛んになるに伴い関係者の間で須賀川卓球協会設立の気運が非常に強くなってきたのを契機に高久田大一郎、井上安正、安藤博、加藤秀男、及川邦夫、滝沢昌昭の各氏が発起人となり昭和27年3月須賀川卓球協会設立の趣旨、事業計画、予算等について予め賛同を得ていた関係団体に示し、了承を得て須賀川卓球協会が正式に発足し今日の須賀川卓球協会の基礎づくりが出来たものである。
主な決定事項は次のとおりである。

(1) 役　員　　会長　高久田大一郎　　副会長　及川　邦夫　　庶務会計　滝沢　昌昭
(2) 登録料　　一チーム年300円
(3) 須賀川卓球協会加盟団体

須賀川町役場	林精器工場	トキワ印刷工場	大内化学工場	岩瀬地方事務所
須賀川保健所	山本電気工場	東邦銀行	笠原製糸工場	中外製薬
須賀川専売公社	須賀川高校	岩瀬農業高校	須賀川郵便局	

(4) 事業計画
(イ) 練習日の設定
毎週日曜日を練習日とし、会場は須賀川高校、岩瀬農業高校、専売公社須賀川工場等の持ち廻りとする。
(ロ) 各種卓球大会の支援
県大会をはじめ労働安全衛生卓球大会並びに薬業スポーツ卓球大会の運営全般にわたり支援する。特に須賀川卓球協会発足後間もなく福島県卓球協会と井上安正氏の協議により昭和27年4月22日、福島県軟式卓球選手権大会が須賀川で開催されることに決まり、運営面等に経験豊かな井

上安正氏が須賀川卓球協会会員をはじめ青年会（当時）を総動員し、陣頭指揮にあたり盛会裡に終了することができ、今後の各種大会の開催に大きな自信となった。

須賀川卓球協会発足後、初の県大会であり井上安正氏の英断、行動力には、目をみはるものがあり関係者一同敬服の念を強くしたものである。

昨今は須賀川卓球協会顧問であり、福島県卓球協会副会長である平石家治氏が昭和55年福島県卓球協会理事長に就任以、降福島県卓球協会の事務局が須賀川市に移り事務局長伊東守信、会計渡部信行、庶務薄井充良氏等事務局体制となり、第50回福島国体卓球競技会をはじめ東北大会、県大会等数多くの大会を再三にわたり開催し、活躍されていることをみると大会の規模、施設、技術更には予算面等でも隔世の感が強く感無量である。

(ハ) 牡丹杯県下職域卓球大会

須賀川市が誇る東洋一の牡丹園の共催行事の一環として開催されたものであり、県内各地から選手多数が参加され団体並びに個人戦に熱戦を展開する大会である。

第1回開催が昭和32年であり、本年で43回を迎えた。

(ニ) 高久田、井上杯卓球大会

須賀川卓球協会の設立並びに卓球の普及更には小・中・高の選手の強化育成に尽力された高久田大一郎、井上安正両氏の功績を後世に残すため、昭和53年から開催されている大会であり本年で21回の開催である。本大会で育った代表的な選手では、平成9・10年の2年にわたり全日本軟式卓球選手権大会で2年連続優勝を飾った小塩浩選手をはじめ国体など各種大会で活躍した平石秀樹、秋山月彦、山本健史選手などである。

(ホ) 須賀川市民体育祭卓球大会

毎年10月10日の体育の日を記念し、市民である小学生、中学生、高校生、社会人が参加し開催しており本年で32回の開催である。

(ヘ) 卓球講習会の開催

須賀川卓球協会設立後間もない昭和27年井上安正氏の奔走により当時日本卓球協会副会長並びに早稲田大学卓球部監督であった野村尭氏更には、昭和24年インドのボンベイで開催された世界選手権大会に出場ダブルスで優勝した林忠明氏など知名人を招聘し県南地区の高校生を対象として卓球技術の向上、選手の強化育成などにご指導をいただいたものである。

昭和60年頃からは、ふくしま国体での地元選手の育成強化が急務となり世界チャンピオンであった中国の郭躍華、曹燕華選手、スウエーデンのワルドナー選手をはじめ、世界選手権大会、女子監督であった水村治男氏等を再三にわたり招聘し選手の強化育成に努めた。

2．須賀川市営卓球場の開設

昭和54年4月須賀川市の中心地である釈迦堂川近辺に、須賀川卓球協会長年の懸案であった待望の市民卓球場がオープンした。県内初の市民卓球場開設に卓球関係者の喜びは大きなものであった。当時の澤田三郎市長はオープンに際し、卓球をとおし健全な体力と心を養い、併せて卓球技術の向上に努めてほしいと励ましの挨拶をされた。

現在は老朽化のため新築され「ふれあいセンター」と名称替えをし、従前と同様利用されている。

卓球台8台　　使用料無料　　使用時間午前9時～午後9時迄

3．平石家治氏の財団法人日本卓球協会理事就任

福島県卓球協会理事長として長い間県卓球協会の運営並びに卓球競技の底辺拡大、競技力の向上更には第一戦の選手として国体をはじめ数多くの大会に出場するなどその活躍はめざましいものがある。

これらの活躍が認められ昭和61年東北地区を代表しての日本卓球協会理事に就任された。

日本卓球協会理事の就任は福島県にとってはじめての快挙である。以後5期10年間継続し平成6年にはアメリカオープン卓球大会の日本選手団の団長として派遣された。

第50回ふくしま国体卓球競技の地元須賀川市開催の誘致に立候補している最中でもあり国体誘致に一段と拍車がかかり、大きな力になるものと須賀川市体育協会をはじめ関係者一同大変意を強くした

ものである。

後日、須賀川市卓球協会主催により須賀川市体育協会長や須賀川市教育長、福島県卓球協会長など関係者200余名が出席し盛大な祝賀会を催し、今後の活躍を祈念した。

4．第50回ふくしま国体卓球競技会

平成7年10月14日須賀川市が誇る伝統行事日本三大火祭りのひとつである松明あかしで全国各地から参加された選手、役員の皆様を心から歓迎し、半世紀に一度のスポーツ祭典である第50回ふくしま国体卓球競技会が新装なった須賀川アリーナを会場に、10月14日から19日迄の6日間にわたり熱戦の火蓋がきられ開幕された。

翌15日には天皇、皇后両陛下の行幸啓があり、両陛下をお迎えしようと早朝より多くの人達が沿道並びに須賀川アリーナ周辺をうめつくし、二重三重の人波であふれ心から歓迎申しあげた。

競技会5日目の18日、翌19日には須賀川市出身の小塩浩選手（須賀川信金）、横山広昭監督（叶商会）、平石秀樹コーチ（須賀川信金）、のほか富岡成一選手（阿部商事）、川村公一（日産いわき）が出場する成年男子2部では、応援席が連日満席となり市民総ぐるみの応援が会場全体に響きわたり、選手の勢いも加速され一段と盛りあがりをみせた。

試合は小塩浩選手などの再三にわたり美技とファイトにより予選リーグ（Aグループ）を見事4戦全勝で飾り決勝トーナメントに進出、決勝戦では強豪千葉県と対戦し1対3で惜敗はしたが準優勝の好成績を残すことができ、郷土あげての声援と期待に応えることができた。成年女子二部での選手の活躍も目をみはるものがあり予選リーグ（Bグループ）を3戦全勝で決勝トーナメントに進出、神奈川県との決勝戦でも3対1で見事優勝の栄冠を勝ちとり、成年男子（2部）とともに総合成績2位の好成績をおさめ天皇杯獲得の原動力となり、郷土の期待と応援に応えてくれた活躍に観衆のおしみない拍手と賛辞が印象的であった。

卓球競技会が興奮とさまざまな感動と思い出を残し半世紀に一度の大イベントが平成7年10月19日成功裡に終了し閉幕した。

長い間競技力の向上並びに運営全般に尽力された福島県卓球協会並びに須賀川卓球協会をはじめ関係者の真摯の努力の積み重ねが実を結んだものであり、改めて深く敬意と感謝を申し上げます。

今後とも第50回ふくしま国体でみせた好成績を持続させるため、引き続き競技力の向上に全力を傾注していただくことを念願するものであります。

【歴代須賀川卓球協会役員名】

年　度	会　長	副会長	理事長	事務局長	会　計
昭27・4～ 34・3	高久田大一郎	及川　邦夫		滝沢　昌昭	滝沢　昌昭
34・4～ 52・3	坂井　金一	及川　邦夫		滝沢　昌昭	滝沢　昌昭
52・4～ 56・3	及川　邦夫	滝沢　昌昭	平石　家治	薄井　充良	
56・4～平2・3	滝沢　昌昭	平石　家治 渡部　信行	横山　広昭	薄井　充良	今泉　一二
平2・4～7・3	樫村　義照	平石　家治 横山　広昭 渡部　信行 薄井　充良	伊藤　平男	長場　壮夫	今泉　一二
平7・4～現在	樫村　義照	渡部　信行 薄井　充良	今泉　一二	長場　壮夫	平石　秀樹

〈白河市卓球協会のあゆみ〉

会長　鈴　木　理　平

昭和32年に戦後活躍された方々を中心として、白河卓球協会が設立されました。日本の卓球界の黄金期の始まりであり、地方では草創期の時代でもありました。当時、大会を開くたびに企業から卓球

台を借り、リヤカーで会場まで運び、その日のうちに返却すると云う大変苦労の多い話を先輩から聞かされました。昨今の施設の充実ぶりを思えば、まさに歴史の重みを感じる次第です。その苦労を共にし、灯をともし続けたのが現会長であります。創立以来七代目でもあります。組織の拡充を考えた時、施設の充実、環境整備をぬきにしては語ることは出来ません。25年前、白河クラブを結成し学校の体育館を借り細々と練習をした事が懐かしく思われます。昭和50年代に入り、白河地方にも企業進出が相次ぎ補助事業として市民体育館が3館出来ました。色々な不便を感じて練習していた私たちにとって大変嬉しく、この事が現在の出発点になった様です。それ以来、町内会、地域の愛好会、企業のクラブ等が出来始め連携をとりながら仲間作りを行ってきました。現在では独自の大会を含めたくさんの行事があり、毎月何かはある、と云った状況です。今後各部門の指導者をどう育成するか、又生涯スポーツとしての卓球と競技スポーツとしての卓球のバランスをどうとり活動するか、課題は多くあります。

○白河市卓球協会役員名簿

団体名　白河市卓球協会　　結成年月日　S 33. 4. 1

事務局または連絡先　白河市中田244－4（24－0845）　　事務局長　入谷みちこ

顧問兼相談役　成井　英夫	顧　問　平原　武男	会　長　鈴木　理平	副会長　北村　武宣	
副会長　入谷みちこ	理事長　堀田　賢治	理　事　田中　広美	理　事　川井　彰一	
理　事　志賀　芳雄	理　事　前川　賢二	理　事　野木　良一	理　事　徳田　政之	
理　事　青木　　豊	理　事　我妻　健二	理　事　佐藤　哲夫	監　査　根本　利雄	

〈石川町卓球協会のあゆみ〉

会長　荒　明　健　二

(1) 石川町卓球協会　昭和40年4月1日設立

(2) 主な役員

会　長　荒明　健二　　副会長　鈴木　規之　　事務局長　吉田　好次　　会　計　小川　　太

監　事　矢内　秀和　　監　事　登坂　大輔

(3) 活動状況

年間の事業としては、石川町体育協会に加盟し、毎週水曜日の夜7時から9時までの2時間、町体育館にて中学生、高校生、一般社会人の会員を中心に技術指導しながら、合同練習を行っている。

協会独自の大会としては、毎年3月上旬に、石川郡、東白川郡内の中学生、高校生、一般社会人を対象とした東石卓球選手権大会を開催し、卓球人口の増加を図っている。平成10年度は3月7日（日）に学校法人石川高等学校の体育館を会場に第17回目の東石大会を行い、男女合わせて130名の参加で盛況だった。

この外には県内で開催される各種大会――軟式大会、牡丹杯職域大会、社会人大会、県総体、全日本軟式大会、菊人形杯、中通り大会、井上、高久田杯、南東北選手権大会と数多くの県大会に出場し好成績をあげている。

なかでも鈴木規之副会長は練習日には欠かさず後輩の指導にあたるかたわら、全日本大会に数多く県代表選手として出場し、活躍中である。又、荒明健二会長もかつては同じく、全日本軟式大会に3度、県代表選手として、出場歴のあるベテランでもある。67才になった現在は、硬式卓球からラージボールに転身して60才以上のラージ愛好者の指導にあたっている。荒明会長、鈴木副会長に次ぐ吉田好次事務局長、小川太会計、矢内秀和、登坂大輔両監事の若手選手の台頭も目ざましく、石川町卓球協会を支えている根っからの卓球人である。

(4) 年間予算額　208,000円

役員数　6名

(5) 事務局所在地（連絡先）

石川町字下泉153の2

石川町役場　企画商工課内　鈴木規之　TEL 0247－26－2111　FAX 0247－26－0360

〈古殿中学校卓球部OB会の活動〉

会長　**鈴木　誠一**

(1) 正式名称　古殿中学校卓球部OB会

(2) 主な役員　会長　鈴木誠一　副会長　曽我部恭司　事務局　矢内　伸一

(3) 活動状況

古殿小中学生卓球大会開催（昭和53年より開催し今年で22回目）

古殿卓球スポーツ少年団の技術指導

(4) 年間予算

OB会としての予算は無し。

(5) 事務局所在地

〒963－8305 福島県石川郡古殿町竹貫字竹貫127番地　矢内　伸一　電話0247－53－2854

(6) 活動状況

毎年2月の第3日曜日に古殿小中学生卓球大会を開催しており、今年で22回になりました。古殿町教育委員会、卓球スポーツ少年団父兄会、そのほかたくさんの皆様にご協力をいただきながら大会を開催しております。

また、卓球スポーツ少年団の技術指導を行っております。現在は古殿町の小中学生をはじめ、いわき市石住小中学校の生徒を中心に活動を行っております。

(7) 古殿町の卓球のあゆみ

古殿町の卓球の始まりは昭和51年4月に当時、古殿中学校に赴任してこられた、故本郷義信先生が中心となり、スタートいたしました。それまでは県大会さえ出場できなかったチームを翌年までには、優勝を狙えるチームに育てあげ、福島県の卓球界に古殿中の名を刻むことになりました。

また、小学生から卓球を始められるようにスポーツ少年団を設立し、古殿小中学生卓球大会の開催と現在の卓球古殿の基礎をつくりあげました。

また、地元の方に古殿の子供たちが活躍する姿を見ていただき、卓球に対する理解を深めてもらうため、県内外の強豪選手を招待し卓球大会を開催するようになりました。

その後も卓球大会の開催とスポーツ少年団の活動は続けられ、今では中学校のOB会が開催する大会としては数少ない大会として古殿町の恒例行事となりました。

我々OB会は、この伝統をこれからも守りながら、小中学生の指導にあたりたいと思いますので、今後ともご指導をよろしくお願いいたします。

第4節　福島県卓球協会会津支部

支部長　**平出　雄次**

〈会津の卓球のあゆみ〉

昭和10年（1935）

旧制中学唯一の卓球部は喜多方女学校で指導者は安達先生であった。

昭和16年（1941）

大東亜戦争により中断。

昭和21年（1946）

10月に会津卓球協会として大会を開催する。昭和23年8月会津卓球連盟を発足し県卓球連盟に加盟する。発起人は慶徳（喜女教員）、矢部平作、猪股俊夫、冠木新助、平出雄次、岩田喜一、日夏秀雄、江川昌彦　橋本新一の各氏であった。

初代会長に本田栄、副会長に岩田喜一、初代理事長には平出雄次が選ばれた。このころより方々の学校に卓球部が作られてきた。昭和56年会津卓球協会と改名する。

昭和22年（1947）

全国大会シニアの部で平出雄次が3位に入賞、ほかに大川原（若松一高）が活躍した。また全日本軟式大会に出場した山寺清一がランキング入りを果たす活躍をした。ほかに菅家、兼子、秋山、星、伊豆井らの名選手が輩出して会津の全盛期でもあった。

昭和28年（1953）

福島県高校体育大会、福島県総合体育大会個人戦で平野四郎（会津高）、新田千枝子（会女）が揃って優勝。一般では兼子章がまた軟式では山寺清一、40才以上では岩田喜一がそれぞれ優勝した。阿部、左雨（会工）、平野、寺井（会津高）、石川（若商）、江川（喜商工）、新田、吉田（喜女）、佐原（会女）、佐藤、渡辺、長谷川、斎藤、水野（喜女）らの選手が活躍全国大会に進出した。この頃、全会津中学校の大会で山郷中学校が女子団体戦13連勝の長きにわたった。指導者は斉藤正先生。会津卓球連盟2代目会長吉川景亮となる。

昭和29年（1954）

新田千枝子（会女）が福島県高校体育大会、福島県総合体育大会女子単優勝の二冠を制覇。唐橋が軟式男子単で優勝国体出場を決めた。

昭和30年（1955）

会津若松市に於いて全国都市対抗卓球選手権大会が開催され荻村選手の華麗なるプレーがみられた。福島県総合体育大会軟式男子単で岩田が優勝。高校では若女高が福島県高校体育大会女子学校対抗で優勝を飾る。

昭和31年（1956）

福島県高校体育大会女子単で佐藤則子（喜女）が優勝、女子複では大沢寛子、小高敏子（若女）が優勝した。女子学校対抗では喜女が制した。福島県総合体育大会の高校女子単では渡辺花（喜女）が優勝。一般では硬式男子単で平野四郎、軟式男子単で阿部栄が優勝を果たした。なかでも小荒井俊雄（喜商工）が善戦して全国大会の切符を獲得した。

富田（若商）、十二所（喜商工）、斉藤、長谷川（喜女）らが活躍していた。

昭和32年（1957）

福島県高校体育大会、福島県総合体育大会の高校女子単の部で斉藤ワカ（喜女）が活躍二大会を制覇した。

高校男子で寺坂、穴沢、長峯の選手が活躍、高校女子複でも長谷川孝子、斉藤ワカ（喜女）が優勝。一般男子単でも唐橋の優勝があった。

昭和33年（1958）

福島県高校体育大会女子学校対抗で会女高が優勝。女子単で水野和子（喜女）、女子複で水野、斉藤和子（喜女）組が優勝をさらった。福島県総合体育大会では女子単で平野幸子（会女）、一般では硬式女子単で横田トミの優勝があった。会津にあっては五十嵐（会工）、福王寺（喜高）らの活躍があった。

昭和34年（1959）

福島県総合体育大会一般女子単優勝の横田トミだけの少ない記録だった。安部、平野（会津高）、片桐（会女）、金田（喜女）らがいた。

昭和36年（1961）

会津で唯一気を吐いたのが、丸ヨシ子、田崎朝子（会女）組の福島県高校体育大会女子複での優勝であった。室井、阿部（会津高）、玉川（会工）、中川（喜商工）、水野、田代（喜女）らが頑張っていた。

昭和37年（1962）

成績がふるわない年であった。地区では浅坂、長嶺、芳賀（会工）、稲村（若女）、北原、山寺（会

女)、斉藤（会農)、岩原（喜女)、荒家（若商)、星（田島)、等がいた。高体連委員長は手代木健先生でした。

昭和38年（1963)

福島県総合体育大会高校男子単で浅坂登（会工）の優勝。会津では佐藤（会工)、山口、三橋（喜高)、山田、菊地、斉藤（若女)、波田野（若一）らがいた。

昭和39年（1964)

福島県総合体育大会男子複穴沢、浅坂（会工）組優勝。

昭和40年（1965)

福島県総合体育大会高校男子単で長峰忠雄（会工）が優勝。渡部（喜商)、上野（会工)、川村、常世（会高)、古川、鈴木（若女）がいた。

昭和41年（1966)

福島県総合体育大会男子学校対抗で会工が優勝する。高校男子単佐藤鉄雄（会工)、高校女子複菊地、斉藤（若女）組が優勝。

会津では大掘、酒井（会工)、神（猪高)、細矢（猪高)、白岩（若商)、大竹、佐藤、白井（会女)、野田（若一）が活躍していた。

昭和42年（1967)

福島県高校体育大会男子単で白岩明男（若商)、女子単大竹ミサ子（会女）がそれぞれ優勝。福島県総合体育大会高校女子単で大竹ミサ子（会女)、女子複で石田、野田（若一高）が優勝。一般では軟式女子単で五十嵐京子と40才男子単で土屋弘が優勝した。

会津では目黒（喜工)、神田（喜高)、女子では山崎、大塚（喜商)、佐藤（若一高）らが頑張っていた。

昭和43年（1968)

福島県高校体育大会の男子単で芳賀善光（若商）が優勝。福島県総合体育大会高校男子単においても芳賀善光が優勝を飾り、一般軟式男子単では穴沢が優勝に花を添えた。

会津においては佐藤、湯田（会工)、長谷川、遠藤（若商)、女子では佐藤、橋本、星、鈴木、三沢（会女)、高橋（喜商）らの記録が残っている。

昭和44年（1969)

福島県体育大会硬式男子単で芳賀善光の優勝記録がある。伊藤（若商)、佐竹（会農)、飯塚（喜高)、芳賀、石川（喜商)、渡部、小林（若女）らがいた。

昭和47年（1972)

会津の新時代の到来。会長、星善六、理事長、土屋弘、高体連委員長、渡部洋一、中体連委員長、安斎驟遥、監事、猪股左恭、大島主税の陣容。そして以前より協力と理解のあった神田久子（会計）がいた。大会で活躍した大島和彦（坂下ク)、正木美代子（リズム）の二人が会津総合体育大会個人戦で優勝している。第1回の白虎杯卓球大会が開催される。男女単を制したのは、坂内登良喜（会鉄ク)、小林幸江（富士通）だった。橋本クラブ、会鉄クラブ、喜多方クラブ、坂下クラブ、猪苗代クラブ等のほかに企業所属のチームがあり社会体育が盛んになって来た。高校でも江川（喜工)、鈴木（喜高)、玉水（会高)、斉藤（会農)、独古、阿部、小山、猪股（会工)、女子では白土、矢部、安藤（若女)、檜山（会女)、渡部（若商)、高橋、斉藤、清水、渡部（喜商）の顔ぶれがいて前途に光明が感じられた。特に江川淳一の活躍は素晴らしいものであった。

昭和48年（1973)

県での成績はまだふるってないものの全会津春季硬式卓球大会一般男子単2年連続の優勝。白虎杯卓球大会男子単優勝、全会津秋季硬式卓球大会男子単2年連続優勝とたて続けて果たした江川淳一（喜工）の戦績は驚くばかりであった。会津総合体育大会男子単で優勝した後藤利明（橋本ク、長崎屋）も忘れられない。高校男子では小野寺、佐藤（喜工)、遠藤、三沢（会農)、高校女子は大河原（喜商)、佐藤（喜女)、湯田、五十嵐、星（会女）等がいた。

昭和49年（1974）

福島県高校体育大会男子学校対抗で喜工が優勝。男子複でも小野寺敏彦、鈴木善光（喜工）組の優勝で先が開かれてきた。この頃中学では水戸昇、安斎驟遥、蓮沼昭、長谷川敬等の指導者が情熱を傾注して、優秀な選手を送り出していた。高校には渡部洋一、渡部長二、清水徹、斉藤隆弘の指導者がいて理想的な流れであった。一般でも谷川嘉次、菊地正雄、柏木恒和、芳賀哲也、芳賀善光など多くの指導者がいた。このあと喜工が福島県高校体育大会学校対抗4年連続優勝を樹立することになる。また協会を支えてくれた人に事務局の田部照男、審判長として活躍された三留昭男、中体連委員長の五十島栄伍の業績は大きい。会津の大会では全会津春季硬式卓球大会男子単優勝の芳賀善光（会鉄ク）と女子単優勝の小林幸江（富士通）がいる。また会津総合体育大会、全会津秋季硬式大会男子単の二冠を制した横田一郎（坂下ク）がいた。そして、須藤泰子（北山中）が白虎杯卓球大会一般女子単において中学生で初優勝の快挙を成し遂げ、これより北山中学校の台頭がはじまる。

昭和50年（1975）

福島県高校体育大会男子学校対抗で喜工が優勝。同女子単優勝、佐藤美穂（会女）。女子複優勝、高原ますみ、佐藤（会女）組。男子複優勝、木村義栄、武藤勇（喜工）組。また福島県総合体育大会教職員の部で渡部長二（喜女教員）が優勝。さらに福島県中学校体育大会で蓮沼昭（喜三中教員）が率いる喜多方三中が女子団体戦で優勝。東北中学校体育大会8位入賞を果たし、全国大会で優秀校に選ばれる。会津においては、高校生が大活躍し春季大会で小田切和範（喜工）、高橋恒子（喜女）、会津総体で三瓶（会高）、渡辺照子（富士通）、白虎杯大会女子単で中川睦子（喜女）、秋季大会で千葉（会工）、高橋（喜女）がそれぞれ優勝した。そのほかに深沢（喜工）、大掘（会工）、長谷川（若商）、女子では須藤（喜高）、大竹（会女）、石田（坂下高）が活躍した。

昭和51年（1976）

福島県高校体育大会学校対抗で喜工、喜女が揃って優勝した。同女子単では須藤泰子（喜高）、女子複で中川睦子、菊地久美子（喜女）組が優勝。高校女子の部の全種目とも東北、全国大会出場を独占。福島県総合体育大会学校対抗でも喜工、喜女が制覇した。

高校女子単で中川睦子（喜女）、一般硬式男子単で江川淳一がそれぞれ優勝。福島県高校新人戦大会において喜女が連続優勝と全国大会出場を決める。そのほか北山中が東北中学校大会で女子団体3位、全国中学校大会女子団体6位入賞を果たした。会津では春季大会男子単優勝が横田一郎、女子単優勝で須藤泰子（喜高）、会津総体では男子単優勝の外山義彦（喜ク）と女子単優勝の大塚（富士通）がいた。また秋季大会男女単では横田（坂下ク）、大野（喜女）の優勝。高校男子の長谷川、佐藤稔（若商）、粱取（喜工）、女子では菅原（喜高）の頑張りもあった。

昭和52年（1977）

福島県高校体育大会女子学校対抗で喜女が優勝。同女子単で菊地久美子（喜女）、男子単で小野寺和美（喜工）、女子複では中川、菊地（喜女）の各々が優勝した。福島県総合体育大会女子学校対抗で喜女が2年連続の優勝。一般では硬式男子単で江川淳一の2年連続優勝。福島県高校新人戦大会女子学校対抗で喜女が4年連続優勝を飾る。会津の大会では春季大会男子単で小野寺和美（喜工）、女子単が金田真寿美（喜女）、会津総体の男子単で外山（喜ク）の2年連続優勝。白虎杯大会では女子単優勝が武藤志津（喜女）、秋季大会男子単は佐瀬仁之助（喜ク）の優勝、女子単が菊地（喜女）の優勝。県中学校大会で喜三中が男子団体優勝。高校男子に佐藤義、武藤（喜工）、東條（喜高）、女子には星（喜女）、鈴木（喜高）などが頑張っていた。

昭和53年（1978）

福島県高校体育大会学校対抗で喜工と喜女が優勝、全国高校体育大会に喜女が出場して学校対抗16位となる。福島県総合体育大会学校対抗では男子が喜工、女子では喜高が優勝を飾った。会津の大会では春季大会男子単で佐瀬（喜ク）、女子単が武藤（喜女）の優勝。会津総体男子単は横田（坂下ク）、女子単が箱崎（伊南ク）の優勝。白虎杯大会女子単では内海香津代（喜高）の優勝。秋季大

会の男子単が佐藤義浩（喜工）で女子単が渡辺照子（富士通）の優勝だった。この年の中体連委員長は水戸昇。この年の高校に田沢、佐藤、中川（喜工）らがいた。

昭和54年（1979）

福島県高校体育大会の学校対抗で喜女が残念ながら2位、女子複の内海、鈴木真由美（喜女）組が頑張り優勝して東北大会出場を決めた。会津大会の成績では、春季大会が横田（坂下ク）、笠井英子（喜女）、会津総体、横田（坂下ク）、白虎杯大会、横田、大竹伸枝（日東紡績）、秋季大会、佐瀬（喜ク）、渡辺（富士通）らが優勝した。特に横田一郎の活躍が輝いていた。ほかに須藤正徳（西会津）、菅家（会工）、小田切敬（喜高）、武藤、須藤（喜工）、小沼（喜女）、栗山（若女）の活躍もあった。会津若松市卓球協会設立、会長は橋本新吉、理事長が長尾三郎。

昭和55年（1980）

福島県高校体育大会女子学校対抗喜女2位、福島県総合体育大会女子学校対抗喜女2位。二大会とも東北大会出場。会津の大会では白虎杯大会、小林義栄（喜ク）、笠井（喜女）が優勝。その他の成績は不明。主な高校生には五十嵐修二、岩本爾郎、別府（喜高）、米山貴之（会工）、青山、渡部、中川（喜女）、長谷川、大浜（若女）などの顔ぶれがみられた。時の高体連委員長に渡部長二、中体連委員長は古川憲男（若松三中）だった。

昭和56年（1981）

福島県高校体育大会女子学校対抗で喜女が優勝に返り咲いた。女子複、菅家奈々子、小田切浩美（喜女）組、男子複、渡部洋二、佐藤隆司（喜工）組の優勝。福島県総合体育大会、福島県高校新人戦大会の女子学校対抗でも喜女が堂々の優勝を飾った。一方会津の大会では春季大会、阿部（富士通）、大浜とし子（オリンパス）、会津総体、横田（坂下ク）、女子単、栗山（富士通）、白虎杯大会、岩本爾郎（喜高）、大山真由美（田島中）、秋季大会、五十嵐修二（喜ク）大浜とし子（オリンパス）、ほかに活躍した高校生に佐藤隆司（喜高）、赤城、小沼、高畑、五十嵐（喜女）等らがいた。この年に会津卓球連盟の名称から会津卓球協会と改められた。

昭和57年（1982）

福島県高校体育大会女子学校対抗で喜女が優勝。女子単で赤城美智代（喜女）、女子複では青山千賀子、赤城（喜女）組が優勝をさらった。また、福島県高校新人戦大会においても喜女が制した。地元の大会では春季大会が佐藤隆司（喜工）、赤城美智代（喜女）の高校勢が優勝。会津総体は横田（坂下ク）、大浜（オリンパス）。白虎杯大会、湯田洋一（球友）、荒明美絵子（若女）。秋季大会、五十嵐修二（喜ク）、青山千賀子（喜女）のそれぞれが優勝した。ほかの高校生には東條、佐藤（喜工）、穴沢（喜高）、星（会高）、安部、塚原（喜女）が頑張っていた。この中体連委員長は森山敏夫。また会津若松市家庭婦人卓球連盟が誕生、理事長は滝口静枝。

昭和58年（1983）

福島県高校体育大会で喜女が学校対抗優勝。福島県総合体育大会学校対抗で喜工、会女が優勝。春季大会男子単、東條秀二（喜工）、女子単、赤城（信金）、会津総体男子単、芳賀（会鉄ク）、女子単、五十嵐和江（オリンパス）、白虎杯大会男子単、横田（坂下ク）、女子単、赤城（信金）、秋季大会、東條秀二（喜工）、遠藤厚子（喜女）の優勝。井上、小池（喜工）、菊地浩次（喜高）、山川（会高）、五十嵐（会農）、大関、井上（会女）、佐藤、五十嵐（喜女）等も活躍した。中体連委員長は蓮沼昭（若松二中）。

昭和59年（1984）

福島県高校体育大会女子学校対抗喜女優勝。同女子複で安倍一美、佐藤誠子（喜女）組が優勝。福島県総合体育大会高校女子単で遠藤潤子（喜女）が優勝。全会津春季大会男子単、五十嵐（東北学院大）、女子単、赤城（信金）、会津総体男子単、大島一彦（坂下ク）、女子単、笠井（信金）、白虎杯大会男子単、横田（坂下ク）、女子単、鈴木久美（信金）、秋季大会男子単、五十嵐（東北学院大）、女子単、赤城（信金）が優勝した。この年、高校生で新たに名をあげたのが馬場、物江（若商）、佐藤（喜工）、秋山（喜女）だった。名指導者の蓮沼昭氏が多くの人々に惜しまれながらも亡くなられ

て、悲しみに包まれた。喜多方女子高校は、高校総合体育大会卓球競技会津地区予選大会において10年間連続優勝の偉業を樹立。県内屈指の伝統校であるとともに、文武の両立と礼節を重んじ他の模範とするところにより会津体育協会より優秀団体賞を受賞した。メンバーは菊地直子、佐藤誠子、遠藤敬子、安部一美、遠藤淳子、生亀弘子、小島明子、田部由美子、二瓶克子で顧問は斎藤隆弘教諭。故蓮沼氏の後任の中体連委員長に井関隆（一箕中）。

昭和60年（1985）

福島県高校体育大会男子複で馬場伸一、物江淳一（若商）組が優勝して東北大会に出場、堂々の優勝を果たし全国大会へ進んだ。会津地区の高校の大会でも馬場（若商）が優勝。女子単では酒井久仁子（喜三中）が見事優勝した。全会津春季大会では馬場（若商）、五十嵐さゆり（喜女）、会津総体は芳賀（会鉄ク）、仲山正子（若松ク）、白虎杯大会が横田（坂下ク）、佐藤久美（喜女）、秋季大会では橋谷田英實（卓友会）、東條恵美（北山中OG）のそれぞれが優勝した。また小檜山（若商）、大山（会工）も頑張っていた。

昭和61年（1986）

福島県高校体育大会女子学校対抗で喜女が優勝。女子単で五十嵐さゆり（喜女）、女子複で五十嵐、秋山和代（喜女）組が優勝した。福島県総合体育大会高校女子学校対抗でも喜女が優勝に輝いた。全会津春季大会男子単は五十嵐修二（喜多方ク）、女子単が仲山正子（若松ク）の二年連続、白虎杯大会女子単は佐藤久美（喜女）、秋季大会男子単が二年連続の橋谷田（卓友会）、女子単は今井千加（喜女）などが優勝した。会津卓球協会の役員の変更があり会長に土屋弘、理事長、千葉恒夫となる。

昭和62年（1987）

福島県高校体育大会女子学校対抗で喜女が優勝。女子単は古川明子（喜女）、女子複では東條由美、古川（喜女）組の優勝。福島県総合体育大会学校対抗においては喜工と喜女のアベック優勝だった。なお同女子単でも東條由美（喜女）が優勝を果たした。そして、東北大会学校対抗で二位となり全国大会出場。メンバーには秋山和代、酒井久仁子、大塚幸枝、古川明子、東條由美、関本知恵、佐野修子、大河原加代子で顧問は田中武彦、小林孝雄の両教諭であった。またその成績と他の模範となる団体プレーにより会津体育協会から優秀団体賞を受賞した。全会津春季大会では須藤正徳（西会津ク）、東條由美（喜女）、会津総体男子単、五十嵐（喜多方ク）、女子単、赤城（信金）、秋季大会男子単、須藤（西会津ク）、女子単、秋山（喜女）等が優勝した。この頃の主な高校生に佐藤学、酒井、渡部（喜工）、庄司（喜高）、金子、三瓶、大野（会高）、大場（喜女）等が頑張っていた。この年の白虎杯大会から団体戦のみとなり、男子団体が双葉クラブ、女子団体は喜女高が優勝した。中学団体戦は男女とも植田中学校が制した。

昭和63年（1988）

福島県高校体育大会女子学校対抗で喜女が優勝。女子単では古川明子（喜女）、女子複は東條由美、古川（喜女）組が二年連続の優勝を制覇した。また男子複も金子雄治、三瓶剛治（会高）組が優勝をさらった。福島県総合体育大会女子学校対抗でも喜女が制し、女子単では東條由美（喜女）が優勝をさらった。福島県総合体育大会女子学校対抗でも喜女が制し、女子単では東條由美（喜女）がこの大会、二年連続の優勝を飾る。また東北大会では女子団体三位、古川、東條組の女子複二位の成績で全国大会へ出場。江川真澄、小田切佳代、関本知恵、東條由美、古川明子、大河原加代子、佐野修子等がメンバーで会津体育協会より表彰された。全会津春季大会では佐藤学（喜工）、東條由美（喜女）、会津総体は橋谷田（卓友会）、秋山和代（信金）、秋季大会が岩本（喜多方ク）、古川（喜女）等が優勝。他の高校生には遠藤政孝、梶内英行、原、後藤、（喜工）、加藤、小山（会高）、薄（喜女）等の活躍があった。会津卓球協会役員の変更で会長が土屋弘、理事長、北澤宏、高体連委員長、斉藤隆弘、中体連委員長、馬場俊忠（若松二中）となる。

平成元年（1989）

福島県高校体育大会女子学校対抗喜女優勝。同女子単、薄香織（喜女）、女子複、佐野修子、山口育子（喜女）組の優勝。東北大会団体三位、女子複二位、全国大会出場。福島県総合体育大会高校

女子学校対抗で喜女優勝。全会津春季大会、大内雅之（県保証協会）、山口育子（喜女）、会津総体、岩本（朝日小）、秋山（信金）、秋季大会、岩本（喜ク）、佐野修子（喜女）等が優勝。他の高校生では小澤、芥川、山田（喜工）、山田（会工）、長谷川（喜女）の活躍もあり中でも谷川嘉成（若松四中）が特に目立った。

平成2年（1990）

福島県高校体育大会女子学校対抗喜女優勝。喜女の優勝は昭和30年より平成2年まで36年間で福島県高校体育大会と福島県総合体育大会高校の部だけで19回の優勝を数える。他に福島県高校新人戦大会での優勝記録も多くある。この年に行われた福島県総合体育大会高校女子単で薄香織（喜女）が優勝。一般では壮年男子で津田圭一が優勝している。この年の会津大会の記録はなく残念だが不明である。高校では中島（会農）、小野（会高）、秋山、広瀬（喜商）、小林（若女）、小椋（喜女）の活躍がみられた。

平成3年（1991）

この年は高校生の福島県での活躍がなく、一般人が僅かに頑張った。福島県総合体育大会二部女子単優勝、東條由美、同壮年男子単優勝、津田圭一の二人である。全会津春季大会では馬場伸一（卓友会）、長谷川まり子（喜女）、会津総体で五十嵐（日本モトローラ）、酒井（信金）、秋季大会が谷川嘉成（会工）、小林美喜子（若女）が優勝した。物江真理（会農）、久力亜矢（喜女）、菊地、渡部（喜商）等も頑張っていた。この時の高体連委員長は高橋司（会女）であった。

平成4年（1992）

福島県体育大会男子単優勝、中島龍一（会農）、福島県総合体育大会壮年男子優勝、津田圭一（喜ク）、全会津春季大会優勝、谷川嘉成（会工）、大塚幸枝（喜女）、会津総体女子単優勝、谷川松枝（信金）、男子単は不明。また全日本卓球選手権大会福島県予選大会ジュニア男子単で谷川嘉成（会工）の優勝があった。ほかに鈴木智裕（会工）、阿部貴博（会農）、武藤佳奈子、山口緑、穴沢恵（喜女）、物江真希（会農）等の活躍もある。11月には会津若松市の要請をうけて中国北京市で開催された、日中友好都市卓球カーニバルに参加して中国湖北省沙市市卓球関係者と交流をする。

平成5年（1993）

福島県高校体育大会男子単優勝、谷川嘉成（会工）、福島県総合体育大会高校男子単優勝、谷川嘉成（会工）、全会津春季大会優勝、谷川嘉成（会工）、穴沢恵（喜女）、秋季大会優勝、谷川（会工）、武藤（喜女）。ほかには河瀬広樹、佐野智宏（会工）、大塚勝利、菊地良明（喜商）、大内ひろみ、小檜山幸子（喜女）、五十嵐千佳、佐々木理恵（若女）等が頑張っていた。

平成6年（1994）

この頃より中学、高校の逸材が少なくなり県内の他地区の幼年からの育成とクラブチームの充実さが完成期を迎えて会津のレベルの低下が際立つ。福島県総合体育大会壮年女子優勝、滝口静枝（会津ク）。全会津春季大会優勝、佐藤学（谷川ク）、谷川松枝（谷川ク）、会津総体も佐藤、谷川（谷川ク）の続けての優勝。秋季大会は谷川嘉成（谷川ク）、田村ミサ子（会津ク）の優勝。高校生で頑張ったのは遠藤聡（喜工）、小池清彦（会工）、芥川幸恵、渡部幸子（喜女）等がいた。高体連委員長遠藤良市（会工）。

平成7年（1995）

福島県総合体育大会女子二部優勝、大山美加子（中島TTS）、同壮年女子優勝、田崎朝子（会津ク）、全会津春季大会優勝、佐藤学（喜ク）、三橋由香（喜ク）、会津総体優勝、谷川（谷川ク）、瓜生恵美（喜ク）、秋季大会優勝、柏倉一博（中島TTS）、酒井久美（中島TTS）。高校生には佐藤幸一、芳賀廣幸（会工）、唐橋伸幸、讃岐隆弘（会高）、猪股貴美（喜女）等がいた。中学生に横山和広（若松四中）、岩月健志（荒海中）の二人が光っていた。第50回国民体育大会が須賀川市で開催される。成年女子二部で会津出身の東條由美が出場活躍して優勝に貢献した。審判員として小林朋子、赤城市子の二名が参加した。中体連委員長、星健一（大戸中）。

平成8年（1996）

全会津春季大会優勝、小池浩二（ゴッツ）、田村ミサ子（会津ク）、会津総体優勝、小澤喜隆（喜ク）、酒井久美（喜ク）、秋季大会優勝、中島仁（中島TTS）、田村ミサ子（会津ク）、高校生には遠藤広忠（喜工）、菅野剛生（喜商）、山浦義樹（会高）、大山裕子、渡部祥子、佐藤直美（若女）等がいた。会津若松市と中国湖北省荊州市の友好都市協定により卓球コーチの胡培建先生が一年間の予定で滞在。中体連委員長、小原博明（若松一中）、協会事務局長、小林昭二（会工）。

平成9年（1997）

全会津春季大会優勝、胡培建（中国）、田村ミサ子（会津ク）、会津総体優勝、五十嵐好哉（中島TTS）、酒井久美（喜ク）、秋季大会優勝、胡培建（中国）、酒井（喜ク）。高校生には五十嵐智史（喜高）、渡部喜一郎（田島高）、鈴木奈々、加藤早苗（喜女）、佐藤裕美（若女）、秋山仁美（喜商）等がいた。9月、胡培建先生帰国、呉暁峰先生来日。日中ジュニア卓球大会が中国北京市で開催。監督、北澤宏、選手、鈴木雄作（会工）、大山裕子（若女）が参加。この年の中体連委員長、馬場俊忠（南郷中）。

平成10年（1998）

全会津春季大会優勝、佐藤学（喜ク）、酒井久美（喜ク）、会津総体優勝、遠藤政孝（DOスポーツ）、安部幸枝（喜ク）、秋季大会優勝、佐藤学（喜ク）、武藤佳奈子（喜ク）、高校生には渡部健仁、工藤真一郎（会工）、渡部陽介、半沢康至、小林勇介（会高）、横田（若女）、那智上恵、木村絵海（喜女）、渡部諒子、木下ゆかり（会女）等がいた。3月に一生卓球に情熱を注いだような谷川嘉次氏が亡くなる。中体連委員長、小田切敬（会北中）。会津卓球協会長 松崎 繁。

平成11年2月（1999）

終わりに文中の人名の敬称を省略しましたのでご容赦ください。先人の偉業とかかわってきました人々に深く感謝いたします。（理事長　北沢　宏記）

第5節　福島県卓球協会相双支部

支部長 堀　川　清　光

〈相双支部の歩み〉

昭和16年頃から小高町を中心に卓球熱が盛んになり、卓球の愛好者が徐々に増えて来た。特に原町においては、私設の卓球場が開設され（笹森、若竹両卓球場）中学生から一般まで、この施設を広く利用する卓球愛好者が多かった。

また、小高町では、半谷支部長の管理する卓球場があり、当地でも愛好者が増加の一途をたどっていた。

当時原町において「原町卓球協会」が発足し初代会長に高城先生が就任された。これを機に官公庁、民間会社等において卓球部が次々に誕生することとなった。

特に原町においては、当時の原町紡績KK、丸三製紙KK、原町市役所等に愛好者も多く、部活動も盛んであった。

昭和30年頃から、県労政事務所相双支部主催の大会をはじめ、その他各種大会が盛んに開催されるようになったが、当時の大会の会場となる施設は学校のみで卓球台も少なかったので、必要とする台数を各学校から寄せ集めで間に合わせるしかなかった。卓球台を会場に運搬するのが大変な作業であった。なかでも、冬期雪の降る日に遭遇した場合は更に大変な作業であった。

当地方の高校生の卓球熱も盛んで、支部内の各高校には優秀な選手も出て、県大会、全国大会等に出場して力を発揮した選手も多かった。

以上のように、支部発足時には、支部役員や指導者らともに支部運営に意欲的にとりくんだ結果、卓球愛好者の熱意が一段と盛り上がりをみせ愛好者の数も年々増加していった。

相双支部は県内一弱く、昭和55年に中学生の学年別及び新人戦を支部主催として実施することにより、支部役員と中学校の顧問教師との交流を図ることにより、全体のレベルアップにつながるものと確信し、現在も継続している。

昭和60年にENDO杯を設けたのは、遠藤七兵衛氏の支部長として20年に亘る功績をたたえる目的と、他支部一流選手と試合することによって中学生、高校生、社会人のレベルアップを図ることを目的としたものである。

その後、中学、高校の顧問教師と支部役員との練習試合と懇親会を行い情報交換する会を数回実施し互いの交流を図った。

さらに、県総体が相双地区で開催されたのを機に、支部主催を通してレベルアップを図ることを目的とした次第である。

昭和55年頃からセントラルクラブ、KMDクラブの発足に伴い、徐々に選手が強化され、福島国体前年には支部対抗戦で優勝争いに加わるまで実力アップが図られた。

◇歴代支部長

初　代　半谷　敬寿　　二　代　鈴木重郎治
三　代　伊賀　　敏　　四　代　遠藤七兵衛（昭36年～63年）
五　代　相沢　辰男（H元年～5年）　　六　代　堀川　清光（平7年～現在）

◇歴代役員

◦理事長　浜名　秀雄（S36年～53年）　　鎌田　　尊（S54年～62年）
横山　　実（S63年～H10年）　　斉藤　一美（S11年～）

◦事務局長
相沢　辰男（S36年～53年）　　堀川　清光（S54年～H4年）
星　　正孝（H5年～6年）　　原　　晃（H7年～現在）

◇高等学校卓球部OB会主催の大会

◦馬城杯争奪卓球選手権大会（相馬高OB会）　　◦浮舟杯卓球大会（小高工業高OB会）
◦双葉卓球大会（双葉高OB会）　　◦国見杯（原町高OB会）　—中断—

◇記念事業の開催

◦昭和52年　元世界卓球チャンピオン　「長谷川信彦選手を招聘」
当地方の中学生から一般までの卓球愛好者が一堂に集い、長谷川選手の模範演技に感銘更に技術講習を受け、参加者一同大感激。大盛況であった。

◇支部主催の大会

◦遠藤杯相双選手権大会（昭和56年～）　　◦市町村交歓卓球大会（平成9年～）
◦TSP卓球大会

◆ 原町市卓球協会

会長　相　澤　辰　男

1．設　　立　昭和30年10月1日

2．歴代会長

初　代　高城　繁雄　　二　代　遠藤七兵衛
三　代　浜名　秀雄　　四　代　相澤　辰男

3．現在の組織

会　長　浜名　秀雄　　副会長　渡辺　新一・堀川　清光
事務局長　岡村　　明　　理　事　相澤　辰男・斎藤　一美
会　計　佐藤　栄子　　監　事　前田　利己・大和田信孝

4．運営方針

市内の卓球愛好者の親睦と融和を図りながら卓球人口の底辺拡大と技術の向上を目指すことを主目標とする。

特に、平成11年より役員を一新し、広く会員を募り、活動を活発化するように努力したい。

5．大　　会

原町市民卓球大会の開催

毎年10月10日体育の日に開催している。

6．各種体会への参加

∘福島県家庭婦人卓球大会への参加　　∘福島県ラージボール卓球大会への参加

∘その他各種大会への積極的参加

（相澤辰男・記）

◆ 相馬市卓球協会

会長　西　郷　徹　夫

1．設立年月日　昭和33年10月1日

2．設立の経過

相馬市体育協会への加盟を契機に、岩井半衛氏の経営する「岩井卓球場」を活動拠点にしていた愛好家グループが中心となり、当時相馬市議会議員であった清水重五郎氏を会長に推薦し協会が発足した。

3．歴代役員（会長・理事長）

初代会長
清水重五郎
（昭和33年～昭和42年）
［相馬市議会議員］

二代会長
梅原　實
（昭和43年～昭和61年）
［自営業・梅原電気］

三代会長
西郷 徹夫
（昭和62年～現在）
［元高校教員］

☆歴代理事長

佐々木政喜
（昭和39年～昭和62年）
［公務員・相馬市役所］

早坂 勝信
（昭和63年～平成元年）
［公務員・相馬市役所］

鈴木 誠一
（平成2年～現在）
［団体職員・相馬市社会福祉協議会事務局］

4．現在の主な役員

名誉会長	梅原　實	［自営業・梅原電気］
会　長	西郷　徹夫	［元高校教員］
副会長	横川　芳茂	［元中学校教員］・伏見　利博［東北工業大学職員］
	佐原　英利	［元中学校教員］
理事長	鈴木　誠一	［団体職員・相馬市社会福祉協議会事務局］
副理事長	高玉　忠利	［会社員・NTT東北］
幹　事	小泉　直人	［会社員・アルプス電気㈱］・桜井　眞正［自営業・電気設備］
	斎藤　智英	［会社員・マリンクロット］

※その他、加盟団体代表理事24名から構成

5．運営方針と主な事業計画

○平成10年度相馬市卓球協会運営方針

・基本方針

相馬地方の卓球競技の普及振興と競技水準の向上を図るとともに、本協会の組織運営の充実に努め、併せて会員相互の親睦を深める。

・目標と事業計画

(1) 卓球競技の普及振興と競技水準の向上を図る。

① 相馬市民体育大会卓球競技の開催　② 相馬市民親善卓球大会の開催

③ 松川浦荘杯卓球大会の開催　④ 中学生強化練習交流会の開催（3回）

⑤ 小学生・中学生のための卓球教室の開催　⑥ スポーツ少年団の育成指導（年間）助成

⑦ 卓球愛好者の育成と指導　⑧ ファミリー卓球の普及

(2) 指導者の養成と資質の向上を図る。

① 指導者研修会の開催　② 審判講習会、指導者研修会等への派遣

(3) 組織運営の充実に努めるとともに会員相互の親睦を図る。

① 会員数の拡大と財源の確保　② 事業別担当者会議の開催

③ 懇親会・納会の開催

(4) 広報活動その他会員への情報提供に努める。

① 広報活動の推進　② 関係団体に対する共催及び後援

③ 会員への情報提供

(5) 各種大会への選手・役員の派遣に努める。

① 県民スポーツ相双地域大会への派遣　② 相双地域市町村交歓卓球大会への派遣

③ 全国大会・東北大会への出場者（団体）に対する激励金の交付

※全日本クラブ卓球選手権大会出場　相馬クラブ（7月・長野エムウエーブ）

6．協会の構成

○加盟団体（15）

☆中学校卓球部［中村一中・中村二中・向陽中・玉野中・鹿島中・尚英中］

☆高校卓球部［相馬高校・相馬女子高校］

☆相馬高校卓球部OB会　☆相馬女子高校卓球部OG会　☆アルプス電気卓球部

☆相馬卓球クラブ　☆相馬クラブ　☆新地クラブ

☆卓球スポーツ少年団

○一般登録会員（70名）

7．相馬市卓球協会のあゆみ

◇昭和初期から戦前・戦後のころ（昭和初期～昭和20年代）

スポーツ人風土記（吉田清計著・道和書院）の「卓球・その創始期」によると、昭和初期には県下各地域で、各地区主催の大会が盛んに行われるようになり、相馬中村においても大会が催された。当時活躍したチームには福電（現在の東北電力）、福島高等商業、福島師範学校等の中に中村税務署、相馬中学があげられており、さらに戦前における本県卓球界は、福島勢（田辺栄治郎、鈴木惣介、木幡美明）と相馬勢（半谷敬寿、鈴木重郎治）との間で勝敗が争われていたと記されている。

このことから、当相馬地方においても昭和初期から戦後にかけて、多くの卓球愛好者が職場や地域で仲間をつくり、かなり高いレベルで卓球を楽しんでいたと推察される。（昭和21年～昭和24年）

◇協会発足のころ（昭和30年代～昭和40年代）

相馬市の卓球協会は、前述のように戦後岩井半衛氏の経営する「岩井卓球場」を拠点に活動していた愛好家約30名のグループが、昭和33年に市体育協会設立の呼び掛けに応じ、協会を結成（会長：清水重五郎）して活動を開始したといわれている。その当時の活動状況を示す資料がないので詳らかではないが、昭和34年4月10日の皇太子・美智子妃殿下の御成婚を祝い、愛好者が集い記念

卓球大会などを開催してゲームを楽しんだということである。

また、当時日本のトップレベルにあった中央大学の選手を招聘し、卓球を志す中学・高校選手を対象に卓球教室を開催し卓球競技の普及と競技水準の向上に努めた。

昭和39年に東京オリンピックを記念し、国民の祝日として10月10日が「体育の日」に制定されたことに伴い、当市においても各競技種目を統合した市民体育大会が開催されることになった。

当協会としてもこれを機に規約を定め、ようやく協会としての組織がつくられ、新たな活動を開始することになった。

しかし、その後の活動内容は専ら「体育の日」の卓球競技の開催が主な事業であり、その他は労政事務所等の主催する競技会をはじめ、各種卓球大会の運営に協力する程度で、これといった主催事業をもたない時が過ぎたようである。

なお、当時の大会は、ほとんどが相馬女子高校の体育館で開催され、その準備や競技の審判運営と後片付けは同高校の卓球部顧問の指導のもとで、相馬高校・相馬女子高校両校卓球部員の献身的な協力があったことを付記しておきたい。

昭和40年ごろから昭和55年にかけては、指導者の不足などもあって、協会の運営や活動の停滞が長く続くことになった。

◇協会再建のころ（昭和57年～昭和62年）

前述のように、昭和43年～昭和55年の12年間にわたる当協会の活動は、専ら「体育の日」の市民体育大会の運営のみであった。昭和53年には、全国高校総合体育大会の本県開催を契機に、学校体育（部活動）の充実が図られる一方、地域では生涯スポーツが盛んになる中で卓球愛好者も増え、市民卓球のニーズにどう応えるかが課題となっていた。

昭和56年になって、組織が曖昧で、活動の停滞している協会の再建を願う関係者が集い、規約の一部を改正し役員改選を行い、会長に梅原實、副会長に加藤治長・西郷徹夫、幹事長に佐々木政喜を選び再出発することになり、ようやく長年の懸案であった協会再建が図られることになった。

昭和57年3月には、協会再建を契機に広く市民卓球の普及振興を図る目的で小・中高校生及び一般市民を対象とした「第1回相馬市民卓球大会」を開催しその普及に努めた。

昭和58年には、役員改選の年を迎え、会長には梅原實を再選、副会長に加藤治長（再）、横川芳茂（新）、幹事長に佐々木政喜（再）を選び、梅原会長を中心とした体制で2期目がスタートした。

唯一の主催事業である「相馬市民卓球大会」も引き続き開催し、市民卓球の普及振興に努めてきたところであるが、昭和59年には、大会運営に携わる役員の協力が得られず、参加者の減少など諸般の事情により廃止のやむなきに至り、種目の一部を「体育の日」の市民体育大会に移行する形をとった。以来、昭和62年まで再び主催事業をもたない協会となり後に課題を残すことになった。

◇協会の充実発展をめざして（昭和63年～平成10年）

昭和63年5月に開催された理事会では、昭和70年（平成7年）に本県で第50回国民体育大会が開催されるに当たって、これを契機に卓球競技の普及振興と競技力の向上を図ることから、当協会としても組織運営の充実を図るとともに長期展望に立った市民卓球の普及振興策を策定し、これを推進する体制づくりに着手することになった。

そのための協会組織の再編が行われ、会長に西郷徹夫、副会長には横川芳茂（再）、伏見利博、理事長に早坂勝信、幹事に鈴木誠一を選び新体制のもとで協会の運営に当たることになった。また、協会規約についても全面改正を行い、理事の構成も各小中・高校、スポーツ少年団、家庭婦人、事業所、相馬高校卓球部OB会、相馬女子高校卓球部OG会など10団体の代表による26名とし、広く加盟団体の意思が反映できる組織とした。

役員の大幅な改選、規約の全面改正により、人心を一新してスタートした本協会は、基本方針に卓球競技の普及振興と競技水準の向上を揚げ、組織運営の充実を図りながら、選手の育成、各種大会の開催、指導者の研修、卓球教室の開設など諸事業に積極的に取り組み、市民卓球の普及に努めた。

○主な主催事業

(1) 中・高校生のための卓球教室　(2) 婦人卓球教室　(3) 指導者研修会

(4) 市民親善卓球大会　(5) ファミリー卓球教室

その結果、競技スポーツを志向する「相馬クラブ」(一般・高校生)、生涯スポーツを目指す「相馬卓球クラブ」・「新地クラブ」(家庭婦人・中高年)卓球を志す小中学生中心の「卓球スポーツ少年団」などのスポーツクラブが誕生し、それぞれの目的に応じ盛んに活動が展開されるようになった。

特に「相馬クラブ」は、本年6月に開催された第17回全日本クラブ卓球選手権大会(団体戦)第二部に優勝し、7月長野で開催された全国大会に出場するほどにレベルが高まっている。

「相馬卓球クラブ」も毎年、県家庭婦人卓球大会に参加して好成績を収めている。

また、本年1月に開催された第1回相双地域市町村交歓卓球大会(小学生から一般まで、年代別にシングルスとダブルスで競技する団体戦)に各クラブから選手を選抜して「相馬市チーム」を編成参加して優勝を飾っている。

◇現在、そして新しき時代へ向けて

平成7年に本県で開催された「ふくしま国体」では、6種別すべてに優勝を含む上位入賞を果たし、愛知県に続いて総合第2位という輝かしい成績を収めた。

今後は、「ふくしま国体」を契機に全国レベルにまで達した本県卓球の競技力の維持・向上を図ることが大きなテーマとなっている。

当地域からは、選手の育成強化に努めてきたが、残念ながら「ふくしま国体」で活躍する選手を誕生させることができなかった。

しかし、第50回「ふくしま国体」の本県開催を契機に卓球指導者の意識が高まり、県下各地域に多くのクラブが誕生し、地域の熱心な指導者が核となりクラブを活動の拠点に卓球人口の増大を生み出した。

当地域においても、「ふくしま国体」を契機に市民のスポーツに対する関心が高まる中で、前述のように市民各層の卓球愛好者が日常の生活の中で仲間とともに卓球を楽しむ姿が多く見られるようになってきた。

これまで、学校中心にスポーツ活動が学校体育の枠の中で展開されてきた時代から、少しずつ地域のスポーツクラブが拠点となってスポーツ活動が展開される時代へと移行しつつある状況が見えるようになった。

学校を取り巻く現状は、休日などの労働条件、専門的な指導のできる教員の不足、転勤や受験体制により一貫した指導が成り立たないことなど、問題が数多くあり、卓球に限らず学校を核としたスポーツ振興が限界にきつつあることは現実である。

さらに、平成14年からの学校週5日制の実施は、特にジュニア層(小・中学生)のスポーツ活動の環境を見直す契機にもなっていることから、今後はスポーツ少年団やクラブによるジュニア層の組織的な活動が盛んになることが容易に予測される。

一方では卓球に限らずスポーツが生活の質的向上を図る上で欠かせないものとなり、生涯スポーツが広く浸透してきている今、その振興を図り定着させていくことが強く求められている。

そのための重要な要件の一は、何といっても施設の整備であり、卓球が多くの市民に親しまれるためには、立派な施設が遠くにあるのではなく、身近な所に施設(卓球台)があり、いつでも使用できることが、ごく基本的な条件なのである。

今、生涯スポーツ実践の時代を迎え、市民総参加のスポーツが叫ばれている中で、ささやかな市民の「スポーツの権利」を保障する(いつでも、どこでも、誰でもスポーツを楽しむことができる条件整備)ことは、行政当局の当然果たすべき役割なのであるのだが…。

もう一つの重要な要件は、指導者である。

指導者には、基本的にその人の人柄、人格が大切な要素として求められているので、科学的な理論に基づく技術的な指導だけでなく、精神的な指導もできる能力が必要である。型にはまった指導

ではなく、選手の持っている個性や長所を上手に引き出せる指導者、教える対象者に見合った適切な指導ができる指導者が求められている。

そのためには、指導者自身が研修に心がけて指導者としての公的資格（文部省大臣認定「社会体育指導者の知識・技能審査事業」による指導者資格）を取得し、自信をもって指導に当たることである。

さらにまた、卓球に限りない情熱を注ぎ、卓球を通して人生の歓びを体験させ、人間としての進む道を知らしめる人が今、強く求められているところである。

来るべき21世紀の相馬の卓球の健全な発展のためには、『みんなが楽しめる卓球』の指導を基本におき相馬の栄光復活を目指し、指導者が一層その資質を高め導いていくエネルギーが卓球相馬の未来を拓く鍵となるであろう。

（相馬市卓球協会／会長　西郷徹夫）

8．国際大会・全国大会等で活躍した選手

＊鈴木重郎治（相馬中学→日本大学）

・昭和28年全日本軟式卓球選手権大会　ベテランの部　第3位
・昭和29年全日本軟式卓球選手権大会　ベテランの部　準優勝

＊梅原　實（原町高校→中央大学）

・昭和26年全日本学生卓球選手権大会　ダブルス　準優勝
※国体出場（昭23・福岡、昭24・東京、昭26・広島）

＊梅原　哲次（相馬高校→中央大学）

・昭和32年東日本卓球選手権大会　ダブルス　優　勝（田中）
・昭和33年全日本卓球選手権大会　ダブルス　第3位（田中）
・昭和34年全日本卓球選手権大会　シングルス　第3位
・昭和34年東日本卓球選手権大会　ダブルス　優　勝（田中）

＊諸星　光雄（相馬高校→中央大学）

・昭和33年東日本卓球選手権大会　ダブルス　第3位
・昭和36年東日本卓球選手権大会　シングルス　ベスト8

＊反畑　秀彦（相馬高校→日本大学→三井生命）

・昭和36年全日本卓球選手権大会　ダブルス　ベスト8
（三林・福高出身→中央大学）
・昭和37年全日本卓球選手権大会　ダブルス　ベスト8（三林）
・昭和38年全日本学生卓球選手権大会　ダブルス　第3位（高橋・日本大学）
・昭和39年関東学生卓球選手権大会　シングルス　準優勝
・昭和41年全日本卓球選手権大会　シングルス　ベスト8
・昭和42年世界卓球選手権大会（ストックホルム・スウェーデン）
シングルスとダブルス共に3回戦進出

※昭和52年～昭和54年三井生命女子監督
昭和53年第28回全日本実業団卓球選手権大会で三井生命女子チームを優勝に導いた。
※国体出場(昭34・東京)福島県代表　(昭39・新潟)東京都代表　(昭40・岐阜)福島県代表

＊伏見　利博（相馬高校→日本大学）

・国体出場（昭40・岐阜）福島県代表

＊小泉　直人（相馬高校→東北学院大学）

・昭和52年全国青年大会（卓球競技）　シングルス　優　勝

＊小林　幸子（旧姓・加藤）（相馬女子高校→三井生命）

・平成7年　全日本軟式卓球選手権　40歳以上女子　シングルス　第3位
・平成11年　全日本軟式卓球選手権　40歳以上　優　勝

＊天野　昭子（相馬女子→トーアエイヨー）

・昭和51年　全日本実業団選手権大会　（軟　式）　第3位

＊根本　裕子（旧姓・佐藤）（相馬女子→トーアエイヨー）

・国体出場（昭54・宮崎）福島県代表　（昭56・滋賀）福島県代表

・昭和53年～昭和56年　全日本実業団選手権大会　第３位

＊斎藤　智英（相馬高校→東北学院大学）

・昭和57年　東北学生卓球選手県大会　シングルス　準優勝

＊佐原　英夫（相馬高校→東北学院大学→中学校教員）

・平成６年第30回全国身体障害者スポーツ大会卓球競技　シングルス　優　勝

9．卓球競技の普及振興と協会の発展に貢献した功労者

☆森口　正作　相馬高校卓球部の創設に尽力し、顧問として相馬高校卓球部の第一期黄金時代（昭21～昭24）を築き上げ、戦後いちはやく同校卓球の技術を全国レベルに導いた。

また、中村第一中学校に転任後も同校卓球部の顧問として選手の指導に挺身し、梅原哲次、諸星光雄、反畑秀彦など、後に全国大会や国際大会で活躍した多くの優秀選手や五代目県卓球協会長の西郷徹夫などの指導者を育て、今日の卓球界発展の礎をつくりあげた先駆者である。

☆清水重五郎　協会の設立に尽力し、初代会長として組織づくりに努め協会発展の基礎をつくった。

☆只野　喜弘　相馬高校卓球部OB会の設立に尽力し、初代会長として永年にわたり、組織運営の充実に努めた。

また、馬城杯争奪卓球選手権大会の開催に努め、当地域の卓球競技の普及振興に貢献した。

☆梅原　　實　二代目会長として、永年にわたり、創始期にあった協会組織をまとめるとともに市民体育大会の拡充に努め、卓球競技の普及振興に尽力した。

10．ＯＢ会・クラブ・スポーツ少年団等の活動

『相馬高校卓球部OB会のあゆみと活動』

§　設立のころ

ＯＢ会設立当時のあゆみを辿る糸口は、私が昭和39年4月に中村一中から相女へ転任してから、相女卓球部顧問として選手の指導に携わることになってからのことである。

中村一中時代に指導した選手たちが、相高に進学してからも引き続いて卓球部に入部し活動していたこともあり、相女・相高両校の選手を集めて合同で練習することが多かった。

そのために、多くの両校卓球部卒業生がこの合同練習、特に春夏の合宿練習（相女）にはコーチや練習相手として協力してくれたので、両校チームの競技力が年々高まっていったことを記憶している。

卒業生コーチのなかでも、反畑秀彦、伏見利博両氏の指導は素晴らしく、当時のわが国のトップレベルの技術・戦術を選手の個性に応じ直接コーチを受けたことが、その後の相高相女両校の活躍に結びつくものであった。

（県高校大会の学校対抗優勝：相高は昭和41年・相女は昭和46年と昭和50年）

この両校合同練習会の中で母校卓球部への求心力が高まり、相高卓球部OB会設立の気運が盛り上がってきたものである。

設立は、昭和42年1月1日設立総会を開催し、会則を決め、会長に只野喜弘、副会長に反畑秀彦・松田賀信、幹事長に西郷徹夫を選び、相馬高校卓球部OB会がスタートすることになった。

事業目的に、会員相互の親睦と母校卓球部発展の後援を掲げたことから現役の選手とOB会員との交歓試合（年1回）を行い親睦と交流を図ってきたが、その外にはこれといった事業をもたないまま10年が過ぎ去っている。

§　馬城杯争奪選手権大会の創設

昭和52年になって、当時相高のPTA副会長であった只野喜弘会長から「来年（昭和53年）母校が創立80周年を迎えることになるが伝統ある卓球部のOB会として、何か記念となるイベントができないか」という相談を受けたことが「馬城杯」創設の発端であった。昭和53年4月23日、相馬高校卓球部OB会と馬城会の共催事業（馬城会からの共催負担金なし）として、相馬市教育委員会をはじめ関係団体及び報道関係各社の後援のもとで、（相馬高校創立80周年記念）「第1回馬城杯争奪卓

球選手権大会」を盛大に開催し成功を収めた。（種目：一般・高校男女シングルス、中学男女シングルス）※参加者200名

以来、この大会は相双地域を中心に、県内はもとより隣県からも500名を越える参加者を得て、毎年盛大に開催されている。

本年で第20回を重ね、当地域に根ざした大会として愛好者に親しまれ、卓球競技の普及振興と競技水準の向上に貢献している。

なお、この大会のために相馬市教育委員会から毎年20万円の助成金の交付を受けている。

§「馬城杯」記念大会（事業）の開催

(1) 昭和55年、第3回大会の開催を記念して、中・高校生及び一般指導者を対象に、元世界卓球チャンピオン「河野満卓球教室」を開催し、世界一の技術と練習方法や指導法の直接指導を受け、卓球を志す選手や指導者の技術向上に大きな成果を収めた。

(2) 昭和62年、第10回大会の開催を記念して、「小・中高生のための卓球教室」を開催し基本技術の習得を中心に実技指導を行い、卓球競技の普及と技術の向上を図った。

(3) 平成9年12月、母校創立100周年記念第20回大会の開催を記念し、次の事業を行った。

＜記念事業＞

① 母校卓球部へ「卓球競技のビデオ14本セット」（13万円相当）を寄贈

② 記念パーティの開催

③ 記念事業募金（募金額35万円）

④ 感謝状贈呈（故只野喜弘前会長ほか4氏と1社）

⑤ 第20回記念大会の開催

「相馬高校創立100周年記念第20回馬城杯争奪卓球選手権大会」として、馬城会の共催のもとで盛大に開催した。

・参加者600名・10種目

§ 現在の主な役員（平成9年～平成10年）

会　　長　西郷徹夫（平成2年～）　　副会長　古山正治・佐々木政喜・伏見利博

常任理事　鈴木誠一・高玉忠利・斎藤智英　　理　事　小泉直人ほか13名、会員108名

§ むすびにかえて～21世紀への私の願い～

中村一中、相馬女子、原町高校、小高工業、相馬高校の卓球部顧問として、長い間多くの選手を育ててきた。振り返って見ると勝利の喜びから幾星霜、自分が育てた選手のその後を誇りに思ったり、苦渋の眼で眺めたりしてきた。そして、勝つことだけに努力する空しさも知るようになった今、相馬からどんな選手が育ったかも、大切なことなのだが、相馬からどんな人物が育ったかは、もっと大切なことではないかと思うようになった。私の願いは、相馬から卓球を他のスポーツ以上に魅力あるものにし、卓球を一人でも発展させる魅力に満ちた指導者、そしてかつての栄光に輝いた相馬の卓球を復活させるスター選手が多く育つことだ。もうそろそろ、そんな人物が出てきてもよいころだ。相馬高校の卓球の歴史に触れたら、部員もOBもその歴史に課せられた使命であると思うに違いない。

相馬高校卓球部で育った人たちにはそれができる。

（相馬高校卓球部OB会／会長　西郷徹夫）

◆ 相馬クラブの活動

代表者　斎　藤　智　英

◇**発足**：昭和48年、相馬高校OBと相馬女子高校OG、そして「相馬市民卓球教室」に参加した愛好者とともに「相馬クラブ」を結成し、活動を開始した。

現在は、社会人会員の外に卓球を志す中学生高校生も加入して、共に練習に励んでいる。

◇**活動**：週に1～2回の練習と各種の地域大会の参加を目標に練習しているが、今後は県大会、さらに

は上級大会への出場を目指して活動を高めていきたい。
練習場は、当初中村一中体育館を使用していたが、廃館になったので現在はアルプス電気（株）のご厚意により当社の体育館を借用しており、大変助かっている。

◇**実績**：☆昭和57年　全国クラブ卓球選手権大会　　ダブルス　優勝（小泉・宍戸）
☆平成10年　全国クラブ卓球選手権大会福島県大会（二部）に優勝し、全国大会に出場した。

◆ 相馬卓球スポーツ少年団の活動

相馬卓球スポーツ少年団指導者　**鈴　木　誠　一**

昭和60年頃に従来から活動していた卓球スポーツ少年団が解散し、相高卓球部OB会が中心となってスポーツ少年団の設立をOB会の総会のたびに要望としてだされました。昭和63年5月に相高卓球部OB会の会員6人が指導者として再結成されて以来、初代代表者指導者の伏見利博OB会副会長を中心として、毎週日曜日の午後1時30分から3時30分までの2時間、卓球を主な活動として実施しました。その他に夏の宿泊訓練（キャンプ）やボーリング大会、大堀焼きの体験、芋煮会、Xmas会等のレクリェーションも取り入れ、卓球づけにならないよう団員や保護者も楽しめるような行事も取り入れ活動を続けてきました。

当時は、小学1年生から中学2年生まで対象に団員を募った結果、テレビタレントによる卓球の番組が放映されていたせいもあって、50人を越える入団希望者があり、全員を入団させ指導してきました。しかし、指導者が交替で練習にあたるということで1日3人の指導者を配置しても、1人で15人の団員の指導がつらくきつい時期が数年続いたことが今でも忘れられません。

現在は、高玉忠利OB会常任理事を代表指導者として小学生だけを受け入れ（小学生時代から団員登録していた者は中学に進学しても入団を認めている。）小学1年から小学6年生までの15人を基本練習を中心に指導し、試合1ケ月前位から応用練習や試合練習を取り入れて指導にあたっています。

スポーツ少年団を結成して10年が過ぎ、団のOBやOGの中には中学や高校、大学等に進学して、それぞれの大会で活躍し、その成績が新聞に掲載されるのをみると、これからも一層頑張って行かなければと強く思っているところです。

◆「相馬卓球クラブ」“たのしい卓球たのしいクラブ”

相馬卓球クラブ会長　**佐　藤　キミ子**

もう、あれから10年が経ってしまったなんて信じられないようです。今、クラブは定着し、会員も増え、和気合い合いのもとに、楽しく練習しています。

この会の発足は、最初に西郷先生による「家庭婦人卓球教室」の開催でした。数名の方が参加し、その後途切れることがなく練習が始まりました。同時に昭和63年に卓球少年スポーツ団が結成され、一緒に旧一中体育館で、練習が始まりました。現在のメンバーとは違いますが、経験者や初心者、次第に会員も増え、最初は技術面でも未熟で、市内の大会止まりでしたが、熱心な練習と努力で、現在は、対外試合にも出られるようになりました。待望の男性も入ってくるようになり平成5年には「相馬卓球クラブ」と改称されました。

今年度は7月に原町市において、“福島県家庭婦人卓球大会”が開催され、当会も参加し、力一杯戦ってきました。残された課題は、いっぱいありました。励みとなるような反省もたくさん出ました。なんといっても仲間の応援や絆がうれしいこのクラブ、“これからも頑張って練習するぞ！”と反省と合わせて、次回へのレベルアップを誓い合いました。

毎週日曜日の午後1時30分～なんとか都合をつけてみんなで練習に励んでいます。美容と健康そして大切な懇親とダベリング？そして勝利を目指して頑張っています。

この会がスムーズに運営できますことは、ステキな人的、物的、両面からいつも支えて良い環境をつくって下さっている方々のお陰と、深く感謝を申し上げております。

（指導者、事務局、アルプス電気株式会社様他、等々）

おわりに、今後共、会員の皆様方の頑張りと、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

～あとがきにかえて～

相馬市卓球協会が設立されてから40年が経ったが、卓球のあゆみを辿ってみると、相馬地域の卓球の歴史はもっと古く、昭和の初期にはその活動の記録が残っている。

この間、多くの先輩たちが卓球に関わり、練習や試合に汗と涙を流し白球に打ち込んだ青春時代の姿が眼に浮かんでくる。また、それぞれの時代に協会に関わり、協会の維持と発展に力を尽くした歴代の会長、理事長、そして役員の方々の卓球を思う心に触れることができたりして、思い出の多くつまった「卓球協会のあゆみ」である。

人の移り変わりとともに、かつては最も地味なスポーツだといわれてきたこの卓球も、用具の改良に始まって、卓球台がダークグリーンからライトブルーに、ボールも白からオレンジ色に、ユニフォームも色彩の制限を少なくしてファッション性が豊かになり、観客の目を楽しませてくれるスポーツに変身してきたことが卓球競技の人気を高め競技人口の増加を生みだしてきている。

「卓球は、楽しい！」・「みんなで卓球を！」という姿が21世紀の卓球として、そこに輝いて見えてくる。

やがては、次の世代の人たちに移っていくことになるが、協会設立40年を一つの節目として、卓球協会が当地域の卓球を志す子供たち、卓球を生涯の友としている市民愛好者のために、新しい相馬の卓球の歴史の創造に向かってその使命を果たし続けることを願ってやまない。

（相馬市卓球協会／会長　西郷徹夫）

◆ 原町市「よつば卓球クラブ」

会長 佐　藤　栄　子

1　設立年月日　昭和60年4月1日

2　設立経過

昭和52年に開設された原町市公民館事業の「婦人学級」のプログラムの中に、料理教室や移動教室などと並んで「婦人卓球教室」が設けられたのを契機に、婦人学級終了後の昭和60年、卓球に魅せられた仲間が相集い、「よつば卓球クラブ」を設立し、活動を開始した。現在は婦人学級のOG以外からも卓球愛好者が加わり、現在の「よつば卓球クラブ」が構成されている。

3　現在の役員・コーチ・会員

＜役　員＞	会　長　佐藤　栄子		副会長　朝倉美智子		庶務会計　遠藤悦子
＜コーチ＞	浜名　秀雄	相沢　辰男	門馬　　昭	西郷　徹夫	佐藤　正幸
＜会　員＞	長山百合子	台内　成子	佐藤三枝子	田原　早苗	山田　志子
	小林　陽子	木幡冨士子	佐藤　典子	志賀みえ子	大橋ヨシ子
	木村　朝子	志賀すえ子	橋本美紀子	笠間タケ子	広瀬美智子
	渡部　　武	佐藤　政男	草野　　忠	新沢　　浩	島　　信男

4　活動状況

○練習日　毎週月曜日 10：00～12：00

※原町スポーツセンター個人開放日（火・水）　9：00～21：00 自主参加

○練習場　原町市文化センター5階

○年間事業計画（平成11年度）

4月　・花　　見（懇親会）

5月　・さつき会（懇親会）

・県ラージボール卓球選手権大会兼卓球ベテラン会春季大会（郡山）
・県すこやかねんりんピック（原町）
6月　・エンドウ杯相双卓球選手権大会
7月　・県家庭婦人卓球大会（須賀川）
・県ラージボール卓球選手権大会兼卓球ベテラン会夏季大会（郡山）
9月　・県卓球ベテラン会夏季大会（郡山）　（硬球・ラージボール）
10月　・原町市民体育大会卓球競技会
・第8回県民スポレク祭（須賀川）
・二本松の菊人形杯卓球大会
11月　・県卓球ベテラン会秋季大会（郡山）　（硬球・ラージボール）
・いも煮会（懇親会）
12月　・馬城杯卓球選手権大会（相馬）
・新地町民卓球大会（新地）
・納会
1月　・新年会
2月　・浮船杯卓球選手権大会（原町）
3月　・総会（懇親会）

○福島県大会の開催（主管）
☆平成元年　福島県家庭婦人卓球大会
☆平成10年　福島県家庭婦人卓球大会
☆平成11年　第7回福島県すこやかねんりんピック大会（協力）

○最近の主な成績（平成8年～平成11年…）
＜平成8年＞
・福島県家庭婦人卓球大会（白河市）　第2部　優勝　第4部　優勝
＜平成9年＞
・福島県家庭婦人卓球大会（二本松市）　第4部　優勝　第2部　（Aチーム）第3位
＜平成10年＞
・福島県家庭婦人卓球大会（原町市）　第4部　Bブロック優勝
・第7回福島県ラージボール卓球選手権大会兼卓球ベテラン会夏季大会（郡山）
初心者の部　準優勝　佐藤　政男
40歳・50歳の部　第3位　佐藤三枝子
・二本松の菊人形杯卓球大会　50代ラージボールの部　準優勝　佐藤三枝子
第3位　台内　成子
・第7回福島県ラージボール卓球選手権大会兼卓球ベテラン会秋季大会（郡山）
60歳以上の部　第3位　西郷　徹夫
＜平成11年＞
・第7回福島県ラージボール卓球選手権大会兼卓球ベテラン会春季大会（郡山）
70歳以上の部　第3位　浜名　秀雄
60歳以上の部　第3位　佐藤　栄子
第3位　西郷　徹夫
・クラブのモットー　「百花斉放」・「和気あいあい」

5　事務局所在地（連絡先）　〒975-0016　原町市仲町2－120
よつば卓球クラブ事務局（会長宅）　佐藤栄子　☎ 0244－24－2347

◆「よつば卓球クラブ」と私

原町市よつば卓球クラブ会長　佐　藤　栄　子

昭和52年、主人の転勤で郡山市から原町市に転住してから、友だちづくりや健康づくりのため、原町市公民館の主催する「婦人学級」に参加いたしましたのが、原町での卓球を始めたきっかけでした。この婦人学級は、年10回の開催で料理づくりや新聞の編集・発行、移動教室など楽しいプログラムがあり、その中に「卓球教室」があったのです。私は、郡山でも仲間と卓球を楽しんできたこともあり、この卓球教室がいつも待ちどおしく思っておりました。「婦人学級」が終了した昭和60年4月に、このまま仲間と別れてしまうのを、残念に思う卓球の同好者とともに規約を定め、「よつば卓球クラブ」を設立いたしました。

その後、活動を共にした一部のグループが、活動方針などの意見の違いから離脱し、別なクラブをつくり活動するということがありました。「去る者は追わず、来る者は拒まず」という気持ちで残った同好の仲間と楽しく活動を続け現在にいたっております。最近になって、私たちのクラブから去っていったかつての仲間が、年月を経た今、一人二人と戻って来るようになりました。

私たちのクラブも、平成元年と平成10年には福島県家庭婦人卓球大会、さらに平成11年には第7回福島県すこやかねんりんピック卓球競技会の開催に当たっては、主管団体の一つとして中心的な役割を果たすまでのクラブ組織に成長してまいりました。これも、良き指導者、良き仲間の支えがあったればこそと、感謝しております。指導者としては、原町市公民館の主催事業であった「卓球教室」の講師として長い間ご指導を受けてきた浜名秀雄（元　原町市卓球協会長）コーチを中心に、私たち女性18名、男性5名が指導を受けています。私たちのクラブが目指すものは「卓球をとおして、健康づくりと仲間との心の交流を図る」ことにあります。

楽しく、明るい雰囲気の中で、限られた時間に精一杯練習に励み、爽やかな汗を流し、時には仲間と食事を共にしたり、雑談に花を咲かせたりして充実した一時を過ごしております。

活動の成果につきましては、初心者の多いクラブとしてのスタートでありましたが、長い間の活動により少しずつ競技水準も向上し、この地域の大会では上位に入賞する選手も育ってきております。また、他地区のクラブとの練習会をとおしてお互いに技術の交流や友好を深めるなど、活発な活動を続けております。

今後の課題といたしましては、メンバーの半数が50歳代から60歳代であることから、「上り坂のスポーツから、下り坂のスポーツへ」と切り替えていく意味でも、練習の中心を「ラージボール卓球」におくことも視野にいれる必要があります。それが、さらにまた新しい仲間を増やすことにつながっていくことになればいいなと考えております。

私たちの「よつば卓球クラブ」は「百花斉放」「和気あいあい」をモットーとして、これからも「卓球を生涯の友」とする仲間とともに、さらにその輪を広げてゆきたいと願っております。

◆ 原町市「フレンズ卓球クラブ」

会長 堀 川 栄 子

1．クラブの名称と代表者

フレンズ卓球クラブ　堀川　栄子

2．設立年月日　昭和62年5月吉日

3．現在の役員と指導者

部　長　堀川　栄子　　会　計　羽野　京子

指導者として　笠間　文武、門馬　昭、梅田　強

4．活動状況

・構成人員（男性5人）笠間　文武、門馬　昭、梅田　強、佐々木伸郎、佐藤　眞一

（女性10人）渡部マサ子、清水　鈴子、青田エイ子、羽野　京子、高橋喜枝子

根本　淑子、我妻　美加、天野クニ子、堀川　栄子、柿崎

・活動時間としては、毎週金曜日　文化センター6階　AM10：00～AM12：00

毎週水曜日　市スポーツセンター　AM10：00～AM12：00

毎週火曜日・水曜日　PM19：00～PM21：00

・成績としては

家庭婦人卓球大会には、平成9年度の二本松大会から出場しています。

平成10年度の原町市スポーツセンターで行われました、家婦連の試合は、二部Aブロック団体戦。

フレンズA団体戦のメンバーは5人一組　青田・高橋・渡部・堀川・根本で構成しました。

平成9年度　三部で優勝

平成10年度　二部で優勝と皆で頑張っております。

・クラブのモットー

(1) 健康と若さで充実した生活　(2) 楽しく、楽しく　(3) 友達づくり

日頃の家事や子育てから開放され、目一杯気持ちのいい汗を流すのは、とても爽快です。花見や芋煮会、忘年会なども行って会員の親睦を深めてあります。

会では、広く会員を募集しています。健康づくり、楽しい仲間づくりを目指してあなたも一緒にいい汗を流しませんか？ お待ちしています。

5．連絡先

原町市高見町2－212－2　堀川　栄子

◆ 小高町卓球協会

会長 脇 坂 一 男

1．設　立　昭和38年9月

2．沿　革　昭和38年9月　小高町卓球協会設立　初代会長　半谷敬寿氏

40年10月　第1回小高町町民卓球大会開催(平成10年33回大会に至る)

48年4月　二代目会長　菅波勇夫氏

50年6月　小高町卓球教室開催後のスポ少

51年4月　小高クラブ設立　松本森雄　高橋功らで始まる。

53年4月　三代目会長　長谷川幸一氏　卓球教室が小高卓球スポ少となる。

55年～58年　コスモス杯開催

浜通りの中学生、高校生、一般を対称とした団体戦を開催

3．歴代会長

初　代	半谷　敬寿	S 38. 9～48. 3	S 55. 9.13	物故
2代目	菅波　勇夫	S 48. 4～53. 3	H　4. 3	物故
3代目	長谷川幸一	S 53. 4～H9. 3		

4代目　脇坂　一男　H 9. 4～

4．現在の主な役員

会　長　脇坂　一男　　副会長　田代　保広　　理　事　和田　好弘　　事務局　南原　裕之

顧　問　長谷川幸一

5．年間活動内容

1）小高町町民卓球大会　　2）スポーツ少年団指導

6．小高町出身の主な選手

鈴木重郎治　　半谷　敬寿　　菅波　勇夫　　紺野　幹男　　佐藤　敏行　　原　　晃

7．連絡先

事務局　〒979-2101　　相馬郡小高町片草字一里段55　　南原　裕之　　TEL0244－44－3512

〔小高卓球スポ少〕

1．名　称　　小高卓球スポーツ少年団

2．設　立　　昭和53年4月

3．団員数　　平成10年度　　小学生　男5名・女12名

指導者　長谷川幸一・原　　晃・南原裕之・原　　由子・原　久仁枝

4．指導方針

1）子供の将来を考え、子供のための指導をする。　　2）挨拶をキチンとする。

3）返事をしっかりさせる。　　4）基本を大切に、能力を向上させる。

5）スポーツ愛好家になるように育てる。

5．活動状況　　毎週　月・木曜日の2回、19時から21時まで練習している。

〔小高クラブ〕

1．設　立　　昭和51年4月

2．名　称　　小高卓球クラブ

3．代　表　　部長　鈴木　敏栄

4．現在の役員　部長　鈴木　敏栄・副部長　原久　仁枝・会計　南原　裕之・事務局　南原　裕之

5．連絡先　　〒979-2101　小高町片草字一里段55　南原　裕之　TEL 0244－44－3512

6．構成人員　　男10・女5

7．年間活動計画

1）小高町町民卓球大会協力　　2）夏期キャンプ　　3）冬期合宿（スキー）

4）県民スポーツ大会参加　　5）各種大会参加

◆ 富岡町の卓球

部長　仲　山　陽　一

〔富岡町体育協会卓球部〕（富岡卓友会）

・部　長　　仲山　陽一

・事務局　　伊藤英治・佐藤晴夫

・主な参加大会　　福島県総合体育大会・双葉郡総合体育大会・相双地域市町村交歓卓球大会

・主催する大会　　富岡町民卓球大会（毎年6月）

・部員数9名

・練習日　　毎週火曜・金曜日

・事務局所在地　　双葉郡富岡町小浜字中央547－3伊藤英治（TEL.0240－22－2266）

〔富岡町スポーツ少年団卓球部〕

・団　長　　伊藤　英治

・事務局　佐藤　晴夫
・指導者　伊藤英治・佐藤晴夫・丸添隆義・藤社友則
・主な参加大会　ENDO杯卓球大会・双葉杯争奪卓球選手権大会・浮舟杯争奪卓球選手権大会
県総体スポ少相双大会・相双地域市町村交歓卓球大会
・部員数　小学生7名・中学生8名
・練習日　毎週火曜・金曜日
・事務所所在地　双葉郡富岡町字夜の森南4－49佐藤晴夫（TEL.0240－22－0234）

◆ 双葉クラブ

会長 **大　野　光　幸**

1．創　立　昭和52年頃
2．代表者　初代　横山　実 52年～平成10年　2代目　大野　光幸　平成11年～
3．現在のクラブ員数　18名
4．活動状況

双葉クラブは、約20年前地元の高校卒業卓球愛好家4人が集まり、横山実さんを部長に発足しました。当時は試合があると横山さんの家に前日から泊まり酒を飲んだり帰ってから反省会をしたり、またクラブ員でキャンプや旅行等も実施していました。

現在は、当時のメンバーも少なくなり、新メンバーも年々少なくなっていますが、各種大会参加や、毎年実施している双葉クラブ主催「双葉杯卓球大会」の開催、又地元の子供達のスポ少指導員として多方面に活躍しています。

練習は、仕事の都合などにより全員がそろってとはいきませんが毎週火、木、土の夕方6時30分から（土曜日は、6時から）双葉町児童館体育館でスポ少と一緒に練習しています。

今後は卓球をもう一度はじめたい人や初心者の方も歓迎します。

みんなで楽しく、そしていい汗をかいて卓球に親しんで行きたいと思います。

◆ 新地町卓球クラブ

代表 **早　川　　清**

1．クラブの名称と代表者
「新地町卓球クラブ」　代表者　早　川　　清
2．設立年月日
・「平成元年１０月１日」
設立に至った経緯
・現在会員の子供たちが卓球を行っていたこと、会員自身が以前に卓球を経験していたことにより、自分たちでも集まってラリーを楽しもうという主旨で結成されました。

又、各種のスポーツ大会に参加した中で、卓球の持つ緩急自在なテクニックと面白味を目のあたりにし、再度、若い頃の気持ちが蘇り、クラブ結成に動いたこともあります。

3．現在の役員と指導者
役員体制
・会　長（代表者）　早川　　清
・副会長　八巻　京子・桜井　真正
・事務局　門馬みよ子
・指導者　八巻　京子・桜井　真正・中江　義昭・鈴木　正則
・平成３年からは、体育協会にも加盟し年間計画の基に活動しています。
4．活動状況
・月２回（第2、4）土曜日に、駒ヶ嶺公民館（体育館）において、子供たちから年輩の方まで約20

名の会員が一緒になって練習しています。
・練習時間は、夜7時～9時までです。
大会等が近い場合は、臨時練習日も設けます。
・町民が卓球を通して、お互いの健康増進と親睦を図るためをモットーに活動しています。
又、卓球愛好者の掘り起こしと、底辺拡大を目標にして、平成5年から町民親善卓球大会をクラブが中心になって、平成9年から卓球教室を公民館と協力して開催しています。
・現在は、相双地域で各種卓球大会にも参加し、会員自身の技術の向上と他市町村の卓球愛好者との交流も図っているところです。
・年間計画（平成11年度）
4月　クラブ総会
7月　松川浦荘杯大会参加
8月　県総体相双地域大会参加
12月　馬城杯選手権大会
12月　町民親善大会開催
1月　相双地域市町村交歓大会参加
3月　相馬市卓球協会親善大会参加

5．事務局所在地（連絡先）
・事務局は、新地公民館の体育協会事務局を窓口とさせていただいております。
・連絡先　〒979－2703　新地町小川字向山5
新地町卓球クラブ（代表）　早川　清　TEL：0244－62－2445

第6節　福島県卓球協会いわき支部

〈いわき卓球協会〉

支部長　佐　藤　昭　典

1）支部設立当時

昭和初期、いわき支部の卓球活動の流れの中心は東北電力、植田営林署、常陽銀行、国鉄職員など十数名の愛好者であった。昭和7年に信沢要が群馬県から植田営林署に転勤でこられてから各種大会が開催されるようになった。その後、福島民報 永野、平三小教頭 藁谷伸六郎、磐城高校 押切良純、信沢要が中心になって浜通りスポーツ連盟を組織し、現在のいわき卓球協会の土台を造った。

当時の練習場は銀行の会議室、丸ほん（現在家具店）の二階などであり、このころから県内各地で卓球大会が行われるようになってきた。特にいわき地方では磐城高等女学校に卓球部があり、県内で活躍していた。

昭和21年、いわき民報 永野、渋沢祐二、信沢要を中心第一回のチーム戦（磐城卓球選手権）を小名浜の日本水素講堂において行ったのを契機として各種大会が開かれるようになった。

当時、日本水素に、酒井、山本、新妻、水沢、呉羽化学には宮川、平クラブには渋沢、信沢、鷲、星野、井上、馬目、新妻、東北電力に加沢、広辺、金成、その他、工藤（古河）がいわき地方の強豪選手として知られていた。

2）いわき卓球協会の設立

昭和32年、磐城高校教員鈴木民郎が中心となって協会設立にあたり、福島県議会議員坂本浅次郎を会長、渋沢祐二を理事長として石城卓球協会が発足した。その後、市町村合併により、いわき市の誕生と共に、いわき卓球協会と改称、現在にいたっている。

3）選手強化と活躍したチーム、選手

昭和34年から昭和36年までの3年間、実・学対抗戦を実施したのをはじめ、大学選手（中央大学）

を招待し、中学・高校選手の強化講習会を行うなど青少年選手層の強化につとめた。

実業団大会では、昭和28年～40年まで連続13年間、県大会で優勝し、全国大会に出場した常磐炭鉱チームの活躍があった。その後、昭和46年～50年の4年連続常磐製作所が県大会優勝を飾っている。

昭和40年代になると県大会でのいわき勢の活躍が目立ち、一般男子の遠藤光二（高萩）、安達広、下山田守一、小島篤、佐藤敏行、一般女子の渡辺三代子、石井淑子、高野静子、井戸川貴子、佐藤延枝が優勝を飾っている。

軟式男子では雨沢哲弘、橋本昭夫（吉沢）、安達広、橋本義一、軟式女子でも大森が優勝40才以上の部では佐藤昭典、吉沢昭夫、橋本義一が優勝を飾っている。高校では昭和30年代、宮崎紀・吉田和彦（磐城）井上健一・伊藤昌夫（平工）佐藤武（平商）斉藤恵美子（磐女）、昭和40年代、鈴木啓・小川正浩・桜沢秀二・下山田守一（平工）斉藤好夫・蓬田博（好間）長谷川昭二郎（磐城）安部幸雄（勿来）平栗ヨシエ・山口恵子・遠藤潤・石井淑子・田巻愛子・渡辺三代子（磐一）・高野静子・鈴木春江（平商）長谷川ミツエ（磐女）緑川利子（磐女）、昭和50年代、下山田守夫・小島篤・鈴木誠一（平工）小沢孝一（勿来）鈴木是行（磐城）緑川朝久（磐農）田村浩子（平商）井戸川貴子・下山田久美子（磐女）が県大会で優勝している。

昭和60年代以降では昭和63年の新人大会で丹野哲也（勿工）が優勝したのを最後に10数年いわき地区から県大会優勝者がでていない。団体戦では、男子の平工、磐城、勿工、女子の磐一、磐女、平商が活躍し、特に昭和40年代の平工、磐一の活躍が目立っている。中学校では、団体戦で昭和38年の好間中、昭和58年から昭和59年の植田中の活躍があり、平成に入っては、豊間中の活躍が目立ち、ふくしま国体に大きく貢献した。

平成11年の中体連県大会で男子、小名浜一、女子、勿来一が優勝する。また、磐城一高が高体連県大会において準優勝を果たし、古豪復活の兆しが見える。

なお、現在のいわき卓球協会主催による年間の試合数は、4試合、強化練習会3回、主管試合で11試合、強化試合、年間を合計19試合を数える。

4）主催事業

大会名称	沿革	参加H10
いわき地区高校・高専大会	S61～	120名
徳姫杯卓球大会	H10～	200名
いわき卓球会長杯大会	S63～	55チーム
いわき卓球選手権大会	S21～	950名

※徳姫杯卓球大会では、時代まつりの行事のなかで内郷卓球協会が主催していた大会（H0～H9）

5）主管した主な大会・行事

平成4年　会場　内郷一中　　撫順市との卓球技術交流会 15名

平成5年　会場　撫順市体育館　　撫順市へ青少年卓球団を派遣 9名

6）卓球競技の普及振興と支部協会の発展に貢献した功労者

渋沢　祐二（S7～S35）　浜通りスポーツ連盟の中心選手として活躍し、又、支部長として卓球協会設立といわき地区卓球の普及・振興に貢献した。

信沢　　要（S7～H7）　支部長として又、福島県卓球協会の役員として卓球技術の向上と協会発展に尽力した。

【市町村卓球協会の組織と活動】

①名　　称　　いわき家庭婦人卓球連盟

設　　立　　昭和56年1月1日

主な役員　名誉会長　斉藤恵美子　会長　櫛田　利子　理事長　熊坂　紀子
事務局長　森井　洋子
年間事業　いわき家庭婦人卓球大会（個人戦）　いわき家庭婦人卓球大会（団体戦）
（ラージボール）

年間予算　164,000円
事務局　植田町館跡3－33（☎ 0246－63－6683）

②名　称　いわき卓球ベテラン会
設　立　平成6年1月20日
主な役員　会長　吉沢　昭夫　副会長　酒井　忠久・大橋　柾・小沼　仁平・斉藤恵美子
理事長　鈴木　栄喜　事務局長　桑原　高志
年間事業　年令別ラージボール大会　地区対抗ラージボール大会
いわき市民種目別大会　新春ラージボール大会
各種大会（ラージボール大会）審判派遣
年間予算　280,000円
事務局　平北白土字知原17（☎ 0246－25－0626）

③名　称　いわき市平卓球協会
設　立　平成元年4月1日
主な役員　顧問　信沢　要　会長　野木　孝夫　副会長　桑原　高志
理事長　吉田　武　事務局長　吉田　武
年間事業　平地区ふれあい家庭卓球大会（婦人の部、親子ダブルスの部）
事務局　平字作町二丁目7－2（☎ 0246－22－6270）

④名　称　小名浜卓球連盟
設　立　昭和42年4月1日
主な役員　会長　酒井　忠久　副会長　吉田　正・丹野八重子・白土　正衛
事務局長　吉田　敏徳
年間事業　ラージボール大会　いわき市民スポーツ大会
事務局　中之作字川岸31（☎ 0246－55－7223）

⑤名　称　勿来卓球協会
設　立　昭和42年4月1日
主な役員　会長　庄司　文次　副会長　高木　一夫・三瓶　清次　理事長　長谷川昭二郎
事務局長　長谷川昭二郎
年間事業　勿来地区卓球大会
年間予算　75,000円
事務局　勿来町酒井字青柳68－1（☎ 0246－65－3010）

⑥名　称　常磐卓球連盟
設　立　昭和53年4月1日
主な役員　会長　鈴木　栄喜　副会長　佐藤　聡・斉藤　昌尚　事務局長　菅原　伸一
年間事業　常磐地区卓球大会
年間予算　40,000円
事務局　常磐湯本町辰ノ口24－1（☎ 0246－42－3737）

⑦名　称　いわき市内郷卓球協会
設　立　昭和53年3月　日
主な役員　顧問　吉沢　昭夫　会長　小沼　仁平　副会長　高萩　光　事務局長　馬目　富弘
年間事業　内郷地区卓球大会（個人戦）　内郷卓球協会長杯卓球大会（団体戦）
年間予算　250,000円

事務局　内郷綴町大木下28－1（☎ 0246－26－2271）

【卓球クラブ・愛好会の組織と活動】

①名　称　勿来卓球クラブ（スポーツ少年団）
代　表　三瓶　清次
設　立　平成5年9月1日
役　員　保護者会長　斉藤　孝
指導者名　三瓶　清次・三瓶ミツエ
活動状況　ア）活動内容　週4回2時間の練習　県内外の各種大会に参加
イ）構成人員　小学生・中学生（女子）15名
ウ）成　績　県大会出場程度（個人、団体）
エ）クラブのモットー　夢・目標をもって強くなること
事務局　勿来町酒井酒井原66－2（☎ 0246－65－4714）

②名　称　四倉卓球クラブ
代　表　荒川　哲栄
設　立　昭和54年4月1日
役　員　指導者名　佐藤　忠義・佐藤トミ子・鈴木　秀樹
活動状況　ア）活動内容　四倉町民卓球大会の開催
少年・少女への卓球指導（週3回2時間の練習）
県内外各種大会への参加
イ）構成人員　四倉在住の成年、小・中学生
ウ）成　績　県大会出場程度（個人、団体）
エ）クラブのモットー　文武両道、楽しんで強くなる
事務局　四倉町東四丁目66－1（☎ 0246－32－5812）

③名　称　みやた卓球クラブ
代　表　宮田　英夫
設　立　平成3年10月1日
役　員　保護者会長　田巻　幸一
指導者名　宮田　英男・渡辺　貴史・大田原　保・丹野哲也
田子　光輝・岡部　和恵
活動状況　ア）活動内容　週3～4回練習　各種大会参加
イ）構成人員　小・中学生　男女13名
ウ）成　績　県・全国大会出場
エ）クラブのモットー　創意・工夫・努力
事務局　いわき市平作町1－2－2　神田ビル201（☎ 0246－22－0131）

④名　称　ラージボール愛好会
代　表　吉沢　昭夫
設　立　平成10年4月1日
役　員　会長　吉沢　昭夫　事務局長　平井　実
活動状況　ア）活動内容　毎週火・金曜日の2回練習
イ）構成人員　60才以上8名、60才以下1名
ウ）成　績（活躍した選手）
吉沢　昭夫　平成9年全国スポレク祭県代表
桑原　高志　平成9年全国スポレク祭県代表
吉沢　昭夫　平成10年すこやかネンリンピック県代表
小沼　仁平　平成10年すこやかネンリンピック県代表

エ）クラブのモットー　健康の維持・ラージボールの普及拡大

事務局　内郷綴町大木下28－1（☎ 0246－26－2271）

【いわき卓球協会歴代会長】

昭和21年～28年	浜通りスポーツ連盟会長	蓮沼　龍輔
昭和29年～31年	石城体育協会卓球部長	押切　良純
昭和32年～40年	石城卓球協会長	坂本浅次郎
昭和41年～47年	いわき卓球協会長	坂本浅次郎
昭和48年～53年	いわき卓球協会長	蛭田　馨
昭和54年～60年	いわき卓球協会長	沼田　一之
昭和61年～平成８年	いわき卓球協会長	田中　直紀
平成９年～	いわき卓球協会長	佐藤　昭典

【福島県卓球協会いわき支部】

歴代役員

支部長	藁谷伸六郎(S・21～25)	押切　良純(S・26～29)	渋沢　祐二(S・30～35)
	信沢　要(S・36～48)	蛭田　馨(S・49～53)	沼田　一之(S・54～60)
	田中　直紀(S・61～H・7)	佐藤　昭典(H・8～)	
理事長	藁谷伸六郎(S・21～25)	押切　良純(S・26～29)	渋沢　祐二(S・30～35)
	信沢　要(S・36～43)	佐藤　昭典(S・44～47)	山崎　勲(S・48～49)
	吉沢　昭夫(S・50～56)	雨沢　哲弘(S・57～H・7)	野木　孝夫(H・8～9)
	白土　正衛(H・10～)		
事務局長	藁谷伸六郎(S・21～25)	押切　良純(S・26～29)	渋沢　祐二(S・30～35)
	信沢　要(S・36～37)	大橋　柾(S・38～44)	山崎　勲(S・45～47)
	鈴木　理介(S・48～53)	雨沢　哲弘(S・54～55)	武田喜美男(S・56～)
	白土　正衛(S・57～H・7)	鈴木　栄喜(H・8～)	

【いわき卓球協会役員】（H・11）

顧問	信沢　要・山崎　勲・田中　直紀
会長	佐藤　昭典
副会長	大橋　柾・吉沢　昭夫・雨沢　哲弘・鈴木理介・野木孝夫
理事長	白土　正衛
副理事長	橋本　義一・鈴木　是行
常任理事	吉田　武・宮田　英夫・先崎　清・大鳴　克子・斉藤恵美子・佐藤トミ子 櫛田　利子・浅川　康夫
理事	佐藤　富弘・高萩　光二・桑原　高志・三瓶　清次・下山田守一・澁谷　博光 大平　繁則・小野　匡之・丹治　一記・渡辺　俊行・橋本　彰夫・野崎由美子 菅野　祐智・井田　玲子
監事	吉田　清三・坂本　良弘・鳥居　孝栄
事務局長	鈴木　栄喜
事務次長	熊田　礼一
会計	新井田円子

理事長　白土正衛（記）

第4部　福島県卓球協会加盟団体の概要

第1節　福島県高等学校体育連盟卓球専門部 …… 207

第2節　福島県中学校体育連盟卓球専門部 …… 213

第3節　福島県教職員卓球連盟 …… 217

第4節　福島県実業団卓球連盟 …… 220

第5節　福島県家庭婦人卓球連盟 …… 221

第6節　福島県卓球ベテラン会 …… 222

第1節　福島県高等学校体育連盟卓球専門部

専門委員長　渡　部　長　二

1．専門部のあゆみ

福島県高体連「30年のあゆみ」によると、昭和21年8月福島県高体連の前身である中学校校友会連盟が発足、9月に中学校体育大会が福島県体育協会主催のもと開かれ、卓球は10チームが参加した。翌22年は7月に平で開催され、11月21日・22日は飯坂町に於て、第1回東北中学校卓球大会（現東北高等学校卓球選手権大会）が福島県体育協会・県卓球協会主管のもと団体予選を兼ねて実施された。23年は学制改革に伴い、中学校は高等学校となり、県中学校校友会連盟は発展的に解消し、県高等学校体育連盟となり、同年の県高校体育大会は県体育協会主催の県総合体育大会に包含されて実施された。昭和25年県高体連規約で5ブロック（県北・県南・会津・浜・相馬）に支部を置き、各高等学校長を参与とし、又単一種目の部長・副部長制を取り入れて、現高体連組織の基盤は確立された。卓球は部長笹山進（福島女）・副部長三浦勝美（安達）が就任した。以後二氏を中心に大会は運営されたが、県卓球協会の多大なご協力とご援助を頂いたということである。

30年に県高校総体として第1回が福島で開催され、この時から専門委員長（専門部が規約上確立したのは昭和27年）は各地区代表の互選によって選ぶ公選制となり、初代委員長には三浦勝美（安達）が選ばれた。翌31年から40年までの10年間は宇賀神喜嗣（郡山女）、41年から44年までの4年間は斎藤正雄（成蹊女）が就任した。又42年までの部会長は開催地区の校長が務めた。その後部会長は山崎啓哲（磐城第一・43～51）、白石永甫（郡山女・52）、丹藤祐輔（福島西女・53、会津・54～56）の各校長が委員長会（地区委員長6名と県委員長の計7名）によって選出され、57年選出された村上啓正（福島東・57、安積・58～60）部会長の時、新たな専門部規約がつくられ、評議員会（県委員長と各地区委員長を含む3名の評議員計19名）によって選出されるようになり、五十嵐大典（県石川・61、喜多方・62～63）、平山宏（保原1～4）、北原正三（平工5、郡北工6～8）、根本健作（情報9～現在）に至っている。専門委員長については昭和45年から62年までの18年間、大橋柾（平工業）が務め現体制の基本となる規約改正に尽力した。昭和63年から5代目渡部長二（喜女元～10、若商63・11）が就任、指導者の意見が大いに採り入れられる体制になるよう、規約の改正を行った。その後元年、2年、3年、4年、5年と毎年改正し、9年、10年にも一部改正し現在に至っている。その間、県卓球協会にはご援助いただき、特に平石家治前理事長には多大なるご協力をうけ、高体連との連携は一層密になった。

執行部は交代時期を迎えており、新委員長を選出し、新鮮な感覚を持ち常に改革・向上の気持ちを忘れず失敗を恐れず勇気を持って積極・果敢に実行することを願っている。

2．主な大会成績（全国大会中心）

県高体連30年誌（大橋柾前委員長の執筆）によれば、全国大会ベスト16に23年会津、26年郡山女、31年喜多方女が入り、特に35年は成蹊女（斎藤正雄監督）が全国大会ベスト8に入賞と活躍した。個人では30年の全国高校総体で奥村厚子（成蹊女）がシングルス第2位、ダブルスは加藤智江子と組んで第5位に入賞、35年には尾形正子（成蹊女）が全日本ジュニア第3位に入賞、36年富田徳子（成蹊女）が全日本ジュニアにランク入りした。

40年代に入り、44年磐城第一（山崎勲監督）が全国高校総体ベスト16、個人では渡辺三代子（磐城一）が43年全日本ジュニア・44年全国高校総体でランクに入り、45年佐藤ふみ子（郡山女）が全国高校総体ベスト8に入賞、48年全国高校総体では高野静子（平商）と増田淳子（安女）が全国ランクに入り、県全体のレベルアップに貢献した。

50年代に入ると53年福島総体めざし強化したが男子は強化校が実力伯仲、しかし本番の高校総体では喜多方女子（渡部長二監督）が久し振りに全国ベスト16に入っただけであった。個人では54年井戸川貴子（磐城女）が全日本ジュニアにランク入り、57年落合茂幸・上田光一組が全国高校総体ダブルス第5位に入賞したにとどまり、東北では成績を上げてはいるが全国ではあと一歩の成績であった。

平成に入り、平成7年の第50回国民体育大会が本県開催が決定されるに至り、強化がはかられ平成3年秋山月彦（須賀川）が全国高校総体ランク、平成5年になると藤田由希（安達）はヨーロッパ遠征に選ばれ団体2位、ダブルス優勝とすばらしい成績であった（平成6・7年もヨーロッパ遠征に選ばれ団体・シングルスとも優勝と立派な成績を残した）。また全国高校総体ではランク入り、高橋美智子と組んだダブルスは第3位に入賞、岡田晶子（福女）はベスト8に入賞した。平成6年は藤田・高橋組（安達）が全国高校総体ダブルス第3位入賞、平成7年は藤田・高橋組ベスト8、馮海濤（原町工）が第2位入賞し、国体では男子は3位、女子は第5位入賞とこれまでにない良い成績を上げることができた。平成8年は馮海濤（松栄）が高校総体で第2位、高橋美貴江（安達）は全日本ジュニア第3位入賞、国体では男女とも第5位に入賞した。平成9年は馮海濤（松栄）が高校総体でランク、国体では女子の第5位入賞、全日本ジュニアでは帝京安積の今福豊と渡辺隆司が第3位と第5位に入賞した。平成10年は全国高校総体で帝京安積（熊谷勝明監督）が県にとって初めての学校対抗第3位入賞、個人でも今福豊・渡辺隆司組がダブルス第3位入賞、シングルスでもともにベスト8に入賞とすばらしい成績を残してくれた。

専門部歴代役員一覧

年度	県部会長	県委員長	県北委員長	県中委員長	県南委員長	会津委員長	いわき委員長	相双委員長
30	児玉卯一郎（安　達）	三浦　勝美（安　積）	笹山　進（福島女）	本田　克彦（郡山商）	和知　一（白　河）	武広　勇（石山女）	富樫和雄（平商）	志賀　智（小高農）
31	押切　良純（郡山女）	宇賀神喜嗣（郡山女）	〃	宇賀神喜嗣（郡山女）	〃	〃	〃	松崎　義次（浪　江）
32	黒河内忠孝（喜　女）	〃	〃	〃	〃	佐藤　昌志（会津工）	〃	〃
33	橋本　憲司（磐　城）	〃	三浦勝美（安達）	〃	木村　友之（白　河）	慶徳　健（会津女）	〃	〃
34	鈴木　英一（福島工）	〃	斎藤正雄（成蹊女）	〃	〃	〃	佐藤　博（磐城女）	〃
35	新妻　三郎（安積女）	〃	〃	那知上　佑（安　積）	羽生　正允（白　河）	小林　肇（　　）	〃	佐々木正則（相馬女）
36	大和田道隆（磐　城）	〃	〃	〃	〃	家久来芳夫（若松商）	鈴木　民郎（磐　城）	〃
37	西間木正己（　　）	〃	〃	宗像　次男（郡山工）	〃	〃	山崎　勲（磐城一）	〃
38	水戸　和一（浪　江）	〃	〃	〃	〃	冠木　常夫（喜商工）	〃	松崎　義次（浪　江）
39	明石　智真（成蹊女）	〃	〃	〃	斎藤　喜蔵（白河女）	金川　孝（会津女）	大橋　柾（平　工）	西郷　徹夫（相馬女）
40	慶徳　健（　　）	〃	〃	〃	〃	鈴木　守信（若松商）	〃	〃
41	吉田　三義（遠　野）	斎藤　正雄（成蹊女）	大川　滋（福島女）	〃	〃	〃	〃	〃
42	遠藤　武雄（喜　工）	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
43	山崎　啓哲（磐城一）	〃	萩原　国宏（緑ケ丘）	松崎　俊一（郡西工）	〃	伊東　守信（若松商）	〃	〃
44	〃	〃	湯沢　昭吉（学福工）	〃	〃（須　女）	平山　宏（会津女）	〃	〃

年度	県部会長	県委員長	県北委員長	県中委員長	県南委員長	会津委員長	いわき委員長	相双委員長
45	山崎　啓哲 （磐城一）	大橋　　柾 （平　工）	三浦　勝美 （安達）	松崎　俊一 （郡西工）	斎藤　喜蔵 （須　女）	渡部　洋一 （会津農）	山崎　　勲 （磐城一）	西郷　徹夫 （相馬女）
46	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
47	〃	〃	森　　義男 （福　島）	〃	伊東　守信 （白農工）	〃 （大　沼）	〃	〃
48	〃	〃	〃	〃 （郡山女）	〃 （矢　吹）	〃	〃	〃
49	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 （原　町）
50	〃	〃	〃	〃	〃 （県石川）	〃	根本　圭長 （四　倉）	〃
51	〃	〃	湯沢　昭吉 （学福工）	〃	〃	〃 （会津農）	〃	〃
52	白石　永甫 （郡山女）	〃	〃	〃	〃	〃	〃 （平　商）	〃
53	丹藤　祐輔 （福西女）	〃	〃	〃	〃	〃	〃	小林　昭洋 （小高工）
54	〃 （会　津）	〃	〃	〃	石射　八郎 （須　女）	〃	鈴木　理介 （磐城一）	〃
55	〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
56	村上　啓正 （福島東）	〃	佐藤　嘉継 （福西女）	〃	飛田　　徹 （矢　吹）	〃	〃	西郷　徹夫 （相　馬）
57	〃 （安　積）	〃	〃	〃	〃	渡部　長二 （喜　女）	〃	〃
58	〃	〃	〃	〃	〃	〃 （若松商）	〃	池田　弘一 （双　葉）
59	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
60	五十嵐大典 （県石川）	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 （原　町）
61	〃 （喜多方）	〃	〃	〃	〃	〃	〃	門馬　文善 （小高工）
62	〃	〃	佐藤　紀雄 （福島北）	猪狩　修一 （郡山商）	〃	斎藤　隆弘 （会　津）	〃	〃
63	平山　　宏 （保　原）	渡部　長二 （若松商）	〃	〃	小松　　正 （学石川）	〃	〃	〃
1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 （相馬女）
2	〃	〃	〃	飛田　　徹 （郡山女）	〃	〃	〃	池田　弘一 （原　町）
3	〃	〃 （喜　女）	佐藤　紀雄 （福西女）	〃	〃	高橋　　司 （会津女）	先崎　　清 （内　郷）	〃

年度	県部会長	県委員長	県北委員長	県中委員長	県南委員長	会津委員長	いわき委員長	相双委員長
4	平山　宏 （保　原）	渡部　長二 （喜　女）	佐藤　紀雄 （福西女）	飛田　徹 （郡山女）	鹿岡　国俊 （白河実）	高橋　司 （会津女）	先崎　清 （内　郷）	池田　弘一 （原　町）
5	北原　正三 （郡山北工）	〃	〃	〃	〃	遠藤良市 （喜多方）	〃	浅川　康夫 （小高商）
6	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
7	〃	〃	〃 （福島西）	〃	〃	〃	〃	鈴木　重之 （浪　江）
8	〃	〃	〃	〃	〃	〃	鈴木　是行 （磐城一）	唯野　聖一 （相　馬）
9	根本健作 （情　報）	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
10	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	木村　哲也 （小高工）
11	〃	〃 （若松商）	〃	佐藤　敏夫 （郡大附）	武田　和久 （情報）	〃	〃	湯沢　智幸 （原　町）

〈高校体育大会卓球競技〉

═══ 前回までの優勝高校・優勝者 ═══

回		学校対抗	シングルス	高校名	ダブルス	高校名	年度・開催地
1	男	福　島	佐原　昌幸	相　馬	梅原　哲次・佐原　昌幸	相　馬	昭和30年
	女	若松女子	奥村　厚子	成蹊女子	奥村　厚子・加藤智江子	成蹊女子	福　島　市
2	男	福　島	諸星　光雄	相　馬	桜井　武・木村　三夫	福　島	昭和31年
	女	喜多方女子	佐藤　則子	喜多方女子	大沢　寛子・小高　敏子	若松女子	郡　山　市
3	男	原　町	三林　俊一	福　島	高城　義紘・林　幸雄	原　町	昭和32年
	女	福島成蹊女子	小原　公子	保　原	長谷川孝子・斉藤　ワカ	喜多方女子	会津若松市
4	男	郡山商業	宮崎　紀	磐　城	宮崎　紀・丸山　文昇	磐　城	昭和33年
	女	会津女子	水野　和子	喜多方女子	水野　和子・斉藤　和子	喜多方女子	いわき市
5	男	相　馬	門馬　伯行	相　馬	反畑　秀彦・門馬　伯行	相　馬	昭和34年
	女	福島成蹊女子	梅津　泰子	成蹊女子	尾形　正子・長沢マリ子	成蹊女子	福　島　市
6	男	磐　城	伏見　利博	相　馬	伏見　利博・相原　剛	相　馬	昭和35年
	女	福島成蹊女子	尾形　正子	成蹊女子	尾形　正子・長沢マリ子	成蹊女子	郡　山　市
7	男	相　馬	伏見　利博	相　馬	飛田　正道・吉田　和彦	磐　城	昭和36年
	女	福島成蹊女子	佐藤　トキ	成蹊女子	丸　ヨシ子・田崎　朝子	会津女子	いわき市
8	男	相　馬	吉田　和彦	磐　城	吉田　和彦・熊谷　宏文	磐　城	昭和37年
	女	福島成蹊女子	富田　徳子	成蹊女子	富田　徳子・阿部　ミネ	成蹊女子	会津若松市
9	男	磐　城	伊藤　昌夫	平　工　業	佐藤　昭・佐藤　武	平　商　業	昭和38年
	女	磐城女子	吉田マサ子	郡山女子	斉藤美恵子・磯上　佳津	磐城女子	浪　江　町

回		学校対抗	シングルス	高校名	ダブルス	高校名	年度・開催地
10	男	平工業	佐藤　武	平商業	佐藤　英幸・坂本　正則	郡山商業	昭和39年
	女	福島女子	三瓶　利子	郡山女子	舟山　節子・菊田　承子	福島女子	福島市
11	男	福島商業	鈴木　啓	平工業	小川　正浩・鈴木　啓	平工業	昭和40年
	女	磐城第一	久野　怜子	磐城女子	佐川千代子・加藤　豊子	成蹊女子	須賀川市
12	男	相馬	桜沢　秀二	平工業	白井　俊雄・紺野　正司	福島商業	昭和41年
	女	磐城第一	本田みき子	福島女子	山口　恵子・田巻　愛子	磐城第一	勿来市
13	男	郡山商業	白岩　明男	若松商業	大堀　均・永峰　武俊	会津工業	昭和42年
	女	福島成蹊女子	大竹ミサ子	会津女子	海東　さみ・富谷　明子	相馬女子	会津若松市
14	男	平工業	芳賀　善光	若松商業	渡辺　勇・日向寺良幸	平工業	昭和43年
	女	磐城第一	遠藤　潤	磐城第一	遠藤　潤・遠藤　恒子	磐城第一	相馬市
15	男	勿来工業	蓬田　博	好間	長谷川昭二郎・鈴木　民治	磐城	昭和44年
	女	磐城第一	奥山　節子	福島女子	渡辺三代子・猪狩　良子	磐城第一	福島市
16	男	平工業	蓬田　博	好間	小西　正光・千代住　滋	磐城	昭和45年
	女	郡山女子	佐藤ふみ子	郡山女子	石井　淑子・斉野　恵子	磐城第一	須賀川市
17	男	平工業	安倍　幸雄	勿来工業	山口　健二・佐々木幸雄	平工業	昭和46年
	女	相馬女子	佐藤香代子	平商業	加藤　幸子・天野　和子	相馬女子	いわき市
18	男	郡山商業	佐藤　光昭	郡山商業	佐藤　光昭・横山　俊秀	郡山商業	昭和47年
	女	磐城第一	石井　淑子	磐城第一	太田　範子・増田　淳子	安積女子	喜多方市
19	男	勿来工業	下山田守一	平工業	下山田守一・水野　幸彦	平工業	昭和48年
	女	磐城第一	高野　静子	平商業	草野　京子・柴田美也子	磐城第一	小高町
20	男	喜多方工業	渡辺　善光	田村	小野寺敏彦・鈴木　善光	喜多方商業	昭和49年
	女	保原	鈴木　春江	平商業	斉藤　京子・宍戸つや子	保原	福島市
21	男	喜多方工業	根本　新一	白河	木村　義栄・武藤　勇	喜多方工業	昭和50年
	女	相馬女子	佐藤　美穂	会津女子	佐藤　美穂・高原ますみ	会津女子	郡山市
22	男	喜多方工業	下山田守夫	平工業	下山田守夫・高田　篤	平工業	昭和51年
	女	喜多方女子	須藤　泰子	喜多方高	中川　睦子・菊地久美子	喜多方女子	いわき市
23	男	福島商業	小野寺和美	喜多方工業	佐藤　敏行・大野　光幸	小高工業	昭和52年
	女	喜多方女子	菊地久美子	喜多方女子	中川　睦子・菊地久美子	喜多方女子	喜多方市
24	男	喜多方工業	横山　武浩	福島工業	斉藤　達也・今野　政寿	福島商業	昭和53年
	女	喜多方女子	田村　浩子	平商業	田村　浩子・小野　美恵	平商業	福島市
25	男	平工業	小島　篤	平工業	大内　雅之・高野　恒	福島商業	昭和54年
	女	平商業	井戸川貴子	磐城女子	内海香津代・鈴木真由美	喜多方	相馬市
26	男	福島工業	鈴木誠一	平工業	須田　仁・湯沢　学	福島工業	昭和55年
	女	磐城女子	井戸川貴子	磐城女子	安藤ひとみ・志賀豊子	日女工業	郡山市
27	男	福島工業	落合茂幸	福島工業	渡部洋二・佐藤隆司	喜多方工業	昭和56年
	女	喜多方女子	井戸川貴子	磐城女子	菅家奈々子・小田切浩美	喜多方女子	喜多方市
28	男	福島工業	落合茂幸	福島工業	上田光一・落合茂幸	福島工業	昭和57年
	女	喜多方女子	赤城美智代	喜多方女子	青山千賀子・赤城美智代	喜多方女子	いわき市

回		学校対抗	シングルス	高校名	ダブルス	高校名	年度・開催地
29	男	福島工業	佐藤　敏美	福島工業	鈴木　是行・浅川　英典	磐城	昭和58年
	女	喜多方女子	下山田久美子	磐城女子	下山田久美子・浜松　康子	磐城女子	福島市
30	男	福島工業	平石　秀樹	須賀川	渡辺　俊雄・樋田　祐介	福島工業	昭和59年
	女	喜多方女子	星　智恵	相馬女子	安倍　一美・佐藤　誠子	喜多方女子	郡山市
31	男	小高工業	緑川　朝久	磐城農業	馬場　伸一・物江　淳一	安積商業	昭和60年
	女	磐城女子	八巻　貴子	保原	小檜山弘美・大川原聡美	磐城第一	原町市
32	男	学法石川	小塩　浩	須賀川	壁谷　卓・黒森　伸夫	安積	昭和61年
	女	喜多方女子	五十嵐さゆり	喜多方女子	五十嵐さゆり・秋山　和代	喜多方女子	喜多方市
33	男	福島工業	小塩　浩	須賀川	窪木　清彦・西牧　和雄	学法石川	昭和62年
	女	喜多方女子	古川　明子	喜多方女子	東条　由美・古川　明子	喜多方女子	原町市
34	男	磐城	深谷　亮幸	安積	金子　雄治・三瓶　剛治	会津	昭和63年
	女	喜多方女子	古川　明子	喜多方女子	東条　由美・古川　明子	喜多方女子	福島市
35	男	勿来工業	山本　健史	須賀川	佐藤　拓・橋本　彰夫	磐城	平成元年
	女	喜多方女子	薄　香織	喜多方女子	佐野　修子・山口　育子	喜多方女子	白河市
36	男	須賀川	山本　健史	須賀川	山本　健史・秋山　月彦	須賀川	平成2年
	女	喜多方女子	深谷　純子	安積女子	薄　香織・山口　育子	喜多方女子	いわき市
37	男	須賀川	秋山　月彦	須賀川	山本　健史・秋山　月彦	須賀川	平成3年
	女	尚志	深谷　純子	安積女子	遠藤可奈子・大平ももこ	磐城第一	原町市
38	男	福島工業	中島　龍一	会津農林	和泉　潤・小川　伸治	福島工業	平成4年
	女	桜の聖母	菊地　弓子	尚志	今福　麻美・佐藤奈津子	桜の聖母	福島市
39	男	福島工業	谷川　嘉成	会津工業	高橋　誠・藤田　俊介	福島工業	平成5年
	女	福島女子	菊地　弓子	尚志	岡田　晶子・岡田　直子	福島女子	郡山市
40	男	小高工業	遊佐　充裕	小高工業	渡辺　和幸・中島　仁	帝京安積	平成6年
	女	安達	藤田　由希	安達	藤田　由希・高橋美智子	安達	須賀川市
41	男	帝京安積	馮　海涛	原町工業	渡辺　和幸・横田　敬春	帝京安積	平成7年
	女	安達	高橋美智子	安達	根本恵美子・山木　成愛	郡山女子	須賀川市
42	男	帝京安積	遊佐　充裕	小高工業	横田　敬春・渡辺　隆司	帝京安積	平成8年
	女	安達	高橋美貴江	安達	三原　香織・伊藤　絵美	小高工業	福島市
43	男	帝京安積	馮　海涛	松栄	横田　敬春・渡辺　隆司	帝京安積	平成9年
	女	小高工業	高橋美貴江	安達	高橋美貴江・西山亜希子	安達	喜多方市
44	男	帝京安積	今福　豊	帝京安積	渡辺　隆司・今福　豊	帝京安積	平成10年
	女	小高工業	玉木　尚子	郡山東	玉木　尚子・荒井　沙織	郡山東	原町市
45	男	帝京安積	佐藤　久也	帝京安積	菅野　貴之・二木　徹	福島工業	平成11年
	女	郡山東	五十川美美	安積女子	大和田ゆかり・美野佐知子	郡山東	福島市

東北高校卓球選手権大会（優勝）

◎学校対抗の部　※印男子

第３回大会（昭和24年）　郡山女子高校
第６回大会（昭和27年）　福島女子高校
第13回大会（昭和34年）※相 馬 高 校
第４回大会（昭和25年）　福島女子高校
第10回大会（昭和31年）　喜多方女子高校
第50回大会（平成８年）※帝京安積高校

◎シングルの部

第３回大会（昭和24年）
　秋澤　静江（郡山女）
第４回大会（昭和25年）
　後藤　昭子（福島女）
第５回大会（昭和26年）
　後藤　英子（福島女）
第11回大会（昭和32年）
　諸星　光雄（相馬）
第34回大会
　井戸川貴子（磐城女）
第47回大会（平成５年）
　藤田　由希（安達）
第50回大会（平成８年）
　馮　　海濤（松栄）
　高橋美貴江（安達）

◎ダブルスの部

第３回大会（昭和24年）
　秋澤　静江・大原　芳枝（郡山女）
第４回大会（昭和25年）
　後藤　昭子・後藤　英子（福島女）
第９回大会（昭和30年）
　奥山　厚子・加藤智江子（成蹊女）
第13回大会（昭和34年）
　木幡　　功・佐々木政喜（相馬）
第25回大会（昭和46年）
　小西　正光・千代　住滋（磐城）
第39回大会（昭和60年）
　馬場　伸一・物江　淳一（若松商）
第49回大会（平成７年）
　藤田　由希・高橋美智子（安達）
第50回大会（平成８年）
　横田　敬春・渡辺　隆司（帝京安積）

第２節　福島県中学校体育連盟卓球専門部

元委員長　**壁　谷　之　夫**

昭和26年私が教師になった頃は、軟式卓球だけだったので、早速硬式を取り入れ、二本立ての大会を持った。しかしそれは、郡・市大会の上の地区大会（６地区）である。そこで何とか、県大会をとの声が上ったが、１ケ所に集めて県大会を開催するのは、種々の問題があった。その第１は、広い会場の確保。第２は経費の面である。でも、やっとの事で、第１回の県大会を昭和33年に開催できた。勿論、団体戦のみ。個人のシングルスは第４回大会より行った。ダブルスは、ずっとおくれて、平成２年から実施できた。さて、初めての県大会は、地区大会をやらず、各郡から１チーム、市から代表２チームで、計24チームによるトーナメント法の試合で、１日で大会が終わった。それは前にも述べたように、経費の問題で、当時は競技力の向上等は問題でなく、いかに経費を軽減して県大会を実施するのかが、第一であったわけである。

しかし、この方法も回を重ねるにつれて問題が生じた。それは、県代表として東北大会に望んでも初戦で敗れる事が多く、全国大会迄つながらない事だ。そこでもっと競技力向上をと叫ばれだした。今度は郡・市代表制を改め、地区代表制をとり昭和48年の第16回大会より正式に、試合日を２日間とし、予選リーグ（16チームの４ブロックによる）、決勝トーナメント（各ブロック上位２チームによる）方式に改めたわけである。

この方法は現在も行っているが、決してベターとは思っていない。それは各地区（６地区）代表の１位を予選リーグで、同ブロックに２チームを入れなければならないからである。

この方法は私が提案し、東北大会でも昭和59年から行っている。

さて、中体連の県委員長は後に列記するが（歴代委員長名と学校名）32回（平成元年）迄に14人と猫の目のように変わった。その理由は、当時、県大会を開催する場合の第一の問題は、広い会場である。殆ど高校の体育館を借りたのである。そして県大会を6地区持廻りで実施している為、その地区の、卓球専門部長を県の委員長にすることにしていた。その方が地元高校と会場・補助員等の折衝、卓球台の運搬等、何かと便利であったからである。しかし、このように毎年委員長が変わる組織は、東北でも上位に入れない弱い県になった大きな原因の一つと考えられる。

私が、在職していた平成元年迄に、東北大会で優勝したのは、（シングルスのみ）

昭和54年、岩本　繭郎（喜多方三）……福島市

〃〃55年、渡辺　厚子（古殿中）……多賀城市

〃〃63年、深谷　純子（郡山ザベリオ）……原町市　　以上3名だけだった。

平成2年から、県委員長を、郡山ザベリオ中荒木久勝先生にお願いした。

そして、私の在職中、「やればできる」と云う信念で、北山中、若松四、喜多方一が県優勝、東北大会入賞、全国大会へと活躍してくれた、水戸昇先生、その他でも活躍してくれた多くの先生方に感謝したい。

又、荒木久勝先生は、県の委員長になったら責任を感じてか、平成5年、遂に東北大会で初優勝（女子団体で）を成し遂げたのである。

それも出来るべくして出来たものだと、私は彼を知っているから言えるのである。

団体戦での選手の使い方が、とてもすばらしい。普通、補欠と云われている選手でも、どこかの試合に、ちゃんと使って、試合を経験させるのである。普通の監督では、とても真似できない事を平気でやってしまうのである。

○チームのために。

1．「和」は無限の力を秘めている。　　2．汗でできた人間関係は一生の財産。

3．本当の敵は味方のコートにある。

◎そして選手には!!

1．技術を磨く前に心を磨け。　　2．しぼられにくい選手は、大成しない。

委員長　**長　場　壮　夫**（須賀川一）

福島県中体連と卓球部会が、ここ10年間で、どのように改革されてきたかを簡単にまとめると、次の4つになる。

(1)　ダブルスが、平成2年度から取り入れられた。

(2)　6地区持回り開催から、2地区合同3ブロック、持回り開催へ変更された。

(3)　県大会の支部地区予選大会が、3日以内となった。

(4)　県専門委員長が、開催地区専門部長から数年間の専門委員長へ固定された。

まず、ダブルスについては、シングルス16名という、限定された選手だけではなく、ダブルス16、ペア32名の参加は、より多くの選手に、県大会参加の喜びを与える点で、大きなメリットがある。東北大会まではつながらないにしても、県大会に参加したという自信と満足感は大きいと思う。東北でも福島県だけの開催だが、今後も大切な種目として残していきたい。

次に、2地区合同3ブロック持回り開催だが、1地区での全種目開催では、会場の確保が難しく、競技種目での会場争いが緩和されてきている。

今後は種目ごとの分離開催へ移行していくのではないかと考えられる。

3つ目は、支部地区予選大会が3日以内になったことだが、中体連の行事削減と経費負担の軽減の波に押され、仕方ないのかも知れないが、選手のことを考えると、余裕のある県大会の予選であってほしい気もする。

最後に、数年間の専門委員長固定だが、毎年、委員長が変わると、前年度までの経過が分からず、混

乱してしまうので、数年の継続が必要で、東北大会が6年に1度、本県で開催されるわけだが、それを一応の目安として交替していくことが望ましいと考える。

さて、10年間の福島県の選手の活躍を見てみると、藤田由希（二本松一⇨中央大）の平成4年度、全国中学校女子シングルス優勝、遊佐充裕（信陵⇨愛知工業大）の平成5年度東北中学校男子シングルス優勝や、団体戦での郡山ザベリオ学園中学校の東北大会優勝、全国中学校ベスト13入りがあげられる。今後、全国大会等での活躍を期待したい。

この全国大会での活躍には、第50回国民体育大会（須賀川アリーナ）での選手強化があり、各クラブチームの努力が大きな成果をあげた。主な指導者には深谷秀三氏（富久山卓球）、斎藤一美氏（セントラル）、橋本義一氏（いわき卓球）などがあげられる。現在も中学生選手を指導されており、今後も一層のご指導をよろしくお願いしたい。

また、福島県の中学生の強化策としては、5月の学年別卓球選手権大会、11月の新人卓球大会と2月の中学校選抜大会があり、さらに年6回の小中高校生選抜強化リーグ大会などが、県卓球協会と協力して有機的な強化をしてきている。

中学校の主な指導者には、荒木久勝氏（ザベリオ）、大嶋克子氏（小名浜一）、佐藤敏行氏（豊間・飯舘）、上石健一氏（二本松一）、佐藤博氏（玉野・尚英）、菊池進氏（植田・天栄）、小野田純子氏（須賀川三・郡山六）、菊地敏美氏（熱海・御舘）、などがあげられる。また、若手の指導者として高橋伸一（原町三）、徳田政之（塙）、小田切敬（会北）、岩本繭郎（二本松三）、五十嵐毅（須釜）、武田信一（鏡石）、長谷川賢治（二本松二）の各氏の活躍に期待する。

◇歴代の委員長名と学校名

①松崎　俊一（郡山一）　昭和33・34・37
②壁谷　之夫（瀬　川）　昭和35・36・43・49・59・60・63・平成元
③伊藤　二郎（飯　野）　昭和38
④菅野　　隆（郡山四）　昭和39・41
⑤志賀　俊勝（内郷一）　昭和40・42・46・50
⑥安斎　驟遥（若松二）　昭和44・48
⑦野地　松男（日和田）　昭和45
⑧柳内秀之助（信　陵）　昭和47
⑨井上　六郎（双　葉）　昭和51・56
⑩本田　勝義（岳　陽）　昭和52・57
⑪蓮沼　　昭（若松二）　昭和58
⑫水戸　　昇（若松四）　昭和53
⑬荻原　義弘（喜久田）　昭和54
⑭武田喜美男（平　一）　昭和55・61・62
⑮荒木　久勝（ザベリオ）平成2・3・4・5・6・7
⑯長場　壮夫（二　瀬）　平成8・9・10（須賀川一）平成11（現）
※壁谷之夫氏は、福島県初の国際審判員。

むすびに、一言。

壁　谷　之　夫

体育館が無いので、教室の机を廊下にだして練習をした。

あるいは、特別教室を毎日片付けての練習、地理的条件で、練習試合も満足に出来なかった。又、その頃の生徒は素直で、引っ込み思案の生徒達で、勝負魂を持たせる為、徹底的に精神訓練が必要だった。

心身共に発育発達期にある、中学時代こそスポーツを通じ健全な体と精神を培う、最も大事な年代です。21世紀の我が国をになう、若人のために……

中学校には、本当に卓球を愛する熱心な指導者が、寝食を忘れて、指導に専念されております。

そして、この県大会で育った中学生が、現在福島県の中核として、団体、その他の大会で活躍していると思うとき、想い出の一コマ一コマが喜びとなり、私にとって生涯、心の張りとなって、元気づけてくれるでしょう。

「温故知新」と言いますが、過去を知ることが次のステップのもとになると思います。

多くの困難をのりこえ、中学卓球界の発展のために、尽力された多数の人々の努力に心より感謝を申し上げ、むすびといたします。本当にありがとうございました。

福島県中学校総合体育大会成績一覧表

（優勝校一覧）

回	年度	男子団体 優勝	女子団体 優勝
1	33	中村一	山都
2	34	好間	楢原
3	35	鹿島	飯野
4	36	好間	飯野
5	37	好間	飯野
6	38	好間	山都二
7	39	好間	船引
8	40	入遠野	富岡一
9	41	勿来二	富岡一
10	42	好間	富岡一
11	43	植田	内郷三
12	44	郡山五	富岡一
13	45	植田	四倉
14	46	尚英	四倉
15	47	入遠野	久之浜
16	48	植田	北山
17	49	植田	北山
18	50	植田	喜多方三
19	51	小名浜二	北山
20	52	喜多方三	平一
21	53	若松四	若松四
22	54	喜多方三	古殿
23	55	古殿	古殿
24	56	植田	古殿
25	57	喜多方三	植田
26	58	白河中央	明和
27	59	小名浜一	喜多方一
28	60	植田	喜多方一
29	61	植田	喜多方一
30	62	喜多方三	植田
31	63	須賀川	郡山ザベリオ学園
32	元	福島三	郡山ザベリオ学園
33	2	玉野	岳陽
34	3	豊間	豊間
35	4	豊間	二本松一
36	5	豊間	豊間
37	6	豊間	郡山ザベリオ学園
38	7	豊間	飯館
39	8	蓬莱	飯館
40	9	尚英	郡山ザベリオ学園
41	10	小名浜一	郡山ザベリオ学園
42	11	小名浜一	勿来一

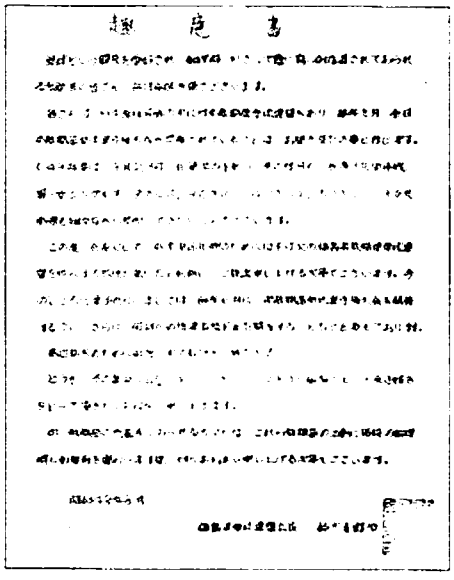
回	年度	男子個人 優勝		女子個人 優勝	
4	昭和36	鈴木秀治	(郡山三)	星栄子	(楢原)
5	37	横村真一	(中村一)	関依子	(飯野)
6	38	桜沢秀二	(好間)	猪狩美津江	(富岡一)
7	39	鈴木敏夫	(入遠野)	緑川利子	(勿来二)
8	40	平子俊記	(入遠野)	森山志代子	(白河南部)
9	41	鈴木重男	(福島一)	渡辺三代子	(富岡一)
10	42	鈴木和人	(勿来二)	細山広美	(富岡一)
11	43	水野清志	(矢吹)	猪狩栄子	(富岡一)
12	44	小野尚	(小名浜一)	石井淑子	(久之浜)
13	45	菅野末治	(尚英)	菅原久美子	(四倉)
14	46	桜井真正	(尚英)	佐藤恭子	(久之浜)
15	47	高橋賢司	(福島四)	二瓶あけみ	(福島四)
16	48	下山田守夫	(植田)	千葉治恵	(北山)
17	49	田子博道	(植田)	須藤泰子	(北山)
18	50	高橋典彦	(植田)	内海光子	(北山)
19	51	武藤雄治	(北山)	東條恵美	(北山)
20	52	鈴木誠一	(古殿)	小野恵美	(平一)
21	53	我妻利真	(古殿)	小沼ヒロ子	(若松四)
22	54	岩本爾朗	(喜多方三)	渡辺厚子	(古殿)
23	55	最上幸夫	(古殿)	渡辺厚子	(古殿)
24	56	酒井健一	(若松四)	大山真由美	(田島)
25	57	山本勝	(古殿)	種村明美	(鹿島)
26	58	成田好雄	(郡山二)	大越早苗	(白河中央)
27	59	小塩浩	(須賀川二)	佐野仁美	(喜多方一)
28	60	深谷亮幸	(行健)	古川明子	(喜多方一)
29	61	佐藤拓	(平一)	佐野修子	(喜多方一)
30	62	村松誠市	(原町三)	深谷純子	(郡山ザベリオ学園)
31	63	村松誠市	(原町三)	深谷純子	(郡山ザベリオ学園)
32	平成元	宮田庸一	(蓬莱)	斎藤暖恵	(植田)
33	2	谷川嘉成	(若松四)	藤田由希	(二本松一)
34	3	永山健一	(豊間)	藤田由希	(二本松一)
35	4	遊佐充裕	(信陵)	藤田由希	(二本松一)
36	5	遊佐充裕	(信陵)	今福愛	(二本松三)
37	6	永山京介	(豊間)	高橋美貴江	(二本松二)
38	7	山廼邊朗	(豊間)	玉木尚子	(行健)
39	8	佐藤悠記	(蓬莱)	藤田小夜	(二本松一)
40	9	横山和広	(若松四)	三原沙織	(豊間)
41	10	藤沢孝益	(石住)	三原沙織	(豊間)
42	11	大和田直樹	(大東)	玉木杏子	(郡山ザベリオ学園)

第3節　福島県教職員卓球連盟

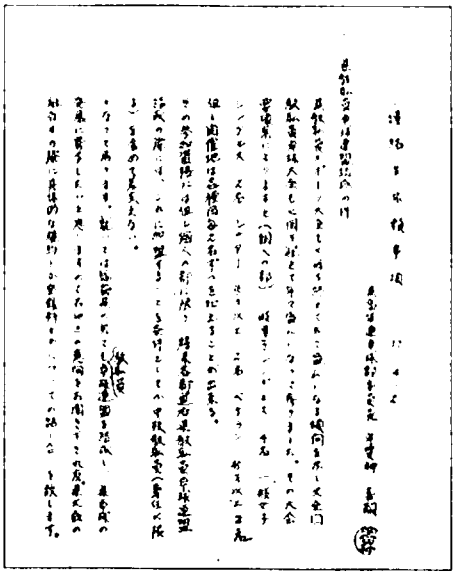
理事長　菊　地　敏　美

本件の教職員連盟の結成は、昭和49年度の行健小学校で行われた第1回福島県教職員卓球大会開催のときである。また、その前年には下記のような趣意書が会員に発送され、結成に向けての準備をしている。

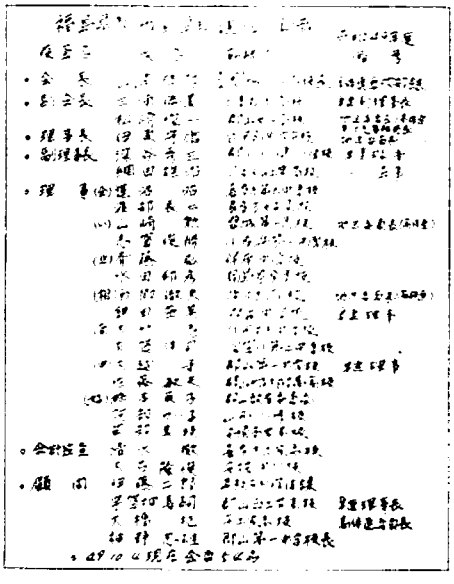
連盟の結成と同時に組織編成が行われた。初代会長には磐城第一高等学校長の山崎啓哲氏が副会長には三浦・松崎の両氏が選出され、また理事長には伊東守信氏が就き、現在の教職員卓球連盟の礎を築きあげた。



趣意書



この結成に尽力された主な方には、三浦勝美氏、松崎俊一氏、伊東守信氏、深谷秀三氏があげられ、校務多忙の中連絡をとりながら準備を進めていった。この組織編成で注目したいのは、各地区代表理事と女子理事の選出である。現在のように教員に採用される数も急激に減少し、しかも卓球を経験している先生を探すのにたいへん苦労していることから考えると羨ましい限りである。



連盟結成以前の活動は、宇賀神喜嗣氏、大橋征氏、丹藤祐輔氏、佐久間直氏、壁谷之夫氏、大越守氏の方々が活発に行っており、チームを組んで全国教職員卓球選手権大会にも参加をしていた。古くは、昭和32年山形県酒田市で開催された第2回大会をはじめ、昭和38年京都で開催された第8回大会では、すばらしい試合で善戦し、大変誉められたと宇賀神氏は話しておられる。結成10年以上も前から、有志により全国大会等に積極的に参加しておられたことは、驚きと同時にその熱意に感動させられる。

参考までに昭和37年に宇賀神氏が出された連絡並依頼事項という興味深い資料を掲載したい。

また、結成前年の昭和48年神奈川県藤沢市で開催された全国大会には、関氏、渡部氏、深谷氏を中心とした若いメンバーで参加している。教職員卓球連盟の

足跡を大きく三つに分けるとすれば、結成以前と結成時が第一期と言えるであろう。

昭和49年に正式に連盟が発足してからは、理事長の伊東守信氏をはじめ、故蓮沼昭氏、渡部長二氏、深谷秀三氏が中心となって活動した。この時期には、外山義彦氏、菅野博輝氏、佐藤敏夫氏、塙仁一氏、斎藤隆弘氏、荒木久勝氏、西畑薫氏などの新しい先生も多く入会した。年1回の総会と県大会は、日ごろの卓球指導談議や親睦を深めることを目的に、各地区の理事が開催責任者となり会場持ち回りで実施した。現在のように県大会レベルの大会が少なかった時期でもあり、貴重な情報交換の場として、とても重要であったことは確かである。全国大会にも積極的に参加し、卓球をとおして夏休みを有意義に過ごしていたようである。また、初代の理事長であった伊東守信氏が県卓球協会の事務局長になられたので、後任に蓮沼昭氏が就くことになった。

全国大会に出場したときの逸話はたくさんあるが、いくつか聞いて知っている範囲で紹介してみたい。

【昭和49年佐賀大会】

この時は確か塙仁一氏が会計、佐藤敏夫氏が庶務を担当した。九州旅行にもかかわらず予定は4万円程度の格安料金であったという。しかしいざ九州に到着してみると、毎晩毎晩1万円ずつの臨時徴収があったそうである。旅費4万円とは名ばかりで、列車の運賃と旅館の予約料だけだったようだ。旅行が終了するまで、財布の中身を見てヒヤヒヤものだったことだろう。

また、帰りの夜行列車でのこと。列車乗り継ぎのために大阪駅に降り立った。乗り継ぎ列車のホームに行くと、何とその列車は10分前に発車してしまっていたのである。福島に無事帰って来たのが不思議なくらいだったそうだ。

〈昭和54年 奈良大会にて〉

【昭和50年名古屋大会】

名古屋といえば荒木先生。なぜなら中京大学出身の荒木先生は、学生時代の4年間を過ごした街だからである。そこで練習会場などいろいろと下調べをしていった。到着してすぐに「行くぞ」と言われたので練習会場に案内しようとしたところ、行き先は雀荘だったそうだ。前もっていろいろと調べ手配したのは何だったのかと嘆いていた。

【昭和52年宮崎大会】

昼間に鹿児島県と対戦、結果は惜敗だった。夜宿泊先に鹿児島県がいっしょであることがわかり、昼の借りを返すべくマージャンを申し込んだ。結果は圧勝。福島県と鹿児島県の戦いは、明治維新から続いているのだろうか。大会終了後に、野生の馬が見られる都井岬に立ち寄った。宿に着くなりマージャンが始まり、徹夜になってしまった。帰る間際になって旅館のおかみさんに「いったい何しに来たの」と叱られようやく馬を見に行ったとか。ほんとうに見たかどうかは定かでない。

【昭和56年浜松大会】

この年は、パチンコのフィーバーがとてもはやっていた。郡山駅集合にもかかわらず、出発時間ぎりぎりになっても郡山在住の荒木先生の姿が見えなかった。痺れを切らし諦め乗車しようとしたとき、両脇にパチンコの景品を抱えて走ってくる荒木先生がいた。集合時間よりずいぶん前に到着したのでひやかし半分でパチンコを始めた。どうせ時間がないので、一獲千金を夢見てフィーバーをやったそうだ。時間も少なくなり止めようとしたそのとき、何と777がそろってしまった。出発に遅れるという焦りが募る中、ぎりぎりまで出して隣に譲ってきたそうだ。そのため、換金もできず景品のまま大会に出かけたのである。

また、大会開催地浜松の高級なホテルで食事をとった時のこと。短パン姿だった荒木先生が入場を拒否され、最後まで抵抗したが結局OKが出なかったという落ちまでついているのである。

【昭和57年沖縄大会】

全国大会が始まって以来、初めての沖縄開催である。故蓮沼先生を団長に、大会割引航空運賃もあってか家族で出かける方も多かった。沢宏一氏、佐藤敏行氏、上石健一氏、遊佐ひろみ氏、寺西（佐久間）礼子氏、須藤（宍戸）泰子氏などの若い先生も加わり、たいへんにぎやかな大会になったようだ。卓球もさる事ながら観光も思う存分に楽しんだ。ただ心残りは、沖縄にはマージャンの貸し出しがなかったことである。

＜昭和57年 沖縄大会にて＞

ここまでエピソードをまじえながら活動の足跡を記したが、卓球の試合結果も蓮沼氏のランク入り2回をはじめ荒木氏のベスト8等たいへん優秀であった。このあたりまでが第二期であろう。

残念なことは、ここまで教職員卓球連盟をリードし盛りたててきた蓮沼昭理事長が、昭和59年2月に42歳の若さでお亡くなりになったことである。ここに心よりご冥福をお祈り申し上げたい。

その後理事長を引き継いだのは渡部長二氏である。高体連卓球部専門委員長も兼任され、多忙極まりない中、若手の先生を率いて全国大会に出場した。中でも女子の監督で名采配ぶりを発揮した。寺西（佐久間）・須藤（武藤）志津組の2年連続第2位をはじめ、寺西氏のランク5入りはりっぱである。また、開催地の各所巡りにも気を配っていただき、昭和62年の函館開催のおりは、北海道をオートキャンプしながら観光できたことは、とてもよい思い出である。この時から須藤正徳氏や生井一弥氏、女子では安藤（小倉）英子氏、遠藤まさ子氏がいっしょに参加するようになった。私も渡部理事長と何回かいっしょに参加しダブルスも組ませていただいたが、試合毎にラケットと戦型が違うのには驚いた。きっと対戦相手はもっと面を食らったことだろう。でも、相手がやりずらいのか3・4回戦までいつも勝ち進んだのは不思議である。

昭和59年の古川大会の折りに、平成2年の大会を東北の交通が便利のよい地で開催してほしいという要請が正式にあった。宮城、岩手はもう開催しているため福島のどこかでということになった。その後いろいろと検討した結果、新幹線が通り、全国大会の運営経験がある郡山市での開催が決定した。全国大会開催にあたり組織も再編成され、会長に初代理事長の伊東守信氏、副会長に深谷秀三氏、理事長に菊地敏美が就くことになった。

第35回全国教職員卓球選手権大会（郡山大会）の準備は、地元の郡山市卓球協会はじめ福島県卓球協会の全面的な支援をいただいた。特に郡山市卓球協会の荒井理事長には、旅館組合との交渉・手配にいたるまで細部にわたり尽力いただき、改めて感謝申し上げたい。また、校務多忙にもかかわらず、伊東会長・深谷副会長には関係機関との連携のため奔走され、大会運営全体を通して適切な助言と指導をしていただいた。

前後になってしまったが、平成元年度の沖縄大会に開催準備のため伊東会長、深谷副会長そして郡山市卓球協会の荒井理事長はじめ、それぞれの家族といっしょに総勢15・6名で出かけた。

前回の沖縄大会の反省を生かし、手作りの持ち運び式のマージャン卓まで持参した。これが、かなりの重さになり、一番がっちりしている荒井理事長に持っていただいた。沖縄から石垣島までマージャンを持ち運び、民宿でもマージャンを始め、あげくのはてに一番負けたのが荒井理事長であった。

郡山大会は、福島県・郡山市卓球協会、100名を超す県内の卓球関係教職員協力のもと、盛大に開催することができた。また、ふくしま国体の強化もはじまり、成

＜平成10年度香川大会にて＞

績もすばらしい結果を残すことができた。男子団体第3位、佐藤敏行・落合茂幸組、寺西・須藤組ともにベスト5、そして学生チャンピオンだった横山選手（近畿大学）を破っての岩本繭郎氏の第2位は、会場を大いに沸かしてくれた。落合氏、佐藤氏のランク入りと遊佐ひろみ氏のシニア第3位も立派である。

郡山大会後は、国体の準備で忙しい中、深谷副会長、岩本繭郎氏、小田切敬氏が中心に参加した。この間、岩本氏の第2位・第3位というすばらしい成績を上げ、平成10年は深谷純子氏が女子で第3位に入賞した。ますますの発展を望みたい。

第4節　福島県実業団卓球連盟

事業団は職場対抗卓球大会として行われていたが、昭和25年より実業団と改称される。
昭和20年代後半からの参加チームを列記する。

（県　北）　福島製作所　福島製鋼　北芝電機　福島市役所　東亜栄養化学工業　東北電力福島
（県　中）　東北電力郡山　保土ケ谷化学工業　郡山市役所　日本専売公社郡山　郡山貯金局
国鉄郡山工機部　大東相互銀行
（会　津）　国鉄会津若松
（いわき）　常磐炭坑　呉羽化学工業　常磐交通　日本水素工業　四倉セメント　東北電力平
国鉄平　平郵便局　品川白煉瓦湯本

昭和41年11月のチーム数は、16（前年度　男9、女5、シングルス　男17、女5）が、実業団の県大会（全日本選手権大会の県予選を兼ねる）の参加数であるが、チームの力はバラバラなので、男子チーム戦は一部、二部制とし、一部は常磐交通、保土ケ谷化学、日本水素、林精器とし、一部はリーグ戦、二部はトーナメントの方法が考えられ、県代表は一部の一位と二部の二位、一部の二位と二部の一位の対戦で決める。このような事も話し合われた。また、地区を県北、いわき、県中（南）に分けて各地区より一名、実業団卓球連盟結成の世話人会を選出する。相双、会津地区は暫定的に卓球支部責任者に世話人になって貰う。これは理事会にも計る、という記事も見える。

昭和40年代で備忘録に登録されたチームを列記する、（既に記載されたチームは省略）

（県　北）　（株）中合　日東紡績（株）福島工場　日本ユニパック（株）　佐藤忠（株）
東北沖電気（株）、松下電器産業（株）
（県　中）　仙台コカコーラボトリング（株）　三菱電機郡山製作所　（株）金門製作所
山水電気（株）福島事業所郡山工場　日本化学三春工場　三春郵便局
（県　南）　林精器製造（株）　石川町役場　大同信号（株）浅川工場　サンスイトランス（株）
（会　津）　オール国鉄福島（会津）　富士通（株）会津工場
（いわき）　（株）常磐製作所　常磐共同火力（株）勿来発電所　モトローラ（株）いわき工場
いわき市役所　いわき通運（株）アルプス電気

昭和40年から実業団チームのレベルアップと交流の為に、福島県実業団スポーツ大会という名称で1部～3部に分けて予選リーグを行い入れ替え戦を行う形式で行われた。

第5回大会の（昭和44年11月30日：日和田文化体育館）参加チームは1部4チーム、2部4チーム、3部6チーム計14チームの参加で行われた。監督会議の内容に①女子チームの参加が多くなるまで、女子チームの男子チーム戦への参加を認める。②男・女の混成チームの男子チーム戦への参加を認める。と言う記事が見られる。

昭和50年代で登録されたチームを列記する。（既に記載されたチームは省略）

（県　北）　福島トヨペット　日東電工　東開工業　新幹線福島　ＮＥＣ福島
（県　中）　日本生命郡山　ナススポーツ　　（県　南）　郡山信用金庫
（会　津）　会津職業訓練校
平成に入るとバブル崩壊による企業経営の悪化に伴い、毎年チーム数が減少し平成１０年度は、計６チームの参加で行われ、平成１１年度は、計５チームの参加で行われた。ますます実業団の存在価値がなくなり、存続そのものが、危ぶまれているのが現状である。

＜全国大会＞　実業団の成績

トーアエイヨー㈱

昭和49年　全日本実業団卓球選手権大会　軟式女子の部　準優勝（東京都）
昭和58年　〃　〃　〃　（草津市）
昭和62年　〃　〃　〃　（上尾市）

日東紡績㈱福島工場

昭和46年　全日本実業団卓球選手権大会　大阪市　硬式女子　第８位
平成７年　全日本実業団卓球選手権大会　松山市　１部トーナメント硬式男子　第３位

須賀川信用金庫

平成５年　全日本実業団卓球選手権大会　福井市　軟式男子　第６位

第５節　福島県家庭婦人卓球連盟

理事長　影　山　　澄

昭和53年、福島市の母袋笙子（当時30歳）は、「卓球レポート」により東京において第１回家庭婦人卓球大会が開かれるのを知る。

常々、30を過ぎ、子育てが一段落したら、また卓球をやりたいと思っていたと言う彼女は、義姉、小関光子と相談、早速それに参加できる手段を探り始める。県卓協との連絡、選手探し等に走りまわり、福女OGを中心に有志が集まる。

小関、母袋、門田、上野、大貫、影山の６名。当時はダブルスの他、30代２名、40代２名の計６名の編成だったと記憶している。（その後50代が加えられ、本年からは60代も加えられる）

なにしろ皆、10年～20年のブランクの果てのにわか練習だから、仲々思うようにはいかなかったが、とにかく出来る限りの練習をしようと意気だけは盛んであった。参加出来なかった仲間達や家族の協力も大きく、カンパによりユニフォームまで揃えてもらう。音頭をとって下さった遠藤節子氏を始め、善意の方たちの協力には心から感謝申し上げたい。

いよいよ上京、松江、横須賀と対戦するも善戦及ばず敗れる。結果はともあれ大会の主旨、全国のレベルをその目で見て福島に帰った母袋は、この活動を継続させるには母体となる組織作りが必要と痛感、まず、地元福島市の組織作りに取組む。

当時、福島ではすでに家庭婦人を対象にした卓球教室（渡辺（旧姓後藤）昭子講師により）が、開かれていたのも幸いした。あっちの公民館、こっちの集会所、学校など卓球をしているらしいと噂を聞くとどこへでも、とにかく小まめに歩いた。

乳飲み子を背負い、さらに自転車の前後にも子供を乗せての活動だったので、容易ではなかったと思う。福島県家庭婦人卓球連盟の今日があるも、基となった福島市連の発足に際して、こういう人達の熱い熱い地道な努力があった事を忘れてはならない。もちろん、各支部においてもスタート時には、それぞれのいきさつやドラマがあったかも知れないが、おゝむね協会主導の元での発足であったと推測している。

昭和54年に福島市、56年会津若松市、57年いわき市と次々に発足、県連発足の気運が徐々に高まった。その間にも福島市で福島市連岸ひろみ理事長の呼びかけによる東北大会、郡山市で当時の県中那須喜明理事長の基で、今のレディース大会のはしりと言える大会が数回開かれ、後の須賀川市での協会主催の大会の基となった。

そして昭和58年ついに福島県家庭婦人卓球連盟の誕生となる。同年4月、福島市割烹「花月」において盛大に発会式を行う。郡山市、白河市はそれを機会に発足したと思う。支部は市町村、郡を単位とし、その後須賀川市、原町市、二本松市、相馬市、双葉郡が加盟。会津若松市は翌年会津一帯を合併、全会津として加盟今日に至っている。

会長にはすでに福島市連の会長職にあって、全国的に知名度の高い後藤英子に依頼、理事長に、岸ひろみ（福島）を選出、副理事長斎藤恵美子（いわき）書記小関光子（福島）会計影山澄（郡山）監査滝口静枝（会津）入谷みちこ（白河）理事若干名のスタートであった。

同年10月には会津若松市で、第1回福島県家庭婦人卓球大会を開催。各地持ち回りの大会も、17回目を迎えた。

平成10年改選役員名簿

顧　問	後藤英子（福島）
会　長	岸ひろみ（福島）
理事長	影山　澄（郡山）……事務局
副理事長	斎藤恵美子（いわき）
会　計	玉木志代子（郡山）
監　査	滝口静枝（会津）入谷みちこ（白河）
理　事	三菅敏江（二本松）佐藤栄子（原町） 小林朋子（会津）佐藤トミ子（いわき） 櫛田利子（いわき）菊地千恵子（福島） 熊川セツ子（福島）横山正子（須賀川） 西片美代子（須賀川）

県大会開催地

1（58）会津若松市	2（59）白河市
3（60）いわき市	4（61）福島市
5（62）郡山市	6（63）原町市
7（元）会津若松市	8（2）白河市
9（3）いわき市	10（4）福島市
11（5）郡山市	12（6）会津若松市
13（7）河東町	14（8）白河市
15（9）二本松市	16（10）原町市
17（11）須賀川市	

第6節　福島県卓球ベテラン会

前事務局長　大　橋　　征

設　立

卓球ベテラン会は、昭和62年に古山栄助（福島）佐藤昭典（いわき）土屋弘（会津）山田英男（郡山）が中心となって県内に居住する女子40才、男子50才以上の卓球愛好者に呼び掛け、会員相互の親睦と卓球技術の向上並びに健康と体力作りを目的として設立された。

大会開催

記念すべき第1回大会は、昭和62年10月25日（日）福島市体育館に男女あわせて32名が参加して行われた。種目はフィフティの部、シックスティの部で男女混合のシングルスで行われた。

①フィフティの部

1位大島実（福島）2位古山栄助（福島）

②シックスティの部

1位岸ひろみ（福島）2位土屋弘（会津）

※第2回大会から男女別の種目で実施する。

発足当時の役員

会　長　信沢　要（いわき）
副会長　土屋　弘（会　津）　佐藤昭典（いわき）
支部長　古山栄助（県　北）　山田英男（郡山　）
　　荒明健二（県　南）　土屋　弘（会津兼）
　　新妻正文（いわき）　浜名秀雄（相　双）

事務局　古山栄助・森合　勲・安東美知子・
　　佐藤愛子（福島）
会　計　松本信子（福島）
監　査　加藤昭治（会津）

新卓球ルール（ラージボール卓球）

日本卓球協会が幅広く卓球の普及を計ると共にレクリェーションとして卓球を楽しむことを目的として昭和63年4月1日新卓球ルールが制定される。

全国健康福祉祭（ねんりんピック）

長寿社会を迎え、高齢者を中心とする国民の健康の保持・増進、社会参加、生きがいの高揚を図り、ふれあいと活力のある長寿社会づくりにむけて気運を醸成しようとする目的で開催される。

厚生省の主催でねんりんピックへの参加は県長寿社会推進機構が窓口で参加が60才以上の高齢者のため、ラージボール卓球の選手選考について卓球ベテラン会事務局に依頼があった。

第1回全国健康福祉祭（ねんりんピック）

昭和63年当時ラージボール卓球は県内では未普及で依頼を受けた古山事務局長は役員会に図り、県内から選手を選抜して練習をつんで参加した。

監督　信沢要
選手　古山栄助（福　島）　佐藤昭典（いわき）
　　山田英男（郡　山）　大槻修二（福　島）
　　吉田栄子（いわき）　越智安子（いわき）
　　中村福子（会　津）　笠原よし子（会津）
　　伊関幸子（福島）

予選リーグ　三重県・川崎市・徳島県　3勝一位
決勝トーナメント　1回戦　福島4－2東京都
　　2回戦　福島2－4愛知県

※初出場でベスト8は立派な成績であった。

全国スポーツ・レクリェーション祭

昭和63年文部省主催で行う全国スポーツレクリェーション祭が開催された。

ラージボール卓球の部には県卓球協会で定めたローティションによって参加していた。

第1回大会には相双地区が参加する。

監督　浜名秀雄
選手　40代　男子　星　孝三
　　女子　佐藤　栄子
　　50代　男子　堀川　清光
　　女子　朝倉美智子
　　60代　男子　浜名　秀雄

ラージボール卓球の経験のないままの大会参加であった為1勝もできなかった。

組織の充実

平成2年事務局を大橋柾（いわき）が担当することになる。

各支部に女性理事の枠を設け、さらに会長指名若干名を加え、定例理事会を開催することによって組織と会運営の充実を図る。

平成3年度から登録制度を導入する。

登録金1,000円登録者名簿を作成する。

ラージボール種目の普及

全国健康福祉祭・全国区スポーツレクリェーション祭にラージボールが卓球が高齢者・初心者にも歓迎され、また、大会がベテラン会をはじめ各地区でも開催されるようになって普及が加速された。本会は平成３年の大会からラージボール種目を設けた。

第１回福島県ラージボール選手権大会

期日　平成４年５月３１日（日）
会場　郡山市　富久山公民館
主催　福島県卓球協会
主管　福島県卓球ベテラン会
　　男子18名　女子３２名参加
　　男子優勝　大島　実（福島）
　　女子優勝　太田睦子（福島）
　ねんりんピック出場（予選会を兼ねて行なう）
　　監督　大橋　柾
　　選手　松崎俊一・大槻修二・笠原よし子
　　伊関幸子・木田澄子・山崎千枝子

県民スポーツレクリェーション祭

県民のスポーツ・レクリェーション活動を一層促進し、健康で明るく潤いのある県民生活の実現に資する目的とする。

第１回大会（男子23名　女子21名参加）

期日　平成４年10月９日～10日　９日（土）前夜祭
会場　福島市　鎌田小学校体育館
種目　地区対抗団体戦（男子４名，女子４名）
　　男子・女子シングルス
　　団体戦①女子シングルス②男子ダブルス③混合ダブルス
　　④女子ダブルス⑤男子シングルス
　団体戦では県北チームが初優勝を飾る。
　個人戦　愛沢政司（相）菅野日出子（北）が優勝。

すこやか福島ねんりんピック

スポーツ・レクリェーション活動を通して、高齢者の健康の保持・増進、生きがいの高揚、さらには交流機会の確保を図ることにより、明るく活力ある長寿社会つくりを推進することを目的として実施する。

（成績は全国健康福祉祭参加選手の選考の資料とする）

第１回大会（男子21名女子46名参加）

期日　平成５年６月３日（木）
会場　福島市　あづま総合運動公園体育館
男子　①古山　栄助（福　島）　②佐藤　昭典（いわき）
　　③山田　英男（郡　山）　④橋本　正美（郡　山）
女子　①鈴木ハツ子（福　島）　②越智　安子（いわき）
　　③黒井　良子（会　津）　④天野ミツ子（会　津）

全国スポーツ・レクリェーション祭予選

平成５年度まで地区ローテイションにより参加していたが一巡したところでラージボールの普及も

あり、平成6年度から県卓球協会主催のラージボール選手権大会兼予選会として行なうことになった。

第3回県ラージボール選手権大会兼全国スポレク祭予選

期　日　平成6年6月26日（日）
会　場　郡山ふるさとの森体育館
監　督　松崎　俊一（中）

選　手　吉沢　昭夫（い）橋本　邦俊（中）
佐藤　富弘（い）菊地　淑子（中）
遠藤せい子（い）高橋　孝子（中）
三瓶千鶴子（中）
※県予選を経た初めてのチーム

ねんりんピック・スポレク

ラージボール卓球の普及は目覚ましいものがあり、年々参加者も多くなり、全国大会への参加希望者も多くなってきた。全国大会に参加する各県の状況などを考慮し平成１０年度から上記大会には地区回りでチームを編成して参加することになった。

	平成10年	11年	12年	平成13年	14年	15年
ねんりん	（い）	→（相）	→（北）	（中）	→（南）	→（会）
スポレク	（中）	→（南）	→（会）	（い）	→（相）	→（北）

会長人事と事務局の移動

平成8年4月から土屋弘が会長職に付く、ベテラン会の設立から会長を勤めていた信沢要は名誉会長となる。また、平成10年4月から事務局長が大橋柾から桑原高志にバトンタッチされる。
ベテラン会に慶弔規定ができる。
大会参加者の数がラージボールの部で硬球の部を大きく上回るようになる。

福島県卓球ベテラン会役員

平成11年度

会　　長　土屋　弘（会　津）
副 会 長　古山栄助（県　北）　佐藤昭典（いわき）　浜名秀雄（相　双）　大橋　柾（いわき）
支 部 長　白井信雄（県　北）　山田英男（県　中）　鈴木規之（県　南）　加藤昭治（会　津）
　　酒井忠久（いわき）　相沢辰男（相　双）
理　　事　荒　恭子（県　北）　斉田伸子（県　中）　鈴木克子（県　南）　滝口静枝（会　津）
　　秋山済子（いわき）　佐藤栄子（相　双）
指名理事　服部保治（二本松）　岸ひろみ（福島）　高田正光（白河）　影山澄（郡山）
監　　査　上野　勲（郡　山）　丹野志奈子（いわき）
事務局長　桑原高志（いわき）
名誉会長　信沢　要（いわき）
顧　　問　三浦勝美（前卓球協会長）　西郷徹夫（卓球協会長）
参　　与　宇賀神喜嗣（郡山）　松崎俊一（郡山）　大波一明（二本松）

ベテラン会関係事業

主催
①ベテラン会春季卓球大会（硬球・ラージ）
②ベテラン会秋季卓球大会（硬球・ラージ）

主管・協力
①県ラージボール選手権大会
②すこやか福島ねんりんピック
③ふくしまスポーツフェスタ
（県民スポーツ・レクリェーション大会を改称）

第5部　資　　料

○ 福島県卓球協会関係資料 …… 227

・福島県卓球協会規約・専門委員会規約・表彰規程

○ 福島県卓球協会関係受賞者 …… 232

○ 福島県卓球協会役員名簿 …… 233

○ 第50回「ふくしま国体」関係資料 …… 238

福島県卓球協会

規　　約

1　専門委員会規定

2　表　彰　規　定

3　弔　慰　金　内　規

○ 福島県卓球協会関係資料

•福島県卓球協会規約

第１章　（名称及び事務局）

第１条　本会は福島県卓球協会（以下「本会」という）と称する。

第２条　本会の事務局は会長の指定する場所におく。

第２章　（目的及び事業）

第３条　本会は㈶日本卓球協会の福島県支部として、卓球競技の健全な普及と発展を図り併わせて県民スポーツの振興に寄与する。

第４条　本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1)　各種競技会・講習会・強化練習会・指導者研修会等の開催

(2)　㈶日本卓球協会並びに㈶福島県体育協会との事業協力

(3)　地区支部中学校体育連盟その他卓球関係諸団体への協力と援助

(4)　上級大会への役員・選手の派遣

(5)　機関誌その他の刊行と広報活動

(6)　本会の発展に功績のあったものの表彰

(7)　その他、本会の目的達成に必要な事業

第３章　（組織及び活動）

第５条　本会は次のものをもって組織する。

(1)　本県の卓球を愛好する団体及び個人

(2)　県高等学校体育連盟卓球専門部

(3)　県中学校体育連盟卓球専門部

(4)　県実業団卓球連盟

(5)　県教職員卓球連盟

(6)　県家庭婦人卓球連盟

(7)　その他、本会の趣旨に賛同する者

第６条　本会は㈶日本卓球協会福島支部として、また㈶福島県体育協会の加盟団体として、それぞれの活動を行う。

第７条　本会の支部を県北・県中・県南・いわき・会津・相双におく。
各支部の規約は、本会の規約に準じて規定するものとする。

第４章　（役　　員）

第８条　本会に次の役員をおく。

(1)	会　長	１名	(2)	副会長	４名以内
(3)	支部長	６名	(4)	理事長	１名
(5)	副理事長	３名以内	(6)	事務局長	１名
(7)	事務局次長	１名	(8)	会　計	１名
(9)	理　事	各支部代表30名＋各加盟団体理事長〔５条(3)～(6)〕			
(10)	会長指名理事	若干名	(11)	監　事	２名

第５章　（役員の選出）

第９条　会長、副会長、監事は理事会において選任する。

2．副会長のうち、1名は県高等学校体育連盟卓球部会長をもってあてる。

第10条　理事長、副理事長は、理事の中から選出（選出した支部は補充）し、会長が委嘱する。

2．副理事長のうち、1名は県高等学校体育連盟卓球部委員長をもってあてる。

3．事務局長、事務局次長及び会計は理事長が推薦し、会長が委嘱する。

第11条　理事は各支部5名（理事長、中学、高校、家庭婦人、一般）と各加盟団体代表及び会長の指名する者があれば若干名を選出し、理事会の議を経て会長が委嘱する。

第12条　本会は必要により、理事会の承認をえて名誉会長・顧問・参与を推載することができる。

2．支部長は参与となる。

第6章　（役員の任務）

第13条　会長は本会を代表し会務を統括する。

第14条　副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はその職務を代理する。

第15条　理事長は会長の命を受け、全ての会務を執行し、会長、副会長共に事故ある時はその職務を代理する。

第16条　副理事長は理事長を補佐し、理事長事故あるときはその職務を代理する。

第17条　事務局長は理事長の命を受け、本会の事務を執行する。

第18条　事務局次長は事務局長を補佐し、庶務を担当する。

第19条　会計は本会の会計を担当する。

第20条　理事は理事会を構成し、会務を処理する。

第21条　監事は本会の会計を監査する。

第22条　名誉会長・顧問・参与は理事会の諮問に応じる。

第7章　（役員の任期）

第23条　役員の任期は2ケ年とし再任を妨げない。ただし、補欠によって選任された場合は、その前任者の残任期間とする。

2．役員は任期が満了しても、後任者の就任するまでのその職務を行う。

第8章　（会　　議）

第24条　理事長会は会長・正副理事長・地区理事長・事務局長・事務局次長及び会計で構成し必要に応じて理事長が招集し、次の事項を審議する。

(1)　理事会に提出する議案

(2)　理事会から委任された事項

(3)　その他重要事項

第25条　常任理事会は会長・副会長・理事長・副理事長・事務局長・事務局次長・会計・支部理事長・加盟団体代表をもって構成し、次の事項を審議する。

(1)　理事会より委任された事項

(2)　理事会を開催するいとまのない緊急事項

(3)　役員の選出

(4)　会務報告並びに決算の承認

2．常任理事会は必要により、会長がこれを招集する。

3．前条3・4項の規定は、常任理事会において、これを準用する。

第26条　理事会は本会の決議機関であり、会長・副会長・理事をもって構成し、次事項を審議決定する。

(1)　規約・規程等の制定及び改廃

(2)　事業計画並びに予算の審議

(3) 専門委員会より提案された事項
(4) 会長が特に必要と認めた事項
(5) その他組織及び運営に関する重要事項

2．理事会は年1回開催することを原則とし、会長がこれを招集する。必要に応じ臨時に招集することができる。

3．理事会の議長は会長がこれにあたる。

4．理事会は4支部以上の理事をもって成立し、その議決は出席理事の過半数による。
可否同数の場合は議長の決するところによる。

第9章（専門委員会）

第27条　本会の事業を円滑に推進するため、次の専門委員会をおく。

(1) 総務委員会　(2) 競技委員会　(3) 強化普及委員会
(4) 審判委員会　(5) 表彰委員会

2．各専門委員会に関する規程は別に定める。

第10章（登　　録）

第28条　本会に加盟する会員は、その所属団体別、支部別に登録を要する。

第29条　本会に登録しなければ、本会または各協会の主催する競技会に参加することはできない。

第30条　本会の登録は、毎年これを更新するものとする。

2．登録規定に関しては、理事会の決議により別に定める。

第11章（経費及び会計）

第31条　本会の経費は、登録料・補助金・寄附金その他の収入をもって当てる。

第32条　本会の事業及び会計年度は、毎年1月1日に始まり12月31日に終わる。

第12章（諸　帳　簿）

第33条　本会に次の帳簿を備えるものとする。

(1) 役員名簿　(2) 議事録　(3) 会計簿
(4) 登録者名簿　(5) 備品台帳　(6) 各種大会記録
(7) 公認審判名簿　(8) 指導者名簿（有資格者）(9) 表彰者名簿
(10) 全国大会出場者名簿　(11) 改正規約集

第13章（附　　則）

第34条　本会の規約に定めるもののほか、本会の運営に必要な事項は別に定める。

第35条　本規約は、昭和41年12月24日より施行する。
本規約は、昭和50年　1月18日より改正する。
本規約は、昭和56年　1月24日より改正する。
本規約は、昭和41年　1月24日より改正する。
本規約は、平成　9年　1月25日より改正する。

• 福島県卓球協会専門委員会規程

第１条　この規程は、規約第27条の規程により本協会に総務（事務局）・競技・強化普及・審判・表彰の各専門委員会を設ける。

第２条　委員会は、委員長（常任理事）１名・副委員長（理事）１名・委員若干名（委員長指名）で構成する。

２．表彰委員会は、常任理事で構成する。

第３条　各委員会の委員は、理事会において選出し、会長がこれを委嘱する。

第４条　委員の任期は、２ケ年とし再認を妨げない。ただし、補欠によって選任された場合はその前任者の残任期間とする。

第５条　委員長は各委員会を代表し、その職務遂行の責任を負うものとする。

２．委員長事故ある時は副委員長がその職務を代行する。

第６条　各委員会は委員長が招集する。

２．委員長は各委員会における決議事項を適宜理事長へ報告しなければならない。

第７条　理事長は、必要に応じて合同専門委員会を招集することができる。

第８条　各専門委員会は、第９条から第１３条までの事項を処理する。

第９条　総務委員会（事務局）は、次の各項に関する事項を処理する。

(1)　理事会並びに諸会議の準備とその議事録の整備保存
(2)　本協会の組織及び運営に関すること
(3)　関係諸団体との連絡調整
(4)　各専門委員会の総括と連絡調整
(5)　庶務・渉外に関すること
(6)　予算・決算等経理に関すること
(7)　機関紙の刊行と広報活動
(8)　資産の管理と保全
(9)　競技記録・ランキング記録の管理保管
(10)　その他各委員会の業務に属さない事項

第10条　競技委員会は、次の各項に関する事項を処理する。

(1)　各種競技会の企画・運営に関すること
(2)　競技規則・大会運営規程・組合せ規約・ランキング規程の整備
(3)　県代表選手及び監督の選考方法（少年・ジュニアについては、高体連専門部に委任する。）
(4)　その他競技に関する事項

第11条　強化普及委員会は、次の各項に関する事項を処理する。

(1)　競技力向上と普及振興計画に関すること
(2)　講習会・強化練習会・指導者研修会等の企画
(3)　指導者の派遣と資質向上に関すること
(4)　指導者の資格取得に関すること
(5)　県代表選手・監督の選考（少年・ジュニアを除く）に関すること
(6)　その他普及指導と選手強化に関する事項

第12条　審判委員会は、次の各項に関する事項を処理する。

(1)　３級公認審判講習会の企画
(2)　各種大会の審判割り当て及び審判員の派遣
(3)　上級公認審判員講習会の推薦
(4)　公認審判員の資格更新と名簿の整備
(5)　ルール改正に伴う趣旨の周知徹底と「審判員の手引き」の刊行

(6) その他審判員の養成と資質向上に関する事項

第13条 表彰委員会は、次の各項に関する事項を処理する。

(1) 表彰者の選考並びに表彰関係資料の保管

(2) 上部団体への表彰候補者の推薦

(3) 表彰規程の改廃と整備に関すること

(4) 弔慰金内規の改廃と整備に関すること

(5) その他表彰及び弔慰金に関する事項

第14条 この規程の改廃は理事長会で審議し、理事会の承認を得ること。

第15条 本規定は、昭和56年 1月24より施行する

本規定は、平成 9年 1月25に改正する

●福島県卓球協会表彰規程

(趣　旨)

第 1 条 この規程は、福島県の卓球振興に貢献し、その功績が顕著である個人又は団体に対して福島県卓球協会（以下「県卓協」という。）が行う表彰に関する必要な事項を定める。

(表　彰)

第 2 条 表彰は、次の各項の（ ）に該当する個人又は団体に対して行う。

(1) 功労賞

イ. 県卓協の運営並びに事業遂行に10年以上貢献し、卓球の振興に功績のあった者

ロ. 本協会の役員（支部役員も含む）

(2) 優秀選手賞

イ. 全国大会で個人競技はベスト16以内、団体ではベスト8以内に入賞した者

ロ. 東北大会でベスト4以内に入賞したチーム又は個人

ハ. 県大会で同一種目3年連続優勝したチーム又は個人

●年間に、3種目以上優勝したチーム又は個人

ニ. 県の大会に10年以上にわたり参加し、その成績が優秀な者

(3) 優秀指導者賞

前項のイ. ロ. ハ. ニに該当する選手の育成に直接功労のあった者

(4) 以上の表彰の基準にかかわらず、県卓協の発展に特に功労のあったもの

(表彰者の決定)

第 3 条

(1) 表彰者は県卓協表彰委員会において決定する。

(2) 表彰委員会は会長・副会長・理事長・副理事長・事務局長及び各支部理事長・審判部長・強化部長をもって組織する。

(表彰の時期)

第 4 条 表彰の時期は、表彰委員会において決定する。

(表彰の方法)

第 5 条 表彰の方法は、表彰状を授与し、記念品を贈呈する。

附　　則

本規程は、昭和52年1月20日より施行する。

• 福島県卓球協会弔慰金内規

福島県卓球協会に関する弔慰金は、次の基準により行うことを原則とする。

1．顧問・役員・理事・支部長　　死亡の場合
　花環1基と香典1万円

2．同1の配偶者及び血族の一等親の場合（姻族の場合は同居を原則とする。）
　花環1基と香典5千円

3．同1．2．に該当しない場合で特に必要があると判断される場合には、会長の承認を受けて行うことができる。

この内規は、昭和56年1月24日より適用する。

○ 福島県卓球協会関係受賞者

〔文部省表彰者〕

鈴木重郎治（相　双）　三浦　勝美（県　北）

〔県体協会スポーツ功労者〕

信沢　　要（いわき）　土屋　　弘（会　津）　三浦　勝美（県　北）　宇賀神喜嗣（県　中）
佐藤　昭典（いわき）

〔日本卓球協会表彰者〕

後藤　寿二（県　北）　平出　雄次（会　津）　鈴木重郎治（相　双）　信沢　　要（いわき）
土屋　　弘（会　津）　三浦　勝美（県　北）　平石　家治（県　南）　宇賀神喜嗣（県　中）
佐藤　昭典（いわき）　松崎　俊一（県　中）　大橋　　柾（いわき）　後藤　英子（県　北）

〔全国高体連表彰者〕

宇賀神喜嗣（県　中）　大橋　　柾（いわき）

〔東北卓球連盟表彰者〕

後藤　寿二（県　北）　鈴木重郎治（相　双）　信沢　　要（いわき）　笹山　　進（県　北）
宗像　次男（県　中）　土屋　　弘（会　津）　三浦　勝美（県　北）　平石　家治（県　南）
宇賀神喜嗣（県　中）　佐藤　昭典（いわき）　松崎　俊一（県　中）　大橋　　柾（いわき）
滝沢　昌昭（県　南）　及川　邦夫（県　南）　佐久間　直（県　中）　壁谷　之夫（県　中）
伊東　守信（県　南）　西郷　徹夫（相　双）　菅野　源吉（県　中）　雨沢　哲弘（いわき）
後藤　英子（県　北）　山崎　啓哲（いわき）　丹藤　祐輔（会　津）　平山　　宏（会　津）
渡部　信行（県　南）　村上　啓正（県　中）　二木　康視（県　北）
北原　正二（県　北）　鈴木　一吉（県　北）　横山　廣昭（県　南）　深谷　秀三（県　中）

〔福島県卓球協会表彰者〕

後藤　寿二（県　北）　井上　安正（県　南）　半谷　敬寿（相　双）　菱沼　欽次（県　北）
平出　雄次（会　津）　鈴木重郎治（相　双）　信沢　　要（いわき）　笹山　　進（県　北）
宗像　次男（県　中）　岩田　喜一（会　津）　志賀　　一（県　中）　土屋　　弘（会　津）
三浦　勝美（県　北）　斉藤　正雄（県　北）　佐藤利三郎（県　北）　佐藤　　昇（会　津）
平石　家治（県　南）　宇賀神喜嗣（県　中）　佐藤　昭典（いわき）　熊谷　　衛（県　北）
浜名　秀雄（相　双）　松崎　俊一（県　中）　大橋　　柾（いわき）　佐久間　直（県　中）
松崎　　繁（会　津）　吉沢　昭夫（いわき）　高久田大一郎（県　南）　斉藤　喜蔵（県　南）
遠藤七兵衛（相　双）　山崎　　勲（いわき）　壁谷　之夫（県　中）　西郷　徹夫（相　双）
菅野　源吉（県　中）　渡部　洋一（会　津）　鈴木　理介（いわき）

○ 平成11年度　福島県卓球協会役員名簿

平成11年4月1日現在

番号	役職	氏名 生年月日	〒 〒	現住所 勤務先名 勤務先住所	TEL FAX 勤務先 TEL FAX
1	会長	西郷　徹夫	976 0041	相馬市西山字水沢41	0244－35－4366 0244－35－4366
		S10. 12. 7			
2	副会長	二木　康視	960 0241	福島市笹谷字桜水1－2	024－558－2411
		S13. 8. 3	960 8044	二木康進商店（自営） 福島市早稲町6－13	024－522－4488 024－522－0448
3	副会長	平石　家治	962 0864	須賀川市北上町38	0248－75－3761 0248－75－1580
		S15. 1. 13	963 3400	公立小野町 地方総合病院組合 小野町大字小野新町字宿ノ後4	0247－72－3181 0247－72－3837
4	副会長	深谷　秀三	963 8071	郡山市富久山町久保田字我妻7－1	024－923－8818 024－935－9114
		S18. 10. 12	963 0111	市立柴宮小学校 郡山市安積町荒井字万海7－1	024－945－3013 024－945－7594
5	副会長 高等学校部会長	根本　健作	963 8012	郡山市咲田2－23－13	024－923－6725
		S16. 12. 16	962 0403	県立清陵情報高校 須賀川市大字滑川字西町179－6	0248－72－1515 0248－72－5920
6	理事長	伊藤　秀行	960 0604	伊達郡保原町字元木88－1	024－576－3718 024－576－3718
		S18. 11. 19	960 0618	東邦銀行保原支店 伊達郡保原町8丁目26－2	024－575－2121 024－575－1289
7	副理事長 強化普及委員長	斎藤　一美	975 0034	原町市上渋佐原田189	0244－22－1811 0244－24－1309
		S24. 12. 18		セントラル住設 現住所に同じ	
8	副理事長 高等学校委員長	渡部　長二	965 0121	北会津郡北会津村大字蟹川2970	0242－58－2122
		S21. 1. 2	965 0875	県立若松商業高校 会津若松市米代1－3－31	0242－27－0753 0242－29－7380
9	事務局長	理事長			
		兼務			
10	会計	岸　ひろみ	960 8157	福島市蓬莱町6－10－7	024－549－0853 024－549－0853
		S09. 11. 13		自宅 現住所に同じ	
11	監事 監査	渡部　信行	962 0031	須賀川市影沼町164－1	0248－75－4396
		S20. 2. 8	962 0001	林精機製造㈱ 須賀川市森宿字向日向45	0248－75－3151 0248－73－3227
12	監事 監査	鍛田　勲	960 8251	福島市北沢又字小泉南3－5	024－557－6933
		S17. 5. 27	960 8124	東陵高校 福島市山居上3	024－535－3316 024－535－3329

13	県北 理事長	甚野　道雄	960 8003	福島市森合字丹波谷地3－8	024－557－5452 024－557－5452
		S26. 11. 29	960 0211	トーアエイヨー㈱ 福島市飯坂町湯野字田中1	024－542－3141 024－542－5747
14	県北 理事	大藤　務	964 0892	二本松市成田日向60－1	0243－22－4840 0243－22－4840
		S17. 11. 22		大藤機械工業（自営） 現住所に同じ	
15	県北 高等学校 理事	佐藤　紀雄	960 0501	伊達郡伊達町伏黒字一本石64－7	024－583－4319
		S15. 9. 21	960 8163	県立福島西高校 福島市方木田字上原37	024－546－3391 024－539－5029
16	県北 中学校 理事	上石　健一	960 2261	福島市町庭坂字松ノ下10－5 グレースガーデン松ノ下101号	024－591－3483
		S34. 6. 11	964 0955	市立二本松第三中学校 二本松市沖3－301	0243－22－8349 0243－22－0707
17	県北 家庭婦人 理事	岸　ひろみ	960 8157	福島市蓬莱町6－10－7	024－549－0853 024－549－0853
		S 9. 11. 13			
18	県中 理事長	荒井　孝芳	963 8041	郡山市富田町字逆池北47－9	024－921－1154
		S28. 1. 11	963 8061	日東防㈱生産センター 郡山市富久山町福原字塩島1	024－932－6015 024－934－8603
19	県中 理事	大和田元一	962 0724	須賀川市田中東館37	0248－79－3552 0248－79－3552
		S31. 1. 25	963 8051	オーエム建築工房（自営） 郡山市富久山町山田字大小林55－21	024－925－1666 024－925－1666
20	県中 高等学校 理事	佐藤　敏夫	932 4835	富田町字下双又14－131	024－934－7744
		S25. 1. 13	933 1959	郡山女子大附属高校 郡山市開成3－25－2	024－932－4835 024－933－1959
21	県中 中学校 理事	荒木　久勝	963 0201	郡山市大槻町北中野19－8	024－961－1699
		S27. 7. 9	963 0201	郡山ザベリオ学園中学校 郡山市大槻町字古屋敷102	024－952－7756 024－952－7014
22	県中 家庭婦人 理事長	影山　澄	963 0203	郡山市静町10－24	024－951－7709 024－951－7709
		S14. 7. 19			
23	県南 理事長	伊藤　平男	962 0057	須賀川市袋田字林の影23	0248－76－5253
		S33. 2. 4	962 0842	須賀川信用金庫本店 須賀川市宮先町31	0248－75－3171 0248－72－7672
24	県南 理事	吉田　眞久	962 0857	須賀川長録町58－3	0248－72－1657
		S38. 3. 3	962 0842	須賀川信用金庫駅前支店 須賀川市塚田16－1	0248－75－2168 0248－72－
25	県南 高等学校 理事	武田　和久	963 8018	郡山市桃見台8－3－1404 チサンマンション桃見台1404	024－932－3506
		S33. 3. 20	962 0403	清陵情報高校 須賀川市大字滑川字西町179－6	0248－72－1515 0248－72－5920

26	県南 中学校 理事	長場　壮夫	962 0848	須賀川市弘法坦162	0248－72－4744 0248－72－4744
		S34. 4. 13	962 0024	須賀川市立第一中学校 須賀川市稲荷町130	0248－73－3535 0248－73－3535
27	県南 理事	入谷みちこ	961 0053	白河市中田244－4	0248－24－0845
		S23. 10. 15	961 0941	白河市役所 白河市八幡小路7－1	0248－22－1111 0248－24－1844
28	会津 理事長	北澤　宏	965 0844	会津若松市門田町大字 一ノ堰字村西401	0242－27－1397 0242－27－1435
		S15. 10. 14		紅屋工務店（自営） 現住所に同じ	
29	会津 理事	津田　圭一	969 3523	耶麻郡塩川町石橋890	0241－27－3214 0241－28－8319
		S14. 11. 05		津田商店（自営） 現住所に同じ	
30	会津 高等学校 理事	遠藤　良市	969 3451	河沼郡河東町八田字漆沢15	0242－75－3707
		S25. 5. 29	966 0802	県立喜多方高校 喜多方市桜ケ丘1－129	0241－22－0174 0241－23－0948
31	会津 中学校 理事	馬場　俊忠	969 3532	塩川町大字小府根字道下22－2	0241－27－3952
		S33. 6. 20	966 0045	市立喜多方第三中学校 喜多方市南原3475	0241－22－5121 0241－23－1664
32	会津 理事	山本　一彦	969 3100	耶麻郡猪苗代町字五十軒	0242－65－2266
		S28. 2. 11		農業	
33	相双 理事長	斎藤　一美	975 0034	原町市上渋佐字原田189	0244－22－1811 0244－24－1309
		S24. 12. 18		セントラル住設 現住所に同じ	
34	相双 理事				
35	相双 高等学校 理事	湯澤　智幸	979 1521	浪江町権現堂字下蔵役目18	0240－35－1233
		S41. 2. 1	975 0014	県立原町高校 原町市西町三丁目380	0244－23－6196 0244－23－7909
36	相双 中学校 理事	高橋　伸一	975 0022	原町市北泉字地蔵堂21	0244－22－2164
		S39. 6. 6	975 0041	市立原町第3中学校 原町市下太田字川内前12－2	0244－22－3802 0244－24－2287
37	相双 理事	高田　信広	975 0036	原町市萱浜字原ノ山198－5	0244－24－5869
		S36. 4. 30	975 0034	セントラル住設 原町市上渋佐字原田189	0244－22－1811 0244－24－1309
38	いわき 理事長	白土　正衛	971 8141	いわき市鹿島町走る熊字山の神5	0246－29－5541 0246－29－5541
		S23. 2. 6	971 8162	いわき市役所小名浜支所 いわき市小名浜花畑町15－1	0246－54－2111 0246－92－1693

39	いわき 理　事	橋本　義一 S13. 7. 8	971 8146	いわき市鹿島町御代字赤坂16－1	0246－58－5618 0246－58－5990
				いわき卓球センター（自営） 現住所に同じ	
40	いわき 高等学校 理　事	鈴木　是行 S40. 11. 10	972 8321	いわき市常磐湯本宝海92－4	0246－44－6050
			973 8402	磐城第一高校 いわき市内郷御厩町上宿11	0246－26－1251 0246－26－1274
41	いわき 中学校 理　事	大嶋　克子 S20. 7. 8	970 8026	いわき市平字愛谷四丁目3－4	0246－25－4029
				市立小名浜第一中学校 いわき市小名浜岡小名字山田作15	0246－54－3636 0246－54－3653
42	いわき 家庭婦人 理　事	斉藤恵美子 S20. 4. 21	974 8261	いわき市植田町中央1－10－6	0246－62－3216
43	県教職員 理事長	菊地　敏美 S35. 3. 4	963 8034	郡山市島1－16－13	024－938－2565
			963 8876	郡山市視聴覚センター 郡山市麓山1－5－25	024－923－6616
44	審　判 会長指名 理　事	野木　孝夫 S11. 10. 2	970 8026	いわき市平字作町二丁目7－2	0246－22－6270 0246－22－6270
			970 8044	いわき市中央台飯野五丁目5－1	0246－29－7187 0246－29－0577
45	強　化 会長指名 理　事	柴田　廣道 S26. 4. 23	960 8012	福島市御山町6－13	024－533－2299 024－533－2299
				プロショップピンポンシバタ（自営） 現住所に同じ	
46	強　化 会長指名 理　事	原　　晃 S39. 1. 10	979 2101	相馬郡小高町片草字一里段42	0244－44－3980 0244－44－3980
			979 0601	東京電力第二原発 双葉郡楢葉町大字浪倉字小浜作12	0240－25－1921 0240－25－1953
47	名誉会長	三浦　勝美 T12. 10. 41	964 0906	二本松市若宮1－346	0243－22－2852
			964 0906	三浦卓球 二本松市向原268－4	0243－23－4326 0243－23－4326
48	顧　問	信沢　　要 M44. 8. 5	970 8026	いわき平字胡麻沢46	0246－23－8002
49	顧　問	宇賀神喜嗣 T10. 1. 18	963 8851	郡山市開成5－22－17	024－932－8330
50	顧　問	土屋　　弘 S02. 1. 7	965 0822	会津若松市花見ケ丘3－6－25	0242－27－8689
51	顧　問	佐藤　昭典 S03. 11. 14	972 8322	いわき市常磐上湯長谷町五反田303	0246－43－6208

52	顧　問	松崎　俊一 S 2. 1. 2	963 8851	郡山市開成6－54	024－923－1528
53	顧　問	大橋　柾 S 4. 4. 1	973 8408	いわき市内郷高坂町一丁目105－7	0246－26－2195
			973 8042	東光土質いわき営業所 いわき市内郷綴町上宿3	0246－27－5557 0246－27－4108
54	顧　問	壁谷　之夫 S 5. 1.26	963 4312	田村郡船引町船引字館91－2	0247－82－1391
55	顧　問	伊東　守信 S12.11.10	962 0844	須賀川市東町4	0248－73－2611 0248－76－0910
56	参与 県北 支部長	二木　康視 S13. 8. 3	960 0241	福島市笹谷桜水1－2	024－558－2411
			960 0844	二木康進商店（自営） 福島市早稲町6－13	024－522－4488
57	参与 県中 支部長	深谷　秀三 S18.10.12	963 8071	郡山市富久山町久保田字我妻7－1	024－923－8818 024－935－9114
			963 0111	市立柴宮小学校 郡山市安積町荒井字万海7－1	024－945－3013 024－945－7594
58	参与 県南 支部長	滝沢　昌昭 S 7.12. 6	962 0863	須賀川市緑町10－2	0248－75－2420
59	参与 会津 支部長	平出　雄次 S 4.10.24	965 0875	会津若松市米代2－6－5 米代団地6－2	0242－27－4941
60	参与 相双 支部長	堀川　清光 S10.10.10	975 0015	原町市国見町2－52－1	0244－23－4351
			975 0002	幸道建設 原町市東町3－61	0244－23－3836 0244－23－3830
61	参与 いわき 支部長	佐藤　昭典 S 3.11.14	972 8322	いわき市常磐上湯長谷町五反田303	0246－43－6208

○ 第50回「ふくしま国体」関係資料

あ い さ つ

財団法人日本卓球協会
会 長 石 川 六 郎

第50回国民体育大会秋季大会卓球競技会が、ここ須賀川アリーナにおいて開催されることになりました。

ご承知のとおり、国民体育大会の趣旨は、広く国民の間にスポーツを普及することにより、国民の健康増進と体力の向上に役立たせ、併せて地方スポーツの振興と文化の発展に寄与し、国民生活を明るく豊かにしようとするものであります。

財団法人日本卓球協会といたしましても、大会開催の趣旨にそって種々努力を重ねてきておりますが、大会の実施が、競技団体としての競技力の向上と強化に役立ち、さらに卓球の普及につながるものとして大いに期待を寄せております。

この大会に参加された選手の皆さんは、全国各地およびブロックでの厳しい予選を経て栄えある郷土の代表となられた名誉を体して、日頃練磨された技と力を十二分に発揮されると同時に、郷土に錦を飾ることができるようご健闘されますようにお願い申し上げます。

さらに、参加された皆さんは大会の趣旨をよく理解され、選手相互に親睦と友好を深め、国民スポーツの祭典に相応しい大会に盛り上げていただきたいと存じます。

終わりに、本大会を開催するにあたり、ご尽力賜りました福島県並びに須賀川市の実行委員会の方々、競技運営に携わる福島県卓球協会及び地元の卓球関係者皆さんの永年にわたる準備とご尽力に対し感謝申し上げますとともに、ご支援くださった多くの関係各位に深甚なる感謝を申し上げ、ご挨拶といたします。

歓迎のことば

福島県卓球協会
会 長 三 浦 勝 美

全国各地より、厳しい予選を勝ち抜いてこられた選手・役員の皆さんをお迎えして、ここ須賀川市で第50回国民体育大会卓球競技会が、盛大に開催されますことは、このうえない喜びであり、心より歓迎申し上げます。

この「ほんとうの空」の下に全国の友が集い、日頃鍛えられた心・技・体を競い、青春の翼をはばたかせ、郷土の栄誉のために可能性を求めてベストを尽くし最後まで健闘されますことをご期待申し上げます。

また、これを機会に友情の輪を更に拡げられるとともに、この「ふくしま国体」が、思い出に残る大会となりますよう祈念いたします。

終わりに、県、市を始め国体実行委員会並びに本大会開催にご支援、ご協力いただきました関係者の皆様に深く感謝申し上げ、歓迎のことばといたします。

競技会役員

（順不同・敬称略）

名誉会長	高木　博					
会長	石川　六郎					
副会長	藤田　忠男	三浦　勝美	内藤　繁			
顧問	石原　俊	竹原英太郎	清水　齋	後藤　淳	城戸　尚夫	
	佐藤　文生	鈴木　敏文	熊谷　典文	後藤　康男	神津　善行	
	小淵　恵三	井坂信太郎	桧山與八郎	森　元歳	楠美　知行	
	小笠原　孝	三浦　實	甘竹　秀雄	早坂　啓	小林　忠雄	
	島貫　琢也	清水　博	阿部　一治	金子　泰造	村岡　悦夫	
	臼井日出男	原　為蔵	水澤　忠男	岩崎　忠三	山田　昌哉	
	岡　一朗	辻嘉右ヱ門	山田　侑孝	谷本　悦造	浅野　和男	
	鞠山　勝利	道端　進	中治　信夫	小林　喬	茂原　治	
	伊勢　淳一	仲田　和夫	川上　亀義	坂根　一直	吹田　愰	
	堤　仁	竹原　茂雄	渡部　一美	西山　昌男	森山　善七	
	酒見　泰介	中島　公彦	深水　伸一	馬場　隆司	川添　睦身	
	川上　哲夫	城間　利雄	依田　敏行	八杉善次郎	西間木寅吉	
	佐藤　力					
参与	青沼　誠	浅葉　克己	阿曽沼　保	安藤　朗市	市川　三男	
	織奥　信男	川上　十郎	川口　實	元治　光雄	設楽　重行	
	篠崎　登	末田　浩	須藤　伍郎	高田　稔	武田　武一	
	田所　金久	田中　茂明	田中　利明	西村　正美	野本　道夫	
	荻原　一正	播井　忠夫	深川　泰彦	藤野　広	村岡　久平	
	村上　一司	村上　恭二	矢後　量朗	安田　一光	山口　和雄	
	横江　弘文	吉成　照夫	脇田　文雄	池田　義孝	小原　考弼	
	河村　正雄	倉林　道雄	佐々木啓二	佐々木慶哉	島崎　林蔵	
	津久井智男	中村　修	林　丈夫	林田　正治	平島　祥男	
	二上　貞夫	谷貝　治男	渡辺　一雄	関根　吉郎	村山　廣嗣	
	吉田　恒雄	鈴木　保	古寺　純	関根　助美	小林　正博	
	賀川　寛	水野　敏夫	橋本　健二	高橋　秀勝	円谷　浅光	
	渡辺　忠次	大内　康司	佐藤　孝雄	森合　康浩	宗形　充三	
	岡谷　久則	安田　福雄	添田　勝人	阿部　和寿	小林　芳市	
	深谷　一由	長南　善蔵	森　新二	西間木セツ子	須田　秀幸	
	猪越　孝義	荘司　仁吉	舘　美文	相楽　新平	大野　栄松	
	小針　久弥	小林　清三	鈴木　宣孝	鈴木　治郎	浅川　清吾	
	広田　勝男	吉田　藤司	柏原　健	関根　円吉	神　忠	
	山田　善昭	福田　瑞夫	本田　和正	高島　邦夫	小林　喜助	
	古籏　恂	諸橋　恒夫	高橋　道保	安藤　春行	横田フサ子	
	高橋　康夫	山辺　興夫	小林　正弥	佐川　金義	立石　博典	
	遠藤　輝雄	中村　文壽	木村　隆文	小野　豊	柴田　幸男	
	佐々木岩男	青木　茂明	伊東　守信	大津　清一	黒川　芳子	
	関口　定男	福島　俊龍	加瀬　盛治	河合　英一	鈴木　術夫	
	田中　恒夫	西田　昌弘	志村　真吾	神谷　昭光	今井　保	
	丸山　久利	峯村　威男	後藤　計三	向　健一	八尾　正博	
	稲垣　英喜	勅使河原孝	久保田盛夫	馬場園　憲	米田　孝二	
	今井　良春	山崎　雅章	浜田　正則	井上　隆	山下　功	

	福原　薫	尼崎　勝巳	三浦　久和	山城　真澄	松浦　徹真	
	今井　捷行	本松　之佳	田川　楠雄	鮎川　正興	中本　光男	
	壱岐　博紀	藤田　愷久	平安　常進	武山　嘉成	吉田　房彦	
	島田　創	下御陵竹志	景谷　豊	若尾　輝夫	侭下　高育	
	植松　克之	和田　正男	浅井　正紀	土屋　弘	佐藤　昭典	
	松崎　俊一	大橋　柾	壁谷　之夫	北原　正三	鈴木重郎治	
	信沢　要	宇賀神喜嗣	浜名　秀雄	阪路　光男	鈴木　誠	
	滝沢　昌昭	小林　久二	増子　五郎			
委　員	松川　文豪	波岡　實	道上　進	澤田　秀夫	白川　誠之	
	江口冨士枝	野平　孝雄	庄司　弘	佐藤　行信	松本　章二	
	山田　政功	平石　家治	關　平	長坂　亘通	那須　純一	
	戸口田勝幸	下村　邦夫	田中　隆	重村　旦	渡辺　武達	
	松本　敬	油座　信男	本庄　俊彦	湯本　誠	沢野善治郎	
	矢吹　七海	深谷　秀三	渡部　長二	渡部　信行	荒井　孝芳	
	薄井　充良	横山　廣昭	北沢　宏	横山　実	雨澤　哲弘	
	樫村　義照					

競　技　役　員

競技委員長	道上　進				
競技副委員長	平石　家治	渡部　長二			
審　判　長	白川　誠之				
副審判長	鈴木　幹太	壁谷　之夫			
審判主任	山本　光男				
コート主任	大木　重実	柳沼　清正	渡辺　信一	渡辺　行雄	菊地　久子
	小林　文子	佐藤アヤ子	横山　正子	河村　朝子	西片美代子
	深谷　良雄	吉田　眞久			
審　判　員	武田　勇治	高橋　庄一	野木　良一	青戸　達也	熊谷　明
	佐久間直也	榊枝加奈子	石川　純子	管野　法幸	猪狩　精一
	松崎　一男	佐藤　保彦	横田　哲子	斎田　伸子	志賀　喜美
	宍戸　健	佐藤　智宏	大河原輝子	大嶋　克子	小林　朋子
	赤城　市子	八木沢　剛	冨永　直行	物江　真希	久力　亜矢
	吉間亜紀子	佐藤　英博	佐藤　寛之	武田　淳二	菅野　崇
	長谷川隆志	佐藤　裕美	佐藤　智美	高柳　友紀	高橋美由起
	羽田　義明	藤田　清美	高擂　武	佐藤トミ子	楠田　利子
	箱崎　淑子	丹野　光一	三瓶　弘三	横山　徳昭	山田　民弥
	菊田　哲也	青木　豊	高松　由武	室井　昌子	新井田円子
	野崎由美子	鎌田　勲	斎藤　暖恵	石井多美子	冨塚　光恵
	安野　洋子	伊藤美沙子	津島　佳子	高橋　法子	塚田　芳子
進行委員長	澤田　秀夫				
進行副委員長	薄井　充良				
進行主任	武田　和久				
進行委員	丹野　敏	鈴木　エイ	江幡　広志	斎藤恵美子	鈴木　由紀
	武田　貞昭	大内　活実	大和田元一		
オーダー主任	伊藤　平男				

オーダー委員	中島　静	佐藤　紀雄	甚野　道雄	小手森雅義	遠藤　良市	
	志賀　芳雄	鈴木　孝雄	内田　正則	本田　武男	関根　昇	
招集主任	伊藤　秀行					
招集委員	横山　実	佐藤　哲夫	前川　賢二	小橋　達夫		
放送主任	荒井　祐子					
放送委員	伊藤久美子	田中　広美	玉木志代子			
記録委員長	長場　壮夫					
記録副委員長	岩田悦次郎					
記録委員	小野田純子	武田喜美男	三浦　芳春	村越　幸市	北村　武宣	
	中村　行雄	小澤　俊恵				
印刷主任	堀田　賢治					
印刷委員	大木　恵子	真尾　隆之	大和田英司			
報道委員長	波岡　實					
報道副委員長	北原　正三					
報道委員	伊東　守信	浜津　俊明				
進行板掲示主任	鹿岡　国俊					
進行板掲示委員	五十嵐　毅	柳沼　幸男				
記録板掲示主任	二木　康視					
記録板掲示委員	藤田　一	川井　彰一				
送受信主任	入谷みちこ					
送受信委員	斎藤　玲子					
渉外委員長	松崎　俊一					
渉外副委員長	菅野　源吉					
渉外委員	影山　澄					
総合成績計算委員長	松本　章二					
総合成績計算副委員長	渡部　洋一					
総合成績計算委員	飛田　徹	生井　一弥				
総務委員長	戸口田勝幸					
総務副委員長	佐藤　昭典	大橋　柾				
総務委員	樫村　義照	北澤　宏	雨澤　哲弘	今泉　一二		
庶務会計主任	渡部　信行					
庶務会計委員	及川　邦夫	佐藤みゆき				
式典委員長	西郷　徹夫					
式典副委員長	大塚　孝					
式典委員	浅川　康夫					
受付接待委員長	土屋　弘					
受付接待副委員長	滝沢　昌昭					
受付接待委員	岸　ひろみ	平石　恵子	滝口　静江			
会場委員長	大越　守					
会場副委員長	野木　孝夫					
会場委員	小松　和夫	長谷川敏朗	向井　隆一			
会場用具主任	大藤　務					
会場用具委員	菅生　昌広					
練習会場主任	小野　俊彦					
練習会場委員	生田目　進	山寺　代泰	高橋　頭			

競技補助員

審判補助員	柳沼　秀明	横山　卓也	小針　一美	高橋　正	有賀　孝雄
	鈴木　真一	芳賀　信也	山岸　勉	阿武隈川哲郎	鈴木　喬
	橋本　重雄	遠藤　諭	森　剛	瀬和　正宏	吉川　郁夫
	円谷　祐介	坂路　友仁	角田　裕市	薄井　久	橋本　真明
	相川　知史	鈴木　章司	佐藤　直樹	池田　達哉	鈴木　一也
	菅　尋海	星野　邦春	鈴木　哲雄	緑川　学	高橋　辰哉
	鈴木　信行	猪股　主一	和田　研二	茂木　智子	山野辺　健
	石井　勇児	池田　雄一	伊藤　嘉浩	鈴木　忍	緑川　博
	並木　耐	安藤　寿宣	塩沢　和幸	鈴木　聡美	内山　直子
	池田　朝美	遠藤　伸朗	高橋　厚	大竹　弘記	亀下　孝俊
	黒澤　美紀	深谷　美幸	吉田　展子	佐藤　翠	坂本　知加
	有我　美樹	本田かおり	飯田　幸	名城　智恵	大塩　優子
	宗像　恭子	大野　美穂	米田　佳子	芳賀　恭子	佐藤　直子
	橋本　梢	吉田　一美	吉村　祐治	吉田　律子	二瓶亜沙子
	長倉　聡	添田　雅人	永沼　実	有我　美紀	三本松律子
	池田　千愛	渡辺　久美	相楽　弘樹	矢吹　友美	大須賀幸治
	秋山恵美子	小河　泰之	熊谷　英明	山田　隆	
進行補助員	藤田　剛	志賀美千代	戸倉　泰志	西坂　睦美	根本　智幸
	宗像　利江	奥河　咲子	尾崎めぐみ	大竹　信子	岩本　恵美
	佐川　美和	深谷　智美	大野　学	前田　展子	安藤　健一
	斉藤　良子				
オーダー補助員	水野谷琴美	遠藤　瞳	武藤　理恵	近藤　陽子	橋本ルミ子
	小林　寿子	矢内　緑	渡部　美果	熊田みゆき	武　浩美
	辺見美紀子	大野　優子	二瓶久美子	長栄　香織	
招集補助員	渡辺　健幸	木野内智宏	鈴木　幸男	鈴木　伸一	小川　拓也
	鈴木　達哲	鈴木　健	矢部　幸雄		
記録補助員	渡部奈緒美	吉成ゆきい	鈴木　暁子	高橋　裕子	
印刷補助員	大須賀雅代	曲山　裕子	吉田和香子	小澤真理子	
進行版掲示補助員	横田　徹	菅原　健太	二瓶　浩之	緑川　純利	近嵐　広実
	田崎　卓				
記録版掲示補助員	佐藤　政治	大倉　俊輔	柳沼　清一	須田　雅勝	
会場補助員	安田　賢仁	本間　俊孝	添田　栄	宍戸　勝吾	

競技会係員

本部長	藤田　忠雄				
副本部長	荘司　仁吉	舘　美文			
国体総括部長	大野　栄松				
国体総括班長	矢吹　七海				
国体総括係	有馬　秀明	佐藤　健則	石堂　完治	今泉　一二	水野　良一
	大越　守	三浦　浩美	及川　清子		
総務部長	相楽　新平				
総務班長	坂野　順一				

総務係	国分良一	金子定雄	長澤泰和	板橋圭寿	渡辺大	
	森合哲夫					
広報記録班長	小松武弘					
広報記録係	安藤清美	二瓶考之	岡田充生			
案内観光班長	鈴木庄三					
駅・IC案内所係	村越ミチ	橋本和法	増子規子	斎藤恵子	有我広美	
	鈴木潤一					
観光物産係	大和田仁	村上政紀				
特別接伴班長	石澤雄吉					
特別接伴係	金澤幸男	藤島敬一	村上清喜	佐藤忠雄	井上敦雄	
	佐久間貴士	小林正司	箭内弘子	金澤松秀	柳沼恭子	
	石部美貴子	大峰瑠美子				
卓球競技会場部長	鈴木宣孝					
施設班長	東海林利満					
施設係	竹内陽	渡辺徹夫	有我新一	猪腰恒夫	岡田良寿	
	渡辺裕	鈴木賢司				
受付案内班長	水戸一明					
受付案内係	松尾貞子	関根慶一	石堂伸二	小池文章	関根英一郎	
	中村行雄					
弁当引換係	佐藤はるみ	佐浦元				
休憩所班長	阪路卓美					
休憩所所長	大石綾子	羽生尊				
会場美化班長	菅野庸郎					
会場美化係	小針成次	橋本裕史	遠藤栄子			
卓球競技式典部長	広田勝男					
競技班長	関根幸之助					
競技係	大竹達夫	安藤政信				
練習会場班長	関根毅夫					
練習会場係	関根秀尚	平川昭二	関根徳栄			
式典班長	長谷川明					
式典進行係	井原孝明	安藤弘	永山淳	西間木正行	熊谷幸司	
選手誘導係	岡田輝夫	鈴木康夫	添田敏夫			
式典音楽係	角田義和	佐藤和久	水上寿子	芳賀紀美江	村岡泉	
	中山育子	荒井一成				
公開演技係	山岸明	深谷敏市	鶴巻弘士	和泉由美子	渡辺伸江	
	鈴木孝子	坂内悦	藤井一男			
輸送警備部長	小針久弥					
交通駐車場班長	関根勲					
交通係	猪越幸雄	杉田秀夫	有我宏和	大竹賢一		
駐車場係	荒俊夫	猪越昌宣	佐藤寿志	渡部好三	山田文彦	
	神野敏夫	水野長次	早尾重美			
輸送班長	渥見和夫					
輸送調整係	佐藤実	根本安正				
輸送送迎係	橋本庸作	吉田明子	溝井伸也	安藤忠良	志賀重久	
	小松田正喜	佐藤彰洋	横田修一	吉田和貴	桐生ともみ	
	西澤仁	村越妙子	阿部恵理子	町田妃左恵	関根宏史	
	安藤和哉	水野透	二瓶伸一	関根正二	樽川恒	

	熊田日出一	大倉　雅志	小林　一裕	山本　フク	柳沼　善紀	
	鈴木　伸生	森田　敦則	村上　和夫	西牧　通安	吉田美紀子	
	高橋　美和	福岡　幸子	薄井　利江	川崎　清子	飯田　良子	
	江藤　正統	塩田　正子	矢吹　孝樹	山田　久子	宗像　武将	
	岡部　三夫	塩田　哲幸				
消防警備班長	石井　一司					
消防警備係	小林　博	岩井仁志				
宿泊弁当部長	佐藤　惣一					
宿泊班長	伊藤　強					
宿泊係	中村　隆弘	横田　昭二	山辺　恵子	山口　秀夫		
宿舎連絡係	矢部　英夫	小針　直子	大槻　和之	松宮　崇文	樫村勢津子	
	酒井　秀徳	須田　勝浩	服部　育子	藤田　克典	関根　隆仁	
	野崎　秀雄	鈴木　弘明	西名　弘司	根本　文男	村越　進一	
	関根　俊夫	森尾　洋安	増子　都子	佐藤　睦子	鈴木　時子	
	牧野　桂男	渡辺　輝吉	角田富美枝	八幡　秀俊	小林　繁直	
	松谷　光晃	有我　英一	有我　誠	大柿　三好	名原　恵子	
	武内　義則	柳沼　新治	渡辺　栄希	伊勢　善宏	関根さゆり	
	鈴木　信子	和田　恵子	斉藤　キヨ	佐藤　恵子	鈴木　考	
	佐久間道宏	塩田　喜一				
弁当調達班長	熊田　勝美					
弁当調達係	近江　悦子	国分　利彦	笠井　一郎			
救護衛生部長	浅川　清吾					
救護班長	松尾　茂夫					
救護係	渡辺　春子	矢部　順子	渡辺　順子			
衛生班長	酒井　茂幸					
衛生係	古川　一郎	関根　厚				
市民運動部長	小林　清三					
市民運動班長	関根　隆男					
市民運動係	加藤　憲二	山寺　利松	山寺　弘司	秡川　千寿	伊勢　邦宏	
	川島　治郎	渡邊　将文	安藤　和郎	永野　正一	熊田　正幸	
	西澤　俊邦	大和田　守	塩田　静生	溝井　大紀		

競技会補助員

受付案内係	井原　有紀	関根夕美子	佐藤　陽子	島田　理江	穴沢　和子	
	築山亜樹子	佐野　純子	辻　愛子	力丸　恵	石塚　文恵	
	大澤麻衣子	太田　裕子	植田久美子	関根　綾子		
会場美化係	榮　宏樹	杉山　利彦	大山　裕紀	橋本　慶介	平栗　健治	
	須藤　晃弘	小針鶴千代	遠藤　文秀	遠藤　康之	伴野　泰理	
	秋元　孝広	増子　裕樹				
練習会場係	有我　秀和	石山　大輔	五十嵐大輔	井上　常喜	水山　正人	
	円谷　誠	仲沼　嘉曜	吉成　美彦	車田　一寛	飯森　大介	
	大河原健一	小山　秀樹	中野　真	草野　修	横山　智功	
	齋藤　淳一					
選手誘導係	雨海　久実	影山　望	車田　啓子	齋藤　楢	佐藤　幸子	

	鈴木身嘉子	鈴木　幸恵	添田　美佳	千葉　絵美	沼田　洋子
	山田　真帆	渡辺真紀子	阿部　育子	岩崎　庸子	斎藤真樹子
	鈴木美津子	羽生　茜	平澤　文香	平ノ内奈々	堀田　智美
	村越ますみ	和田　尚子	和田　千鶴	渡辺　康子	有馬　沙織
	五十嵐麻希	石井　真希	影山てるみ	小林　樹里	佐藤　寿恵
	添田由紀子	高久　知巳	樽川　彩乃	西方　美江	西間木紘子
	橋本　満喜	橋本　実穂	星　美賀	安田　彩子	渡辺　史江
	阿部　聡子	安藤　美香	佐原　恵	樽川　満穂	中山　燈海
	根本亜有子	平山真由美	吉田　麻希	渡辺　郁美	石井久美子
	大輪田恵利	神俣　沙織	鈴木　理恵	高橋ますみ	田村美紀子
	二瓶美智代	羽生　梓	藤田　智美	有馬ルリ子	伊藤　和子
	熊田　里香	佐藤　香織	佐藤　直子	鈴木　嘉美	橋本　睦美
	渡辺寿美子	吉田菜都美			
弁当係	添田　郁恵	大河内智枝	添田　枝利	遠藤　美香	二階堂サヤカ
	村上美紀子				

開始式次第

1　日　　時　平成7年10月15日（日）午前8時30分
2　場　　所　須賀川アリーナ
3　式 次 第

順序	次第	時刻	要領
	選手団集合	8：00	
	役員・選手団整列	8：20	
1	開式通告	8：30	「ファンファーレ」演奏
2	選手団入場	8：31	競技会会長「行進曲」演奏
3	競技会開始宣言	8：50	競技委員長「ファンファーレ」演奏
4	国旗儀礼	8：51	「君が代」演奏、斉唱
5	大会旗並びに(財)日本卓球協会旗儀礼	8：53	「若い力」演奏、斉唱
6	大会会長トロフィー返還	8：55	競技会会長「得賞歌」演奏
7	競技会会長あいさつ	8：56	競技会会長
8	歓迎のことば	8：59	須賀川市長
		9：02	福島県卓球協会会長
9	競技上の注意	9：05	審判長
10	閉式通告	9：07	「ファンファーレ」演奏
11	選手団退場	9：08	「行進曲」演奏
	公開演技	9：20	小学生マーチングバンド
		9：30	小学生マスゲーム
	役員退場	9：45	
	競技準備開始	9：46	

開　始　式　次　第

開　始　式	10月15日（日）	8時30分	須賀川アリーナ

月日／会場	10月15日（日）	10月16日（月）	10月17日（火）	10月18日（水）	10月19日（木）
須賀川アリーナ	開始式 8:30～9:45	少年女子一次リーグ （8試合） 成年女子1部2回戦 （4試合） 8:30～10:30	少年男子決勝（1試合） 少年女子決勝（1試合） 成年男子2部一次リーグ （4試合） 成年女子2部一次リーグ （4試合） 8:30～10:30	成年男子2部一次リーグ （4試合） 成年女子2部一次リーグ （8試合） 8:30～10:30	成年男女1部決勝 （2試合） 成年男女2部決勝 （2試合） 8:30～10:30
	少年女子一次リーグ （8試合） 成年女子1部1回戦 （4試合） 10:30～12:30	少年男子一次リーグ （8試合） 成年女子1部2回戦 （3試合） 10:30～12:30	少年男女表彰式 10:30～11:30	成年男子1部一次リーグ （8試合） 10:30～12:30	成年男・女1部2部表彰式、総合表彰式 11:00～
	少年男子一次リーグ （8試合） 成年女子1部1回戦 （4試合） 12:30～14:30	少年女子準々決勝 （4試合） 成年女子1部2回戦 （6試合） 12:30～14:30	成年男子1部一次リーグ （8試合） 成年男子2部一次リーグ （4試合） 12:00～14:00	成年女子1部準々決勝 （4試合） 成年男子2部一次リーグ （4試合） 12:30～14:30	
	少年女子一次リーグ （8試合） 成年女子1部1回戦 （4試合） 14:30～16:30	少年男子準々決勝 （4試合） 成年女子1部2回戦 （3試合） 成年女子2部一次リーグ （4試合） 14:30～16:30	成年女子1部3回戦 （8試合） 成年女子2部一次リーグ （2試合） 14:00～16:00	成年男子1部準決勝 （2試合） 成年男子2部一次リーグ （4試合） 10:30～12:30 成年女子1部準決勝 （2試合） 成年女子2部準決勝 （2試合） 15:30～17:30	
	少年男子一次リーグ （8試合） 成年女子1部1回戦 （3試合） 16:30～18:30	少年女子準決勝 （2試合） 成年女子2部一次リーグ （4試合） 16:30～18:30	成年男子1部一次リーグ （8試合） 成年女子2部一次リーグ （2試合） 16:00～18:00		
		少年男子準決勝 （2試合） 17:00～19:00			

会　議　日　程

会議名	月日	時間	会場	電話
監督会議	10月13日（金）	18時00分	須賀川市文化センター	0248－76－7777
競技団体説明会	10月16日（月）	13時30分	須賀川市文化センター	0248－76－7777

卓　球　競　技

成年男子1部

一次リーグ

(Aグループ)

番号	都道府県名	埼　玉	宮　崎	福　井	京　都	試合得点	順　位
1	埼　玉		3－0	3－0	3－0	6	1
2	宮　崎	0－3		0－3	1－3	3	4
3	福　井	0－3	3－0		1－3	4	3
4	京　都	0－3	3－1	3－1		5	2

(Dグループ)

番号	都道府県名	愛　知	広　島	岩　手	北海道	試合得点	順　位
1	愛　知		3－1	3－0	3－0	6	1
2	広　島	1－3		3－0	3－0	5	2
3	岩　手	0－3	0－3		2－3	3	4
4	北海道	0－3	0－3	3－2		4	3

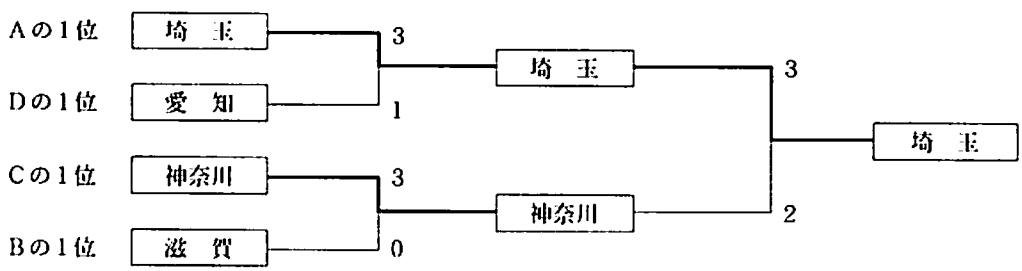
(Cグループ)

番号	都道府県名	神奈川	高　知	青　森	長　崎	試合得点	順　位
1	神奈川		3－1	3－0	3－0	6	1
2	高　知	1－3		3－2	3－0	5	2
3	青　森	0－3	2－3		3－0	4	3
4	長　崎	0－3	0－3	0－3		3	4

(Bグループ)

番号	都道府県名	滋　賀	福　島	山　口	新　潟	試合得点		順　位
1	滋　賀		1－3	3－0	3－0	5	4／3	1
2	福　島	3－1		3－0	2－3	5	5／4	2
3	山　口	0－3	0－3		1－3	3		4
4	新　潟	0－3	3－2	3－1		5	3／5	3

決勝トーナメント



成年男子2部

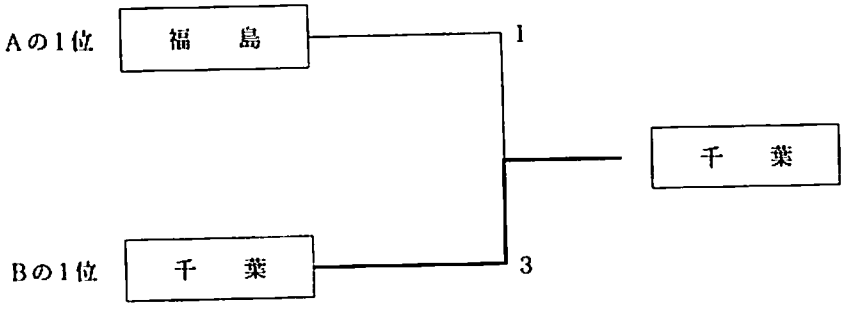
一次リーグ
(Aグループ)

番号	都道府県名	岡山	福島	岐阜	熊本	北海道	試合得点		順位	
1	岡山		0－3	2－3	3－2	3－1	6	5/5	4	10/12
2	福島	3－0		3－1	3－1	3－0	8		1	
3	岐阜	3－2	1－3		2－3	3－1	6	5/5	3	10/10
4	熊本	2－3	1－3	3－2		3－0	6	5/5	2	12/10
5	北海道	1－3	0－3	1－3	0－3		4		5	

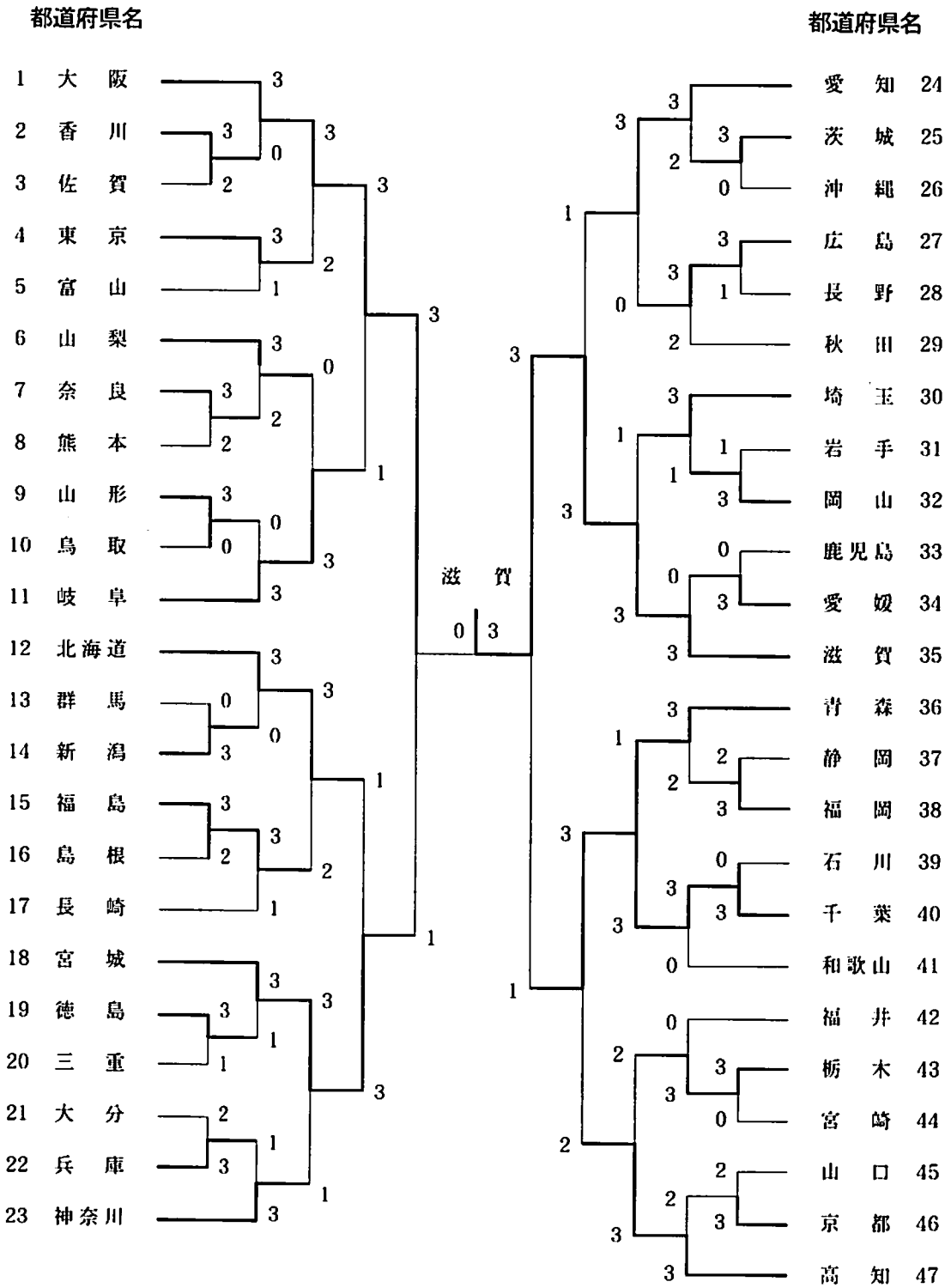
(Bグループ)

番号	都道府県名	千葉	宮城	京都	新潟	徳島	試合得点	順位
1	千葉		3－0	3－0	3－1	3－0	8	1
2	宮城	0－3		0－3	3－1	3－1	6	3
3	京都	0－3	3－0		3－0	3－1	7	2
4	新潟	1－3	1－3	0－3		1－3	4	5
5	徳島	0－3	1－3	1－3	3－1		5	4

決勝トーナメント



成　年　女　子　1　部


都道府県名
都道府県名
1 大阪
2 香川
3 佐賀
4 東京
5 富山
6 山梨
7 奈良
8 熊本
9 山形
10 鳥取
11 岐阜
12 北海道
13 群馬
14 新潟
15 福島
16 島根
17 長崎
18 宮城
19 徳島
20 三重
21 大分
22 兵庫
23 神奈川
24 愛知
25 茨城
26 沖縄
27 広島
28 長野
29 秋田
30 埼玉
31 岩手
32 岡山
33 鹿児島
34 愛媛
35 滋賀
36 青森
37 静岡
38 福岡
39 石川
40 千葉
41 和歌山
42 福井
43 栃木
44 宮崎
45 山口
46 京都
47 高知
滋賀
0
3

成年女子2部

一次リーグ

(Aグループ)

番号	都道府県名	愛知	青森	鹿児島	埼玉	試合得点		順位
1	愛知		3－2	3－2	3－1	6		1
2	青森	2－3		2－3	3－0	4	5／3	2
3	鹿児島	2－3	3－2		2－3	4	5／5	3
4	埼玉	1－3	0－3	3－2		4	3／5	4

(Dグループ)

番号	都道府県名	神奈川	岡山	大阪	徳島	試合得点	順位
1	神奈川		3－1	3－1	3－0	6	1
2	岡山	1－3		1－3	3－0	4	3
3	大阪	1－3	3－1		3－0	5	2
4	徳島	0－3	0－3	0－3		3	4

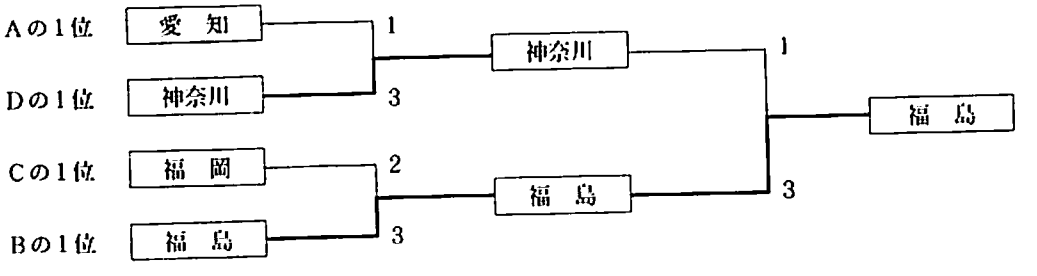
(Cグループ)

番号	都道府県名	福岡	北海道	千葉	山形	試合得点	順位
1	福岡		3－1	3－1	3－1	6	1
2	北海道	1－3		0－3	3－1	4	3
3	千葉	1－3	3－0		3－0	5	2
4	山形	1－3	1－3	0－3		3	4

(Bグループ)

番号	都道府県名	富山	福島	熊本	滋賀	試合得点	順位
1	富山		2－3	3－1	2－3	4	3
2	福島	3－2		3－0	3－0	6	1
3	熊本	1－3	0－3		1－3	3	4
4	滋賀	3－2	0－3	3－1		5	2

決勝トーナメント



少　年　男　子

一次リーグ

(Aグループ)

番号	都道府県名	大阪	広島	長野	試合得点	順位
1	大阪		2－3	3－2	3 5/5	2
2	広島	3－2		2－3	3 5/5	1
3	長野	2－3	3－2		3 5/5	3

13/14
15/13
13/14

(Cグループ)

番号	都道府県名	埼玉	福岡	兵庫	試合得点	順位
1	埼玉		3－1	3－1	4	1
2	福岡	1－3		2－3	2	3
3	兵庫	1－3	3－2		3	2

(Hグループ)

番号	都道府県名	神奈川	宮崎	青森	試合得点	順位
1	神奈川		3－1	3－2	4	1
2	宮崎	1－3		3－2	3	2
3	青森	2－3	2－3		2	3

(G)

(Fグループ)

番号	都道府県名	福島	三重	富山	試合得点	順位
1	福島		3－1	3－0	4	1
2	三重	1－3		3－1	3	2
3	富山	0－3	1－3		2	3

(Eグループ)

番号	都道府県名	東京	岡山	徳島	試合得点	順位
1	東京		3－0	0－3	3	2
2	岡山	0－3		1－3	2	3
3	徳島	3－0	3－1		4	1

(Gグループ)

番号	都道府県名	高知	北海道	千葉	試合得点	順位
1	高知		3－0	3－0	4	1
2	北海道	0－3		0－3	2	3
3	千葉	0－3	3－0		3	2

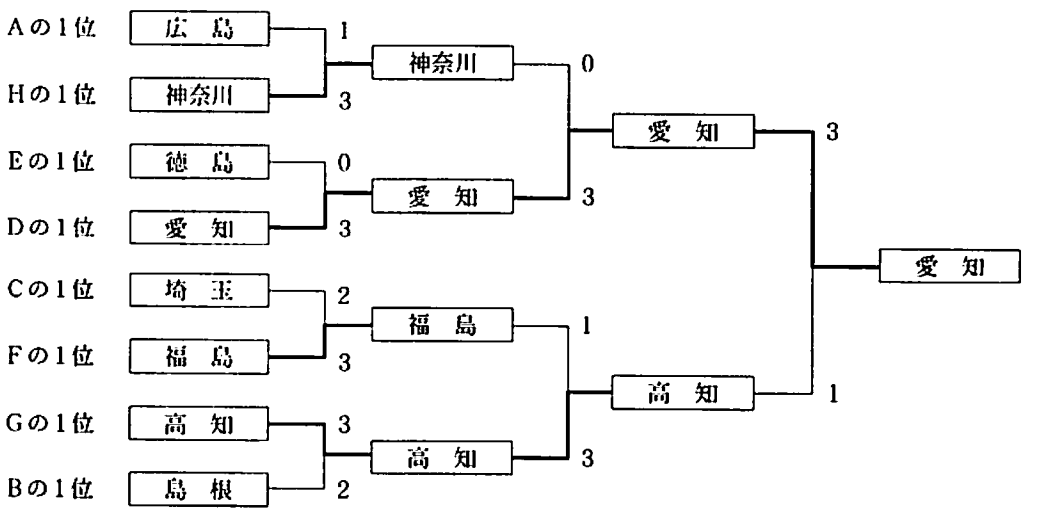
(Dグループ)

番号	都道府県名	愛知	宮崎	長野	試合得点	順位
1	愛知		3－0	3－0	4	1
2	宮崎	0－3		3－0	3	2
3	長野	0－3	0－3		2	3

(Bグループ)

番号	都道府県名	京都	島根	熊本	試合得点	順位
1	京都		3－2	1－3	3 4/5	3
2	島根	2－3		3－1	3 5/4	1
3	熊本	3－1	1－3		3 4/4	2

決勝トーナメント



少　年　女　子

一次リーグ

(Aグループ)

番号	都道府県名	岐阜	埼玉	沖縄	試合得点	順位
1	岐阜		2－3	3－0	3	2
2	埼玉	3－2		3－0	4	1
3	沖縄	0－3	0－3		2	3

(Cグループ)

番号	都道府県名	愛知	山形	広島	試合得点	順位
1	愛知		3－0	3－1	4	1
2	山形	0－3		0－3	2	3
3	広島	1－3	3－0		3	2

(Hグループ)

番号	都道府県名	青森	石川	岡山	試合得点	順位
1	青森		3－1	3－2	4	1
2	石川	1－3		2－3	2	3
3	岡山	2－3	3－2		3	2

(Fグループ)

番号	都道府県名	東京	兵庫	大分	試合得点	順位
1	東京		3－0	3－1	4	1
2	兵庫	0－3		3－1	3	2
3	大分	1－3	1－3		2	3

(Eグループ)

番号	都道府県名	福岡	徳島	大阪	試合得点	順位
1	福岡		3－1	0－3	3	2
2	徳島	1－3		0－3	2	3
3	大阪	3－0	3－0		4	1

(Gグループ)

番号	都道府県名	高知	栃木	富山	試合得点	順位
1	高知		3－1	3－0	4	1
2	栃木	1－3		3－2	3	2
3	富山	0－3	2－3		2	3

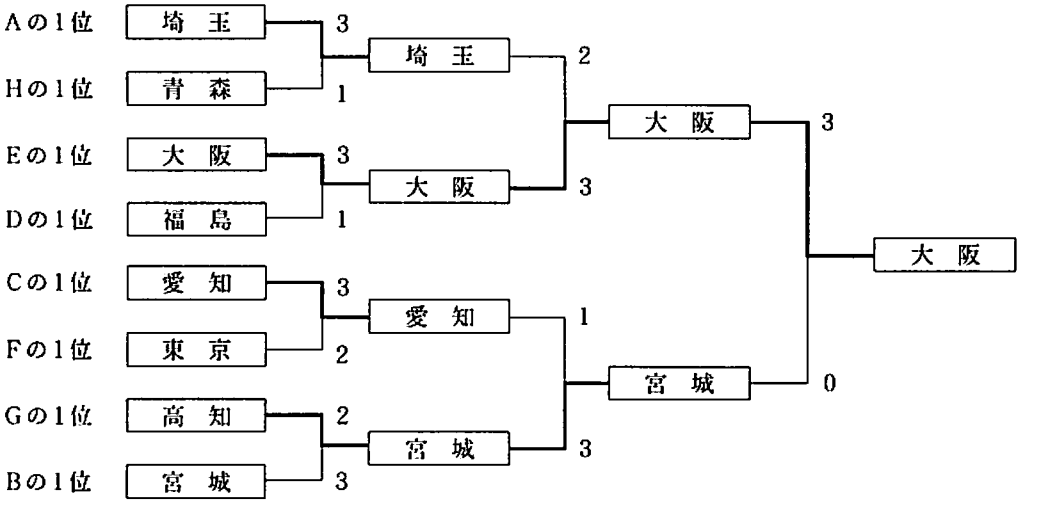
(Dグループ)

番号	都道府県名	神奈川	福島	北海道	試合得点	順位
1	神奈川		1－3	2－3	2	3
2	福島	3－1		3－0	4	1
3	北海道	3－2	0－3		3	2

(Bグループ)

番号	都道府県名	宮城	京都	熊本	試合得点	順位
1	宮城		3－1	3－0	4	1
2	京都	1－3		1－3	2	3
3	熊本	0－3	3－1		3	2

決勝トーナメント



少　年　男　子

予選リーグ第1試合

順	福島県		3 対 0		富山県
1	遊佐　充裕 (小高工業高)	2	21 — 12 21 — 15	0	木下　雅晴 (福　光　高)
2	馮　海濤 (原町工業高)	2	21 — 19 23 — 21	0	岩城　昌明 (高岡竜谷高)
3	遊佐　充裕 渡辺　和幸	2	21 — 7 14 — 21 21 — 14	1	岩城　昌明 宮腰　直志
4	馮　海濤 (原町工業高)				木下　雅晴 (福　光　高)
5	渡辺　和幸 (帝京安積高)				宮腰　直志 (高岡竜谷高)

予選リーグ第2試合

順	福島県		3 対 1		三重県
1	渡辺　和幸 (帝京安積高)	2	21 — 14 16 — 21 21 — 16	1	佐野　丈二 (紀南高校)
2	馮　海濤 (原町工業高)	0	19 — 21 19 — 21	2	小川　祐司 (日生学院第二)
3	遊佐　充裕 渡辺　和幸	2	21 — 19 21 — 9	0	小川　祐司 村山　悠紀
4	馮　海濤 (原町工業高)	2	17 — 21 21 — 15 21 — 12	1	佐野　丈二 (紀南高校)
5	遊佐　充裕 (小高工業高)				村山　悠紀 (日生学院第二)

決勝トーナメント準々決勝

順	福島県		3 対 2		埼玉県
1	渡辺　和幸 (帝京安積高)	1	18 — 21 22 — 20 11 — 21	2	肖　偉 (狭山ケ丘高)
2	馮　海濤 (原町工業高)	2	21 — 11 8 — 21 21 — 18	1	奥山　真也 (埼玉大深谷)
3	遊佐　充裕 渡辺　和幸	1	17 — 21 22 — 20 16 — 21	2	奥山　真也 黒川　良紀
4	馮　海濤 (原町工業高)	2	21 — 19 21 — 16	1	肖　偉 (狭山ケ丘高)
5	遊佐　充裕 (小高工業高)	2	21 — 16 12 — 21 21 — 15	1	奥山　真也 (埼玉大深谷)

準決勝

順	福島県		1 対 3		高知県
1	馮　海濤 (原町工業高)	2	23 — 21 22 — 20	0	山下　大輔 (明徳義塾高)
2	渡辺　和幸 (帝京安積高)	0	14 — 21 4 — 21	2	高橋　卓斗 (明徳義塾高)
3	渡辺　和幸 遊佐　充裕	0	11 — 21 22 — 24	2	山下　大輔 若山　努
4	馮　海濤 (原町工業高)	0	10 — 21 6 — 21	2	高橋　卓斗 (明徳義塾高)
5	遊佐　充裕 (小高工業高)				若山　努 (明徳義塾高)

少　年　女　子

予選リーグ第1試合

順	福島県		3 対 0		北海道
1	藤田　由希 (安　達　高)	2	21 — 15 21 — 19	1	真野　千尋 (旭川実業高)
2	高橋美貴江 (安　達　高)	2	21 — 18 20 — 22 21 — 14	1	沼田亜矢子 (札幌星園高)
3	高橋美貴江 根本恵美子	2	21 — 11 21 — 15	1	真野　千尋 及川　弓子
4	藤田　由希 (安　達　高)				沼田亜矢子 (札幌星園高)
5	根本恵美子 (郡山女子高)				及川　弓子 (旭川実業高)

予選リーグ第2試合

順	福島県		3 対 1		神奈川県
1	藤田　由希 (安　達　高)	2	18 — 21 21 — 8 21 — 16	1	坪井　千晶 (白鷗女子高)
2	高橋美貴江 (安　達　高)	1	15 — 21 21 — 16 16 — 21	2	伊藤　明子 (白鷗女子高)
3	高橋美貴江 根本恵美子	2	21 — 18 16 — 21 21 — 18	1	坪井　知晶 伊藤　京子
4	藤田　由希 (安　達　高)	2	21 — 16 18 — 21 21 — 12	1	伊藤　明子 (白鷗女子高)
5	根本恵美子 (郡山女子高)				伊藤　京子 (白鷗女子高)

決勝トーナメント準々決勝

順	福島県		1 対 3		大阪府
1	根本恵美子 (郡山女子高)	2	23 — 21 14 — 21 21 — 15	1	辻本　理恵 (四天王寺高)
2	藤田　由希 (安　達　高)	0	8 — 21 12 — 21	2	武田　明子 (四天王寺高)
3	根本恵美子 高橋美貴江	0	15 — 21 14 — 21	2	武田　明子 川越　真由
4	藤田　由希 (安　達　高)	1	21 — 19 8 — 21 12 — 21	2	辻本　理恵 (四天王寺高)
5	高橋美貴江 (安　達　高)				川越　真由 (四天王寺高)

成年男子1部

予選リーグ第1試合

順	福島県		3 対 0		山口県
1	深谷 亮幸 (筑波大)	2	21 — 13 21 — 13 —	0	小林 明史 (岩国商業高)
2	坂本 憲一 (日産いわき)	2	21 — 11 21 — 15 —	0	飯田 隆一 (協和発酵防府)
3	深谷 亮幸 原 晃	1	21 — 4 14 — 21 21 — 15	2	飯田 隆一 成待 淳
4	坂本 憲一 (日産いわき)		— — —		小林 明史 (岩国商業高)
5	原 晃 (東京電力)		— — —		成待 淳 (岩国商業高)

予選リーグ第2試合

順	福島県		2 対 3		新潟県
1	原 晃 (東京電力)	1	21 — 17 14 — 21 23 — 25	2	笹岡 光央 (長岡赤十字病院)
2	坂本 憲一 (日産いわき)	2	21 — 14 21 — 9 —	0	長谷川 剛 (五十嵐商店)
3	原 晃 深谷 亮幸	2	21 — 15 21 — 9 —	0	長谷川 剛 松沢 和彦
4	坂本 憲一 (日産いわき)	1	21 — 16 19 — 21 14 — 21	2	笹岡 光央 (長岡赤十字病院)
5	深谷 亮幸 (筑波大)	1	19 — 21 21 — 18 15 — 21	2	松沢 和彦 (大阪経法大)

予選リーグ第3試合

順	福島県		3 対 1		滋賀県
1	坂本 憲一 (日産いわき)	2	21 — 11 14 — 21 21 — 16	1	平 亮太 (びわこ銀行)
2	深谷 亮幸 (筑波大)	2	21 — 16 8 — 21 21 — 18	1	田原 直昌 (びわこ銀行)
3	深谷 亮幸 原 晃	0	7 — 21 16 — 21 —	2	平 亮太 糟谷 博和
4	坂本 憲一 (日産いわき)	2	21 — 14 20 — 22 24 — 22	0	田原 直昌 (びわこ銀行)
5	原 晃 (東京電力)		— — —		糟谷 博和 (びわこ銀行)

成年女子1部

1回戦

順	福島県		3 対 2		島根県
1	岡田 晶子 (専修大)	2	21 — 12 21 — 18 —	0	中野 満恵 (福岡大学)
2	深谷 純子 (青山学院大)	0	13 — 21 16 — 21 —	2	大菅 明美 (国際交流セ)
3	深谷 純子 大掛 美奈	2	18 — 21 21 — 9 21 — 9	1	中野 満恵 篠原美和子
4	岡田 晶子 (専修大)	1	21 — 10 22 — 24 13 — 21	2	大菅 明美 (国際交流セ)
5	大掛 美奈 (前田建設)	2	21 — 13 21 — 16 —	0	篠原美和子 (マツダ精機)

2回戦

順	福島県		3 対 1		長崎県
1	岡田 晶子 (専修大)	2	21 — 19 21 — 12 —	0	三澤 伸子 (ミサワ)
2	深谷 純子 (青山学院大)	2	21 — 12 21 — 16 —	0	山口 優子 (東筑紫短大)
3	深谷 純子 大掛 美奈	0	15 — 21 18 — 21 —	2	三澤 伸子 若杉 峰子
4	岡田 晶子 (専修大)	2	21 — 17 21 — 11 —	0	山口 優子 (東筑紫短大)
5	大掛 美奈 (前田建設)		— — —		若杉 峰子 (熊本学園大)

3回戦

順	福島県		2 対 3		北海道
1	岡田 晶子 (専修大)	2	23 — 21 21 — 14 —	0	木林 弥生 (慶応大学)
2	深谷 純子 (青山学院大)	0	17 — 21 18 — 21 —	2	藤森 隆子 (たくぎん)
3	深谷 純子 大掛 美奈	2	21 — 14 21 — 14 —	0	木林 弥生 小沢 直美
4	岡田 晶子 (専修大)	0	14 — 21 10 — 21 —	2	藤森 隆子 (たくぎん)
5	大掛 美奈 (前田建設)	1	19 — 21 21 — 16 8 — 21	2	小沢 直美 (富士短大)

成 年 男 子 2 部

予選リーグ第1試合

順	福 島 県		3 対 0		北 海 道
1	小塩 浩 (須賀川信金)	2	21 — 13 20 — 22 21 — 15	1	藤森 忠司 (札幌市交通局)
2	川村 公一 (日産コーエー)	2	21 — 11 21 — 23 21 — 13	1	佐々木信之 (ケーエスステンレス)
3	富岡 成一 (阿部商事)	2	21 — 18 21 — 18 —	0	山下 稔 (旭川信金)
4	小塩 浩 (須賀川信金)		— — —		佐々木信之 (ケーエスステンレス)
5	川村 公一 (日産コーエー)		— — —		藤森 忠司 (札幌市交通局)

予選リーグ第2試合

順	福 島 県		3 対 1		岐 阜 県
1	小塩 浩 (須賀川信金)	2	21 — 12 21 — 17 —	0	加藤 神治 (岐阜信金)
2	川村 公一 (日産コーエー)	0	15 — 21 14 — 21 —	2	田中 卓也 (田中スポーツ)
3	富岡 成一 (阿部商事)	2	21 — 19 21 — 8 —	0	浅野 元祥 (三商アルテン)
4	小塩 浩 (須賀川信金)	2	21 — 17 17 — 21 21 — 9	1	田中 卓也 (田中スポーツ)
5	川村 公一 (日産コーエー)		— — —		加藤 神治 (岐阜信金)

予選リーグ第3試合

順	福 島 県		3 対 1		熊 本 県
1	小塩 浩 (須賀川信金)	1	21 — 16 19 — 21 16 — 21	2	永目 真治 (ストローベリーコーンズ)
2	川村 公一 (日産コーエー)	2	18 — 21 21 — 16 21 — 19	1	小堀 正成 (寿 屋)
3	富岡 成一 (阿部商事)	2	21 — 13 21 — 19 —	0	大山 司朗 (有明工専)
4	小塩 浩 (須賀川信金)	2	21 — 17 21 — 11 —	0	小堀 正成 (寿 屋)
5	川村 公一 (日産コーエー)		— — —		永目 真治 (ストローベリーコーンズ)

予選リーグ第4試合

順	福 島 県		3 対 0		岡 山 県
1	小塩 浩 (須賀川信金)	2	21 — 13 21 — 11 —	0	丸山 公男 (水島工業高)
2	川村 公一 (日産コーエー)	2	21 — 13 21 — 15 —	0	柏 幸浩 (関西高校)
3	富岡 成一 (阿部商事)	2	21 — 19 21 — 16 —	0	大島 唯志 (宮崎製袋)
4	小塩 浩 (須賀川信金)		— — —		柏 幸浩 (関西高校)
5	川村 公一 (日産コーエー)		— — —		丸山 公男 (水島工業高)

決 勝

順	福 島 県		1 対 3		千 葉 県
1	小塩 浩 (須賀川信金)	1	19 — 21 21 — 18 13 — 21	2	大家 仁 (自 営)
2	川村 公一 (日産コーエー)	0	7 — 21 14 — 21 —	2	蛭田 浩文 (川崎製鉄)
3	富岡 成一 (阿部商事)	2	21 — 16 21 — 7 —	0	高橋 利三 (ユニオンロイヤル)
4	小塩 浩 (須賀川信金)	1	21 — 11 14 — 21 21 — 23	2	蛭田 浩文 (川崎製鉄)
5	川村 公一 (日産コーエー)		— — —		大家 仁 (自 営)

成 年 女 子 2 部

予選リーグ第1試合

順	福 島 県		3 対 0		熊 本 県
1	東條 由美 (福島市役所)	2	21 — 10 13 — 21 22 — 20	1	堤 奈美子 (寿 屋)
2	坂本 久美 (いわき卓球)	2	21 — 5 21 — 12	0	森田悠記子 (九州日本電気)
3	伊藤恵美子 (千本松毛晒)	2	21 — 9 21 — 7	0	坂田 良子 (肥後銀行)
4	坂本 久美 (いわき卓球)		—		堤 奈美子 (寿 屋)
5	東條 由美 (福島市役所)		—		森田悠記子 (九州日本電気)

予選リーグ第2試合

順	福 島 県		3 対 0		滋 賀 県
1	坂本 久美 (いわき卓球)	2	21 — 13 19 — 21 22 — 20	1	櫻田 浩子 (松下電工彦根)
2	東條 由美 (福島市役所)	2	21 — 16 21 — 9	0	十念 愛子 (叶匠寿庵)
3	伊藤恵美子 (千本松毛晒)	2	21 — 17 21 — 8	0	土井 友子
4	東條 由美 (福島市役所)		—		櫻田 浩子 (松下電工彦根)
5	坂本 久美 (いわき卓球)		—		十念 愛子 (叶匠寿庵)

予選リーグ第3試合

順	福 島 県		3 対 2		富 山 県
1	坂本 久美 (いわき卓球)	0	15 — 21 11 — 21	2	菅原 英子 (北陸銀行)
2	東條 由美 (福島市役所)	2	15 — 21 23 — 21 21 — 15	1	吉村由香里 (北陸銀行)
3	伊藤恵美子 (千本松毛晒)	2	21 — 12 21 — 7	0	川中 順子 (東洋紡績)
4	東條 由美 (福島市役所)	0	14 — 21 13 — 21	2	菅原 英子 (北陸銀行)
5	坂本 久美 (いわき卓球)	2	21 — 6 21 — 13	0	吉村由香里 (北陸銀行)

準決勝

順	福 島 県		3 対 2		福 岡 県
1	坂本 久美 (いわき卓球)	0	16 — 21 18 — 21	2	北原美由紀 (那珂川南中)
2	東條 由美 (福島市役所)	2	21 — 15 21 — 17	0	松本 昌子
3	伊藤恵美子 (千本松毛晒)	2	21 — 16 21 — 9	0	吉村美智恵
4	東條 由美 (福島市役所)	0	19 — 21 14 — 21	2	北原美由紀 (那珂川南中)
5	坂本 久美 (いわき卓球)	2	21 — 12 21 — 11	0	松本 昌子

決 勝

順	福 島 県		3 対 1		神奈川県
1	坂本 久美 (いわき卓球)	2	21 — 11 18 — 21 21 — 17	1	野沢 桂子 (武田薬品)
2	東條 由美 (福島市役所)	2	21 — 14 21 — 10	0	長谷川恭子 (安田海上火災)
3	伊藤恵美子 (千本松毛晒)	1	21 — 19 11 — 21 13 — 21	2	井置 節子
4	東條 由美 (福島市役所)	2	21 — 16 16 — 21 21 — 18	1	野沢 桂子 (武田薬品)
5	坂本 久美 (いわき卓球)		—		長谷川恭子 (安田海上火災)

編集後記

私が県卓球連盟（県卓連）の理事長を勤めたのは昭和40年代で、昭和30年代は、県高体連卓球部委員長として県卓連の理事となり理事会に出席、意見、考え方を述べた程度ですし、昭和50年以降は副会長の気楽さから、大事な事件、人事等に付いては記録もとらず記憶にいたっては年と共に忘却が烈しくなって来ていました。それでいて編集委員長を引き受けたのは、元理事長として最古参であった為です。

戦前については、福島民報社、福島民友新聞社がそれぞれ"福島県百科大事典"（昭和55年に刊行）を刊行することになり、福島県の卓球についての原稿の依頼がありました。それに応じて、田辺要、鈴木重郎治、梅宮フミ、秋沢静枝各位から手記を寄せていただいたり、スポーツ風土記・福島県（吉田清計著）、卓球お国めぐり福島県（ニッタクニュース等）を参考にしながら執筆したのを基にして書きました。

昭和20年代は、土屋弘、佐藤昭典、三浦勝美各位の話や、先に取材した記事を主にまとめましたが、後藤寿二氏の会長就任前後については突っ込みが不足していたと反省しています。日本卓球株式会社社長 向原一雄氏の祝辞を読んでいただきたい。

昭和40年以降については、選手の育成、強化に盡力した方々、卓球協会の運営に盡力した方々を卓球協会の発展、充実にあわせて紹介することを目的として筆を進めました。然し、鈴木重郎治会長、山崎啓哲副会長、三浦勝美会長等指導と、バックアップして下さった方々については割愛しました。

通史執筆にあたり、松崎俊一、大橋　柾、深谷秀三の各位からは貴重な資料を提出していただき、大変参考になりました。まだ日の目を見ない資料もあると思います。それを発見された時には送付していただければ幸いです。それをもとに気長にのんびりと70年史の推敲をしておきたいと思って居ります。

最後になりましたが、今回の70年史が100年史、150年史の基礎になると思いますと、良い時に西郷徹夫会長は、70年誌の決意をされたと感謝の気持ちを込めて、お礼申し上げます。

原稿を寄せていただきました各位、その原稿に目を通してくれた深谷秀三先生はじめ編集委員各位の努力に感謝申し上げて後記といたします。

（宇賀神　喜嗣）

〈編 集 委 員〉

委員長	宇賀神 喜嗣	委　員	西郷 徹夫
副委員長	三浦 勝美	委　員	平石 家治
副委員長	深谷 秀三	委　員	伊藤 秀行
事務局長	伊東 守信	委　員	渡部 長二
委　員	土屋 弘	委　員	甚野 道雄
委　員	佐藤 昭典	委　員	影山 澄
委　員	松崎 俊一	委　員	長場 壮男
委　員	大橋 柾	委　員	菊地 敏美
委　員	壁谷 之夫		

福島県卓球協会設立70周年記念誌

発 行 日　平成11年12月11日
編　　集　福島県卓球協会70年史編纂委員会
発行責任者　福島県卓球協会会長　西郷　徹夫
事 務 局　福島県卓球協会理事長　伊藤　秀行
〒960-0604 福島県伊達郡保原町元木88－1
TEL・FAX 0245－76－3718
印　　刷　(有)シ ブ ヤ
〒963-8052 郡山市八山田3丁目22番
TEL 024-923-0379・FAX 024-938-1911